THE CENTRAL REVIEW

中央公論

七月號

第四十三年第七號 第四百八十六號

御中元には……松屋の商品券

『松屋の商品券』は流行の呉服、雑貨、食料品を始 總ゆる百貨を御自由にお求め願へます爲め、どちらでも此上なく喜ばれます。

商品回數券

十回綴 五圓
廿回綴 拾圓
五十回綴 廿五圓



共通

銀座 松屋呉服店
今川橋 松屋家庭部
大森八景坂 松屋賣店
横濱吉田橋 鶴屋呉服店

婦人

▲第十三巻 第七號▼

七月號

山へ海へ

定價七十錢 郵税二錢

中央公論社

振替東京 三十四番

婦人雜誌は遂にその方向を見失つて了まつた。否、凡てが行詰つて了つた。この時眞に正々堂々たる歩を運ぶもの我「婦人公論」あるのみである。あくまで權威を保ち號を追ふて興味を加ふる颯爽たる本誌を諸兄姉に捧ぐる所以である。中央公論と併せて愛讀を乞ふ。

婦人公論

わがふるさと
■水と草と白い道……吉田絃二郎
■山沿ひの寒村……沖野岩三郎
■二つの故郷……北川千代
■白壁の松前城……岡田三郎

有益な家庭記事
▲面皰と腋臭の治療法
▲日焦けの豫防法
▲珍しい氷の菓類
▲鏝を使はずに髪をウエーヴさせる法
▲携帯に便利な旅行用具
▲流行の海水着と附屬品
▲夏向の窓掛の作り方
▲ドロンウオークの仕方
▲パン食に向く副食物
▲關西風の川魚料理
▲夏の外出に汗よけ帯下

■モダーン・トピック
▼(詩)花と果實……千家元麿
▼(歌)野母集……並樹秋人
■初めて登山する婦人に……
■スポーツ辭典……
■エスペラント・ページ……

■新しい二つのジャズダンス……池上壽郎
■高給を取る婦人たち……佐野二郎
■田中内閣の改造問題……坂本四郎
▼(芝居)落城の日の淀君……白石清子
▼(コドモページ)カニの親子……澁澤青花

■踏まれた犬が吠える……高群逸枝

創作
□土に癒ゆる(長篇小説)……德田秋聲
□脂粉の風(長篇小説)……今東光
□憂鬱な愛人(長篇小説)……松岡讓
□二人の結婚(懸賞小説)……影山百合子

▼人に知られてゐない旅行地
▼上高地のキャンプ生活……黒田米子

山の旅海の旅
◆伊豆の八丈島
◆洞爺湖畔の天幕生活
◆箱根一周旅行
◆北陸の海と温泉行脚
◆別府中心の行樂地
◆山陰の温泉めぐり
◆幽邃閑雅の鳴子
◆瀧と溪流の木曾
◆夏なほ寒き赤城
◆加賀の片山津
◆水郷の神秘眞菰
◆六甲から有馬へ
◆高原の絶景碓氷峠
◆一日の清遊地飯能
◆博多から唐津へ

テイタイム
(一)弾かれた指輪……操吉
(二)村の迷信……貢太郎
(三)婦美子の失踪……雅雄

▼東西映畫スター百人傳

ムービウセクション
◆ファジル
◆ジャンヌ・ネイの愛
◆嫉妬
◆大尉の娘

現代ユウモア全集

豫約募集

生方敏郎
佐々木邦　編輯

第一卷　坪内逍遙集
第二卷　堺利彦集
第三卷　戸川秋骨集
第四卷　長谷川如是閑集
第五卷　生方敏郎集
第六卷　佐々木邦集

第七卷　正木不如丘集
第八卷　岡本一平集
第九卷　大泉黑石集
第十卷　近藤浩一路集
第十一卷　高田義一郎集
第十二卷　牧逸馬集

內容見本進呈

（全十二卷）壹册壹円

見よ、眞に明るい人生の姿見鏡

ユウモア全集は、思想、藝術、政治經濟より、社交、戀愛、夫婦愛、性愛の機微に至るまで、ありとあらゆる現代世相の縮圖、しかも深遠なる思索と銳い觀察、更に輕妙新鮮の筆は、社會の表裏、人間生活種々相の骨を刺し、卓拔、奇想の諧謔を描き出して瀟洒たり。

哄笑・微笑・苦笑
破顏笑轉の萬華鏡

收むるところは小說、戲曲、紀行小品、隨筆等々……一行毎に微笑あり、一頁毎に哄笑あり、一言の裡にも諷刺あり、一句の裏にも諧謔を含む、一讀三笑忽ちにして疲れたる魂は新鮮潑剌ならしめ、破れたる愛情は立所に濃やかとなる

眞に盡くるなき興趣と慰藉と啓示の全集!!

●第一回配本は佐々木邦集

明るい人生

—（發行所）—
東京、神田、表神保町六
小學館、集英社內
現代ユウモア全集刊行會
振替東京七八三三七番

本誌御覽の上にて御申込の御方は締切後も特に有效とす

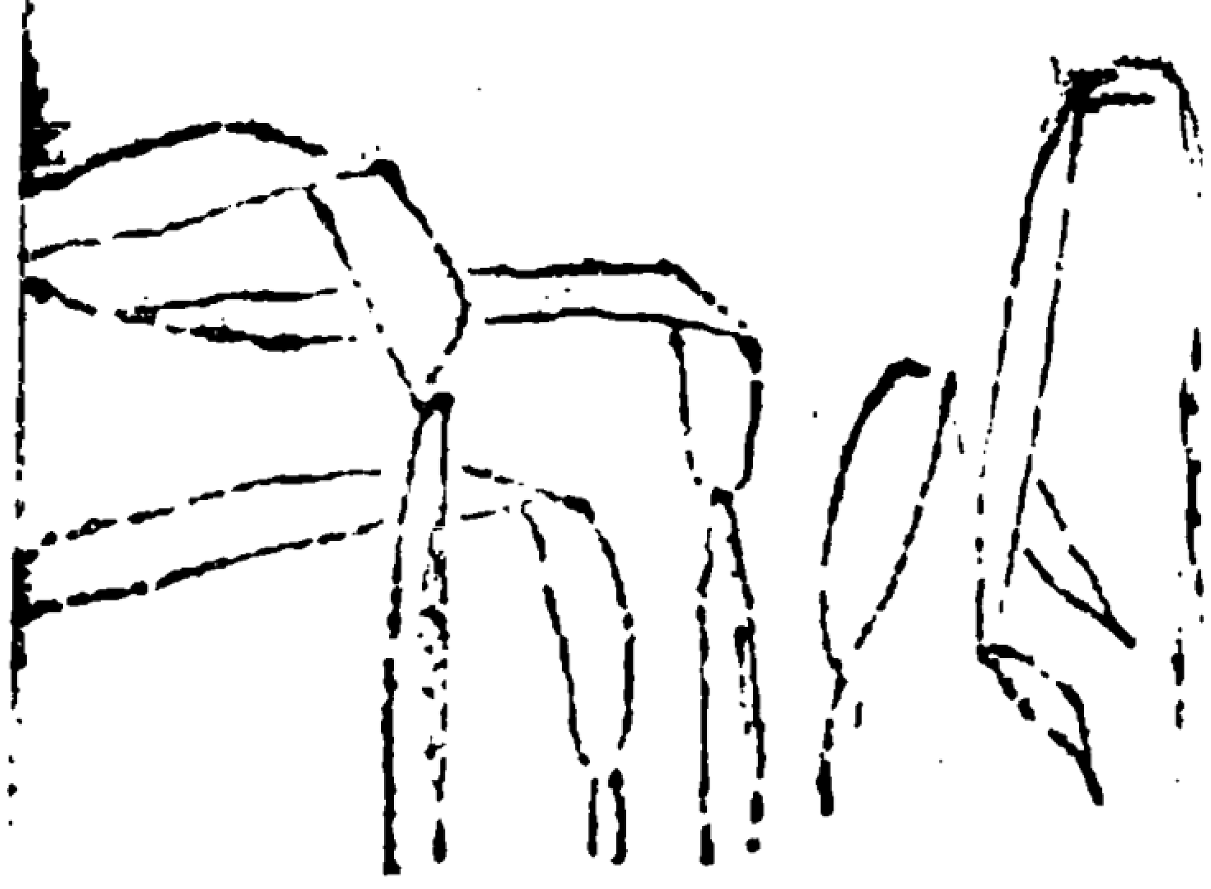


寫眞材料界の權威
アグファの製品を推薦す
Agfa
FILMPACK
ROLLFILM
東京市麹町區丸ノ内
仲通十四番館五號
アグファ合名會社
大阪市東區備後町二
野村ビル
アグファ合名會社



現代學生氣質」評論

特選



特選畫報



驟雨　平福百穗筆

福田徳三著

流通經濟講話

多年仰首渇望の的であつた「流通經濟講話」が漸く成つて旣に十三版を重ねた。本書は著者の先著「國民經濟講話」と相並んで著者畢生の二大事業であり、二著相通じて世界の經濟原論に對峙する名著であることは何人も異論のない處であらう。然かも本書にあつては高遠深奧の經濟原理を平易明快に、叙述の妙を盡して論斷し、常に大衆への近接を顧念してある處に最も其の特色を有し、彼の難解を以て聞ゆるマルクスの資本論に比し眞に隔世の感を深からしめるものである。今日吾人の經濟生活の基本であり、全體である流通社會の理論と實際に關する著者の高見卓識は蓋し萬人の知らんと欲する處である。此の故に本書を廉刷版にした。又自ら著者が本書講述の目的に合致するものと信ずる。

廉刷版

四六版クロース製箱入
上下二册總頁千五十頁
定價各巻壹圓五拾錢
送料各巻拾八錢

石川三四郎著

改訂增補 西洋社會運動史

愈々本書の普及版が出來た。是れは大衆の聲である。本書の復興版の出たのは今から一年前の昨年四月で、其の時から世間多數の人々から本書の普及版が翹望された。それらの人々からは「復興版が高いといふのではない、六圓では買ひ惡いから、もう一寸一般的に買ひ得る値段に低下して欲しい。其の爲には製本や印刷紙の粗雜は厭はない」とまで言つて貰つたものである。

普及版は復興版の半額以下になつた。此の價が尚一般的に買ひ得る値段であるとは思へない。けれども唯今の處、弊閣の許される範圍での最低値段である。そして大衆の要求に幾分でも近接された價で「普及版」の出來たことを弊閣は喜びとしたい。誠に多角的な社會面に蠢動し、相交錯する諸種の社會運動の性質、由來、傾向を正しく認識する上に本書は我國に於ける唯一の啓蒙指導の良書である。

普及版

菊判箱入
壹千百五十頁
定價貳圓八拾錢
送料貳拾七錢

東京神田今川小路　合資會社　**大鐙閣**　電話九段三一二七番　振替東京三三六一八番

張作霖の歿落と滿蒙問題

——（卷　頭　言）——

近き將來に於て我々の當面すべき最も重大なる政治問題に、優諚問題に非ず、不戰條約問題に非ずして、實に張作霖の失脚に伴ふ滿蒙對策の問題である。優諚問題に關連する田中首相の責任に事頗る緊要なるも斯の如きは固より今後に於て屢々繰り返さるべき事にあらず、之を八釜しく糺彈して政友會內閣を倒した所が之に代る民政黨に多くの期待を置き得ざるは云ふまでもなく、田中內閣を近代空前の惡政府と視てそれの倒壞は無條件によろこぶべしとするも、日本帝國其者の現實の利害に關する重大事件の措置に關しては、如何なる內閣に向つても常に嚴重に警告を加へ又嚴重に監視するの必要がある。この意味に於て張の失脚の結果としての滿蒙の新局面は今や我々の最深甚の注視を向けねばならぬ所であらう。

斯うした意味の滿蒙對策としては種々の事が考へられる、今一々之を論ずるの遑はない。茲には焦眉の急務として我々の差當り念頭に置かざるべからざる最も重要なる點の一つ二つを擧げて置かう。

第一は關外に引揚げる張作霖軍の武裝解除の問題である。之は次に論ずべき滿蒙進攻の南軍の武裝解除の問題と關聯する。我國が隣邦の自主權を尊重して絕對に干渉がましき態度を避けようとなら、南北双方に向つて斷じて武裝解除を迫るべきでない。併し乍ら滿蒙に於ける帝國の特殊地位を楯に取りその範圍內に於ける擾亂の波及を許さざらんとせば、先づ奉天軍に武裝解除を迫り以て南軍進攻の目的物を掩ひ去らなければならない。而してその跡の始末をどうするかは自ら聽て定るべき中央政府と交渉すればいゝ。

第二に實際の狀勢が理論の指示通りに運ぶを得しめず奉天軍の武裝解除が不可能であつたとすれば、其後に於ける我國の立場は非常に困難となる。擾亂の波及を避けんとして南方進攻軍の武裝を解除すれば、偏頗不公平の非難を免れ難く、さりとて理論上の公平を保つに專念すれば、彼地に於ける帝國の利益の保護が出來なくなる。之に處するの道如何は豫め愼重に攻究しておくの必要があらう。

第三に張作霖が兎も角も再び滿洲王となつたとし而して南軍には除儀なく武裝解除を命じたとして、扨て其上で我國の最も警戒すべきは、奉天官憲が風前の燈にも比すべき其頽勢を直接間接の我國の助援に支へんとの魂膽から利を以て阿附し來る誘惑であらう。之が十年も昔であつたら、今こそ滿蒙懸案解決の好機だなどと騒ぐものもあつたらうが、併し時勢は、滅び行く者と何の約束を結んだとてそが畢竟空文に過ぎざることを教へて居る。過去數次の苦がい經驗は十分この邊の事を我々に吞み込まして居る筈だと思ふが、老婆心ながらもう一度こゝに之を繰り返すのも強ち無用ではあるまい。（六月一日記）

中央公論



第四十三年第七號
七月號
四百八十六號

ラッサアルの「復活」

——「勞働者綱領」と「共産黨宣言」——

小泉信三

（一）

最近別の機會に、私は近年一部の社會主義思想界に「ラッサアルに還れ」若しくは「ラッサアルかマルクスか」の聲の屢々耳にせらるること、「ラッサアルかマルクスか」は、畢竟「勞働者綱領」か「共産黨宣言」かに歸着すると謂つて差支なきものであること、而して重要なる共通點を有し乍ら、猶ほ此二者の相容れざるは、マルクスがヘエゲル哲學に出發

して後に之を棄脫したるに對して、ラッサアルが遂に純粹なるヘエゲル學徒に終始したる所に存するものであつたといふ意味の事を述べた（「改造」第十卷第四號四一—六〇頁）。其際私は、公刊著作の外近年グスタアフ・マイエルに依て始めて發見發表せられた、ラッサアルの書簡又は手稿の材料に據つて、少年時代より「勞働者綱領」の公表せられた一八六二年當時に至る迄のラッサアルの思想發達の道程を辿り考へた。其考案の結果に由て觀れば、彼れは、成程割合に夙くからヘエゲル哲學に對して若干の修正を試みては居るが、併し決してヘエゲル思想の地盤を離れることをしなかつた。彼れはマルクスとの接觸に依つて少くも其の階級鬪爭思想を強めたが、併し此接觸以前に於て、彼れはヘエゲル辯證法に據り、又恐らくは佛蘭西社會主義思想の影響に依つて、既に社會主義の結論に到達して居つた。後にラッサアルがマルクスに向つて、彼れは「一八四三年以來斷然たる社會主義者」であつたと言つたのは、略ぼ事實通りであつたことが明にせられたのである。たゞ私はラッサアルの少壯時代の思想を尋ねることに力を割いた爲め、未だ「勞働者綱領」と「共產黨宣言」との比較なる本題に入るに及ばずして擱筆することを餘儀なくせられた。玆に前稿を續ぎ、主として右記二小冊子に據つてラッサアル主義——マルクス主義の比較對照を試み、近年に於ける一種のラッサアル復活の由來を記すること左の如くである。

（二）

マルクスがヘエゲルに出發して後にヘエゲルを離れたのは、シュトラウス、バウエル、殊にフォイエルバッハの影響に因る所多きものであるが、ラッサアルに至つては、全然此等急進思想家の影響を蒙つて居らぬやうに見受けられる。彼れが其著作の中に殆ど彼等の氏名をも舉げて居らぬことは、メエリンクの指摘する所である。尤も上記マイエル編纂のラッサアル遺稿及び書簡集に就いて見れば、成程ラッサアルもフォイエルバッハを知つて、或個處には之を引用しても居つた

のである。併し乍ら、彼れの思想の上には此後者の影響は殆んど其跡を留めては居らぬ。故にマイエルも謂ふ「……若きラッサアルに對するフォイエルバッハの影響は、可なり外面的のものたるに止まつた。此影響は彼れにあつては、フリイドリヒ・エンゲルスや殊にマルクスに於けるが如くに深きには徹しなかつた。それは彼れを驅つてヘエゲル哲學の根本的立場を疑ふに至らしめて居らぬ。それは彼れにあつては、範疇の自主性を搖がせては居らぬ、それは彼れにあつては、理念を物質に服從せしめては居らぬ。思惟と存在との同一性を信ずること深きラッサアルは、概念の諸範疇は歴史上の諸時代と一致する、といふ意識に、最も深き滿足を見出すのである」と（マイエル編纂遺稿集第六卷五二頁）。これが即ちマルクスの評して「思辨的概念への膠着」と稱するものである。ラッサアルは「勞働者綱領」に於て、歴史上の時代を其時代の支配階級(シュタンド)（herrschen der Stand）に由つて分つものであるが、それをなすに當つても、例へば、中世に於ける支配階級は貴族若しくは土地所有者であり、佛蘭西革命以後の支配階級は資本家である、といふべきところに、歴史上の一の時代は「一定階級(シュタンド)の支配理念の下に立ち、此階級(シュタンド)は其原理を此時代の一切諸制度に印刻する。……中世の支配原理を成し、且つ其の一切諸制度を貫くものは、貴族の理念若しくは土地所有であつた。」佛蘭西革命を以て始まる時代は「大なる公民的所有、即ち資本を其原理とし、之を其特權として形成する」といふやうに說いた（傍點小泉）のは、即ちヘエゲルの影響を示すものに外ならぬのである。

上記の如く、ラッサアルの所見によれば、既往の歴史は階級支配隆替の歴史である。然るに「一八四八年二月廿四日を以て、一の新なる時代の最初の曙光が輝いた。」それは第四階級(シュタンド)支配の時代である。たゞ第四階級支配の時代と既往の諸時代との間には重大なる差違がある。第四階級支配の時代には何等の特權支配が行はれぬこと、否な階級的支配其者が行はれぬことが是である。ラッサアルいふ、第四階級は最終最極端の、勘當せられた階級であつて「法律上にも事實上にも最早何等の新なる特權として形成し得べき排他的條件……を立てず、又立つること能はざるものである。」「吾々は何等かの

方法に於て己れを人間社會に有用ならしめんとする意志を之に有する限り、皆な勞働者たる[illegible]教と

いふも畢竟全人類といふと同じ事に歸着する。」故に第四階級の安危は實に全人類の安危であり、其自由は人類其者の自由であり、其支配は一切の人の支配である」と。

此の、第四階級の支配は全人類の支配を意味し、從つて階級的支配其者の廢止を意味するといふ思想は、既にマルクスが說く所であつて、是に對應する文言は、之を「共産黨宣言」中に見出すことが出來る。「一切從來の運動は、少數者の運動若しくは少數者の爲めの運動であつた。プロレタリヤ運動は絕大多數者の絕大多數者の爲めにする運動である。現在社會の最下層たるプロレタリヤは、公認社會を形成する諸階層の上部構造全部が空中に破裂するにあらずんば、自ら起き自ら立つことと能はざるものである。」「プロレタリヤは、ブルジョワジイに對する鬪爭上に於て必然的に階級に結合し、革命に依て支配階級（クラッセ）となり、而して支配階級（クラッセ）として舊き生產關係を廢止する時は、それは此生產關係と共に階級的對抗の存在條件、階級一般、及び是と共に其自身の階級としての支配を廢止する」といふのはそれである。

（三）

此迄のところ、マルクスとラッサアルとは略ぼ其所見を同じうすると言つて好い。たゞ此より一步を進めると共に、二者の思想は截然相岐れるのである。マルクスに由れば、階級的對抗の廢止せらるゝ時は即ち國家の死滅する時であるに對して、第四階級の支配行はるゝ時は、即ち眞正の國家、若しくは眞正の國家觀の實現せらるゝ時だとラッサアルは主張するからである。而して玆にヘエゲルを脫却したマルクスに對して、飽くまでもヘエゲルに忠實なラッサアルの面目が、最もよく窺はれるのである。

ヘエゲルが客觀的精神の發展段階を（イ）法（ロ）道德及び（ハ）國體道德（Sittlichkeit）の三となし、更に國體道德

の發展する三段階を家族、公民社會及び國家としたことは別記の如くである。國家は、彼れに取つては家族及び公民社會の an sich 及び für sich に對して an und für sich をなすものであつた。「家族と公民社會との原理の結合」であるのである。而して彼れは公民社會を以て、各個人が其々自己の利益を追求し、此の利益追求なる目的の爲めの手段として他人と相結ぶことに依て成立するものと見た。此意味に於て、彼れは之を「一切人の一切人に對する個人的私利等の戰場」と稱し、(Philosophie des Rechtes §289) 又之を「精神的動物界」と稱したのである。是に對して國家は、ヘエゲルに由れば、「道徳的理念の實現」(「法律哲學」)或は「自ら意識せる道徳的實體 (die selbstbewusste sittliche Substanz)」(「精神哲學」)である。「國家自體は全體であり、自由の實現であり、而して自由が現實となることは理性の絶對目的である。國家は世界に在り、又世界に於て自己を實現する所の精神である……」とも彼れは言つた。

併し歴史上の現實の國家は、屢々「道徳的理念の實現」若しくは「自由の實現」たることから甚だ遠きものであつた。歴史上の國家に於て抑壓、對抗、不平等等の行はれたことは、ヘエゲルも充分之を認めて居る。されば右に國家に就いて言ふ所は、現實の國家に就いていふものではなくて、實は彼れの國家理想に外ならざるものである。併し乍ら此國家理想は歴史的事實の如何に依て傷けられるものではない。此等の事實は、國家理想を立てるに當つてはヘエゲルは之を無視して居る。國家一般又は特定の各國家の歴史的起原如何、一國家は始め果して族長的關係より發生したか、恐怖若しくは信頼から、或はコルポラチオン其他から發生したか等の事は、「一個の歴史的事項」に過ぎずして「國家の理念其者には何等の關係なき」ことである。故に曰く、「國家の理念を論ずるに當つては、人は特殊の諸國家、特殊の諸制度を念頭に置かずして、寧ろ理念を、即ち此の眞實の神を、其自體として考察しなければならぬ」と。(Philosophie des Rechtes §258)

併し是等現實諸國家の缺陷は、ヘエゲルに取つては必しも重要の問題ではない。此等の事實は、國家が其發展上に於て未だ其眞實の目的を成就せず、未だ未完成、不完全の状態にあることを示すに過ぎぬ。ヘエゲルは完成せる國家の理念から

出發するものである。不完全なる國家に於ては、國家の理念は猶ほ未だ「被蔽せられて」あるのだと彼は言つて居る。併し乍ら、ヘエゲルに由れば、此の被覆は必ず除かれ、國家は必ず完成して、其理念に適へるものとならねばならぬ。それは精神、若しくは理念發達の必然の過程であるからである。曰く、「國家があるのは、世界に於ける神の進行である。其因由は自己を意志として實現する理性の力である」と。

（四）

ヘエゲル哲學を奉じてゐた初期のマルクスは、其國家論に於てもヘエゲルを祖述して、國家を以て、人間の法律上、道德上、政治上の自由が其内に於て始めて實現せらるゝ大有機體と爲してゐた。洵に現在の國家内に於ては未だ此理想は實現せられてゐないが、それは國家が未だ完成の域に達して居らぬからであつて、究局に於て必ず國家が此使命を果たすべき時の到來することを、彼れは疑つてゐなかつたやうに見受けられるのである。即ち彼れは其初期の述作では、ヘエゲルと共に國家を「自由の實現」と稱し、又完成國家に現實の未完成國家を對立せしめてゐるのである。

此關係に於て屢々引用せられるのは、彼れが一八四二年、まだその萊因新聞寄稿者たりし時代に、キヨルン新聞に寄せて「哲學は宗教事項をば新聞論説に於ても亦た論ずべきものなりや」を論じた文章である。其一節にマルクスは斯う言つて居る。

「果して基督教國家は、合理的自由の實現たるべき國家の概念に適合するか、或は合理的自由の國家を基督教から發展せしめることが出來ぬか、孰れかである。適合する場合には、基督教國家たらんが爲めには合理的國家たる以外には何物も必要ならず、又其場合には、國家を人間的諸關係の理性より發展せしむるを以て足るのであつて、是は哲學の遂行する事業である。然るに、合理的自由の國家を基督教から發展せしむることの出來ぬ場合に於ては、諸君は自ら此發展が基督教

の傾向に存せぬことを承認するであらう。何となれば、基督教は何等の悪しき國家を欲せず、而して、合理的自由の實現にあらざる國家は、一の悪しき國家であるからである。」

「諸君は好むが儘に此のヂレンマに答へて好い。而して諸君は國家が宗教から構成せられずして、自由の理性から構成せらるべきことを承認せざるを得ぬであらう。此理論、即ち國家概念の獨立化が最新哲學の一時的落想なりと主張し得るものは、たゞ極端なる無智のみである。」

「併し乍ら、舊來の哲學的國法學者は、或は名譽心、或は社交性なる衝動から、若しくは理性からするにはしたが、但し社會の理性ではなくて、個人の理性から、國家を構成したのであるが、一層觀念的、一層根本的なる最新哲學の見解は、之を全體の理念（Idee des Ganzen）から構成する。最新哲學は國家を見るに、法律上道徳上政治上の自由が其内に於て實現せらるる大なる有機體を以てし、而して個々の公民は、國家の諸法律に於て單に彼自身の理性の自然法則を遵奉するに過ぎぬものと見るのである」（Aus dem literarischen Nachlass von K. Marx, F. Engels und F. Lassalle, hrsg. von F. Mehring Bd. I, S. 265, 267）

ヘエゲル的思想、ヘエゲル的口吻は充分明に玆に現れてゐる。

又完成國家、不完成國家の思想は、マルクスが一八四三年巴里移住匆々獨佛年誌に掲げた「猶太人問題」中に之を尋ねることが出來る。それに曰く、「所謂基督教は、國家の基督教的否定であるが、決して基督教の國家的實現ではない。……所謂基督教國家は即ち不完全國家であつて、基督教は此に取つては其不完全性の補足、其神聖化たるものである。されば宗教は基督教國家に取つては手段として必要となる。而して基督教國家は僞善の國家である。完成國家が國家の一般的本質に存する缺陷の爲めに宗教を其前提に數へるのと、未完成國家が其の特殊の存在に存する缺陷の爲めに宗教を其基礎とするのとは、大なる相違である。後の場合に於ては、宗教は不完全なる政治となり、前の場合に於ては、完成政治も免れ

ぬ不完全性が宗教に現れるのである。所謂基督教國家は基督教を要する。民主的國家、現實國家は、その政治的完成の爲めには宗教を要せぬ。民主的國家は寧ろ宗教から抽象することが出來る。何となれば、該國家内に於て宗教の人的基礎は現世的方法を以て遂行せられて居るからである」と。（同書四一一頁）

此頃のマルクスが公民社會と國家とを相對立せしむることも、略ぼヘエゲルに於けると同様であつて、右記「猶太人問題」の別の一節でも、（四〇八頁）彼れは「完成せる政治的國家」と相對するものとして、公民社會を説明して居る。マルクスの解する公民社會も、ヘエゲルの所謂「一切人の一切人に對する個人的私利の戰場」である。マルクスに言はしむれば、公民社會に於ては、「人間は一私人として活動して他人を手段視し、又已れ自身をも墮落して手段たらしめ、他人の權力の玩具物たらしめる」のである。人々各々其の利とする所の職業に就き、或者がプロレタリエルとして他人に使役せられ、他の者がブルジョワとして他人を使役することは、皆な社會内に於て行はるゝことであつて、國家圏内に於ては絶えて此事がない。國家に屬する者としては、ブルジョワもプロレタリエルも、商賈も軍人も皆な是れ國家の臣民である。

（五）

然るに、マルクスはヘエゲルを離れて歴史的唯物論に到達し、ヘエゲル辯證法を以て謬つて頭を以て立てるものなりといふに至ると共に、又ヘエゲルの國家論を排棄した。彼自身の辯證法が「啻に原理上ヘエゲルのと異なるのみならず、實に其正反對のものである」と言明するに至ると共に、其同志エンゲルスをして、國家は「ヘエゲルの主張する如き「道徳的理念の實現」『理性の影像、理性の實現』ではない」と言明せしむるに至つた（「家族の起原」）。國家は階級的抑壓の機關に外ならぬものとなり、從つて自由は國家の消滅を俟つて始めて實現せらるゝこととなつたのである。初期のマルクスに取つては、國家は實に「法律上道徳上政治上の自由が其内に於て實現せらるゝ大なる有機體」であつた。後のマルクス

に取つては、自由と國家とは兩立せざるものとなり、「自由なる國家」の語は、殆ど一個の形容矛盾となつた。「自由といふことを言ひ得るに至るや否や國家は國家としては存立を已める」（エンゲルス）といふのである。

此のマルクスの新なる國家觀は、既に「共産黨宣言」に現れて居る。マルクスは其處で、政權を掌握したプロレタリヤがブルジョワジイの資本を國家の手に制御する爲めの諸方策を列擧した後に「進化の道程上に於て階級別が消滅し、凡ての生産が聯合せる個人の手に集中せられると、公的權力は其政治的性質を喪失する」と言つて居る。蓋し眞の政治的權力なるものは、一階級が他の階級を抑壓する爲めの組織せられた權力であつて、プロレタリヤが革命に依て支配階級となつて、舊き生産關係を廢止すれば、其と共に階級支配否な階級別其者が廢止されるといふのである。舊ブルジョワ社會の跡に之に代はるものは「各人の自由なる發展が全員の自由なる發展の條件たる一の聯合（アッソチアチオン）である。而してマルクスが茲に公的權力が其政治的性質を失ふと謂ふのが、畢竟國家が國家として消滅するといふのと同一事に歸着することは、彼れの他の幾多の機會に於ける發言に照らして明かである。これと略ぼ同じ事は、既に其前年即ち一八四七年の「哲學の窮乏」の中にも言はれて居る。即ち國家觀に於ては、一八四三年に猶ほヘエゲルの影響下にあつたマルクスは、晩くも一八四七年には、全然ヘエゲルを離脱して居つたのである。今ラッサアルに缺けて居るのは、マルクスに於ける這間の思想的推移である。

（六）

ラッサアルがヘエゲルの影響を受けることの一朝夕の事でないのは、既に再三述べた通りである。ラッサアルもヘエゲルと同じく、國家を公民社會に對立せしむるものである。而して此對立に照應するものは、ラッサアルに於ける第三階級國家觀と第四階級國家觀との對照である。

第三階級の國家觀は、各個人に無拘束なる其力の行使の自由を保障すること、換言すれば、一個人の人格的自由と其所有とを保護する」ことを以て國家の能事畢ると爲すものである。果して斯の如くであるならば、國家の任務は夜警の任務以上に出づることとなしといふ意味に於て、ラッサアルは此の自由主義國家觀を「夜警國家觀」と呼んだ。ラッサアルは此の如き自由競爭はたゞ强者富者の弱者貧者を搾取するの自由を意味するに外ならぬものとして、極力之を排斥する。此排斥は此時に始まるものではない。彼れが其の少年時代既に之を「他人を滅ぼし、許されたる方法を以て他人の胸に匕首を刺す」の自由であると謂ひ、又或は之をより强き爪牙を恃む野虎の自由と稱したことは、別に引照した通りである。

此の第三階級のに對するものは第四階級の國家觀であつて、而してそれが彼れに從へば眞正の國家觀である。歴史は、ラッサアルに由れば、「自由の發展」、有ゆる不自由との鬪爭、であるが、孤立單獨の個人は此鬪爭に於て一歩をも進めることが出來ぬ。「此の自由の發展、此の人類の自由への發展を遂行すべき職分を有するものが國家である。」故に國家は「一個の道德的全體に於ける個人の統一」であり其目的は、「人間を積極的展開、進歩的發展に至らしめること、換言すれば、人間の使命を、即ち人類の能くする文化をば現實的存在に形成することとである。國家の目的は、自由への人類の敎化及び發展である。」

此の眞實の國家觀が、ラッサアルは勞働者階級の勝利を俟つて實現せられるといふのである。然らば此の正しき國家觀は何故に獨り勞働者階級のみの抱懷する所であるか。それは勞働者階級が社會の最下層階級をなし、個々勞働者が無力無援の境涯にある爲め、國家の職分は全員の結合に由て、個々人を援けて、その單獨に能くせざる發展を遂げしむることにあり、又あらねばならぬといふことに對して「深き本能」を有するのだ、とラッサアルは謂つて居る。

要するにマルクスが國家と自由とは相容れずと謂ふに對して、ラッサアルは依然として、自由は國家の內に於て、或は眞正なる國家の下に於て始めて實現せられると謂ふのである。

ヘエゲルは歴史上現實の國家が屢々、「道徳的理念の實現」たることより甚だ遠きものであつたことを容認しながらも、「猶ほ不完全なる國家も國家たることを失はず」と爲し、恣意、偶然又は誤謬の爲めに國家の形の毀損せらるゝを見て、其内面的本質を忘却するの過ちに陷るなからんことを戒め、「……最も醜惡なる人も、犯罪者も病者も不具者も、猶ほ且つ生命ある人である。肯定は、即ち生命は、缺陷あるに拘らず猶ほ存す…」と謂つた（「法律哲學」第二五八節）。ラッサアルも過去の國家が支配階級の特權支配の爲めに利用せられた事實を充分容認し、或機會には「國家權力及び憲法は常に社會に於て支配者たる階級の表現に外ならぬ」と言つたのであるが、而かも猶ほ既往一切の國家と雖も全然國家の本質を具備しなかつたのではない。從來一切の國家と雖も、「無意識に又屢々不本意ながらも、事物の本性及び事情の強制に驅られて」國家の道徳的本性を其職分としたことを認めて居る。それが勞働者階級の理念の支配の下に立つ國家は、始めて從來の國家が僅に斷片的に、餘儀なく行つたことを、「進んで最も徹底的に」行ふといふのである。メエリンクの言の如く、ラッサアルは「プロレタリヤの階級鬪爭を理解」してゐたといふものゝ、國家を階級的抑壓機關其者と見ることは、到底肯んじないのである。

マルクスが國家を抑壓機關としてのみ見るに至つたことを、例へばクノウの如く、十七八世紀の社會的自然主義の影響に歸するものがある。此點には今は論及せぬが、ラッサアルは別記の如く佛蘭西革命の自由概念と其の所謂眞實の自由概念とを區別して、前者は正しくいへば、自由でなくて恣意（Willkür）と稱すべきものであるといひ、又此意味の自由は國家の自由でなくて、「國家からの自由」（Freisein vom Staate）だと言つて居る。而してヘエゲル脫離後のマルクス謂ふ所の自由が正に「國家からの自由」であることは、上述の通りである。

然るに、ラッサアルが最も排棄已まざるものは、此意味の自由概念、此意味の自由主義者であつた。彼れは固より權略に富む。言々必しも信用し難き人物ではあるが、兎に角或機會に、彼れは此意味の自由主義者に當る爲めには、普魯西國家の

裁判官と協力することを辭せぬとまでに公言した。即ち前に「勞働者裁判官」の勞者に得たる聽衆の前に於て、彼れは裁判官に向つて「諸君は固より彼の近世の蠻人たるマンチエスタア主義者に屬する者ではない。……一般に國家其者を憎み、……國家を悉く撤廢せんことを希ふ……彼の近世の蠻人たるマンチエスタア主義者に屬する者ではない。諸君と予とを互に分つ差別は如何に大なるにもせよ、――此の有ゆる道徳的なるものゝ消滅に對立する時は、吾等は互に相提携するものである。一切文明の劫初のヱスタの火、即ち國家を、予は諸君と共に彼の近世の蠻人に對して防護するものである」といつたのである（「間接税と勞働階級の境遇」）。

（七）

マルクスは、一度び國家權力を其手に掌握したプロレタリヤが、階級的對抗の條件を一掃する爲め如何なる手段を取るべきかに就いて、後には必しも固執しなかつたが、「共産黨宣言」には、土地所有の剝奪、地代の國用充當、急激なる累進課税、相續權の廢止等十項目を擧げてゐるが、ラッサアルには階級支配の廢止といふ目標は定まつてゐても、其處に到達する爲めの手段に就いては、必しも深く考察する所はなかつたらしい。「勞働者綱領」發表の翌年に實際運動を起すに當つては、彼れは所謂「冷刻なる賃銀鐵則」に依つて勞働者の被搾取を説明し、國家的補助を受くる勞働者生産組合に依て此賃銀法則の作用を廢止し、而して國家を動かして此勞働者生産組合の組織を援助せしむる爲めに、先づ普通平等直接選擧を要求した。左の中普通選擧の一事は、リカアドオの之を要求することは一朝一夕でない。これは彼れの少年時の手簡にも出ても窺はれるが、賃銀鐵則に至つてはリカアドオ賃銀論の踏襲に外ならぬ一方、其の生産組合論はルイ・ブランの「勞働組織」の借用であるといふ點に就いて、批評者の意見多くは一致し、彼れ自身亦た必しも其缺陷を認めなかつたのではない。

今賃銀鐵則に就いては、マルクス、生產組合に就いてはロオドベルトスが最も適切なる批評を加へて、ラッサアル自身の立場より見て其の支持すべからざる所以を說いて居るのである。

マルクスの鐵則に對する直接の批評は、一八七五年彼れがブラッケ其他に與へて獨逸社會黨ゴオタ綱領案を批評した書簡の一節に見出される。リカアドオの賃銀法則は、抑もマルサスの人口原則に基づくものであり、而してマルサスの人口論は社會的害惡が之を社會制度の罪に歸すべからざることを言はんとするものであるから、此法則を社會黨運動の論據とすることは矛盾だと謂ふのである。彼れの曰はく、賃銀鐵則の論據は何か。「それはランゲがラッサアルの死後間もなく示したやうに、(ランゲ自身も唱道した)マルサスの人口理論である。併し此理論が正しければ、假に百回賃銀勞働を撤廢しても、復た此法則を撤廢するに由なきものである。何となれば、此法則は啻に賃銀勞働制を支配するのみならず、有ゆる社會制度を支配するものだからである。實に此理由に基づいて經濟學者等は、五十年來(或は更に久しく)社會主義は社會主義の終に自然に基づく窮困を廢止すること能はずして之を普遍化し、同時に之を社會の全表面に配布し得るに過ぎぬことを論證し來つたのではないか」と。斯ういふマルクス自身も、別記の如く「共產黨宣言」時代には賃銀鐵則に近似せる意見を抱懷して居つたのであるが、漸く進んで勞働に對する需要と資本蓄積との關係を吟味するに及んで、此需要が比例的に蓄積と共に增進するものでないことに着目し、更に考察を進めて、資本全額中賃銀として支出せらるゝ所謂可變部分が蓄積の進行と共に比較的に却て減少する爲め、資本の蓄積其自身が却て相對的過剩人口を造り出すといふ學說を大成した。此學說の當否如何は議論の存する所であるが、社會主義者としては、現在行はるゝ搾取をば自然法則的人口原則に由て說明せずして、資本主義特有の蓄積法則に由て說明しようとしたのは正當であると謂はねばならぬ。社會主義者としては、ラッサアルはマルクスの「鐵則」批評に對して答へることは出來ないのである。

ロオドベルトスとラッサアルとの間には一八五九年以來私交があり。一八六三年後者が「公開答書」で勞働者生産組合と普通選擧とを提議して以來、二人は其往復書簡に於て幾度も反覆して此兩問題を討論した。普通選擧問題に就いては、ラッサアルは終始自說を取つて下らなかつたが、生産組合に就いては、ロオドベルトスの指摘に會つて、彼れは遂に自說の缺點を承認せざるを得なかつたやうに見受けられるのである（マイエル編纂ラッサアル遺稿集第六卷三一五頁以下）。

ロオドベルトスは先づ生産組合に於て規律と需要に對する適應能力の缺くべきことをも指摘したが、彼れのラッサアルに對する主なる反對論は、「社會の進化は究局勞働者を資本家及び地主たらしむることではなくて、土地及び資本所有を廢止するに傾く」ものであるのに、勞働者生産組合は此傾向を助成せずして却て是に逆行するといふに在る。既にラッサアル自身も、一生産組合の利得を其組合員をして壟斷せしめんとする組合利己主義を實現するのでなくて、社會全體の生産物を一定の公正原理に基いて社會全員に分配せんことを期したことは、其のロオドベルトス宛て五月廿六日附及び六月無日附の書簡に出て明に現れる。ロオドベルトスは生産組合は啻に此の所期の狀態と相反するのみならず、此狀態に到達すべき過渡手段ともなるものでないといふのである。社會全體の生産物を一定の公正原理に基づいて社會各員に分配するといふことゝ相容れない。即ち組合の私利と全體の利害とが相衝突するのである。然らば生産組合は土地資本の私有廢止に到達する階梯とはならぬかといへば、ロオドベルトスは現在の個人的私有制度の方が其に適して居るといふ。其理由は、組合利己心は個人利己心よりも強いからである。「集合人格は個人よりも强靱なる生命を有すると同様に又此よりも强靱苛刻なる利己心を有する」（三六四頁）。

即ち勞働者生産組合は、其の國庫の援助あると否とを問はず、依然利潤獲得の爲めの生産を廢せず、たゞ個人的商品生

産に代ふるに組合的商品生産を以てするものであるから、ラッサアルの如く、他面各生産組合に其個別收益を收得せしめないで、之を或標準に由て社會全體に分配せんとする者は既に半以上其立場を放棄したものだと謂つて好いのである。されば、ロオドベルトスの追究に會つて告白する所に由れば、彼れは自己の提案に對して必しも深き自信を有するものでなかつたやうである。即ち生産組合は、他にこれ程比較的實行容易にして有効なるものなく、而かも勞働者には何か具體的なる、捕捉し得べきものを與へなければならぬ必要上之を提議したのであつて、若し他に是に優るものがあれば、敢て其採用を辭せぬと謂つたのである（三二五、三五六頁）。

上述の如く、ラッサアルの經濟的提案は、彼れの獨創に出たのでないと同時に、彼れ自身の思想に於ける其根柢も決して深いものではなかつた。反之、彼れの國家觀は、彼れの思考法全體と不可分の關係にあるものであり、其由來する所は遠く深くして、其是非は論ぜず、彼れの思想の眞實の特色を成すものである。而して彼れの獨創に屬せざる賃銀鐵則生産組合は、一時獨逸社會黨の綱領に其文字を止めてゐたが、エルフルト綱領（一八九一年）之を削除して以來復た殆ど之を口にするものがなくなつた。近時一部に唱へらるゝラッサアルの「復活」は其國家觀の復活である。

（九）

マルクシズムは始め獨逸社會主義者の間によく理解せられずして、マルクスを憤慨、焦慮せしむることも一再でなかつたが、エンゲルスが「排デユウリンク」を著し（一八七八年）次いでベルンシユタイン、カウツキイ等出でて其解釋説明に努めたので、十九世紀末葉には獨逸社會黨に於てマルクスは殆ど全然ラッサアルを排除した。而かもマルクシズムの勝利斯の如くなるにも拘らず、猶ほマルクス註解者等の解釋に其師説に對して忠實を欠く一點があつた。彼等がマルクスの國家死亡説を充分正しく傳へなかつたことがそれである。即ちマルクス解説に小心翼々たりしカウツキイも、或は「未來

國家」といひ、或は無政府主義者は國家を否定し、マルクス主義者は之を肯定するのであるかの語氣を漏らし、或はプロレタリヤ解放の曉には、國家は資本的企業たることを已めて一の「社會主義的組合」となる等言つて、國家は死亡すると明言すること敢てせず。領袖ベエベルに至つては、特にエンゲルスの指摘ありしにも拘らず、猶ほ「國家は之を階級支配に基づく國家から一の民衆國家に、即ち如何なる特權も存することなき國家に變形せしめなければならぬ」と言ふを已めなかつた（Unsere Ziele, 1886）。階級支配に基つかぬ國家といふものは、マルクスの立場からいへば、黑き白雪といふに類するものたるのである。後にレニンが「國家と革命」の中に此等の解釋に痛擊を加へ、「吾人は目的として國家撤廢の問題に於ては毫も無政府主義者と所見を異にすることなし」と言つたのは、マルクスの解釋としては全然當を得たものである。

（十）

平時に於て既に斯の如くであつた。然るに世界戰爭に於て獨逸が敵國重圍の內に陷るに至つて、マルクスの否定的國家論は、更に其力を失つた。人は謂へらく、マルクスは「プロレタリエルに祖國なし」と言ふも、現に諸國のプロレタリエルは各々其祖國の爲めに戰つて居る。既に敵國と干戈相見ゆるに及んでは、國家の本質の果して階級的抑壓機關たるや否やを問はずして、プロレタリエルも亦た先づ國家に依つて、國民的存亡の爲めに戰はねばならぬと。斯くして開戰と共に社會黨員中に、マルクス主義者にして國家主義者たるものが相踵いで現れた。レンシユ、レンナア、クノウ、ヘエニツシユ等が其の最も重なるものである。而して此等の社會主義者は、レンナアの如く、獨斷的解釋に依てマルクスを國家肯定者となすものを除けば（レンナア說いて曰く「カアルマルクスは國家の否定、國家の輕蔑、國家に對する迷信的恐怖、今日通俗マルクシズムが媚を呈してゐる國家虛無主義とは正に天地の距離がある」と。Marxismus, Krieg und Internat-

ionale, S.38)他は概ねマルクスに對して否定的、批評的意見を表明してゐる。例へばクノウの如きは、國家の發展はマルクス、エンゲルスの豫想とは殊なる方向に行はれ、國家は其職分を失はずして「却て益々廣き社會的任務を擔當し、是に依て其行政機關を擴張する。」資本主義國家の跡に代るものは「一の新なる社會秩序を基礎とする、より高く發展せる國家、即ち社會主義的經濟——管理國家である」と言つて居るのである（「マルクスの歴史、社會、及び國家理論」）。

獨逸は敗戰して干戈は收められた。併しヱルサイユ條約に依つて加へられた重壓と屈辱の下に、獨逸國民は猶ほ戰時の苦鬪を續けなければならぬ。硝烟既に散じても、彼等は猶ほ外敵に對し、就中佛蘭西のショオギニズムに對して自國を防衞しなければならぬ。其の彼等に取つては、マルクスの國家否定論は少くも今は無用有害の空論である。素よりマルクスに據らざるは、ラッサアルあるが爲めではないが、併し國家否定のマルクスを排せんと欲する情は、即ち國家崇拜のラッサアルを迎へんと欲する情である。「國家の目的は、正に此結合に依て個人をして能くその單獨に到達すべからざる目的を成就し、單獨に到達すべからざる生活の段階に到達することを得しめ、彼等をして能くその個人としては全然到達すべからざる程度の教養と勢威と自由とを獲得せしむるにある」てふラッサアルの言は、今に於て最も痛切に聽かれるのである。

ラッサアルが果して如何なる意味に於て國民主義者たりしかは議論の存する所である。併しマルクスを國際主義者とするに對し、様々の機會の發言に由て、彼れを國民主義者とするのは充分の理由あることである。一八五九年奈翁三世が伊太利獨立を援けて墺太利と戰はんとするに際し、墺太利に附くべきか、奈翁に與みすべきかに就いて獨逸國論二派に岐れたる時、ラッサアルは「伊太利戰爭と普魯西の任務」と題する小冊を著して、奈翁の所爲を放任すべしと論じたことがある。其中に彼れは、若し奈翁が南方に於て民族主義に基づいて歐洲地圖を修正するならば、普魯西も亦北方に於て同一事を爲さんが爲めに、軍隊をシュレスヰク・ホルシュタインに送るべしと説いて、斯う言つた。「獨逸民族と共に普魯西の死活利害たる此戰爭に於ては、獨逸の民主々義者自ら普魯西の旗を擁ひ、之に對する障害は、偉大なる一民族の心臟に五十

年來鬱積せる民族的感情の爆發が獨り能くする膨脹力を以て、悉く之を聚固するであらう云々。」（ラッサアルがマルクスに告げた所によれば、此文言には別に裡面の魂膽があつたといふ事があるが、今姑らく表面の字句のみを掲ぐ）

彼れは又ボスポルス海峽の占領を夢想せるもの丶如くである。即ちロオドベルトス宛ての私信中に書いて曰つた。「而して予は猶ほ土耳古の遺產が獨逸の手に歸して、獨逸の兵士又は勞働者聯隊がボスポルスの海岸に立つ日に逢はんことを望む」と。

彼れは又一八六二年五月十九日、フイヒテ生誕百年紀念日に、伯林で「フイヒテの哲學と獨逸國民精神の意義」と題する講演を試み、其講演を結んで言つた。彼のフイヒテが孤獨の中に獨り自ら言へる「彼の哲學的なる『意識を以て自己を造る』は、既に宗教となつて、今日通俗にして獨斷的なる、獨逸統一てふ名稱の下に、有ゆる高貴なる獨逸人の胸を震動させて居る。有ゆる鐘が此精神の顯身を、獨逸國家の生誕を告げて鳴り渡る日にこそ――其日にこそ吾々はまた眞のフイヒテ祭を、彼れの精神と現實との結合を祝するであらう」と。

又憲法論を試みた文章の一節には斯う言つた。「吾々が一大外戰に遭遇する場合、サクセン、普魯西、バイエルンの如き我國の個々の政府は、爲めに崩解することあるも、獨逸國民は滅びることとなく、フイニクスの如く其灰燼の中から起るであらう。而して吾人の念頭にあるものは、たゞ獨逸國民是れのみである」と。而して是が今日、勞働者をも社會主義者をも含む多くの獨逸人の最も言はんと欲する所である。

（十一）

マルクス國家論の危機は、またボルシエギズムに對する反動の意味をも含んでゐるらしく見える。

マルクスの眞意は國家の消滅を主張するにあり、最終の目標の一點に就いては、彼れと無政府主義者とは其志を異にす

るものでないと斷言して從來の曖昧を一掃したのは、マルクス考證學上に於けるレニンの一功績である。爾餘の諸點、例へば暴力革命、無產階級の獨裁等に就いては、レニンのマルクス解釋には、異論あることを免れぬが、獨り國家消滅論に就いては、議論の餘地がない。人はマルクスと共にレニンを取るか、彼と此とを共に捨てるか、二者何れかを選擇しなければならないのである。然るに、レニン以下ボルシエギキは、從來の獨逸社會民主黨のマルクス解釋並に其實際行動に痛罵を加へて已まざるものである。社會民主黨のマルクス學者は競つてマルクスの眞意の那邊に在るかを辯じ、マルクスの名に於てボルシエギキの理論と勞農革命の實際とを非難した。マルクスは必しも常に暴力革命を必要としたるにあらず、又彼の所謂「プロレタリヤの獨裁」は實はデモクラシイと相背馳するものでないといふことを、マルクス、エンゲルスの文言を引いて說明せんとしたのである。たゞ獨り國家消滅論に至つては、ボルシエギキ解釋の當正なることが餘りに明白であるから、レニンを排してマルクスを取るといふ譯には行かぬ。レニンを排すれば、マルクスも共に捨てなければならぬのである。斯くして已むなくマルクスを拋棄するマルクス主義者が現れた。カウツキイは其の最も代表的なるものであらう。「斯る狀態（國家なき社會）は何時か到來することがあるかも知れぬ。併し現在認識し得べき實狀には、吾人が其處に到達することを指示するものは一もない。」國家なき社會に就いて想像し得ることは皆な「……思考練習としては或は價値あるべきも、吾々の行動に目標を與へる爲めには全然役立たぬ、單に一片の空想に過ぎぬ。」斯く言明するは、カウツキイとしては餘程の發奮を要したことと察せられる。（カウツキイは其の最近の大著「唯物史觀」に於ては、階級制の一掃せられた其跡の組織を呼ぶ爲めには、國家なる名稱を保存することが「最も適宜」であらうと謂ひ、從來の階級國家に對して、來るべき國家の爲めに「勞働者國家」若しくは「社會國家」（Sozialstaat）の名稱を提議して居る。第二卷六一二頁）

（十二）

更に人をしてマルクス國家論を離れしめたものは、最近、殊に獨逸墺太利の共和制實現後に於ける勞働者階級の實際政治的經驗である。舊帝政の下に於ては、社會黨は殆んど國家權力に接近する機會を有せず、勞働者は常に國家を「他人」の權力として、たゞ抑壓者としてのみ感ぜざるを得なかつた。從つて彼等の之に對する態度も、勢ひ總括的否定に傾かざるを得なかつた。然るに、革命後社會黨の勢力は縱令單獨に政權を掌握するには足らざる迄も、殆ど常に之を政府黨中の有力者たらしむるに足るものとなつた。此事が社會黨員の對國家感に影響して、其否定的態度を緩和せしむる効果があるべきは、蓋し當然のことであらう。ヒルフアヂングも此事を其編輯に係る新雜誌"Gesellschaft"發刊辭中に言つて居る。彼れは革命前に於けるマルクシズムの國家否定的態度を二個の事情に歸して居る。一は政治上の重要なる意思決定にプロレタリヤの參加を全然排拒した國家の否定的態度、一は歷史上現實の國家を直ちに國家其者と同一視する支配階級の國家理論が是れである。乃ち曰く「獨逸に於ては社會主義政治は、半絶對主義的なる非民主國家に於て發展して居つた。最大民主黨の實際行動は、政治上の排氣せられた空間内に於て造り上げられて居つたのである。大衆は一切重要事物に於ては議會的に殆ど動かすこと能はざる、硬直凝固の制度に當面して居つた。斯くて政治的終極目的として自然に發生せざるを得なかつたのは、此の國家形態――其は同時に國家當體と見えた――の變更ではなくて、――變更は殆ど不可能に見えた――其撤廢であつた」と。然るに「戰爭後に於て始めて歐羅巴の一大部分並に獨逸勞働運動は、偉大なるデモクラシイの體驗を知つた。此體驗は、轉換の急なりし爲めに其丈け愈々強く作用したに相違ない。勞働者階級は共和國を目するに彼等自身の事業を以てした。彼等は此國家形態の負擔者であつて、彼等の熱情的支持と擁護となくしては此國家形態はあり得なかつたであらう。……されば國家に對する態度も亦た別のものとなる。一の包括的なる國家理論に對する欲望が喚起せられた」と。

既に勞働者階級の政治的勢力が右述の如く發展して、社會黨又は勞働黨が、或は英吉利勞働黨の如く單獨に、或は獨墺

社會民主黨の如くブルジョア諸黨と協力して內閣組織の責任に當る場合には、階級國家以外に國家なしとのマルクス說に對して疑問が起る。搾取者被搾取者の階級別と、政府黨在野黨の關係が種々に交錯する場合には、果して何れの階級を以て政治上の支配階級となすべきか、其時の國家は何れの階級に對する抑壓機關と見るべきかの問題である。

(十三)

既往に於て經濟上の搾取階級が國家權力を其階級利害の爲めに利用し來つたことは、國家崇拜のラッサアルも、否なヘエゲル自身すらも之を否認して居らぬ所であつて、異論の餘地を止めない。併し乍ら經濟上の搾取階級は直ちに政治上の支配階級たるものではない。從つてブルジョアジイ、プロレタリヤの對立があり、前者の後者に對する搾取が行はれてゐる事實は、直ちに其時の國家をブルジョア國家たらしむるものではない。否な、マルクス、レニン等の立場よりすれば、プロレタリヤが國家權力を掌握して所謂プロレタリヤ國家を實現するのは、其目的がブルジョアジイの剝奪にあるのであるから、プロレタリヤ國家の下に於ける經濟上の支配者は當然ブルジョアジイでなくてはならぬ。若しもブルジョアジイの搾取が行はれなくなつて居れば、既にプロレタリヤ國家の必要はないのである。

故に一國家が果して何れの階級の抑壓機關であるか、果してブルジョワ國家であるか、プロレタリヤ國家であるかは、搾取被搾取の有無如何、搾取階級の果して何人なるかに由ては決せられぬ。問題は事實上の國家權力當局者は果して何人であるかに由て決せねばならぬのである。然るに今日の政黨は政見を同じうするものゝ集團であつて、直接純一には特定の一階級全體を代表して居らぬ。數階級の分子の一政黨に屬することがあり、一階級の數政黨に依て分ち代表せらるゝことがあるのである。而して更に國家權力も亦た一政黨でなく、異なる階級を代表する數政黨に依て掌握せらるゝことがある。斯の如き場合に於ては、國家權力に依て果して何れの階級が何れの階級を抑壓すと謂ふべきものであるか。若し階級

的抑壓が行はれるとはいひ得ぬ場合が起り得るならば、即ち階級國家ならぬ國家があり得るといふことになる。墺太利の代表マルクス學者たるオツトオ・バウエルは此點に着目して國家の必しも階級國家ならぬことを言ふに至つた。

バウエルは始め、同國の同志レンナアの社會愛國主義を攻擊したのであるが、後にレンナア首相の下にブルジョワ大臣と共に獨逸墺太利共和國政府の閣班に列して、時の階級的形勢上此共和國政府が一の階級の他階級を抑壓する爲めの政府なりとは言ひ難きことを認めた。乃ち其著「墺太利革命論」(Österreichische Revolution, 1923)中に說いて謂へらく、此共和國は階級國家ではない。何となれば此場合諸階級は國家權力を相互の間に分たねばならなかつたからと。此場合には一の階級が國家に依て他の階級を支配するにあらずして「階級諸勢力の均衡」が成立するのである。從つて彼れはプロレタリヤは斯の如き國家を自己のものとなし、此に對して愛國心を感ずるは當然であると考へた。原文を引用すれば、其に曰く「それは一個の共和國であつて、其處では如何なる階級も他の階級を支配する丈けの力を有せず、從つて凡ての階級が國家權力を相互の間に分たねばならなかつた。斯くして事實上國民の凡ての階級が國家權力に對する其分前を持つた。斯くして事實上國家の活動は凡ての國民階級の勢力の結果であつた。從つて之を一個の民衆共和國と稱することが出來る」と(H. Kelsen, Marx oder Lassalle. 參看)

バウエル其人は猶ほマルクシズムの立場を守りつゝ此說を爲すものであるが、此國家論は、實はマルクス說の弱點に指を觸れてゐるのである。而してマルクス說の批評は自ら期せずしてラツサアルの「復活」を迎へるの結果となる。

(十四)

階級別撤廢に依て國家が消滅すると說くマルクスの眞意は、果して一切の拘束が撤去せられて、各個の恣意の行動が放任許容されるといふ意味であるか。レニンは斯く解し、マルクス自身の言說に間々斯く解せらるべき如くなるものがあ

る。併しマルクスの豫期せるが如き大規模なる計劃經濟の下に於て、各個人の放恣を許し得るといふことは到底想像し難き所である。然らば、所謂國家の消滅は單に階級的抑壓の撤去を意味し、階級別撤去の後も猶ほ或强制は全體と個體との利害調和の爲め行はれ、此强制の下に恣意ならぬ合理的自由を享受し得ると謂ふものであるか。マックス・アドラアは大體に於て斯く主張し、又斯く主張する根據は無論マルクス、エンゲルスの著作に求められるのである。此解釋はレニンの解釋の如くには空想的でない。併し乍ら、斯る狀態は、ラッサアルも亦た第四階級支配の曉に之を期待して居るのである。たゞ此の同じ狀態を、彼れは國家完成の狀態なりと認め、マルクスは其時最早國家なしと言ふに過ぎぬ。而して此用語の爭に於て、マルクスが獨り正當でラッサアルが失當であると言はねばならぬ理由は極、めて薄弱である。

此場合には最早國家なしと言はんが爲めには、徒らに階級國家以外に國家なしとの命題を反覆力說するの外はない。歷史上の國家權力が殆ど常に階級的利害の爲めに利用せられ來つたことは、殆ど異論なき所である。併し是が爲めに國家が特定階級の利益の擁護者たる以外の任務を有せぬといふのは、有意無意の誇張である。國民全體の利害を强調して、獨り階級利害のみならず、幾多國家内に於ける集團利害の衝突を無視することは固より失當であるが、極論して其反對を主張することも斷然當らないのである。「共產黨宣言」の「プロレタリエルは祖國を有せず」との揚言の如きは明に是に屬する。たゞ階級利害と國民的利害とが如何なる程度に於て痛感せらるるかは時勢に由て同じくない。而して少くも獨逸に取っては、今日は戰敗の屈辱と負擔との爲め、外敵に對する國民的利害の擁護の最も重しとせらるる時である。國民的利害の重しとせらる時は、人のマルクス國家論に慊らざる時である。而してマルクス國家論に慊らざる時は、人のラッサアルを懷ふ時である。即ち今日の社會主義思想界一部に於けるラッサアルの「復活」は、これ亦た大戰爭の結果として齎された一現象と見るべきものである。(完)

新『戀愛の道』

「コロンタイ夫人の戀愛觀」

林　房　雄

一 オルガの煩悶

「……コロンタイの「戀愛の道、」昨夜一氣に讀んでしまひました。あまりに隔つた思想の中に、あまりに急激に歩みこまされたために、頭の中がすつかり混亂してしまひました。「三代の戀」に就いて、特にそのことがいへます。正直なところ、私は若いゲニアの思想と行動に同感を持つ前に、すつかり驚かされてしまつたのです。……あんなラデイカルなものを讀むと、今更のやうに、私自身が穩なしい動きのない思想の世界に住んでゐたことを感じさせられます。……」

この手紙——私の譯書の讀後感——をくれた友人は、漸く二十才をすぎたばかりの若い職業婦人で、生活に於ても思想に於ても、相當に自由な世界をもつてをり、特に政治的な見地では、社會主義的立場をも理解し得る——だから現代日本の婦人としては最も進歩的な婦人の一人なのだ。

その最も進歩的な婦人を、コロンタイの小説「三代の戀」はすつかり混亂させてしまつたのだといふ。特に若いヒロインのゲニアは、彼女を同感させる前に吃驚させてしまつたのだといふ。今更ながら彼女の思想の穩かさを感じさせたといふのだ。

「三代の戀」は、「ワシリツサ」(赤い戀)「姉妹」と一括されて、「戀愛の道」の題下にいはゞ三部作をなしてゐる。コロン

タイ婦人は、これらの小說の中で、その序文にもいつてあるとほり、ソヴエート、ロシアの新しい女性を主人公として活躍させつゝ、世界大戰後に各文明國を通じて現れて來た兩性關係の變化、新しい性的關係の心理的硏究を試みようと企てたのだ。——こうした意圖によつて書かれた物語のいつたいどの部分が、私の友人を吃驚させ混亂させたのであらうか？

右の三つの問題的な小說は、すでに邦譯されてゐるが、極めて廣い讀者を吾國の讀書階級の間に持ち、あらゆる分野に豫想以上の反響をひき起し、議論の種を提供しつゝある。私は、ある大學の硏究會で、それが激しい討論を卷き起したことを聞いた。ある新聞社の主催で、女流作家達による批評會が持たれるといふ噂も耳にした。また勞農階級と進步的なインテリゲンチヤの間に廣い讀者をもつてゐる「勞働農民新聞」は、「コロンタイ夫人の戀愛觀とプロレタリア婦人」といふ題の感想を私に求めて來た。

戀愛問題乃至性慾問題が、社會人の最も重要な論題（トピック）の一つを成してゐること、今日の如きは、おそらく他の時代に類を求め得ないのではなからうか？そして、現在のところこの種の問題の「流行」に對して、有識者の多くは、徒らに刺戟と享樂を求める近代人の頹廢的心理の醜惡な現れだとして眉をひそめてゐるらしい。或はさうかも知れない。この「流行」の原因の一部には、たしかに近代的頹廢が潛んでゐることであらう。しかし、その點をのみ强調して、現代の戀愛乃至性慾問題の「流行」を簡單に嘲笑し去らうとするものは、事物の眞相を見得ないものだ。歷史家の說によると、かのルネッサンスの時代に於ても、今日のそれに比し得べき極めて盛んな性慾問題の「流行」があつたさうだ。ルネッサンスはいふまでもなく、歷史の銳い轉換期であつて、漸く形を成し始めた近代的商業社會が、古い封建社會にとつて代らうとしてあらゆる分野が激しい衝突を行つてゐた時代だ。健全な性生活の桎梏と化し去つた封建的中世的性道德に對して、新しい有産者的近代的性道德が正面的衝突を行つたことが所謂性慾問題の「流行」をかもし出したのだといふ。現代に於ても同じことがいへないだらうか？現代の都會の筋肉及び頭腦勞働者の結婚年齡は三十才を越えてゐる。男子十七、女子十五にしてすでに結婚した明治初期と何んと大きな差異であらう。この尨大な晚婚者群の性生活の實踐、及びこの生活實踐が生み

出した新しい見地は、尙吾國に殘存する封建的な性道德、狹陋な財產關係を基礎とするブルジョア的な性道德と必然に衝突せざるを得ぬ。

この一般的な性的飢餓の事實、新道德結成のため意識的無意識的な要求——それに加ふるに職業婦人の激增による女性の生活と思想の急激な變化、即ち「婦人の自覺」、これらの根本的な諸原因が、現代の性慾問題全盛の現象を生んだのだ、と私は考へる。その點に氣がつかず、徒らにこれを嘲笑のうちに葬り去らうとするものは、問題の表皮を彷徨し現代の「性的危機」に寸毫の解決をもたらし得ない無能力者の群にすぎない。

吾々は、例へばミル、カーペンター、エレン・カイ、エリス、またはベーベルのやうな、この問題の眞摯な解決に尊い努力を拂つた思想家の一系列を過去に於て持つてゐる。コロンタイもまた、これらの先驅者達の最も正統的な、同時に最も新しく且つ根本的な(ラディカル)繼承者の一人である。だから批評家達も彼女の著書に對していつてゐる。「それは、現在の過渡期の根本問題を、眞摯さと情熱とをもつて取扱つた數少い書物の一つである。」(ベルリナア・タアゲブラット)また「それは今日まで何人も到達し得なかつた廣大な深淵の解剖であり公開である……至高と眞實とを求むる至純な人間の僞らざる感想……未來人類の巨大な息吹きが、この暗示に富んだ書籍の中から吾々の額を吹きつける。」(ドロテ・ゲバイヤア)

この明瞭で高貴な意圖によつて書かれた彼女の小說が、いつたいどうして、私の友人を——少くとも現在の日本に於ては進步的な女性の一人を混亂させ當惑させたのだらうか?「三代の戀」のヒロイン、若いゲニアは何故に彼女の同感を誘ふ前に、彼女を驚かせてしまつたのだらうか?

だが、若いゲニアの行爲と思想の前に混亂し當惑したものは、實は私の友人ばかりではない。この小說のヒロインの一人である彼女の母、ロシア共產黨の古い婦人鬪士、オルガ・ヴェセロフスカヤも、彼女の前では手も足も出なかつた。彼女も嘆いてゐる。「私が今、私の娘ゲニアについて經驗しつゝあることは、どんなに努力してもつひに理解することが出來ないのです。」(「三代の戀」四六頁)

二　ゲニアの解答

「三代の戀」の中では、題名が示す通り、祖母・母・娘、三人三樣の戀が取扱はれてゐる。だが問題は最後の娘ゲニアにある。簡單に筋をたどらう。母親オルガは、多難な革命の波と共に成長した活動的女性、獨立人としての資格を充分に備へた婦人組織者（オルガナイザア）、彼女もまた過去に複雜な戀愛經驗をもつてゐるが、現在ではリヤブコフといふ若い同志と共に愛に惠まれた同棲をつゞけつゝ、ソヴエート國家機關の重要な地位についてゐる。その娘ゲニアは、精力と情熱、快活な活動慾と若々しい自信に滿ちた典型的なソヴエートの新女性、或は工場に、或は白衞軍に對する戰線に、或は飢饉救濟運動に、または地方ソヴエートの委員、共産黨細胞の書記として、全身的な活動を續けてゐる。

この三人――オルガ、リヤブコフ、ゲニアが革命直後の住宅不足から一つの部屋に棲むことになる。三人の間には、親子、夫婦としての愛、同志としての信頼が完全な調和をもたらしてゐる――かの如く始めの間は見える。が、やがて悲劇の幕があがる。

ある日、役場で執務中の母親のもとにゲニアがやつて來て、平氣な調子で、姙娠したらしいから墮胎のための許可證を書いてくれといふ。びつくりした母親が、ある豫感をもつて、相手は誰かと聞くが、ゲニアは誰だかわかりませんと答へる。が、その後數日、母親は果して豫感通り、自分の若い夫リアブコフの腕の中にゐるゲニアを發見する。母親は激怒して娘を詰問する。「何故お前は私をだましたのです、姙娠の相手が誰だかわからないなどとでたらめをいつたのです。」ゲニアは平然と答へる。「えゝ、ほんとに誰だかわからないのです。私はリアブコフより他にもう一人の同志とも關係をもつてゐます。」それればかりではなく、先年志願して戰線に行つた際もすでに性的交渉を持つた、しかし、過去に於ても現在に於ても、戀愛はしたことはない、と告白する。母親は混亂してしまふ。戀愛なしの性的交渉、しかも多くの異性と同時に！――しかしゲニアは平氣で主張する。

「あなたは、これは賤しいことだ、人は戀愛なしに身をまかすべきではないといはれます。……だがお母さん、假に私が

あなたの二十才になる息子で、それが戰線に出て獨り身で暮してゐるとします。その場合、彼が氣に入つた女と關係したからといつて、やはりあなたはこんなにびつくりするかどうか、正直にいつて下さいな。淫賣を買つたとか、娘をだましたとか（それは賤しむべきことです、これには私も異議はありません。）そうしたことをやつたのではなしに、自分が氣に入り、向ふも氣に入つた女と關係したのです。それでもあなたは彼の「不檢末」に絶望しますか？敢て斷言します、男の兄弟が人間であるように、私もまた立派な一個の人間です。しかも、私は私の義務は完全に自覺してゐます。私は黨に對する私の責任を知つてゐます。しかし、黨、革命、戰線、國內の表徴、それらのことと私が二人の男と接吻したこととの間に何の關係がありますか？……」

それは假りに許すとする、（と母親はいふ）しかし、リヤブコフは自分の夫であり戀人ではないか、その男と關係することは即ち母に對する尊敬、愛を無視することだ！——だが、娘は答へる。自分とリヤブコフの間には決して戀愛がないのだから、たとへ彼とキスしたからといつても、自分は母から何物も奪つたことにはならぬ。彼は以前と同樣に母を敬愛してゐる。「……彼の愛の一筋ほども私はあなたから奪つてゐません……だが私達がキスしたではないかとおつしやるのですか？……えゝ、それはあなたがいそがしくて、彼をキスする時間をまるでもつてゐないからです。それでもあなたは、彼をしつかりとあなたに縛りつけて、あなたの許しなしには樂しい眼を見てはいけないと敢てのぞまれるのですか？それこそほんとに汚い所有慾です。あなたの口を借りてものをいつてるものはブルジョア的教養です。いふまでもなくそれは間違ひです。あなたはあなたの時間を自分の氣に入るように暮してゐます。リヤブコフが何故それと同じことをやつてはいけないのです？」

ゲニアもアンドレイも、自分達のやつたことは當然で單純で自然なことだといつたような顏をしてゐて少しも後悔の意を表しない。二人は、オルガの方が事件をあまりに悲劇的に考へてゐるので、誰も彼女に苦痛や侮辱を與へようとしたのではない、若し彼女がこの事件について腹をたてゐるなら、二人は何時でも關係を絶つといふ。しかし關係を絶つたからといつて事態がどう變るのか！オルガにはどうしてもそれが理解出來ない。娘達がまるで感情もなければ情熱もない冷い理

性の怪物のように思へる。全然道徳を無視したふしだらな淫蕩か、それとも新しい生活の中から、新興する階級の中から生れ出た新見解、即ち新しい道徳か？……混亂の極、彼女は遂に、「三代の戀」の筆者のもとに解決を求めて行く。

「筆者は、ゲニアと會つて話す。だがゲニアは母に答へた言葉を繰返へすにすぎない。――自分とリャブコフとの間には戀愛がないのだから、「自分達の行爲は少しも母を傷けないと思つてゐた。ところが意外にも母は狂人のように惱んでゐる。これは母の方が明かに誤つてゐる、彼女は吾々の新しい見解を理解し得ないのだ。しかし、母がこのように惱んでゐる以上、自分は母に對してすまないことをしたわけだ。――また彼女はこんなことをもいふ。

「あなたが一番不思議に思ふのは、私が色々な男とたゞ彼等が氣に入りさへすれば、彼等を戀してゐなくとも、關係を結ぶことでせう。あなたも御存知の通り戀をするには非常に多くの時間と精力とが必要です。

私は多くの仕事を持ち、解決すべき重要な問題をもつてゐます。……時々どうかして靜かな時間があると、そんな時には自分のまわりに好きな男性のゐることに氣がつきます。しかし、私達は戀をするだけの充分な暇はもつてゐません。また、幸ひにある男と友達になつたと思ふと、たちまち彼は戰線に送られたり、他の町に轉任させられたりします。でなくとも、また次の仕事が殺倒して彼のことなんか忘れてしまひます。……だから、自然、私達は偶然二人が出逢つて幸福を感じた時に、その時間を尊重するようになるのです。……それは何物にも責任がありません……たゞ、私が恐れるのは花柳病だけです。」

「あなたは、私が如何なる人に對しても戀愛の感情を持てないのか、とおつしやるのですね？私はたゞ、これまで關係を結んだ男を戀しなかつたといつただけです。現に私は多くの愛する人々をもつてゐます。例へばお母さん――母はまるで私が彼女を敵視してゐるかのように思つてゐますが、全く逆です。私は母の愛なしには生きて行けません。私の今度の行爲が母を傷け、その活動能力を奪つたのは全く悲しいことです。……それから、また例へば同志レーニン――お笑ひになつてはいけません、私はレーニンを、これまで私が知つた如何なる男よりも、ずつと〳〵深く愛してゐます。若し私が彼の聲を聞き、姿を見ることが出來たら、それこそ私は一日でもじつとしてゐることが出來ないせう。……それから、私達

の覺書記をしてゐる同志デラーシに——この人は立派な人間です。私は彼を愛してゐます。心の底の底から。……昨年彼に對して猛烈な反對派の陰謀が行はれた時、私は一晩も眠れませんでした……さうです、私はほんとに彼を愛してゐるのです！」「私はきつとこれから先き、戀のために大騷ぎをすることがあるでせう。しかし例へ戀をしても、私はお母さんのやうな戀の仕方は決してしないつもりです。あんな戀の仕方をしたら、仕事をする暇はないではありませんか！」

三　合法的結婚、賣淫、及び自由戀愛

これはいつたい何だ？「三代の戀」でコロンタイが示さうとしてゐるものは、果して新興する階級の中から生れ出た新道德であり得るだらうか？　それは單なる過渡期な淫蕩にすぎないのではなからうか？——例へば私に手紙をくれた友人のやうに、全く不用意にこの小說を讀まされたものの心にさうした疑問が起るのは想像出來る。しかし、コロンタイがこれを示さうとしてゐるものが、決して後者ではない。新しい生活、新しい感情、新しい概念を持つた階級の新しい道德なのだ。私は、コロンタイが論文の形で發表した彼女の意見を參照して、その理由をやゝ詳しく說明して見よう。

彼女は、「戀愛と新道德」いふ論文の中で、ドイツの女流作家クレーテ・マイセル・ヘスの著作「性的危機」を紹介しつつ、現在の男女結合形態を銳く批評してゐる。

——現在の兩性結合の形態は、次の三つ、（一）正式な合法的結婚（二）賣淫（三）自由戀愛、に分けることが出來るしかも、この三形態は、人類の幸福、精神の豐富化、ひいては種族の健康に何物をも貢獻し得ない。

先づ、合法的結婚について見よ。現在の法律——種族の利益と個人の幸福とを目的とせず、ひたすら財產的要素をのみ重要視する法律によつて認容される合法的結婚は、（一）結婚の不解消性——双方の合意によらなければ離婚出來ないこと、（二）所有權の不可分性——財產を基礎とする夫に對する妻の從屬、或はその逆、といふ嘘つ八な原則の上に立つてゐる。

結婚の不解消性によつて何がもたらされるか？　この原則によれば、人間は原則として一生涯ただ一人だけの配偶者と

生活を共にしなければならない。これは人間の心理が一生涯を通じて變化しないことを假定するもので、だいいち心理學の結論に悖る。その上、この原則に從へば、吾々は只の一回で幾百萬の人間の中から自分の魂に調和する他の魂を、自分に結婚の幸福を保證し得る第二の「自分」を發見しなければならない。そんな手品みたいな藝當がどうして出來るものか？　マイセル・ヘスもいつてゐる、「結婚とは住宅のようなものだ。長く住んでゐて始めてその缺點もわかる。」もちろん、幾度も幾度も不完全で不愉快な住宅にぶつつかつて、それを取り換へるべく餘儀なくされることは、大きな不幸だ。しかし、それとても、どうしても氣に入らない一つの住宅に一生涯とぢこめられるよりはよほどましだ。しかも、現代の道德は一回以上住宅をとりかへるものを口を極めて非難する。「人間の長い生涯に於ける戀愛關係の取換へは――正常なるもの、避け難きものとして社會的に公認されねばならぬ現象である」といふマイセル・ヘスの意見は傾聽に値ひする。

更に、合法的結婚の大多數は「暗の中」で行はれ、男女は相手方について殆んど何も知らないのを常とする。單に精神的方面に於てのみならず――もつと悪いことには――結婚の幸福のために缺くべからざる肉體的調和の有無さへも知り得ない。そんな不合理なことがあり得るか！　これに比べれば、中世紀に行はれてゐたあの「試みの夜（プロベ・ナハト）」の習慣の方がずつと合理的で文明的だ。

第二の所有權の不可分性はどうだ。これは當然の結果として結婚者に對する財産の支配をもたらす。財産第一、戀愛第二――人格的幸福と喜びは金錢關係に從屬させられてしまふ。人格が財産に從屬してゐる狀態にあつては、相手の魂に眞實の敬意を拂ふことが出來ない。かくて眞實の愛は窒息する。更にこの「財産「原則は、當然夫婦の極めて狹隘な同棲を結果する。經濟的獨立のない一方の配偶者は、離れては食へないが故に、如何に調和しない精神肉體の持主であつても、無理に適應するよう義務づけられつゝ、同じ家の中に住んでゐなければならぬ。それのみか、例へ熱烈な愛がある場合でも、不斷の同棲、狹隘な同居は火のような戀をも冷却し、堪え難いいがみ合ひをひき起すものだ。――あらゆる意味に於て、現在の合法的結婚は、眞に偉大な男女愛の養成所でもなければ、貯藏所でもない。その全き逆だ！

次に賣淫。――これについては改めて口をきくのが野暮だ。職業にまで押し下げられた「戀愛」、べらぼうな話ではない

か！賣淫を生み出す社會的根源、それが作ふ肉體的苦痛、病氣、發育不能、種族の退化等の問題をしばらくおいて、賣淫が人間の精神について及す影響だけでも考へて見よ。

賣淫は戀愛を完全に壓し殺す。賣淫の前には、愛の神（エロス）はびつくりして——汚物にけがれた裾に金の翼を汚されることを恐れて飛び去つてしまふ。それは人間の精神を歪め、眞の戀愛能力を奪つてしまふ。金で買はれた愛撫、眞にエロティツクな恍惚境に導くための崇高な要素を缺いた抱擁に馴れた男の心は、眞の戀愛の複雜で微妙な心理を全然理解出來なくなる。殘るものはみじめで單調な肉體的衝動。戀愛は機械化される。かくて兩性の無理解は深化し、純眞な女性の崇高な要求は蹂躙される。

賣淫に對するコロンタイの見解は絶對に非妥協的である。女性として曝され得る最も恥辱的なこの事實に對して、彼女は全身的な怒りをもつて抗議する。——一時、コロンタイはロシヤ共產黨內に於て反幹部派の立場に立つたことがあつたが、それには幹部派の政策たる新經濟政策の結果、一度街上から消えた淫賣婦の姿が再び現れ始めた事實に對する「感傷的」な憤激が原因の一部をなしてゐたと傳へられた位ひである。

最後に自由戀愛はどうだ？第一にそれは極めて不安定である。それは古い道德に對する新しい道德として出現したものではなく、前者の單なる否定として不明瞭な形を現してゐるものにすぎぬ。現在の人間の多くは、すでに合法的結婚と賣淫との直接間接の影響及び殘酷な生存競爭から生ずる醜い利己心によつて眞の戀愛能力を失つてゐる。それのみか近代人には戀をするに充分な時間がない。

眞に自由なる戀愛は、合法的な結婚や金で買へる「戀」とは比較にならぬほどの時間と精力とが心要である。だから、社會的な仕事を持つた活動的で純眞な男女の多くは、戀の熱情を「恐しき不幸」「危險なる矢」として近づくことをひたすらに恐れてゐる狀態だ。かゝる障害のたゞ中で、それ自體としては何等の道德的規準——「內的義務」の意識を持たぬ自由戀愛が、たとへ成立したように見えても、それははかない空中の樓閣か、しからずんば——！「自由戀愛」の達人諸君にはお氣の毒だが——それは眞實の戀愛以外の何物かだ。現に、所謂自由戀愛の殆んど全部が、平凡な合法的結婚か、でな

ければ單なる喧嘩別れに終るのを見ても、この斷定が誤りでないことが知れよう。

かくて、この三つの形態は、現在の「戀愛的飢餓」――「性的危機」の袋小路から人類を導き出す何物でもない。

四　唯一の拔道としての「戀愛遊戯」

では逃れ道はどこにもないのか？現在の社會關係のもとでは、現在で可能な結合形式のもとでは、人類は戀愛の完成より逆の方向をたどらなければならないではないか。たとへ眞の戀愛が人の心に生れても、社會制度はこれを頽落せしめ、また種々な條件によつて歪められた人間の心理はそれを正當に受入ることが出來ないではないか。若しこのまゝの狀態で高度の戀愛を完成しようとするものは、「心中」といふ東洋的な方法によるか、或はブローニングの詩篇の中の人物のやうに、戀愛の最高頂に於て戀人の首を絞めるかするより外に道はなからう。言葉を換へていへば、人類が眞に戀愛を享受せんがためには、現在社會制度及び人間心理の根本的改造を行ふより外に道はない。――なるほどそれは根本的な解決策ではある。しかし、それは婦人の獨立、母性及び小兒の社會的保護、離婚の自由等の社會主義の一般綱領が屢々くりかへしたところであつて、解決の時期を遠い未來に置く。少くとも現在の解決策ではない。吾々は、社會主義社會が到來するまでは、エロスに惠まれない冷かな夫婦の抱擁の中に滿足してゐなければならないのか？賣淫の助けを借りなければならないのか？自由戀愛の空中樓閣を追はねばならぬのか？

その必要はない！――とアイセル・ヘスは答へる。そしてコロンタイもそれを肯定する。灰色の人生を魅力ある色彩で輝かせる眞に偉大なる戀愛が缺けてゐる現代に於ては、吾々は「戀愛遊戯（リーベシュピール）」をもつてそれに代用することが出來る。眞の戀愛は極めて高度の心理現象である。それはトルストイの說いた「偉大なる愛」の如きものと共通性をもつ。故に、現代のやうな無戀愛時代を生活してゐる人類がそれを享受する能力を獲得するためには、人間の精神に「戀愛能力」を集積する可能性を與へる「戀愛の學校」を通過しなければならぬ。そしてこの學校の役割をなすものが即ち「戀愛遊戯」なのである。

この「戀愛遊戲」は決して今日のみの現象ではない。これは歴史の種々な段階に於て、種々な現象形態をとつて現れてゐる。ギリシャの歌妓とその友人との關係、ルネッサンス時代の高級歌妓の派手やかな戀、またはパリのグリゼット（パリの學生妾）の小鳥のように自由なエロティックな友情。それらのものの中にその根本的な契機を見ることが出來る。

それは一切を燒き盡すエロス、相手の完全な所有を要求する悲劇的な顚付きのエロスではない。また粗暴な生理的行爲によつて一切を消盡し去る獸的な情慾でもない。「戀愛遊戲」には極めて純眞な魂と、こまやかな心づかひ、心理的な節制とが要求される。こゝに於ては、一切の强制、一方が他方を無暗と苦しめ、その內的世界を無視するが如きことは許されない。相互の充分な尊敬と戒心とが要求される。

だから、吾々はこの「戀愛遊戲」――「戀の演習」の過程に於て、從來の戀愛經驗の特徵をなしてゐた果てしない利己主義、獨占慾、無法な嫉妬心を克服することが出來る。また、己れの欲する時にのみ、そして感情の最高頂に於てのみ相手に身をまかせるといふ、眞の意味の高潔な貞操を學ぶことが出來る。また、それによつて生理的能力の旺盛な青春期に吾々を襲つて、吾々の個性を春情の奴隷と化するエロスの殘酷な矢を避けることも出來る。

魂を引き裂く悲劇か、然らずんば愚劣な道化芝居。――その何れでもない、美しく明るく何人をも傷けぬ戀愛藝術。それが「戀愛遊戲」だ。それは決して單なるふしだらな淫蕩ではない。吾々の心に眞に偉大なる戀愛能力を養成する學校だ。戀愛經驗を恐れるな。それは嚙ればなくなるバタパンではない。あらゆる戀愛經驗（これはもちろん粗雜な生理的行動を意味するのではない）は人間の精神を貧弱にするものではなく、逆にこれを豐かにし完全にする。この「エロティツクな友人關係」を屢々經驗することによつて、吾々の眞の戀愛を享受するところの能力は次第に養はれて行く。

この珍しい見解を理解した後、今一度第一節にのべた若いゲニアの行動と思想を讀みかへしたら、おそらく吾々は、自らの混亂と當惑への鍵を發見し、コロンタイが「三代の戀」と書いた意圖が奈邊にあつたか正しく理解し得るのではなからうか？

五　コロンタイの戀愛概念

以上述べたところから、吾々はコロンタイのいふ「眞の戀愛」がどんなものであるかをほぼ推察し得る。それは「合法的結婚」でもなければ「賣淫」でもなく、「自由戀愛」でもなく、また「戀愛遊戯」でもない。その何れとも異る、より高い感情であり行動である。

彼女は「三代の戀」のゲニアにこうした言葉をいはせてゐる。——「人が戀する時は、何時も相手と一しよにゐることをのぞみ、戀する人に一切を捧げることを願ひ、その人のために苦しみ、その人のために悩みます。」

こうした感情は、古來多くの戀愛詩人によつて歌はれた殉情的な戀の自己犠牲と變らないではないか。またあの「赤い戀」（ワシリツサ）の中で屢々繰返し描寫されてゐる戀愛的歡喜の心理は、これもまた極めて調子の高い舊來の戀愛文學と變るところはないではないか。また或る場合では、例へばサーニンのやうな、戀愛を單なる肉慾にまで還元してしまふ粗雜な唯物論者が、決して戀のよき相手でないことを主張し、「戀愛はこれ自身一つの重要な創造力である。それは戀愛を感じてゐるのみならず、これを斷られる者の精神をも擴大し豐富にする。」といふマイセル・ヘスの言葉を肯定してもゐる。戀愛がなければ、人間は氣抜けがして永久に物足りない孤獨に惱まされることだらう。戀愛は必ず未來社會に於ては高い崇拜の對象になるにちがひない。現存の鬪爭と生存、苦痛と創造の時代に於ても、戀愛は常に吾々を勇氣づける偉大な力だ。苦痛と孤獨の中で強く生きるためには、人は何物かに保護され、何物かに己れの價値を認められてゐることを感じることが必要だ。この保護と承認を意識した時、生活の最高の喜びは生じる。この喜びを與へるもの、即ち戀愛(リーベ)に外ならぬ、といふ意味の言葉も吐いてゐる。彼女の戀愛の概念内容は、このやうに高度である。それは母と子の愛(リーベ)、師に對する愛(リーベ)、レーニンに對する愛、トルストイの説いた偉大なる愛(リーベ)——それらのものと共通の内容をさへ有してゐる。

と、これだけを眺めたら、彼女もまた世の常のブローニングの使徒にすぎないのではなからうかとさへ考へさせられる。Love is best ——然り、その通り！と彼女は平然と答へるものの一人ではなからうか？

だが、いふまでもなく、センテイメンタルな戀愛至上主義者であるためには、コロンタイはあまりにも新時代である。あまりにも根本的(ラディカル)である。早い例が、あの「戀愛遊戲」といふ新觀念の大膽な肯定を見よ。これなどは、戀愛なき一切の肉體的結合を絶對に罪惡と見る戀愛至上主義者諸君の到底企て及ばざるところではなからうか！

彼女の戀愛觀は、たゞの一語で盡きる。曰く「戀愛は私事である！」

彼女はいふ。「吾々は人間の戀愛關係に於ける行爲を基礎として、彼の人としての價値判斷をするであらうか？否、私は考へる、一般的に見て、彼が比較的ゆるやかな一定の範圍をとび越えぬ限り、彼の性生活は彼一人のみの「私事」に屬するものだ。從つて或る個人の眞價は、その人の家庭道德上の行爲によつて評價さるべきものではなく、彼の仕事、彼の才能、彼の意志及び國家社會に於ける有用性によつて決せらるべきものである。」

人があつて、コロンタイの前で、ブローニングの有名な詩の中の「戀愛は至上である」といふ一句を讀んだなら、彼女は必しもそれを否定しないかも知れない。しかし、そのすぐ前にある一句「千歲を隔てて猶滅びざるものは兩性の戀だ。幾世紀の間の馬鹿騷ぎ無駄骨折り、その勝利をも光榮をも、すべてを皆葬り去れ。」を讀み加へるならば、彼女は「馬鹿！」と答へるであらう。

六　新戀愛觀の現實的基礎——新らしい婦人

戀愛は私事だ。人間の價値は彼の仕事、社會的有用性によつて決せられる。——だが、こうした見方は、すでに男性の間には珍しくない考へ方ではなからうか。僞善的道德の故に、それほど公然とは認めてゐないものゝ、少くとも男性達の間では暗默のうちに承知されてゐる傾向ではあるまいか？特に彼が偉大な社會的事業の遂行者、偉人型の人間である場合には、その傾向が著しい。「英雄色を好む。」封建の昔に於てすでに、偉大なる事業の遂行者は、彼の性的生活の如何を問題とされてゐない

ある同時代の女流評論家が、「三代の戀」を評して、コロンタイの戀愛觀は、例へば伊藤博文のような人の持つてゐたそ

れと一致する、別に珍しいものではない、といふ意味のことをのべたのを私は最近讀んだが、なるほどそれは一つの理屈だ。たゞ、この評論家が見落してゐることは、伊藤博文の場合には、女が單なる「美しい享樂物」に化せられ、そしておそらく女の方もそのつもりでゐたことだ。が、それより重大なことは、コロンタイがかゝる戀愛觀の承認を、男性に對してだけでなく、特に女性に對して要求してゐることだ。この要求が實現されるためには、從來の男の附屬品としての女が、伊藤博文とまでには行かずとも、少くとも一般の男性と同等な「獨立人」「活動人」の水準にまで自己を高め得てゐることを必要とする。一個の獨立人、活動人としての女性が、現實の社會に大衆的に出現してゐることを必要とする。

では、こうした新しい女性は果して現在の社會に出現してゐるか？然り、とコロンタイは答へる。彼女のやゝ長い論文「新しい婦人」が、その詳細な解答書である。

これまでの女性の型は――生活の反映としての文學に現れたものだけを見ても――欺かれ、見捨てられて惱んでゐる存在、猜疑と復讐心そのもののような女、美しく魅力的な野獸、「馬鹿な動物」、でなければ、人形のように可憐な「純眞無垢」の少女にすぎなかつた。しかし、十九世紀の終期から、今世紀の初頭にかけての生活の實践は、新しい心理的感覺、新しい意志、新しい感情をもつた「第五の型」の女性を鍛えあげた。

「第五の型」の女性は、どこにゐるか？――彼女は機械の騒音と共に工場の中にゐる。事務室の椅子の上にゐる。電信機をたゝいてゐる。カウンターの把手をまわしてゐる。研究室で試驗管を握つてゐる。病院で解剖刀をとつてゐる。旅宿の一室で政治演説の原稿を作つてゐる。苛酷な生活との不斷の闘爭の中で、溌溂たる精神と鋭い創造力に滿ちた頭腦をもつて、敢て科學と藝術の殿堂の中にも侵入し、男子と異らぬ活溌な足音も高らかに、大都市の舗道の上を群れ歩いてゐる「第五の型」の女性は、もう、夫の影、夫の附錄、夫の装飾品としての「奥様」ではない。それは人格としての女だ。獨自の内的世界をもち、それ自體として一個の價値を持つてゐる人間だ。自己を主張する個性だ。彼女の性を縛る錆びた鎖を粉碎する女だ――獨立の婦人、獨身の婦人、獨自の職業をもつた婦人だ。

過去の女性に比較して、彼女達の最も著しい特徴は、感情の統制であらう。現在の社會的諸關係は、家庭の外で何等か

の勞働に從事するすべての婦人に、高度の内的な自己訓練、感情に打ち克つための强力な意志を要求する。過去の婦人にとつて美點であつた「潤澤豐富な感情」は、今日の勞働婦人にとつては缺點以外の何物でもない。彼女達は、いはゞ「男のやうに」理性的であり意志的だ。

この型の女性は、一言でいへば、近代の大資本主義的經濟制度が生み出した娘達である。黑煙をふきあげる工場、そびえ立つビルディング、そのたゞ中から彼女達は生れて來た。日毎に新しい資本主義的發展の作用が、婦人の筋肉及び頭腦勞働を一般化し始めた時――勞働及び職業生活への參加は、常規を逸した、事物の自然的秩序を破壞するものだと考へられてゐた。今日に於ては、勞働婦人の數は男子のそれを凌駕し兼ねない勢ひだ。數百萬を超ゆる婦人勞働者が今日の諸文明國には存在してゐる。統計によれば、ヨーロッパ及びアメリアの勞働婦人のみでも六千萬を越えてゐる。歴史がかつて見ざる勞働婦人軍の大進軍！そしてこの大軍の中の、少くとも五〇パーセントは、獨立、獨身の婦人、即ち生存鬪爭に於て、全く自己の力のみに賴る。舊來の婦人達のやうに「扶養者」達の上衣の裾にぶらさがらうとしてもさがり得ない獨立人である。

この歴史がかつて見ない新しい生活の中から、歴史がかつて知らない新しい心理、新しい感情、新しい道德が生れ出るのは、當然以上の當然でないか。新しい生活條件に適應しつゝ、孤獨な鬪爭を戰ひ續ける彼女達にとつては、祖母達が與へてくれた尨大な道德律は、重荷であり邪魔である。數世紀の長きにわたつて敎へこまれた「婦德」、即ち受動性、無個性、溫順、優雅は無益であるばかりでなく、有害だ。苛酷な現實は、彼女達に、それと全く異つた性質――能動性、自己主張、決斷、大膽、これまでは男子のみの特徵であり特權であると見做されてゐたあらゆる淘汰によつて武裝することを要求する。さうでない限り、彼女達は、新しい生活、働く者の陣列の中で、劣敗者として淘汰されざるを得ないのだ。さうしない限り、彼女達は、再び合法的或は非合法的賣淫――結婚が娼婦業――の濁流に押流されてしまふのだ。かくて新しい生活的必然の鐵槌は、「自然淘汰」によつて、全く新しい婦人の型を鍛へあげる。

かゝる型かゝる婦人の出現を前提とすれば、私の友人を混亂させた、コロンタイの「奇嬌」な戀愛觀も、極めて容易に理解出來るであらう。それは働く者の戀愛觀――プロレタリアートの戀愛觀である

もちろん、ローマは一日にしてならない。現實の勞働婦人が、現實の職業婦人が、この新しい型にまで自分を鍛えあげるためには、長い悲劇的な戰ひがある。

「長い世紀の力は、新しい自由な婦人の上にすら、なほ重くのしかゝつてゐる。遺傳的な感情が新しい經驗を中斷する。すでに死滅した舊概念が鋭い爪で、自由に向つて突進する婦人の心をつかみとめる。古きものと新しきものとが、彼女の心の中で永遠の敵意をもつて相爭ふ。だから現代の新しい女性は、二つの戰線に於て戰はねばならぬ。――外的世界との戰ひと同時に、彼女の內心深く座をしめてゐる曾祖母傳來の性向との戰ひ!」

だが――「彼女達は歩き續ける。人生の叢林をおしわけ、滿身の熱情をもつて押し進んで行く。彼女達の胸と手は、荊の枝にひき裂かれる。鋭い石角に足は血だらけになる。足跡には眞赤な血がたまつてゐる。しかし立ちどまるものは一人もない。厚い通られさうもない叢林は幾度となく新しい行手をさへぎる。しかし通路は次第に廣さを增す。中途で意氣沮喪したもの、力を失つたもの、次第に遠ざかり行く過去を徒らにふりかへるもの――これ等の人々は不幸である! 彼女達は前へ前へとつき進んで行く人々の密集した大群によつて道の外につき出される。――そして、この疲れ果てた人々は、首をうなだれて新しい道のほとりをさまよひ、過去の奴隷生活の灰色の城をはるかにふりかへる……」(「新しい婦人」二一頁)

現代の婦人は――自らの能力によつて勞働しつゝある婦人は――すでに、戀愛の分野に於てもまた、男子によつて演ぜられる悲劇または喜劇の單なるわき役であることを止めた。今や彼女は、彼女自ら演じなければならぬ新しい精神悲劇の勇敢な主人公である。(終)

新日本畫への發足

長原止水

一

我々自身を始め周圍の風物悉く時々刻々變化しつゝいつの間にやら時代は推移し、又一方所變れば品變る、凡そ時間の經過に連れる變動と空間的位置や方角の一樣でなくなる有樣は、昔から物變り星移ると美事に云現はされて、面白くもあり、亦びつくりもさせられる。

四季折々の花を見ても、其時節期節に從つて咲き出す自然の性が具はつてゐる、其氣を感ずる植物本能に至つては全く驚歎すべき神秘である。けれども現代は、春の花を寒中に咲かせて賞玩したり、果物や野菜も多くは早生りが賞味される。所謂溫室咲きの花や速成栽培の野菜の方が貴ばれて自然の時節に成熟したものは閑却されるやうな傾きがある。人智の進歩に伴ふて、肥料や、栽培法や、害蟲驅除や、その他の進歩し改善されるに應じて、自然の性を利用して、不自然の事をなさしむる事が出來る。併し一見不自然の事も自然の性に應じて、これを利用したのである以上、一概に不自然とも云ひ去れない。畢竟自然と不自然との二概念の區別は甚だ困難でなければならない。

かやうな不自然なる自然が普通の事になつてゐる現代には、都會育ちの子供等には茄子や胡瓜は寒中に出來るものやら春だか夏だか知らぬ者さへ多くある。農民の哲人二宮尊德は或る夏、早生の茄子を喰つてその味うらなりものゝやうであるのに頭を傾け、その年饑饉のあるべき事を豫感したと云ふが、そんな對自然的の、土に即した原始感覺や本能的直覺力は漸次現代文化人の能力から消滅しつゝあると云つて差閊へない。昔は時ならざるは食はずと云つて、それが養生訓の一となつてゐたが、

現代科學の力に依つて作られた速成栽培物や、罐詰物は極めて合理的であるから、時ならずとも喰つて必ずしも不養生ではたいであらう、從つて多少とも自然の風趣風味は忘れられ、知らず識らずの間に總てが人爲的となりつゝあるのが現代文化の特徴であらう。それが良い事であるか惡い事であるかは別問題として、とにかくさうなつて來たのが近代の風潮である。そこに於てか『自然に還れ』（ルソー）とか『土に還れ』（フリエ）とか云ふ叫びも西洋の方から――元來反自然生活法の發祥地である西洋の方から――聞えて來るやうになつたのも、既に久しい事である。併し人間もまた大自然の一部分であつて見れば、かう云ふ人爲的傾向もまた大天然の力であり、意志でないとは云へまい。それが人間にとつて果して幸福をのみ意味するかどうかは姑く問はぬとして……。

二

一方さう云ふ風に、時代の進歩に連れて我々の心持が、よく云へば複雑となり、理智的となり、精妙となり、惡く云へば散文的となり、平板的となりつゝあるに對し、他方に於て『所變れば品變る』といふ事がなくなりつゝある。――地方色だの、郷土色だの、國民性だの、民族性だのと云ふものが漸次に薄らぎ、世界主義、インタナショナリズム、コスモポリタニズム、などの精神が勢力を得るやうになる。

これ等の事も、さきに述べた、自然主義から人爲主義に轉じたと同様の理で、必然の事であつて、多少の弊害はあつたにもせよ、大天然の力であると見做さざるを得ない。その原因の第一は交通通信の發達であり、次に政事の中央集權化、都市の發達、教育の普及などを擧げる事が出來よう。

地方色、郷土色、お國自慢、愛國心、國民性、固より何れも必要であり結構であるが、それが高じて來ると排他的となり、偏狹となり、自主的となる。

日本は島國で大平原もなければ大川もないが到る所に火山があつて、溫泉があつて、土地は自然に狹く區劃され、海陸の出入は多く、四時の移り變りも良く、人の住むにも繁殖にもまことに都合よく出來てゐる國柄ではあるが、開闢以來火山の大爆發や、大地震や海嘯は殆んど今日まで引續きであるかのやうで、其間に生出たあめのます人等は、いつともなく神經過敏に、ピリ〳〵コセ〳〵するやうに環境がしからしめたのであらう。併しむかしから支那人にも褒められたやうに土壤沃饒風俗好とあつて、至つて正直で勇氣があつて、活潑である。又自己に優つたものに接觸した場合は己を空しうして之を受け入れ師

事し包容する美德を具へてゐる。從つて模倣術は頗る發達してゐる。これ等の特性はすべて環境の自然に養成されて發達したので固より一朝一夕のものであらう筈はない。

むかし推古の朝、隣國の文化に接觸し初めて隋唐と親密に交際するやうになり、双方から使が往來した時、日本からは唐一代に十二度も遣唐使が往つて居る。交通の不便な時代に、隋唐の文化を敬迎して之を我模範に取入れやうとするには困難の程は思ひやられる。――遣唐使の船は必ず四艘と極つて居たので歌では『四ツの船』とよまれてゐる。――造船術の幼稚な航海にも危險多き時代に此使を命ぜられた人々は殆んど戰場へ向ふと同じやうな考で、再び日本に歸れぬものと思ひ父母妻子に暇乞をしたのであるが、朝廷でも遣唐使を派遣する場合は伊勢大神宮へ使を立てる、畿内の神社に幣帛を供へ佛寺に御祈禱をして無事に歸ることを祈る次第である。――けれども此一行が無事に歸つて來ない事は度々であつた。――出發まぎはに大使の船と副使の船とを取換へる事から副使は不滿で遂に行かなくなつた事などもある。――とても今日の人の歐州視察だの留學だのと比べては想像も出來ない。元正天皇の御代が前後を通じて一ばん多くの留學生があつた。此時大使に隨行した學問僧と留學生と合せて五百五十人一時に出かけたなどは、今と比べてもなか／＼盛なことと云はねばなるまい、その頃の船一艘には大低百四五十人乘れるものであつたらしい。それにしても此多勢が一時の出發には準備萬端容易でなかつたらうと想像される。それらの學問僧や留學生は今日のやうに、一年や二年で言葉もわからぬ中に歸つてくるハイカラ人とは異つて、十年廿年はおろか三十三年もの留學生で、中には當時十六才であつた安倍仲麿の如き、其後十七年めに多治比廣成が往つた時にも歸らうとはせず大に唐人らしく成りすまして、名まで朝衡と改め、王維、包佶、趙驊、などを詩文の友とし、玄宗皇帝のお氣に入りとなつて、太子儀王の友として仕官してゐたが、其後又十五年め、我孝謙天皇の天平勝寶二年遣唐使で往つた藤原淸河と一所に歸るつもりで出帆したが、はからず海上大暴風に遭ひ安南に漂着し、後又唐に留まることになつた。けれども一時は溺死したものと風聞された時、大詩人李太白は詩を作つて

日本晁卿辭帝都　片帆百里繞蓬壺
明月不歸沈碧海　白雲秋色滿蒼梧

と之を哭してゐる。其他王維の、秘書晁監が日本へ歸るを送る詩も皆よく人に知られてゐる。仲麿の朝衡は其後も彼地に在つて、玄宗、肅宗、代宗の三代の帝王に仕へて、北海郡開國公で七十歳で死んだ時代宗は潞州大都督を贈官したほどであつた。彼

は又此五十餘年間の在唐中に日本の爲に盡した功勞もあつたと見え、後に支那で死んだ者八人と共に仲麿も正二位を贈られてゐる。又學問僧の中にも彼地で死んだものもあらう。けれども何分此多くの留學生は立派に修業して幸に無事歸朝した者も亦多いので、當時の思想上から政治文學技藝風俗有ゆる方面に貢獻した莫大な跡形は今も猶ほ奈良地方に現存してゐるだけでも燦然として世界的に誇るに足る。

倭魂の持主の包容力（リセプチビリチー）と、適應力（アダプタビリチー）とは、まことに驚くべきものである。

維新當時の有樣も亦千年のむかしと同樣であつた。久しい鎖國の夢から覺めて一時に諸外國を見渡せば、其制度文物盡く己れに優るものばかりに見えたので、玆に亦己を空しうするの美德を現はして西歐の文物一切を取入れることになつたのであらうが、これで倭魂が二度びつくりさせられたのであらう。己を空しうするの極、殘念ながら己れの良い所まで空しうしかけはせぬかとも思はれる點も多くある。精神上の事はさつぱりわからぬが、物質的には、何でも良い物、立派なもの、優秀なもの、上等なものを、舶來と稱し、舶來と上等とは可なり密接な關係がある。又これと同樣の意味に昔より「カラ」といふ言葉がある、何でもカラは良いと思ひ込ませられたのは千餘年にもなるであらう。唐錦（カラニシキ）、唐金（カラカネ）、唐樣（カラヤウ）、其他氣を付ければいくらもありさうである。お寺で今もよく見かける地獄の掛物がある。閻魔大王を初め審判官や書記らしい者は皆唐冠を戴き唐服を纏ふてゐるが、亡者は皆日本服で内には緋の袴を着けた女官なども見えるが、卑下病もこゝまで來ては救濟し難い氣がする。併し現代にはこんな古ぼけたものに感化される小供もないが、日本人のかゝり易い外國崇拜病は實に膏肓に入つてゐる、原因がわかるやうでもある。これに比べると支那人は遙に個性が强烈で、なか〳〵外國ものに浮かされない所は面白いやうである。支那も佛敎は印度より傳來したのだから其佛像には印度風の佛がありさうなものであるのに係はらず、佛像の面相には其時代の特徵が支那風に現はれてゐて更に自國以外に追隨の跡がない。之れと異つて日本の佛像には支那の影響を受けたことが認められると亡友大村西崖君は云つたことがある。

日本人は國土のせいで火山の爆發や突然の大地震のやうな自然の大威力に感化されてか、何事に對しても度胸があつて更にへこたれない勇氣はあるが、どうもちとあつさり過ぎるやうな所が多く、執着力も薄いやうである。殊によると其れが長所かもしれぬ。此あつさりとした所が我々の衣、食、住、日常生活凡ての方面によく現はれてゐることは實に不思議だ。着物の如

き今日は大に變化したやうでも家庭では釦は『ボタン』を掛けはずゝものよりは帶や紐で身體に纏ふ方を多く用ひられてゐる。便利は百も承知しながら洋服ばかりにはとても成り難い氣分が何人にもある。食物とても亦同樣むかしながらの淡白好みで油氣の少いことは事實である。モシ之を支那人や歐洲人に比べる時は彼等油氣基本の食物とは全然比較は出來さうもない。只面白い事實には、日本人ほど雜食を好み又雜食に堪へ得る人種はめつたになからう。其證據には世界中到る所の食物を喜び喰つて更に腹工合を害はぬのみでなく、直ちに其食物を好む者になるのである。洋食でも支那食でも印度食でも、すこしも嫌はぬ點は大に注意すべきものである、住に就ても云いたい事は澤山あるがまづ止めておく。

日本人は又世界無比の潔癖人種である。一面には古い事（精神的？）を尊重しながらそれを一種の不淨（物質的？）若しくは穢れと思つてゐるやうな所がある、神道などに明かに此特徵が生きてゐる。伊勢大廟の御造營など即ちそれである。二十年め毎に御遷座改築されつゝ大古より今日までに及んでゐる。確に我國民性の表現の如く思はれてまことに感じがよい。鐵筋コンクリートや、石や、煉瓦で造らねばならぬ時代が來るとは、思はれぬ所に實に、何事がおはしますかはしらぬ有難さがある。むかしは神殿の古材は皆火をかけて燒拂ふのであつたさうだ。まことに一切の穢れは水火に附して淨化するとの信念から、國中に（ナリイデム　アメノ　マスヒトラガ）過ち犯したどんな罪惡でも『祓ひ給ひ淸めたまふ』で氣がすがすがしくなるやうな心持は何人の心中にも多少あるやうだ。

從つて日本人古來の趣味は極めて單純淸楚で、其愛する所は、花ならば櫻のやうな咲くかと見ればすぐ潔く散つてしもふやうなもの、又富士山のやうな崇高なる單純を尊重する。其他刀劍を愛する精神なども至極當然らしく思はれる。其上にも既に前に云つたやうな、適應性や、同化力や、包容力が强いのだから、あまり七面倒なことはまづそのまゝ受容れて置いて、漸次に都合よく自分化してしまふ事に妙を得てゐる。千餘年のむかし支那文字を借用し始めて間もない時代に、萬葉假名を作つたなどは實に奇拔で自由である。が、一方からは非常に、非理論的である。

萬葉假名でもまだ面倒臭くなると、又其文字のあちらを取り、こちらを、ひつぱづしたり、倒つたり、もみほぐしたりして終に片假名や平假名と云つたやうなものを作り出した。其手際は、今更不便だの、形がまづいのと云はれた義理ではない。又漢文の如きも返り點を附けて日本流に讀んでしまふのだか

ら、まことに大膽極まる所がある。維新の當時、歐文にも返り點を付けようとしたと云ふ話だが、こればかりは成効しなかつた。

このやうに外國文化を自家薬籠中に收める事に妙を得てゐる日本人であり、またこれまでは取入れねばならぬ事情の許に過ぎ來つた我國も、今より後は何事も外國文化の模倣ばかりでなくやつて行ける域に達したらしく思はれる。

フランスの美學者テーヌは、世に『精神的氣溫』なるものがあつて、それが地方々々民族々々の藝術を生むと云ふやうな意味の事を評判の『藝術哲學』の中で述べてゐる。テーヌは非常に緻密な頭で、科學的な論述で此事を闡明してゐるが、併しそれと似た事は既に東洋の畫論中にはいくらも論ぜられてゐる。手近で最も廣く讀まれてゐる『芥舟學畫編』の卷頭にも『天地之氣、各以方殊、而人亦因之』と云ふ書出しで、揚子江を中心として南北兩畫風の特徴が如何にその自然の『氣』に負うてゐるかゞ明白に論ぜられてゐる。

我々は自然を或る程度まで征服する事は出來るかも知れないが、それを遂に脱却する事はとても出來るものでない。自然を脱却した時、自然に降服したといふ兩刀斷法(ヂレンマ)に陷るのである。人間は畢竟するに大天然の一部分である事は云ふまでもない。

三

約言すれば、現代は非常に人爲主義、理智主義の時代であると共に、世界文化の統一融合となりつゝあるので、國民性と云つたやうなものゝ薄らぎ行く時代である事はまことに明白である。斯様な時代に生れ合せて藝術に携つてゐる我々には、さま〴〵な惱みや問題がある。また力あるものには骨折り甲斐もあると申すものであらう。何となれば、藝術は一方、人爲や、理智を嫌ふものであると共に、他方個性や國民性を尊重するものだからである。

藝術は現實に對する人間の解釋であり、感覺であり、自然と人間との間に生れた夢の子である。從つてそれは必然的に個性や國民性や地方色を豫想する。けれども學問は反對に現實に對する說明であり、理解であつて、自然と人間との間に締結せられた法律であり、條約であつて、それは必然的に個性や民族性や地方色を拒否する。夢を嫌ふのである。

夢を蔑み理を尙び、個性を抑け一般化を尊重する現代に於いて藝術の事に携る者はまた多難なるかなである。

西洋は理智の國であり、東洋は感情の世界であると云はれる。西洋美術は寫實を重んじ東洋美術は氣韻を尙ぶと云はれ

る。何れも大體に於て眞實であらう。佐久間象山は『東洋道德、西洋藝術、精疎不遺、表裏兼該』と云つたが、こゝに云ふ藝術とは學藝技術の事であつて、專ら西洋實證的科學の事を意味し、こゝに云ふ道德とは廣い意味での人道、即ち氣韻、精神、氣魄といふやうな意味であるやうである。象山は東西文明の最初の調和者の一人として夙にかゝる方面にまで着眼してゐたのは流石がに雄偉であると云はねばならぬ。

支那には昔から高尚な畫論があるやうだが、如何ほどの名論でも畫をかく上にはあんまり役にも立たず、又そんなものが眼前ちら付くやうでは、とても自分には畫はかけなくなるので、敬して遠ざけ、さつぱり氣に留めた事もない。けれども支那は驚くべき國で八九百年前既に現代人が云ひさうな言を云つてゐる。宋の郭思が『術畫』と『藝畫』とを區別した者があつた事を記してゐる。その術畫とはどんなものかと思へば、寫形を尊び『眩惑取レ功、沽レ名亂レ藝者』のかく畫でほんとうの藝畫とは全くそれと一所には出來ないさうだ。其頃から概して『取神』『約形』が東洋畫の一般理想であつたかと思はれる。そこで『水墨最上』の論も自ら出て來るわけである。

けれどもまだもつと昔に溯ると『爾雅』に『畫ハ形也、寫レ形貴レ似』などゝあるので後には何とか云ふ人は畫を觀るの術は唯眞に通つてゐるか否かを見定めるばかりでよくわかる、でよく眞に通つたのが最上で『絕也』眞に多く似てゐるのが『上也』などゝ云つてゐる。古は何れの國でも畫は大抵こんなものと見て居たのであらう。アリストテレースの詩學に『Mimesis模寫』——今の言葉で『寫實』と云ふやうな意味の事が其主題となつてゐる。(尤も今日の寫實よりはも少し精神的であるが——)いやはや文化の進むに連れて我々には迷惑千萬な畫論やら審美學やら、とてもむつかしい事になつた。

西洋でも、寫形よりも精神に重きを置いた繪は無論澤山ある。フランヂエリコは齋戒沐浴の後に宗教畫を描いたとのこと。エルグレコの作は寫形は不健全であるが、その精神は崇高優雅である。近代の寫實派や感覺派以後のもの、後期印象派、未來派、表現派など皆さま〴〵な意味で形や色以外のものを尊重してゐるものであらう。

併し東洋の寫形と西洋の寫實とは、その傳統に於て非常に相違がある。東洋の氣韻と西洋の理想(イデア)との間には大なる徑庭があるのと同樣である。

四

我々現代の有樣に就ては一通り述べたつもりだが、こんな時代の情勢を理解して見れば、こゝに適應の新日本畫が自然に出

來ねばならぬやうである。

ここで今普通用ひられる言葉で只漠然と新日本畫と云つても、その意義は甚だ曖昧である。これには、先づ材料、作者、環境、精神、などの各方面から一考する必要がある。

畫は描く材料に依つて大いに違つて見える。油繪具を使用して、カンバスに東洋畫を模寫して見るに、大分西洋くさいものになつて來る、また唐紙に毛筆でデッサンをかけば、東洋畫のやうな感じがしてくる。併し材料だけを變へた所で、違つた傳統や精神の作畫とする事は、さう意味のある事ではないやうに思はれる。今の帝展其他に見られる日本畫中には、油繪具を用ゐてすれば遙に容易に遙に効果の上りさうに見える繪が年々増加しつゝある。これは只日本畫の材料を用ゐて描いたと云ふだけの所に興味と意味とを置いてゐるかのやうに思はれる。又油繪中にもその反對のものが屢々見られる。けれども今日では油繪で東洋畫の氣分を自由に現はしたものが年々多くなりつゝある。これは勿論時代の然らしめるものである。たゞ使用する材料だけで日本繪と洋畫とを區別するのは、あまりに他愛のなさすぎるやうである。併し双方から自然に混和して行つて、そこに新しい技巧なり手法なりを發見し得る筈である。材料は何れにもせよ、日本人が描けば日本畫であると云ふ廣い見地と、日本舊來の材料を以てしなければ日本畫でないとする狹い見地とには今でも時々爭ひがあるやうだが、我々にはこの兩見地はさう重大な問題とは思はれない。要するに材料はこれを自由に支配し驅使し得れば、よいので、自分に適しない材料に執する必要はないし、また材料とてもさまぐ\な工夫や時代條件に依つて今日まで變化し來つたやうに今後も益々變移し行く事は當然である。

作家の民族別、國別の方面から一考して見るも面白いやうであるが、西洋人で東洋畫を描いた人は支那では利瑪竇、郎世寧や、其他日本でも維新頃に來て居たワグマン、などがある。郎世寧や、ワグマンの繪は見た事もあるが、郎氏のは支那風、ワ氏のは日本風の氣分がよく現はれてゐる。外國の人でも日本に在留すれば自然に、日本の『天地之氣』が『精神的氣溫』が自らそこに働いてゐる事は否むことが出來ない、また其一例には日本人で外國に留學して勉強した畫家で彼地に在て描いた畫がよく證明してゐることは事實である。併し我々は只それだけでは安心は出來ぬ。やはりもつと日本人らしき希望も出てくる。

それから又環境の問題だが、日本人であれば、日本に居て描かうと、西洋で描かうと、日本畫には相違なからう。例へば藤田氏がフランスで日本畫風の勝つた油繪を描いても、あれは日本畫でないとは云はれない。否、立派に日本畫であらう。日本畫の粹を巧みに油繪の材料で表現するならば單なる、エキゾチシズムとしても侮り難いやうに思はれる。併し能ふべくは、日

本畫はやはり（ちと氣の狹い者へかもしれぬが）日本に居て描いた方がいゝやうに思ふ。勿論多少の例外もあるが。何となれば、私はやはり藝術は個人の力ばかりでなく『天地之氣』がそこに這入るものだと信じたいからである。『胡馬嘶北風、越鳥巣南枝』のが天然である。自然をして自然たらしめた狀態が藝術發生には好ましい條件ではなからうか。廣い意味での郷土主義、新らしい意味での民族運動でありたい。たゞ個人の技巧の力、才氣の力、理智の力（如何に大きいにもせよ）ばかりに依つてゐては一種のデカタンに陷る傾向がある。日本の多くの若いエクゾチスト等に就いても、反對の意味で、右の斷定は適用されるやうに思ふ。

それから内容となるべき精神だが、それが前に述べたやうに現代は甚だ影の薄いものと、なりつゝある。けれども日本の『天地之氣』は變らない。民族の傳統は傳統である。たゞそこに西洋の絢爛な技巧と理智的の學問とが輸入せられて居るだけである。さうしてそこに新しい傳統が生じようとしつゝあるだけである。我々はこんな時代に生れ合せて多年洋畫を研究し來つたが、友人先輩等と共に『新日本畫協會』なるものを、ちとご大さうだが創立する事に偶然話が定まつたのである。趣味や傾向や信條には各々共通點が多いが、個性には固より相違する點も少くないであらう。

から云ふ藝術上の新しい日本主義、東洋意識に眼覺めたもの眼覺めようとしてゐるものは我々ばかりではなく、既に他にも二三團體がある。其或者は舊來の日本畫の技巧を修得し來り、狩野末期の傳統を繼承してゐるかと思はれる。さうしてそこに新しい未來派や印象派や、キウビズムなどの長所をも攝取し自家藥籠中に收めてゐるかと思はれる。けれども我々は洋畫の技巧を修め來つたものであるが、そこに新に日本畫の材料を採つて、我等の內なる新日本氣分を表現する事が出來たならばと思ふのである。

年から年中展覽會食傷時代に又かと思はれるのも、いさゝか心なき仕業のやうでもあるが、右長々と述べたやうな次第で、我々の希望もまた大天然の意志の一つの發現であるかもしれない。そこには各々の個性に應じてどんなものが生じてくるか、また受胎ばかりで、生れるには間のあることやら、私の斷言し得るところではない。徒らに聲ばかり大にしたとて急には何も出ぬかも知れない。世間には泰山鳴動して鼠一匹も飛び出ないためしも珍らしくはない。その時はまた我々よりもつと能力ある人々が出て來て、我々を後へに摘着たらしめて吳れば、それも亦天然である。自分等自ら揣らずこんな事をくわだてたりするのは時候のかげんで氣がくるつたのかとも、又たゞ無邪氣な熱心からであるかとでも――見る人の心々にお任せしておく。（完）

大百貨店と自動車の問題

猪間驥一

小賣商が大百貨店の發展に壓迫されて立行ない。どうしたらいゝか。之は最近の流行問題になつてゐる。鐵道が自動車の發達に壓迫されて地位が危くなつて來てる。どうしたらいゝか。之は一昨年來地方官會議を賑す問題で、新聞の論說欄にも幾度か姿を現はす題目になつてゐる。

世相世態が變れば同方面の事業でも、經濟の形態、應用される技術が變るのは何も不思議は無く、其の變り目に利害關係者が騷ぎ問題が起るのは、何も此の二つの事業に限りやしない。と云へばそれ迄だが、兎も角百貨店と自動車とはモダーンそのものを具體化したと云ふ形で目前に現はれて來、我々の正しい財嚢と動かされ易い欲望に著しい影響を與へる對象たる點に、各々格別興味を惹くものが無いとは云へない。

而も一方に百貨店對小賣商の問題を置き、他方に自動車對鐵道の問題を置いて見ると、奇妙な對照に氣附くであらう。百貨店が小賣商を壓迫するは、深山の牝を引き附ける膃肭臍が小魚を貪り食ふ如く、乘合自動車が鐵道の利益に食ひ込んで行くのは、精悍な鯱が鯨を攻擊するが如く、大が小を滅すのと小が大をやつゝけるのと、まるで逆の關係が眼に映る。經營上の言葉を以てすれば、一は大資本が小資本を壓するのであり、他は小資本が却つて大資本を壓するのである。

資本主義の世の中では、大資本萬能であるかに思はれるが、道の場合も斯樣にあるかに見える。果して小が大に勝つか。以下之を若干の統計と事實に就て考察して見ようと思ふ。

（一）　大百貨店對小賣商

三越の營業成績

貸借對照表

資産の部	大正十二年八月	大正十三年二月	大正十五年二月	昭和二年二月	昭和三年二月
未拂込株金	二、〇〇〇	—	六、〇〇〇	六、〇〇〇	六、〇〇〇
商品	七、〇五五	六、一七七	六、二三八	六、二二四	五、七三六
賣掛代金	二、一一四	一、三六二	一、一五四	一、四七三	一、四八〇
銀行預金	一四八	二四七	一六六	—	一、七〇三
雜預ケ金	二、八九九	三四三	三八八	三六	三六
有價證券	三一	三三	三五	三四	一五九
土地建物	一〇、四〇一	一〇、〇〇三	一〇、七二六	一一、二五一	一八、六〇七
什器	五二三	二〇、	四五三	五二三	七七五
假支出金	一、二四八	二、〇四一	四、四九八	七、四三五	九八四
金銀	六六六	—	六七二	一二四	二三五
合計	二七、〇六五	二〇、三一三	四〇、五二七	三三、二〇六	三五、七〇三

負債の部	大正十二年八月	大正十三年二月	大正十五年二月	昭和二年二月	昭和三年二月
株金	一二、〇〇〇	七、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇
法定準備積立金	一、二七四	二	二二	三五六	五一九
其他積立金	一、九〇七	—	—	—	—
買掛代金	六五七	六三六	五四六	四七四	五三〇
支拂手形	一、六七九	二、三五二	一、八二〇	二、七五五	二、一二九
社債	八三〇	六六〇	六、〇〇〇	四、一〇七	八、〇〇〇
借入金	一、五〇〇	三、五〇〇	—	三、五〇〇	—
雜預リ金	九六四	八八八	八二九	六、三一五	七、〇五三
銀行當座	—	八五	—	六七三	三五、七〇三
商品券	三、二八八	二、八五八	二、七八〇	—	—
身許保證金	一、八三〇	一、六五九	一、九〇三	—	—
未拂配當金	一	一	二	四	九
前期繰越	九五七	—	一〇一	一九六	五四九
當期純益	一、五四四	七五三	一、三三二	一、五九七	一、九一五
合計	二七、〇六五	二〇、三一三	四〇、五二七	三三、二〇六	三五、七〇三

損益計算

	大正十二年上期	大正十二年下期	大正十四年下期	昭和元年下期	昭和二年下期
收入 賣買益	五、五四三	四、六二五	五、六三三	六、三〇一	七、一三[illegible]
合計	五、五四三	四、六二五	五、六三三	六、三〇一	七、一三[illegible]
支出 雜損失	一〇二	三三一	三[illegible]	三七[illegible]	三二[illegible]
營業費	三、八九八	三、五四一	三、九[illegible]	四、三[illegible]	四、九〇[illegible]
合計	四、〇〇〇	三、八七二	四、二[illegible]	四、七〇四	五、二二[illegible]
純益	一、五四四	七五三	一、三三一	一、五九七	一、九一五

利益分配

前期繰越金	九五七	—	一〇一	一九六	五四九
當期純益	一、五四四	七五三	一、三三二	一、五九七	一、九一五
合計	二、五〇一	七五三	一、四三三	一、七九四	二、四六四
法定準備積立金	七八	三八	六七	八〇	一〇〇
資産銷却	一七三	一一四	三八六	三八九	五六六
株主配當金	七五〇(一五%)	四二〇(六%)	五八五(一三%)	六七五(一五%)	六七五(一五%)
臨時株主配當	二五〇(五%)	—	—	—	—
賞與	一九七	七五	一三三	一六〇	二四八
退職手當基金	七〇	四〇	七〇	七〇	七〇
三越店員愛護會	一〇	—	七	七	一〇
後期繰越金	九七四	三一	一三五	四一三	七九五

震災の打撃に打續く財界の大恐慌、物價は下落し金融は梗塞する、小賣商の手許は益々詰つて來るのに品物の賣行は何時迄經つても思はしくない、不景氣は日一日と深刻化して行く。さうした中で、大百貨店の景氣だけは一通りではないやうだ。三越松屋が吞吐する人數を一寸眼分量で計つても、震災前の比ではない。事實、三越の最近の營業報告は、小賣商の青息吐息を尻目にかけて、次の樣に述べてゐる。

「本期は一般の商況依然不振なりしも財界は比較的平穩に終始し年末接近に隨ひ諒闇明氣構へにて逐次幾分人氣引立ちたるやの感あり、隨て當店の營業上最も大切なる十二月の成績も頗る良好なりしのみならず本年に入りて一、二兩月の賣行も先づ順當にて其結果茲に報告するが如き成績を擧げ得たるは時節柄慶幸とする所なり。」

抑々斯うした百貨店の好景氣が何に職由するか。三越の營業報告によつて、震災前以來の貸借對照表と損益計算の連期比較を一つ掲げて見よう。（前頁表參照）

會社の營業報告の分析解剖などは容易に出來るものではない。殊に生馬の目を拔く三越の重役諸氏の作られる報告から、經營の實狀を門外漢の貧書生が窺はうたつて窺へるものでない事は、判り切つた話、それらの點はその道に老練なる讀者自ら右の數字によつて御判斷を願ふ次第だが、暫く此の報告が全然正しいものと前提して、二三の明瞭な事實を指摘すると、流石に眼に着くのは震災直後の打撃の酷さである。一千二百萬圓拂込一千萬圓の資本を七百萬圓に減資し、積立金を悉く潰し、僅か一萬圓の店員愛護會交付金にさへも削減を加へざるを得なかつた。後八百萬圓增資二百萬圓拂込徴集と八百萬圓に上る社債借入を以て、今日見る三越本店の殿堂を復興し事業の擴張を行つた譯である。

拂込資本に對する純益の年率はと見ると、

12年上半期	30.8%
12年下半期	21.4%
13年上半期	30.8%
13年下半期	27.0%
14年上半期	21.0%
14年下半期	29.6%
1年上半期	29.8%
1年下半期	35.5%
2年上半期	36.8%
2年下半期	42.5%

と云ふ有樣で、震災後一張一弛があつたが、十四年上半期以來は旭日昇天の勢で遞增を示し、震災前を遙かに拔く繁榮ぶりを來してゐるのである。

此の繁榮が何に由來するかを思ふ時、注目すべきは手持商品の價額が、震災前に比し、最近著しく減少し漸減の傾向をさへ見んとする事である。無論物價の漸落を考へなければならないが、大正十二年八月物價指數二五二、昭和三年二月同二二四の下落率は一割一分に過ぎないのに、同期間三越の手持商品高は一

割八分六厘の減少である。若し假に震災前の商品價額に大正九年の物價大暴落による損失の濟し崩しの損傾が全然ないとするならば、此の減少には、二つの解釋が容れ得る。第一には三越の販賣品が高級品贅澤品から廉價品實用品へと移動しつゝあると見る事、第二には三越の商品廻轉率が著しく增しつゝありと見る事。この二つの解釋は、折々三越を訪れる者には經驗上首肯出來る事で、恐らく二つながら眞實を語るものであらうと思はれる。而して二つの事實が三越の顧客範圍を擴大し、利益率を高め小賣商を脅かす事甚大なるは云ふ迄も無い事である。

三越の利益を多からしめる特權的條件が今一つある。商品券の流通即ち之で、その額は大正十五年八月末には三百二十四萬六千圓あつた。爾後は之を負債の部雜預り金の項目中に隱してしまつたが、最近は增しこそすれ減少してゐる筈はないから、斯うした莫大な金額が無利子で使へるとすれば、實に今日の世に云はうやう無き恩惠と云はねばならない。金融手詰りを嘆く小賣商が逆立をしても得られる利便ではないのである。商品券の外に身許保證預り金も大正十五年八月には二百三萬四千圓に及んでゐる。之には相應の利子を附してゐだらうと門外漢には考へられるが、之だけの金融に對してなら一割の利息をもいやとは云はない商人は山の如くあるに違ひない。

其の他現金賣買による賣掛代金の率の少なき事、賣買益に對する營業費の率の遞減傾向等何れも右營業成績報告の上に歷々指摘する事を得べく、三越繁昌の所以をこゝに見、その反面に於ける小賣商店の不利と傾困とを想像するに足る。

以上私は三越の營業成績を引合ひに出したが、之はもとより三越をのみ論ずる積りではない。百貨店なるものが、經營方策を甚しく誤らざる限り、一般に當然持つべき所の商業上の强味を、數字的に立證したに外ならない。斯の如くに合理的過程を以て巨大な企業が從來の小賣商を壓し來る時は、小賣商自身は死活の問題として、他の人々は夫々自己の利害の見地から、此の問題を論爭の題目とするは、もとより當然の事理である。

百貨店征伐

百貨店對小賣商の問題は、特に中産階級保護の見地から、佛蘭西と獨逸に於て前世紀末今世紀初期にかけて喧しく論ぜられた。この問題の發生と云ふ點から考へると、我國の資本主義の發達が丁度今西歐のその頃の邊をうろついてゐると見られる譯だが、其の際に百貨店に對して投ぜられた種々な非難を、ヱルニツケは獨逸の學者にふさわしく左の如く分類配列してゐる。
(Dr. J. Wernicke, Kapitalismus und Mittelstandspolitik)

第一、百貨店の本質特質原則商略に對する非難
一、其の形態に就て、
a大資本大經營たる事、(大資本を以て殘酷な所業をする)
b總ての商品部門に亘る事、あらゆる季節を利用して賣る事、
二、其の業務原則に就て、
a廣告が人を眩惑する事、
b廣告に僞を云ひ、飾窓に僞を飾り、品物の目方を誤魔化し、粗惡品を以て一般公衆と生產者の趣味を墮落させ、わざと端値段を附けて安價を見せかけ、格安品を以て人を惹附けその損害は他の商品に掛け、而もその格安品を僅かしか置かないで客に割高商品を賣付ける等の不正手段を弄する事、
c薄利多賣、安からう惡からう、浪費奬勵を原則とする事、
d特に或る部門の商品を安くする事、
e現金拂ひにする事、
三、場所を極度に利用し、家賃負擔を引下げる事、
四、火災に罹り易い事、
五、人員を少くし、商品事情に通じない低廉勞働者、殊に婦人を少く使ふ事、
六、經費が無暗に安い事、或は無暗に高いと云ふ人もあり、
七、帳簿上の純益計算を故意に少く見せかける事、
第二、上記諸弊害よりの結果、
一、之によりて小賣商の販路を奪ひ、中產階級の獨立を失はしめ、又其の勞働機會を少くする、
二、中產階級が滅し盡されると合同して價格を高める、
三、百貨店に店舗を貸す者は他に轉貸が出來ないから損する。
四、商品供給者製造者を値切り倒し、利益を害する、
五、勞働賃銀を引下げ勞働者の利益を害する、
六、給料惡く待遇惡くて從事店員の利益を害する、
七、粗惡品を賣り付け、購買慾を刺戟し、婦人を萬引に誘ふ等一般公衆に有害である、
八、都市の財力を薄弱ならしめる、
九、社會主義者を增加せしめて國家を害する、

所變れど百貨店の惡評は變らず、此の分類の中には、日本に於ける聲其の儘なのが多い。けれども其の攻擊する「惡弊」が、今日の人間には一向ピンと來ない。弊害ではない、結構な事だとさへ思はれるものが多い。が兎も角も斯うした事が攻擊理由となり、社會的勢力の背景をも伴つて、色々な百貨店防遏策が講ぜられた。

第一は百貨店の禁止、之は併し云ふべくして行ひ難きこと。事實行はれもしなかつたし日本にもこんな事を考へる人は今はゐまい。

第二は百貨店を免許營業とし、各商品デパートメントを開始經營するに當り、同業者の同意を要すとすること。之は我國に於て久しく懸案だつた百貨店の重要物產同業組合加入問題と軌を一にしてゐる。我國では最近も私が本稿執筆中に問題が解決したが、一九二三年に出たリエルニッケの本(再版)には、獨

逸では疾つくの昔に亡んでしまつた問題だとある。

第三は百貨店特別課税の問題である。之はまだ小賣商組合の方面から聲が揚つたとは聞かないが、東京市が財政窮乏を救ふ財源として調査研究中と云ふ事は折々新聞紙上で見る。市が昨年來設けた臨時財政調査委員會へ愈々提案附議したら、世上相應賛否の論を捲き起すだらうと思はれるが、之を最初に行つたのは佛蘭西である。既に一九四四年、廿四人以上の賣子を有する商店には百法の營業税と賃貸價格廿分の一の家屋税とを課する事とし、當時世界に先んじて勃興して來た百貨店（の前身と云ふべきもの）を壓抑せんとした。其の後何回かの改正を經て一九〇五年の改正では營業税雇人税車馬税家屋税等の五種の税目を結合して、百貨店壓迫策を一層強めた、パリ随一の百貨店ボン・マルシエが此の爲めに仕拂つた税額は賣上の一・四%に達したと云ふ。（ボン・マルシエの賣上高は一八九三年に三千五百萬法、一九一二年に二億二千萬法と傳へられる）又獨逸では各邦之を行つたが、典型的のはプロシヤが一九〇〇年制定した百貨店課税法である。次の四種の商品種目

（一）植民地の原料品其他食料品（二）織物被服寢具等

（三）家具臺所道具等（四）貴金屬品裝身具等

の内二種以上を販賣し、賣上年額四十萬馬克以上の商店に對し、賣上の一%を課した市町村税である。税率は其後數回變更され可なり高率に迄引上げられた樣であるが、一八九一年以來純益課税制度を採つたプロシアの營業課税が百貨店に對してのみ賣上額課税を行つたのは、營業收益税原則の異例であつて、それだけ百貨店に對する壓迫熱が高かつたものと見える。併し斯うした事はなかなか思ふ樣に行かないもので、百貨店として發達しつつあつた商店は、脫税の目的から、前記四種の商品種目中二種以上を兼ねて賣る事をやめ、一種目の專業店となつた。一種目と云つたつて随分多樣の商品を含むし、資本さへあれば、大百貨店と同樣の經營方式を十分に採り得るから、小賣商の救濟とは一向ならず、却つて彼等に對する攻撃が尖鋭化する趣あり、收税額も一九〇一年に三百七萬馬克あつたゞけで翌年は百九十萬馬克に激減し爾後十年間恢復を見なかつたと云ふ有樣であつた。さうして一九一九年に至り革命後の税法改正と共に、他の諸邦の百貨店課税法と共に廢止せられ、一般取引税制度中に吸收されてしまつたのである。

要するに百貨店課税も、佛獨の先蹤の示す所は、百貨店抑壓の目的を達し得なかつた。達し得なかつたればこそ、巴里のボン・マルシエ、伯林のウエルトハイムの盛況を今日我々日本人さへが聞き及ぶ譯である。

併し日本、東京市が此の百貨店課税を行つたらどうなるであらうか、問題が今少し具體化して來たら、小賣商側は痛快がつて大いにやるべしと叫び、百貨店側は之を苦痛として百方課税の不合理を陳辯するであらうが、事は實はさう簡單でない。

第一の問題は百貨店の定義に關する徴税技術上の困難を如何にするかである。三越白木松屋松坂屋が百貨店たるは疑ひなしとしても、西川や伊勢丹はどうするとなると區別は容易でない。プロシア式に商品種目で百貨店と否とを分つとすれば、矢張りプロシア式に百貨店の發達方向が變ずるだけであらう。商工省が百貨店の重要物産同業組合不加入を許した最近の處置に際しては、百貨店を概括的に定義する困難を避け、三越はどう、松屋はどう、と個別的具體的に決する事としたが、斯様な指令を受けた商店に對してのみ課税する、としたら、現定の技術的解決は得られるが、さうしたらば、同業組合不加入に對する永續的特許料と云ふ様な格形になつて、隨分妙なものであらう。

第二に更に重要な問題は税の結局の負擔者は誰かと云ふのである。若し丸善が百貨店と認められて課税されたらば、これは私達貧書生の買ふ本代に影響して來るに違ひない。丸善は仕切り値段を税額だけ低めるやうにと外國の出版元に掛合ふと云ふ面倒な事をしまいし、自己の儲けを殺ぐ事は御免蒙るに違ひないから。けれども三越白木松屋あたりの商品になると、一概には云へないが、今日の競爭狀態で税率も左程高くなければ、賣價の引上げと云ふ事は先づあるまい。從つて一般購買者には影響は無い。それなら百貨店が損するかと云へば、どうして、その様な事はない。品物の仕入れ値段を値切りにかゝつて、税を商品製造元に轉嫁しやうとする。さうでなければ、從業員を減じて少い人數を酷使する様にしたり、或は給料ボーナスに手をつけたりして、税を從業員に轉嫁する。税を轉嫁された製造元は、供給先が三越だけとか、白木だけとか云ふなら、泣寢入りして、問題はお終ひだが、彼が他の小賣商にも卸してるとすれば、問題はまた連續して更に税の轉嫁が行はれる。現在に於てさへ卸元は大百貨店との取引を名譽とし廣告をもして、低廉に供給し、その穴埋めを小賣商への供給品に掛けてゐると云ふが、百貨店税でもかゝれば此の傾向は一層強くならう。百貨店税を小賣商が喜ぶなどとは甚だ近眼的な次第、自繩自縛に陷る危險が實に多いと云はねばならない。

何としても助からないのは小賣商である。百貨店征伐と云ふやうな事は、單なる嫌がらせ以上に出る事ではなかなか以てないのである。

小賣商の前途と百貨店の基礎確立

事實百貨店の賣品が、大資本組織のあらゆる長所を活用して低廉で良質で、豐富な陳列から選擇が利くのであれば、顧客が之に趨るのを引留める力は、國家と雖有してはゐない。もとよりそこには、大百貨店の名を盲信し、華美を追ひ求める者も少くはないが、今日の百貨店は全く實用品本位になつて來た。百貨店の繁昌は、消費者の生活改善の要求に基く事多しと云はねばならない。東京の婦人は體裁ぶつて公設市場を利用しようとしない、などゝは永らく云はれたものだが、何時しか市營府營の市場も、低廉な品を求める主婦の集ふ立派な配給機關となつて終つた。一層の生活改善を志し多少理想家的な組合の主人は主婦に命じて消費組合に加入せしめる。斯うして小賣商の顧客が漸く他に散つて行かうとする時、生産者の方面に於ても、或は金融の必要から、或は直接販賣の利益を得んとして、單獨或は組合を作り、産地直賣の名を以て都市に市場を開くものが增加して來た。小賣商の活動範圍は層一層狹められつゝある。さうしてその際、識者の「自覺せる」消費者は揚言して云ふには「一體日本では小賣商人が多過ぎる。彼等が商品配給組織の中間にのさばつてゐるから、物價が下らないのだ」

物價が高い事も事實だし、商人の多い事も事實である。けれども人數が多過ぎるのは何も小賣商に限つた事ではない。さう云ふ識者だつて多過ぎるし、官吏だつて資本家だつて大臣病患者だつても多過ぎるのだ。見廻した所どこにもこゝにも人が一ぱいで氣がつかへると云ふのが我國今日の狀態である。小賣商の一團のみが人口過多の責任を負はねばならぬ筈はない。漠然たる小賣商驅逐論は要するに、自己の俸給と生活費のみを知つて、社會生産物の社會成員間に於ける分配行程の全部を考慮しない月給取心理か、國民經濟を私經濟と同一視する資本家心理の反映に過ぎない。誤りとは云はない迄も十分な考察の廻らしてない此の樣な漫罵には、議論として深き顧慮をする必要はないが、議論の正否周疎は別として、さう云ひつゝなされる需要者と供給者の賣買手續の實際上の變化には、小賣商たるもの顧慮せざらんと欲するも出來ないであらう。

搾木にかけられた樣な小賣商の前途は決して薔薇色に輝いてはゐない。一部の人は、その有した多少の資産と傷なく維持した獨立の誇を失つて、純然たる無産階級に沒落せねばならない。さうして彼等の商業的勞働力を傭主に賣るによつて生活を續ける者となり、その中での少數者は彼等が落ち込んだ階級に於て、新な活動の理想を見出すであらう。その中での多數に對

しては、彼等が沒落するに依て上の階級に剩し得たる財の一部分を徴集して、國家が社會政策社會事業行政の名を以て、若干の剩錢を返すであらう。これ今日の國家が自ら任務と信じてゐる所であり、またその爲し得る最大限である。

けれども小資業者の悉くがこの運命に陷るものでない事は云ふ迄もない。米國に於ける百貨店の進歩は人の知るところ、一九二四年には國內百貨店總數千八百あり、其の總賣上高は十七億五千萬弗に達したが、この壓倒的數字も米國の小賣取引總額の六%に過ぎないと云ふ。(Hirsch) 沒落を免れた小賣商が依然として保持すべき取引の範圍はなほ廣大である。況んや人口が增加し慾望が增進し、又、種々な商品が低廉になると共に壽命が短くなり、廢物をどしどし棄てゝ新品を求める傾向が、今後は益々强くなると思はれるが、これらの諸因は相倚つて小賣商による取引高を益々多くするであらう。此等增加需要に適應する事も、多くの部分が彼等に殘されてゐる、と云はねばならない。

併し此の殘された範圍が如何に大なりとは云へ、今後の財界に從來の經營方法を以て處して行つては、發展は愚か地位の維持さへも覺束ない事云ふ迄もあるまい。具體的の小賣商業經營方法を說く事は、門外漢たる私に出來る事ではないが、迂遠を忍ます抽象的に述べるならば、將來の小賣商業は次の三つの形態に明かに分化すべきであらう。第一は、不羈奔放の經營主に依て指導され、獨得の金融手腕と人目を眩惑する廣告に依て人の注意を集中し流行を支配する地位を獲得し、百貨店の壘を摩し遂に之が列伍に入るもの、第二は、同じ位の資產信用の中小商店が固く結合し、拔け驅けの利得を警め種々な形式の共同態を作つて生產者と消費者と金融業者とに對し、百貨店の競爭を避けつゝ僅か宛の利益增進を喜ばんとするもの。第三は百貨店其他大資本の生產者の支配下に立ち、獨立の名目は存するも實は店舖の管理人として勞働賃銀並の收入を得るに過ぎないもの。斯く云へば、それは現今でも存在する形態だと云はれるかも知れない。それならばそれでも良い。その何れの形態に屬するかを經營主自ら明瞭に認識して、他の形態に誘惑され逸脫せざらん事を期する、その認識の明瞭化によつて、小賣商今日の煩悶は或程度迄解決し得るものではあるまいか。資本主義が爛熟期に入らんとするに際して、小賣商、就中上述第二の形態に屬すべきものが自己の地位を自覺せざる事そこに多くの禍因が認められるのである。

群小の競爭者が、時代を正視する餘裕も無き困惑せる際に、大百貨店は資本主義の本筋、大資本覇制の大道を驀する事無く

濶歩しつゝある。歐米に於ける百貨店相互間の競爭の激惡化と、その優勝劣敗の結果、大百貨店の中小百貨店併呑の現象を見聞する時、我が百貨店界の前途も亦必ずしも一路坦々たりとは云ひ難い。けれども現下目前に見る所は、百貨店が永らくの傳統的桎梏を脱して、新時代の覇者たる自己の姿に快心の笑を洩せる有樣である。最近新聞紙上に現はれた二つの報道は、正にこの桎梏脱却の公告であつた。

第一は即ち前にも述べた百貨店の同業組合不加入認許の事。六月二日、三越及び白木屋が重要物産同業組合法中「商工大臣が特別の事情ありと認めたる時は脱退を認可する」との但書規定の通用により、約三十種の同業組合から脱退を許された、との事は、六月三日各新聞紙上に大きい見出しで掲載せられたが、この百貨店が純然たる新時代の別個の景態であり、中小商業者の封建的組合から規制さるるの要なき事を明言したものである。

第二は、五月二十八日附を以て各新聞に出した左の如き三越の廣告である。

三越の商號變更

弊店儀從來株式會社三越吳服店の名を以て御引立相願ひ候處今般右商號中吳服店の三字を削除し

株式會社三越

と相改め來る六月一日より實施仕候就ては右御諒知被成下今後一層の御愛顧を賜り度此段謹告仕候也

昭和三年五月二十八日

東京市日本橋區駿河町七番地

株式會社　三越吳服店

一見何事もなきが如くであるが、三越が越後屋吳服店以來の「吳服店」の稱を削り去つた所に、純乎たる百貨店としての自覺の表現を見得るではないか。

(二)　乘合自動車對鐵道

自動車發達による鐵道の打擊

小賣商店が時勢の齒車にかけられて大百貨店に壓し潰されつつある際に、自動車營業者は貨物運搬乘客運搬兩方面から鐵道軌道の大資本に對し猛烈な攻勢を示してゐる。

米國の一鐵道雜誌に掲げられた統計によると、鐵道旅客數の遞增は一九二三年迄ですつかり停り、それからは降り坂、一九二四年は六・二%、一九二五年は一・七%、一九二六年は一・五%と各前年に對し減少を來した。併しその減少度合が少し宛減つて來てゐるので、此の分なら乘客數遞減もこゝらでお終ひ

で、現狀を維持するものと米國の鐵道業者は樂觀してゐた所が、昨年七月末迄の結果は前年同期に比し五・四%と云ふ激減を示し、之による乘客收入の減少三千三百萬弗、別に貨物收入の減少を合せて合計六千百萬弗の減收を來し、恐慌を捲き起したとある。乘客收入減少は最初は寢臺車展望車等の乘客減少から來たのが大きかつたが、最近のはさうした贅澤階級の消費減少ではなく全く自動車の普及から一般的に生じたものだと云ふ。自動車の普及と云ふ中には、無論舖裝道路の擴張に伴ふ自家用自動車の利用の一般化が重要な部分を占めてゐるが、乘合自動車貨物運搬自動車等鐵道軌道に直接對抗する營業者の勃興が更に一層の重要さを含んでゐる事は疑ひを容れない。別の資料に據ると、一九二六年迄十年間米國に於ける電車軌道と乘合自動車營業との競爭の結果は左の如くである。

一、電車線路營業の一部を廢止し、其の跡へ元の會社又はその附屬會社が乘合自動車を營業せるもの、七十九會社に及び廢止線路は總營業線路一萬二千哩中七百二十五哩に達した。

二、電車線路營業の全部を廢し、其の跡へ元の會社又は附屬會社が乘合自動車を營業せるもの、三十會社三百九十五哩に及ぶ。

三、電車線路營業が廢止され、其の跡へ他の會社が取つて變つて乘合自動車を營業せるもの、六十七社八百八十哩に亙る。

四、電車會社が營業を廢止し、別段その代用運輸機關の起らないもの、五十四會社五百哩。

即ち電車線路の放棄された哩數は合計二千五百哩その八〇%に於ては乘合自働車が取つて變つたと云ふ譯である。もとよりその哩數は、米國鐵道の總延長二十六萬哩に比べれば一%に及ばない程度ではあるが、兎も角、全盛を誇つた陸上運輸の橫綱を土表際へ攻め立てゝゐる事は明瞭である。

我國でも此の事實は漸次顯著になりつゝあつて、特に地方鐵道軌道に於て營業自動車から受けつゝある打擊は深刻なものである。

昨年鐵道省の調査に依ると全國の昭和元年末私設鐵道數二百十四社（三二六三哩）軌道百五十二社（一六一八哩）この内自働車の競爭を蒙るもの地方鐵道百四十二社軌道百六社、競爭沿道哩數は地方鐵道一八六九哩、軌道八二〇哩即社數で云つて七割、哩數で云つて五割は競爭線路となつてゐる。その結果がどうなるか。次に揭げる各地方の代表的私設鐵道の報告を見られよ。

I鐵道　東北地方に在る三呎六吋の蒸氣鐵道で、其延長は十四哩五分であるが、大正十三年以來自動車の競爭を受くるに至り、其前年迄の既往五個年間に於ける、營業一哩當りの旅客收入の平均增加率が八九

%であつたものが、大正十二年以降三個年間には、平均減收率〇、二%となり貨物收入が一五、六%の增加率より、反對に一%の減收率を示すに至つた。

J鐵道　關東地方に於ける三呎六吋の蒸氣鐵道で其延長は三十一哩九分である、が、是亦大正十三年以來自動車の競爭を受け、其前年迄の既往五個年間に於ける、一哩當りの旅客收入平均增加率が一四、一%であつたものが、爾後三個年間には二五%の減收率を示し、貨物收入に於ては一七、九%の平均增收率より、一三、九%の增收率に下つて居る。

T鐵道　本州中部に於ける三呎六吋の蒸氣鐵道であつて、其延長は十哩八分であるが、是亦前同樣大正十三年以來自動車の競爭を受けてゐる。而て大正十二年より遡れる既往五個年間には、一哩當り旅客收入平均增加率一四、二%であつたものが、爾後三個年間に平均七%の減收率に急變してゐる。

E鐵道　四國地方に於ける三呎六吋以下の蒸氣鐵道であつて、其延長は十六哩六分であるが、是亦大正十三年以來自動車の脅威を蒙つてゐる。而して其年以前の五個年間に於ける、旅客收入一哩當り平均增加率が九%であつたものが、以後の三個年間には一、九%の平均減收となつてゐる。

O鐵道　これは九州地方に於ける三呎六吋の蒸氣鐵道であつて、其延長は十二哩三分であるが大正十三年以來自動車の競爭を受けて居る。而て其年以前の五個年間に於ける、旅客收入一哩當りの平均增加率は七、九%であつたが、以後の三個年間には、實に一一、七%の平均減收となつて居る。

總ての地方鐵道が斯うだとは云へないが、また此等の事例が特別の例外でもない。そこであつちでもこつちでも地方鐵道の悲鳴を聞くと云ふ譯である。併し乘合自動車、營業貨物自動車の影響は啻に私設鐵道軌道のみでなく、國有鐵道に對してもある事無論である。貨運輸局長が發表された意見に依ると（鐵道軌道經營資料昨年六月號）國有鐵道と併行して行はれる自動車運送は鐵道輸送を蠶食するものと假定して推算すれば、斯る輸送人員は年約五百二十八萬六千人に達し、一人の平均乘車哩八哩五分として、鐵道運賃に引直し百五萬七千圓、貨物の方では年影響數量約七十三萬一千噸、平均輸送哩十三哩八分、之を小口扱の四級品と見て鐵道運賃に換算、百二十四萬三千圓。賃客兩方を合せれば、大體二百三十萬圓と云ふ額が國有鐵道から奪はれる勘定だが、その内二割を見積り過ぎとして控除しても、百八十四萬圓、これだけは國有鐵道年收三億餘萬圓に蠶食して來る額と見て差支へあるまいとの事である。影響はまだ一%にも足らず、一方に自動車發送の御蔭で國有鐵道の利用者が殖える事も考へねばならないが、當局者になつて見れば、少しでも自己の支配下の企業の利益が蠶食されてゐると思ふのは、愉快ではなからう。自動車と云ふものが、彼等の頭を惱ましてゐる事は疑ひも無き事實である。

兩者の資本と經營費

さて斯く鐵道軌道を困惑せしめつゝある乘合自動車、營業貨物自動車の資本を、前者と比較して何れが大なるかは、生憎十分な材料を手にしないが、問はずして明かであらう。地方鐵道の建設費は大正十三年下半期に於て一哩平均十三萬三千圓乃至十四萬七千圓であつた。これだけは賑でも寝かさなければならぬ資本である。私は日本一の小さい鐵道會社は何處にあるだらうと最近の鐵道統計を調べて見た。さうして見つけ出したのは、岩鼻輕便鐵道と云ふ會社である。信越線倉賀野から上州岩鼻へ分岐する一哩半の貨物専用線で、大正六年開業資本金九萬圓、拂込七萬七千六百五十五圓とある。日本一の小鐵道會社と云ひ、さうして上州のあの平原へ敷設すると云ふのでも、一哩半にこれだけの投資がされてあるのである。

然るに一方の自動車企業はと見るに、前に掲げた鐵道省調べの地方鐵道軌道の競爭者たる會社個人の所有自動車數別は左の如くである。(下表參照)

即ち大體乘合自動車經營業者では二輛を所有して競爭せるもの、貨物運輸者では只一輛だけで經營してゐるものが最大多數を占めてゐるのである。而も我國に存する自動車の七割迄はフォード車だと云ふから、斯る營業者の投資額の鐵道に比し如何に僅少なるかは想見すべきではないか。

所有自動車數	乘客運輸者(社數又は人數) 鐵道と競爭者	乘客運輸者(社數又は人數) 軌道と競爭者	貨物運輸者(社數又は人數) 鐵道と競爭者	貨物運輸者(社數又は人數) 軌道と競爭者
一輛	六七	一七	一〇六	一〇
二〃	七〇	二〇	三二	四
三〃	四二	一九	一〇	一〇
四〃	三二	七	三	二
五〃	一五	一〇	五	—
六〃	一三	九	—	—
七〃	一四	五	一	—
八〃	五	六	二	二
九〃	七	—	—	一
一〇〃	一	四	—	—
一一―一五	一二	九	—	—
一六以上	一八		二	

雜誌『交通時論』本年二月號に掲載されたる鐵道省調の統計表中、所有自動車數不明の分を除き作成、乘客運輸に付鐵道と競爭者たるもの貨物には軌道と競爭せる者等あり表の數字を縦に合計すると二重計算になる虞あり

當初の投資が少くて濟むのみならず、自動車營業者の經營費として要する流動資本はまた甚だ小額で足る、不幸にして我國の材料を手に入れ得なかつたが、米國ボストン・アンド・メイン會社の實驗によると、鐵道、ガソリン軌道車、自動車一哩當りの運轉費は、それぞれ一弗五八九、〇弗七二〇、〇弗二八九で

あつたと云ふ。同社は此の實驗に基き一昨年經營總延長二千五百哩中支線千哩を放棄して自動車を以て代用せんとしたが、州際商業委員會に阻まれて百三十一哩だけを自動車化し得たに過ぎず、年額二十五萬弗の損失を忍ばねばならない狀態であると云ふ。

　斯樣な身輕ないで立ちを以て乘合自動車貨物自動車營業者が鐵道に打向ふ時、鐵道の地方的利益が甚しく蠶食されるのは寧ろ當然と云はねばならない。

小資本勝つか大資本勝つか

　然らば自動車は徹底的に鐵道を壓迫する事百貨店の小賣商に對するが如きものがあるだらうか。小資本が大資本を驅逐する稀な例を示すであらうか。

　まづ第一に斷らなければならないのは、自動車營業を小資本企業として上來論じて來たが、それは鐵道の如きに對しての話、他の運輸機關、荷馬車、人力車等に對しては、大資本として出現してゐる事である。此等の小さい運輸機關が、自動車の出現に依て絕滅に歸せんとしつゝある實狀は、現に我々の目前に見る所である。自動車に對する相手方を變へて觀察する時は、そこにも百貨店對小賣商と同じ關係の問題を發見せざるを得ない。

　第二に自動車が鐵道を壓迫しつゝあるとは云ふものゝ、其の程度は少く我國に於ては未だ地方的たるを出でず、輸送量の影響も全體としては未だ微弱なるを免れない。自動車運輸は「戶口より戶口へ」行はれ、隨時利用者の需要に應じ得られ、其の結果時間を短縮し、鐵道の如く停車場迄及び停車場よりの別の運送費荷造費を必要とせぬ等幾多の長所を有してはゐるけれども、大量貨物の輸送、發着時間の正確、乘客座席の寬濶等の點に於ては今日迄のところ鐵道に一籌を輸せざるを得ない。この技術的の點からして、自動車が全然鐵道を壓服する事は想像し得ない。のみならず、現在の石油の安價が果して今後何年續くか。此の點から云つても自動車側で徒らに樂觀ばかりは出來ない。

　併し鐵道對營業自動車鬪爭の最も興味ある歸結は、斯く迄に鐵道を惱ます自動車を、鐵道側が懷柔せんとし、自己の手中に收めんとし、大資本の勢力を振つて、買收し又は自ら自動車を仕立てゝ競爭を以て打破すべく反擊し來るの點にある。

　一例を擧げれば英國に於て本年の議會を賑した鐵道對自動車爭議の如きがある。英國に於ては鐵道會社にして自動車營業を許されてゐるものは、その會社の旅客及び荷主に便宜なる如き

地方的小運送の外には餘り多くない。多くは小企業家及び各都市等地方自治團體の經營する所である。さうして此等の自動車の發達は寧ろ鐵道の榮養をよくすると考へられてゐる方が多くて、鐵道を壓迫する方面に就ては米國に於ける程問題が深刻に扱はれてゐない觀があるが、影響は全く無しとは云へない事確かである。戰後この問題に注目し出した英國の大鐵道會社は、自動車營業權を獲得して、一面には小企業者による競爭を避け、他面に於ては幹線の培養をなすべく、一九二一年同國鐵道法改正の際以來猛烈な運動を試みた。問題調査の爲めに、バルフオア・ブラウン氏を議長とする特別委員會迄設けられて研究したが、鐵道代表者の贊成ありしは無論だが、委員中、自動車業者、英國經濟聯盟、商業會議所聯合會等の代表者は、大鐵道會社が自動車營業を獨占すべきを恐れて絕對の反對を表明し、自動車從事勞働者組合の代表者は、鐵道對自動車等交通政策の解決は、たゞ總ての交通機關の國有化によりてのみ解決すべしとし、兩資本團體を相手取つて論ずると云ふ三樣の報告が出る事となつた（Fenelon Economics of Road Transport）斯樣な狀態で議決せずそのまゝ推移してゐた樣子であつたが、昨年末に至り英國四大鐵道會社は、上述權限を鐵道會社に附與すべき法案を作成し、之を議會に提出した。(Manchester Guardian Dec. 29,1927）之に對し猛烈なる反對が前記の三團體、及び各都市當局者から爲されてゐる。各都市當局は其の經營する乘合自動車の蒙る壓迫を恐れてゐる譯である。其の後の推移が如何になつたか未だ聞き及ばないが、私の問題とする所は既に之だけの情報で十分である。——

小資本が勃興して大資本を脅かすに至れば、大資本は小資本の經營技術に己の姿を扮裝し變へて彼の競爭者として現はれる。勝者が遂に何れのものであるか、問はずして明かであらう小資本が大資本を壓する如く見ゆるも、それは一時の經過的現象に過ぎない。依然たる大法は別に存するを認めねばならない。けれどもこの間經過的にせよ一時大資本を翻弄するの快は、小資本家にも與へられない所でない事を知り得る。百貨店に對し煩悶する小資業者も這間の事情に小滿足を贖ひ得る事必ずしも無いではあるまい。

張作霖の沒落と日本の特殊利益

鈴木茂三郎

一

王城の舊都北京に、手盛りの大元帥の王冠を戴いて、天下にひとり嘯いてゐた張作霖は、敗殘の手兵をまとめ、葬列にも比すべき儀容を整へ、彼の所領地滿洲の主都奉天に落ちて行く途中、全支を搖るがす爆彈に襲はれた。負ふた傷は重く、再び起つ能はない。

作霖の沒落は、今や決定的とはなつた。

しかし、彼の沒落への轉向の第一期は、昨年三月江蘇督辦の楊宇霆が長江流域に破れ、張宗昌が上海を逃亡したときにはじまり、次いで本年五月張宗昌、孫傳芳の山東の敗走が第二期、第三期は大元帥張作霖の靴が、六月三日夜半、月光を浴びて北京の土を離れた瞬間である。此の瞬間が、彼が沒落の淵へ踏み入る最後の第一歩だつたのである。

たま〳〵見舞はれた爆彈は、彼の最後を壯烈にし、沒落の第三期を短縮したといふことのほかには、爆彈の結果に意義を見出せない。從つて彼が重傷のために死のうと生きやうと、彼の沒落はそれに關つてはゐない。寧ろ彼の後釜に擬せられてゐた吳俊陞が、共に爆彈にたほれたことにこそ、問題の重大性が見出される。

吳俊陞の慘死は、張作霖舊勢力の安泰と滿蒙に於ける南方勢力からの獨立を期するものにとつては、限りなき慘ましき珍事に相違ない。俊陞は黑龍省に確固たる勢力を有する上に、作霖沒落後の舊勢力の收拾にあたる第一人者とされてゐた。それだけに俊陞をも失ひたる後の作霖舊勢力の收拾には、一段と困難を加重せられた譯で、南方よりすれば、一發の爆彈によつて、張と吳と滿蒙二代の宗主を射止めたことになる、彼の死が重大性をもたらす所以である。

がそれはともあれ、張作霖の沒落を條件づける第一期から第三期に至る敗退が、彼にとつて、何故に沒落への決定的な轉期を爲したか。

といふに、長江流域については、ここに述べるまでもなく、棉花、桐油、織物、皮革、鐵鑛その他農産物の産出量は底知れぬ深さがあり、航行には日本の資本に對抗するだけの招商局をはじめ多數の航業會社がある。その長江の咽喉を扼する上海は、支那に於ける最大の國際經濟の中樞である。

鈔票や鮮銀券の若干ならば、奉天、大連で金票にかへられやうが、弗との取引、磅との取引には厭が應でも上海の國際市場に出て、滿洲と北京と上海の三角點を結ばねばならぬ。

殊に上海が國際的經濟の中樞であることは、上海にある帝國主義諸國のブルジョアジーの手に、北京に於ける對支國際政局の鍵が握られてゐることを意味する。

北京の國際的政治關係に、波紋の石を投ずるは上海である。

それは帝國主義國家諸國の政治權力が、それ〲の國のブルジョアジーの支配にあることによつておこるところの、必然の對支國際的政治干與の形態である。從つて張作霖であらふと、蔣介石であらふと、いやしくも北京に君臨せんとするほどのものは、上海を手にいれて置かねばならない。

次ぎに山東はどうか。

山東は山東牛、山東卵、酒、石炭、落花生、小麥、棉花などの産物で名高い。それらの夥しい産物と膠濟鐵道と青島港がある。鐵道運賃と關税と諸税金を取り立てただけで張宗昌はここに榮華の夢をむさぼつてゐたのだが、張作霖にとつての山東の必要はしかしそれよりも、無盡藏と云はれる苦力の産地としての山東にある。

山東苦力の産出力は年三十萬人といはれる。大部分は滿洲へ出稼ぎする。それらは張作霖軍の雜兵として戰線へ驅り立てられ、或は滿洲のあらゆる産業の最低線の勞役に驅使されてゐる。

彼等は農民と共に、滿洲の豊富なる富源の生産者たるの光榮を荷ふものである。

が、苦力の持つ光榮に對しては、過重勞働と豚の生活が、幸ひにして酬ひられてゐる。

張作霖にすれば、養豚費ほどの賃銀による強大なる勞働力の供給を山東の領有によつて確保することは、滿洲の軍事的經濟的經略の上に絕對の必要がある。

しかるに作霖は、上海を失ひ、又山東を失つたのである。

上海を失つたことは、滿洲、北京、上海の三角椅子の一脚の倒れたことに價ひする。山東を失つたことは、滿洲をさゝへる

支柱の倒れたことに値ひする。

そこで月光下の北京落ちのときが來た。即ち轉落への第三期である。

北京、上海、滿洲が、國際的經濟關係の三角型であるとすれば、滿洲、北京、山東は北部支那と東三省との國內的經濟關係の三角型である。しかも北京は金融支配の中樞であつて、滿洲、山東の過剩資本はもとより、農民の利得も苦力の賃銀も北京へ吸收される、わが巨大なる滿洲、青島への輸出資本のうちにも、跡方もなく消えて無いものがある。それは張作霖と北京へ、しやぶり盡されたのである。

作霖はかゝる北京をも失つた。

蝸牛ならば、角をしまひ殼のなかに閉じこもつて身を護るところだが、彼の所領地滿洲の情勢は、經濟的にも社會的にも彼の存立をゆるさない。もはや安住の地たり得ない。かつ日本ブルジョアジーとの利害關係も險惡である。

作霖の運命こゝに極つたりである。

二

大元帥張作霖の據つて立つ社會的經濟的基礎は、土地と家內工業にある。滿蒙の經濟的盤根が豐沃無限の土地にあることはいふまでもないが、穀物、高粱酒、大豆その他若干の手工業も封建制の殘物そのまゝである。その上封建的諸侯として君臨する彼の本質も又、一個の巨大なる地主である。言はゞ彼は封建的軍閥の巨頭である。

とは言へ、しかし、純乎たる封建的軍閥ではない。帝國主義ブルジョアジーの國際的影響のもとに於ては、純乎たる封建的立場などあり得ない。殊に滿蒙の特產はブルジョアジーの直接の影響のもとにある工業用原料としての大豆、高粱、煙草、棉花、植物油原料、小麥などであり、振はずと雖も吉林のマッチ、北滿の製粉、南滿の油房と搾蠶織物、奉天の紡織產業は、近代の機械制生產にすゝみつゝあり、とりわけ帝國主義日本のブルジョアジーの大資本の存在、滿鐵その他は、封建的軍閥としての彼、封建的遺制としての彼の經濟的地盤に重大なる影響を與へない譯がない。

即ち他方に彼は、四洮、洮昂、吉長、打通線の鐵道と東三省銀號を經營してゐる。封建的基礎と資本主義的基礎の上に、跨つてゐるものが彼である。

所領地滿蒙の情勢が、もはや安住の地たり得ない理由は、さうした二つの基礎に於ける矛盾の破綻にある。その一つとしては、奉天票と農民の利害の矛盾である。これは滿蒙の時局收拾

の上に横はる當面の最大の問題であつて、滿蒙に於ける張作霖沒落の決定的な破綻である。

蓋し奉天票は農民の一大搾取機關として、張作霖の私有銀行東三省銀號の發行する不換紙幣のことだが、わが鮮銀の金票と農産物が兌換準備の役割を演ずるといふ、頗るお目出度い仕組みに出來てゐる。

作霖は奉天票を印刷して、金票と取り換へ軍器でも何んでも買入れる、わが輸入商は金票を奉天票にとりかへて、大豆買付けの代金を奉天票で仕拂ふことになる。そこでひとり馬鹿をみるは奉天票を摑まされた農民である。

第一次奉直戰に於ては張作霖が大敗した大正十一年五月十六日の奉天票相場が、崩れたとはいへ金票百圓に對して百五十四元であつたに、最近の相場は二千七百九十元にまで大暴落した。そして農民は、かうした紙屑の五、六億元見當のものをつかまされてゐる。このことは作霖の資本主義的機關としての東三省銀號と彼の私財二、三千萬圓を以てしては、農民の不平を爆發せしめることなしには到底處理し能はぬところである。

張作霖の滿蒙における沒落も、かく決定的な條件に支配されてゐる。

三

作霖の沒落のあとを受けて、舊勢力の收拾を、統一的に成し遂げようとするものは、張學良であれ、楊宇霆であれ、何人であらうと當面の奉天票問題の解決と、あはせて張作霖の滿蒙に於ける社會的經濟的基礎の矛盾を乘り切る力と決意をもつものであることを要する。でなければ曲りなりに支配機關は成立しても、後から足場が崩れるは明らかである。或は舊勢力の統一體を解體して張學良は奉天、張煥相は東支鐵、張作相は吉林の、それ〴〵の所領に分立するに到るやも知れない、といふ可能性は多分にある。それは一應純封建的政治形態に復歸することになる。だから、外部から加へられる軍事的又は經濟的影響に對抗し得る間は、個々の分立體は安泰だといへる。

しからば南方は如何？彼等としても指を喰はへてゐることはあるまい。それによつて自から形勢の上に風雲を生ずる譯だが、といつて南方政府が直ちに兵をすすめるとは信じ難い。彼等は日本軍との衝突を避けつゝ、便衣隊の活躍と張作霖幕僚の抱き込みによつて、奉天に青天白日旗を立てようとの策戰に出づるであらうとは思はれるが、いづれにするもかかる形勢のもとに於ける、帝國主義日本ブルジョアジーの利害と行動は重要視

されねばならぬ。

帝國主義日本ブルジョアジーの利害は、張作霖とは明白に對立する。

それは張作霖爆撃の報が傳はつたとき、田中首相は外交的辭令によつて、××をかくす愼しみをさへ忘れて、張の下野は當然だと、つい口を辷らしたことによつても證據立てられる。

尤もかゝる對立は、昨今の出來事ではなかつたのである。利害の矛盾はわがブルジョアジーの特殊勢力內に於ける支那資本主義的經濟の發展によつて徐々にかもされつゝあつた。

（一）張作霖は彼の支配のもとにある滿鐵借款線なる、四洮、洮昂鐵道と京奉線に連絡する打通線を敷設して以て、滿鐵線に對する競爭線を完成した。

（二）紡績、製粉、油房、煙草等の工業生產に於て、日本の資本との對立がおこつてきた。

（三）大工、石工、鍛冶、左官其の他日本の職人から技術を習得した支那職人が勢力を得てきた。

（四）日本の工場、鑛山に於て搾取されてゐる支那勞働者と日本のブルジョアジーとの對立が激化してきた。

かゝる對立が政治的のかたちをとつて現れたのは、張作霖が昨年五月大元帥の王座に直つて、滿洲における日本のブルジョアジーの經濟的軍事的勢力から[illegible]、にきざした前後頃と見られる。

だが、もちろん當面の一致點はあつた。

第一は山東の苦力供給の確保、第二は勞農ロシアに對する防衞、第三は東三省に於ける支那勞働者、坑夫の赤化防止、そのためには南方勢力の南滿に及ぶことは、わがブルジョアジーと彼は、生命を共にするほどの利害を共通にする立場にあつた。

之れらの理由が張作霖との對立を、かなりに緩和してゐたことは確かだつたが、張作霖の北京落ちで、一切は決つた。

四

わがブルジョアジーは類例のない重大なる形勢のもとにのぞんでゐる。

張作霖は彼等の欲するところに從つて沒落したが、しかし東三省の時局收拾は彼等の欲するところに從つて收拾されることはあるまい。

如何となれば滿蒙の社會的經濟的狀勢はすでに述べたやうに、日本ブルジョアジーへの對立を、充分基礎づけてるからだ。

だから東三省の時局收拾と南方政府とそれとの關係が一應解決されることになれば、次ぎには必然にわがブルジョアジーの

滿蒙における特殊利益の解決が強請される譯だ。

それは一方東三省の時局收拾がわがブルジョアジーの欲するところに從つて收拾されないと同じやうに、他方馮玉祥を南方政府から離間するくらゐの策謀では、問題を闇から闇へ葬り去ることの出來ないほど、問題の所在の根柢は深い。

日本ブルジョアジーとの對立は、支那の新興ブルジョアと勞働者と農民と、そして支那民衆との對立の形勢にまで切迫した狀勢のもとにあるからだ。

そこで然らば、支那の民衆は、當面具體的には何を要求するであらふかといへば、それは所謂日支不平等條約の改廢にあると思はれるが、廿一ケ條のうちなほ問題として橫はるものは

（一）旅大租借及び南滿安奉鐵道利權、（二）南滿の土地所有權、賃借權、（三）鑛山採掘權、（四）日支合辦事業における日本資本の優越

右の數ケ事項にすぎない。だがそれは廿一ケ條の精髓であるだけに、わが滿洲特殊利益の根本に觸れる。

何故ならばわがブルジョアジーの滿蒙特殊利益の骨組みは、滿鐵を主とする鮮銀、東拓等一聯の國家資本と三井財閥の三井物産との結びつきによつて形成され、利益の最大の源泉は國家資本は勞働者―大部分は華工―三井財閥は支那農民の勞働力から絞り取る。そして若干の例外を除けば、その他のあらゆる產業は、それへの依存關係によつてはぐくまれてゐる。

とりわけ滿鐵は、滿蒙に滿鐵王國を形成するだけに、その創立以來の純益は三億五千萬圓、政府と株主への分配金だけでも一億八千四百萬圓になる。

しかもそれは、滿蒙に蓄積された巨額の分配金であり、滿鐵の依存關係にある資本家や重役や支那の軍閥や日本の政治家や、あらゆるもののしやぶり粕だ。

そしてかゝる特殊利益に、支那の民衆の要求が觸れてきたのだから、或る程形勢は至極重大でなければならぬ。

そして、アメリカとの間に、石井ランシング協約におけるスペシアルインテレスツと華府會議におけるヴアイタルインテレスツ、特殊利益と重大利益との用語の解釋に、喰ひ違ひがおこつて、アメリカブルジョアジーは、支那民衆の背後に、公然と帝國主義のむきだしな姿を現してきた。

形勢はいよ〳〵重大でなければならぬ。

そしてわがブルジョアジーは、滿蒙の特殊利益の實益からは一歩も退くことの出來ない狀勢にある。滿蒙は日本ブルジョアジーの一脚だ。その喪失は、張作霖が上海、青島の一脚を、失つたよりも影響は大きい。

そして、かゝる狀勢のもとに、重大なる形勢は、新たなる段階に發展するであらう。

社會時評

優諚問題

吉野作造

水野文相の辭職に關連する所謂優諚問題に付ては、與黨自身もこまり又與黨を除く總ての政黨政派が擧つて政府を非とし、新聞の論調は勿論のこと、貴族院の大多數、はては一部學者の團體までが政府攻擊の聲明をするなど、一言にして云へば國民を擧げて田中首相の態度を難ずるものの如くである。而して之を難ずるの理由並に之に關して田中首相に對する引責辭職の要求の如き、亦大體に於て輿論の一致を見て居る樣だ。田中首相の行動を以て輔弼の職責上大に缺くる所ありとするの點に於ては、固より私も贊成だ。從てその責任を糺さんとする要望に於ても敢て參加を厭ふものでない。たゞ之を難ずるの理由に付て私は少しく世間の輿論と異なる考をもつ。殊に之を重大なる理由として田中首相の引責を求むる說に對しては、理論上未だ容易に同意することは出來ない。と云つて私は現內閣の居据はりを希望するのでは勿論ない。空前の最惡內閣と觀て私は田中內閣の一刻も早く倒壞し去らんことを無條件に歡迎する。之を倒さうとして非認の理由を探せと云ふなら幾らでも擧げ得る。故に優諚問題もその一つに算入して倒閣運動をやると云ふのなら贊成だ。けれども優諚問題だけで優に倒閣の理由となるとする考方には、例に依り政爭に皇室を引援し來るの嫌ありて、私の到底與みし得ざる所である。あれ程論壇を賑はした優諚問題の批判のうちに、殆んど一言の斯うした方面に及ぶもののなかつたことは、私の寧ろ不思議に堪へぬ所である。

田中首相の行動が輔弼の職責を盡したものと謂へぬことは今更說くまでもない。政府側では色々の聲明を出して頻りに責を獨り水野前文相に嫁さうと苦心して居る樣だ。水野氏亦責を免

れ能はざるは云ふ迄もないが、假りに政府側の宣明する通りであつたとして、首相が輔弼の大任をあやまつた事實は炳乎として極めて明である。そは水野氏の辭意の決定が辭表執奏の前であつたとすれば、空文に屬すべき辭表を天覧に供したるは無用に聖慮を煩したもので、輔弼の臣として最も愼戒すべき點に極めて輕卒なる行動を取つたことになるからだ。若し夫れ此點が他の一方の主張する如く執奏前に辭意の決定がなかつたのだとすれば、水野氏の留任を見るに至つた結果に於て、首相が自己の取るべき責任の一部を皇室に轉嫁し奉りたる嫌なきを得ぬ。孰れにしても首相が不當に聖慮を煩し奉りたるの難は免れ難く而も事皆重大な國務に屬することとすれば、之を以て輔弼の大任をあやまれりと難ずるに何の妨げもないのである。固より之は田中首相の一時の過失であらう、意識して斯んな妄擧を敢てする道理はないからである。併し過失としても之は堂々たる一國の宰相に容易にあり得ざる底の異常の大過失である。過失なるが故に、而して二度と繰り返される懸念の絶對にあり得ざる過失なるべきが故に、私は首相を責むるに比較的寛大ではある。が、首相自身が事の餘りに重大なるに顧みて自ら相當の責任を取ると云ふのなら亦敢て之を阻まうとはしない。其後彼れが此事を辯解するでもなく又させるでもなく平然としてその職に留まるのは、併し乍ら聊か不愉快の次第である。

世間では右の點の外、首相第二次の謁見に於て水野文相の辭職を奏請したことをも非難する。曰く、教育の事が重要なる國務であるの理由で文相の留任を奏上した其の舌の根も乾かぬに、手を飜すが如く同一文相の辭表を執奏したのは如何。曰く、累を皇室に及したるに恐懼して去らんとする水野文相の辭表を執奏した首相が、自らも亦皇室を煩はし奉り乍ら平然として其職に留るは如何。論理上これも田中首相に取て辯解に苦しむ痛手たるに間違はない。併し憲政の運用に於ては出來るだけ首相に行動の自由を與ふるを得策とする、小節に拘泥して過當の束縛を加ふるは避くべきこととされて居る。故に去年は斯う云つた昨日は斯んな態度を執つたのと細かい詮議立てをすることは、我々の日常生活の德義としては當然のことだらうが、政界に在ては成るたけ之を避けたがいゝ。昨日は昨日今日は今日、その時々の必要に應じて自由濶達の手腕を振へるのでなくては國利民福の正しき處理は出來ぬからである。尤も之を無限に許せば政界に節操がなくなると云ふ變なしと限らず、又少くとも無節操なる政治家が自己の汚き立場を辯明する爲に右の理窟を濫用するの弊にも警戒せねばなるまい。けれども政界の

大事な原則の一つとして、過去の言動に對する重大な責任を問はざるの用意の必要なるは、篤と心得て置かなければならぬ。況んやこの邊の煩はしい責任呼ばはりは殊に我國に於て甚しきに於てをや。猶ほ文相の辭したと同じ理由が首相の辭職をも要求すると云ふ說に對しては後段に別に述ぶることにする。

して見ると殘る問題は、首相の第一次の謁見に於て聖慮を煩し奉りたるの責任如何と云ふことだけになる。之を輔弼の責任を誤り立憲の本義を紊ると觀る點に於て、私の考は全然世間輿論の糺彈する所に一致する。但しこの事の效果として直に首相の引責辭職を導き來らねばならぬか否かには、私に多少の疑がある。たゞ斯れ程までの重大なる失態だとすることには固より毫末の異議もない。

只玆に一つ不思議なるは、首相の行動を聖慮を煩し奉るものと烙印されて、敵も味方も之に對し一言の反駁をも試みぬことである。敵方のこの糺彈を喜ぶは當然だが、せめて味方の中には一人位の辯護者があつてもよかりそうなものだ。況してツイ近頃まで政府側は、議院中心說に對する天皇中心說を以て頻りに反對黨をへこまさんとして居たではないか。彼等の中に眞に一人でも天皇中心說なるものに眞實の確信があるのなら、何で首相の行動を皇室に對する不謹愼と解するの說に承服することとが出來よう。斯んな時にこそ、彼等は起つて大に民間の俗論（？）と鬪ふべきではなかつたか。然るに默して遂に一言も吐かなかつたのは、愚といはんか醜といはんか、私は唯々その驚くべき無氣力に啞然たるの外はないのである。

議會中心說とは何か。議會に最優の勢力を占むる政黨が內閣を作り、一方に民意の暢達をはかりつゝ他方國務に對する一切の責任を自分に取つて聖慮を安んじ奉ると云ふのである。天皇中心說はなぜ之に反對するか。右の如くにしては所謂天皇は治して統せずと云ふことになる、建國の精神から見て我國の天皇は決して虛器を擁し給ふべきでない。無論責任は負ひ給はぬ（之を代り負ふ爲に國務大臣がある）が、所謂責任の衝に當つて親ら大政を裁量し給ふのでなくてはならぬ、即ち實際の政治は天皇の大政親裁の基礎の上に國務大臣の輔弼を通じて行はれなければならぬと云ふのである。この說を提げて前內務大臣鈴木喜三郎君は勇敢に戰を民政黨に挑み、政府與黨は固より、民間の一部有志も、得たり賢しと之に呼應して、この數ヶ月間天皇中心說は隨分評論界をにぎはしたのではないか。而して田中首相の今次の行動は何を意味するか、即ち或る意味に於て今日の政治が實にこの通り天皇親裁の主義の下に行はれて居ると云

ふ活きた證據を明示したものではないか。ふだんも首相は陛下の思召を承つて大政を料理して居るのではある、併し多くの場合に於て首相の進言立案は其儘陛下の嘉納し給ふ所となるを常とするが故に、陛下の獨立の御意思がどれだけ實際政治に加はるか外間より之を窺ひ知ることが出來ぬ。然るに今度と云ふ今度は、假りに執奏前に水野氏が辭意の決定を首相に通ぜざりしとせば、首相は即ち自ら能く決し得ざりし所を以て陛下の御裁定を乞ひ奉つたもので、最も明白に天皇中心政治の活きた證據を示されたのである。私共は世上の議會中心主義者と共に實に此事を非として首相を難するのであり、世上の輿論が所謂聖慮を煩し奉つてはならぬと云ふのも畢竟此事を非とするのであらう。而して私共の非とする點が即ち天皇中心主義者の是なりとする所なのだから、所謂聖慮を煩し奉つたことに彼等は誇りこそすれ寧も之を恐懼する理由はない筈である。然るに今まで天皇中心主義を以て天下を横行濶歩したものが、この實際問題に遇つて一齊に屏息してしまつたのは何たる醜態であらう。

序に一言しておきたいのは畏友上杉愼吉博士の態度である。天皇の大權並に國務大臣の輔弼に關する博士の宿論から推して、博士が當今通有の輿論と雷同して田中首相の行動を難するは辻褄が合はぬ様でもある。博士の立場からすれば、首相が時あつて國務の裁定につき叡慮を煩すことあるも、決して咎むべきでないからである。併し私の想像する所では、博士の首相を難ぜられるは、聖慮を煩し奉れる其事を原則的に非なりとするのではなくして、斯の如き事柄に聖慮を煩したるを不可なりとするのであらう。して見れば上杉博士の立場を取ても田中首相の行動の非なるは疑を容れない。

併し私はこゝで圖に乘つて天皇中心主義者を窮追しようとするものではない。彼等が天皇中心と聞いて一も二もなく之に走せ參じた心持には同情する。私共が之に反對だと聞いて、彼等は直に私共を政界の中心から皇室を遠けんとする不逞の一味だと憤つたかのも知れない。所が今度の實際問題が明かに示す如く、少くとも政治主義としての天皇中心とは、徒らに聖慮を煩し累を皇室に及すことを謂ふのである。累を皇室に及ぼすの愼まざるべからざるを知る以上、天皇中心の政治主義は棄てなくてはならぬ。但し誤解してならぬことは、天皇中心の政治主義を棄てよとは、天皇が事實上政治の事に容喙し給ふことを排斥すべしと云ふのではない。政權の運用に與るものが自己の權限に屬する國務の處理に付て些でも聖慮の積極的發動を煩し奉つてはならぬと云ふ意味である。而して總理大臣の職責として最も

深く此點に愼むべきことに付ては學界にも既に定論があり、學友佐々木惣一博士の如きは六月初旬の東京日日新聞紙上に於て之に關し極めて明快な斷定を示されて居る。

この小篇を書いて居るとき佐々木博士の論文はまだ完了しては居なかつた。その一端を讀んだだけで判斷するは輕卒の嫌なきに非るも、博士寄稿の第二回目の冒頭にある次の文字の如きは、憲政運用の根本原則を最も鮮明に示したものと云へる。曰く、國家の政治は固より天皇の總攬し給ふところの統治權の發動に外ならないのであるが、その結果について天皇が寸毫責任を有せられないことはいふまでもない。しかるに凡そ政治について責任の歸着するところがなくてはならないといふことは立憲國民の止み難き要求である。この要求を實現するの方法が、すなはちかの國務大臣の輔弼および輔弼の結果に對する責任の制度である。又曰く、國務大臣の輔弼とは、國務大臣が自己の判斷によつて國家の政治について天皇を翼賛することであつて、天皇の命令を執行することではない。……國務大臣が國家の政治について自己の判斷を有しないでたゞ聖旨によつて行動し又は自己の判斷を有するも聖旨如何ともし難いといふが如き態度に出でるならば、それは全く輔弼の職責を盡したものではない。

斯くて私は何處までも田中首相の引責辭職を要求するところの熱意に於て何人にも劣らざることを自信する。けれども之を理由として首相の引責辭職を求むるの運動に對しては、遺憾乍ら賛成するを得なかつた。そは何故かと云ふに、第一に田中首相の失態は純然たる個人的失態であつて、內閣の相共に責任を負ふべき事柄ではないからである。鈴木前內相に對する彈劾事項の如きになると、內閣全員の承認のもとにやつた仕事なのだから、あれを內相單獨の引責で片附けたのは失當の甚しきものだが、田中首相の場合は全然之とは性質が違ふ。故に內閣全體の破滅を見る樣の結果を來すことは注意して避けねばならぬのだ。之が平大臣であつたら其人ひとりだけ引退して濟む問題だが(水野文相の場合の如く)、首相となるとさうは行かぬのである。水野の罷めたと同じ理由を身に持ちながら首相の相變らず平然たるは怪しからぬと云ふ議論は當らない。第二に之がよし內閣全員の與り知つた事柄だとしても、日本國民の現實の生活の上に取り返しのつかぬ惡影響をのこす底の失態でない限り、引責辭職の理由とはならないと私は信ずる。皇室に對する形式的儀禮をあやまつたことは輕く取扱つていゝと云ふのではない。それはまた別の意味で重大な過失たるに相違なく、從つて、又之は別の方法で有効に糺彈し再び同じ過ちを繰返さしめ

ぬ様十分警告するの途はあらう。大臣をしてその職を辭せしむべきや否やは、専ら現實の政策の問題のみに繋らしめたいと考へるのである。更に附隨の理由として私は第三に、政權爭奪に動もすれば皇室を引援し來るの通弊を阻止するの必要を擧げたい。皇室の事に關して內閣の更迭を論ずることは一切いけないと云ふのではない。之を論じていゝか悪いかは事柄次第である。只從來我國に於ては、やゝもすれば、自家の立場を過分にかためんが爲に又はその反對に敵の困憊を不當に著大ならしめんが爲に濫りに皇室を云々した傾きがあつた。是れこそ直に累を皇室に及ぼすものではないか。皇室に忠なるの外觀を裝うて其實皇室を累し奉る之より甚しきはない。私は平素此弊風に慣るものなるが故に、今次の問題の如きの勃發に際しても、先づ感情的に之に據る糺彈の策動に眉をひそめさせられるのである。終りに第四の理由として私は、政權爭奪の鬪は議會に於て堂々と之を行ふべく、不時の倒閣運動はやゝもすると政治を陰謀の具たらしむる恐れあることを指摘したい。どんな重大な事件が起つても議會閉會中は內閣を倒すなと主張するのではない。實際問題として、今度の出來事は之れ丈けを以て倒閣の理由とするに足らざるは前述の如く、而してその策動の裏面に於て誰かまたよく全然陰謀の痕跡なしと云ひ得よう。之れ本問題に關し予をして消極的態度を執らしめた一理由である。

私が田中首相の行動を非とするの熱意に於て敢て人後に落ちざるを信ずるに拘らず優諚問題に聯りて起れる一種の倒閣運動への參加を特に避けたのは之が爲めである。田中內閣を倒さうと云ふなら、之を國民に訴ふべき理由は幾らもある、敢て優諚問題を待たぬのである。優諚問題に於ける失態もその一つに算へて田中內閣の犯せる數々の罪惡を擧げるのはいゝ、他の事項を悉く不問に附して單に之れ丈けでも田中內閣は引ッ込むべきであると說かれると、私に亦一言の抗議なくして止む能はざるものがある。あの當時斯んな說を述べ立てたら或は政友會の人は喜んだかも知れない。些でも政友會に利用されるのも不本意なので、私は滿腹の不平を抑へて沈默を守つてゐた。それ程に私は政友會に反感をもつ、否政友會に反感をもつのではない、政友會內閣の陽に陰に爲す所の行動の大部分に許す可からざるもののあるを認めて、一日も早くその倒壞し去らんことを希望して居るのである。一旦權要の地を去つたら彼等も必ずや世の大勢に眼覺めるであらう。既成政黨一般に對する私の不滿は容易に取り去らるべしとは固より考へないが、政友會といへども、近き將來に於てはモ少し好感をもてるものとならうとは、私のひそかに期待して居る所である。

天皇中心主義と議會中心主義

この兩主義の何たるかは前項說く所に依ても既に明白であると思ふ。聰明なる讀者は議會中心主義に對比するものを表はさんとて天皇中心主義なる文字を使ふことの如何に不謹愼なるかにも氣付いたであらう。而して國務大臣の輔弼を說くにあたり所謂天皇中心主義なる名に隱れて大政親裁論を固執する者の今日に於てなほ絕無に非ることをも承認されるであらう。

然り、所謂天皇中心主義者を以て任ずる者は今日に在ても澤山ある。それにしても彼等が、議會中心主義の立場を眞向に振りかざして來る最近の首相糺彈運動に、一言の抗辯も爲し得ぬのは何としたものか。斯くてはその誇稱する主義に對して眞の確信あるに非ず時に應じてその美稱を濫用したに過ぎぬと誹られても仕方があるまいではないか。濫用か確信かは分らぬが、私自身も之を振り廻はすものからひどく窘められた經驗を有つて居る。大正十三年帝大教授を辭して朝日新聞に入つたばかりの私が、仰々しい筆禍事件に坐して當局の嚴しき喚問を受け、其の結果忽ち朝日社を逐ひ出される不運に遭つたが、此時の問題が即ち私が所謂天皇中心主義と相容れざる立場を主張したと云ふに歸するのであつた。問題を惹き起した當局の役人が誰あらう時の刑事局長山岡萬之助君、その長官の司法大臣が鈴木喜三郎君であるのを回想すると、この兩君が天皇中心主義を以て議會中心主義に挑戰したのも蓋し一朝一夕の事ではない。

併し乍ら鈴木山岡兩君の樣な思想の一見甚だ我國に忠なるが如く見えて而も其實大に國害を爲すものであるとする信念も、亦我國に於ては可なり古い歷史を有するものである。今私は其一例として明治十四年の東京日日新聞から福地源一郎の筆に成る社說の一節を引いて見よう。

四月二日の社說には斯うある。

（前略）夫レ權ノ歸スル所ハ責ノ歸スル所タリ、其權アリテ其責ナクバ國民ハ何ニ由テ其身ヲ安ジ其自由ヲ享クルヲ得ンヤ、若シ叡慮ノマニ〳〵萬機ヲシロシ召サバ、恐ナガラ其責ハ帝位ニ歸シ、其激迫スルニ際シテハ帝統神種天皇神聖ノ大義モ國民コレヲ顧ルノ遑ナキニ至ランモ計リ難シ、吾曹ガ夙夜憂懼シテ措クコト能ハザルハ實ニ此事ニ候ナリ。現ニ今日ノ政治ヲ仰視スルニ、制度法律ミナ勅命ヲ以テセラル、ガ故ニ、大臣參議省卿ハ皆　聖天子ニ對シ奉リテ責任ヲ有スレドモ國民ニ對シテハ更ニ其責任ナシ。而シテ國民ニ對スル政治

ノ責任ハ直ニ　聖天子ニ集リ、臣下ハ却テ袞龍ノ御袖ヲ楯トシテ責任ノ衝ヲ避クルガ如クニ見ユルナリ、政體ノ然ラシムル所トハ云ヒナガラ、是レ豈ニ皇統ヲ不窮ニ繼承シ奉ルニ萬全ノ計ナリト云フベケンヤ。是故ニ君民同治ノ政體ヲ建ルニ當リテハ、國民ニ對シテハ大臣都テ政治ノ責ニ任ズベシト制定シ　聖天子ハ人望ノ歸スル者ヲ選ビテ大臣ニ任ジ、人望ニ背クノ大臣ハ之ヲ退ケ、一ニ輿論ノ出ル所ニ從テ社稷ノ重臣ヲ定メ、以テ國民ノ責任ニ當ラシメ給フベシ。然ル時ハ國民ハ政治ノ得喪ニ責任ノ人アルヲ知リ、帝位ハ國民ノ休戚ニ怨府タルコトナク、萬世一系ノ帝統ハ天壤ト倶ニ不窮ニ繼承セラレ給ハンコト、疑ヲ容レザル也。

又四月十二月の社説に於ては國務大臣輔弼の職責をば次の如く論じて居る。

（前略）夫ノ政治ハ責任ソノ人アルヲ要ス。責任ソノ人ナケレバ、國會アリト雖モ議院アリト雖モ政治ノ利害得喪ニ關シ國民ハ誰ニ向テ其過失ヲ議ムルトセンヤ。而シテ我建國ノ體ニ於テ　天皇陛下ハ至尊ナリ神聖ナリ法ヲ以テ問ヒ奉ルベキニアラネバ、如何ナル場合タリトモ政治ノ過失ヲ以テ直ニ陛下ノ御身ニ歸シ奉ランハ勿體ナシ、臣子タル者ノ萬ニダモ成シ得ベキコトニ非ルナリ。是レ大臣ヲシテ　天皇陛下ニ代リ奉リ國民ニ對シテ其責ニ任ゼシムル所以ナリ。斯ク國民ニ對シテ責任ニ當ル以上ハ、言フモ憚アルコトナガラ、陛下ニ對シ奉リテハ其責任ヲ第二段ニ置カザル可カラズ。例ハ和戰ノ決ニ際シ輿論ハ和ヲ主トシ　叡慮ハ戰ヲ主トシ給ハンニ、大臣ハ叡慮ヲ體シテ戰議ヲ採ルベキ乎將タ輿論ニ從テ和議ヲ採ルベキ乎、叡慮ニモ戻ラズ輿論ニモ背カザルハ得ベカラザルヲ以テ、斷決ノ時ニ臨シテハ和議孰カ其一ニ依ラザルベカラズ。叡慮ヲ體シテ戰ヒ責ヲ輿論ニ得テ其職其身ヲ犧牲ニ供スルヲ顧ミズト覺悟スル乎、若クハ飽クマデモ諫諍スル乎ニ在ルモノナリ。而シテ國民ニ對シテ責任アルノ大臣ハ即チ社稷ノ重臣ナレバ、社稷ヲ重トスル大義ニ則トリ、輿論ノ在ル所ハ敢テ叡慮ノマヽニ任セ奉ラザルコト其要務ナリトス。天皇陛下ノ大權タル宣戰講和ノ議且ツ然リ。況ヤ議院ノ決議ヲ要スルノ諸事ニ於テヲヤ。去レバ輿論ニ從フノ奏議ハ　叡慮ニ好マセ給ハザル條タリトモ　陛下ハ大臣ノ請狀ヲ批准アラセ給フベク、又輿論ニ違背スルノ大臣ハ寵遇信任ノ人タリトモ之ヲ退ケ給フベキコト、立憲政體ノ最要訣ナリト云フベシ。

右は明治十三年から同じく十四年にかけて民間に於ける國會開設運動の盛行するに連れ、又十三年の暮には元老院がかれて

勅命を奉じて調査中であつた憲法草案を上つたと云ふ報道に刺戟され、有志の間にも各方面に憲法の調査研究を試むるものあつた際、東京日日新聞また福地源一郎に囑して長文の「國憲意見」を作らしめて紙上に連載したが、其中の一節を抄録せしものである。當時民間で作られた憲法案にいろ〳〵のものあるが、東京日日所載の「國憲意見」はその最も詳細にして最も整備せるものである。前後十章に分れ三月三十日から四月十六日まで連載されて居る。當時福地はまだ純然たる御用記者となつては居ない、孰れかといへば十四年春頃の東京日日は政府反對の側である。けれども福地は伊藤其他の高官の間に個人的相識多く、國憲を按ずるに方つて必ずや其等の意見をも參照したに相違ない。從て彼の文章は或は當時の有力なる政治家の所見を代辯するものであるかも知れない。この意味に於て我々は前記の文章を誦讀して實に感慨無量なるものがある。五十年足らずも昔のものだから措辭に生硬粗笨なるもののあるは免れないとして、唯その内容を僞す意味に至ては今日に於ても殆んどその儘容認されねばならぬものであると謂へる。

孰れにしても所謂天皇中心の政治主義は、明治の初年から眞面目な政治家からは排斥されて居つたものである。而もそれは專ら皇室の御爲に斥けられて居つたといふ點に我々は特に注意するの必要がある。

支那の形勢

張作霖の北京落ちで支那の形勢は急變した。但し格別豫想を外づれた急變といふ譯ではない。所が奉天郊外に於ける乘車爆破の慘劇に依て變調は更に一層の著しさを加へた。運の強い張作霖は九死に一生を得たとは云ふものの、毎日の新聞は傷害の重大を以て生死の見定めがつかぬと報じて居る。孰れにしても張家の沒落は最早疑を容れぬ事實であり、國民軍に依る支那本土の統一と云ふ事の上に、更に滿蒙形勢の急變といふ事が加はり、隣邦の形勢は今や九天直下の姿にある。併し繰り返して云ふが、斯の如きは決して我々に取て意外の變轉ではない。若しそこに何等か少しく意外なるものがあるとすれば、其變化の餘りにも急激なることだけである。案外に早くは來たが落ちつく先は豫定通りだと謂つていゝ。從てまた這の急轉に際して如何の對策を講ずべきかに付ても、我國として今更狼狽すべき筋合ではない。怠慢でなかつた限り、政府當局に於ては疾くの昔に相當の對策が講ぜられて居た筈だ。

たゞ國が近いだけに、從てまた利害關係の密切なだけに、熱。

烈なる希望が冷靜なる形勢の觀察をあやまらしめると云ふことが無いでない。愛情に溺れた親がとかく子女の缺點を見損ひ、又儲けたいくく一心で突進する商人が飛んでもない誤算から大損をする等の例にも現はるる如く、斯くあれかしと熱心に冀ふ心の闇は、動もすれば燈臺の足許を暗からしめずば熄まない。支那の問題に付て、殊に滿蒙の問題に付て、我國一部の論壇に抑も斯の弊なしと云ひ得るか。政府の一角にすらこの弊ありしことの結果は、現に慘憺たる禍害を今日に殘して居るではないか。滿蒙に付ては、就中張作霖との關係に付ては、自己の利害より打算して公正を裝うた得手勝手の議論の行はれんことは、今より大に警戒の必要があると思ふ。

尤も滿蒙形勢の變と云ふことに付て具體的のことは未だはツきりとは云へない。張家覇業の破滅と云ふことだけは斷言出來る。之に代つて如何なる種類の勢力が支配者の地位に立つか分らない。が、要するに問題はたゞ二つに分れる。誰が支配權を握るにしてもそが支那本土の國民政府と連絡を取るか否の點是れである。例へば張學良が一時父の地位に代り立つとする、滿蒙は事實に於て暫く北方の一獨立地域たるの形を續けよう。之に反して別に揚宇霆が推されたとする、やがて滿蒙は統一された支那共和國の一部分となるに相違ない。二十餘年張作霖に依てかためられ其の以前といへども絶へて革命の風潮に見舞はれたかつた滿蒙のことだから、變るにしても他地方の如く急激でないのは當然だとして、結局この地方が永く統一的風潮の外に立ち得るか否かは問題である。滿蒙だけは別天地だと考へる人は我國に案外に多い、中には我國の力で優に別天地たらしめ得ると信じて居る人さへもある。將來の對策を考ふるに際して、此等の點に愼重なる攻究を加ふることは最も大切だ。但し我國が滿蒙に於て特殊の利益を有つといふことと滿蒙を別天地たらしむべしと云ふこととは、全然別個の問題である。

南方國民軍の北支略服を以て漢土統一の端と觀る人は、滿蒙も必ずや近き將來に於て統一民國の一部となる運命を疑はぬであらう。從來の行掛り上こゝ暫くは滿蒙に於ける覇政の絶滅を期し難いかも分らない。併しそはたゞ時の問題に過ぎないと觀る。張作霖の代りに誰れが覇王となつたにしろ、其人の使命は、暫く滿蒙の混亂を抑へ機の熟するを待つて徐ろに之を中央に捧ぐる役目をつとむるに過ぎない。新に前清朝の遺孤を奉じて獨立帝國を建つると云ふが如きは、到底大勢が許さないと思ふ。然らば我々が滿蒙對策をたて直すにしても、結局の大勢の何處に

趁りつゝあるかを看取することは、極めて必要な事とせられねばならぬ。

たゞ問題は隣邦今日の形勢を以て統一大業完成の端緒と觀るべきや否やの點である。支那の事といへば朝にして暮をはかられざるを意味すとされる程に、彼地の形勢は由來轉變極りなかつたのである。之れ丈けを念頭におけば、今日支那本土を統一するに成功した國民軍政府をも、我々はいつまで恃みにし得るか分らぬことになる。之が結局あてにならぬとすれば、滿蒙の形勢も固よりどうなるか分つたものでない。我國の力で如何樣に左右することもまんざら不可能でないかも知れぬ。故に今日の國民黨政府の基礎は一體どれだけ堅いのかと云ふが最も主要な問題になる。此點に關し最近操觚界の輿論が大體に於て私のかねて關知する所と一致するのは、私の亦ひそかに意を强うする所である。

結論は今更云はなくとも分つて居るだらう。私はたゞ茲に支那革命運動の歷史を回顧して憂國志士の不屈不撓の活動を讚美したい。

滿人の支配に對する漢人の憤懣を引つ張つて來るなら、支那の革命運動は清朝の成立と共に起つたと謂はねばならぬ。近代精神に目ざめての新しき意義の革命運動を、孫逸仙の初期の陰謀にはじまると觀れば、それも今となつては既に三十四年の昔に遡ることになる（孫逸仙が初めて廣東に事を擧げんとして破れたのは明治二十八年晩春のことである）。隣邦有爲の青年が我が東京に於て中國革命同盟會なる秘密結社を作つたのは明治三十八年である。例へば板垣退助の下に集つた自由黨が今日の政友會の前身だといふよりも、モ少し强い意味に於て、この同盟會は今日の國民黨の前身であることを思へば、支那の革命運動が孫文といふ英雄の個人的事業から青年學生を網羅する國民的事業にまで進展してからも、今日まで既に四半世紀の星霜を經て居るのではないか。國民的革命運動は遂に明治四十五年十月を以て清朝を斥くるに成功した（清朝の正式に退位したのは翌年の春だけれども）。併しその結果として出來た中華民國は、共和政治の外形を備へてその實永い間官僚軍閥の專恣横暴の爲め、如何に多くの苦盃を飲まされたか分らない。此の間また彼等革命志士の忍辱は十七年も續いて居る。其間固より事に當る人を代へたことは一再にとゞまらない。革命の事業蹉跌として振はざるを齒痒ゆがり支那人の爲すなきを罵倒する聲も可なり我國に高かつたが、今にして思へば、革命の精神があらゆる强力の傳統と衝突しつゝ、不屈不撓その目ざす標的を一心に見つ

めて傍眼もふらず驀進した武者振りには、眞に敬服に値するものがあつたのだ。三十餘年の踏みかためられた地盤を有する革命の精神が今日いよ／＼多年の翹望たる北京を乗取つたと云ふことは、一體我々に何事を語るものであるか。

孫文がはじめて革命運動に手を着けた頃は、滿朝がまだ全盛を誇つた時代であつて、彼の一味は全く郷國に身をおけず常に國外に亡命流離せざるを得なかつた。この時代彼等が如何に數奇慘澹の生活を送つたかは、今に之を熟知する者我國にも頗る多い。而も彼は屈せず機會を見ては運動を繰り返した。又彼に應じて起つたものも外に少くはない。けれども出ては潰され一刻も芽を吹くの餘地を與へられず、斯くして革命黨は殆んど根を絶やし幹を枯らさるるの趣があつた。中華革命同盟會の成立に依て新に盛容を張つた第二期に入つても、革命運動は漸く衰頽の色を現した滿朝に對して猶ほ物の數にも足らぬ微弱なものであつた。革命運動の二大人傑孫黃の連繫成り、天下の青年共下に集りて悉く彼等の制令を奉ずといへども、個々擧ぐる所の彼等の策動は、徒らに有爲の青年を非命に斃すにとゞまつて些の實效を擧げて居ない。只遠く邊境に在て清朝勢力の末梢を刺激し得し位が、第一期に比して多少の進展を見たと云へば云へる。やがて革命は第一段の成功を告げ、中華民國の建設を見た。併し之に滿悅の觥盃を擧げたのも束の間で、一代の怪傑袁世凱を頭領に仰ぐ北方官僚の一團は容易に實權を革命黨に譲らない。從て革命黨よりすれば、前門に虎を防いで後門に狼を迎入れた形になり、革命成功の外形の下に政治は依然として從前の專擅に毫末の改善を見なかつた。外形の成功を更に實際眞實の成功たらしむる爲に、彼等は更に袁世凱と戰ひ、段祺瑞と戰ひ、誰れ彼れと續いて最後にまた大に張作霖と戰はねばならなかつたのである。これが實に今日までの形勢ではないか。而して今や彼等は始めて多年の苦心が酬へられ、北京の攻略に由て支那本土を完全にその掌中に收め得たのである。こゝまで來るにどれだけの貴い多くの犧牲が拂はれたか。眞に七顚八起の苦みを嘗め盡した跡を思ふとき、彼等の作つた道の大勢は最早支那に於て抑へ難きものなるを思はさるを得ぬ。大勢の進みは或は至て緩慢だともいへよう、併しその歩武の確實なるは亦他に多くその倫を見ない。少しく眼識ある者は必ずや之に逆行することの如何に無暴なるかを感得するであらう。

形勢の變に基く我國新對策の何であるべきかは、漸を以て具體的の形に現はれ來るであらう。吾人も亦今必要に應じて之れが講究と評論とを怠るまい。たゞ豫め一言して置きたいこと

は、此際我國も亦根本からその概括的態度を改むるを要することである。と云ふ意味は外でもない。第一に我國は從來專ら隣邦の舊勢力を眼中に置いて來た。尤もこれは舊勢力に故らに阿つたのでもなければ又不當に新勢力を無視したのでもない。一國の外交方針としては現存の勢力を有りの儘に認めて之を交渉の相手とするは已むを得なかつたのである。而して今や此點は全く方針を改めねばなるまい。第二に我國は彼國の內紛容易に安定せざりしの結果として自衞上種々の特權を要求せねばならなかつた。所謂我國の有する既得權の中には、最近の形勢の變化に伴つて、我から進んで棄て去らねばならぬもの又棄て去るを得策とするものもあるに相違ない。一旦獲たものは事情の如何に拘らず之を離してならぬとするは、特に親善の關係をいやが上にも開拓すべき支那に向つて執るべき態度ではなからう。況んや所謂既得權の中には、或は支那自身の向上發展の爲に多少の障害たるものもあるべきに於てをや。之等の點に付て我々は出來る丈け虛心坦懷でありたい。無暗に同情を押賣りして宋襄の仁を學ぶ必要は固より毫末もない、遣れないものは返さぬことに決めてもよく、欲しいものは新に請求しても一向に差支はない。要は共存共榮の原則に基き胸襟をひらいて新に兩國將來の關係を協定することである。之が爲に私は從來の行掛りや約定やを無暗に引援せぬ樣にしたいと考へるのである。

之を一言にして約せば、要するに、支那と日本との將來の關係は在來の約定に基いて決めらるべきものでなく、主としては一旦白紙の狀態に還りて別に新に兩國の利害を省量し、純然たる理義の指示に遵つて決めらるべきであると云ふに歸する。

小題小言

田中首相刺殺の企謀

田中總理大臣を上野驛に刺さんとした靑年がある。斯かる犯行の行はるる事に付ては、第一には云ふまでもなく犯人自身の精神的缺陷が問題になるけれども、更にまた次の二原因をも省量の中に入れておく必要があらう。

一は公事に關する立場の相違を直に人身攻擊の形に現はすことである。それも單純な人身攻擊ならいゝ、或は皇室の尊嚴を冒瀆すと云ひ或は建國の精神を蔑にしたと云ひ或は立國の基礎を危うすと云ふ。いづれにしても聞く者をして國安のため一日も相手の生存を許し得ざるが如き感を抱かしめる。敵を陷るるには之に優る良法はないが、之より生ずる結果の恐るべきを思ふ

とき、心ある者はつとめて斯かる言論を避くべきである。甞て伊庭想太郎は榎本武揚の酒席に於ける放言に動かされて星亨を刺したとやら。近くは原敬の非命に倒れた例もある。人を責むるに言語の愼むべきを私は特に自ら愛國の士を氣取る人達に要求したい。併し斯種の事柄に就て最も不謹愼なるものの政黨者流なることは亦云ふまでもない。

二は政治家が輿論の趨勢を無視しても飽くまで一旦獲た地位を離れじとする風を示すことである。輿論の嚮背に依て政權のすら〳〵と移動するので政界の空氣は穩かに疏通する。政權が腐敗手段を弄して輿論を意の儘に左右し、又は輿論我に背くの明なるに拘らず言を左右に托して當然の處置を取らぬとすれば、勢ひ直接行動を誘致するに至るは已むを得ない。とかく暗殺などいふものは、少數者に到底枉屈を伸ぶるの機會を與へさる處に起る。我國でも朝鮮や台灣に此種不祥事の起るは、當分は免れ難いことかも知れぬ。憲政の布かれた日本本土に於ては、本來何も直接行動に訴へて政界の疏通をはかる必要はないのである。而もそれが時として行はれるのは、輿論の嚮背に應じて政治家の當に執るべき處置が文字通りに執られないからである。少くとも人をして然信ぜしむるものあるからである。この點に於て今日の政友會内閣は或は自ら暗殺を誘發せるの道徳的責任を免れぬかも分らない。

宗教家大會

六月初旬東京に宗教家の全國大會とやらが開かれた。不幸にして之を參觀するの暇を得なかつたが、諸新聞の傳ふる所に依れば、馬鹿に舊式な頑固論を吐く者などもあつて宛として四五十年前の日本を見るが如くであつたと云ふ。所がジヤパン・タイムスは特に詳細なる報道を載せ、大會の成績に對しても可なりの蔑辭を送つて居る。邦字新聞の報道が部會騷擾の記述に偏し、人をして大會の全部が混亂裡に終つた樣に妄信せしむるの恐れあるも、その實いろ〳〵の意味で有益な會合であつた、只始めから騷亂の目的を以て會場に不遜の言動を恣にした一味のしれ者あつたことは呉々も遺憾の至であつたと附記して居る。而して該紙が之を柴田德次郎君と報ずるを讀んで私はいさゝか駭いた。面識はないが、私は柴田君を愛國至誠の士と聞いて平素ひそかに尊敬の情を寄せて居る。タイムス所報の如くんば同君に一言の辯明あつて然るべきであらう。

併し之はどうでもいゝとして、同大會が賀川豐彥君の演説に憤慨して彼に一種の責罰を加へたのは、何と謂つても驚くべき大醜態たるを免れぬ。賀川君の一言がよし事實の正しき判定に

遠かつたとしても、會衆は一應も二應も之に反省するの必要があらう。況んや彼れの断定は事實として吾人のまた之を裏書きをするを辭せざるものなるをや。暫く一歩を譲り、今日の宗教家の全部が必しも資本家の奴隷に非ずとするも、資本主義に屈從すべからざるの明白なる意識の下にその宗教的任務を果して居るもの果して幾人あるだらうか。今日のまじめな青年の大多數が皆這般の情形に異常の關心を寄せて居る際、苟くも宗教家を以て任ずる者は、賀川君に警告さるるまでもなく、自ら進んで問題の討究と自家の立場の反省とに十二分の力を注ぐべきである。自分の至らざるをば棚に上げ、偶々之を指摘せる者に喰つてかゝるのは、例へば女郎屋の亭主が集りて山室軍平氏に營業妨害の紙彈を放つの類にもひとしい。私は今更斯かる宗教家の反省を促すの煩に堪へない。寧ろ彼等の自ら墓穴を掘るにまかせて速にその絶滅を見んことを國家の爲に慶福だと考へる。

海上爭議の解決に學べ

日本海員組合と船主協會との間に勃發した這般の爭議は、我國空前の海上大爭議であつたが、それが極めて短期間に圓滿の解決を見たことも亦、我國勞働運動史上空前の出來事と云つて差支ない。私は、この爭議顚末を以て、混沌たる我國勞働運動の上に多大の教訓を垂れると共に、我國の全產業界に對しても亦極めて有益なる示唆を與へるものと信ずる。今この爭議解決に就いて、吾人の最も興味深く感ずる所を擧ぐれば、

第一、船主協會と海員組合とは從來より海事協同會といふ協同機關を作り、海上勞働需給の調整、船主と船員との意志の疏通及び相互理解、船員の福利增進等を圖りつゝあつた。その爲めに此兩者は平素敵對關係で對立せず、常に圓滑に物事を話し合ふ間柄にあつた。その結果、一般の勞資關係に有り勝ちな猜疑や誤解の念が毫も其間介在しなかつた。且つ又兩者の關係は、單純な勞資協調關係ではなく、海員組合が完全なる團體協約權を獲得（しかも我國最初の獲得）した上での、對等的協調關係であつた。そこで今回の爭議に於ては、野田爭議に於けるが如き組合破壞の陰謀がある譯でなく、純然たる經濟取引上の問題に關する意見の不一致から發したものに過ぎず、問題の內容の極めて重大なるに拘らず、斷じて惡性を帶びたものではなかつた。故に勞資双方に於て、多少の聰明さがありさへすれば、爭議は短期間に圓滿解決を見るべき情況の下にあつたと云ふことが出來る。斯くの如きは正に英國流の行き方であつて、海事關係の勞資双方の態度が之等先進國の健實なる潮流に啓發されし所多きを思はせる。いづれにしても、今回の大成功をもたら

すに至つた根因の何たるかは大に吾人の考ふべき點であらう。

第二、野田の爭議は、資本家側が政治勢力と結托したことによつて甚しくこぢれたが、今回の爭議は、かくの如き政治關係から離れた純粹の產業爭議に終始したため、問題を複雜化しないで濟むことが出來た。此の點も我國今後の產業平和の上に大なる啓示を與ふるものと云はねばならぬ。

締切期日の切迫のため極めて簡單に述ぶるに止めたが、勞働組合も資本家も政府も政黨も、今回の爭議解決より大に學ぶ所あらんことを希望するものである。

清澤君の批評に答ふ

長友清澤洌君から「公民講座」六月號の寄贈をうけた。その中の政界時評欄に於て清澤君は本誌五月號所載の拙稿時評に關して疑議を提出されて居る。問題となつたのは無產黨の對議會策」なる一篇中私が『原理的に既成政黨に對しては無條件に不信なる旨の態度を明示すべきである』と述べた點である。清澤君は政黨の墮落腐敗は認むるが『併しそれ等の政黨もターデターによつてその位置にあるのではなくて、有權者一人々々の選擧によつてそこにあるのである。即ち國民の外に政黨なく、政黨の姿は如何に醜惡であらうともそれは國民の教養の程度の反映にすぎないのである、これが官僚や軍閥の如く全く國民を背景にせざるものと異る所なのである』とて、官僚や軍閥を嫌惡すると同じ心持で政黨を排斥することに反對の意を表されて居る。

時評などいふものは系統的に物の理論を說くのでないから、兎角議論が斷片的になり、文字の足らざる所から誤解を招ぐ場合も相當に多いと考へる。私が公民講座の一文に依て直に清澤君の立場を論定するの輕卒なるが如く、私の本誌五月號の時評も或は私の宿論を明にするには極めて不十分なものであつたかも知れぬ。私は多くの問題に就て清澤君と其見る所を同うするものであるが、ひとり前記の問題に付き全然考を異にするのかどうかはよく分らない。清澤君の說かるることの大部分には私も心から贊成だ。文字の末に拘泥すれば多少議論を闘はす餘地のないでもない樣だが、恐らくそれは事理を讀者の前に明にする上に無益の仕事であらう。そこで私は私の立場をモ少し丁寧に說いて再び清澤君の教を乞ふことにする。

一、私は多數政治といふものに一つの積極的の意義を認めて居る者である。少數專制に對する牽制力たらしめるといふ如き消極的意味だけのものとは思はない。眞に多數のよしとするものが本當に最高の價値を有するのだと考へるのである。斯うし

た私の政治學上の信念はこゝに詳説するの限りでないが、唯一つ云つて置きたいことは、多數政治の積極的意義の發動は一面に於てまた大衆の不斷の教育を條件とするものだと云ふ點である。大衆が常に數へられ導かれ又引き揚げられ其上で判斷するのであればこそ、その多數のよしとする所を社會的に亦よしと認めることが出來るのだと思ふ。斯くして私は常に政治と廣義の教育との密切なる關係を說いて來たことは、本誌讀者も認めらるる所であらう。

二、さう云ふ立場からして私は、從來凡ゆる政治行動の得失を批判するに當り、その最も重要なる標準として教育的效果如何を擧ぐることを怠らなかつた。例へば選擧運動をやる、之を私は民衆教育の好機會として觀る、故に若し之が民衆智德の向上の目的と全然背馳するが如き形に行はれるなら、私はいつでも之を痛撃してやまぬのである。その掲ぐる政策が如何に時弊に適切なものでも、選擧に於て巨額の金を使ひ大衆の良心を蹂躙して顧みぬのが許すべからざる罪惡だとして、私が始めから武藤山治氏を排撃してやまぬのも之が爲であつた。

三、この點に於て私は既成政黨を全體として眞に國民の良心に基礎を置く政黨とは認め得ない。個々の代議士に就ては或は稀に例外があるかも知れぬ。併し全體として彼等は端的に國民大衆の良心を動かし其の自由なる判斷に推されて選出されたと觀ることは出來ないのである。選んだ方は或は眞面目に選んだかも分らぬ、併し政黨側は法に背き德義をやぶり風教の紊るゝを顧みずして凡ゆる險惡なる手段方法を執つた。之が改まらなくて我國の憲政はいつ本當の效果をあぐることが出來るか。既成政黨は概していふに國民の信望に押されてその地位に在るに非ず、醜汚なる對價を拂ひ國民の良心を瞞着して今の地位を掠め取つたのである。是れ私が原理的に既成政黨を排斥せよと云ふ所以である。眞の嚴格なる意義に於て、彼等は斷じて國民の良心を代表するものではないからである。

四、現在の政治組織に在ては、議會が有力に政府を制し、國民が有效に議會を制すると云ふことが必要である。併し最も根本的なるは民衆の牽制力の强固なることである。あべこべに議會が手易く民衆を操縱することが出來ると、政府も亦直接に干涉誘惑の魔手を民間にのばして益々議會を劣弱のものにする。政府がどんなに干涉しても思ふ通りにならぬとなつて、始めて民衆政治の端緒が開けるのである。それだけ民衆の良心を蹂躙する手段の流行は、憲政の正しき發展の爲には斷乎として排撃せなければならぬのである。殊に腐敗行爲の公然と行はれ勝の我國に於て然りとする。是れ私が既成政黨の道義的立場を論ず

るに極度に嚴峻なるを厭はぬ所以である。

五、去ればとて、私は、ともかくも國民と連絡を保ち又一面には多少の程度に於て國民の思想を顧慮しつゝ國務に鞅掌する者として、議會内の政黨に相當の權威を認むるに躊躇するものではない。機關として議會は政府を監督すべきものである。這の任務を盡すに付て政府の方に非違越權の處置あらん乎、吾人は遲疑する所なく議會の爲に政府の非行を抑へるであらう。この意味に於て私共は決して今日の既成政黨を官僚軍閥と同一視するものではない。

六、從て私は無產黨の諸君に向つても、兎に角一應は既成政黨の人達の代議士としての地位を認め、議員としての職務を彼等と共に果たせと進言したのであつた。即ち個々の事務に付ては意見の異同に從て進退を共にせよと云ふのである。

七、けれども共動は個々の事務に付てに限り、全體として彼等と提携することは避くべきだと今以て考へて居る。無產黨としては、代議士と選擧民との道德的關係を最も重大視すべきであり、この限りに於て、彼等は既成政黨の立場をば根本的に承認し得ぬ筈だからである。私が原理的に既成政黨を斥けよと云つたのは、要するに右の意味に外ならぬ。

海外近事

英國の新聞專制傾向に對する批難

輿論機關が極めて少數者の手に落ちた場合に、そこに弊害はないか。また弊害があるとすれば社會はこれに對し如何になすべきか。英國では今この問題が朝野の視聽を惹いてゐる。そしてそれは日本においても、遠くない將來において必らず問題になるであらう。

この問題に對して英國の下院は滿場一致を以て『英國の新聞は、僅かの除外例を外にして、公衆の利益と相反する方法をとりつゝある』旨を決議した。この意味は『新聞が強大なるトラストの手によつて合同合併せられ』輿論の製作が少數專制に陷する危險あるからである。これは必らずしも下院だけからの聲ではなくて、大審院長のベリー氏も自身嘗て新聞記者でありながらこれを強調し、また新聞記者協會々頭ピーカー君も『新聞合同の近代的傾向から起る危險』について說いたのだつた。

元來、英國の事情は日本のそれと極めてよく似通つたものがある。國が狹いのでロンドン及びマンチエスター迄で發行される新聞は、その日付の朝、全國に配達されることが可能であり、殊に將來飛行機が發達すれば、市內版は全國に配達されるであらう。これに加へて地方版をものせてあるのだから、地方新聞及び微弱な基礎にたつ新聞は、多くは壓迫され盡して、輿論機關は益々小數者の手に落つることになるのである。

そこで英國の新聞の發行部數は何れほどあるかといふと、一九二四年六月に世界廣告業者大會にルイス・ウイレー君の報告によると英國及びアイルランドで每廿四時間に一千五百萬部出るとのことで、これは全人口の三割一分に當るわけである。

同じ頃の米國の統計によると、米國では人口の二割八分に當つてゐたが、たゞこゝに問題なのは當時米國には日刊新聞二千三十あつたのが（その後この數字は增加してゐる）、英國では百五十しかなく、しかもこの數が減少しつゝあるといふ狀態である。そして強力なものは益々強力になり、微力なものは益々微力になつて行く。

ロンドンにおける最近の新聞の消長を顧みると、保守黨側のスタンダード及びモーニング・アドバタイザーは失くなり、自由黨側のモーニング・リーダーも廢刊した。それからグローブや、ペル・メル・ガゼット（嘗てモーレー、ミルナー、ステードなどが主筆として由緒がある）は勿論、ウエストミンスター・ガゼツトや、サン及びセント・ジエームス・ガゼツトも失くなつて居る。ダブリンの有名なフリーマンス・ジャーナルも、もうない。デイリー・クロニクルとデイリー・ニユスは、定價を下げ、過去におけるやうな權威は全くなく、氣息奄々だ。

かうした一部の新聞の沒落は、やがて他の新聞が資本家の手に落ちて益々繁榮するのを物語るものである。今のところ最も優勢なのは死んだノースクリッフ卿の弟のローザミア卿で、同氏とビーヴアーブルック卿と組んで、最近地方に十三個の夕刊を發行することを發表した。これに對する新聞王はサー・ウイリアム・ベリー及びサー・ゴアー・ベリーの兄弟

で、この取組は日本における大阪朝日（東京朝日）と大阪毎日（東京日日）の競爭を思はしめるものがある。これにジヤコブ・アスターのロンドン・タイムスとオブザーバー紙などを加へて、三新聞王をあげることが出來よう。

更に一寸珍らしいのは、他に事業を有する資本家が新聞に投資することである。これは根津嘉一郎君が國民新聞に投資すると同じで、英國の場合においてはコヽア製造業者（菓子屋）のCadburysがデイリー・ニウスへ、Rowntrees（同業者）が他の新聞へ投資したのである。いづれも新聞が大企業になつて、大資本を擁さなければ經營出來ず、また資本さへあれば、ある程度まで新聞の經營が出來ることを物語るものでなければならぬ。

この外に無論有力な新聞がないのではない。かの The Yorkshire Post の如き、The Scotsman の如き、マンチエスター・ガーデンの如き何れも獨立してやつて行つてゐるが、併し大勢は以上の如くである。そしてこれ等の新聞王がいづれも自己の立場を有して、自身の意見による輿論を形成して居る以上は、英國の上下が、漸くこれに注目し出したのは無理のないことである。日本も何れはこの問題が出て來るであらう事實に鑑みて、英國の新聞問題を紹介する次第である。

カイゼルのデモクラッシー觀

『デモクラッシーは失敗ではないか』といふ問題について、現在歐米で盛んに論議されて居ることは前の號で述べたことがある。思想問題については、何といつても英國が先頭をつとめるが、英國で一巡これ等の議論が試みられて、やゝ下火になつた今、この問題は米國に移つて論題になつてゐる。

比較的に自由主義の立場に居る雜誌Forumは最近『デモクラッシーとは何ぞや』といふ定義について普ねく讀者の懸賞を募集した。これ等の定義は相當に面白いものがある。例へばこんなのがある——

デモクラッシーとは人間が、かれ自身の壓迫（オプレシヨンス）を選ぶことを許す國家の組織のことである。（中略）。デモクラッシーは神權を信ずる政府とは反對に、紙の上に基礎をおくものである。それは紙から、紙によつて、紙に對するものである（It is from paper, by paper, and for paper）。彼等が人民をしてなさしめたいことあれば、それを紙に書く。充分な同意者があれば、その紙は法律になる。それに反對するものは自身思つてゐることを書いて新聞紙を造る。これがデモクラッシーである。

同じ頃のカレント・ヒストリー誌（五月號）には『デモクラッシーは失敗なりや』といふ題目で、四名の大家の說をかゝげた。その内の二人はデモクラッシーは失敗なりといふ論者で、前カイゼル・ウイルヘルム二世とイタリーのムツソリニ君の說である。こゝでは簡單にカイゼルの說を紹介してみる。

カイゼルはまづ『議會主義は何處でも信用を失墜してゐる、議會主義と腐敗とは同一のものである』と口を切つていふ。『皇帝は一個人であるから良心がある。群衆には良心がない。君主制においては一人に責任がある。議會的共和國においては政府が幾つにも分れてゐて、終局の責任は何人の上にもない』この點から出發してカイゼルは言葉を續ける。

『スウエーデンの宰相オクセンステルナは告白して「子供よ、世界が如何に少ない智慧

で支配されてゐるかを、お前は知らないのだ」といつたが、これこそ特にデモクラッシー政治に當てはまるものだ。（中略）。群衆といふものは、永遠に子供であつて決して成長せず、また永遠に子供のやうな本能に刺戟されるものである。群衆とは米國のメンケンもいつたやうに、「子供の思想と印象とを脱せず、春情發動期の精神狀態をうろつき、そして重にそれ以下であるところの男と女とより成立してゐるもの」である。群衆は子供と同じく敎育と、指導と、注意とを必要とする。この幼兒的な本能が無責任なる者の手によつてエキスプロイトされることは禍なるかな。經驗なき少年は、デモクラッシーが理想を提供するが故に魅せられる。併しこの理想は誤まれる前提の上に立てられたものであつて、それは個人の集つたもの、稱して「國民(ピープル)」といふものを豫定してゐるが、そんなものは實際に存在してゐない。過去の經驗が語りうるところでは、自己反省をなし、自我的でなく、健全な判斷を有する「國民(ピープル)」といふものは存在しえない。そんな People はユートピア以外にはない』

現在のデモクラッシーを排斥するカイゼルは、然らば如何なる組織の採用を可なりとしてゐるか。かれは『實際のデモクラッシーは君主の統治の下にのみよく榮える。世界のデモクラッシーに關する總べての論理は、かつてスタイン男がわが皇祖ウィリアム第三世に提出したところの生きたデモクラッシーに比較して價値なきものである。かれの意見によれば、眞正のデモクラッシーは職業によつて得た判斷と經驗により市民の中から、また彼等の智識によつて、その中から適者を選び、國家の運轉に當るものである、この市民から構成されるものがデモクラッシーである』と結論してゐる。かれの意見は何よりも先きに君主制を持つて來るところに特長がある。

『スタインの生きたデモクラッシーは一國の政府の形式とは獨立したものである、それは全然、君主制の中に如何(いか)やうにも伸縮自在になつてゐる』

米國文明研究の流行

歐洲において近來、米國を研究する熱が盛大なのは、日本において寧ろ不思議と思はれるくらゐである。歐洲その他が悉く疲弊してゐるのに、何故米國だけがあの繁榮を維持してゐるかといふのが彼等の驚異點である。從つて英國は勿論、各國は何れも米國に研究者を送つて、その產業狀態を研究し、これを自國に應用することにつとめてゐる。

併しこれは多く實際經濟のことであるが、最近は哲學者や思想家が米國に出かけて、これを研究する風がある。その例はドイツのヘルマン・カイセルリンク伯や、英國のラッセル等である。カイセルリンク伯は最近米國を一巡して歸國したが、新聞記者に語つていふ。

「私は米國が新しい文明の初頭にあると思ふ。そしてその文明は私が十六年以前に來た時は無かつたもので、それはその後生れたものである。當時は米國は殖民時代であり、ホーマー風の時代であり、また神話時代であつた。米國の歷史は世界大戰と同時に生れてゐる」

同伯のいふところの新文明とは高い建物(たてもの)や膨大な鐵道ではない、それ等は單に開拓者であるにすぎない。

『私は米國の新文明が如何なるものであるかについて明確に知るとはいへない。それは嘗て世界に存在したことのない繁榮の上に礎かれた始めての文明であるであらう、何故なら米國人は社會的に天分を有する國民である。勿論その公共事業を濫用してゐるものも少なくないが、私は彼等が眞面目に社會的に物を考へてゐると信ずる。かれ等は彼等の國人のために考へるのである』

同伯は文明とは結局境遇の產物であるから、各國はその特質を生さなければならない。そして米國は恐らくギリシヤやドイツのやうな哲學者を生むことはないであらう、それは米國の長所ではない、各國はその特長を發揮せねばならぬ。

『私の經驗するところでは米國は大國である。そして支那やロシアも亦大國である。私は米國は歐洲に諒解されるよりも寧ろロシア及び支那に近いと思ふ。例へばジヨン・デユイーは米國の生みだしたる最も重要な人物であるが、かれはまづロシアで發見され支那で珍重されるにかゝはらず、歐洲で知つてゐるものはない』

かれは『これから英國に行つて違つた立場から米國を觀察しよう、何故なら米國と異なること英國の如きはないから』とニユーヨーク出帆の船にのつた。

米國の文明を世界始まつて以來の新しいものだとする點においてバートランド・ラツセルも同感である。米國が機械文明を打ち立てたことは驚くべき事實であつて、ラツセル自身も一種の矛盾を感じてゐる。

『私自身の感じからいへば私は歐洲流であるが、私の信ずるところからいへば全然米國の側につくのである。私が本能的に珍重することは、米國が全く價値なしとするところのものである。それは純正科學、美の悅樂、愛、歷史の繼續性といつたやうなものである。私は一つの自動車を製作して居つたのを、二つにするといつたやうな計畫については殆んど何等の趣味を覺えない。私は私の心の底では田舍がガスリンの臭ひで進步するであらうとは感じえないのである。併し私が目的的意見をとらうとする場合には、米國を判斷するのに私の好むところからでなくて、米國人の好むところによつて判斷するの外はないのである。私の信ずるところによれば、米國が造りつゝある文明は、世界の如何なる歷史に存在したよりも、高い幸福のレベルを生み出したものである。』

米國の繁榮は然らば何處から來たか。ラツセルはそれを富源の多いことよりも、寧ろ米國人が淸教徒であつたことに原因を歸してゐる。何故ならばラテン・アメリカも富源の多いことに相違はないが、合衆國一ケ國だけ榮えてゐることが、その證據である。そして淸教徒(ピユリタニズム)とは何かといへば、『現在の快樂を捨てゝ、それを將來に得よ』と敎ふるものである。この心の持ち方が資本を蓄積して結局產業主義の繁榮を持ち來たらせたものである。

ラツセルは米國繁榮の原因を宗教的、精神的に歸してゐるから、これから何れだけこれが長く續くかゞ問題だといつてゐる。それは結局將來如何たる教育を施こし、それが成功するかにかゝつてゐるといふのが、その米國文明觀である。

淺草公園

高濱虚子

三社祭

向島の百花園で少數の人の俳句會があつた歸へり、次回の兼題は「祭」といふことにして、今日は淺草の三社祭があるから、其處に立寄つて、祭の光景を見て歸らうといふことに話が決まつた。私たちは堤の上で、乘合自動車を待合せて、其れに乘つた。乘客は一杯で、後れて乘つたものは座る席がなくつて、首をかゞめたまゝで佇んだり、兩方の座席に手をかけて、しやがんだりしてゐる者もあつた。でこぼこしてゐる堤の道を亂暴に驅けつて行つた。漸く吾妻橋をすぎて、電車の傍の自動車の停留場に着いて、そこに降りた。

「やれ〳〵。」と蘇生の思をして皆背のびをした。

其時早くも祭の光景が目の前にあつた。其れは中店の裏通になる町で、わつしよ〳〵と神輿をかついで來るらしい聲が聞えた。群集が雪崩れを打つて、其の通から電車通の方へ溢れ出て來てゐた。一同は皆其のまゝそこにたゝずんで、暫くの間この有樣を見てゐた。

人は段々と電車通の方へせり出して來た。あはたゞしく鈴を鳴らして其の人々を追ひのけやうとしてゐる電車も、遂に立往生をしなければならぬやうになつた。電車ばかりでなく、澤山の自動車も列を作つて立往生をしなければならなかつた。

やがて燦爛たる神輿の屋根が其の群集のかなたから見え始めた。其の神輿の上には四人の男が四隅にのつてゐた。手拭で鉢卷をして、揃ひの浴衣を片肌脫いで、大きな扇子を擴げて其の下の群集をさし招いでゐるやうな恰好をしてゐた。扇子を持たぬ方の手も、扇子と一緒に踊らしてゐた。何か叫んでゐる樣子

であつたが、前の往來の雜沓の響きでき〻とれなかつた。神輿をかついでゐる人は、群集に隱れて充分に見えなかつたが、而し何れも同じ手拭で、鉢卷をして、同じ浴衣をきてゐる人々であることは想像がついた。さうして其の神輿の右に雪崩左に雪崩れして、容易に前に進まぬ樣子は、如何にも其の神輿が重さうに思へた。神輿の上に上つて聲をからして何か叫んでゐるらしい人々が、勢をつけて指揮する其の扇子の動きにつれて、徐々と其の神輿は電車道の方へ出て來るのであつた。

電車道へ雪崩れた群集は押し合ひへし合ひしながらも中店の方向へ動いて行つた。何時の間にか神輿もまた電車道に傍ふた人道をねり、渡つてゐた。やがて又た向ふの方に人々の叫ぶ聲がきこえると思つたら、其所にまた一つの神輿の屋根が燦爛と輝いて此方へ進んで來るのが見えた。

私達は只ぼんやりと佇んで、澤山停つてゐる自動車の間から其れらの光景を眺めてゐた。一番滑稽(コッケイ)なのは其の神輿の上にのつかつてゐる人の樣子であつた。皆思ひ〱に口を開け目を怒らして、扇で一生懸命におふぎ立て〻ゐるのであるが、神輿は少しも其れらに頓着なく、古い重たい水が淀んで流れるやうに唯僅かに移動してゆくのであつた。

漸く二臺の神輿が中店の方向へ雪崩れて行つて、一時立往生して居つた電車も自動車も漸くにして動き出し、彼の神輿の出て來た裏通りの町もげつそりと人が減つた。

「行つて見ませうか。」

「え〻ともかくも行つて見ませう。」と一同で伴れ立つて其の裏町の方へ入つて行つた。

人が大變減つたやうに思つたのであるが、それでも入つてみると、かなり雜たうしてゐた。軒並に祭提灯がともしてあつたり、しめが張られてあつたりする、其れはよく見るお祭の光景であるが、往來には半ば砂利が敷いてあつて半ば掘り返へしたま〻になつて、板やセメンの樽やらがおいたま〻になつてゐた。祭の人々は派手な赤い色の入つた揃ひのきものをきて、白足袋をはいて歩いてゐる。顏は眞黒で着物ばかりが派手で、滑稽に見えるが、當人たちはすましたものである。この人たちは恐らく町内の顏役といふやうなものであらう。

其れらのすぎ去つた後には、先の神輿をかついで居つた人々と同じ服裝をした、これは町内の兄貴といはれる人々が四五人、酒に醉つぱらつて、肩組みをしながら、往來狹しとのさばり歩いて來るのに出會つた。樽神輿をかついでゐる子供の一群がある。其の子供も皆豆しぼりの手拭で鉢卷をして揃ひの浴衣をきてをつた。

一人小さい子供がおもちやの神輿をかついでゐた。其れは先の樽神輿をかつぐ仲間にも入れてもらへないやうな小さい子供であつたが、服裝はやはり同じやうに豆しぼりの手拭で鉢卷をし、同じやうな浴衣をきてゐた。それが只一人おもちやの神輿をかついで、左にひよろ〳〵右にひよろ〳〵、さも〳〵重い神輿をかついでゐるかの如き恰好をしてゐるのであつた。

「あはゝゝゝ」

「あはははは」と一同は覺えず其の後を見送つて笑つた。すべてがお祭らしい氣分になつてゐた。往來の人混の中で手鞠をついてゐる四五人の女の子の一團があつた。何れも唇には紅を濃くつけてゐた。それから生え際を黑く殘して白粉を顏にぬつてゐた。大方は祭の晴着を着て居つたが、中に一人平常着(ふだんぎ)のまゝの子供があつた。其の子供が突然、

「あたいも、いゝきものに着かへてくるは。」とさういつて、ぱた〳〵と家の方へ走つて行つた。其の家はと見ると小さい荒物屋で、おかみさんは胸をはだけたまゝで、ふだんの通り、店先に立つてゐる客に品物をつき出して商賣をしてゐた。そのおかみさんも固よりふだん着であつた。そうして店へ走り戻つて來たその子供には目もくれなかつた。

仔細に見ると祭らしい店もあるし、又祭らしくない店も交つて居た。最も祭らしいと思はれるものは、小さい店を丸つぶしにして、金屛風を立て、赤い毛氈を敷き連ね、その金屛風の前には花を生けてゐるのなどがあつた。かと思ふとその隣には往來迄茶栗や慈姑や蓮根や玉葱などをはみ出させてゐる八百屋があつた。

往來の眞中では、ド、、、ンと太鼓を打つてゐる。それはやはりまへの樣な祭の着物を着た、それに甲斐々々しく襷をかけた男の子である。

やがて切石が亂雜につみ重ねてある街の四つ角に出た。それを左へまがるとすぐ觀音の二天門があるのが目に入る。其方角に人の往き來がはげしい。

その門を這入ると、觀音の境内は織るが如くである。最前自動車を降りた頃にはまだ夕暮の明りがあつた。それにこゝに來る迄には灯の連つてゐる處を來たので、余り氣がつかなかつたが、こゝに來て始めて日の暮れてゐることに氣が附いた。灯火の下の人顏は明るいが、一たん灯のついてゐない觀音堂や五重塔のあたりになるともう大變暗くなつてゐるのであつた。

觀音堂のすぐ横にある三社樣には、參詣人が絡繹としてゐた。そのお社には網の絵を畫いた提灯が高く掲げてあつた。觀音の本尊を網で曳上げたといふ漁夫を祭つたものであるといふ

事がすぐ分つた。

觀音堂の建物は巨人の如く眞暗な空につゝ立つてゐた。そこには灯が一つもついてゐなかつた。其れも道理あることで、この本堂は修理のために、觀音はすぐ前の假の堂に移されてゐることが解つた。其の假の堂の前に來ると、線香が烟つてゐて參詣する人がたえずある。それから中店に出ると、又ぱつと明るくなつて灯の海といふやうな感じがする。人にぶつかりながら通つてゐるうちに、ふと左の方をみると、少し奥まつたところに女が三人ばかり縛られて立つてゐるのが目にとまつた。

「あれは何であらう。」と一寸立ち止まつた。

「あれは曲馬でせう。」と同行の一人が云つた。そのまゝ私たちは過ぎ去つて仕舞つた。

其日は其まゝで歸つてしまつたが、淺草公園といふものゝ印象が新らしく頭に殘つた。もう三十年も前のことである。私はよく此淺草公園に遊びに來たものである。其頃此淺草公園について短い文章を書いたこともある。が、もうそれから打絶えて此地には足を踏み込まなかつた。其後の變遷は少しも知らぬ。大震災以來の變化ももとより知らぬ。此一夜見た淺草公園の片影は、其昔のことを呼び起こさして、私の興味をそゝるものがあつた。爾來兩三回、短い時間であつたが、此土地を踏んで見た。それもほんの素通りしたに過ぎない。が、其見たまゝの印象を書いて見る。

中店（一）

先づ中店の紅梅燒の店は昔ながらに繁昌してゐる。昔はそこに評判の美人があつた。紅梅燒の娘といへば此中店全體の看板娘であつた。もう今は其娘も五十余りの婆さんになつてゐねばならぬ筈だ。今其店を覗くと、やはり十七八の若い娘が三四人、忙しさうに立働いてゐた。其の顔立は三十年前の娘の顔立とは似てゐなかつた。伊勢勘の豆人形の前には女子供が、吸ひつけられるやうにして、のぞきこんでゐた。

其の通の眞中程に一人の女乞食が

「いかなるわけかは知らねども……」と歌ひながら、片方の手に鈴を持つて其れを打ち鳴らし、頻りにおぢぎをして、あはれみを乞ふてゐた。背中に笈摺をつけて、それに何か經文らしいものがかいてあつた。往來の人々は皆物珍らしさうに其の乞食をとりかこんで見てをる。乞食が少し動くにつれて其の人々も少し動く。織るが如く通る人々は、その人垣の上から一寸のぞくやうにして行きすぎる。私も一寸立どまつてその中をのぞ

くと、丁度七八つの子供が、左の手にその桜（？）を持つのと同じやうな鈴をもつて、歌に合せて調子よく振つてゐるのであつたが、丁度私がのぞいた時分、大きなあくびをしながら母と同じやうに頭を下げてゐた。さうして左手は頭の上高く上げてその鈴を振つてゐた。

中　店（二）

其のつぎに通つた時分には、子供を連れた女乞食のゐた邊に、矢張り人だかりがしてゐた。あの乞食がまだゐるのかと覗いて見ると、それは七十が近いだらうと思はれる男の乞食が、手に二三枚の辻占を持つて、弓のやうに曲つた腰をしながら、人の顔はいちく見ずに、たゞ人の居る方へ向いてお辭儀をしてゐるのであつた。その傍には一人の男の子が付いてゐた。その男の子の手には笊がぶら下つてゐて、その笊の中に通行人の憐みの金が入るものと見えた。その老人の顔が殆んど血色がなく青ざめてゐるのを流石に哀と思ふ。その癖この商賣をしまつて乞食仲間の屯に歸つて來ると、なかく頑強な爺になるのかも知れぬと思はれた。又この子供も恐らく自分の孫ではあるまい。乞食仲間に共通なあはれみを乞ふ爲めのかりものであらうと思はれた。

中　店（三）

三度目に中店を通つた時にも、矢張り其老ぼれの乞食が同じ所にゐた。手に四五枚の辻占を持つて、やたらに辭儀をして居るのも前日の通りであつた。十歳ばかりの男の子が傍についてゐるのも前日の通りであつた。さうして珍らしさうに群衆がとり圍んでゐるのも亦前日の通りであつた。そこへ一人の小僧さんが現はれて三角の袋に入れた菓子をその子供の手に握らせた。向ふから來た一人の婆さんが五錢銀貨をその子供の手にしてゐる笊の中に投げ込んで行き過ぎた。その群衆の中から十錢銀貨や五錢銀貨を投げ與へるものがつゞいて二三人現はれた。群衆は何れも不思議さうにその錢を乞食に與へた人々の顔を見渡すのであつたが、やがてそれらの人は皆行過ぎてしまつた。そのあとで爺は相變らず人の澤山ゐる方向にお辭儀をしてゐた。仲見世のおもちや屋の若い衆は、手にハタキを持つておもちやの上の埃りをはたきながら、人の肩の上からその乞食の子の笊の中をのぞき込むやうにしてゐた。

「うまく二三十錢もうけやがつたな。」と云ひたさうな口ぶりに見えた。

御鬮

假本堂の前には參詣人が澤山ある。がしかしあまり莊嚴でない建物は見上げて見ても有難味が薄いかして、手を合はして拜むと、間もなく其所を去る。が、なかに暫し去りかねてゐるのがある。其は御鬮を引くのである。手に〳〵吉とか大吉とかある其御鬮を眺めながら行くのである。其等の人々は三三五五境内に散らばつても、尚暫くは其御鬮を眺め入つてゐるのである。觀音の御利益は其御鬮の面から現はれ出て來るやうに見える。

交番

交番の前に人がたかつてゐるのは何事かと思つて見ると、其れは二羽の鷄が蹴合つてゐるのであつた。巡査は、「立ゝないで、向ふに行つて下さい。鷄の喧嘩では仕方がない。」といふのであつたが、見物人は皆笑つて、行かうとするものは一人もなかつた。鷄の蹴合ひは益々激しくなつた。一匹の鷄は殆んど他の鷄の翼の下に小さくなつてゐるやうであつた。巡査は漸く見かねて足で其の鷄を分けやうとした。鷄は巡査の靴の上を飛びまはつて尚ほ暫くの間はたゝかふてゐたが、遂に離ればなれになつて、お互に知らぬ風をして、餌をつひばみ始めた。今まで立どまつてゐた人は、忽ち水が流れるやうに散つてしまつた。交番前は急に淋しくなつてしまつて、唯立番をしてゐる巡査と、離れ〳〵に餌をついばんでゐる二匹の鷄がある許りとなつた。

本堂

修繕をするといふ本堂は、四方の門扉をすつかり閉めて、只黑い大きな伽藍がつつ立つてゐるばかりであつたが、それに係らず、執念深さうな女の人は此處にもまたお參りをするのである。假本堂に參詣してのち、そのるすの本堂にも來ておまゐりをしてゆかねば氣がすまぬものらしかつた。

五重の塔の下

五重の塔の下に行つて見ると、其所の共同椅子には乞食の群が休んでをる。何れも赤黑い顏をして髯を生したのもあり――髯を生したといふよりは髯の伸びるが儘にしてゐたといふべきであらう――鳥打帽を被つたのや、一抱の荷物を傍に置いたのや、さま〴〵のものがゐる。さうしてぢろ〳〵と吾らの方を見ながら、お互の間で何かひそ〳〵囁き合つてゐるのもある。

も身體を動かさずにゐる五十近い男があつた。その前には背中を圓くして、最前からしきりに手眞似口眞似でしやべつてゐる一人の男があつた。印袢天を着て、股から下はすつかりむき出しにして、足には古びた下駄を突つかけてゐた。その男が手眞似口眞似でしやべるのを、その菅笠を被つた男は鷹揚にうけ答へしてゐるのであらう、時々口がうごく斗りで、姿勢は少しもくづれなんだ。このやうな様子が暫くつゞいて後その男は漸くにして立ち上つた。腰かけてゐた上半身をそのまゝすうと伸ばしたかと思ふと、少し芝居がゝつた態度で左右と莊重に歩を運んだ。印袢天の男も亦た立ち上がつた。これは傍らにおいてあつた道具をひよつとかつぐと、蹣跚といふやうな足どりで左によろ〱右によろ〱しながら、さきの男とは反對の方向に歩いて行くのであつた。

そこへ一人の乞食の子供が自轉車に乘つて驅けて來た。古びた鳥打帽を逆さに被つて、片袖の切れかゝつた着物を着てゐた。そこには子供の乞食の一團體があつて、一廻り廻つてその子供が歸るが早いか、すぐその自轉車の廻りには他の數人の子供が立ち寄つて、その自轉車を奪ひ合ふやうにして乘るのである。暫らくその光景を見て居つた。

一人の乞食の子は猛烈な勢でその自轉車を私のゐる方向に向つて驅るらしかつた。私は危いと思つて避けるより前に、その子供は巧みにハンドルを廻した。それらの乞食の活潑に行動してゐる中に、片足の突張つたやうになつてゐる痩せこけた乞食は竹杖をついてのそり〱と歩いて行くのであつた。

折節一人の巡査がその乞食の群の後ろの方から此方へ現はれた。丁度乞食の子が又自轉車の周圍に寄りたかつて騷いでゐるときであつた。巡査がその乞食達をどうするかと見てゐると、案外無頓着で、少しもそれらをとがめるやうな様子はなかつた。巡査は却つてその乞食等を避けるやうにして歩いた。さうして自轉車に乘つた一人の乞食は巡査の後ろに來た時分に一寸帽子に手をやつて滑稽な身振りをしてツイと巡査の前に出た。

巡査が彼方へ過ぎてしまつてから暫らくたつて、又た一人の藝者が此方に現はれた。背も高く、顏も相當に美しく、服裝も又かなりな服裝をしておつた。それが只一人此方へ來るのは一寸人目についた。勢ひ乞食の群れの中を通過するやうになるので多少危つかしい心もちもせぬではなかつた。が彼の塔の下に並んでゐる澤山の乞食も何等特別の表情をしてこの女を迎へも

しなかつた。相變らず無表情な顏をして吾等を見て居るのと同じくこの女を見たに過ぎなかつた。彼の乞食の子の群れも何事もなかつた。女も亦平氣で步いて行つて、其等の乞食の群に對して更に頓着するところがなかつた。

屋臺店

大きな御堂の廊下には數多の屋臺店が出てゐた。その中の一人の屋臺店は、もう日暮方になつてその店を片付けつゝあつた。籠細工のやうな物を賣つてゐる店は、十四五になる男の子とその親父とが今せつせと片付けつゝあつた。その隣りには心臟の惡るさうな、色の靑い、顏のむくんだ、五十餘りの男がもう大方荷をしまつて、一つの小さい荷車の上にすべてのものを小さく疊み込んでしまつてゐるところであつた。たゞ屋臺を作る時分に、下にしく石ころが三々五々と地上に轉つて殘つてゐるばかりであつた。その男は兩手に一つづゝその石ころを持つて、三社樣の社殿の礎のそばにそれを置き並べるのであつた。五六邊往復して漸くその石ころをも運び去つた。それはかくして、又明日の朝その車をこゝに挽いて來た時分に、一々この石をとり出して又屋臺をつくるのであらうと思はれた。それから一本の箒が何處からかとり出されて、その邊に散ばつてゐる塵埃がきれいに掃除されるのであつた。その箒は隣りの男にも渡されて、又その男の取片付けた屋臺の下が綺麗に掃かれるのであつた。

隣りの餅屋の大屋臺もそろ〳〵取片付けられ始めた。見るうちに吾等の目の前にあるところの露店は大方片付けられてしまつた。それらの車は手で押してトボ〳〵と歸つて行くのもあつた。又自轉車がくつゝけられて家路に運ばれるのであつた。

犬を伴れた男

一人の男が犬を連れてゐた。その犬は掌へのせてもいゝ位の小さな犬であつた。その犬はその男の足もとにもつれるやうにしてゐるかと思ふと又遠くの方に走つて行つたりして頗る御機嫌が好いやうに見受けられた。その男と私の隣にゐる男との間に斯んな會話が交換せられた。

「莫迦に小さい犬ですね。」

「これはテリアと狆とをかけて出來た子です。」

「男親がテリアですか。道理で他の犬が來るとそれに向つて行くやうな氣勢を見せますね。」

「さうです。」とその男は稍得意げな微笑を洩らした。なるほど最前から見てをると大きな犬がやつて來ても、自分の體の

聲をして盛んに吠え立てるのであつた。其の大きな犬といふのは、いづれも大きな鎖に縛られた獰猛な犬であつて、その鎖を持つてゐる人を引きずるやうにしてゐるのであつた。これ等もいづれも秘藏の飼犬を散歩をさすために、この境内にひつぱつて來るのであることがわかつた。

「その犬もさうやつて毎日散歩に連れて來るのですか。」

「えゝえゝ、毎日二時間宛は散歩に來ます。」

その男は髮を綺麗に分けて餘り美しくない單衣物を着てゐた。一見こんな犬の世話をして日を暮らしてゐる人らしく思はれた。

香水塔

觀音堂の横手の道ばたに香水塔といふのがある。一錢を投ずるとその上の口から香水が迸り出るのだとのことである。即ち一錢を投じて、たもとからハンケチをとり出す間もなく、チユウチユウと二タ筋ばかりの水が出る。

露店（一）

堂の横手から池のあたり迄は露店が澤山に並んで居る。しば

な若者が、たくさんの洋傘を一々手に執つて五圓位から云ひはじめて、一圓五十錢、一圓二十錢と順々にまけて行く。が周圍にたかつてゐる見物人は誰も買はうといふものがない。さうするとその男は見物人の惡口を云ふ。が、その惡口には愛嬌があつて見物人は皆笑つて聽いてをる。十本ばかりの洋傘がとり替へ引換へ吾らの前にさし出されるのであつたが一本も買ふといふものがない。

露店（二）

空氣枕屋の前に立ちどまつて暫く見る。共同枕だといふ長いゴム枕をふくらまして竹の鞭で叩くとカン／＼音がする。それを半鐘の音にたとへて、

「この枕があつたゝめに大震災にもこの觀音さまは燒けなかつたのだ。」などゝしやべりながら、しきりにカン／＼と叩く。その音にひきつけられて道ゆく人は皆此枕屋の前に立ち止る。はじめゴム枕の强いことを說明する爲めに、そのゴム枕をくちや／＼にして紐になふて見せる。それを二つに折つて引きちぎらうとするがなか／＼に破れない。男は顏を眞紅にして懸命の力を籠めて兩方に引張るがなか／＼に破れない。それほど强いと

云ふことを見物に見せておいて、それから空氣を入れてふくらませて、いろ〱枕の効能に論き及ぶのである。これも一向買手がなささうだ。

露店（三）

おもちやを賣つてゐる婆さんがあるが、そのおもちやは、上の段にひつかけておくと、下の段まで這ひ下つて來て、又上の段まで這ひ上つてゆく。さうして婆さんが掛け直すと又同じやうなことを繰り返すのである。さうしてこの婆さんは一言も口をきかない。

露店（四）

バナヽを賣つてゐる男は手を叩き聲を嗄らして「一貫だ。」「三百だ。」と叫んでをるが、これも一向買手が無さゝうだ。

露店（五）

爺さんと婆さんとがメリヤスのシャツを並べたり置きかへたりしてゐる。其シャツの色も爺さん婆さんのやうに古びて見える。見るからにしめツぽい。一人も其前に立つ客がない。

砂書き

昔この境内に來ると、砂書きの婆アといふものがあつて、それはたくさんの袋の中からいろ〱の色をした砂をとり出して、地上に繪を描いて錢を乞ふものであつた。その婆さんの前に二三錢の錢が常に散らばつてゐた。その婆さんはこんなことをいふのが常であつた。

「こゝにもう一錢あるといゝな。一錢誰か投げてくれるものはないかな。」

そこで一錢投げてやると、地上に美しい繪が描かれるのであつた。それは見物人の方へ向けて描くのであつて婆さんの手許からいふと逆さに描くのである。今から考へると、その砂書きの婆には時代相當な呑氣な面影が殘つてゐた。

詰將棋

大きな將棋盤を描いた板が地上に置いてあつて、其上に大きな王將と香車が一枚ある。敵の方には香車が二つと金銀二つの駒があつて此の王將を詰めるのだといふ。誰かやつて見る人は無いかといふが、誰もやらうといふものがない。「詰將棋何々」といふ書物が傍に積み重ねてあつて、其上に石の重りが載せて

きある。此等動物を飼ふのが目的であらうと思はれた。

五目並べ

大きな碁盤の目をもつた板を置いて、その上に五目並べをやりかけてゐるものがある。その男はほかの男と雑談をしてゐて一向その五目並べの方には頓着しないやうすである。がその碁盤を圍んで立つてゐる人々は、いつまでも増減しない盤面を失心したやうな有様で見つめて居る。

共同椅子

元の第六區のあたりは一般に取拂はれて、今は廣々とした空地になつて、公園らしく共同椅子がところどころ〳〵に置かれてあるが、その共同椅子に休んでゐるのはたいがい乞食である。彼等はここに休みながら空しく時の過ぐるのを待つてをる。何か起り來るものを待ちもうけつゝあると云ふのではない、たゞ時の過ぎ行くのをぼんやりと見てをるのである。

花やしき（一）

花やしきと云ふのに入る。まづ入り口の人形が電氣仕掛で靜かに廻つてゐるのが目につく。と思ふと直ぐその人形に續いて金網を張つた水族館のやうなものがある。たゞ水がたまつてゐるばかりなのを何物かと凝視すると、やがて大きな頭が水中に出て、非常な勢で水を切つて泳いでゐるものがあることを認める。張札を見るとそれは「アシカ」とある。長さが一三間もあらうと思はれる長大なこの河獸は、狹い水の中にどうして生きやうかと苦心してゐるが如く、休むときなくくる〳〵と泳ぎ廻つてゐるのである。

生人形などがたくさんある中を通り拔けて象の檻の前に立つ。牡と牝とが稍離れて二匹繋いである。牝の方に人氣があつて皆その前に立つてゐる。今日は殊にこの象の機嫌が好いやうに見える。鼻で藁を頭の上に投り上げたりして、人目にはふざけてゐるもののやうに見える。暫くして象の股間から異様なものが現出して來た。その長さが地上に達した。やはり鼻の如くくるくるとそらさまに廻轉するのであつた。私は隣りの黑猫の檻の前に移つた。一人の紳士も私と並むでその檻の前に立つた。黑猫はのそ〳〵と檻の中を歩いて、獰猛な眼をとき〴〵私たちの方に向けるのであつた。

「どう見ても可愛氣のない奴ですね。」とその紳士が云つた。

「さうですね。」と私は答へた。黑猫の檻の前には吾ら二人ほか立つてゐない。多くの人々はやはり象の前に立つてゐる。紳士

もいつの間にか再び象の前に戻つてゐる。私も亦た象の前に戻つて立つた時、一人の婆さんが爺さんに囁くやうに云つた。
「象の助平は大きいね。」
一同は笑つてその前を立ち去つた。

花やしき（二）

あやつり人形が始まつたらしい。早速そこに這入つて見る。唱歌がはじまる。
『舌切雀宿はどこ、たづねあてたる竹の門、迎へに出たる雀の子、親も喜び馳走する。』
その唱歌がすむと一人の爺さんの人形がひよこ／＼と片方の方から出て來て手に下げてゐる鳥籠を見て、「可愛いゝ雀だ。うちへ歸つて飼をやらう。」と云ふて引込む。その台詞は底力のある男の聲である。天井の方から響く。さうすると隣の慾張り婆の人形が又ヒヨコ／＼と出て來て、それが「雀が糊をなめて仕方がない。今度はつかまいてやらう。」といふやうな台詞をいふ。その台詞は女の聲である。しかも女學生らしい若い聲である。やがて一匹の雀が飛んで來て糊の盥にとまる。婆がそれを追ふ様子をして引込む。次には舞臺が竹籔になると、爺さんが出て來て、雀をたづねて行く所になる『舌切雀宿はどこ、たづねあてたる竹の門。』といふ唱歌が再びきこえて、雀に着物を着せた人形が出て來て、「お爺さん逢ひたかつたわ。」と台詞を云つてお爺さんのそばに走り寄る。つゞいて姉の雀も出て來る。それからお爺さんを饗應する席になると、母親の雀も出て來る。それから二人の娘は日の丸の國旗を持つて、唱歌につれて手を擧げ足を擧げして踊るのである。やがて爺さんは葛籠を貰つて歸途につくと隣の婆さんに出會ふ。隣の婆さんも又眞似をして雀の宿を訪ふて又葛籠を背負つて來るが、馬鹿にその葛籠が重くなつたのでそこに下ろして休む。それから葛籠を開けると、さま／＼の化物が出る。吾らの左右にはパンにジヤムをつけてそれを嚙つてゐるたくさんの鼻垂れ小僧がゐる。振り返つて見ると、さつき私達の入つた時分はホンの十人か二十人の人數であつたものが、今は立錐の餘地もなきまでに詰め込んでゐるのであつた。皆罪のない笑をたゝえながらぞろ／＼こゝを出て行くのであつた。

帝京座

帝京座といふ安來節の常設館に這入る。
黑い幕を上げて中に入ると、明るい舞臺と少し薄暗い見物席が目の前にあつた。明るい舞臺には一人の男が突立つて何事を

かしやべつてゐた。何事であるかを問分けることもしないで、先づ見物席を見渡して見た。私らが立つたところの周圍にはやはり立つて見物してゐる仲間があつた。その多くは印袢天を着てゐるやうな勞働者風の男であつたがなかには又さうでないものもあつた。そしてわれらの前の方の席を見渡すとそれらは皆腰をかけてゐた。やはりそこにも印袢天があり、手拭地を縱はぎにした浴衣を着てゐるものがあり又勤め人らしい洋服姿のものもあつた。中には又白粉を白く塗つた若い娘も交つてゐた。お神さんらしい年増の肥つた人などもあつた。舞臺の男が何か云ふ度に、大きな口を開けて開け放しに笑ふのはみんな同じであつた。

間もなくその男が引込むと幕がしまつた。すぐ又幕があく。見物席の拍手が一せいに起る。見ると舞臺の眞ン中には盛裝をした女が頭を下げてゐると、その兩側には三味線と二挺鼓を抱へた男とが同じく頭を下げてゐる。徐ろに顏を上げてから、白い齒をむいで見物席へ秋波を送る。飾り品のない三味線引きと鼓うちは單調な景氣の好い囃子をはじめる。女のうたは何を言つてゐるのか判つきりわからなかつたが、とにかく安來節といふものであるらしかつた。さうして個所々々に行くと、見物席の男たちは聲を揃へて、「サイト、サイト、サイト、サイト。」と云つたり、「コアードウシテ、ドウシテ。」と云つたりして、合い手を入れる。その調子が面白い。さうすると見物席には湧きかへるやうな拍手が起つてどよめきがしばらく續くのである。

間もなく幕が閉つて又すぐ幕が開くと、今度は外の女が同じく盛裝して頭を下げて居る。やがて徐ろに顏を上げるところな見ると前のよりは少し年をとつてゐるやうであるが、しかし其聲は寂びてゐて底力があるやうに思はれる。見物席の者の合の手を入れることは前の通りである。

「安來節かと思ふと浪花節のやうではないですか。」と誰かが言つた。なるほど浪花節らしい聲を出してゐる。その時私の後ろに立つてゐる一人の男は言つた。

「途中で浪花節になつたり磯節になつたりするのです。」

其の後ろの人は、問ひもしないのに敎へてくれるのであつた。

「今まで出た三人は皆姉妹なのです。これが一ばん姉です。」

其時出てゐた若い女は唄はあまり上手でなかつたが、兩側の三味線引きや鼓うちや又は見物席の客をつかまへて戲談口を利いてゐた。その度に又見物一同は大きな口を開けて、開けつ放しに笑ふのであつた。私はひそかに、藝者でも揭げた氣になつて一晩を愉快に過して歸る諸君の幸福を祝福せずには居られな

かつた。私のうしろに居る人も、恐らく毎日のやうに來て愉快な時間を過ごして歸る人であらうと思はれた。振向いて見ると古びた中折を被つた疎らな髯を生した四十過ぎの人であつた。

觀音劇場

明石潮の劍劇といふものを見やうと思ひ立つて觀音劇場に入つて見た。

入つて見ると見物席は眞暗であつた。舞台も薄暗かつた。片隅に一人の琵琶師がゐて琵琶をひいてゐた。文句は十分にきゝとれなかつた。が見物席からは時々盛んな拍手を送つた。やがて舞臺が少し明るくなると貧乏さうな家の一ト間が見えて來る。そこに病にやつれた女がゐる。五十餘りの高利貸の親父があらはれて貸金の催促をする。遂には一枚の蒲團をめくつて持つて行かうとする。そこへ子供を連れたその女の亭主が野良から歸つて來る。首を地に着けて詫びるが高利貸は頑として應ぜぬ。今日畑から擔いで來た一挺の鍬があるのを持つて歸らうとする。折節この家へ來た巡査が高利貸を引つかんで表へ投り出す。今まで窮迫した主人公に同情を拂つてゐた見物人は一同にどつと喝采してその巡査の行爲を痛快がる。男は女房に、召集令が下つて今日召集せられるのであることを隱してゐる。女はそれを悟つて男や子供の表に出たあとで、末の乳呑兒を刺し殺し、また自分も自害する。男は歸つて妻の死を知り、その遺言の如く、後に心を殘さぬやうにと二人の子供を刺殺さうとする所へ、さつきの巡査が跳び込むで來てとめる。そこへ先の高利貸も現はれて、前非を悔いて、二人の子供は引受けるから心置きなく出征せよといふ筋であつた。

私は舞臺よりも見物席の方に心を索かれて屢々周圍を見渡した。女が子供を刺殺し、自分も自害をした時に、私の隣にゐる青い職工服を着た男は、その隣にゐる連れの男に囁くやうに云つた。

「あゝたうとう死んじまつた。」

「ウン。」とその連れの男は答へて涙を呑み込むだらしい容子である。私はこの種の善良なる人々に同情せずには居られなかつた。私が立つて歸る時分にこれ目送してゐる多くの目を見た。しかしその眼に險惡な光りのあるものは一つも認められなかつた。

表に出て繪看板を見上げた。所謂劍劇は恐らくこの次の森に現はれるものであらうと思はれた。

江川大盛館

池の端の江川大盛館といふのに入る。この江川の二字は昔玉乘時代にお馴染の名前であつた。

その江川大盛館に入ると『唄狂樂』といふビラが下つてをる。一人の女が椅子に腰をかけて三味線を彈いてをる。傍らに紋付を着た男が着流しのまゝで立つて横笛を吹いてをる。その笛と三味線との調子が合つて面白く聽かれる。こゝには女義太夫とか、手品とか、安來節とか、様々なのがある。

笑ひの藝術殿堂

江川大盛館の一軒置いて隣りの笑ひの藝術殿堂といふのに這入て見る。江川よりは少し廣いが、大體似たやうなものである。そして今は丁度江戸屋猫八が蟲の聲色をやつてゐるところであつた。

次に幕が開くと又た安來節であつた。十人あまりの女が舞臺にならんで、かはりばんこに唄をうたふのであつた。その女の顏や風采から思ひついて、「中―將―湯―」とか「あん―パン―」とか「ゴム人形―」とか云ふのを低調に節をつけて多勢の者が同音に云ふのが面白かつた。

カフエー・オリエント

カフエー・オリエントといふのが電車道を隔てた向ふ側にある。私の這入つた時は女給が客よりも多い位であつた。助ちやんと仇名のある眼鏡をかけた洋服の男と、角帶を締めた四十過ぎの××さんといふ常連らしい男とが一隅のテーブルに陣取つて、澤山の給仕女を自分たちのテーブルに引き寄せて容易にそこを立ち去らうともしなかつた。

神谷バー

こゝにも印袢天を着た男や、洋服細民と云はれる人々や、帽子も被らず髮を綺麗に分けた男などが入り變り立ちかはり來る。さうしてウイスキーだとか、ブランデーだとか、ウオツカなどで醉を買ふては立ち去るのである。中にはたま〳〵醉ふて管を卷くやうな者もあるが、大方は靜粛に醉を買ふのである。戲談口前にウイスキーのコツプを四つ五つ並べてゐる男でも、一つきくてなく、只コツプとにらめつくらをしてゐる。さうして自分の滿足する醉を買ひ得れば忽ちドアの外に消え去るのである。

『現代學生氣質』論評

社會の進化と學生の思想

石濱知行

近來學生の思想が「危險」となり、「惡化」したと言はれてゐる。しかし、そもそも、ある思想なり、行爲なりが危險であるとか、惡るいとか、と判斷するところの標準は各時代を通じて一定不動であり、絕對的であり、超社會的なものでは決してない。その標準そのものは第一社會制度進化の各段階に於いて異なるのである。從つて例へば封建時代に於いて營利の思想は卑しむべきものであつたが、今日の資本主義制度の下では極めて普通のことである。又第二に標準はその社會を形成する各社會層によつて異なる。從つて例へば古代社會に於いて、動物扱ひをされてゐた奴隷がその桎梏から脫れるために主人に反抗するといふことは、主人からこれを見れば、その行爲なり思想なりは極めて惡なものであるが、壓迫されてゐた奴隷から見れば自己の解放のための努力であるから善と信じて行ふのである。

かくの如く、善とか惡とか、危險とか混亂だとかいふことは相對的なものであつて、ある一派の倫理學者の信ずる樣に、各時代を通じ、各社會層を通じて決して絕對的な不動的なものではない。

さて、今日學生の思想が危險となり惡化したといふが抑も何に對して危險であつて、何から見て惡化したのであらうか。今日の社會制度は言ふ迄もなく資本主義經濟制度である。しかし

てこの社會制度の下に於いて主たる地位を占むる所の社會層はブルジョアである。從來の歴史の示す所によればある階段に於ける善、惡、適、不適、を定むる標準――道徳は、その階段に於ける主たる社會層――それは生産手段を私有する社會層に適應するのを常とする。從つて今日學生の思想が危險となり、惡化したといふのは、資本主義乃至ブルジョアにとつて危險となり、それらから見て惡化したといふことなのである。

さて學生の思想が惡化したといふこと、換言すれば反資本主義的となるに至つたのは如何なる譯であらうか。しばらく話を轉ずるが、僕が大學を出たのは大正九年だつたが、この大正九年前後は學生思想の一大轉回期であつたと言つてもよい。それ迄の學生は、高等學校、大學時代を通じてトルストイ、ニイチエ、ショペンハウエル等の哲學を讀み、ツルゲネフ、イプセン、ドストイエフスキー、漱石等の小説を耽讀して、人生を談じ、戀愛を語り、無抵抗主義を論じ、煩悶し、讃美し、憧憬してゐたのである。所が大正九年前後からは學生の眼は漸次社會科學の方に轉ずるに至つた。トルストイ、ニイチエの代りにマルクスを讀み、エンゲルスを讀み、クロポトキンを讀むに至る傾向となつた。かかる變化はこれを社會の經濟狀態の變化にその原因を求めることが出來る。大正九年以前は、日清日露の大義によつて[illegible]を通りつつあつた時で資本主義が最も得意に平和に成長しつつあつたのである。所が歐洲大戰によつて先進資本主義國が疲弊し、それに乘じて日本資本主義が急激なるテンポを以て發展するにつれて、資本主義自らの胎内に多くの矛盾が發生し始めた。米騒動を始めとして勞働運動、社會運動が發展し、それと共に社會科學が勃興して時代の重大なる問題となるに至つた。今迄平和なる裡に人生を談じ、戀愛を論じてゐた學生の心は今や變化し行く社會制度の研究に向けられるに至つたのも決して無理ではない。今日勞働運動、社會運動に携はり、社會思想の檢討に從事してゐる人達は大抵この時代又はそれ以後に校門を出た人達である。その後先進國の資本主義が多くの破綻を示すと共に、世界資本主義の一聯としての日本資本主義内の矛盾は益々擴大した。社會科學の研究は資本主義の機構を檢索し、社會運動は眞劍味をおびて來た。かかる勢は、遂に主たる社會層をして普通選擧を施行することを餘儀なくせしめ、その結果として無産政黨も公然として組織された。無産政黨の結成と共に、それに對する主たる社會層の對抗も益々露骨となつた。

とも角今日では資本主義に對抗する無産政黨が公然として存在してゐる。勞働爭議、農民運動は益々大規模となり、一夜に

して大工場の煙突の煙をとどめ、一令の下に各港に碇泊する數千の船舶の出港をとどむる事を得るに至るまでになつてゐる。善惡の評價はともあれ、これは今日眼前にある詐らざる事實である。政治、經濟、法律等の生きた社會科學の研究をなしつゝある智識欲、檢討力に燃えた學生に、これら日々現れ來る社會事象の前に眼をつぶれと言ふのは言ふ方が無理であらう。

私は最近ある必要からマナベンドラ・ナト・ロイといふ人の書いた『印度(インディア)』といふ本を讀んだ。その中に次の如き示唆に富む一節がある。英國政府は印度統治の初めに、官廳や事務所で使用する事務員を必要としたが、そのために多數の英國人を本國から連れて來るのは困難なる手數がゐるし、又それには莫大なる給料を要する。そこで未だ封建時代の制度の下に呻吟してゐる無智な印度青年を教育して、それを事務員に養成しやうと考へついて、千八百二十年に近代的な學校を建て、近代的な教育を施した。その結果印度青年の智識は非常に迅速に發達し、英國政府の計畫した限界を超えて、高等なる智識を吸收した。この印度に於けるインテリゲンチャの發生は、その結果に於いて、英國政府が始めに所期した所と全く反對の方向をとるに至つた。乃ちこの間に印度は、英國資本主義との接觸によつて、封建制度より資本主義制度への發展をなしつゝあつた。而して、英國政府によつて近代的に教育されたインテリゲンチャは、この社會の進化につれて印度資本主義の擔當者となつた。言ふ迄もなく印度內部に於ける資本主義の發達は英國の資本主義にとつて恐るべき妨碍である。インテリゲンチャは印度のブルジョアとなる事によつて英國資本主義の敵となつた。英國政府は自らの利益を害するものを教育したわけである。英國政府は青年を教育し、それを使用して英國資本主義を擴大せしめんとしたのであるが、印度の社會の進化はこの青年をして反つて英國政府の意思に反せしむる結果を生ぜしめたのである。

日本の大學は官吏と實業家を養成すべく設立された。所が近來この校門からは、その目的に副はさるインテリゲンチャを出す。そこで教授が惡るいといつて研究に對して壓迫を加へる。いづくんぞ知らん、その數十年の間に日本の社會は數段の發展をしてゐるのである。

近來學生の思想が「危險」となり、「惡化」すると共に、實行運動に從事しつゝある學生が殖えたと言ふ。それが果して事實であるか否か僕は知らない。又それがどの程度の實行運動の意味であるかも明らかでない。たゞしかし社會の機構は頗ぶる複雜であり、理論の把握もしかく容易ではない。小兒病的に理急

から術に手を出すのを急ぐ前に尙ほ學ぶべき多くがありはしまいか。』その頃に大英博物館の壯麗な圖書室はその無盡の藏書と共に築かれた。――ここにマルクスは日日を暮らしたが、我々をも通ふやうに促した。學べ！ 學べ！ これは實に屢々彼が我々に高く叫んだ至上命令であつた。しかし、それは又彼の先んじての模範によつて示されてゐた。まことに常に努力するこの人はたゞその姿を見ること丈でも命令となるのだつた』『如何にたびたび彼はその貧しいプロレタリア的な書齋の孤獨さにこの偉大なるフロレンス人の言葉（Segui il tuo corso, e lascia dir le genti.――汝の道を行け！ そして人々をして言ふに任せよ。ダンテ――を自らに呼びかけて勇氣をはげまし、又それから新らしい力を汲み出したことがあつたらう』――これはリープクネヒトのマルクス追憶記の一節である。

學生の思想を論ずるに當つて尙ほ論ずべきものがある。それは所謂反動思想と言はれてゐるところのものである。これを經濟制度に見るに、ある段階には、その段階の特質のみが存在せずして、前行段階の特質が何等かの形態で殘存するをつねとする。例へば原始共同體は原始社會の特質であるが、次の段階たる古代社會又は封建制度の時代に於ても何等かの形で殘つてゐる。又資本主義の時代に至つても前行封建制度時代の特質が全く崩壞せずして殘存してゐる。イデオローギーも亦同じである。今日は資本主義の時代であるが尙ほ多分に前行封建制度時代のイデオロギーが殘存してゐる。これが所謂反動思想である。そしてこの反動思想はそれと對立する進歩思想が旺盛となると、一時的にそれと對抗して昔の黄金時代を再現せしめやうとする。ここに進歩思想と反動思想の社會に於ける對立を見る。この社會に於ける對立は直ちに又學生の思想にも反映して、學園に兩派の對立を見る。しかし、原始共同體が如何に美はしきものであるとも、社會の進化の中に解消し行くと同じく、この反動思想も亦同じ運命を持たざるを得ないのである。この運命は善惡の問題ではなくして冷嚴なる必然律の問題なのである。

若き受難者の姿

秦豊吉

僕にはもう現代の學生を論ずる資格がない。僕は舊時代の最後の大學生である。十年前の大學生である。今日の大學生がどういふ生活をしてゐるか、全く知る處がない。一人の若い潑剌とした青年大學生も友達に持つてゐないのは頗る殘念である。

唯新聞紙上で窺ひ知る今日の學生諸君の生活は、全く驚くべき程十年前と違つてゐる。僕は常に最新しい時代精神と共に生活する事に就て、決して人に負けない積りでゐて、しかも今日の大學生諸君の活動を僕等自身と比較したならば、いかに僕等の生活が賤劣で、野卑で、無理想で、下等で懶惰であつたかに今更乍ら呆れざるを得ない位だ。

まづ十年前の僕等法律學の大學生の書生風俗と言へばどうであらう。下宿屋の窓の緣に足を舉げて尺八を吹くか、花をひくか、牛鍋を食ふか、吉原の話をして暮したものである。僕は河津博士の經濟原論にマルクスの名を習つたかどうか、それも思ひ出せない位に頭に殘つてゐない。上杉博士の憲法は、内容がどうであらうと、まづ博士の黑紋付に白足袋姿を讃嘆したものである。結局僕等は試驗の爲めの暗記であり、卒業の爲の勉強であり、就職の爲の學校であつた。山なすノオトと、厚いプリントと、二十錢の合の子辨當と、文官試驗と、女郎買の話で終始したのが、十年前の法律書生の風俗であつたと言つても大差がない。しかも十五年前はどうか、二十年前はどうか、と云へば、まづこの十年前と似たものである。僕は明に大正五、六、七年を境にして、之までを舊時代の學生風俗と名を付けておきたいのである。

それを今日の、十年後の學生々活に比べてみたらどうであらう。例へば六月八日の國民新聞學生欄には、學校の專制に對する學生の自由擁護運動として、學校制規の改革とか、警察權の學生不當干渉反對とか、軍教問題其他の學校教育の反動化に對する反對運動の勃興を報道してゐる。新聞に學生欄が設けられたのさへ、いかに今日の學生が社會の表面に出て來てゐるかが分

る。今日の學生諸君は社會科學と經濟論理の生活を生活としてゐる。諸君は學校そのものを改革し、社會事業に携はり、學生の自由を要求してゐる。共産主義を必ずしも否定しない。學問そのものを若い血とし肉としやうとしてゐる。學校生活を社會生活としてゐる。學生時代が試驗勉强といふ人生以前ではなくして、青年といふ人生である事を感じてゐる。書生ではなくして若い人間である事を現してゐる。

僕はかういふ今日の學生生活を眺めて、内心實に慚愧に堪えない。僕等は今日諸君と比べて、眞に唾棄すべき生活をして來た事を恥ぢる。僕は大學生として、法律書生として、全く就職の爲に、食はんが爲に學校を通つて來たと白狀しなければならぬ。僕等は學生生活といふものを親の金で暮す人生以前のものであると思つて小さくなつて無關心で過した。僕等は學校教育を侮蔑し乍ら、しかも之が奴隷であつた。僕等は學校がどうであらうと、試驗さへ通れば好かつたのである。卒業すればそれで濟んだのである。學校も先生も講義もノオトも、唯三四年の辛棒で、目をつぶつて卒業すれば、そこに僕等の人生といふものがあると考へてゐた。今日の學生諸君は末弘嚴太郎博士を擁して大學セツツルメントの事業を立派にやつてのけてゐる。この人達が學生であると共に人間であるに對して、僕等は單に卒業を心配する卑屈な法律書生に過ぎなかつた。だから十年前の僕に恥ぢかし乍ら、この同じ末弘博士に、卒業試驗の及落を聞きに行つたものである。一言で今日の大學生と僕等を區別しやう、曰く、僕等はマルクスなぞ夢にも讀まうと思つてゐなかつた。そんな學說のある事さへろくに知らなかつた、今日の諸君はノオトを讀む前に、まづマルクスから讀み初めてゐるであらう。

これを學校以外の生活の上から見ても、僕等は到底今日の大學生諸君には及びもつかぬ劣等な生活をして來てゐる。僕等は淺草公園のジゴマの活動寫眞を本郷から歩いて見に行つたが、今日の各大學で映畫研究會のない學校は少いさうである。僕等は音樂學校の土曜演奏會に怪げな獨唱を聞いて賞嘆したものだが、今日の學生諸君はタキシイドを着て自ら喇叭を鳴らしてジヤツズを演奏してゐる。僕等のコンパは南京豆に番茶で腹をこはしたが、今日の諸君は薰高き珈琲を銀座で飲んでゐる。僕等のスポオツは大學の秋期運動會の綱引きに過ぎなかつたが、今日の諸君は神宮のフイイルドで新聞寫眞班の撮影攻めて逢つてゐる。一言で今日の大學生と僕等を區別しやう、曰く、僕等は映畫とスポオツを知らなかつた學生である。今日の諸君は映畫とスポオツが無ければ生きて行けぬ人達である。

僕等にどう考へても間違つた學生生活を修へてゐる。僕等は學生々活を人間生活とし、學生を人生としなかつたやうである。今日の諸君が自ら經濟生活にも社會生活にも且社會運動にも踏込んでゐるに對して、僕等は僅に夏目漱石の三四郎程度以上に出でなかつた舊時代最後の學生として、單に及落の奴隷であつた舊悪を顧み、全く頭を下げる外はない。今日の學生諸君は定めて苦しい乍らも生き甲斐ある悲痛必迫の生活をしてゐるやうに見える。僕は嘗て京大事件が發表せられるや、事件内容の判斷はともかく、今日の學生生活の痛烈と急迫と煩悶の心境を察して、この感を一層深くしたものである。

今日の學生諸君は十年前の僕等の思ひも寄らなかつた社會生活をしてゐる。然し僕等が學窓を出て自ら働かねば食へない生活に飛び込んで漸く十年を過して來た時、後から來らんとする若い諸君の爲に、僕の青春を想ふ熱情は、なほある同情に堪えないものがある。今日の諸君は明にスツルム、ウンド、ドラングの時代にある。入學試驗難の後には生活難がある。學校を出た僕等は歐洲の僕等と同じ程度にある人間に比べて、どんなに劣等賤劣な生活をしてゐるであらう。後からくる者程苦しく損をするのが今日の日本である。十年前の學生の僕等でさへ、今日の學生諸君を理解するには相當の準備を要する。僕等の頭の上にはまだまだ幾らでも十五年前の人、廿年前の人、卅年前の人がつかへきつてゐる。之等の昔の學生が、今日の學生を理解出來得やうとは、僕は少しも思はない。僕等でさへも理解されてない。まして今日の學生諸君とは全く縁なき衆生の人達である。しかも之の縁なき人達の支配する日本である。學生時代にマルクスを讀まぬ人から讀んだ人への過程にある日本で、最苦み、最縁の下の力持となり、最無駄骨を折り、最損をしなければならないのが、今日の大學生諸君であらう。僕等の悲慘な生活は自業自得だとも言へやう。然し僕等に比べられない悲慘な思想の下に育てられた今日の學生諸君が、このスツルム、ウンド、ドラングをいかに切り拔けるか、僕は悽慘たる受難の若き姿の爲に、私に祈りたい心持に襲はれる。

翼をもつテンポ

新居格

僕等が學生であつたころ、頭は多くはいが栗であつた、兵隊さんのやうに、でなければ、髮の毛を眞ん中から叮嚀に分けて番頭さんのやうであつた。今の學生にはいが栗が少なく大抵頭髮は相當長い。極端に長いのも居るが、まあォールバックにしてゐる。ヴアレンチノ型とでも云ふのか揉み上げの毛を長く垂れてゐる青年もゐる。詰り頭の外形が全く變つてゐる。今の學生の誰でもに西洋音樂にたいする理解の耳が發達してゐる。歩き方のテンポさへ僕等とは違ふ。僕は自分でそう思つてゐるが、僕なぞの學生時代が古い時代の最後であつた。麻生久が端境期で、赤松克麿が新しい學生型の作りの嚆矢だつた。元の大鐙閣の支配人で快男兒の面家莊信が僕等に一夕お馳走したことがある。飲んで騷いだのだがそのとき以上のやうな時代別を見た。僕は都々逸位は知つてゐた。麻生はうろ覺えので半分計り知つてゐたが、赤松になると薩張り知らなかつた。その代り、ラ、ラアラ、ラアと云ふやうな奴になると赤松得意の壇場で、麻生はそれをうろ覺えに知り、私は何にも知らなかつた。そこで麻生君あたりから學生氣質の轉換斯が初まり、赤松君あたりが新しい氣質の極く最初のものと見た。玄人の女ならとも角も素人の女を覗ふのは罪惡だと云ふのが麻生君あたりまでの學生倫理であつたが、赤松君あたりになると玄人女なぞは不潔だ、われわれはそんなのは女の世界に入れないと云ふ考が生じた。女性にたいする考方も一變した。今の學生氣質のことを述べるに當つてわれ〳〵の話はもう維新當時にも比すべき古い話である。たゞ、今のやうな學生氣質の最初の轉向を歴史的に見ると右のやうな譯で、大正八九年頃から最初の變り方が初まりかけたのだと私は見てゐる。

今の學生氣質——と云てもいろ〳〵あつて一樣には云へないが——を形造くるためにはいろ〳〵の社會事情の變遷があつた。その一つは大正八年頃から勃興した社會運動、勞働運動な

端に今日まで開展して來た社會思想の波との間に起つた事件、そして最近の共産黨事件に到るまでの社會的推移、それらが今の學生に重大な影響をもつて居る。その二はその間に發達し、日本の生活内容を著しく變化させて行つた各方面の模樣、――スポーツの盛になつたこと、映畫の盛んになつたこと、西洋音樂の普及、カフエーの多くなつたこと、――それらが第一の場合と或は交錯し、或は獨立的に今の學生氣質を形造つて行つた。その三は學生の世に出たときの就職難が、學生時代から彼等を脅迫してゐる社會事情も彼等の氣質形造の上の一つの條件をなしてゐるとも云へる。

現在の學生は一體にスマートになり、怜悧にもなつた。眞面目にもなつた。これはお世辭でなくさう云ひたい。それを稍詳しく說明しやう。スポーツそれをするとしないとに拘らず、スポーツの持つリズムが多少に拘らず、學生の氣質に流れてゐる。それは彼等に集團意識をもたせ、フアンを含めてそこに大衆的空氣を釀成さすものがある。それは何らかの形で學生の心理に影響さして居る。西洋音樂のリズムと、銀いろの幕を走る映畫の翼ある開展、それらが今の學生氣質に無意識的に作用してゐる。即ちスマートな動きにである。また今の學生は演劇――と云つても新しい芝居だが――を愛する計りでなく、自分達で遣つてみやうとする傾向がする。それも綜合的、構成的、集團的な意識を與へる。その他研究會に、何に、一體の彼等の行動と感情とが集團的、大衆的になる生活の置かれ、スマートになる環境に置かれてゐる。近代學生の生活特徵はそこにあると私は思ふ。それはよき傾向、好ましい傾向である。

一方に非常に理智的となつた。そこに彼等の他愛のない空想は姿を隱くした。彼等が理智的になつたのは彼等が科學的になつたからだ。理智的になつた彼等は社會機構を考へさせる當然をもつ。そしてそれは彼等のもつことになつてゐる就職難がそれを助長するのは無論である。理智的でない學生も現在では空想を喪失してゐる。その連中にも空想が湧き出す餘地がない。と云ふのは、彼等にはジヤツズ氣分があり過ぎて、テンポが早くて、幻滅的な雰圍氣のなかを目まぐるしく廻轉する。社會機構そのものが分解現象をもつ時代にはいつでも二つの意味での空想喪失が發生するものである。その二つが現代の學生の上にも現れてゐると思へるのである。

が、その何れにも通じてゐるものは翼のあるテンポである。たゞそれが社會意識のあるとなしで著しく違つて來る。また社會意識でも、その程度の濃淡によつて現れ方が違つて來る。對女性の問題でも學生對赤松の見解の相違から遙かに變つた。ク

ラッツエトキンがレーニンに女性にたいする問題を訊いたら、そんな問題は考へてゐない、考へる餘地もないと云つたとやら、そんな風の考方がコムミユニスト學生の一部にはあるやうだ。變革の前に戀愛は問題ではない。その連中の前で女の話でもすれば不眞面目だと云つて人々は輕蔑されやう。同志意識の女性を求める、そしてブルジョア娘を排斥する。それもよき傾向である。けれど中には性道徳に無遠慮に動くのもゐる。コロンタイの小說なぞが喜びよまれる。何れにしてもコムミユニスト學生の女性態度は從前の學生のそれとは著しくちがつて來た。だが變に窮屈な裝甲をしたのがコムミユニストの態度だと思ひ、また同志からの非難を豫想して包みかくす弊もある。口で云ふ所と行とがひどくかけ離れてゐて、口で云ふ嚴正さを全部のやうにして押し通さうとするトリックのある場合はいやだ。嘗つて私が餘技的にかいた小說を評して彼等の一人はレモン紅茶小說と云つた。私はどう云はれやうがあるがまゝの心境を、瑾のあるまゝに出したのだ。私には多分の心的露出性がある。所がその同じ場合に、彼等は京の宮川町の朝々の別れについて話してゐたので、私は反問した「君達はそんなことをしてそんな氣持でゐる。そして公に云ふときはそれを押しつゝんで武張つた裝甲的のことばかり書いてゐるのは欺瞞でなければ卑怯だ」と云つた。他人は勿論自分を欺くことは如何なる場合でも新思想の徒の許容出來ないことだからである。政治的な場合にはタクチツクもトリツクも要らう。印象、感覺に就いてありのまゝに語るのに何の遠慮もいらないではないか。

右と同じ場合は他にもある。富裕な坊ちやんコムミユニスト學生が帝劇に行くときは、カラーも、ワイシヤツも、胸のポケツトに挿むハンカチも新しい純白のもの、萬端それに準じて、一分の隙のない若紳士、さて勞働組合の集會に行くときは忽ちにして變る菜葉服、それは傷々しい滑稽だ。こんなのはセーラアパンツの、撫上げの髮の毛のナンセンスなこと、怠けることを信條にしてゐる所謂モダン・ボーイの氣障さと大して變りはない。

新人會あたりで非常に極左翼的氣焰を揚げながら、やつぱり卒業もしたければ、卒業後はプチ・ブルの窓々はチユリツプの鉢植、カアテン、電氣スタンド、すべてプチ・ブル文化生活の戲曲の原書よろしくある生活の快適さが望ましい部類なんぞも他愛がなさ過ぎる。コムミユニストたる以上、研究の自由だなぞと矛と盾との使ひ分けをしないで、流刑も、投獄も問題であるべきではない。退學放校の如きはあまりに何でもなさすぎる。官立の大學をそれでもやつぱり卒業してをいた方がなぞは許さ

過ぎる。・タクチツクを覺えて何でも利用する限りに於いて利用しろと云ふのも一部の今時の學生がもつわるい癖である。原稿賣捌の依頼、就職口の紹介、講演の依頼、頼むときは賴んでもそれが濟むと「あいつを葬れ」だ。「あいつを葬れ」かと思つたら又候ふ何かの世話だ。そんなことに相當昔から經驗をもつた一人の人が私に話したが、若しそんなのがあればひどすぎる。葬むなら葬つたがいゝ。葬りたい奴に何の配慮の依託だと私には結論が出來るのである。

同じ社會主義者でも古くからの人と近頃の人とは主義は同じでも趣味嗜好が違ふ。堺君や、橋浦時雄君なぞはひどく日本趣味的の所があつて澁茶の趣味さへある。若い連中はひどく近代趣味でテンポが早い。日本一のユモリストの堺君のユーモアも若い連中には通じが惡くて折角のユーモアが彼等を怒らせることもあるとかである。この時代的移變は仕方がないもので、學校を出て十幾年の歲月を經過した私にはかなり若い連中に親しんでゐるつもりでも、私にもかなり理解しがたいものが生じてゐるに違ひない。新潮社で一人社員を採用しやうとすれば千名からの志望者があり、朝日新聞社で數名募集すればこれまた千名近く殺倒すると云ふ世の中なのだ。學生も考へざるを得ないであらう。それに社會姿態も複雜だし學生もそれに應じた諸の新しいタイプ――いゝ意味にも、よくない意味にも――が創生されつゝ、新しい氣質を形造しつゝあるのである。寫眞でみたロシヤの大學生みたいな格好の青年、――茶色の帽子、ルバシユーが鞄をかゝえて忙がしそうに直線的にロシヤ製シカゴイズムの標本のやうに行人の中をついて動いてゐる姿がある。これは最近年の現象だ。マルクス、エンゲルス、レーニン、ブハリンの書物を實に熟讀し、流れる炎の情熱と狂信とをもつて運動に從事する學生もゐる。かと思へば、コムミニズムスのファンの如き氣分の學生もゐる。近年になつてこの國もポール・モーランが取扱ふ歐羅巴のやうな複雜――もつと複雜――な生活姿態の國になつた。何れにせよ、時勢がこれまでになかつた學生氣質を築きつゝある。

眞面目になつた部面に就いて云へば、とても眞面目になつた。個人的な眞面目である以上に社會的眞面目になつた。それはいゝ特徵である。少し前官府や實業家がほめちぎつた眞面目ではない、彼等が厄介視する眞面目になつた。

ロシヤ型、だがその一方にアメリカ型の學生がゐる。ナンセンスな輕快と、空に浮んだ花瓶が風に亂れるやうなチカ〳〵とし

て動き廻はる映畫の様な、學生型がある。一々生活的な具象性をもつてかいてもいゝのだが、紙數が盡きたので、これでやめ。

彼等の生活第一主義

谷崎精二

智識は勞働力であらうか、それとも生産の資力であらうか。ロシヤのインテリゲンチヤの中で此の問題に關していろ〳〵の論議があつた。更に又インテリゲンチヤ其の者の定義に就ても、其れを超階級的の存在と見る説と、さうでない説とがある。マハーエフの意見などは、マルキシストと必ずしも同じでない。學生は廣い意味でインテリゲンチヤに違ひないが、彼等は生産力としての智識を完成して持つて居ない時としては批判力としての智識さへも。其れが學生の大きな弱みであることは確かである。

私たちの學生時代に比べて、今の學生の生活はかなり變つて居る。昔の學生は世間を知らなくつていい事になつて居た。寧ろ或る意味では知る事を許されなかつた。だが今の學生はすつかり大人である。自由に大人の生活圏内へ出入する事を許されて居る。彼等自身生産力を持つて居なくつても、ブルジョアの家庭に生れた者なら、あらゆる一人前の大人の便益と快樂を享有する權利を認められて居る。衣食住凡ての方面に於てさうである。焼芋を『書生の羊羹』と呼んだのは三十年も昔の話であつて、今日『書生の羊羹』と云ふ名が稱へられる菓子があるとしたら、其れは最もハイカラな西洋菓子の一種ででもあるに違ひない。昔大人の生活の後に附いて來た學生は、今日ではどうかすると却つて先に立たうとして居る。(此處で學生と云ふのは、專門學校以上の其れである。)

私が日々接觸して居るのは文學專攻の大學生だけであるが、其等の學生の氣風乃至生活も、私たちの學生時代から見れば驚くべき變化を示して居る。第一私たちの學生時代、文科の學生と云へば大概貧乏人の子であつたが、今日の文學部學生は必ずしもさうでない。大富豪の息子などは見當らないが、小ブルジョアの家庭に生れた者が續々とはいつて來て居る。(勿論全部の

學生がそうだと云ふのではない。）だから學問上では師弟であり得ても、實生活の上では、彼等は私たちの略對等の友人である。新しい遊戯とか、風俗とか、食物とかに關しては、學生の方が私たちよりずつと豐富な智識を持つてさへ居る。

そんなら今の學生は遊んでばかり居て、昔の學生の樣に眞面目に勉强しないかと云ふと、必ずしもさうではない。『よく遊び、よく學ぶ』主義の學生も澤山見受けられる。唯全體としての學生が、勉强第一主義ではなくして、生活第一主義になつた事は確かである。

『文科を出たつて食ふに困る。』昔はさう云はれて居た。私たちも食ふに困る事を覺悟する樣に先輩から敎へられて來た。だが今の生活第一主義の時代は其れで通らなくなつた。文科の卒業生だつて食ふに困つてはならない。かうして學生たちは卒業期の一年も前からそれ〴〵就職運動を試みる樣になつた。

私は廿四歲の時に早稻田の文科を出た。卒業試驗が濟んでから一週間ばかりたつて、時の英文學科の主任であつた故島村抱月先生を訪れ、就職の斡旋をお願ひした。

『あゝさうですか。心がけて置きませう。』

先生はさう云つて、私の姓名をノートに書き記した。君に適した仕事はなか〴〵ありさうもない。いつそ原稿生活をしたらどうか。原稿を賣る世話なら出來るだけしてあげよう――先生はさうした意味の事を云つて下すつたと記憶する。私は生來さうのんきな男ではない。おまけに學生時代は苦學生の生活を續けて居た。だが其れでも仕事を探し出したのは卒業試驗が濟んで一週間もたつた後だつた。始めから仕事なんかありさうもないと思つて居たからである。今では卒業試驗が濟んでからやつと就職運動を始める樣な迂濶な男は殆ど見當らない。

だが今の學生たちの生活第一主義ぶりが時としてひどく上辷りがして感ぜられる事がある。對等の友人のつもりで話し合つて居る中に、急にどうにもならない程相互の氣持に罅隙が出來てしまふ事がある。相手が子供なら、若しくは本當の大人なら、もつと始末が良いのだが、學生が案外大人ぶつた子供である事を發見する場合がある。其れで居て『大人つてこんな者だ』と大人を甘く見て居たりされると、ちよいと挨拶に困る事がある。

『本當の生活の苦勞を知つてからでないと、酒の味はわからない。』酒飲みはよくかう云ふ。だが酒の味のみならず、煙草も、珈琲も、戀愛も、學問も、人生に與へられるあらゆる物の眞價は、凡て本當の生活の苦勞（物質的苦勞のみではない。）を知つ

てからでないとわからないかも知れない

六月某日、私は或る大きな百貨店の喫煙室で休んで居た。某大學の制服を着た學生が其處へやつて來て、煙草に火をつけようとしたが、彼は片手をズボンのかくしへ突込んだまゝ、片手でマッチを擦るのでなか〳〵火がつかない。開けた窓から風がはいつて來て、折角ついたマッチの火が煙草へ移されない前に吹き消されてしまふ。彼は何度もマッチを擦つた。消えたマッチの棒が無造作に投げ棄てられる度に私は腹立たしさを感じた。もう一方の手をズボンから出し、マッチを取上げて口の側で擦ればうまくつくに違ひないのに、彼はテーブルの上に置いたまゝのマッチ箱へ執拗に片手でマッチを擦りつけて居るのだつた。十本ばかりのマッチが忽ち無駄にされた。

『チエッ！』

マッチが空になると彼はさう叫んで箱を握り潰し、もう一つのテーブルへ行つた。そして其處でやつとズボンから片手を出し、兩手でマッチを擦つたので、火はやつとついた。

子供の悪戯はもつと無邪氣である。大人ならもつと分別を知つて居る。此の青年の不精な、粗暴な行動は私にはひどく不快だつた。社會人として責任の無い學生の地位が、時としてマッチの棒以上の物を彼等に空費せしめる。

生活第一主義から同時に又彼等の現實主義が生れた。今の學生は私たちの時代の青年に比べてずつと現實的で、空想を排する。空想は青年の生活から却けられて、今わづかに唯少女の世界にのみ存在を許されて居る。

學生生活とその社會的背景

勝本清一郎

私はこの問題を、自分が直接的な見聞を持つてゐる關係もあり、慶應義塾の學生に就て考察して見たい。但し現在の慶應義塾學生の間には、特に極左的なとか極右的なとか云ふやうな積極性をもつた運動は甚だ微弱である。しかしそれはそれなりで

考察に價すると思ふ。何故なら大摑みに見て此の學校全體の空氣は、現代日本の資本家階級的支配に順應してゐる——即ち帝國大學などと違つて、背景に官僚とか藩閥とか軍閥とか云つたいはゆる絶對主義的な勢力が殆ど無く、さう云ふ挾雜物をへだてずに、甚だ直接的に現實のブルジョワジイに交渉を持つてゐる事情がある——從つてかう云ふ私立大學こそ、この現代で最も純粹にブルジョワジイの一手によつて支持されてゐる大學の典型として、學生の平凡な現象にも拘らず、かへつて考察に價するのである。

先づ慶應義塾とその支持階級との關係を知るには、その小學部である所の幼稚舍への入學兒童の家庭筋を認識すれば好い。此の頃幼稚舍へ行けば、新入學の兒童に附添つて來るその母親達の姿を澤山見る事が出來る。其等の若夫人達は大概女中を一人づつお供につれてゐて、そして毎日のやうに着物を取換へては學校の廊下に現れる。俳優菊五郎の子供なども新入學して自動車で毎日送り迎へされてゐる所から、そこで彼女達の間には次のやうな會話がおもむろに交へられる。

「入學式の時には菊五郎も參つたさうでございますよ。」

我々は譯なく彼女達の背後にある階級的生活を把握する事が出來る。尙幼稚舍の修身の課程を見れば、決して所謂忠君愛國主義の國定教科書などは用ゐてゐない。ブルジョワジイの根本的な觀念上の武器である所の個人主義的倫理思想——「獨立自尊」の道德的感情を最初から專一に吹き込む。それは日本ブルジョワジイの嘗ての觀念的分野に於ける攻勢的時代の俤を傳へてゐるものなのであらう。

しかし中學部である所の普通部に關する事情は少し異る。此處へは幼稚舍からの編入生以外に、その一倍半乃至は二倍位の新入學生が他の小學校から加つて來る。其等はいつも大體に於て小市民的子弟が多い。今年度に於て醫科志望の軍人の子弟が多く入學したのなども、かへつて現代社會に於ける中層的動搖をさながらに反映してゐる現象と解する事が出來る。尙幼稚舍關係の同窓會と普通部關係のそれとを較べて見れば、前者が大抵會費も十圓以上のブルジョアジイの子弟らしい氣分のものであり、後者が二三圓見當の小市民的氣分のものであると云つたやうな差別がはつきりと存する。

所で以上の二要素がその儘平行して大學に流れ込むのであるが、しかし今度も亦、それらの約五倍乃至六倍の新入學生がそれへ加はる。其等の中には地方の豪農の息子とか其他一般ブルジョアジーの息子も認められるが、しかし何と云つても最早全體の數が大きいので（本年度の大學豫科總入學者數は一五

二四人、高等部豫科に於て二四六人）そこには一層ョり廣い一般階級のセチ辛さが附け加へられる事になる。小倉の夏服を著る新入學生が多くなつた事や、極めて少數ではあるが苦學生のゐる事や、もう少し多いらしい富家の書生等に注目すれば宜しい。

しかし先づ、最初に指摘したブルジョアジーに屬する學生の大學生振りからして觀察を始めよう。彼等は大學に來る頃には、すでにもう自己の階級的位置を自覺してゐる。そこで彼等は他の中層階級的學生が學ぶやうには學ばうとしない。彼等は自分勝手に「重役」にとつての必要な事だけを學び始める。則ち他人を最も巧妙に頤使する事を稽古し始めるのである。自分自身で教場に出席する様な事はなるたけしない様になり、同級生又は他級生中のたれかれをして自分の代理に出席させ、それに又代理のノートをも取らせる。かう云ふ助手を三四人抱へて置けば學業の取得は最も組織的に、能率的に、勞力せずして行はれ、十一時頃に起きて東洋軒あたりで氣取つてゆつくりと食事でもしてゐれば、午前中の他人の勞作が自然と自分の手許に到着する事になる。彼はすでに立派にその父親の性質を現はしてゐるのである。やがて學校の制服を著る必要も次第になくなり、他の學生からは超然として、ずつと大人じみた趣味で生活する事になる。――しかしかうした連中には、我々はもう全く他の事を望む事は出來ない。彼等をして勝手にブルジョアたらしめよ、である。

一方、彼等の爲に忠勤を抽んでる「助手達」は、必ずどの級にも見出されるものであつて、其等はその忠勤に依つて補助金に有りついたり、書生にやとはれたり、その他卒業後の就職に心配しなくても濟むやうになる。前に富家の書生と云つた者も大體に於てはみんなかうした仲間であつて、此の連中の救ひ難い性質はその「主人」と殆ど同じである。尙伱手に、その他の極く少數の苦學生についても觀察すれば、それは共濟的組織を形造つて、團體的な行動で經濟を立てて行く。例へばその團體が市中の洋服屋と契約して置いて一般學生の間から制服の注文を取つたり、新學年毎に古教科書交換の仲介を務めたり、試驗間際に掲示場に廣告してやはり一般學生からノート謄寫の注文を引き受けたり、その他食堂を經營したり、學校關係の各種雜誌の廣告取りをしたり……と云つたやうな方法で口錢や利益金を得てゐるのである。しかしこの仲間も彼等の境遇とは反比例に、卑屈な小市民性の中で身動き出來なくなつてゐると云ひたい。

今度は最後に一番大多數の中層階級的學生の生活態度についてである。彼等の大部分は中層階級的とは云つても、學生となつた本來の性質上、ブルジョワジイの一方だけをめがけて、――

まだ〳〵望みを捨てないでもがいてゐる現狀にあるのである。
從つて彼等も亦、プリントを買つたり苦學生にノートの謄寫を賴んだりと云つたやうな彼等の經濟力で出來る範圍的の方法に依つて、なるべく能率的に勉強して、あとはやはり消費生活の方面を、たとへば運動とか、映畫とか、音樂とか、社交ダンスとか、銀ブラとか、その他あらゆる種類に渡るそれ〳〵の文化的會合の組織を通して、充實させようとして餘念がない。即ち彼等も亦、一通りの學問をしか教へてくれない學校の手を離れて、彼等自身勝手に、會社員になる爲の學び方をすでに早く實行してゐると云ふ譯なのである。運動でさへ此の現代の現實的事情の下に於ては、就職の手づるを求める意義を第一に帶びたものになつてゐる。しかしそれにも拘らず、何と云つても彼等の前途にある現在の就職難は、彼等にとつて此の上ない暗礁である。學校それ自身はブルジョワジイに依つて何處までも支持されてゐる性質のものでありながら、彼等個々の事情は最早ブルジョワジイによつては保證され難いのである。卒業前一年間の彼等の話題が殆どこの就職問題の心配で滿されてゐるにも拘らず、しかも彼自身にもやはりそれをどうする力はないのである。さうかと云つて日本のプロレタリヤの經濟力は、プロレタリヤ・インテリゲンチヤとして彼等を支持するだけの實力には未だ甚だ遠い。第一に、學校の根本性質が極めて資本家階級的である場合に於てをや。從つて彼等は大きな動搖さへ出來ないハメになるのである。そこで近年慶應義塾の一般學生の意氣が甚だしく擧がらないと云つたやうな問題も起つて來る。しかしそれとても、結局は彼等の前途の不安と云ふ社會的原因が除去されない限りは、解決がつかないのである。學校としても、一方に於てはブルジョワジイによつて比較的安固に支持されてゐる事情にありながら、一方に於ては彼等によつて前途を保證されない多數の不安な中層階級的學生を抱へて行つて、今後一體どうする事が出來るのであるか？其處に將來に於ける私立大學にとつての重大な問題が存してゐはしないかと私は考へる。

尤も私はさうした問題については官立大學の方が案外容易に解決がつくのではないかと想像してゐる。もしさう云ふ時が來るとすれば、プロレタリヤ大學たるの性質への轉換が恰度ロシヤの大學に於ける場合のやうにして行はれ得るからである。しかし米國の諸大學と同じやうな設立事情にある我が私立大學に於いてては、？――私は此の點については、私立大學はかへつて官立大學にくらべて、むしろ一層反動的な役割をつとめるのではないかと觀察せざるを得ない。則ち將來に於ける學生の行動的方向も同斷である。



近世大盜女盜傳

前田河廣一郎

ことわり書き

私は犯罪といふものに對して、アマチユーアとしての立場から常に興味を持つてゐる。それを刑法學の上からどうの、探偵小說を書く資料にのと、別に功利的な目的から注視してゐるわけではないが、より究極の階級的立場から見ても、與へられたるブルジョア社會組織の中に、それぞれの犯罪が、個人的衝動から勃發して、如何にその犧牲多き通路に於てブルジョア社會構機の暗黑面と無秩序とを暴露して見せるかについては、寸毫も視點をづらかそうとは思つてゐないのである。

ここに懷ひ出して見たり、手近にある本を開いて見たりした記錄の數種は、單獨にそれ自身としては、ありふれた探偵小說の材料ほどにしか該當しない種類の犯罪であるかも知れない。しかし、本來、小說といふものは、どれほど小說家が萬能であらうと、實社會の複雜な諸現象の交錯から、彼自身の創造的再現力をもつて撰擇するエッセンスであるのだから、そこに實際現實の社會に於て起こつた事件よりも、純化され、照明され、縮小誇張されてゐることは自明の理である。が、こゝに蒐錄した話柄は、皆實際起つた出來事であつて、ドラマテイストが第四の壁を設けて造つた人造演劇とは異つてゐるのである。

ただ最も私の遺憾とするところは、これらの材料は主として普通のジャーナリストによつて提供されてゐるので、私の主眼とする資本主義制度下に於ける支配階級側の犯罪については多くを列擧することが出來なかつたのであるが、それにはそれで歐米社會主義文學の大家達がそれぞれの有名な暴露小説を書いてゐるから、別の機會に於て、かなりの範圍にまで讀者に紹介されてゐることと信ずる。

ならうことなら、私も、ゆつくりと暇を持つて、日本なら日本の、日常市民の眼に觸れぬやうな大仕掛けな犯罪事件を、いつかの機會に如何なる形かで暴露して見たいと思つてゐる。

汽船を盜んだ男

汽船といふものは、その形態と重量の點から推定しただけでも、やや不動産にちかい巨大な動産である。——ところが、この動産を、マストからキールまで、そつくりそのまま盜んだのが、紳士スミス君であつた。

元來、あらゆる船舶は、その噸數、船名、附屬品、進水年月にいたるまで、恐ろしい精密な檢査登錄がロイド船舶事業組合（一七一六年創立）によつて行はれるもので、いやしくも汽船一般をくすねようとする男があつたとすれば、彼は先づ、この船名錄（シツピング・レヂスター）や月報や海上保險や檢査證を發行するほどの海上權を握つてゐる大組織と鬪ふほどの、膽力と叡智と計畫とが必要とされるのを發見するにちがひない。

紳士スミス君に、これらのどの特質も缺けてはゐなかつた。彼は近代實業家の明敏と組織とをもつて、海上の所有權を否定するにあたつても、無下に敵の明敏と組織とを否定してはかゝらなかつた。たゞ、資本主義の皮肉は、スミス君をして、一つの所有權の否定は、己が所有權の非合法的確立であることに何等の矛盾を感ぜしめなかつたといふ一事である。

で、甚だ突然に、茫漠としたスミスといふ姓をもつたこの紳士が、ロンドンに姿をあらはした。グレースチヤーチ街に『ヘンダースン合名會社』といふ船舶ブローカーの看板が出され、もよりの銀行と取引が開始されるまでは、何人もスミス君の英國紳士であることを知るものはなかつた。この紳士はかなりの流通資金を持つてゐた。別に個人の名義で、他の銀行へも尠からぬ預金が行はれた。

次にスミス君の行つたことも、船舶に關係した仲介業としては寧ろあたり前の事柄であつた。それは地中海觀光用として大型帆船を冬期六ケ月間借受けたしといふ廣告を、同業者間の新聞へ掲載することであつた。返事が來た。ハイランド鐵道會社

の支配人が、汽船『フエレツト』を貸してもよろしい、然し二百人乘り、賃貸料も相應であるが、何より優良な保證が欲しい、といふ手紙をよせた。スミス君は汽船を檢分に行つて、頗る滿悦の樣子であつた。これから支配人に會見して、これもこの上ない好印象をあたへた。すべて紳士間の取引は、この第一印象の問題であるとされてゐる。保證は何の躊躇もなくヘンダーソン合名會社を前記の二銀行へ紹介された。銀行の信用は有利であり、自己直經營の合名が自分に對して非實業的な紹介をするわけはなかつた。そこで、傭船契約手金として、半ヶ月分の賃貸料が支配人へ送られて、こゝに地中海觀光團が愈出發するといふことになつた。

多くの場合にさうであるやうに、近代の事業には共同經營者を無視してかゝるわけには行かない複雑さがあるのである。紳士スミス君と雖も、彼にウヲーカアとライトといふ、頗る能率的で冒險性に富む二紳士が隨伴してゐなかつたとすれば、彼れの賢明さもいくらか實踐力を缺いたかも知れない。こゝまで膳立をしたスミス君には、今度は『フエレツト』號事務長の資格でウヲーカアが、グラスゴオの一船具商會から價格千四百九十磅の食料品と贅澤な酒類を注文し、それを償ふ三ヶ月拂ひの契約で積込み、更らに同じ手で石炭の方も解決して、借用證書に彼自身の裏書きを署名するまでは、にやりと笑つて部下の仕事振りを眺めてゐるだけの餘裕があつた。

船長には、もと船長の免狀を持つてゐて取上げられたといふライト君がなつた。船は、十月末の埠頭にうろつく悪そうなマドロスの群を乘組ませて、月の代りめにはマルセーユへ向けて解纜してゐた。ハイランド鐵道會社の支配人が、出帆當時の汽船を覗いたとしたら、定めし觀光團だけを拔きにした不思議な觀光船があるものだと怪しむだかも知れない。十一月十一日に、汽船はジブラルタル海峽を、これ見よがしに擦れ擦れに航海して、關門の役人に『フエレツト』號南へ向けて通過の報告をロンドンへ打電して貰つた。しかしマルセーユ航路は、こゝで止まつた。それから汽船は、地中海とは反對側のアフリカ沿りに船首を轉じて、わざわざ猛獸の牙のやうな暗礁の間を探りに探つて進むやうに見えた。

一夜、デツキ・ハンド達には不思議な命令が下つた。それは、燈火一つともさぬ薄月夜の下で『フエレツト』と書いた一艘のボートを海の中へ投げ込み、更らに浮環や欄干や椅子や帽子などを、鷄の羽毛を毟るやうに船體から拔き取つては海の中へ捨てることであつた。さすがに綺麗だつた『フエレツト』號も、今は皮膚病にかかつた猫みたいに汚くなつた。そして、その後、

船はヘビーを掛けて一夜のうちに海峽を通過し、晩秋の大西洋へこつそりと忍び込んだのである。――いくら盜群のないマドロスだつて、これまでには大概の様子はうすうす感づいて居つた。ここいらで暴動でも起きると葉山嘉樹の小說になるのだが、紳士スミス君は、もうちつとジヤツク・ロンドン型の人物であつた。

夜が明けた。徹夜のあとの疲勞を心理的考察に取入れた彼は、總員をサルーンへ呼び入れて英雄的な芝居を一と齣打つた。

『諸君、俺は南米で革命を企んで亡命してゐる政治家だ。蹤跡を晦ますために昨夜のやうな無理もした。が、これは諸君勞働者とは何の關係もない私事だ。諸君は働いてくれ給へ。俺と行を共にするならば、今後給金は倍にしてやる。もし不服のものがあれば――』

こゝでスミス君は、ポケツトの拳銃のにぎりを愛人の手のやうに締めつけたことは無論である。結局新契約の下にオール・ハンドはブラジルへボツプステーを向けた甲板上で、煙筒の塗り變へ、眞鍮具の引剝がし、船體の塗り變へと、不思議な仕事にだけ從事させられたことは、かういふローマンテイツクな外見の下にも、拳銃を持つた資本家と、勞働の本能だけを誇張教育されてゐる勞働者群との鮮かな對比を見せてゐるから面白い。

かうして『フエレツト』號は、乞食のやうな姿でサントスの港へ着いた。サントスの港では、彼女は『ベントン』號と改められた。白堊整然としたブラジルの港灣に、檻褸臭いペンキを塗りこくつた一介のトランプ船である。紳士スミス君の技倆は、この巨大な動產をポケツトへ入れてしまつた今迄の仕事よりも、寧ろこれからであつたと云はるべきである。――何となれば、翌年一月十一日、『ベントン』號は、同港の運輸會社から魅惑的な低賃銀でマルセーユ行の珈琲の大量を積荷して行く契約を得て、しかも、船が一度水平線內に隱れるやケープ・タウン行に航路を變へ、委托された珈琲全部を千百二十噸の金額で賣り拂つて、悠々として平和な海賊業に從事するにいたつたから。

賢明なスミス君は、曩に英國を離れる際、船內に印刷機を隱くして置くことも忘れなかつた。これによつて、彼は積荷證を發行し、拂渡證を印刷し、官許公文書の僞造を恣にすることが出來た。更らに又ケープ・タウンへ着陸する前に船名も『インデア』號と塗變へられてゐたのである。『フエレツト』別名『ベントン』別名『インデア』は、かうして南洋諸港の積荷を呑吐しては、ものの半年間も海洋冒險者の大膽な生活を營むだ。

一方、大組織ロイド船舶事業組合もこの巧妙な計畫にはすつかり嵌められて、會社の海上保險係がわざわざ入念な破船の證

間をして、ワフェレット號の前持主に保險金が這るやら、稀有ある船名錄から船名を削除するやらの悲劇を演じてゐた。この悲劇が會社にとつて喜劇となり、紳士スミス君にとつて悲劇と轉じたのはオーストラリアのメルボールンに於てであつた。常に石炭を焚きづめにしていつでも逃げ腰になつてゐるこの社外船を見た稅關吏が、不審に驅られて調べたあげく、『インデア』といふ船は全世界の船名錄になかつたのを知つたのが動機となつて、紳士二人は七年、ライト『船長』は三年半の重禁錮刑を受けた。

ダイヤモンド事件

昔からダイヤモンドは、人間の機智を發達させた。これ以上に發達させる必要はないといふ、ダイヤモンド一般に對する抗議は、即ちこの狡猾な詐取事件である。

英京ボンド街のストリータアといふ有名な寶玉商の店舖へ、りゆうとした身裝の紳士が或る日訪れた。言葉はやや聽取し得るほどの外國訛の圓滑な英語で、どこか奥まつた別室で主人に會ひたいといふのであつた。接見したストリータアが來意を訊ねると、紳士はロシア太公の代理人で、太公は殊の外ダイヤに凝つて居られるから、特別優秀な品を見せて貰ひたいといふことであつた。

主人は金庫を開かして、店主に黒い天鵞絨の布を敷かせ、恭々しく秘藏の石をその上へ載せた。來客は、石ひとつについて殆ど一時間以上も費すほど檢査しながら、最後にその一個を選んだ。これこそはきつと太公の御氣に召すでせう、この光澤と純潔さ――幾何ほど？

『四千ギニでございます。』

これは對して、客人は、金額は問題ではない、早速ホテルへ送つてくれるようにと云つた。

『決定する前に、』彼は附加へた。『是非一度御目に掛けたいので。』

店主はちよつと云ひ澁りながら、敬意を失はぬ程度で、斷つた。

『勿論！』對手は叫んだ。『私としたことが、こんな失念は！』と云つて、彼は一封の紹介狀を取出して見せる。それはオーストリアの大富豪でストリータアの大の顧客からの鄭重な書簡であつた。後になつて、これが僞筆であることは判明した。しかし、即座にそれがわからなかつた店主は、直ちにホテルへ向けてその寶石を送つた。ロンドン第一流のホテルである。

一時間ほどしてから、先刻の客が再び訪れて來て、太公は御氣に召したと仰けるが、同じ石を對にして欲しいと仰せられ

る、もう一個同じ物を揃へるなら二つへ八千ギニを即座に支拂ふ、と云ひ出した。店主は店舗にある品であれに對となる物はありません、もしどこかにあつたとしても一組で一萬二千ギニの價格にはなるでせうと答へた。

これに對して、件の紳士は、頗る寛大に、一萬二千ギニでも結構、が、しかし、太公へは直接このことは御耳に容れぬ方がよろしからう、ともかく二十四時間内に是非とも搜がし出すように、搜がし出せなければ一個の値段で引取らう、我々一行は明後日ロンドンを退京する心算であるから、急いだ方がよろしからうと云つて立去つた。

同じ色合、同じ形、同じ光澤のダイヤモンドを搜がし出すといふことは、ロンドン一流の寶玉商にとつても可なり骨の折れる仕事である。やつと店員を八方に飛ばして六千ギニまで支拂つてもいいから、誰か持合せがないかを市中の寶玉商全部へ送達した。一對にすれば二千四百ギニの儲けが浮くところから、店主はこの法外な卸値の倍もする賣値を附けたのであつた。

さて、ストリータアのこの告知を受けた一人に、有名な貴金屬の質屋があつて、ストランドに店舗を張つて居た。ダイヤモンドの明細書を見た質屋の主人は、

『や、この通りそつくりのダイヤが昨日店へ這入つた筈だ!』

と驚いた。そこで早速昨日その品を取扱つた事務員が呼び出され、よく聽かれると、事務員は素敵な服裝をした紳士が來て千ギニだけ借してくれ、それ以上は要らんと云つて預つて行つた品であると說明した。

さう云つてゐる矢先に、同じ紳士が質屋へ這入つて來て千ギニと利子とをカウンターの上へ置いて石を返へしてくれと云つた。

質屋の亭主は、ダイヤモンドを客へ返へすかはりに、それを手に取上げて、その申分のない肌合ひや光澤や玉質を賞め出して、もしや客人は御賣りになる意志をお持ちにならぬかしらと尋ねた。紳士はにべもなく撥ねつけた。

『でも、何ンですな、もし私の方で飛び切といふ値段をお拂ひするやうでしたら、如何ですかの?』これに對する紳士の態度は、前よりはずつと碎けたものだつた。

『値段によつては、意志を變へんといふこともなからうが——』

『如何でせう、五千磅といふところでは。この爪からすぐ樣お拂ひしますのでな。』

『駄目!——まあ、六千なら考へなほしもしやうが。』

とど二人の間に六千と五千と間の競り合ひがあつて、妥協は五千五百磅といふことに落着して、客は金を懐中して歸つてし

まつた。

それから十分も經つた頃、紳士はストリータアの店舖へ立寄つて、急にパリーへ呼び出されたのでここ數日間はロンドンへ歸へれまい、ついては、昨日取寄せた一個分だけの値段を拂ふのが適當と思ふから受取つてくれと云つて、四千ギニを拂つてから、思ひ出したやうに、

『對にするのだつたが、あれは當分取止めにして貰ひたい。』と云ひ殘して悠然と立去つた。

紳士の影が消へたと入れちがひに、質屋の主人が昂奮に顏を赧らめながら這入つて來て、ストリータアの搜がしてゐる寶石を目の前に翳ざして見せた。それは明細書に敍述したダイヤと寸分ちがはぬ——即ちストリータア秘藏の石であつたのである。その石にストリータアが六千ギニを支拂ふわけはない！

つまり犯人は、寶石を手に入れるとすぐさま入質し、對の寶石のないのを見て取つて、更に注文すればロンドン中を搜がすのを熟知し、胡瓜のやうに冷靜な態度で、一片の機智から、差引ギニと磅との價格の相違をも換算して、ここに千三百磅の不勞所得を書き入れた次第である。古來珠を抱いて罪のない人間は幾人あらうか？

屍體製造業

日本でも、醫育機關のために提供する解剖用の屍體は、年々の需要に反比して供給が尠く、貧民階級へ、葬式代として一屍體十五圓程度といふ相場で買ひ取つてゐたのが、毎年屍體價騰貴と同時に、原料の不足を來たすとかで、先年中原德太郎代議士が、議會へ『醫育充實に關する建議』といふやうな議題を提出して調査會を開いたことが、その當時の私の切拔帳に載つてゐる。

日本のこの屍體買占めの値段は、惡るくしたら、どんなに日本人の生命の價格が、外國——譬へば英國のごときに比較して、法外の安値であり、文明の程度の如何に低いかを示す標準價格とならないとも限るまい。

話はすこし古いが、十九世紀の頃、イデンバールの郊外に、屢人間が雲隱れして、二度と家へ歸つて來ないことがあつた。さういふ紛失した人間の大部分は、乞食だとか、貧乏人だとか、小娘だとかいふ種類の貧民階級に限つてゐた。仲間と一緒に徒步して來た乞食が突然蹤跡を晦ました。アイルランド人の小百姓が出稼ぎに來て、仲間から外れて見失はれた。使ひに行つた子供達がいつまで經つても歸つて來ない。その界隈は一團の恐

怖區域になつて、誰しも夕方から外出をする者がなくなつた。マリー・パタアソンといふ十八になる娘が、笑ひながら情人に會ひに行くと云つて家を出たぎり、再び歸らなかつた。ジヤミーといふ薄野呂な男が、薄野呂であつたがために近所の評判であつたが、これも見えなくなつた。次ぎにはマリー・キヤメルといふ乞食婆さんが失踪した。

だが、この乞食婆さんだけは、何かしら證據になるやうな事件を殘して消え失せた。それは、郊外のもつと低地の方の破ら屋の地下室に住んでゐる。何をして食つてゐるのか知れない、人相の悪いバークとヘーアといふ二人の男達と姿を消す前に立ち話をしてゐたといふことである。

それを證據に、二人の男達の地下室に手が這入つたが、室内にはべつに怪しいものとては見えなかつた。しかし、近所の人達の密告によつて、警察はイデンバール市内の醫學校を一軒一軒探索した。ノックス博士の經營してゐる醫學校に、果してつい此頃までのそのそしてゐた婆さんの屍體が、茶箱の中に詰められて置いてあつた。それは前夜、件の男達によつて搬入されたものであつた。

『ドクトル樣の品物で』、かういつも云ひ慣れた調子で云つたバークは、その晩も、古い茶箱一個の代價としては高過ぎるほどの五ギニを拂はれ、べつに仔細は訊ねられなかつた。二人は直ちに捕縛された。

彼等の告白によると、醫育用の屍體缺乏から思ひついて、過去二年間、最初は墓場を掘り返して滿足してゐたが、それも人目につき出すと、大量生産主義で手づから屍體を製造しにかゝつた。この陰慘な製造方法は、いつも機械的に同じ手段を繰り返へすことなので、しまひには、二人とも犧牲者を誘拐して麻醉劑を飲ませ、鼻と口へプラスターを詰めて窒息させる操作方法に何等の良心的苛責を感じなくなつたさうである。これから、英語には『バークする』といふ新熟語が流行して窒息させる意味に使はれるやうになつた。

この事件が口火となつて、その當時英國中には醫育用の屍體供給に關するあらゆる取引きが明るみへさらけ出された。

果してロンドンで發覺された屍體供給方法は、イデンバールのそれよりも遙かに大規模なものであつたことが解つた。それを最初に發見した人間は、キングス・カレッヂ・ホスピタルの解剖學教授パトリッヂ氏であつた。貧り掴かれた一少年の屍體に多少の不審があつたので、警察へ報告すると、官憲は、ビシヨップ、メイ、ウイリアムスといふ三人を嫌疑者として檢束した。

警察の調べたところによると、パトリッチ氏へ賣られた少年は、街で白鼠を踊らせて歩るきながら小錢を貰ふカルロといふイタリヤ少年であつたことが解つた。少年はよく酒場廻りをした。一軒の酒屋に、その朝飲んでゐたのがビショップとウイリアムスの二人であつた。彼等はいつも犧牲者を探がし出さうとする職業的良心から、阿片劑をポケツトに潜めてゐた。かうして、二人の甘言に釣られて解剖台まで長い旅路をしたのはこの少年であつた。毒藥を飲ましても死なないので、しまひに少年を抱へながら二人の惡漢は自分達の住家まで連れて行つて、少年の足に繩を絡らみ、毆り蹴り縮めて人事不省に陷らしめたのち、庭の井戸の中へ鮭のやうに吊る下げたのであつた。まだ死にきれぬ少年をものの一時間半も放置されたゐた間、二人はその附近をぶらぶら散歩しながらメイといふこれも仲間うちでは有名な屍盜に、何處か賣り場がないかを訊ねた。メイの指摘した學校では、材料がふんだんにあるといふので話は纏まらなかつた。三人は醫者から醫者へと廻つて歩いたが、何處でも彼等の要求する十二ギニの値段は支拂はなかつた。最後に九ギニを拂つたパトリッチ氏がその不氣味なサツク入りの材料を手に入れることとなつたのである。

ビショップとウイリアムスの家とは隈なく捜索され、無數の男女の身につける衣服やその他の物品が掘りかへされた。死刑につく前にビショップの告白したところによると、二人の間で製造した屍體は、今までに七十人からあつて、それぞれその捌け口を病院や醫學校へふり當てたさうである。

これに續いて、もつとセンセーショナルな發覺は、ホーリーウェル・マウントの墓場では墓といふ墓はすべて空らであつて墓守がそれを葬式と同時に屍體賣買人へ賣り渡してゐることが解つたといふ事實である。その墓守は、群集によつて危く私刑に處されるところであつた。

もつと深刻な發見は、大部分の貧民階級の葬儀には、葬儀會社が屍盜と共謀して、まだ葬式を營まぬ前に、こつそり屍體だけを賣り渡し、僧侶が式を營みに來た時には、勝手に煉瓦の詰入つた空ら棺へ祈禱をさせてゐたといふ事實である。この屍盜のうちには、かなりの金持ちもあつて、これ等の連中は請負制度で手下の者に屍體を盜みとらせてゐたのである。手下の者が一屍體について二磅の利益を納めると、親分はその四倍もの利益を屍體から搾取して卸賣りしてゐたのである。有名な外科醫のクーパー子爵のごときは、一夜に十二屍體の値段として百四十四磅を拂つたと云つてゐる。

ある屍盜の親分のごときは、子孫へ遺産として六千磅から殘

して行つたのである。

幸ひにして、あるひは不幸にして、醫育資料の缺乏してゐる今日の日本に、まだかういふ犯罪は發覺されてゐないやうである。

スラヴ的な殺人

最近、友人から贈られた、アメリカのアルバルト・リース・ウイリアムスといふコムミユニストの著はした『ゼ・ロシアン・ランド』といふ本年三月刊行の旅行記によると、ロシアの片田舍にはかなりまだ原始的な裁判事件があることがわかる。

これはクワリンスク・ヴオロストの百姓村に開かれた田舍法廷の裁判沙汰であるが、特にその村々のうちでも、パイン・ター村といふのは面白い犯罪の發祥地であつて、その村に絡む犯罪の傳統は、徹頭徹尾スラヴ民族的である。

その一つの事件といふのはかういふ犯罪であつた。——ある聖徒の祭日に、ワスリー・ナザロウイツチとエゴール・ルダといふ二人の農夫（ムジイク）が、二人共一生涯の親友であつたことを、大瓶のウオドカで祝し合つてゐた。いい氣持に醉つぱらつた二人は、昔からの田舍唄を歌ひ、接吻し合ひ、抱擁し、お互ひに、

『ヨウ小さな赤いおてんと樣！』

『オウ小さな白鳩！』

とか、すべてのロシア人が相愛してゐる時に用ゐる愛撫語を放ち合つてゐたのであつた。口ではかう云つてゐても、友達同志の愛情が嵩じて來ると、二人はそれで滿足出來なかつた。ムジイクの昂奮して來た愛情を適當に發表する方法は、拳——これ以外にはなかつたのである。

『俺はお前が可愛いんだ、ワスリー、』

イゴールは立ち上がつて云つた。『外へ出て喧嘩しろ！』

そこで巨人のやうな二人の農夫は、雪の降る屋外へ飛び出して、闘牛のやうに格闘し始めた。二人の聲は猛獸のやうに響き、體と體は烈しく叩き合ひ、拳は不氣味な音をたてて對手の體に命中し、見る見る白雪の上にはカンナの花のやうな男性の血が散らばつた。最後に、エゴールの額を鐵槌のやうに毆つた拳が、美事に彼を仕留めて、ぐうの音もなく彼は打斃されてしまつた。

絶望のあまり、殺した方のワスリーは、自分も自殺しようとした。そこを彼は村人達によつて取押へられたのである。

村の裁判所の判決は、それが『愛情のための喧嘩』であつたといふところから、極く通例に倣つて——三ケ月の入牢と、以

後一切他人を熟愛しないといふ禁止命令を下したのであつた。

共産主義者事件

一九二四年三月十四日ニュー・ヨーク國際發電によるこんな通信が、日本にゐた私をちよつと驚かしたものであつた。

> **ウオール街**
> **爆破犯人**
> **露國共産主義者捕はる**
> 千九百二十年ニューヨーク市ウオール街の取引所前の街路爆破事件を起こした犯人としてノア・レルナーなる露國青年共産主義者が警察に捕はれた、レルナーは最近露國からニューヨークへ歸へつたのだ

この、同じ爆破事件は、事件の起こつた當時は一生懸命に嫌疑をアナーキストへ塗りつけてゐたのである。何かと云へば、その當時のアメリカは、世界で一番悪るいことをアナーキストへ持つて行かうとする迷信を養つてゐた。そして、社會にこの迷信を大びらに使嗾してゐたのは、日本の治安維持法に酷似した『クリミナル・サンジカリスト・ソオ』であつたのである。

そこで、ウオール街の爆破事件も、大々的に無政府主義者がアイ・ダブリユウ・ダブリユウ（これを支那人に初音させると「ウオブレイ」と云ふので今日でも世界産業勞働者組合は「ウオブレイ」と呼ばれてゐるといふ說が存在する）の惡鬼的跳梁だと風評され流布されてゐたものである。――然るに、同じ事件が、わづか三四年で、今度はロシアのコムミユニストの所爲であるとされてゐる。これは何を物語るか？――アメリカの金權支配階級が、コムミユニズムに對して敵意を持ちはじめたからである。ロシアに對する反宣傳の一つとしても、恐らくこんな見え透いた愚劣な事件を誇張しなければならぬほど、アメリカの資本主義ジヤーナリズムは貧弱な材料しか持ち合はせてゐないからである。

しかし、この爆破事件は、本質的に資本主義文明下に白晝公然と行はれる資本家の大びらな犯罪として、一個の興味ある題材たるを失はない。場所は、鍵の手に曲つた、狹苦るしいウオール街と、イースト河の河岸からまつ直にそれと交流するブロード街との角、一方に『世界一』の私營銀行を誇るゼー・ピー・モルガン銀行があり、向ひには株式取引場の古典的な大圓柱のならんだ建物があり、その反對側にはワシントンの巨像が街を睨んでゐるユー・エス造幣支局の大建築が、建築、建築、建築、建築、建築の爵脊とした密林の中に、ただ一點の陽溜りをこしらへてゐる、その取引場前のサイドウヲークである。

實際この邊は、世界の金融資本の中樞地帶であつて、前記の三建築のほかにバンカース・トラストとかクーン・レオブとか、ファースト・ナショナルとか數へて來ると、無限に區劃された一大黃金殿の各營各室各房がずらりと列んでゐるかの觀を呈してゐる場所である。その一つ一つの窓から世界の資本主義に見えざる糸がつながつて居り、その事務所から出る一葉の電報がロンドンの、パリの、東京の相場に意外な番狂はせを生ぜしめるのである。しかも、統計によると一つの建築が各五十一分間毎に建つて行くといふニユー・ヨークのことであるから、一見秩序整然としてゐるやうなウォール街にも、絶えずどこかの古朽したビルデングが取毀はされたり、どこかの空地に地固の工事が行はれたりして、新陳代謝が繰返へされてゐるのである。

　事件の起つた日には、モルガン銀行の裏手にあたつて、新しいビルディングの設計が成り、そこの金一升どころの騷ぎではない高價な地盤に、技師はダイナマイトで孔を穿つてゐたのであつた。時は、あだかも正午、初秋の日射があかあかとビルディングの溪底に、讀み捨てられた朝刊のミダシをさへ照らし出すほど烈げしく一定の角度を保つて滑り落ちてゐた。數千の事務所から吐き出される午餐を求める無帽の事務員や、皎足たタイピストなどは、その日光の下に複雜な色彩の洪水となつて、思ひ思ひのレストランやランチ・カウンターへむかつて歩るいてゐた。一度、かくいふ私も、正午のウォール街を急用のために自動車で通つたことがあるが、人間のあいだを縫ふために、徒步時間の三倍も暇を潰ぶしたほどであつた。

　かういふ人混みのなかに、株式取引場前のサイドウヲークに、一人の無名の勞働者が、馬車を停めて馬の鼻面へ、飼料を入れたズックの袋を轡越しに嵌めようとしてゐた。馬は疲れた風で、びつしより汗をかきながら、しきりに鼻を鳴らして主人の與へる食物を促がした。天鵞絨のやうなボデイを誇るリモジーンやセダンの横づけにされてゐるこの界隈のサイドウヲークには、この一輛のみすぼらしい馬車は、すこぶる不似合ひにも思はれたが、みすぼらしい幌と疲れた馬とありふれた勞働者の姿であればこそ群集にまじる新聞記者も探偵も、かへつて彼等の存在に何の好奇心をも持たなかつた。

　群集はさんざめいて、馬車を八方から嘲罵するやうにその邊を歩るき廻はつた。馬の鼻面には飼料袋があてがはれた。馬車引は明るい舖道へペッと嚙煙草の黃ろい汁を吐き捨てて、上衣を行にどこかのランチ・カウンター指して一歩を踏み出さうとする刹那、轟然として馬車の車體から强力なダイナマイトが爆發したのである。

そのダイナマイトがどんなに多量で強力であつたかは、附近の建築の窓といふ窓は悉く粉みぢんになり、二百人あまりの人間が死傷したといふ事實によつても判明するだらう。

ブロード街からブロードウエイ、ウオール街の下町へかけて、その日の騒ぎと云つたら、ほんとに革命が起こつたやうなものだつた。忽ち救護班が出張し、警察は非常線を張り、新聞記者はキヤメラを持つて蠅のやうに死體や破壊された建築の周圍を飛んだ。

『ウオール街大爆破！　アナーキストの世界的陰謀！』

こんなミダシが、午後二時に發行する夕刊に出たのに何の不思議もなかつた。それは、アメリカ人ほど爆烈彈と云へばすぐアナーキストを聯想する國民はないのだから。

警察は全力をあげて、爆破の現場から、何なりと一片の證據をあげようと試みた。しかし、マンハツタンの大半を震撼したほどの爆破力の中心に馬の髮一糸落ちてゐるわけはなかつたのである。無名の勞働者とその疲れた馬とは、文字通り吹き消されて宇宙から存在を拭ひ通られてしまつたのである。

たゞ、この爆破事件の傍らに、最も焦燥した手で電話の受話機を汗みどろにしてゐたのは、モルガン銀行裏の新ビルデイングの設計に對して、保險をつけたビルデイング保險會社の重役達であつた。技師や人夫や火藥物の輸送先からの紹介を綜合してみると、鮮かに彼等の頭腦に描き出されたのは、數億弗の保險金ならびに傷害慰金や葬儀料であつたのである。どんなに否定してみても、爆破は作業中の地盤堀下げに使用されるダイナマイトが、熱暑のために自然導火して破裂したものにちがひなかつた。

しかし、氣の速い夕刊ではすでに『アナーキストの陰謀』を叫んでゐる。どうして、それを利用しないで置かれようか！　確かにアナーキスト説にも根據がある！　しかも、この場合、彼等不逞なアナーキストは、自分達に巨億の富を救つてくれるではないか！　アナーキスト！　然り、アナーキストの陰謀だ！　彼等はそれとなくさういふ噂を無意識のうちに呟いてゐる自分達を見出した。

が、新聞記者といふ近代の頭腦勞働階級は、或る種の肥つた、又は痩せた資本家の考へてゐるように鈍感ではない。すでに、火花の散るやうな保險會社の電話線の彼方に、一二三の有力な新聞が朧げながらもその事實についての暗示を傳へてゐる。

一九二〇年のウオール街に、多數のアナーキストが爆彈に武裝して、株式取引場だけを狙つて、しかもその内部ではなくてサイドウヲークを破壊する——といふ社會的情勢があつたか、

なかつたか、といふ事實よりも、モルガン銀行の裏手の空地では盛んに爆彈を仕掛けて地下のベッド・ロッタへ敷地を堀下げてゐたことは事實である。

しかも、小ブルジョア的恐怖に訓練されたアメリカ市民の大多數は、この凄慘な光景を見て直ちにアナーキストを聯想してゐるものである。そこで、重役達の非常會議がはじまり、めいめいに手別けして、彼等は新聞社歷訪を開始したのである。この歷訪は、會社の會計に大孔をあけた。尠くとも一社に一萬弗の口留料と、反アナ宣傳費とが、彼等の名刺とともに、新聞社の貴賓室で社長に手渡されたのである。しかし、結局、保險會社は破産を免かれ、重役連は投獄のうきめを見ずに濟み、アナーキズムはバクーニン以來のテロリズムをますます發揮することになつたのである。

ところが、この事件は、無名の勞働者と馬とからアナーキストに轉化されたのちに、最近では、ロシアの共産主義者に塗りつけられはじめた。

何と、資本家といふものは屈伸自在に事件を製造するものではありませんか！

憫むべき囚人

手許にある、一八九七年のヘンリー・ロオレン・クリヌトンといふ辯護士の著はした『不思議な事件』といふ裁判の判決記錄から、私は次ぎのやうな事件を拾ひ出して見よう。

茲に一人の學校教師があつて、ニユウ・ヨークの上流社會に出入し、相當食ふに困らないほどの知識階級的生活を維持してゐた。この男は、有名な大學を卒業して、教育もかなりあり、平常の素行も何等怪しむべきところはなかつたのだが、ある日、彼れの友人が、ちよつとしたことから、してゐる仕事の邪魔をしたといふので急に怒り出し、刹那の怒りに任せてその男を毆ぐり殺してしまつたのである。辯護士クリヌトンの委曲を竭した辯明にも拘らず、彼は殺人罪の判決を下され、州立監獄へ終身懲役として幽閉されることとなつた。

ところが、日頃この男の人格を尊重してゐたニユウ・ヨークの上流社會では、殺人の動機が單なる感情的いきさつから來たものであるといふ點に同情して、多數の署名者を連判したうへに、時の州知事へ請願運動を起さうとしたのであつた。

自分もかつて辯護した關係上、辯護士クリヌトンは、僅かにこの請願運動の有望なことを見極めて、州知事へその連判状を屆けて、彼を無罪放免にしてやらうと思つた。內情を聞くと、薄々そのことを感づいた州知事も、輿論に動かされて、どうや

ら無罪放免にしさうな形勢であつたのである。

そこで、辯護士は、先づそのことを犯人に話して喜ばせようとして監獄を訪れた。

『君、かうやつて君の友人達がぜひとも君を釋放してやりたいといふんだから、僕もこれを州知事へ屆け出すには無報酬といふことにして、單にその手數料——と云つても、十弗か、十五弗ぐらゐの費用を貰へばいいんだから、ぜひやらうぢやないか！』

かう云はれた囚人は、笑つて飛び上がると思ひのほか、素つ氣ない顏をして横を向いてしまつた。この男は決して衣食の不自由しないばかりではなく、不常月給の若干を割いて銀行へ預けてゐたところから、小金は持つてゐたのである。のみならず最近彼れの親戚の一人が死んで、思ひ儲けぬ小財産が、獄中の彼に轉げ込んでゐたのである。辯護士が熱心になればなるほどこの男の冷靜さは恢復された。しまひに、返答を催促されたので、彼は腹立ち紛れに、しかも十分の打算力を持つてから云ひ放つた。

『僕は監獄にゐた方がいいんです。——だつて、ここでは唯食はしてくれるんぢやありませんか！ここにゐさへすれば、財産はそつくりそのまま手がつかずに殘つてるんですが、外へでも飛び出して御覽なさい、忽ち元も子もなくなるぢやありませんか！僕はいつまでも州の御客になつて、やはり監獄にゐた方がどんなに氣樂だかしれあしませんよ！』

かう云はれて見るとさすがの辯護士も、人間の個人的自由を束縛するわけにいかないところから、呆れかへつて監獄の鐵扉を拔け出て來たのであつた。裁判の時檢査されたのであつたが、この男には何等精神上の異狀と云つてはなかつたのである。それから辯護士は、いつも吝嗇家の噂には、この無期徒刑と十五弗とを交換し得なかつた男のことを話しては笑つたのである。

が、この男の一生に、それから間もなく實に不幸なことが起つた。それは、どうしても彼を釋放してやりたいといふ上流社會の人達や、熱誠な友人達が、一言の相談もなく、十五弗の手數料も請求せずに直接州知事と會見して、彼れのために、新しく無罪放免の判決を得てやつたことであつた。

窮屈な牢屋から、蒼空の眺められる世界へ出て、この男は眞つ蒼になつて縮み上がつてしまつたのである。

チヤドウイツク夫人

一九〇四年の十二月初旬に、富豪カーネギイの約手として、

チヤドウイツク夫人に向つて振り出された二枚の七十五萬弗に該當する手形が、ニユウ・ヨークのカーネギイ代理店へ提出された。手形は、オハイヨウ州のオバーリン氏の一銀行から振り出されたもので、そこに何等の不審な廉はなかつたのであるが、何せ巨額のことなので、直ちにそれは、スコツトランドのスキボー・キヤツスルの別荘に住んでゐたカーネギイへ向つて發送され、その命令を待つて支拂ふことに代理店では決定した。

カーネギイは、一と目その手形を見るや、直ちに僞造であることを發見し、チヤドウイツク夫人の何者なるやを知らずといふ返電を送つた。その間、夫人は、該手形を擔保としてオバーリン銀行から二十五萬弗の金を借りてしまつた。それには、チヤドウイツク夫人が、クリーヴランド市の有名な醫師ドクトル・レロイ・チヤドウイツクの細君であり、ドクトルは稀に見る裕福な人格者であり、夫人は又クリーヴランドの社交界で一二を爭ふ花形であつたといふことも原因してゐた。尤も、それだけの金額を曳き出す前に、夫人は、自らカーネギイ氏を知つてゐて、手形に署名するのを目撃したといふ口供書を提出し、その宣誓の裏書をさせるために、ニユウ・ヨークから一人の有名な辯護士と稱する男を呼んだのであつた。銀行に雇はれてゐる探偵は、その「辯護士」を接見して見ると、思ひもよらず、その男こそはニユウ・ヨークの下層界で最も有名な「ピストルのビレイ」と綽名される惡漢であつたことを見破つた。

この發覺から、直ちに探偵達は夫人の寢室へ躍り込んで彼女を捕縛した。身體檢査を施した結果、彼女のコルセツトは二重の袋口になつてゐて、それに五萬弗の大金が隱されてあつたのがめつかつた。もう少しで高飛びしようとする矢先であつたのである。しかし捕へられて見ると、彼女は直ちに平靜な態度に變り、自分は五百萬弗からの公債を持つてゐる富豪であると威丈高に云ひ返し、その公債全部はクリーヴランドのナショナル銀行の金庫に保管されてあると云ひ募つた。僅かに金庫の一つの鍵は持つてゐたのである。そこで、官憲は直ちに金庫を開いて見ると、中にはいつぱいの紙屑が詰つてゐただけである。ドクトルと結婚してから六年にもなるのであつたが、その六年以前の素性に就いては、彼女は頑として口を開かなかつた。いろいろと苦心して調査したあげく、警察では彼女がリデア・ビグレイといふ僞造や强請罪で幾度も監獄入りをしたことのある强か者であつたのを發見した。彼女が前科者になる最初の振出しは、十六の年に文書僞造をしたといふことであつた。幾度も出獄したのち、しまひに社會の上流へ目をつけ、自分も裕福な婦

人であるやうな容子をして、たうとうドクトルの細君になつてしまつたのである。前後で彼女の盜んだ金は、約五百萬弗からの巨額に達してゐてそれ等を湯水のやうに撒りまいたらしいのである。彼女の虛榮心と贅澤は、殆んど女王的であり、そのために行ふ犯罪は夜叉のやうなものであつた。一度などは、社交界の友人全部を雇ひ入れのヨツトに招待して、アメリカからヨーロツパ巡りをしたことがあつた。又、一夜、彼女が芝居へ行つてゐる間、邸內の裝飾を全部取り替へるために、二百人の勞働者を、地下室から天井まで數時間働かしたこともある。友人への贈物として、八台のグラント・ピアノを一週間に注文した。ニユウ・ヨークのブロードウエイへ出て、氣紛れの素見心理から、二十着の服を注文した。その一着は純金の刺繡で覆はれたものであつた。最も彼女の得意とした手は、若い富豪を招待して美しい女と邂逅させ、自分は有名な女優に化け込み、二人の間に情事關係の成立するや否や男の方を强請つたのである。この手で、一人の百萬長者は八十五萬弗をせしめられ、シカゴの銀行家は四十萬弗を引き出されてゐた。

ボタン一個の値段

ごく鄙びた貌立ちのテレサ・ドウルナツクは、男性を惹つける美貌のかはりに、彼等の征服慾を滿足させるに足るところの從順と小さな機智と女らしさを持つてゐた。彼女は、それに人一倍敏活に働く頭腦を持つて生れた。生れ落ちるとからの女優といふものがあつたとすれば、生長してマダム・ウムベールとなつた彼女である。

女優的才能の煥發は、すでに彼女の結婚期に於てあらはれた。極めて貧しい農家に生れた彼女は、フランスの婚期の女性達が唯一の矜負とする持參金を持ち得なかつた。が、この兩親の嘆きは、テレサの嘆きではなかつた。彼女は、ツールウ市に非常に金持の伯父さんが酒造業をやつてゐて、嫌ひではあつたが、先達死んだ時三十萬フランの遺產を自分に與へた——といふローマンを考へ出した。彼女は慧しくも、このローマンを、二三の娘友達に堅く口留めをしながら話して聞かせた。豫期の如く、このローマンは恐ろしい勢ひで、村中にひろがつてしまつたのである。かうなると、今迄は娘の嫁入先を心配してゐた兩親も、遠近から押寄せて來る求婚者を見飽きるほどにたつたのである。わけても、その一人に、フランスの法律ではまだ親の許諾なしには結婚することが出來ないフレデイリツク・ウムベールといふ二十五才の青年がゐて、彼女の眸は彼れの上に留まつたのであつた。フレデリツクの母親は、テレサが遺產を

持つてゐるといふ噂だがそれを見なけりや、二人の結婚は許させないと云ひ出すと、彼女は氣輕にかう答へた。

『御尤ですわ。パリの銀行へ參りまして公債をごらんに入れます。』

翌日一張羅に着換へたテレサは、パリへ出ると云つて家を出た足で、やはり求婚者の一人であつた、中年者のデユウラツクといふ近在の農夫の家へ行つた。この男は、彼女の神秘的な持參金と同額の三十萬フランといふ金をこつこつ貯めては持つてゐたので、これが計らずも策女テレサの記憶にあつたのである。じみちなデユウラツクは、大概のフランスの農夫のするやうに、その金額で政府の公債を買つてゐた。テレサは才能のありつたけをつくして、たつた一日でいいからその公債を借してくれと賴み、夕刻村へ歸へつた時には公債の束を誇らしげに、フレデイリツクの母親に見せびらかしてゐた。

二人は直ちに結婚をゆるされた。結婚が濟むと、彼女は直ちにその由を良人へ打明けてから附け足した。

『怒つちや駄目よ!あたしは悧巧なんですもの。あたし達はこれから金持になるのよ。先づそれにはこの嫌らしい村を去ること。パリだわ、パリへ出なけりやお金なんて急に儲からないの!』

これをきつかけにパリへ出た新婚夫婦は、それから二十年間續くマダム・ウムベールの詐僞生活の第一歩を踏み出したのである。

貧乏な良人を連れて、彼女が最初に乘り出した舞台は、パリの最も華美な高價なアパートメントであつた。そのアパートメントの誰しもが氣づかずには居れない大客間の中央に、彼女は自動車ほどの大きさの金庫を備へつけて、三つの重々しい錠をおろして、それに政府の封印を施こして置いた。

テレサの計畫は圖にあたつて、友人や訪問客の間には、寄ると觸るとこの大金庫の噂が擴がつた。彼等は牒し合はせたやうに、

『マダム、貴女、一體まああの大きい金庫を何に御使ひなさるの?』

と尋ねるのである。

するとマダムは、さりげなく答へる。

『ああ、あれでございますか、あれには公債が詰まつて居りますの。――それが、どうもちつとばかりぢやないので困つて居りますの。ほんとの處、千萬フランほどもございましてね。』

一千萬フラン!――アベニユウ・ド・ロペラに棲んでゐる婦人は、フランス一の富豪である!かういふ風說は依賴しなくとも

パリ中に飛んで歩るいた。すると、甘い物を慕ふ蟻のやうに、各種の金融界の寄生蟲や、れつきとした銀行家、利權屋などがむらがつて彼女のアパートメントを訪問した。これらの訪問客群を、彼女は二つの範疇に分けて、金を貸す人間へは接觸したが、何か投資をしてくれと云ひ寄る人間は遠ざけることにした。すこしでも金の用立をしようとする人間にむかつては、ロバート・クローフオードといふ名で通つてゐるアメリカの百萬長者、あの人はこの間物故しましたが、實はあたしの父にあたりますので、とかう云つて、その遺言狀なるものと、公債目錄とを示すのであつた。この手ほどきが濟むと、彼女は一段と低聲になつて

『實は、あの財産は、あゝ見えましても、まだ手をつけるわけには參りませんのでございますよ。ロバートとヘンリーといふ父の二人の甥が、めいめいに遺産の三分の一をせしめようとしまして、目下訴訟を起こして居るのです。あの封印をごらん遊ばせ、あれですもの。あたしとしては、このまゝあゝやつて投つとくよりほかはないのです。つまらないものですよ、お金の番人みたよなものでございますの！でも、もしかしまして、あたしの方が敗訴になりましても、まあ、せいぜい三百三十三萬フランだけはあたしの物になるのでございますからね。』

それやこれや、噓八百の出鱈目を述べてゐるうちに、テレサの頭には數百人のアメリカの代言人や辯護士が出來上がり、それと同時に、書棚の上には創作的な無數の法律家の通知書、出産屆、死亡屆などがいつの間にか出來上つてしまつたのである。この女の舌三寸で拵へられた一大訴訟事件に興味を持つて、無期限無擔保でどしどし金を融通した佛國一流の金融業者が鈍感でなかつたとしても、テレサは彼等よりも遙かに上手な女優であつたのである。しかも、これが單純な思ひつきであるとか、翌日には曝れる一片の噓であるといふならまだしも、普通人が同じ噓を一年も支へたら重症な神經衰弱にならうと思はれるところを、彼女は二十年間やり終せ行ひ續けたのである。この女の意志の强さは、たしかに超人的であつた。

この架空のローマンを維持するためには、莫大な費用が必要とされた。ドレス、芝居、女中、宴會――テレサの一擧手一投足は、パリ中のセンセーションの焦點であつた。

今この田舍娘がどんなに佛國の財界を動かしたかを示す一例として、彼女の投資者の群を一瞥するに、ダイヤモンド商のルーリナ氏は十六萬磅の金額を貸與し、ドウモレ氏は七萬二千磅、リールのスコッチマン氏は二十八萬磅、ルフヱヴル氏は十六萬八千磅、シヤトオ氏は十六萬磅、銀行家ポール・ベルナー

ル氏は十二萬磅といふ大口の分の貸出しがある。

すべて、これらの巨億の富の投資の中心は、マダムの据ゑつけた大金庫に懸つてあつたのである。マダム自身は、それを開いて見たくて堪らないのであるが、例の幽靈訴訟がどうしても彼女の懇望を滿足させるわけには行かないのである。のみならず、そこには不斷に父の二人の甥の妨害があつて、夜も枕を高くして眠るわけには行かない。

しかし、二十年も經つて、訴訟に目鼻がつかぬといふことはどうしてもフランスの法曹界の默認するわけには行かぬ不審であつた。一九〇二年の五月八日、果然、司法大臣の嚴命でその大金庫が強制的に開かれることとなつた。その前後、事情を通ずるものがあつて、良人とマダムと妹と、そのほか二三人との一行は私かにパリを遁かれて姿を晦ましてしまつた。

翌日大勢の役人立合ひの上で、その有名な大金庫の扉が重々しく開かれると、中央の棚の上には、小さな滑稽なボタン一個がちよこなんとかしこまつてゐたのである。

程なくこの世界一の嘘つき女は、マドリッドで逮捕された。

（了）



法窓四十年の語り草

前大審院長 横田秀雄

こゝに事新しく、横田先生を紹介することの愚なるを信ずる。法窓四十年に渉る先生のその公生涯に於て、社會病患者に對する鋭利を極めたメスの冴えは、既に世評の自から定まるものがある。殊にその後半に於て、法曹界の象牙の塔たる大審院に立て籠り、時流を風靡してゐたドイツ流の概念法學に敢然拮抗して、最近頓に勃興しつゝある自由法學の主張を、當時既に判例に於て如實に示して世に問ふてゐる。筆者は先生のその世と共に絶へざる進歩を續け行く學者的良心に對し、多大の敬慕を感ずるものである。

法曹界の王座たる、大審院長にまで昇進した先生の、流石に經驗の豐富な點に於ては、他に多くこれに比肩し得るものはあるまいと思ふ。先生の談を聽くときは、その範圍の廣さに於て、その話柄の變化多き點に於て、全く飽きることを忘れる。而もその一々は、總て事實に基く事柄であり、これに對する感想なり批評なりは、何れも多分の暗示と興味とに富んでゐるものなのである。筆者が特に乞ふて、以下先生の談話を錄する所以のものは、かくの如き貴重な活記錄の、このまゝ埋もれしめるに忍びぬものがあるがためである。語られる所は極めて多方面に渉り、獨り司法府のことのみに限らず、或は政界の事柄にも觸れ、著名な人物の月旦にも及ぶであらう。

ドイツ、フランスと共に、世界の三大法典國と謂はれてゐる日本の法制は、さしもに旺盛を極めたドイツ流の概念法學の凋落と共に、いまやその精神的苦悶の時代に遭遇してゐる。このときに當つて、近來の名法官と謂はれた先生が、實生活から隔絶した概念遊戲の弊を排して、大地に足を着けやうと努力した裁判官としての體驗には、多分の示唆が含められてゐやう、又一面近來頓にその勢を加へた我が明治文化の研究に對しても、幾多の興味あるヒントを與へることであらう。

筆者元より談話の內容に萬誤りなきを期してゐるが、注意の至らざる所、或は何等かの誤謬を犯してゐるかも知れぬ、萬一左樣な點があれば、それらは偏に筆者の責に任ずべきものである。(鈴木總二記)

一　官場生活へのスタート

私事に渉つて恐縮であるが、話の順序として私の履歴をざつと述べさせて戴きたい。

大學を卒へたのが明治二十一年の七月、それから昨年八月大審院長の職を退いたまで、算へて見れば實に四十年になる譯だが、その間の私は裁判官と、他の一面教師として教鞭を執つた以外、遂に他へ志を向けることなく終始したもので、而も私にとつては裁判官としての生活があくまでも生活の中心であり、裁判事務に對してこそ私は常に興味を以て全的の努力を續けて來たものである。

明治九年、その以前にあつた明法寮の組織を改めて、司法省では新たに八年制の法學校を設け豫科四年本科四年の間、總て官費でフランスの法律を主とした教育を行つてゐた。私はこの第二期生として十三年に入學を許され、それから四年經つて更に第三期生を募集したが、私が本科一年の時即ち明治十九年に官立學校の整理に依てこの學校は東京帝大へ合併されることゝなり、それきりで廢止されて了つたが、しかしこゝからは富谷鉎太郎君、松室致君（第一期）、梅謙次郎君、秋月左都夫君、川部芳君、川村讓三郎君（第二期）、荒井賢太郎君、若槻禮次郎君、安達峰一郎君（第三期）等後年國家のために、多大な貢獻をした著名な人が多數輩出してゐる。

後ちに至つては裁判事務を全生活とした私も、その當時にあつては一般行政官に比べてはるかに地位の低い裁判官となることは不本意で、幸ひ二番目といふ好成績で卒業することが出來たので、二十一年の暮に參事官試補として司法省へ入つた。所がその後二年ほどして司法部に大改革が行はれ、僅かに平沼君、私と同期の首席で出た城數馬君、私の弟の小松謙次郎とその他一二の人達が殘されたばかりで、吾々の仲間は殆ど全部放り出されて了つた。そして私は麹町區裁判所へ廻され判事試補今日でいふ司法官試補を命ぜられることゝなつた。私の裁判官生活はかうした妙なきつかけから始められたものであつた。

そこで私も觀念して精々裁判事務を勉強してゐたが、當時の裁判制度は今日から見れば隨分變つた點が多く、たとへば「勸解」といふ制度があつて、係爭事件は先づこの方法に依て調停し、なほ不調となつた場合に、始めて裁判事件とするやうな方

法をとつてゐた。その内に明治二十三年の裁判所構成法實施といふことになり、司法官の大異動と共に大規模な老朽淘汰が行はれ、その結果吾々若手の連中がそれ〳〵任官することゝなつた。その際私は仙台へやられる筈であつたが、どうしても東京を離れたくないといふ私の希望から渡邊といふ先輩に頼み込んで熊谷區裁判所へ變へて貰ふことになつた、これが抑々私が一本立の裁判官となつた最初なのである。

幸ひ出發點が好かつたので俸給その他いろ〳〵な點で優遇されてゐたが、たゞ私はなんとしても東京を離れたくない、今後身を立てるためには飽くまで東京で生活してゐたいとの希望を持ち、常にその機會をねらつてゐた甲斐があつて、二十五年になつて漸く京橋區裁判所に欠員が出來たのを幸ひ、直ちに東京へ舞ひ戻つて來たのである。さてかうして東京へ歸れた以上はもう決して田舍廻りはやるまい、今後は東京で頑張り通さうと決心の臍を固めたのであつたが、幸ひその後間もなく東京地方裁判所へ入ることが出來たので、益々この考は根強くなり、こゝで若干の間勤めて部長となり更に控訴院大審院と順次上つて行く目論見であつた。

運よく大審院長にまでなれた私のことであるから、所謂夙に儁鋒を揮でゝ頭角を現はし、始終順境を進んで來たかといふと必ずしもさうではない、結局それは私自身が招いた運命なのではあるが、一時は隨分逆境に陷つて殆ど前途を危ぶまれた時代もあつたのである。といふのはその後暫く經つてから千葉地方裁判所の部長が空いたから行かぬかとの内意を受けた、所が私は例へ部長になれても田舍へ行くのではと、つまらぬ負け惜みからこれをぽんと斷つて了つた、その際人事課長の波多野（敬直）さんが『斷るのは君の勝手だが、いまに損をするぞ』と忠告して呉れたが果してこれが容易ならぬ蹉跌の原因となつて了つたのである、そして千葉へは次の番になつてゐた平沼騏一郎君が行く、さうなるともう横田は田舍へは行かぬといふことになつて、それからは地方で部長の空きが出來ても私を素通りして後輩の人々がぐん〳〵追ひ拔いて行く、而も東京では容易に空席が出來さうにもない。

かうして出發點の好かつた私が僅か一年ばかりの間に反つて順序が轉倒して了つた、そして遂には平沼君が横濱へ轉任した跡をうけて一度斷つた千葉へ赴任するといふ慘めな立場に陷らねばならなかつた。これはしかし官吏殊に司法官生活には屡々あることで、比較的順序正しく昇進して行くこの社會では、一度躓くと容易にその禍根が除けぬもので、一度順序が定つて了へば仲々それが崩れることはなく、さてさうなつて見ると己れの

不心得は忘れて不平であり不滿である、從て仕事も面白くないといつた調子で容易ならぬ危機を孕んで來るのである。幸ひ私の場合には波多野さんがよくこの不平を察し、常に私を庇護して人事課長から函館控訴院長に變られたときに一緒に函館へ伴れて行つて吳れ、それから二年經つて――明治三十一年に東京控訴院の檢事長になられた際に私を函館控訴院の部長に引き上げて吳れた、そして又その後、半年も經たぬうちにこれも波多野さんのお世話で東京控訴院の部長となることが出來たのであつた。私が一度陷ち込んだ逆境から救はれて、再び復活の曙光を見出したといふのは全く波多野さんのお蔭で、あの當時の御好意といふものは私にとつては生涯を通じて忘れることが出來ない。波多野さんは御承知の通り、その後次官となり大臣となられたのである。

最初は行政官志望であつた私も、その頃にはもうすつかり裁判官になり切つてゐた。かうして控訴院部長にまでなつた以上今後とも純粹の裁判官として進んで行かう、それには目ざす所は大審院であると、かういふ心組で勵んでゐたのである。司法官にとつては誰もがその究極の目的とするのは大審院なのだが、それだけにそこへ入るまでの苦心は容易ならぬものがある、所がその後二年ほどして刑事部に欠員が一人出來た。そして詮衡の結果、私か小山温君が行くことになり、順序からいへば當然私なのだが當時の刑事部長であつた長谷川喬さんは私を採ることには大分難色があつた模樣なのである、といふのはそれまでの私は、常に民事ばかりを扱つてゐたので果して刑事事件が裁けるだらうかとの疑念を持つてゐたらしい、それを富谷君や波多野さんが極力推薦して、刑事も充分やつてのける人物だと保證して吳れたので漸く長谷川さんも私を採ることに同意した。これは明治三十四年のこと、かうして私は大審院へ入ることが出來たのだが、私の生涯を通じてこれほど愉快なことはなかつたもので、いはゞ双六の「上り」を振りあてたほどの喜びだつたのである。

二　私の大審院入り

これは私が四十歲のときであつた。長年の念願であつた大審院入りも漸く遂げることが出來た、此所こそは私が一生懸命の努力を致すべき所であるといふ考へから、その後は一層仕事に身が入つたものである。何故かうまで大審院を希望するかといふのに、大審院で扱ふ所は總て法律解釋上の法理問題だけで、面倒な事實審理は一切行はない、その結果仕事は極めて簡潔であり高尚である一面には研究的であるために深みがある、殊に

當時既に學校へ出て法律の講義をやつてゐた私にとつては、特にそれが望ましかつた。

さていよ／＼新參の大審院判事となつて見ると、當分の間はいろ／＼な手續上の點に就て、苦しまねばならぬ事柄があつた、上告に對する説明といふものは實に面倒なもので、その要領を飲み込むまでは容易ならぬ苦心が要つた。しかしその内にはそれ等の點にも馴れ、自分の信ずる論旨に向つて十分説明するとも出來るやうになり益々仕事に興味が持たれるやうになつた。

さうして次第にそこの空氣にも馴染むに作れ、次第に大審院の内部に對し研究的の眼を向けるだけの餘裕も出て來た、過渡期である當時のことであるから、いろ／＼不可解な點があつたが、その一つとして私の感じたことは判例の説明が餘りに簡單に過ぎることであつた。この弊は今日もなほ殘つてゐることであり、又決して獨り大審院のみでなく總ての判決に現はれ勝ちな風習で、これは誠に不親切なやり方であると考へるがその當時は特にひどかつた。打ち開けていへば、判決に對する説明を詳細に書くといふことは、稍もすると破綻を生ずる恐れがある、即ちその理由を詳細に述べることに依て、その何れかの部分に反對者から乘ぜられる欠陷が生れ勝ちである、そこでこの危險を避け、説明を出來るだけ簡潔に片づけて了ふといふことは、反つていかにも道理があるもののやうに思はれ、見る人に依て夫々の解釋を下すから、大審院の威信を損する虞れがないといふ一つの政策となつてゐた。

これは司法部の信用を、いやが上にも高めねばならなかつた當時にあつては、確かに一理ある政策で、そのことの善惡は何れとも斷じ難いが、私はしかしこれとは反對の態度を採つた。

裁判官が裁判事件を處理するには、その審理をあくまで愼重に行ふと共に、その判決は當事者のみならず、世間一般が充分首肯するに足るだけの理由を説明して與へるべきだ、判決がいかに正當であつても理由が備はらねば完全ではない、理由と結局の判斷と相俟つて始めて裁判の威信が保たれるのだ、そこに判決の社會的價値があり、又裁判官自身にとつても苦心研究の甲斐がある、といふのが私の信念だつたのである。勿論私のこの態度に對しては、同僚中から、大審院傳統の政策を破壞するものだといふので、非難するものもあつたが、部長の長谷川さんは面白いことをする奴だといふので、多少の異論を排して私のするがまゝに任せて置いて呉れた。かうなると私の主張は恰も部長の支持を得てゐるかの形で、益々この主張に向つて精進するやうになり、一方他にもこの主義に賛成して呉れる人も出來て、それ以來大審院の判決に一轉機を來したと世間でもいふや

うになつた。

吾々にとつて何よりも樂しみのことは、變つた裁判事件を持ち込まれることで、そのためには隨分骨も折れるが從て興味も深い、いままで開拓してゐなかつた境地へ新しく鍬を入れ、會心の理由を徹底的に說明して新しい判例として發表する、考へて見れば極めて幼稚なもの丶やうではあるが、私にはこれが何よりの樂しみだつた。所がさういふ力の入れ甲斐のある事件は容易に現はれて來ない、多くは平凡なものばかりである、そこで私は事件の內容が面白ければ必ずしも自分の主任事件でなくとも、進んでその審理を引受けたもので、後に述べる電氣竊盜事件にせよ、一厘事件にせよ何れも他の人が主任であつた事件なのであつた。實際仕事に熱心であつたといふ點では何人にもひけをとらぬ積りで、その後部長になつてからも部長として私ほど判決書を書いたものはないといはれてゐるが、しかしなんといつてもやはり私の最も働いた時代は陪席判事の頃で、その時分がやはり一番多くの事件を扱つてゐる。

世間では大審院の判事などは一體なにをしてゐるのだらう位にしか思つてゐないやうだが、そこは商賣々々で、辯護士などにはその判例を見ると、これは誰が主任で誰の書いた判決だといふことが解る。その當時の上告辯護士としては、高木益太郎君の全盛時代で、又事實高木君の辯論振りといふものは實に巧妙なものであつた。その高木君が或時私を訪ねて、『どうもあなたが大審院へ入られてからは實によく勉強されるので感心してゐる、しかし私の從來の經驗に徵すると、大抵の人が大審院へ入つた當座は大いに緊張して勉強するが、その後二年經ち三年經つに伴れ、段々その緊張味を失つて了ふ、少くともあなたはさういふことのないやうに努められたい』と忠告して呉れた、私は『將來のことは自分でもはつきりとは解らぬが、自分としてはあくまでも努力して行く積りだ』と答へて置いたが、これはたしかに急所を衝いた忠告で、その後私自身も新しく大審院へ入つて來る人を見る度に、この人が果して今後十年も二十年も變化の乏しいこの仕事を續けて行く根氣があるだらうかといふことを考へることが多かつた。幸ひにして私は二十六年の在職中さまで退屈することなく、從てさうだれることもなく終始して來たと信じてゐるが、高木君は見て以て如何となすか、その內に一度聞いて見たいと思つてゐる。

三　法律の社會化へ

裁判官としての私が生涯を通じて最も努力した事柄はなんであるかといへば、それは法律の社會化である。いかに想像力の豐

當な立法者に依て作られたものでも、法文それ自體のみでは、千萬化の世間一般の事柄には應じ切れるものではない、これはやはり裁判官が、その時代の社會通念を基礎として、その法規を表裏各方面から解釋適用して始めて生きて來るのである。一體私の經驗からいつても、裁判官は事件の審理をする場合に於て、その經過を順次法律的に分解して行つて、最後に歸納的に結論を求めるかといふと必ずしもさうではない、先づこの事件は罰すべきか罰すべからざるかといふ結論が、眞先に頭へ浮ぶものである。昔の裁判ならばそれだけで好いのだが、法治國では左樣に簡單には行かない、普通の觀念に於ては當然罰すべきであるが、然らば法律ではどうなつてゐるか、所が法律には古いものがあり新しいものがあつてそれ等法の精神にはかなりちぐはぐなものが殘存してゐる、それを綜合し、許す限り大膽に解釋して、その社會通念上の結論に法理的根據を與へるやうに努める、そのためには或場合には法の立法的解釋も行はれることゝなるのである。けだし裁判官の責任たるや極めて重大なものといはねばならない。

　事件に直面して先づ頭に浮ぶものは實際生活の教訓である、そしてその教訓から裁判の結論が明確一點の疑もないものとして現はれて來る。所が多數の中には社會通念からは明らかに無罪を要求してゐる、又自分の實際生活の教訓からもこれは當然無罪であるべきだと信じ乍らも、法律はなんとしてもこれを許さぬ場合がある、かうなつては裁判官の力では致方ないので眼をつぶつて有罪とせねばならぬことがある。しかしこれが實際その時代の經濟上の法則や道德その他の社會觀念に反する判決であるとすれば、決して世間はこれを承認しない、司法官の手で致方ないとすれば社會は立法者を攻擊することになる。私は微力乍ら今日まで、さうした法律と實社會との破綻を、裁判官の手で出來るだけ補ふことに努力して來たものである。

　この私の主義に對して、極めて妨害となつたものはドイツ流の形式的論理主義の法理學であつた。今日では流石にこんな主張をするものは少いやうだが、その當時——明治四十年頃——はこの主義の議論が有力に行はれてゐた時代だつたのである。もと〳〵ドイツ法學にあつても、眞の精神はそこにあるのではあるまいかと思ふが、何分あゝした幾何學的に組み立てられた法律學であるから、稍もするとこの弊に陷り易い、即ちこの概念法學の論理を推し進めて行くと、法文に立脚して論理的の結果を收め得る以上、社會の事情などは無視して了つても好いといふことになるのである。極端な例で云へば、他人の地所内で指先へ土をつけて來たとすれば、これは明らかに竊盜罪を構

成することになる、これをしも刑法は昭々乎として『十年以下ノ懲役ニ處ス』と定めてゐるものとして罰するとすれば、世間はどう見るであらうか、かういふことが許されるとすれば、裁判官は甚だ樂で好いのだが、吾々はそれでは滿足出來ないばかりか不安を感ずる。右の例などは極端に失するやうであるが、實際その當時に於ては、餘りに法文の末に拘泥するの弊は蔽ふべからざるものがあつたのである。

四　電氣竊盜事件

刑法第三十六章「竊盜及ヒ强盜ノ罪」の最後に於て、第二百四十五條は「本章ノ罪ニ付テハ電氣ハ之ヲ財物ト看做ス」と特に「財物」の定義を敷衍してゐる、明治四十年現行刑法改正の際に特に加へられた個條であつて、その以前には存在しなかつたものなのである。これがはしなくも大問題を惹起する原因となつた。

所謂電氣竊盜事件、これは明治三十九年頃のことで私が他の部へ轉補で手傳ひに行つたときの事件だつたが、その内容が面白いので主として私が審理したものである。事件の内容は極めて簡單で、電氣を盜んで使用したものを罰するか否かといふ問題であつた。

これは誰もが當然罰すべきだとの意見は持つてゐたのだが、何分にも法律上の根據がない、「他人ノ財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪トナス」との規定はあつても、法律上所謂「財物」といふ觀念は當時有體物に限られてゐた。瓦斯は物體であるからこれを不正に使用すれば竊盜になるが、電流は理學上「力」であつて「物」でない、物でないとすれば法律に於て新たに規定を設けぬ以上、罰することが出來ないのではあるまいかといふ懸念があつた。

右のやうな理由でこの事件は二審まで無罪で通つて來たが、檢事はこれに服せずして上告した、これに對して大審院でも議論が二手に分れ、これは普通の觀念で推論すれば當然有罪とすべきである、しかし何分にも我國の現行法では電氣を物と看做すべき何等の規定がない、常識上罰すべき事柄でも法律上の根據がなければなんとも致方ない、殊に刑法は嚴格に解釋し皮傅援引は斷じて許されぬのが原則である、從て甚だ遺憾ではあるが法の不備である以上なんとも致方ないとの主張が强かつたが、又その反對にかうまで明白な犯罪を罰し得ぬとあつては法の威信にも關する、解釋に依ては現行法でも罰し得るのではあるまいか、との議論もあつて容易に決しなかつた。

そこで私がこの判決の原案を作ることを引受けて熱心に研究

した、社會通念が求める正義觀からいつても、これは當然罰せねばならぬ、たゞその理由をいかなる法律的根據を以て說明すべきかこの點に甚だ苦心したが、凡ゆる方面から審理した結果、當時の法律を以てしても充分說明し得る確信がついたので、私は敢然としてこの事件を有罪なりと斷定したのであつた。即ち刑法に所謂財物とは從來總て有體物に限つてゐたがこれは社會通念上必ずしもかく限定すべきものではない、電氣は理學上力であつて物でないとしても、なほこれを以て一種の財物と看做すことは妨げない、瓦斯と電氣を如何にして區別するか、瓦斯に於て竊盜罪を構成して何が故に電氣を盜用して無罪たり得るか、法律には財物とあつて必ずしも從來の如く有體物のみと狹く解することを強要してはゐない、といふ立論の根據から、結局必ずしも有體物のみに限らず、凡そ五官の作用で認識し得べきもので、これを人智に依て支配し得るものは總て刑法に所謂財物と看做すべきである、といふのがその理由の大略で、幸ひ同僚もこの說に同意し、やかましかつたこの事件も落着し、いままで認められなかつた無形の電氣も亦財物なりといふ新判例が、既に立法に先立つて確立することゝなつたのである。

形式的な概念法學で推して行つたのでは、かうした結論は容易に出て來ないもので、實生活に即した裁判を行ふには、あくまでも法律に彈力性を持たせ、出來得る限り社會通念でこれを解釋せねばならぬといふ一例として、この事件などは最も適切な實例であらうと思ふ。その後刑法の改正に際し、先進各國の例に倣つて「電氣ハ之ヲ財物ト看做ス」の一項を加へ、將來の禍根を絕つたことは、この事件が相當強い刺戟を與へたのであつたが、しかしこれは特に規定を設けずとも、前に述べたやうな解釋だけでもゆける事柄で、殊に今日では五官に作用しても支配することの出來ない光線とか、熱、音響とかいふものも、將來世の中が變化して、瓦斯電氣同樣これを財物と看做して、保護せねばならぬ時代が來るかも知れぬと思つてゐるが、その際には又一々追加條項を加へねばならぬことになるだらうと、飛んだ取越苦勞も生れて來る。

五　一厘事件

次は所謂「一厘事件」、たしか明治四十三年の出來事で、これは過日畏くも今上陛下の御前に於て「法の適用」といふ事柄に就て御進講申上げた際、その一例として御話し申上げたがこの判決は私の生涯を通じての名裁判として、大分世間からは賞讃を博した裁判であつた。事件は煙草專賣法違反として起訴されたものでその內容は次のやうなのである。

栃木縣の某所に白相文吉といふ者が居つた、たしか六十幾つかの老人であつたがそれが政府の許可を得て煙草を栽培してゐた。專賣法に依ると、煙草を耕作するには政府の許可を得ねばならぬが、その許可を與へたものに對しては政府は或は肥料代金を前貸ししたりして種々なる保護を與へることになつてゐる。しかしその代りには出來た葉煙草は一切政府へ納めねばならぬ、專賣局では各耕作者毎にその年の收獲し得る葉の數量を登錄して置くから、隱匿したり讓渡したりすることは勿論、費消することも出來ない、もし左樣なことをやれば專賣法違反として罰金に處せられることになつてゐる。而してその納入した葉煙草に對しては鑑定人をして鑑定させ、專賣局から相當額を賠償金として與へることになる。所がこの白相文吉がどうも煙草を隱匿して政府に納めないといふ嫌疑がかゝつた、そこで檢擧して段々調べ上げて見ると隱匿の方はなんとしても證據が擧がらないが、計らずもこの老人が乾燥した煙草の葉を手刻みにして喫んだといふ事實が發覺した、そこで專賣法違反として宇都宮地方裁判所へ起訴されることになつた。

さて然らばその費消した葉煙草はどれほどなのかといふと、僅かに葉一枚、目方にして七分ほどのもので分量にして見ると丁度敷島一本位に過ぎない。もしこれを政府に納めたとすればその價額は幾ら位かといふに、賠償額は一厘にも充たないものなのである。これが後世この事件を「一厘事件」と呼ぶ所以なのである。

所が宇都宮地方裁判所ではこれを證憑不十分といふ理由の下に無罪として了つた、これは同裁判所の政策であつたか、或ひは眞に證憑不十分であつたのかそこは解らぬが、ともかくも無罪といふことで片をつけて了つた。然るに檢事はこれに服さずして東京控訴院へ控訴して來た、そこで控訴院では改めて調べ直して見ると、やはり隱匿の方は解らなかつたが、一厘に相當する葉煙草を吸つたといふ事實だけは、證據が明確だといふことになつて、これを專賣法違反として罰金十圓に處する旨の判決が言渡された。

この裁判が世間に傳はると輿論が大分やかましくなつて來た。僅か一厘ばかりの事柄についてこれを有罪とし、十圓の罰金に處するとは何事だ、裁判所のやり方はいかにも非常識であり苛酷であるといふので、辯護士達が結束してこれを上告した、その結果こんな些々たる事件が素晴しく人氣を集め著名な辯護士が九人もつくといふ騷ぎになつて了つた。當の被告人は何分老人のことではあり、最後までその犯罪事實を否認してはゐたものゝ、さてさういふ判決が下つて見れば、强ちこれに服

さぬのではなく、もう面倒な上告などはする意志もなかつた模様だが、本人はさておき世間が承知しなくなつて了つたのである。

大審院では鶴丈一郎君が主任となつてこれを審理することゝなつた。當時は七人の判事が裁判をした時代で、私もそれに加つてゐた。型の如く檢事と辯護士との間に辯論があつて辯論終結の結果合議をして見ると大勢は依然として有罪論なのである。法律を離れて考へれば誰しも罰したくないとの考は同じなのである、一體こんな事件を起訴するのが惡い、檢事が微罪不檢擧といふことにして叱つて放して了へばそれで濟む問題なのだ、しかしかうして起訴された以上は如何とも致方ない、微罪不檢擧は檢事の政策問題で裁判所にはその權限がない、一厘の煙草とはいへやはり煙草には相違ないのである、して見ればこれを費消した以上、法はこれを許すべきでないといふのである。これに對し私は種々な方面から極力無罪論を主張した。幸ひに鶴君は私の說に贊成して吳れたが、形式的論理主義の旺盛な當時のことであるから多數は依然として反對である、もしあの際直ちに決を採ることになれば當然吾々の主張は少數で敗れたのだが、今一應研究して見やうといふので、採決を延ばすことにした、これは何れも罰したくない者は一致してゐるのだから、なんとか理由がたつならばといふので延ばしたのである。

そこで私はこの事件を無罪なりとする判決の案文を書いた。なるほど物理上からいへばたとへ一厘の煙草でもそれは明らかに煙草である、しかし法律は元來共同生活の基準なのであるから物理上の觀念のみから法を解釋することは誤りである、須らく社會の通念で解釋すべきである、從て犯罪の客體となるものは一般社會でも相當の價値ありと認めるものでなくてはならない、他人の財物を竊取したものは罰するとあつても、塵一本持つて行つても、他人の井戸から水を一杯飲んでも、これを罰せよといふのが法の精神ではない、一本の塵、一杯の水は社會通念では計算の中へ入れない、從つて賠償價額僅か一厘に相當する位の煙草は、これを計算の中に入れるべきではなく、專賣法の適用外に置いて不問に付してもそれがために決して社會の安寧を害することはない、といふのが論旨の大體の筋道だつたのである。

犯罪事實に價値の觀念を入れるといふことはたしかに劃時代的な主張で、事柄の客觀的事實のみを捉へ、ひたすらこれに對する法の形式的論理の組立を念とした概念法學を排して、これを主張することはかなり勇氣を必要とした。果して私の原案に對しては相當異論もあり反對もあつたが、結局無罪とする私の主

張は徹つて、たゞその理由の論旨中に、各自の意見も織り込んで説明することになつて、漸くこの事件は落着した。

現はれた形式から見ればこの一厘事件の判決は、前の電氣竊盗事件の判決と相反した立場を執つてゐる。電氣は物理學上力であつて物でないが、それを刑法上の物として解釋して了つた。所が煙草の方は反對に、たとへ一厘の價値しかない葉であつても、煙草には相違ないがたゞそれを法律適用の上では煙草としての價値を認めない、といふのだから全然反對の論理から成り立つてゐる。しかしその觀念に於ては共通のものがある、といふのはつまり社會の通念、法の精神解釋といふ點である。社會通念に依て法の精神を解釋すれば、無形の電流も竊盗の目的物となり得るものと解釋せねばならぬし、一厘の煙草の費消を罰することは法の求めてゐる範圍外だといふことにもなる。總て法はかうして社會通念を土台として解釋して、始めてその精神が生きて來るものだと、私は固く信じてゐる。

一厘事件は極めて反響の大きかつた裁判で、一般世間からは大分賞讃を博したが、その一面には學者からはかなり手強い反對もあつた、そしてその反對論にもそれ〴〵根據があり、中には傾聽に値する立派な議論もあつた。しかし單に理論を研究する學者と違つて、實際家としての裁判官は極めて苦しい立場に立つてゐる。

法と社會の乖離、法理と實際生活の教訓との矛盾をいかに融合せしむべきか、過去の大岡裁判式のものは裁判官の常識だけで裁判して好かつた、裁判官を拘束すべき細密な法律がないのであるから、裁判官の實際生活の教訓が法として働いた、だから極めて直感的なもので、その申渡しが實質に於て正しければ、敢てその理由を説明することを必要としなかつた、所が現在の裁判はそんな直感的なものでなく、徹頭徹尾論理的でなくてはならない、判決がいかに立派でも、そこに到達する論理が正當でなければならぬ、實際社會の教訓だけでは勿論いけない、といつて法律上の知識だけでもいけない。

昔は「民は據らしむべし知らしむべからず」で濟んだ、しかしいまは「知らしむべし據らしむべし」でなければ通らぬ、そこに今の裁判官の苦心があるのである。

それと今一つこの一厘事件の判決に對して、その理由の説明がいかにも長いといふ批評があつた、もつと簡潔にしても好いではないかといはれたが、これはどの判決にも避け難い對內的對外的兩方面に對する必要から來たもので、特にこの裁判の如く當時盛んであつた形式的論理主義の法律思想に反してやる判

決であるから、何とかして讀者を首肯せしめるだけの理由をのけねばならぬために、その説明が長くなつたものだが、他の一面に於て何分七人の判事の大多數が有罪論なのであるから、これを個別的に説得するには、銘々の注文も或る程度まで容れねばならない、終局の判決に影響がなければ、實はなるべく入れたくないのだが、罰すべからざるものを罰することになつては容易ならぬことであるから、出來得る限り讓歩して各自の説を取り入れねばならなかつた、そこで私の原案はさうした合作のために更に長いものとなつて了つた譯なのである。

　この兩者に對する關係といふものは判決の上に極めて微妙な作用をするもので、判例を讀むものはこの點を充分注意することに依て、一層妥當な知識を得ることが出來る。

六　「狸と貉」裁判

　前にもいつたやうに裁判事件の大部分は、何れも大同小異の平凡なもので、吾々がこれはと考へさせられるやうな事件は滅多に持ち込まれて來ない。從て新味のある判例は容易に生れないが、大正十四年の狸裁判などはちと風變りな常識裁判の一例として面白いものであつた。しかしこの裁判は事件の内容そのものより、問題の對象となつてゐるものが狸と貉といふひどくユーモアに富んだ[illegible]つたことが、一層世間の[illegible]つたものらしい。

　栃木縣上都賀郡の栃木伊之吉といふ者が、日光附近の或山中で貉を鐵砲で撃ち獲つた、それが大正十三年の三月初めのことであつた。所が狩獵法に依ると十月十五日から翌年四月十五日までが狩獵期となつてゐるが、狸外十種類の獸だけは同施行規則で、狩獵期を十二月一日から二月末日までに短縮し、三月以後を禁獵期として保護してゐる。而して貉は即ち狸の異名にして全然同一のものだといふので、この事件は狩獵法違反として起訴され、一審二審とも有罪となつたが、被告はあくまで貉は狸と別物だと頑張つて、とう〳〵これを上告した。

　ここでこれを私の手で審理することになり、參考人として動物學者の説も聞き、愼重に研究したが、結局動物學上に於ては、狸と貉は同一のものであるといふことは明らかとなつた。

　しかし私はそれだからといつてこれを直ちに有罪とすることは不穩當だと信じてゐた。といふのは事實に於て、狸と貉は別物であるとの觀念が、世間には相當廣く行はれてゐることを考慮せねばならぬ、而も地方に依ては、この二者は全然似て非なるものなりとの説が立派に通用して居り、現にこの問題の起つた地方などは、一般にさう信じられてゐたのである、して見れ

ばこれを罰するのは甚だ酷ではないかと考へたのである。
種々研究した結果大審院はこれを無罪なりと判決した。成程動物學上から見れば狸と貉は同一物であるかも知れない、しかし世間にはこの二者は全然別物であると信じてゐるものも多数あるのである、この被告の如きも全く異るものであると信じ、狸を獲ることは法に禁ぜられてあるが、貉は然らざるものとして捕獲したものである、法の不識に依て起つた事柄ではなく、事實の錯誤から生じた事件なのである、殊にその事實の錯誤にも社會的通説からは認められるべき根據があるのである、といふやうな論旨を以てこの判決の理由を説明した。

果して動物學者の間ではこの判例に對して猛烈な反對が起つたが、しかし一般世間からは大體好感を以て迎へられた模様であつた。更に又私の調べた結果に依れば、この事件は別の方面からも無罪とする理由はあつたのである。といふのは被告はこの貉を最初捕へたのは二月の末であつたが、その時には何分夕方のことであり、鐵砲も持つてゐなかつたので或る狹い穴へ追ひ込み、入口を石で塞いで置いて一端歸つて了つた、そしてその後再び行つてこれを撃ち獲つたのである。だから實際獲つたのは二月であり、鐵砲で撃つたのは殆ど飼つてある家獣を殺したのと同じで、これは狩獵ではないと見られるのである。

しかし私がこの事件を無罪としたのは勿論第一の理由を主眼としたもので、學説と社會通念と相反する場合には、たとへ學説が眞理であるにもせよ、實際を看過出來ぬ裁判所では、學説に反する判決をすることも必要であるといふ一例として、この事件などは面白いものであると思つてゐる。その後上野の動物園へ行つて見たが、成程彼所にも「狸又は貉」と書いてあつた。

（未完）



嗚呼野口英世博士

宮島幹之助

五月二十二日の都下の新聞は、ニューヨーク發の電報を載せて、近代日本が生んだ世界的學星の一人である、野口英世博士の悲壯なる最後を報じた。

本月の始めに米國の友人が私を訪ねた際に、野口君は昨年の冬黄熱研究のために西アフリカのゴールドコーストに行つてゐたが、不幸にも黄熱に感染し、アクラといふ町の病院に入つて、十二月から一月一杯惱んで居つたが、幸にもその病氣が殆ど恢愈して、程なく研究を遂げてニウヨークに歸るであらう事を告げて呉れた。私共君と同學の者等は、何れも君が壯健となり、その研究を繼續して、君が畢生の事業たる黄熱研究の完成する日を衷心から禱つてゐたのであるが、今や君は學問のために西アフリカの蠻界に悲壯な最後を終げたといふ事は、實に世界の學問のためにも、又我日本のためにも償ふべからざる一大損失である。新聞にも書いてあつたやうに、内閣の二つや三つは倒れてもさう驚くには足りないけれども、日本は勿論世界の間にもかけがへのない野口博士を喪ふた事は、實に重大な損失である。

君の生涯を通じて全力を捧げた仕事は、人類の害敵である種種な病氣を征服するにあつた。その本營はニューヨークにあるロックヘラー研究所の一廓を占めてゐた君の研究室である。君は早朝から夜に至るまで孜々として惓まず、或は顯微鏡を覗き、或は試驗管を手にして、眼に見る事の出來ない種々な病氣の原因である微生物を己が思ひの儘に取扱つてゐた。今は想出すさへ涙の種である。大正十五年の冬私が紐育に滯留せし際君をその研究室に訪ねて終日を談り暮した。君は當時研究中の「トラ

ホーム」菌やその培養をうゑて發病した猿の眼瞼を示して得意であつた君の面影は今尙眼前に彷彿たるを覺えるのである。

君は最近數年の間研究のために或はメキシコに、或はエクワドールに、或はペルーに、或は山奥のユカタンに、更に遠く南米のブラジル等に出張して、その鋭い觀察力と、鍛へ上げた技術とを以て、先人未發の發見を齎した事は一再に止らない。例へば黴毒の病原體を獨創的の方法に依つて培養した事や、或は醫學上の疑問とせられてゐた麻痺狂脊髓の原因を探求して腦や、脊髓の組織中に黴毒の病原體「スピロヘータ、パリダ」を立派に證明して、是等の疾病の原因を明かにした事は、此等不治とされた病に治療の方針を與へ、これが爲めに幾多の人が救はれたのである。更に擧げなければならないのは、オロヤ熱の研究である。これはペルーの山間に地方的に流行する一種の慢性熱病であつて、人が一度この病に犯されると高度の貧血に陷り遂に斃れるのである。その原因に至つては久しく判明しなかつたが、野口博士一たびこの研究に手を染めて、その原因となる細菌を人工的に培養し、その培養を猿に植ゑて人間に見るが如き病氣を起こさせ得た事は一大發見であつた。猶それにも增して偉大なる事業は、この度野口君を斃した黃熱の病原體「レプトスピラ、イクテロイデス」たる微生體を發見したことである。そしてその人工的培養をもなし遂げ、更にこれが應用に依つて、豫防及び治療に新なる道を拓いた事などは醫學史上特筆大書さるべき功績である。實に野口君は黃熱の研究に過去七年間殆んど不眠不休の勢で從事し已に完成の域に達してゐた。然るにアフリカの一地方に流行してゐる黃熱は、南米や中央アメリカに見る黃熱と異つてゐるやうな報告も現はれたので、學問に熱心な野口君は、直ちにアフリカへ出かけたのであつた。立派な研究所の内とは違ひ、僻陬の地而も設備の極めて不完全な場所に於て夜を日に繼いでその研究を續けたために、不幸にも君はその病毒に感染した事と思はれる。由來黃熱の研究に從事した人には幾多の犧牲者を出した。今から二十八年前の一九〇〇年に、アメリカの陸軍軍醫リード、キヤロル、アグラモント、ラゼアル、といふ四人の研究者がキーバ島に行つて黃熱の研究を行ひ、始めて縞蚊の一種「エーデス、エギプチー」（一名スデコミヤフアシヤタ）がこの病氣を媒介する事を發見して、黃熱の豫防上に重大な基礎を築いた。その研究の際にこれらの研究者はやはり黃熱に感染し、その四人の中の三人迄も倒れてリード氏が一人生殘つたばかりであつた。實に黃熱の如き傳染病の研究に從事する者は、何時その病毒に襲はれないといふ事は保證出來ないので、細心の注意と異常の勇氣とを持つた人でなけ

れは、かかる研究に從事する事が出來ないのである。野口君は最も注意深い、併し一方には最も大膽な研究者で、遂に黄熱のために斃れた事は、丁度伊藤公がハルピンの驛頭で不逞鮮人のために薨去せられたのと相匹敵する名譽の戰死と稱すべきものであらう。野口君の氣性を知つてゐる私共から考へると、學問に忠實な君は或は本望としたかも知れない。けれどもこれを學界から見、又日本國の側から考へると、如何にも君を失つた事は惜しみても餘りあることである。

君は東北の一寒村の貧しい農家に生れ、幼にして醫學に志した。そして上京して濟生學舍に入り、醫學を修めて僅か二年の間に醫術開業試驗に合格し、二十二才の弱冠をもつて醫者となつた人である。これによりて既に當時から君の學才の非凡であつた事、努力家であつた事を覗はれるのである。今の齒科醫學專門學校の校長である血脇守之助君などは、野口君の天才を認め、蔭となり日向となつて誘掖され援助されたのであるが、醫者になつて間もなく私立時代の傳染病研究所に入り、北里博士に就いて細菌學を學んだのであつた。明治卅二年の十二月に血脇君等の援助に依つてアメリカに行く事になつたのであるが、當時は留學生などは極めて質朴なもので、今日のやうな立派な船の一等船室に入るやうな事は夢にも思はれなかつた。無論野口君は三等船客の一人としてアメリカに行かれたのであるが、これはペンシルバニヤ大學の教授フレキシナー博士を頼つて、先生に就いて猶進んで細菌學の蘊奥を極めんがためであつた。爾來野口君はペンシルバニヤ大學に於て助手となつて、蛇毒の研究をしてゐたが、その才能が認められ明治卅六年にはカーネギー學院の研究生として歐洲に留學する事となり、デンマークの國立血清藥院に入り、アレニース、マドセン博士等の如き血清學の大家に就いて研究し、間もなくアメリカに歸つた。丁度アメリカの石油王のロツクヘラー氏の寄附に依つて、新しく醫學の研究所が設立された時であつた。即ちロツクヘラー研究所の創立當時でその所長は野口君の師であるフレキシナー博士であつたので、直ちにその研究所の助手となつた。それは恰も明治卅七年のことである。ロツクヘラー研究所に入つて後愈々君の手腕が發揮され、矢繼早にそれからそれと新しい研究を發表した。而もその業績の多い事と、その研究の獨創的である事は北米廣しと雖も他の追隨を許さなかつた。間もなく大正三年には同研究所の正員に進み、又日本からは醫學博士・理學博士の二つの學位を受け、アメリカのエール、ブラウン兩大學からは名譽學位を贈られた。君の學術的功勞は到る所に認められ、或は

學界の名譽會員となり、帝國學士院の恩賜賞その他歐米の學界等から屢々賞牌を受け又大正十二年には帝國學士院會員に擧げられた。先年歸朝の際は勳四等に叙せられ、旭日小綬章を授けられたが、今度君が學問に殉ずるや、特旨を以て勳二等に叙せられ、旭日重光章を賜つた。

然るに君はこれらの名譽に自ら眩惑せらるゝ事なく孜々として研究室に立籠り、その研究を一日も廢する事なく、實に學者の好典型と誰しも云はない者はなかつたのである。自分の國にゐてさへ、仲々立派な仕業を爲す事が容易でないのに、全く事情を異にする異郷に在つて、又各國から來てゐる優秀な同僚の中にあつて嶄然頭角を擢ん出た野口君は、實に全日本人のために萬丈の氣を吐くもので、又日米國交にも及ぼした功績は蓋し大なるものがある。又黄熱の研究に行つた南米「ブラヂル」に於ては、王者の禮を以て迎へられ、バイヤ大學には君の名を冠する研究所さへ設けられた。これがために頭を擡げかけた同國に於ける日本人排斥の聲など忽ちにして消えたといふ事である。

野口君は身を微賤より起し、恵まれざる境遇の中に在つたにも拘らず、又その生涯は僅か五十三年にすぎないのに、その名聲を世界に轟かすに至つた要素は何であるかを一考する必要があらう。即ち野口君は天稟の學才を持つてゐた事は第一の要素ではあるけれども、野口君の學才も學問の尊さを良く理解する環境――即ち北米のロックヘラー研究所の如き――がなかつたならば、かくまで大成する事が出來なかつたらうと思ふ。もう一つ見逃し難い事は、野口君がフレキシナー博士を師とし終生變らざる師弟の情誼を重んじたことが又重大な要素をなしてゐる。兎角今日の日本に於ては、若い人々がいくらか偉くなれば師を疎んじ顧みないといふやうな頗る輕薄な風潮が滔々として流れてゐるが、野口君は日本古來の美風である師弟の情誼に厚い人で、この點では北米學界の人達が非常に敬服してゐた。この美徳を備えてゐたゝめにフレキシナー博士の如き良師を得、その愛護の下に他國人であつたに拘らず研究上最も良き環境に居る事が出來たのである。そこに君の天稟の才能と、撓まざる努力とが働いて君の一生を永久に光輝あらしむる事となつたのである。

野口君を憶ふ時に、私は君の一生こそ、取つて以て直ちに今日の青年子弟の龜鑑となすべきものであると信ずるのである。

政界裏面 白眼樓夜話

刀史公

◇………內閣のゴタ〳〵騷ぎも困つたもんじやネ。あの次から次に起る騷動はみんな内輪喧嘩から出てゐるのだから始末がわるいョ。改造問題で久原をどうでも入閣させにやならないといふ田中の腹がわかつた時に、閣內では望月、小川、三土、水野が一緒になり、これに小泉の策公が一枚加つて久原入閣反對聯盟が出來たものだョ。改造が始まらうとする前に三土が四國へ行く時、この一黨が集つてどこまでも反對しやうといふ固い申合せをして、三土はその腹で出かけて行つたものだから、旅行の先々で新聞記者に話した談話は、彼奴一人が久原の入閣に反對してゐるかと思はせるほど思ひきつてしやべつてゐただらう。殊に、久原の入閣說が具體化して來ると、歸り道の大阪あたりで新聞記者に話した文句は隨分手酷しいものじやつたネ。あれはナ、小泉の親爺が、三土の行く先き〳〵へ電報を打つて嗾しかけたものだョ。他の連中は三土に表立つて反對させて置いて、案外世間へは白ばくれてゐたものサ。殊に腹に一物ある水野などは、三土の反對振りをひとりで悦に入つてゐたものだョ。

◇………ところが三土があの勢で反對の宣傳をして居る留守に、いつの間にか中に小川と望月が軟化して了つたサ。何んでもこの二人は田中から久原を入閣させにやならない因緣を膝詰で口說かれてまゐつて了つたんだョ。殊に望月はその時內相の椅子を匂はされたから、一も二もなく、「さういふワケなら仕方もあるまい」といふことになつて了つたのサ。そこへ三土が歸つて來ると、望月は早速その晩に會つて、『この際、久原の入閣をどこ迄も反對すると、君も大藏大臣を辭めなきやならないことになるぞ。總理の決心はとても固い……』といふことを長々と例の口說で說いたものだ。三土にしても、大藏大臣を棒に振つてまで反對する氣にはなれないし、殊に親分の高橋の達摩も內務大臣でなければ好からうといふ意見なので、これも其場でぐにやぐ〳〵になつて了つたさ。水野は三土が東京へ歸つて來た其の日にでも自分のところへ訪ねて來るものと心待ちしてゐたら、その日も、其の翌日もやつて來ず、二三日してやつて來て、『僕はこれ以上反對は出來ないから……』といふやうな挨拶なので、すつかり悄惱して、あの通り一人で斷然辭職と急に言ひ出

したものだ。久原入閣反對聯盟じや水野一人が背負ひ投げを食はされた形になつてゐるのじやョ。

◇……優諚問題は田中の今迄やつて來たヘマの中の大ヘマだョ。だが、あの參內の優諚のといふ筋書は水野が書いて田中がその通りに踊つたやうなものだ。尤も小泉の策公が、あの日、田中と水野が參內するのを朝の中に知つてゐたところを見ると、彼奴もこの筋書きの相作者じやつたかも知れん。あの二人が參內することは、閣僚も前以ては誰も知らなかつたといふから、小泉だけが知つてゐたのはヘンじやないか。ウン……小泉が知つてゐたのは事實で、どうしてそれが分つてゐたか、一つ訊いてやらうと思つてゐたら、滿洲へ稼ぎに行つちまつた。……もと／＼水野が久原の入閣に反對したのは自分が內相になれなかつた腹いせで、あの男は、原、寺內、清浦の三代の內閣の內相をやつてゐるので、田中內閣でも自分が內相になるのは當り前と決めてかゝつてゐたものだ。それを鈴木にさらはれたので、その時から鈴木と仲違ひになり、臨時議會で鈴木彈劾案が出た時、內閣一蓮托生反對の急先鋒をやつたのも水野じやつた。その時の腹も鈴木が辭めれば乃公と思つたからで、今度も久原に反對したのは、久原の內相就任に反對したソケだが、それがいつのか間に、望月に取られて了つたのでグット來たのだョ。

◇……そこで、庶二無二三土と一緒に久原入閣に反對すると、世間からは馬鹿に褒められるので、ます／＼調子に乘つて職を賭しても反對とまで言ひ出したもの〻、水野にしたところが三土同樣、大臣の椅子は命の二番目に欲しいので、何んとかして辭職を取消さうとした……が、あの通り引つこみがつかなくなつて來たワケだ。その切端詰つた窮餘の策が、あの優諚問題サ。望月內相、久原遞相の親任式のあつた日の前たしか五月二十二日の夜遲く、水野は田中と會つて、「自分の辭表は陛下に差し出したのだから執奏して呉れ、その後の進退は總理に一任する」と言つたものだ。田中には總理大臣の補弼の責任といふことは憲法上どういふものだか分つてゐないから、辭表は天子樣に差出したものだからといふ理窟は尤もだと合點して、水野のいふ通りしたのサ。進退を一任した辭表なんて其んなべら棒な辭表はないじやないか。それが軍人上りの單純な頭の田中には、よく吞みこめなくて、なる程それもえゝ考へじやらうといふので持つて來て、横着も手傳つてあの大ヘマをやつて了つたのじやネ。この一件では內府の牧野や西園寺和尚も大分苦々しく思つてゐるやうだョ。なんでも和尚は、この事件の眞相の報告を內々で宮中方面へも言ひつけて來たさうだ。西園寺がそん

な秘密的なことをやるかつてサ、あの和尚の一つの取り柄はナ、年寄りに似ず智識欲の旺んなことで、支那問題、殊に濟南事件のことなど、わざ〳〵詳細な報告書を外務省に目ひつけている位だヨ。國の大問題の眞相はわしは何んでも知つてゐるといふのが目慢らしい。だから、頭の粗末な大臣や政黨屋は和尚から、チョイ〳〵いぢめられるのだヨ。

◇……久原も思ひ叶つて大臣になつたが、彼奴が大臣になつて久原よりも田中の方がホツトしてるといふじやないか。何しろ長い間の引つかかりで、滿鐵總裁にするの、外務大臣にするの、内務大臣にするのと、大臣任命の空手形を濫發したので、さすがの田中も今度といふ今度は、自分を政友會へ入り婿にした仲人の小泉策太郎と喧嘩別れまでして、久原入閣を斷行したといふ次第サ。田中が久原に金の厄介になつてゐることは莫大なもので、その御恩返しに先づ目論んだのが、總理大臣になると間もなく、久原の長州にある下松の土地を陸軍工廠敷地に買ひ上げることだつた。これは陸軍大臣の白河にも含をふくめて、白河も最も有力な候補地といふことにして、當時然る可く返事をして置いたものサ。ところが、それを知つた陸軍部内の猛者で骨の固い荒木、秦、阿部などいふ連中が怒り出し、三人鼻をならべて白河のところへ押しかけ「日本の陸軍は機密事作だけでも田中に對して犧牲を拂ひ過ぎてゐる。この上、久原の土地など買上げられては、日本國民は陸軍から全く離れて了ふ。工廠の敷地を決めるのは陸軍大臣一人の權限で決めれば好い事だ。早く他の敷地に決定して發表するがいい」と强談判をしたものだ。それは田中が關西方面へ旅行中であつたが、白河も理の當然に服して、下松の久原の土地はオヂヤンになり、田中はあの時の發表を新聞で見て青くなり「話が違ふ」とわざわざ白河のところへ電報をよこしたものだ。

◇……久原は何んだつて今頃政界へ入つて大臣になりたがるのか世間では不思議がつてゐる樣だネ。あの男に取柄は、見かけに寄らず太つ腹のことだヨ。田中をこれまで世話して來たのも、大バクチに丁か半か片方へ張つて來たやうなもので、田中が首相になつたんだから思ふツボに出たやうなものサ。久原關係の十幾つの會社だつて借錢許りで、一進も二進も出來ないのださうだ。何しろ台銀と正金だけにも、例の下松の敷地や家屋敷まで抵當に入れて千二百萬圓許りの借金があり、正金の兒玉などからは手酷しい催促を受けてゐるやうだネ。兒玉はあんな男だから「實業界の破産者が國政を料理するなどいふのは本末が違つてゐる。大臣もいゝが、先づ自分の不義理の借金を片づけてからにしちやどうだ」と手酷しくやつたといふ話だヨ。六百

萬圓も借してあれば、この位ひならとは言へるだらうなア。

◇……田中が、戰國時代のオン大將が家の子、郎黨を城主に取りたてるつもりで、自分の引つ張り合ひ許りを無鐵砲に取り立てるのは、もう世間の眼にも餘つて來たやうだ。さうだヨ、勝田を文相にした時の話だつてまるで獨り決めだつた。當の勝田は親任式の前日だかに電話で田中から言はれたのは、こりや好いとして、閣僚連は親任式の當日の朝の閣議で、始めて田中からきかされ、おまけに、親任式の濟む前に新聞の號外が出ては困るからといふので、閣議はすんでも親任式が濟むまで閣僚連中は其の場にカン詰にされて了つたといふ珍談があるヨ。どうして、札付きの勝田をわざ／＼獨りぎめで引つぱり込んだかつて？田中と勝田は西原借款以來、殊に臭い仲でネ、勝田は、『田中は乃公を何んとかする義理がある、今に挨拶があるだらう』と可成り前から言つてゐたところを見ると、その邊のワケが分らうじやないか。

◇……田中の内閣は、人事問題だけでも好い加減ヒヾが入つてゐるが、政策では支那出兵と、例の治安維持法の緊急勅令案の二つでも大分暗礁に乗りあげさうだネ。治安維持法を緊急勅令でやらうといふのは、原と小川の案だが、面白いことに海軍の岡田が緊急勅令にするのは違法だと言つて、臨時議會後の閣議で氣焔をあげたさうだヨ『それ程必要なものならナゼ議會で通過にもつと骨を折らなかつたか。會期が足りぬといふたら一日でも二日でも延期すればよかつたではないか。それもやらずに、議會が濟んだ後で緊急勅令とはどういふわけか。人の命をとるといふ重大な法律の改正案ではないか』といふ議論だネ。鳩山などはこの案には反對の一人だから、この岡田の議論を聞いて大喜びで、『海軍大臣以外一人の國務大臣なし』と觸れ廻つて居たヨ。

◇……だが、結局、この緊急勅令案は閣議を通つたが、政府の腹は、今秋の御大典を一番心配してゐるので、その前にかういふ嚴罰主義の法律を作つて、不逞の者共を威嚇して置かにやならんといふのださうだ。こないだの共産黨事件の檢擧では、網にかゝつたものは雜魚許りで、大物はみんな逃げられてゐて仲々捕まらないとかいふことだ。そこへ持つて來て、奴等の運動がます／＼深刻になつて來るといふ情報がチョイ／＼政府へ入るので、どうでもこの緊急勅令を通して了はうといふ話になつたと聞いたヨ。だが、こゝに一つ問題は、政友會内の不平組が、こんな重大な問題を黨にもはからず、政府部内だけで勝手に決めるのは怪しからんといふので、田中に反感を持つてゐる連中が大分いきまいてゐる。政府の役人をしてゐる連中で、世

間の批評にも注意してゐる前田、秋田、濱田なんどいふ若手も鳩山等と一緒に反對はしてゐるが、これも、まあ八百長の反對見たいなもので、後の祭ョ。

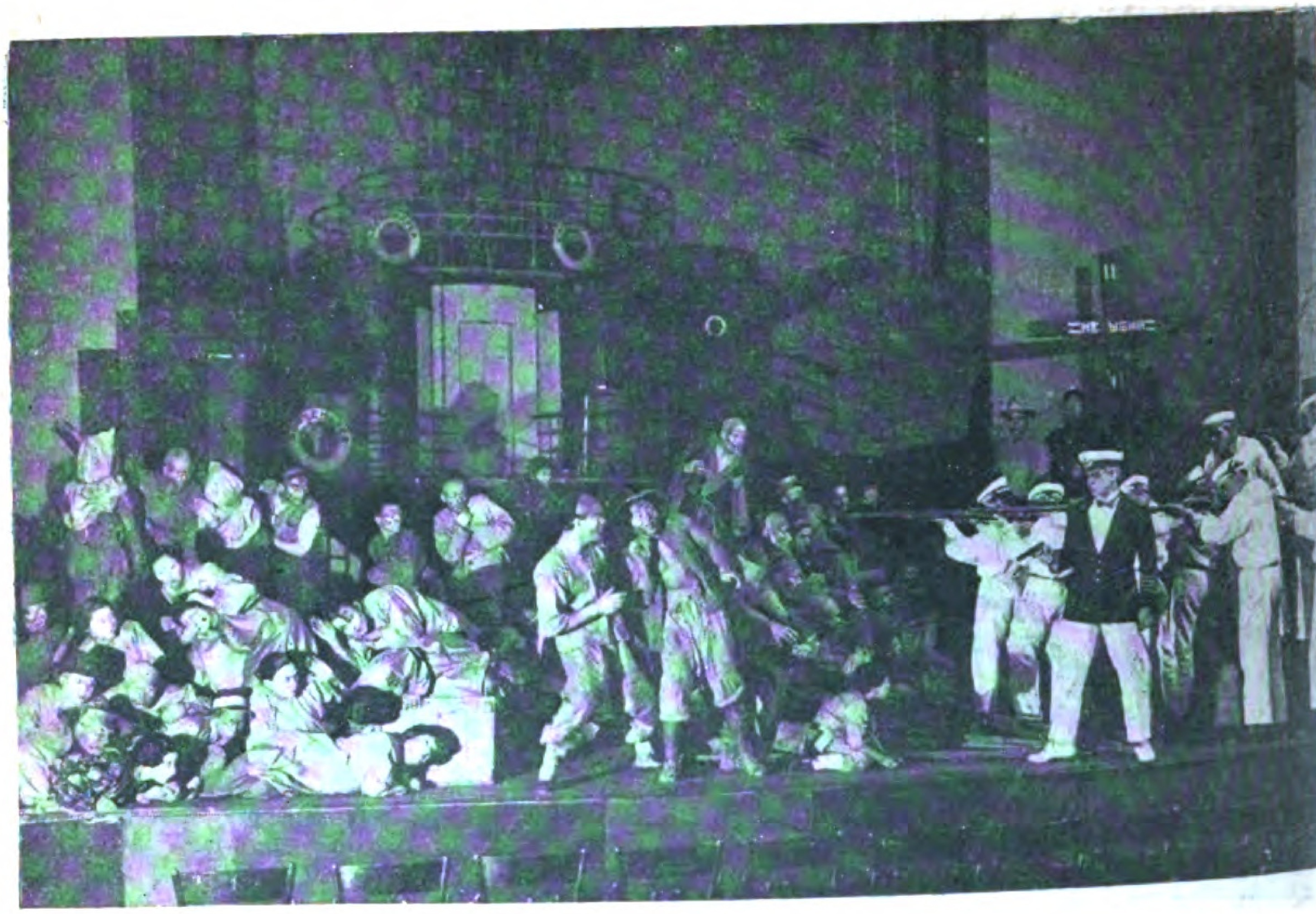
◇……支那の出兵は、張作霖の爆彈事件で愈々滿州問題に入つて來たが、さすがの田中も見當がつかなくなつて來たぢやないか。肝腎の滿州へ戰禍がひろまつて來たら、消極政策だの、現地保護政策だのと、始め出兵の時の掛聲がもうフニヤフニアじやネ。『濫りに兵を用ふる勿れ』といふのはこゝだョ。支那へ兵を出すのはロシアへ兵を出すやうなもので、戰亂が一部局に限られてゐる間はいゝが、之れが山東から滿州へ擴がつては、ナポレオン軍がモスコウへ入つて引つこみがつかなくなつたやうなもので、日本內地の兵隊を皆んな持つて行かなけりや、強いことは言へない事になるといふ勘定だらう。あれだけの出兵をする時、陸軍首腦會議とかいふ名で元帥だの老大將だのを集めたはいゝが、たつた十五分で會議散會だつたさうだから、始めから確とした國策も對支政策もありはしなかつたのだョ。こないだ、參謀本部をやつてゐる一二の連中に會つたら、『田中の大將は戰爭の方も行き當りばつたりで、一貫した政策など持ち合せがないやうだ。我々が案を立てゝ持つて行くと、いつでも合點首は振るが、腹の中に何んにも筋書がないから、直ぐに後で分らなくなる』とこぼして居たのは。張作霖の爆彈事件だつて、復辟運動の表はれだといふ觀方が強いが、その復辟運動をどう處理して行くかといふ段になると、大びらに贊成も出來ないし、さうかと言つて邪魔も入れられないといふのが田中の態度だョ。

◇……日本の支那浪人が復辟に大分活躍してゐるさうじやネ。その御蔭であの爆彈事件も日本人がやつたに違ひなんて言はれてゐるやうだ。何しろ、あれだけ強力な爆發をやるのは二人や三人の便衣隊がこそ〳〵やつた事にしては仕事が大き過ぎたといふのださうだ。京奉線の上を滿鐵線が通つてゐるその十文字の橋の上に仕かけてあつたものだといふがネ。張はそれまであの列車でもわざと後ろの方の三等車か何かに乘つてゐたが、奉天へ十町許りのところへ汽車が近よつたので、もう大丈夫といふワケで貴賓室へやつて來ると間もなく爆發したのだネ。何しろ車が三四台燃えて了つたほどだから、手で投げるやうな小さなものではなく、電氣仕掛けで遠くから、的をねらつて居てスヰッチを切つたものには相違ないと、その道の專門家が言つてゐたョ。張の顧問の松井が、あの列車から途中で降りてゐるので、日本軍のやつた事だらうと支那側ではいふが、そんなら、日本が肩を入れて張の後に立てやうとしてゐたと言

はれてゐた呉俊陞が一緒に乘つて居て殺されてゐるじやないかといふ水掛論なども、しきりに奉天では行はれてゐるといふことだ。下手人は湯玉麟系の便衣隊あたりだらうといふのは誰にでもうなづけることだが、奉天の張の郎黨どもはどこまでも日本軍の所業だと頑張り、日本側が提案した共同調査まで斷つてゐる。これも、大言壯語する日本の支那浪人があんまり多勢あつちへ入りこみ過ぎてゐるからで、陸軍の頑株なども大分この問題では弱つてゐるやうだ。

◇……民政黨は一向駄目だといふのか？　全く駄目だョ。優詔問題だつて、出兵問題だつて、大政黨の攻撃題目には持つてこいのものだが、チヤンスを捉えることは遲いし、出兵問題で反對の態度に出るのは國賊と思はれると思つてゐるのだから、お話にならないョ。『松島事件や朴烈問題で政友會が若槻内閣に迫つた時と今の民政の政府攻撃と比べると雲助とお孃さんの違ひじやないか』とこないだ、安達に會つて冷やかしてやつたら、『何をするにも乃公の方は品が好過ぎて駄目だ』とこぼしてゐたつけ。優詔問題で内閣問責演說會だつて、世間の火の手が鎭つた頃ボツリ〳〵始めたのだから、滑稽だョ。優詔問題で世間の火の手といへば、例の學者連の反對決議は一寸顏觸れが揃つてゐるだけに面白かつたが、あれは民政黨の別働隊で、添田壽一あたりが一膚ぬいてやつたものだ。あれにしたつて、民政黨としては、陰の方から、よくやつて下さると見て居るだけのものサ。貴族院の連中の決議も大分民政黨には役に立つたが、これも、よくやつて下さると言つて見て居るだけのものだつた。貴族院の諸政派の中では、研究會の小笠原や水野は政府の御用振りを發揮し、渡邊あたりは民政の御用を大分つとめたネ。だが民政黨總裁邸に誰やらが惡戲の落書に、『大將はイザ鈍介で晝寢をし』とあつたといふことだが、あのチヤンスにオン大の濱口がさつぱり奮ひ立たないからモノにならない。

◇……濱口が優詔問題のやうな好題目であの態度はヘンだと思つたら、牧野内府から、人を介して『優詔問題を惹き起した方も惡いが、これを政爭の具に供するのも面白くない。モウ田中内閣も長くはあるまいから自重して欲しい』といふやうなことを言はれたのださうだ。濱口はこれを鐵介で聞き、それまで表面は强がりを言つてゐたが、元老や準元老のいふことに背いては後の爲めになるまいといふので、一時强氣だつたのが又腰が折れたと云ふのが眞相らしい。要心深い牧野がそんなことを濱口へ申込つたのは、あの問題で『一體内大臣は何をしてゐる』といふ世間の批難が出かゝつたので、自己防衞の意味も手傳つて、あの問題の、火の手を消しにかゝつたものだらうと、民政の物知りが言つてゐるが、當らずと雖も遠からずだらう……
……。

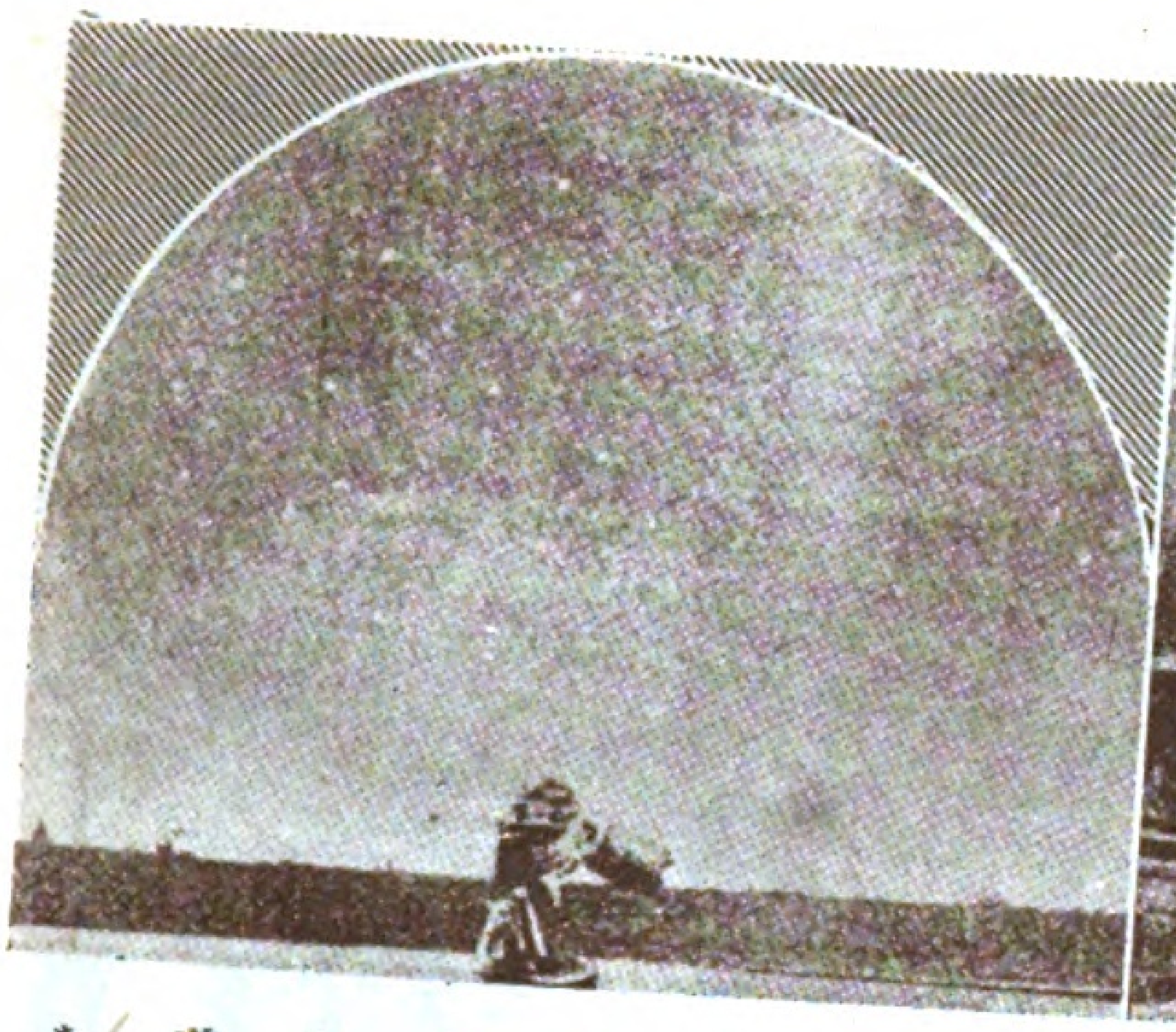


トレチヤコフの「支那よ、吼へよ」

秋田　雨雀

私はこの芝居「支那よ、吼へよ」を昨年十月十九日、即ちモスクへ着いて六日目に見た。メイリホリドの芝居を見たのもこれが初めてだつた。トリウムフアリナヤ・ワロータ街のメイリホリド座を最初に見た時一寸意外な感じがした。觀客席は大きくガランとして殆んど裝飾らしいものもない、舞臺には幕もなく大きな軍艦の甲板のやうなものがあつて、大砲が二門ほど觀客の方に對つて向けられてゐた。この二門の大砲こそ支那を脅す英米資本主義の具象化だつた。この芝居では英米の勢力のために支那人が何んなに迫害されてゐるかといふ事實を、精細な支那人の生活――態度、面貌の研究によつて現はしてゐる。舞臺の後方が海になつてそこに前の軍艦が浮んで居り、前方は海岸で、これは支那の國土を暗示してゐるものらしい。この海岸には澤山の支那人の男女がうようよしてゐる、支那の市場を示してゐる。支那料理の店では一人の支那人がシユーマイをこしらへてゐる、その店の周圍にいろ〳〵な支那人が色々な形をしてゐる、胡弓を彈く者、阿片を吸ふ者、何かしきりに考へてゐる者、その人物のメーク　ップは實に驚くほど巧妙なものだ。（私達はこの芝居を見て宿へ歸つて、自分の顏を鏡の中に見た時は實に芝居の人物とそつくりなので見るにたえなかつた位だつた。）英米の壓迫は刻々に支那人の上に加つて來る。支那の巡警は棒のやうなものを振り廻はして歩くが何うにもならない、民衆の反抗心がだん〳〵に高まつて來る――英米の居留民が軍艦の上でダンスを初める、酒を飮む、キッスをする、その中に一人の支那人のスパイが若い船夫になつて忍び込んでゐる、それがつひに發覺して、ある夜マストに首を吊つて死んでしまふ。この船夫の死ぬ時のチャルメラに合はせて歌ふ唄の哀愁はとても忘れられない。この船夫には一人の女優が扮してゐた。小船の上で支那人と爭つた外國人が誤つて海に墜ちて死んだのをきつかけに、支那人の捕縛が始つた。滑稽なことには　殺す勿れ」といふキリスト敎の信條を揭げながら、その一人を絞殺してしまふ――眠つてゐた支那人は眼を醒し初めた、彼等は一勢に立つて外國の勢力に反抗した、今や彼等は武力を持つてさへ支那人を壓迫することが出來なくなつた、軍艦は支那の領土を捨てゝ去る――支那人は海岸に立つて萬歲を叫ぶ、といふ筋である。





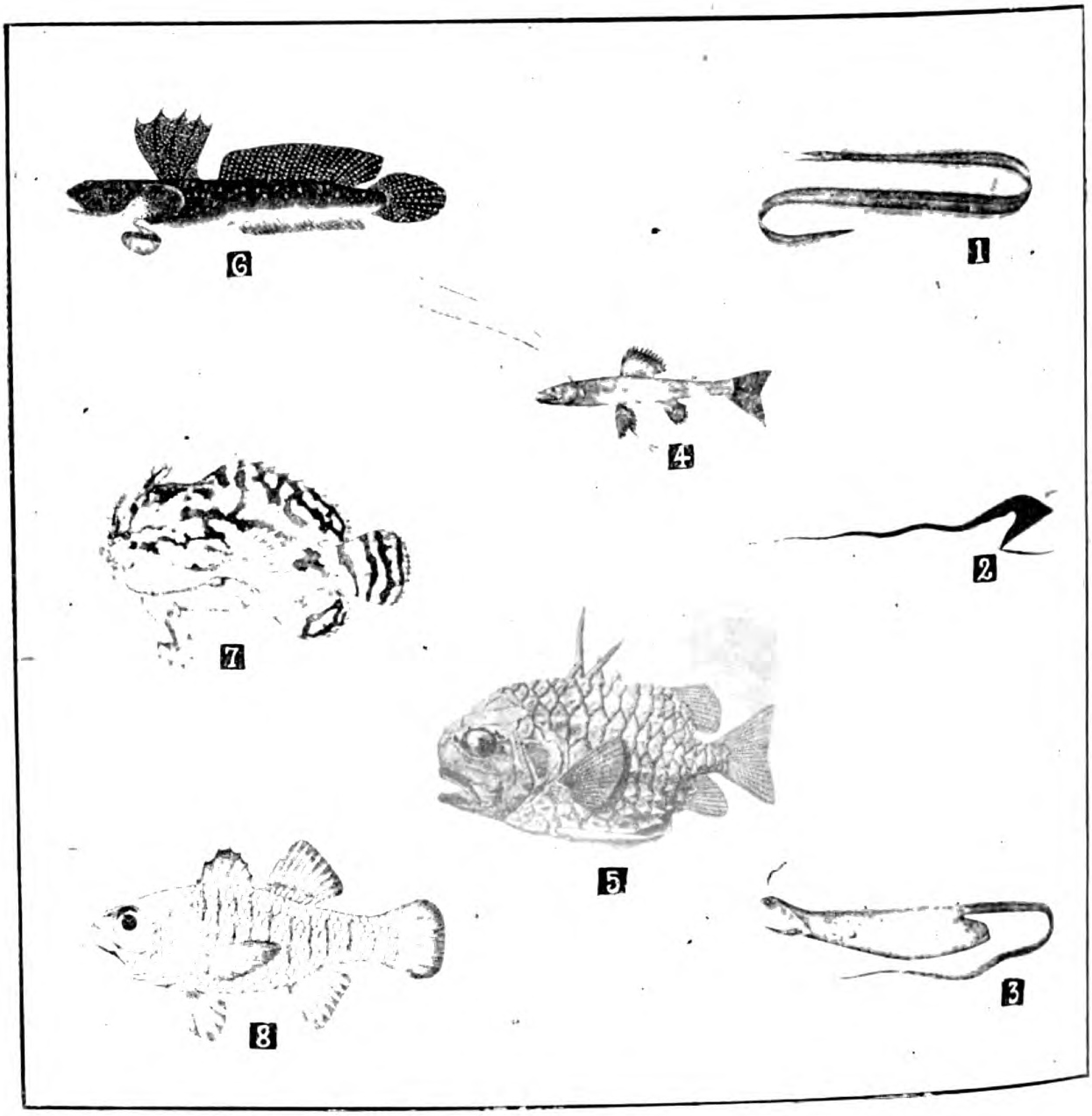
晝見る星の世界

山田幸五郎

晝星が見える！　此は何人も否定する譯である。雲に蔽はれた曇天の日は勿論、快晴の日と雖も蒼天の光輝に打負かされて、星の送る微かな光は私達の眼に何等の印象をも與へない。而して暗夜のみ古代の人々に星の世界の神秘を啓示した。然し物質文明の發達は晝尙星の世界を仰ぎ見ることが出來るやうにした。それはプラネタリウムの發明に依るのである。これは圓天井の内側に映寫機によつて星の世界を映寫するもので、獨逸に於て發明されて以來、各地にこれの建設を見、國粹主義のムッソリーニさへ獨逸から購入する調印を了つたと云ふ報道もある。





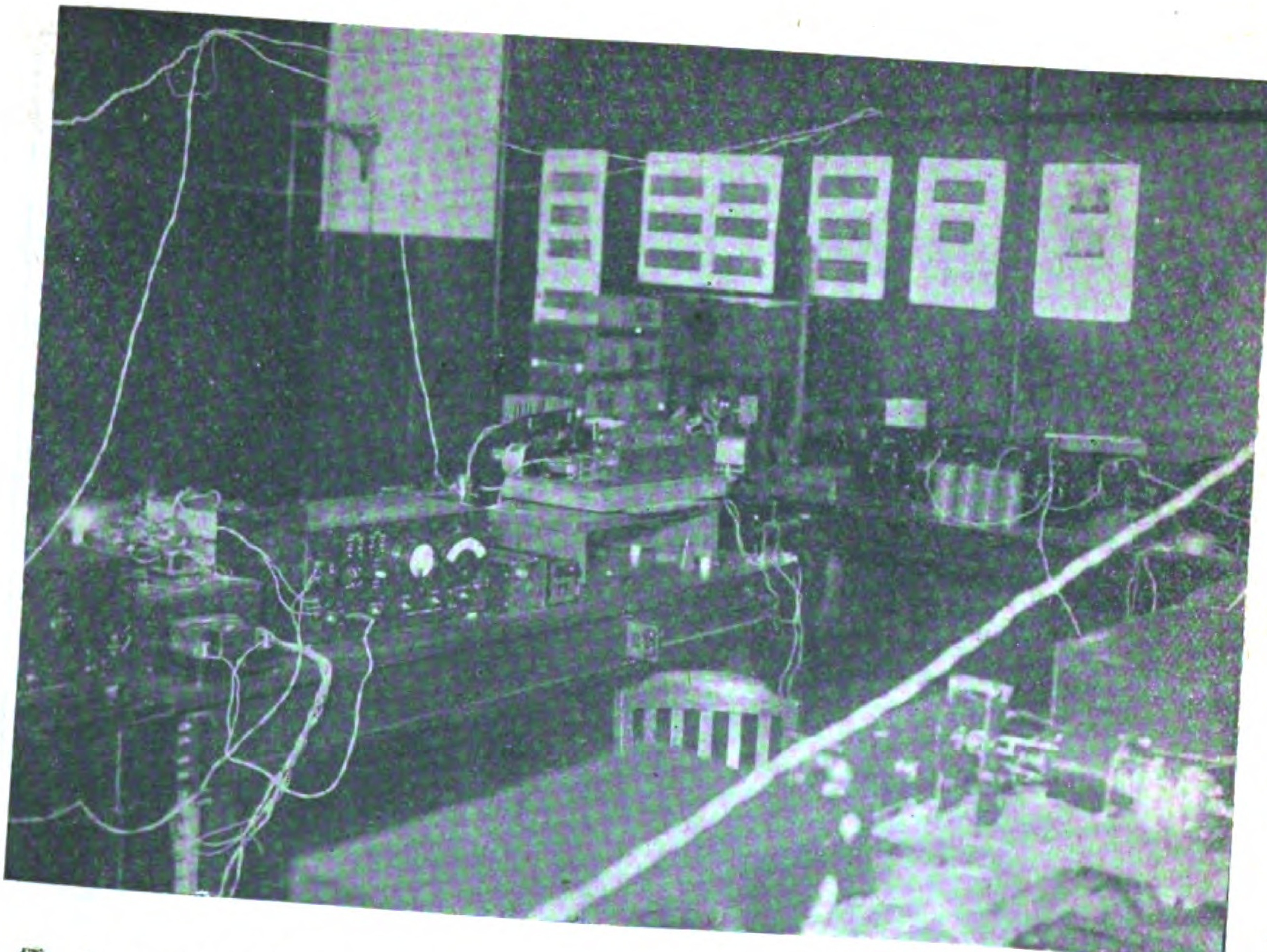


奇妙な魚

田中茂穂

普通の魚とは形が異てゐて、從つて其性質や擧動も異てゐるものを擧げてみると、――（一）ネミクチス　（二）マクロハリンクス　（三）サツコハリンクス（四）パチプテロイス

形は普通の魚と左程異てゐないで、性質や擧動だけの異つたものは我國にも案外普通に見ることが出來る。（五）マツカサウオは下顎の下部に發光する處が二ケ所あつて深夜提灯の代用をする。（六）ムツゴロオは九州有明海の名產であるが、干潮の際干潟へ上陸して、兩眼をギョロつかせて跳び廻る。（七）ハナオコゼはホンダハラの切片に乘つて悠游する。（八）テンジクダイは東京近海ではナミノコといふ。口中に卵を入れて子供を孵化するものである。



電送寫眞

丹羽保次郎

寫眞電送の要諦は送るフイルムと受ける生フイルムとをそれぞれ送信所及び受信所に備へつけた廻轉する圓筒に捲きつけ之を同速度で廻轉しつゝ軸の方向に移動し以て寫眞の全面を細い線に分解し濃淡を送信所に於て電流の大さに變じて線路に送り受信所に於て再び光の濃淡に變じて寫眞を再生させるのである。左圖は最近完成した日本獨特の方式により東京岡山間の模似電話線を通じて電送したもので電送時間六分である。

× × ×

（追記）寫眞電送の試みは相當に古く、西暦一八八〇年頃佛蘭西のグラスといふ人が、軍事上の目的で地圖を電送したのが其の濫觴だと傳へられてゐる。之は今から考へると頗る幼稚なものであつたが、其後歐羅巴の發明家は、之から一のヒントを得て寫眞の電送を企てるやうになつた。今日迄に歐米の科學者によつて考案された寫眞電送機の種類は隨分澤山あるが、現在相當の成績を擧げてゐるものは、佛蘭西のベラン式、獨逸のコルン、ディックマン、那威のベーテルゼン、亞米利加のベル式等であるが、我が丹羽博士の發明による電送寫眞裝置は以上のものより遙に優秀であることを誇るものである。左圖(三)は丹羽氏。（畫報記者）



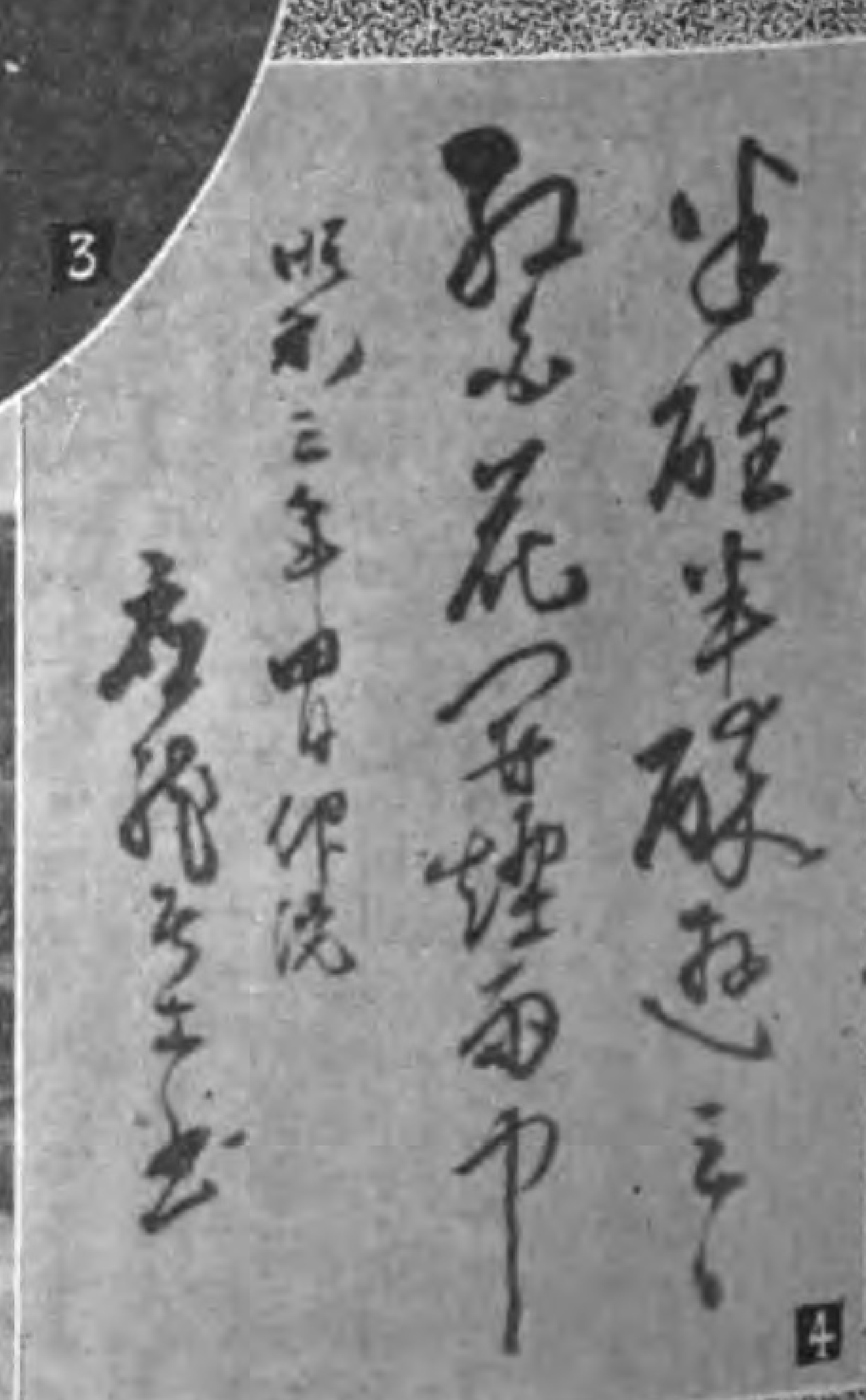
1



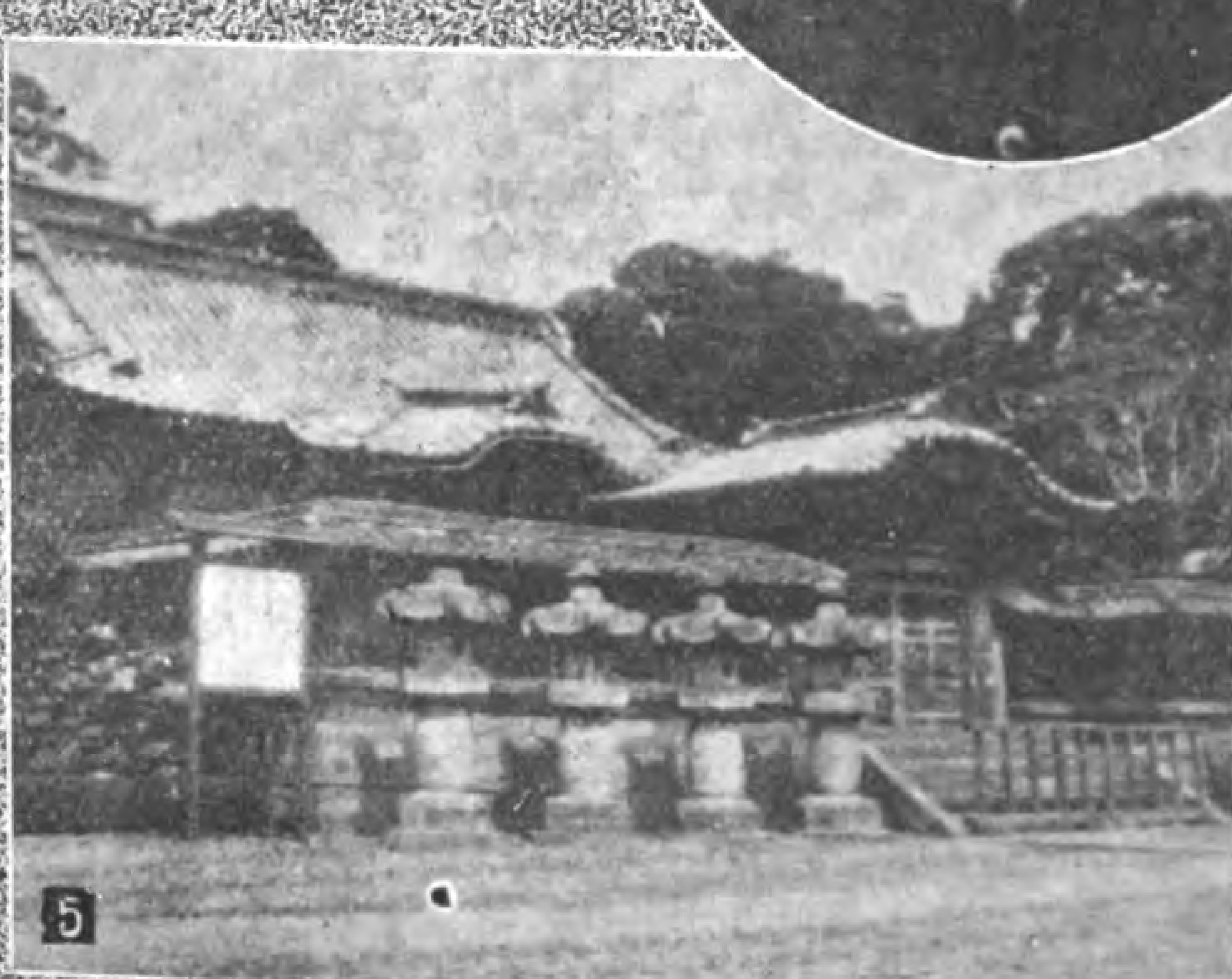
2



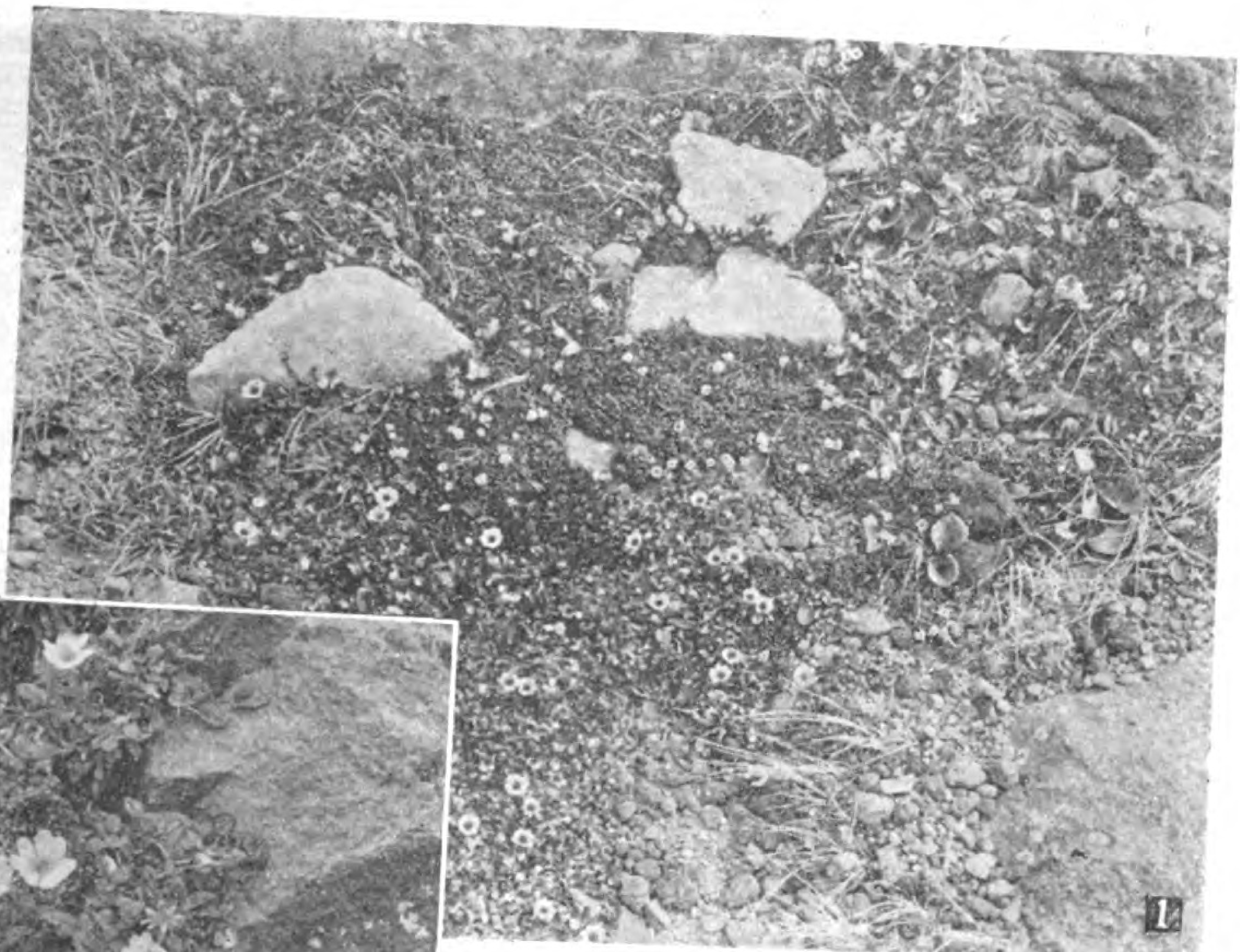
3

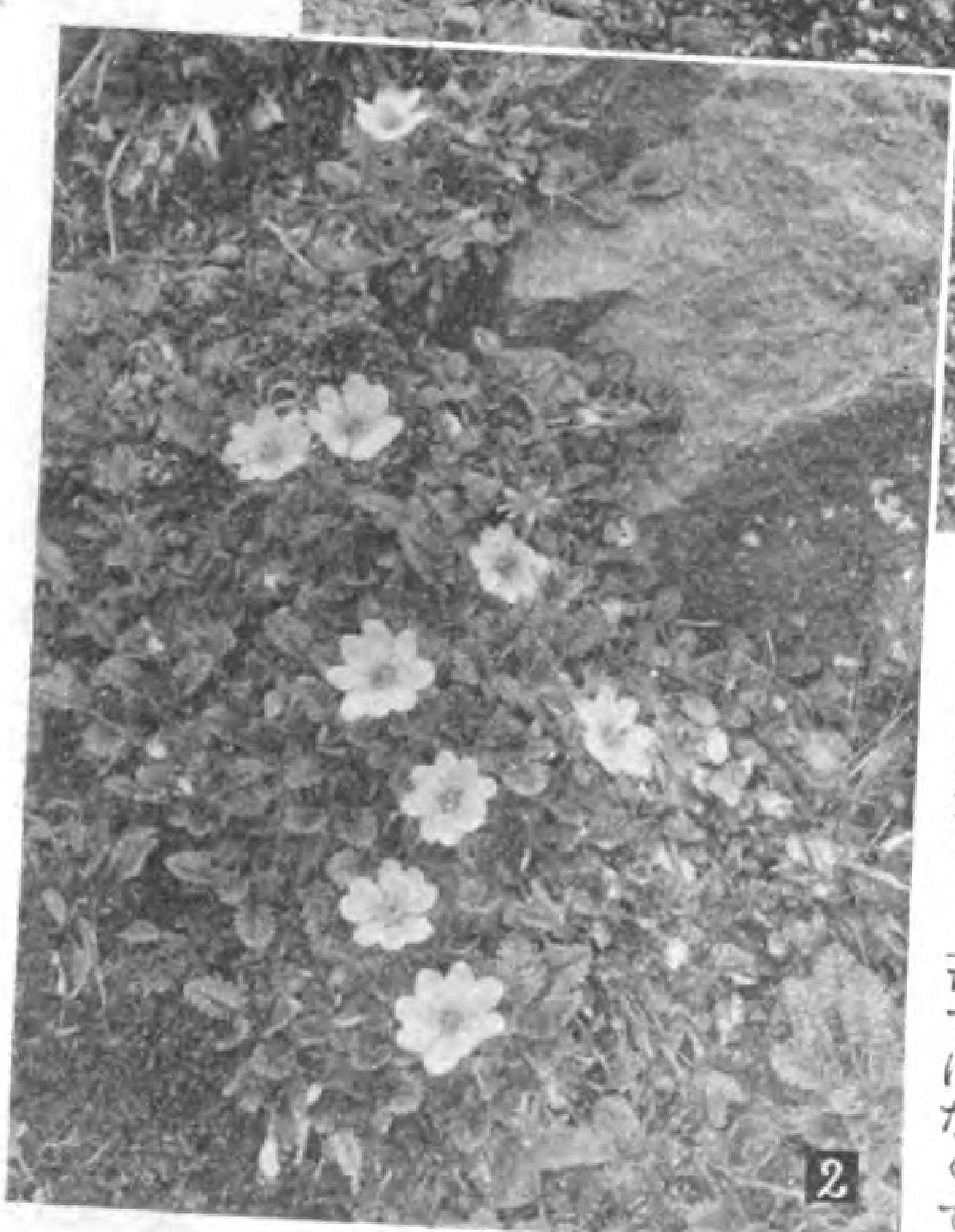


4



5





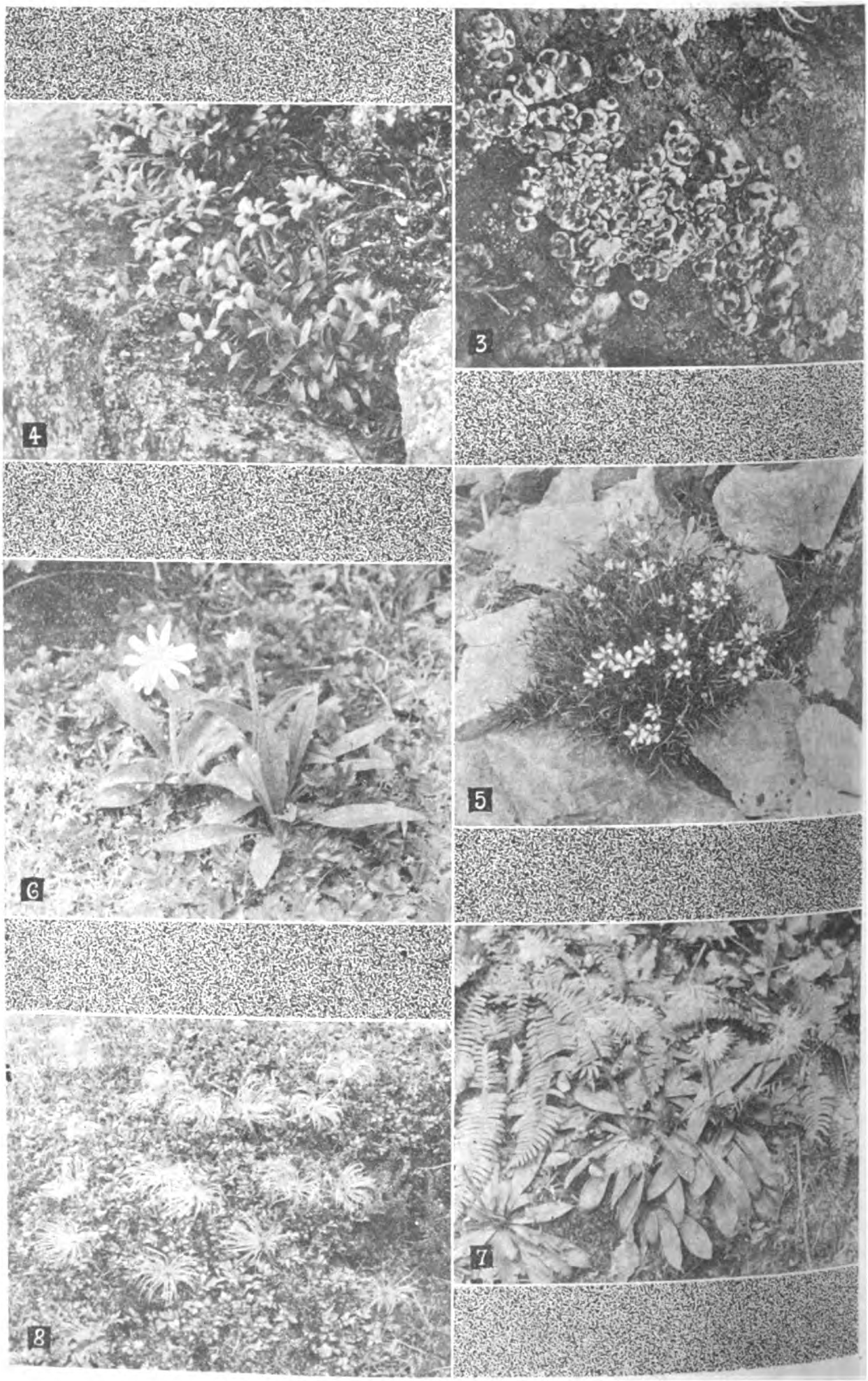
高山植物

濱田和雄

百花亂れ咲く高山のお花畠は之をその成立に就て考へて見ると平地とは異つた非常に不利な條件の下によく堪えて今日の社會をなしたもので小さな一枝もよく檢べると驚くべき多數の年輪を有し如何に苦心して來たかを物語る樣である。

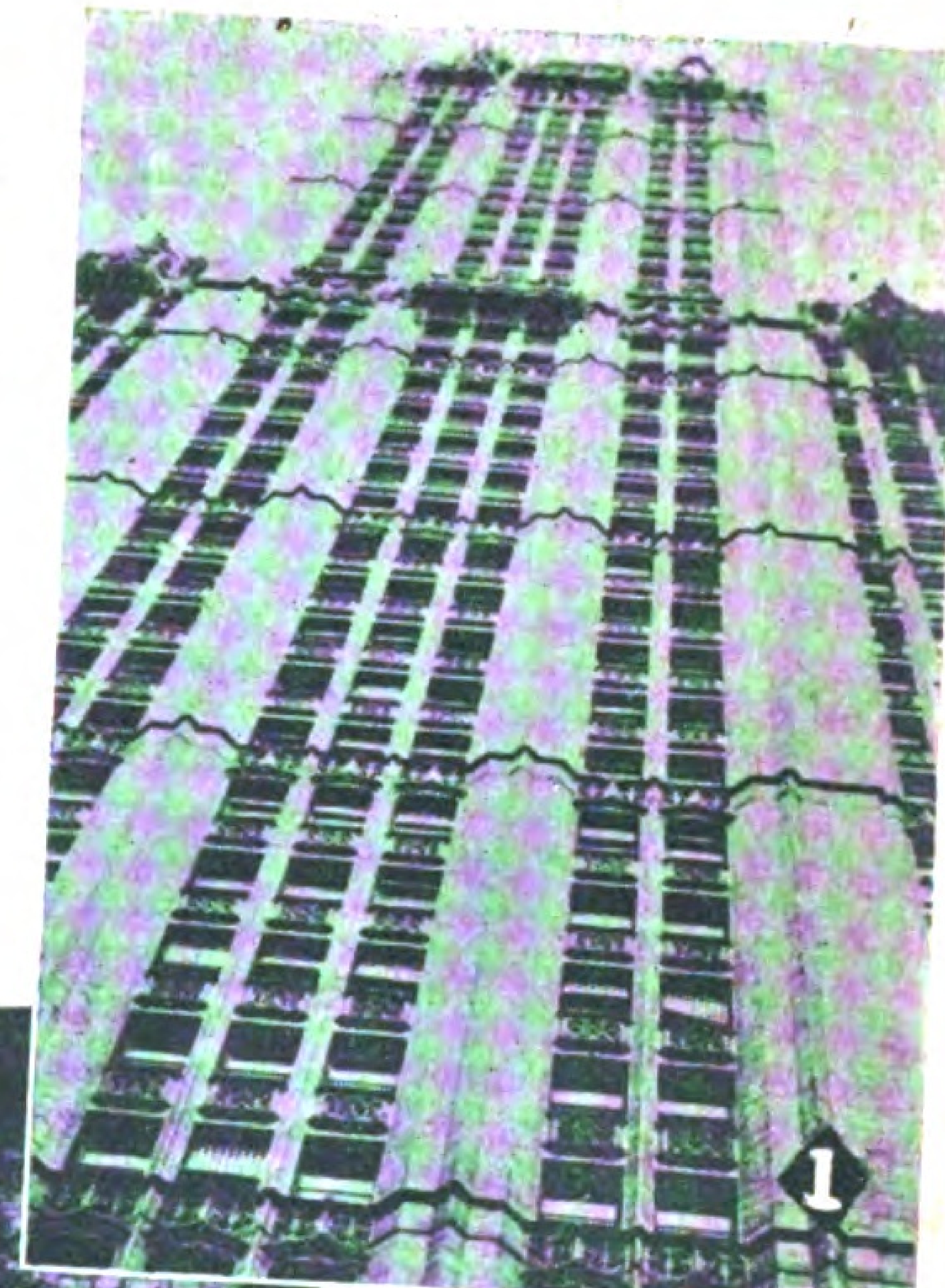
扨一口に高山植物と云つても場所によつて生活條件が區々で（主として水に關し）從つて夫々の場所の植物の群落も自ら異なるものである。（一）は比較的乾燥した地に發育したお花畠の一例で（二）はその中の**ミヤマグルマ**を大きく示したもの（三）**アハモチゴケ**は日本の高山に特有なもので岩の上に黄色に黒斑ある塊をなして附着する。苔ではなくて地衣（菌類と藻類との共生體）である。（四）**ミヤマウスユキサウ**は歐洲アルプスの名花として知られた**エーデルワイス**と同種と認められてゐるもので全身柔い白毛に被はれてゐる美しく又可憐な草である。（五）**タカネツメクサ**と共に稍乾燥した地に多い。（六）**ウサギギク**は黄色の大花でよく人目を惹く。（七）**シヤジヤウバカマ**（八）**チングルマノ實**は共に濕地を好む性質が著しい。

高山の乾性については種々議論がある。玆に乾燥した地と云つたのは一見そう見えるといふ位の意味である事をお斷りしておく。

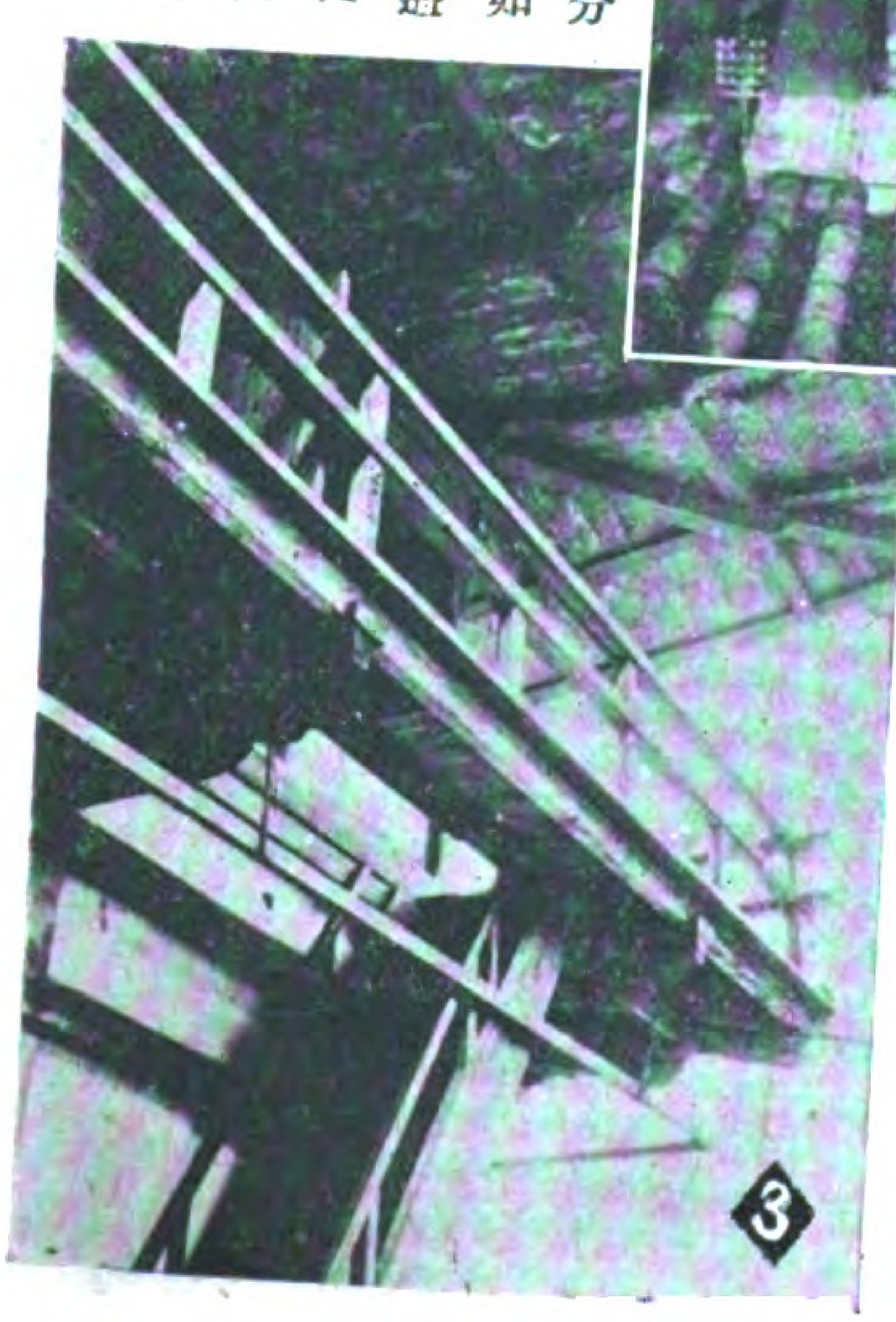

3
4
5
6
7
8

建築の新しい見方

岸田日出刀


1


2


3

吾々は普通建物を側面から見るやうに慣らされてゐるが、建物の如何に依つては近く接近して之を見上げるか又上から見下した場合の方が、その建物の全體又は部分が持つところの特徴や美點をより以上正しく理解出來る事がある。例へば都市の如き有機的組織と秩序とから成るものは形の上でも身を巷中に置いて見るよりも、遙かの天空から見下した時の方が、より以上面白くもあれば合理的でもある。これに反して天をも摩するやうな高層な建築では、遠く離れた側面からの常態でこれを眺めるよりも、むしろ非常に接近して見上げた場合の方が遙かに興深くもあれば又その建築の特徴がはつきりと感ぜられるものである。＊

＊總じてあまり平凡で面白くないといふものでも、光線のあて方を一寸變へるとか又は見る場所を僅かばかり變へる事に依つて豫期しないやうな興趣ある變つた效果が出て來るものである。かく新しい工夫に依つて今まで感ぜられなかつた構圖なり美なりを見出すといふ事は、面白くもあれば又有益な事でもある。

(1)は現在世界最高のニューヨークのウールワース・ビルディングを下から見上げたもの、(2)は奈良興福寺の東金堂を五重の塔の三重目から見下したもの、(3)は京都金閣寺の一部を極く近くから見上げたもので、下から見ると左程にも思はれないこの建物も、變つた面白さと美しさとを示してくれる。予は試みに餘技的に最近これらの數枚を撮つたのであるが、かゝる手法で近代的の建物をも見て行くならば、可成面白いものが出來るだらうと思ふ。

八ポイント欄

一、「この八ポイント欄」は有名無名を問はず、廣く世の篤學者、趣味家、好事家、旅行家のために開放して隱れたる智識と漏れたる珍聞とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書を特に歡迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の變名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以内にコンデンスして頂きたいことを希望する。

山へ入る日　山を出る日

石川欣一

山へ入る日の朝は、あわたゞしいものである。

いくら前から準備してゐても、前の晩にルツクサツクを詰めて置いても、いざ出發となると、きつと何か忘れ物があつたのに氣がつく。忘れ物ではなくとも、數の足りぬ物があるやうな氣がしたりする。すつかり足ごしらへした案内や人夫が、自轉車で走り廻る有様は一寸面白い。

それもまア、どうにかこうにか片づいて、いよ〱歩き出す。たいていの場合、町なり村なりを離れると、林の中か野原を横切つて行くのだが、二三時間も歩くと草疲れて了ふ。一つには身體の鍛錬が出來てゐないからで、二つには暑いからである。草のいきれ程うれしからぬ物はない。

時々馬にあふ。林の中の細路を、荷をつけた馬だけがポカポカやつて來るので、驚いてゐると、大部あとから呑氣さうな顔をして、樵夫が來たりする。一本路だし、馴れてはゐるし、すてといても馬は家に歸るのであらう。

路はだん〱狹くなる。馬の糞も落ちてゐないやうになる。と、思ひがけぬ所に林を開いて桑が植えてあつたりする。落葉松、白樺等の若葉が美しく、小な流れの水を飲んでは木影に休む。野いちごの實を見つけて食ふこともある。

晝の辨當をつかふ頃には、水もつめたくなつてゐる。

かくて一歩一歩、山へ入つて行くのだが、比較的路が容易なので連れがあれば話をするし、無ければ何か考へながら行く。連れがあつても、さう立て續けに喋舌る譯には行かない。時々は考へ込んで了ふ。

私は大して臆病ではないつもりだが、山へ入る前には不思議に山のアクシデントを考へる。何か惡いことが起りさうな氣がしてならぬのである。そんな氣持を持つてゐられる間は山もたのしみだらうと、ある友人がいつたが、まつたくさうかも知れない。一種のアドヴエンチユアをやつてゐる氣なのだから……。

從つて山へ入る日の私は、決して陽氣ではない。むしろ憂鬱な位である。そして最初の夜は、殊にそれが野營であれば、とても淋しく、パイプをくはへた儘吸ひもしないで、ボンヤリ焚火の火を見つめては子供のことを考へたりする。

山を出る日は、恐ろしく景氣がいゝ。天幕をたゝむにしても、山小舍の中を片づけるにしても、非常に迅速に仕事がはかどる。平素無口な案内者までが冗談口をたゝいたりする。

勿論山によつて違ふであらうが、たいていの路は尾根を走らず谷によつてゐる。で、山を出るにしても、先づ谷へ下るのであるが、これが川の生長に伴ふのだから面白い。朝、雪解の水が點々と滴り落ちてゐるあたりを立つて、晝には廣い河原で最後の辨當を食ひ、夜は大河の畔の宿屋で寢てゐたりすることがよくある。

山へ入る時憂欝な私は、出る時は、多くの場合陽氣である。勿論山に別れる悲哀はあるが、これはむしろ翌日汽車の窓から振りかへる時に多く感じるので、現に山を下りつゝある時には、ひたすら、一刻も早く麓の町に着かうと努める。やはり、人が懷しいのだらう。

山から下りながら、人間の力が如何に山にはひ上りつゝあるかを見るのは、誠に興味が深い。一本二本、木が伐つてある。急な斜面に粟がつくつてある。炭燒小舍、丸木を置いた橋、小さな祠、そして最後に人家。

一昨年の六月、信州から立山を越して富山へ出た最後の日には、女が目についた。紺の香も新しい揃ひの單衣に、赤いたすき、姉さんかぶりで田植をしてゐるのを見た時には、美しいとさへ思つた。立山溫泉から芦峅寺まで、人のいやがる長い路だが、一里ごとに人間の仕事の跡が增して行つて面白かつた。だんだん路幅が廣くなり、馬糞の數がふへ、つひに夕暮の芦峅寺へ着くと、村唯一の錢湯の前に田植馬の湯錢は三錢とか書いた札がはつてあつた。

いよいよ麓の町にさしかゝる。多くの人は山に登つて來たといふので一種のエクザルテーションを感じるらしい。凱旋將軍のやうな氣持になるらしい。私は、初めて白馬に登つて大町に歸つて來た人が、對山館の三階で醉ひつぶれたのを見た。學生を率ひた中學校の先生が、部屋が無いといふので怒號してゐるのを見た。かゝる種類の興奮は、勿論人にもよるのだが、山に登る數と反比例して減じて行く。

去年上高地へ行つた歸りには大阪のある女學校の生徒たちと一緒になつた。男の先生二人とは名前を豫ねて知り合つてゐたので、改めて名乘り合ひ、松本まで後になり先になりして歩いたが、流石に娘たちは男の學生みたいに騷ぎも威張りもしず、誠に氣持がよかつた。島々へ入るすこし手前で、ルツクサツクからスカートを出して、ブルーマースの上からはいてゐたりしたが、如何にも山を下りて里へ出る有樣をあらはして、私は思はず微笑した。島々からの電車は滿員で、先に乘つた男の生徒や案内者が坐つて了つた爲に、立つてゐた娘も多かつたが、私が連れて行つた大町の老案内は、私が立つたのを見て自分も娘の一人に席を讓つてくれた。

六月になつた。この頃濕氣の多い、いやな日が續く。早く山へ行き度くて仕方がない。山の話を書くことが苦痛な位、山を思つてゐる。（六月一日）

犯罪捜査學の進歩

淺田一

（一）

犯人の知能は益〻磨かれ、犯罪は益〻巧妙になつて來る。警察は何時も犯人の知能より一段低い位置に置かれて居るのは情ない。やはり科學的犯人捜査には相當の設備が要る。警察署にはもうすこし科學的設備と技術者とを置いて欲しい。司法省なり府縣なりがモット力をいれて欲しいものだ。我々法醫學教室に於て研究に從事するものは苦心の結果、犯罪捜査に緊要なる方法を發見し、之を發表しても、肝心の警察當局の人々は甚だ冷淡にかまへて、顧もしてくれぬ事が多い。東京警視廳邊では中々研究もして居る樣だが地方では第一經濟が許さない。技能、知能も足らない。

（二）

指紋が世界各國警察署で用ひられ出したのはヤット二十年前だ。日本でも明治四十年に漸く指紋調査會が出來た位のものだが指紋だけは警察署や刑務所には行渡つてしまつた。然しまだ〳〵戸籍役場にも行渡らしてくれなければ指紋の効果は十分に上らぬ。再犯者、重犯者の指紋は備へつけてあるが初犯者の指紋から人間を探出すのは大變である。赤坊では指紋がわからぬが少くとも就學の時と徴兵の時とに指紋を屆ける事にしたいものだ。かゝる指紋は內務省あたりに指紋局を新設して其處に保留し、或疑問の指紋が再犯者の指紋原紙中になければこの指紋局で調査し、何村の何某で如何なる特徵ある人物であるといふ事が直にわかる樣にしておきたいものだ。指紋は單に犯人捜査に必要な許りでなく、人種によりて特有であり、親子の間にも一定の關係があるものであるが之等は多數の材料によらなければ研究出來ない。もし內務省邊にかゝる新設備が出來ればかゝる研究が如何に便宜を得るか知れない。

指紋から職業も或程度まではわかるし、年齡も小供ではよくわかる。

近頃は交通の便に乘じて、犯人も世界を股にかけて橫行する樣になつた。日本邊にも米國邊で犯罪をしておいて何喰はぬ顏でやつて來るものが無いとは云へぬ。殊に滿洲上海邊にはかういふ手合が澤山來る事と思ふ。從而我國も餘程警戒せねばなるまい。

所が二年前コーペンハーゲンの警視廳でこの世界的犯人六千五百人の指紋帳が書物として發行された。之を繙くと一本の指の指紋からでも何國の何某で何年生れの男とか女とか、職業とか一目瞭然にわかる。僕はこの本を一册買つて來たが、東京警視廳邊には必ずこんな本も備へてある事と信ずる。是非備へてなければならぬ筈だ。

（三）

衣類とか壁とかにある斑痕が血液か否かの鑑定は餘程普遍化して來たけれど、地方ではやはり我々法醫にこんな鑑定が命ぜられる。こんなものは警察署でどん〳〵片附けてしまはなければ手間取つて仕方がない。人獸血の別も極めて容易にわかる。更に近頃は血液型といふ事がやかましく云はれる樣になつた。この血液型といふのは人間に於て四種類に別たれて居る。

今甲なる人の血の中の血球を分離して之を充分に〇・八五%の食鹽水で洗ひ五%の浮游液としておく。之の一滴に乙たる人の血液中の血清を一滴加へると數分間内に血球が三々伍々凝集して肉眼にも一見サラ〳〵の赤い粒々が見え出し、甚しきは全部癒合して一塊とさへなる事がある。かく凝塊する時はこの血球を凝集原と云ひ、血清の方を凝集素と名づける。この凝集素に二種類あつてアルファー及ビーターと名づけられ、凝集原にも之に相當してA及Bの二種類ある。アルファーはAなる血球のみを凝集し、ビーターはBなる血球のみを凝集する。所で自分の血の中には決して血球のかたまらぬ様に血球と血清とが配伍されてある。そしてこの二つの凝集原と二つの凝集素合計四つの要素が二つづつ組合される仕方に四つある。之を血球の種類に從つてO型A型B型AB型などと呼んだり、第一、第二、第三、第四型等と呼んだりする。即ち

型名	血球(凝集原)	血清(凝集素) アルファー ビーター
第一型	O	α β
第二型	A	β
第三型	B	α
第四型	AB	O

の四通りになる。

この血液型の性質は一生を通じて變化せず、病氣になつてもかはらぬさうである。そして之に親子の間にも一定の關係が存在して居る。其中一般に認められて居るものは左表の通りである。

兩親の血液型	子供の血液型
O—O	O
O—A及A—A	A又はO
O—B及B—B	B又はO
A—B	A、B、O又はAB

即あらゆる型生る。

兩親の一人AB服型が入ると子供はあらゆる型となり得るといふ人が多い。從前親子鑑別が難しい。

前掲の特別の場合には親子の關係が判然と證明される事が稀でない。

血液型の問題は從來血液を採取しなければわからなかつた。所が今度長崎醫科大學法醫學教室の吉田寛一氏は皮膚の垢からも、あらゆる粘膜からも、涙からも、唾液からも、汗からも、小便からも、精液からも、膣液からも血液型の檢出する方法を發見された。之によつて血液型の犯罪捜査上の應用範圍が驚くべく擴大された。

從來は犯行の現場に脱ぎ棄てゝある衣類や靴下、靴、下駄、足袋、手袋、手拭等より之等が被害者の所有品か、加害者の所有品か證明出來なかつたが、吉田氏の方法により其血液型が垢から判明するので之等の品物の所有主の血液型が容易に判明する。從而被害者のであるか否かが忽ちわかり、もし被害者の血液型と異るとせば加害者は何型であるといふ事がわかる。

昔は或犯行の場所に汚れたハンケチ、猿股又はサックなどが落ちて居たとしても如何なる犯人の所爲か容易に解らなかつたが、今では忽ち其血液型がわかり、何型の男が何型の女を犯したかが判明する。

昔は犯行の現場にある大便と、某所にある大便と同一なりやなどと鑑定命令を出されると甚だ閉口したが今日では血液型の檢査により容易に推定出來る樣になつた。

胎便なども明に血液型を示すから墮胎事件などの場合、或る遺棄胎兒と某家のボロに附着せる胎便などと同一血液型なりや否やは容易に鑑定出來る。

常に同一人の使用せる品物、皮靴だの、杖だの、鐵鎚、大工道具なども其手指により使用者の血液型を知らしめる。

吉田氏の研究によると死體からも、骨になつた人からも血液型がわかる見込があるので生前血液型のわからなかつた人の血液型を知るに必要ある場合に發掘すればわかる事になる。

この血液型は極めて容易にわかるのだから各警察署の刑事部の人には是非とも一通り心得ておいて頂きたいものと思ふ。又將來は之も指紋と共にイヤそれよりも早く出産屆と同時に凡ての國民から屆けてもらひ指紋原紙に同時に何型といふ事を記入しておいてもらひ、内務省指紋局で保管する事とし、且各自に自分の血液型を取つて居て欲しいものである。さうすると他日瀕死の創傷を受けて輸血を受けたいといふ樣な時にも一々血液の檢査をせずとも直に適當な給血者を撰んで處置する事が出來やう。又犯罪搜査の上にも指紋と相俟つて甚大なる便宜を得やう。親子間の遺傳關係も統計的に檢査するに大なる便宜があらう。

（四）

足跡については東京新宿病院長の篤學者庭瀨信太郎氏によつて深く研究されて居るが吾人は同氏により足跡から身長も推測出來るし、隆高もわかり、男女の別、荷物を持つて居たか如何かとか、前進かあとずさりか、緩歩か、急歩か、跣足か、闇中摸索か、忍び足か、四つ這では高這か、低這かまでわかるのである。又足紋があり、土踏まず又は畸形があれば、直に何某の足跡といふ事までわかるのである。

西洋では牛馬の足跡までも種々の條件の許に研究されて居り、牛馬の足跡から動物が如何なる狀態にありしかを手に取る樣に探り得る樣になつて居る。犬猫、鷄、鼠など人間と同樣して居る動物の足跡は一通り研究して其寫眞でも各警察署に備へて置く必要があらう。犯跡は何から足がついてわかるか知れない。極めてつまらないものからも大罪のわかる事がある。

塵埃から職業のわかる事についても吾が敎室の吉田寬一氏より詳しく研究された。耳垢爪垢や洋衣類の塵埃は不在證明にも中々重要な役目を演ずる。

犯人の知能は進むが、我々の研究も日進月歩である。恨むらくは警察搜査係に經濟上の、從而人物の缺乏ある事を、願はくは國家が搜査係に十二分なる經濟上の支持を與へ、我々の研究が直に警察署に於て應用され、正しき國民を泰山の安きに置かれん事を。

（昭和三・五・二八）

マルクスの書いた映畫臺本

――エイゼンシュテインのことども――

辻　恒彦

君自身、エイゼンシュテインの事務室にあつて彼と會話してゐるものと想像し給へ。若し君がドイツ語がお得意なら、彼はよりうまきドイツ語をもつて君に向ふであらうし、また君の語學がフランス語または英語に秀でてゐるならば、彼はより麗しきフランス語または英語をもつて對するであらう。斯

くて多くの場合ロシヤ語に不案内な外國の訪問者——その數のまた何と夥しいことよ——は、彼の許にあつて安慰(アットホーム)を感じ、そして悪いことには、この狂信的にまで精勵な映畫監督の文字通りに貴重な時間を空費せしめるやうな愚問の連發をやるのである。

けれども、見給へ——今、電話がかかつて來る。

「もしもし、誰方樣でございますか?」

この際——呟くやうな最低音(バス)——は、今まで君と話してゐたあの金屬性の高い聲とはまるで違ふではないか。彼自身が彼の秘書役となつてゐるのだ。ここで若し彼が、「同志(タワリシチ)エイゼンシュテインは只今お出かけです」とか「お氣の毒樣、いま丁度用談中であります」

と答へたとすれば、屹度その相手は彼の氣に入らない、或は氣に入りさうにない人なのである。反對に氣に入り、或は氣に入りさうな人だと、

「少々お待ち下さい、同志(タワリシチ)エイゼンシュテインが代りますから」

そしてもともと姿のない最低音の秘書役が姿を消し、高い聲のエイゼンシュテインが現れる——

「どうもお待ちどうさま、こちらはエイゼンシュテインです!……」

ここで彼は君の方に振返つて、その底知れぬ大いさを包む柔い快い顏に微笑を浮べる——「からでもしなくちや遣りきれないからね」と言つたやうな意味を持たせて。

國際的に有名な映畫女優が勞農ロシヤへ來てエイゼンシュテインの許で働きたい、といふ申込のあることを或人が彼に傳へた。

「さうですか」と彼は嘆息するやうに答へた「大變結構です、それは全く良い女優たちだ。だが私は乳牛や山羊や水牛と一緒に働くのが癖です。(彼はその時農村映畫「全線」を作つてゐた)その女優たちは乳を搾ることが出來ないに決つてゐる。そんな人達を何に使へませう?」

製作せんとする映畫の内容、題材に研究に當つて、エイゼンシュテインほど周密な態度をとる監督は一寸見當らない。だが一旦撮影にとりかかれば全く一瀉千里で、デテイルに關しては何等の筋書にも依らず即座に出來上るプランに依つて撮影機がどんどん廻されてゆく。その廻轉は彼の確固たるイデオロギーから迸り出づる力強い流れそのものである。

萬事がこの調子である。例へば、彼の最近の映畫「十月」の伴奏音樂の作曲に當てがはれた時日は、長さにおいて約三分の一しかない「パチョムキン」の場合同樣、二週間そこそこであつた。これには作曲家マイゼルも開いた口が塞がらなかつたと云ふ。(序に記すが、この映畫「十月」の伴奏音樂には、この音樂家によつて工夫された新しい音樂機械の外に、最大擴聲器やエーテル波音樂などが使用されてゐる)

流石のエイゼンシュテインも、カットには苦心するらしい。「十月」製作中のある時、彼はこの作曲家に向つて冗談半分に語つた——

「勿論君はいつもさう思つてるだらう、作曲は一番六ヶ敷いと。御覽、この映畫のカット(即ち作曲)が終ると、僕は參つてしまふから——」

「全線」の次にエイゼンシュテインの計畫してゐる映畫は、カール・マルクスの書いた

「映畫資本」に對するもの、即ち「資本論」である。

彼の言ふこの測り知るべからざるほど魅惑な材料――の映畫化で、史家アー・エフ・イモフの助力の下に進められてゐる。

カール・マルクス原作、エイゼンシュテイン監督の映畫「資本論」――

良い映畫、惡い映畫

百萬に近い會員を有するドイツ民衆劇場聯盟(フォルクスビューネ)では、映畫調査委員會を設け、昨年三月までにドイツで上映された内外映畫の專門的鑑定を行つて、映畫の鑑別表を作製した。いろんな立場からの批判または參考となるだらうと思ふので、左にその若干を摘錄する。

良い映畫（Aは推薦に値するもの　Bは上映しえられるもの）

カラマゾフ兄弟……B
カルメン(ポーラ・ネグリ主演の？)……B
ドクトル・マブーゼ……B
カリガリ博士……A―B
ラ・ボエーム……B
ウィンダミア夫人の扇……B
操られる奴隷……B
マノン・レスコオ……B
深夜……B
プラーグの大學生……B
タルチュフ……B
バリエテ……A―B
最後の人……A
キートンの西部成金……B
バグダッドの盜賊……B
黄金狂……A
キッド……A
腕白の大將……B
ピーター・パン……A
ロビン・フッド……B
美と力への道……B
母(ゴーリキ原作ロシヤ映畫)……A
ポリクーシュカ……A
パチョムキン……A
[illegible]……A―B
ポストマスター……A―B
山の手……A―B
ストライキ……A―B
黒色日曜日……A―B

惡い映畫（Cは推薦に値せざるもの、Dは上映に適せざるもの）

ニーベルンゲン……C
大帝の密使……C
ファウスト……C
ファントム……C
眞夏の夜の夢……C
歡樂の街……D
メトロポリス……D
海賊ピエトロ……D
ヴォルガの船唄……D

離婚市場の話

岸　東人

一

世界に二大離婚市場がある。一つは自由結婚、自由離婚の國ソヴエート・ロシアにあり、他の一つは米國にある。ロシアのことは暫く措き、米國の離婚市場に就て語らう。最近、米國では平均八組の結婚に對し一組の離婚がある。紐育州の如く州民の三分の一か、離婚を禁じられてゐる舊教徒であるところ

でさへ、結婚二十四組に對し離婚一組と云ふ數字を示してゐるのである。ネヴアダ州は、一九二四年中の結婚千七十九組、離婚千三十七組と云ふレコードを作つた。米國全體として、結婚の增加率は百分の〇・三であるが、離婚の增加率は百分の二・七である。かうなれば、離婚はもはや悲劇でもなく、センセーションでもなく、單に一つの制度であり、統計的興味に過ぎないであらう。

米國の憲法は、聯邦政府（ワシントン市にある中央政府）に、離婚に關しては何等の權能を與へてゐない。聯邦政府の權限で離婚問題に干涉し得るのは、アラスカとコロンビア區（ワシントン市のある方七十哩の地域で、大統領が直轄し、州から獨立してゐる。）だけであつて、南カロライナ州を除く四十七州は、各獨特の離婚法を制定してゐるのである南カロライナ州は、同州選出の上院議員テイルマンが「南カロライナに離婚法なきは、我等の大なる誇である。離婚法なきことは、道德に裨益するところあるかと問はれゝば、自分は無條件で然りと答へる。南カロライナの婦人は、神の寵兒であり、最美、最善のものである。南カロライナの男子は、自分は今この婦人と結婚する、然し若し良妻でなかつたら離婚するといふことは出來ない。婦人の男子に對する場合もまた然りである。そこに幸福なる家庭と家族がある。」と自慢した州であつて、離婚法を知らず、從つて離婚の統計を有つてゐないのである。

各州の離婚法の內容は、勿論同一でない。例へば、紐育州では離婚許可の理由を二つだけ認めてゐるが、ニュー・ハンプシアー州では十四、ワシントン州では九つを算し、更に最後の條文に『又は裁判所が十分なりと認むる他の理由』とある。大概の州が認めてゐる離婚理由は次の六つである。（一）姦通。（二）重婚。（三）一定の刑罰（法律上の）を受けた場合。（四）堪へがたき虐待を受けたる場合。（五）二年を越え故意に遺棄したる場合。（六）習慣的飲酒。さうして完全に離婚したものは再婚を許されるが、若干の州では被告の再婚を禁じてゐる。

各州の離婚法とも、多少の缺點があり、法律もまた結婚を「聖餐」たとは認めてゐないが、同時に結婚を單なる民法上の契約と同一視せず、民法上の契約の如く相互の承諾によつて取消さるゝものにあらずとし、どの州の離婚法も協議上の離婚を許可しないのである。故に離婚は必ず訴訟沙汰にしなければ、その目的を達し得ない。これ米國の到る處、離婚訴訟（ディヴォース・ケース）の際を開く所以であつて、原被兩告の間に必ず一應の議論が戰はされるのである。從つて原被兩告が馴合ひで離婚訴訟を起したことが明白ならば、裁判所は離婚を許可しない。離婚法の內容が各州で相違し、手續の難易がある結果、離婚法の最も簡單な州へは離婚希望者が續々と入込んで來る。ネヴアダの離婚率の高いのは、同州の離婚法が極めて簡單であるため、他州から、持ち込んだ離婚訴訟が多いからである。その結果ネヴアダのレノ市に於ける辯護士の門前は市をなし、滯在者が多いから、ホテルやアパートメントは滿員になり、購買力が增加して商店が繁昌し、娛樂場は常に賑ふ。まるでネヴアダ全體が、離婚法を資本に、產業組合を經營してゐるやうなものである。

多くの州では、離婚訴訟を起すものは、六ケ月以上州內に居住したものでなければな

らぬと規定してゐる。然るにネヴアダでは、一昨年法律を改正して六ケ月の規定を三ケ月に短縮したところ、新法律の發布後四十八時間内に四十八件の離婚訴訟が起された。ネヴアダの離婚市場—法廷—が株式會社であつたら、恐らくその株は暴騰したであらうものを。

二

然しこゝにレノの離婚市場にとつて有力な競爭者が現れた。巴里裁判所とメキシコ裁判所がそれである。レノ裁判所に比較すると、兩裁判所とも短時間で用がたり、殊に巴里裁判所では、訴訟が外部に發表されぬと云ふ特典が與へられるのである。

巴里裁判所は頗る迅速に審理してくれる。且つ事件を公表することは、醇風良俗を害する虞ありとして、法律がこれを禁じてゐるから、大見出し寫眞入りで新聞紙上を賑すやうなことがなくて濟むのである。然し巴里裁判所に於る離婚手續は甚だ高價である。旅費の外に手數料、賄賂等のため三千弗から一萬弗を要する。而も金持ちのヤンキー等に最も喜ばれてゐるのは、前述の如く秘密主義なるが故である。

メキシコに至つては、正に離婚訴訟のメッカたる觀がある。同國ソノラ州の離婚法は、目下紐育で開業してゐる辯護士デル・トロの立案したものであるが、それが頗る現代的に出來てゐて、最も好評を博してゐる。ソノラ州離婚法は、米國の離婚に見るが如き咎人を作らずに濟むのであつて、夫婦間の「妥協不可能」と云ふ事實だけで、離婚を許可する。或はまた、六ケ月以上別居してゐたと云ふだけでも、立派な離婚理由になるのである。

ノゲールス市のソノラ裁判所に訴訟すると、裁判所は二ケ月以内に判決を下す。ソノラ州を初め米國國境に近い四州では、當事者が州内に數日間居住したと云ふ事實があれば、その訴訟を受理するのである。訴訟人は自身でソノラ裁判所に現れ、二日間だけ同地に滯在しなければならぬが、相手方は出頭する必要がない。簡單で要領を得るところ全く米國式である。從つてデル・トロ辯護士のポケットは、メキシコ行き訴訟依頼者のお蔭で脹まるばかりである。

米國に於ける離婚者の六割二分は子無しの夫婦である。米國でも子は愛情の低當なり」と云ふが、話ばかりではないのである。子無し夫婦の離婚率の高いのは、曾、離婚の過半が比較的輕微な理由から行はれる事を證明する。また離婚訴訟に際して、婦人が手切金を要求する場合が少くなつたことは、婦人が益々經濟的に獨立しつゝある事實を語つてゐる。ピー・ダヴルユー・ウイルソンの計算に依ると、今世紀になつてから、米國に於て大略二百七十五萬の離婚が行はれてゐる。この事實は五百五十萬の人々が別れて行つたことを語るものであるが、今假りに五組の結婚につき四人の子供があつたとしても、過去二十七八年間に約二百二十萬人の子供が家庭悲劇の渦中に卷き込まれて行つたことが分る。更にその家庭には、兩親または義父母もあつたであらうから、總計約八百萬の人人が離婚のために何等かのショックを與へられたことになるのである。

離婚市場の繁昌が、米國の識者、政治家殊に社會事業家等を驚かしたのは云ふまでもない。さうして彼等は各の立場から、この國

離來の對策に腐心しつゝある。その中で最も有力であつたのは、離婚法の不統一が離婚激增の重なる原因であると云ふ說である。上院議員カッパーの如きは、米國憲法を改正し統一的な離婚法を作つて、聯邦政府をして離婚を取締らせねばならぬと云つたが、當時、議會の委員によつて起草された離婚の條件が在來のものと大同小異であり、且つ各州の自治は米國の傳統なので、憲法改正論は空論なりとして遂に葬られてしまつた。その他一般社會でも種々意見が提出されたが、何れも實際的のものでなく、遂には、試驗結婚(トライアルマリッヂ)が唱道されたり、昨年はまた、デンヴァー州少年及び家族裁判所檢事リンドセーによつて、避姙の公認を條件とする伴侶結婚(コンパニオネートマリッヂ)が稱へられたりしたが、問題は依然として未解決のまゝ殘されてゐるのである。

三

男女の何れが離婚法をより多く利用してゐるかと云ふと、婦人が原告である場合の方が遙に多く、且つ被告である場合でも、婦人よりも男子の方が多くの犧牲を拂はされてゐる。抑米國婦人をして、相次いで離婚市場へ走らしめる理由は何かと云へば、米國婦人の勇敢、非家庭的、野心的、さうして支配的なることがその半面の理由である。然しステファン・グレーハムが『紐育は遂に紐育である。紐育は米國ではない。紐育は他に比較するものを有たぬ。』と云つたのと同じ意味に於て、米國婦人は遂に米國婦人であつて、これを他と比較論評すべきものではあるまい。エルスウオース・ハンチイングトンも米國婦人を批評して『開拓者的精神と米國そのものの影響とが、今日の米國婦人を造つた』と云つてゐる。然らば、米國の社會が存在する限り、米國婦人は永久に米國的であり、離婚市場の明日は尙今日の如くあらう。

文樂人形物語

三宅周太郎

一、燒けた人形殘つた人形

大正十五年十一月廿九日の朝、我が御靈神社内の文樂座は燒失した。しかも、その火は何と云ふ惡火であらう。見方によつては「國寶」とし、大阪の「寶」とすべき幾多の古き風雅優美の人形を燒失してしまつた。勿論、それ等のよき「頭(かしら)」は、再び作らうとして、今の世ではどんな方法を以ても、二度と作り得ない名品揃ひである。その時、文樂の燒土を見て、こつちの一かたまり、向うの一かたまりの座方太夫人形遣ひが、その一かたまりづつでゐて、同じやうに泣き合つてゐたと云ふのは、滿更に誇張ではあるまいと思ふ。

私は文樂の人形を知るために、四月下旬ずつと大阪にゐた。そして今の辨天座の文樂の人形、及びその他内部のすべてを主宰する頭取吉田玉次郎氏に私は何日かつきまとつた。氏は嘸迷惑であつたであらう。が、私の寧ろ愚かしい位の熱意が、幸にも通じたと見えて、氏はかなり深切に全部を解放して私を導き、教へしてくれた。別に、私はその方の許可を得て、辨天座の文樂の人形の部屋に出入した。文五郎氏とその人形とを寫眞に寫すために、私は私の知る寫眞師をつれて行つた。何しろ三階の狹い薄暗い部屋である。私の寫眞師は無斷同然の不意打に、ぱつとマグネシユームをたいた。疊二枚半位のその部室は煙で一杯になる。文五郎氏とその人形は、丁度灰(はい)神樂を浴びたやうに粉まびれになつた。文五郎氏のあの細い目は猶更猫のやうに細くつぶられたりした。おそまきながらこの紙上で、右の頭取玉次郎氏、文五郎氏、或は、古い寫眞の拜借を約束してくれた座頭の吉田榮三氏に厚く禮を述べておく。

玉次郎頭取には一日例の如く私の姉の宅へ來て貰つた。氏の談が文樂の火に燒けた人形の話に及んだ時、私すら何となく興奮してしまふのを否まれなかつた。氏はしみじみとして「もうあんなえゝものは出來ません。」と云ふ。燒けたいい「頭(かしら)」の追憶に耽りながら、その香味を丸で舌の上ででも味はつてゐるかのやうにしてゐるのである。史實に殘る「阪崎出羽守」の千姫ではない。が、その猛火の中から千姫ならぬ人形を救ひ出す一人の出羽守はゐなかつたのか。などと私は興奮や憤りに似た氣持さへ感じずにはゐられなかつた。

尤も、私のこの興奮義憤には多少の理由がある。火事の日は周知の事實のやうに、十一月興行の千秋樂の翌日で、一座は年末の旅興行へ立つ日であつた。そのため「頭(かしら)」と「衣裳」とは、その朝鐵道便で地方へ送るため、それぞれ別々のつゞらに收められてゐた。火事！と云つた時、少數しかゐなかつた座の者は、「頭」のつゞら、「衣裳」のつゞら、そのいづれか一つしか持ち出す餘裕よりなかつた。が、不幸にも座の者は勘違ひをした。「衣裳」の方はその頃松竹が金をかけて新調したり、手を入れたりした品が多かつた。そしてその方が所謂金のかゝつたつゞらと睨んだのであらう。座方が辛じて外へ搶ぎ出した唯一つのつゞらは「衣裳」であつた。

玉次郎頭取の說明を俟つ迄もなく、衣裳は例へ得難い名品でも、いくらでも模造品が出來る。いゝ品を惡い品で代用出來る。人形は成程目先きの一時的の評價としては價額はあつてないやうなものだ。が、いざなくなると全く代りが出來ない。模造品と云ふわけに行かない。一つのつゞらを出した者はこの永遠の理屈を忘れて、目前の手柄に急であつた。――突嗟の場合で、氣が顚倒してゐたのではあらう。併し、「衣裳」の代りに、なぜ「人形」を持ち出さなかつたか。この不滿は誰にも起る事だと思ふ。この不滿がついつい私をさへ玉次郎氏同樣に、何となく憤りに似たものを感じさせるに至つたのである。が、もうとり返へしのつかぬ話である。以下、私が氏及びその他の方面に就いて新しく調べた人形の報告を書いて見る。

一體、文樂の人形は、その火災迄には一寸勘定し切れぬ位澤山で、ざつと二百見當はあつたと云ふ。尤も、それは總數で實の使用に堪へるいゝ「頭」は七八十であつた。それを全部燒いた。又、餘りよくない多くのものを燒いてしまつた。唯、偶然に當日地方へ送る人形のつゞらの傍に、それへ入れずに出してあつた、ほんのいくつかの大いしてよくない品が助かつた。それはいい品でないので地方へ持つて行くのを中止にした分であつた。それを誰かが外へ投げ出したので助かつた。併し、

皮肉にもそれはいい分でない。が、その品と、いくらかは松竹の藏に殘つてゐた分（それも殘り物でよくない品が多い。）とを合すと、今ではどうにか使へる分が、やつと三十位しかない。それも右の燒けたいい品の七八十には全く及ばない。多數燒けたが、その中の七八十は云はば第一選手である。今全部集めて殘つてゐるどうにか使へる三十はやつと第二選手であらうか。第二選手で第一選手らしく世界的の晴れ業を見せやうとするのである。斯道の困難は、太夫で大隅を失ひ、越路を失つた近頃の義太夫界と接近して來たやうな氣がする。

私は更に具體的に、その燒けた方、殘つた方の人形の內譯を書いておく。これは少々退屈か知れない。併し、これを說けば自然と人形の「頭」の價値、名稱、使用法、ひいては本質じみたものが分るかと思ふのでこの煩雜を敢てしたい。勿論、その道の研究家、所謂くろうとには甚だ無用で僭越な談義であるのは豫めお斷りしておきたい。

A　燒けた方

一、文樂の人形で一番珍重せられてゐたのは、女形の「笹屋」と呼ぶ頭であつた。これは笹屋何某と云ふ名人の人形細工人の作になつた品で、この名稱が傳はつてゐる。すべて若い美しい女形に使へる頭であつた。例、「紙治の河庄」の小春などである。これによく似た頭が二つあつた。斯道ではそれを「姉妹」と呼んでゐた。この「姉妹」の頭は「野崎」のお光の時などに丁度好都合であつた。姉妹と云ふだけによく似てゐて、どつちがどつちだか一寸分らない。所で、お光は初は娘で後は尼になる。が、人形だけに役者と違つて髮を一々直すのが厄介だ。で、お光の娘の時は姉の笹屋を使ふ。尼になつた二度目の出からは妹の方を使ふ。つまり、お光に二つの娘と尼の人形を作つておいて、それが殆ど同一だけに前後と分けて使つたわけである。これは稀に見るいい頭であつた。姉妹で揃つてゐる點が珍しく、作としても得難い品であつた。無論、すべて燒けてしてまつた。今は榮三氏の手にこの系統の「老女形」の頭が一つだけ殘つてゐる。それは到底この姉妹の作に及ばない。併し、殘つた中ではいい方で榮三氏は愛用してゐる。榮三氏が使つてゐた本年四月辨天座の「合邦」の玉手御前はこの頭である。

別に、この姉の頭は手にとつてよく見ると、顏の左の方が右より少し小さい。即ち、その顏の左右が幾分違つてゐるのだ。例へば、人間の左右の眉が決して同一でないやうにである。で、專門家の人形遣ひでさへ、この姉の頭を手にとつて見てゐると、左右が少しづつ違つてゐてをかしいと怪しまれた位であつた。所が、それを舞台へ出すと、實に均整のとれた美しい女

性の顔になつた。斯道での一つの不思議に數へられてゐた事實である。但し、これはこの姉の頭が特に名作である證據に見ていい。人形は名作に限つて、鼻を中心にしたその左右は決して同一でないと云ふ。必ずその左右に僅かながら差違がある。凹凸がある。が、舞台へ出すと、左右が同一の凡作に比べて、それは必ず不思議に美しい神秘的な人形美を出すさうである。

二、「源太」。これは若い二枚目系の男の頭である。例、「紙治の河庄」の治兵衛。大正十五年八月東京歌舞伎座で古靭の「河庄」に榮三が使つた治兵衛である。源太中の逸品であつたが燒失した。今は火災迄使はずにゐた二流の品で間に合はせてゐる。

三、「鬼一」。「菊畑」の鬼一法眼の役に使つた頭で、それからこの名が出た。「妹脊山の山の段」の大判事にも使ふ。これも燒けた。本年四月辨天座の「山の段」の大判事に使つてゐた「鬼一」は、近年迄文樂にゐた近頃の人形細工人の天狗辨の作になつた分である。「山の段」へ出てゐた土佐太夫曰く「我々が語つてゐても、今度の大判事は、今迄の「鬼一」と違つてゐるのがよく分ります。新しい方は昔のやうに何となく押してくるやうな手答へがありません。」と。

三、「斧右衛門」。「彦山の毛谷村」に出る斧右衛門に使ふ頭。それからこの名が出た。外に三枚目の道化役にも流用する。例、「時雨の火燵」の丁稚三五郎、「帶屋」の丁稚長吉に使ふ。これも燒けた在來の分は名作であつた。今日のは間に合せ物である。

四、「東馬」。右の斧右衛門に似た系統の頭である。「新薄雪物語」の三枚目澁川東馬に使ふ。で、東馬の名が起つた。この東馬はいい作であつたが燒けた。それは明治期の人形の名人初代吉田玉造が愛用した頭であつた。二三年前に死んだ古老の人形遣ひ吉田文三が、右の玉造在世時代、ある時この澁川東馬の役が廻つて來た。で、文三は名作の東馬の頭を玉造に借りて使はうとした。(當時は人形遣ひがそれぞれ各自の人形を持つてゐた。)が玉造は「これはお前の使ふ頭でない。」と云つて貸さなかつた。さう云ふ由來のある「東馬」であつた。これからの東馬の役の時には、これも間に合せ物でやる外あるまい。

五、「陀羅助(だらすけ)」。端敵に使ふ頭。例、「紙治」の太兵衛。「堀川の河原の殺し」へ出る悪侍官左衛門。これも特殊なものの一つで、下ひて憎々しい所に特色のある頭であつた。が、これは幸ひ玉次郎氏が、氏の前の文樂の頭取故吉田三吾から貰つた「陀羅助」があるので間に合つてゐる。元より燒けた品には遙に劣るが。

六、この外「検非違使」と云ふ「忠臣蔵」の判官、「太十」の久吉などの立役に使ふ頭、「光明」と云ふ「紙治」の孫右衛門に使ふ頭の名品もなくなつた。今のは既記の天狗俤あたりの近頃の頭である。

七、「つめ」の人形。「妹背山の御殿」へ出る官女、「加賀見山の草履打」へ出る腰元、「寺子屋」へ出る百姓、即ち、三人使ひの人形でなく、一人で使ふ仕出しなみの人形を總稱して「つめ」の人形と呼ぶ。あゝ云ふ單純なデクの棒のやうな人形だが、矢張りいいものは趣きが備はつてゐた。その多くは燒いてしまつた。今でも二三十は殘つてゐるが、いづれも使ひ古して藏の中へ捨ててゐた分を、取り出して修繕して使つてゐるのである。夥しく燒けた中で、特に得難い愛惜すべき逸品は大體こんな所であらうか。

B　殘つた方

一、「文七」。院本の「雁金文七」の役に使つた頭。それからこの名が出た。「寺子屋」の松王、「太十」の光秀、「陣屋」の熊谷に使ふ。これは幸にかなりいい分が殘つた。人形の座頭役の頭だけにこれの健在は大に祝していいだらう。

所で、今の松竹の藏の中に、この文七の大きい頭が一つ殘つてゐる。それは誠にいい頭であるが、大きすぎるために埃まぶれになつて轉がつた儘になつてゐる。今ではこの頭を使へる人形遣ひがゐないからである。

この大人形の文七を、既記の初代吉田玉造は「太功記」の光秀で巧に使ひこなした。院本の本文で行くと、「十三日の段」となつてゐるその終末である。小栗栖村で百姓に竹槍で刺される所だ。人形の方ではこの光秀を馬に乘せて出す。そして竹藪の傍で馬から下りて休んでゐる所を、竹槍で刺されるのださうである。が、玉造はさうして刺されてから光秀が、馬に引つ張られて下手へ這入るやり方を見せた。その馬（人形の馬は人間が一人だけ胴の中へ這入つて、頭に擔いで歩く。）に今の玉次郎頭取が少年時に這入つてゐた。それがいざとなつて、手負ひの光秀を下手へ引つ張つて這入らうとする。頭が大きいだけに、人形全體も隨分大きく出來上つてゐる。それを馬で引づつて行くのだ。使い手に壓迫されてしまつて、鐵の柱でも動かす心地になる。が、玉造はさあやれ、さあ引つ張れと云ふ。が、若い玉次郎氏はどうにもならなかつたさうであつた。それ位その光秀は巨大で壓力があつた。勿論、それは單に頭が大きいばかりでなく、玉造の妙技が精神的にも更に大きい人形にしたからであらう。

その大きな文七は作もいい。が、今では誰も使ひ手がないの

である。野心家の人形遣ひがたまにどうにかしようとしても、到底てこに了へない。で、藏の中に轉がつてゐるだけである。さうしていつも藏に殘されてゐるだけに、火災にも係りがなかつたのである。今の浮世を離れた超人的「頭」とでも云はうか。

二、「團七」。「夏祭」の團七に使つた頭。それからこの名が出た。「千本櫻」の權太、「伊賀越」の河合又五郎に流用する。外に、「男」と云ふ頭、これは「忠臣藏」の師直、「盛綱」の北條、「すしや」の梶原に使ふ。この二つの團七と男の頭は幸にいいものが殘つてゐる。この外、私が本誌の「文楽物語」三月號の「人形雜話」の中で紹介した一役のみの人形「景清」は、幸にも火災を免れた中の名品である。寫眞參照。



「日向島」の景清の人形。文楽の人形の中で、一つの頭でこれ一役のみだけ。顔は縮緬張り、着物の間から見えてゐる銅は餓鬼胴と云つて痩せ衰へてゐる肉體をよく現はすもの。この衣裳も古く上等の品でいい小切れが集められて縫つてある。

三、「金時」これは一寸風變りな頭である。「先代萩」の床下の松ケ枝節之助、（芝居での荒獅子男之助。）「妙心寺」の四方田但馬守、「寺子屋」の春藤玄蕃に使ふ。これも殘つた。この系統で「鬼若」と云ふ頭がある。「大江山」の坂田の金時、「車曳」の杉王に使ふ。それも殘つた。

四、先きに今日「つめ」の人形が燒けて尠くなつたのを云



楽屋に於ける吉田文五郎氏。辨天座の三階の部屋だ。寫眞左側につるしてある
四つの人形が「つめ」の人形。まん中にある大きな人形は「金時」と呼ぶ松ケ枝
節之助の頭。その横は『壺阪』へ出す觀音の人形。

つた。所で、昔の植村家時代の文樂座から、最近の御靈文樂になる迄、「つめ」の人形で一つだけ不吉とされてゐる分があつた。それは「つめ」の人形に珍しく口があいて舌を出してゐる。この人形をうつかり舞台へ出すと、その興行は不思議に不入りになつた。で、いつの間にか不吉な人形として誰も使はずにしまひ込まれたのであつた。が、この「つめ」の人形は古くからの事實談として、その昔植村家にゐた丁稚の作であるのが確實だ。その時分、植村家に器用な一人の丁稚があつた。いつの間にか人形細工人の仕事を盗み見て、頭をいぢり出した。さうしてゐる中、その頃に文樂に文法と呼ぶ名物の爺さんがゐた。もう亡くなつてざつと三十年位になる。玉次郎氏などもこの文法爺さんをよく覺えてゐると云ふが、いつもぽつくり口をあけてゐるのが癖であつた。そして口があいてゐるため自然と舌が出て見えた。この文法爺は、元來は淡路の人で人形の細工人の助手のやうな仕事をして一生を文樂で終つた。さう云ふ好々老爺であるだけに、口をあけ、舌を出してゐる顏つきそれ自身が、實に「つめ」の人形然としてゐた。文法さんが人形の「寺子屋」の百姓

の中に立つとしたら、その儘で外々の「つめ」の人形と變らぬやうに見えた。で、器用な丁稚が、いつの間にか頭を文法そつくりにほつた。出來上ると、文法その儘であると共に、立派な「つめ」の人形になつた。内外の人々は喝采した。尤も、文法爺さんはひどく怒つたさうである。

かう云ふわけでこの「つめ」の人形は、文樂中での名物になつた。併し、文法爺さんの怒りのためではあるまいが、これを出すと興行が不入りなので、遂には忌み嫌はれるに至つたのである。が、兎に角一種の名作で、文法を知る人は、今でもこの「つめ」の人形を見ると思はず吹き出してしまふ。今では「つめ」の人形が尠いので、さう云ふ迷信は捨てゝこれを使用する事になつたのである。

五、前記の二三年前に死んだ人形遣ひ吉田文三には、人形遣ひでない外の職業ではあるが子孫が殘つてゐる。その子孫が、文三自身が持つてゐた人形を保存してゐる。その中に七つか八ついい品がある。殊に、文七と檢非違使とに一つづつ頗る上等がある。で、いいもののない今日、松竹ではそれを讓り受けようとした。が、文三の家では中々手放さない。値段に標準のない頭の事だ。十圓と云へば十圓、百圓と云へば百圓になる性質のものだ。文三家では天下の珍品として餘程高價に考へてゐる。

併し、松竹は燒けたからほしいので、燒けてさへゐなければいくらのものでもないと考へてゐると云ふ。これは双方に理屈がある。で、未に睨み合つてゐて折れ合はない。果してそれが文樂の所有になるかどうか分らない。が、文三としてはさういふ考へなしに、單に愛好家の心理で所有してゐたものだらう。これはどう解決するか、それは未定だ。が、いい頭が少數にしろ文三家にある點で、これを殘つた方に數へておく。併し、これを殘つた方に數へるのは無理であらう。が、さうして好んで無理をしたい位、即ち、この文三家の頭を強ても文樂へ與へたい位、現在殘つた頭は尠いのである。燒けた方に愛惜のあるのは當然だ。が、殘つた方すら、一人しかない子供が病身だと云ふやうにすべて甚だ心細い存在である。その上、頭を作る人は、末流でも何でも今の日本では阿波へ歸つた天狗屋一人である。現在の頭が、天狗辨作で代用してゐる事は既に述べた。が、もし天狗辨がゐなくなつたら？から考へ出すと心が寒くなる。何しろ今の頭の舞台へ立てる私の云ふ第一選手は、繰り返して云ふがやつと總數三十位にすぎないからである。

二、人形の思ひ出

去年の十月、私は第一回の文樂見學をした。既に紹介はした

が、その時の中幕は津太夫の「近江源氏」の「盛綱陣屋」であつた。愈々「首實檢」になつた。と、人形の盛綱の着附は白りンズで、それが龜甲のやうな熨斗目になつてゐる。上下も勿論その錦の龜甲のやうな柄である。かう云へば造詣の深い人は分るであらう。これは實に先年迄中村鴈次郎がやつてゐた盛綱の着附でないか。

私は暫く啞然とした。人形が役者の眞似をする。それも誰あらう中村鴈次郎の眞似をする。そんな事があつていいものであらうか。で、私は念のため文樂のその道の人にその理由を聞いた。と、無論、人形の盛綱には昔からきまつた扮裝はある。唯、それが如何にも地味で目立たないからと云ふのだ。そして曰く「今度は成駒屋はんの型で行きました。」

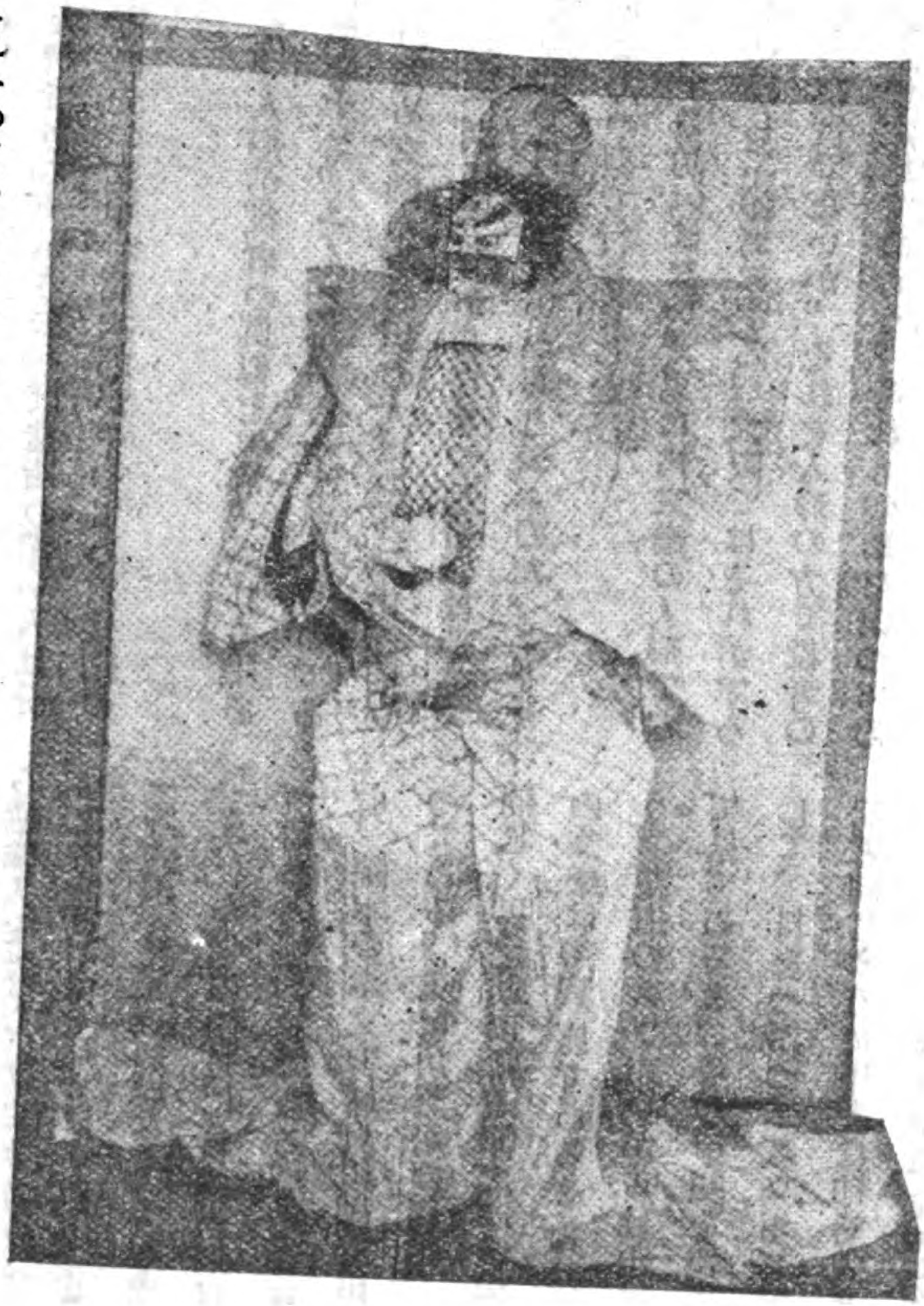
私はこれを詳に說明する勇氣はない。兎に角文樂の人形でないか。役者が文樂を見學して參考にする。大阪ではそれが寧ろ習慣と云つていい位の事實でないか。それを人形の方で役者の眞似をする。何と云ふ無定見であらう。それも盛綱を使つてゐる人は誰でもない、座頭の吉田榮三氏である。

淨瑠璃の歷史を辿ると、云ふ迄もなく享保より寶曆年間を全盛期とする。當時淨瑠璃で成功すると、それをとつて芝居にした。次に衰退期は天明より幕末時代から、明治の初め迄である。その頃になると芝居で成功した狂言があると、それをとつて淨瑠璃にした。勿論、かう云ふ逆輸入は更に淨瑠璃そのものを衰へさせた。この歷史的事實のやうに、今日の文樂は芝居から逆輸入を始めてゐる跡が見える。これは今の中に何とか防止したいと思ふ。さもない限り、この可弱い迎合的妥協は人形を一層衰へさせ、權威なくするものであらう。

又、今年の四月に私は三度目の文樂見學をした。前狂言は「伽羅先代萩」である。その床下になつた。芝居では仁木彈正、院本の本文では貝田勘解由、それを文樂では原田甲斐でやつてゐる。兎に角芝居の仁木、人形の原田甲斐である。芝居と同じく男之助に當る節之助が床下に鼠を踏まへてゐる。と、今の文樂は辨天座であるせゐはあらう。それにしてもどうだらう。花道のスッポンから仕かけの煙硝が立つのだ。おやと思つて見てゐると、その甲斐を使ふ吉田玉松氏は寫眞の如き恰好をして、目をつぶつてスッポンから現はれた。そして、そつくり芝居と同じやうに甲斐は印をとき、につたり笑ふ、(その後で床では義太夫の大きな笑ひをやる。)それから揚幕むきに反つて立つ。そしてツケを入れて、玉松氏は悠々と引込むのだ。尤も、この甲斐の人形は上半身が人形遣ひの身體に縛りつけられてあるだけなので、下半身は人形遣ひの足になつてゐて自由だ。即

ち、歩けるわけだ。で、そつくり芝居の仁木のやうに花道を歩いて引込んだのである。

私はこれにも唖然とした。併し、人形のこの「床下」の甲斐は、昔からかうした人形を上半身に結びつけて出るのに變りはない。それは全く特殊で珍しいので、玉松氏が揚幕へ這入ると、別に、その儘外へ來て貰つて私はこの寫眞をとつておいた。かういふやり方をする役は、著名なものではこれ一つだからである。この人形の遣ひ方はこれでいい。上半身に人形を結びつけるなど、如何にも理屈なしに、古めかしくて面白く思へる。



京田甲斐の人形。本年四月辨天座「先代萩」「床下」の甲斐の人形。遣ひ手は吉田玉松氏。人形の半分を身體に結びつけてゐる珍しい役。人形の頭は「文七。」

併し、芝居同樣、花道のスッポンに現はれ、花道の引つ込みを見せるとは、餘りにも心なき業でないか。

そこで私はその道の人に就いて調べた。と、初代吉田玉造は、矢張り寫眞のやうな風に人形を身につけて出た。が、それは舞台の下手である。下手に煙硝をたいてすうと立つて現はれた。そして幕切れは宙釣りになつて、その居所の儘舞台の上へ上つて行つたさうである。二代目の吉田玉造も亦このやり方であつた。その中、故吉田多爲藏か、故吉田文三かの時から、元の文樂座に小さい花道を作つたのを幸、そこへ現はれた。そして短い花道ではあるが、芝居のやうに似せて引込んだ。それ

を今度は辨天座で、玉松氏が芝居そつくりにやつたわけだらうである。

この愚劣な珍型は實にかうした經路から出てゐる。明治初年は右のやうに初代二代目共玉造は、成程人形らしく宙釣りで、巧に芝居を避けて、芝居以上に出てゐる。それが近年では花道をさへ使ふやうになつてしまつたのである。しかも、玉松氏は大阪でこのやり方をしたのが今度で二度目だと云ふ。併し、大阪のその道の人々や批評家は別に非難もしなかつたらしい。が、私はかう云ふやり方こそ、人形を最も邪道に陥れるものと信じる。「盛綱」の着附の雁次郎型踏襲と、甲斐の芝居の仁木もどき、この二つは近來の人形の頽落の傾向を代表してゐる。この愚、この愚劣、私は寧ろ憎みさへ感じる。但し、斷つておく。今でこそ私はこの非難攻撃はする。併し、私はかう云ふ意味でない方の人形の大まか、人形のユーモラスな愚かさ、人形の夢幻と怪奇、それは心から尊敬愛好する者である事を。私の第一集の劇評集にはその意味の人形讃美を屡々繰返してゐるのである。が、今日ではこれは偶々極端な愚劣事にあるにしてからが、人形はかう云ふ醜悪をしてゐるのである。そしてかう云ふ出鱈目はこれのみに止まらない。私はまだ外の例をも數へ得る。憎みなしには見ずにゐられないではないか。一に當事者の反省を促したいと思ふ。

三、人形遣ひさまざま

文樂の人形と云ふと、それは直ちに初代吉田玉造を連想する。初代吉田玉造と云ふと同じく文樂の人形を連想する。そのやうに吉田玉造は文樂の人形と離れ難い關係を持つてゐるのである。

明治初年の今の文樂の前身、松島に出來た文樂座時代の番附を見ると、紋下の太夫は五代目竹本春太夫、三味線は豐澤團平、そして人形は吉田玉造とこの三人の名が別格に太字で掲げられてゐる。攝津大掾以後の近來でこそ、紋下の太夫のみが、その別格の地位に唯一人で名を出してゐる。併し、その以前はこのやうに紋下の地位には、太夫三味線人形がそれぞれ一人づつ權威者を出してゐたのである。つまり、太夫三味線人形に一々紋下があつたわけである。

文樂の太夫の紋下は、春太夫から後、實太夫と云つて後長門太夫の名をついだ太夫、それから攝津大掾の越路太夫と明治中期迄にすら、三代も變つてゐる。が、その間人形の紋下のみは、實に我が吉田玉造一人がいつも變りなく署名せられてゐる。この事實で分るやうに初代玉造は實に長命であつた。生れ

は文政十二年道頓堀隆慶町に産聲を擧げた。そして明治三十八年一月十二日、南區大寶寺町の自宅で七十七才で歿した。しかも、死ぬ前迄文樂に出てゐたのであるから、人形遣ひとして永年紋下に名を出してゐるのも當然である。

幼名は龜吉、父は吉田德藏と云ふ人形遣ひであつた。龜吉は幼少から舞台に出たがつた。父の德藏が當時の名人と人形の話に耽つてゐるのを聞きながら、早く舞台へ出してくれと再三懇願したと云ふ位である。十一才の天保十年、當時の竹田の芝居（今の辨天座）に子供の太夫の操り芝居興行があつた。それへ父にせがんで初めて出勤した。所が、父は甘く見てゐて藝名をつけてくれない。名をつける程の事はあるまいと云つた調子だ。が、名前なしに出るわけには行かない。子供のせいでもあらうが、龜吉は圓顏であつた。で、父の德藏は「圓顏やよつて玉造はどうや。」と云ふ。そこで當意即妙の玉造を名乘つて舞台へ出たのである。この十一才の圓顏やよつて玉造、これが後年にこの道の第一人者にならうとは誰が豫測し得たであらう。

初舞臺の竹田の芝居は大入りであつた。が、どの人形遣ひもそのやうに、玉造には役などはつかない。人形の足さへ持てずに、單に小使の雜用に使はれるばかりだ。で、毎日泣きながら雜用にこき使はれてゐたと云ふ。その中、この一座で四國へ出稼ぎに行つた。そして生れて初めて玉造は年相當な役がついた。「先代萩」の子役鶴千代である。天にも上る心地で喜んだが、千松を使ふ人形遣ひが納らない。玉造みたいな新米の鶴千代では、千松が遣へないと云ふ申分なのだ。玉造は仕方なくいろいろと頼んだ。するとその千松を遣ふ者が、そんならお前の賣飯をくれろ、座の雜用の辨當が尠くて足りぬからと云ふのだ。で、玉造は仕方なくその興行中賣飯を與へて、千松の相手の機嫌をとりながら、鶴千代を遣つたのであつた。が、その興行中賣飯ぬきの空腹のつらさは、自分の役の鶴千代君以上であつたと云ふ。この事實を後年彼はよく茶飲み話にしたさうである。（明治三十九年、即ち、玉造歿後の翌年、大阪の故渡邊霞亭氏が某誌に玉造の短い逸話じみたものを少しばかり書いてゐる。私は一方玉造の周圍に親しんだ人の事實談を調べつつ、それを參考にした。一言斷つておきたい。）

この苦行でやり通した鶴千代である。流石に好評を博した。後、間もなく博勞町稻荷に出來た文樂座へ父と共に出勤した。紋下が名人の長門太夫の時代である。玉造は綱太夫の「關取二代鑑」の「秋津島内の場」で、子役の倅力造を使つた。太夫の方は相當認めたのであるが、父の德藏は「なつてゐない」と云つてひどく怒つた。そしてその役がどうしても氣に入らぬと云つ

て、玉造を怒りの餘勘當同然にしてしまつた。時に玉造は年滿く十四才であつた。酒色とか不行跡ならば兎に角、十四才の子供を、藝が幾分出來ないからと云つて勘當する。十四才で勘當、蓋し、後年の名人たり得たのも、かう云ふ嚴のやうな非凡事があるからではなからうか。一方、私は有名ではないが、この親の德藏を「人」として認めたい氣がする。固い頭と云つて玉造と名づけたり、十四才で勘當したりするこの德藏氏、それは誠に「名人の親」と云ふやうな氣がしてならないからである。

かう云ふ教育を施されたからであらうか。玉造は幼少より多血質な鋭氣の溢れた性格であつた。後に一家を成してからの玉造は、藝風氣質共に、屢々、當時の大阪の役者の大立物、尾上多見藏に比較せられた。多見藏の派手な藝人風の性格、向う見ずの冒險家的氣質が、玉造の上にも共通的にあるかのやうに品評せられた。が、それは確に事實である。玉造はさう云ふ血氣旺んな男であつたためであらう。彼は一生の中で二つの大喧嘩をしてゐる。そしてそれは誠に彼の面目躍如たるものが覗えるのである。

第一の喧嘩。天保年間近世の江戸の生世話役者の開祖、四代目市川小團次は一身上の事情から大阪の右の竹田の芝居に現はれた。當時彼は市川米十郎と稱してゐた。そして彼は「傾城反魂香」を演じたが、その切に「畫ぬけ」の所作事があつた。鷹使と藤娘との濡場から、雷となつて空から落ちて瓢簞鯰になる趣向であつた。その頃、玉造はこの種の仕掛け物に才能を發揮し出して、人形の方で一二新工夫を出してゐた。で、米十郎の右の宙乘りに、玉造の工夫を借りてはとの竹田の芝居からの申出があつた。

玉造はそれを聞いて內心喜び勇んでゐた。所が、相手の米十郎は何しろ後年の小團次である。彼も亦血氣旺んな若者であつた。玉造のやうな年若な者の助言を快しとしなかつた。「玉造に何が出來るものか。あれは勘當を受けてゐる男だ。なら本物の人形遣ひと云ふより、役者で云へば舞台へも出られぬ下廻りでないか。」と輕蔑した。玉造は玉造で「芝居の元祖は人形だ。芝居で役者に分らぬ所を人形遣ひが敎へてやるのだ。」と云つた主張を持つてゐた。

傑物はかうして覇氣滿々たるのが普通であらうか。この後年の二大名人は忽ち衝突してしまつた。しかも、米十郎は一枚上に出て「何だ人形遣ひめ、人形で氣の利いた眞似が出來るか。」と罵るに至つた。玉造はかつと怒つた。そして直ちに文樂座へ駈け込んだ。そして「どうか玉造一人を助けると思つて、次の與

行に米十郎と同じ「濡ぬけ」の所作をやらしてくれ。」と座主に涙ながらに頼んだのであつた。

座でも玉造の心中を察してそれを許した。そこで玉造は性來の仕掛け物の才を働かして、いろいろに工夫研究した。そして玉造初役の宙乘りとして、米十郎と同じ「濡ぬけ」の所作事で一緒に初日をあけた。が、苦心は見事に効を奏して、これだけは玉造の人形の方が米十郎以上として喝采を得た。後年玉造は今の文樂座ででも種々の仕掛け物や宙乘りをやつた。そして不器用な人形が、工夫次第で如何に器用に變化を以て見せられるかの新機軸を開いた。今でも文樂に川遣ひの人形が様々に早變りをしたり、宙釣りになつて引込んだりする。それは文樂の人形の一つの名物となつてゐる。が、あれは多くは玉造の案になるものゝ繼承である。併し、玉造が大阪の派手好きな市中の人氣を、一般的によく吸集したこの仕掛け物や宙乘りも、その芽生え時代にはかう云ふ「勞苦」と「基礎」とが積まれてゐるのである。

第二の喧嘩。これはかなり有名な事實である。寧ろ說く必要がないかと躊躇する。併し、立派な研究話柄になると思ふので簡單に紹介しておく。それは義太夫道の神と云はれてゐる豐澤團平と玉造との爭ひである。

嘗て、長門太夫が「志渡寺」を團平の三味線で語つた時である。その初日前の總稽古の日、お辻が祈りをする所の「ものを云はつしやれぬか」トチチリ／＼「南無金比羅大權現」トチチリ／＼と云ふ性念場へ來た。總稽古と云ふ氣のゆるみであらうか。誠に團平らしくない話であるが、團平はその眼目の所で、三味線の竿に粉をふりかけた。そして胴をなめたりした。氣のぬける事が甚しい。と、玉造は「好い加減にしてくれ。胴がなめたいなら樂屋でなめて來い。」と怒鳴つた。相手が第一人者の團平だ。殊に、總稽古の日だ。團平も我慢をし兼ねて喧嘩沙汰になりかけさへした。が、長門太夫の仲裁でその場はそれで納つた。

次の興行は「千本櫻」であつた。玉造は權太であつた。その首桶を持つて這入る「是忘れては」の所の三味線の彈き方の打ち合せを團平から云つて來た。併し、玉造は前の事件以來、團平を快く思つてゐない。で、どうにでも彈いてくれ、自分の方から乘つて行くと答へた。

扨、初日である。團平も腹に据え兼ねた。で、いざ「是忘れては」の急所へ來たとなると、團平は腕に力を入れて彈き立てた。玉造も言葉の手前で、それを外してはならぬと精神をこめて使ふ。長門太夫も二人の力競べに攻められて玉の汗を流して

語つた。と、玉造は餘りにも力をこめて檪太を使つたためであらう。しめてゐた腹帶がぷつと途中で切れた。後に玉造は人に語つて云ふのに、流石は團平だ。俺だけの氣力がなかつたら、腹帶の代りに腸が捻ぢれてしまつただらうと。

私はこの二つの喧嘩的出來事を、玉造の氣質の面白い現はれと見たいと思ふ。併し、かう云ふと玉造は傲慢不遜な人間らしく聞えるだらう。が、おほ根は無邪氣此上ない人であつた。この團平との喧嘩の後、團平がある時「惡う思うて下さるな。」と傳言して來た。すると玉造は わつと聲を擧げて泣いてしまつた。そして「團平さん〱。」と子供のやうに感激して名を呼んだと云ふ。

＊　＊　＊

本來はかう云ふ人である。逸話は尠くない。南區炭屋町に長く住んでゐた時の話である。ある夜道を歩いてゐて立小便をしてゐた。大の男なので巡査に咎められた。そして住所を問はれたが答へが振つてゐる。「私の家は西横堀御池橋の東詰でござります。」と云ふのみである。巡査が再三名を聞いても、自分の家の炭屋町と云ふ町の名を知らなかつた。又、番地はと問ふと「そんなものうちにありまへん。」

團平は心が樂しまぬ時はきつと三味線を彈いた。三味線を彈くと團平の顏色はよくなつたと云ふ。同じやうに玉造は、人形さへ遣つてゐれば不平や癇癪も納まつた。そして家にゐる間も一時も人形を傍から手放した事はなかつた。感興を覺えると、夜半でも床の上に起き上る。そして人形を遣ひ出すのが常であつた。

死んだ時、外に財産はなかつたが、彼の胴巻から金が出た。が、面白いのはその金の中に、長命した人とてもう通用せぬ太政官の札などが澤山這入つてゐた。彼は金を見てもどれがどの額か、又は通用不通用のそれすらよくは分らなかつたらしい。實子に一人吉田玉助なる天才肌の人形遣ひがあつた。が、三十才で夭折した。妻にも早く死に別れて晩年は天にも地にも一人身であつた。が、通用せぬ紙幣を持ちつつ、人形のみを愛して一生を終つたのである。

話は變る。人形の創始期前後は、人形は云ふ迄もなく一人の人形遣ひで遣つた。それが今日のやうに三人遣ひになつたのは享保十九年十月からである。（今より約百九十二年以前。）私が度度云つたやうに淨瑠璃と人形とに就いては文獻が殆ど殘つてゐない。が、その中で明治三十三年十二月春陽堂版の高野辰之氏著「淨瑠璃史」は、活字で讀める記錄の中で最も古く又貴重な冊子である。近頃のこの方面の著書は精々これに負ふ所が多い。これこの一册を作つた作者に感謝すべきと信じる。

は絶版であるが私は幸に手に入れてゐる。が、斯道第一の古い良書のこの年譜によると、三人遣ひの始りが明になつてゐる。即ち、右の年月の時、竹田出雲の「芦屋道満大内鑑」が上演せられた。その時から初めてこの三人遣ひが採用せられた。その記録に「此時與勘平彌勘平の人形は左足を外人に遣はせ、殊に與勘平の人形は腹のふくるゝ様にせり。これを操三人懸りの始とす。」とある。

この事實で分るやうに、三人遣ひの人形になつてから實に百九十二年餘である。その間にこの道の開祖吉田文三郎のやうな大成者功勞者はあつた。併し、この非凡人は歴史の上に殘るやうに、天才には違ひないが純粋な藝術至上主義者でなかつた。その多才多能な頭腦はあらゆる方面に長じてゐて、獨り人形を愛好するのみでは滿足し切れなかつた。結局、當時の竹本座豐竹座の入れ替りになる大騒動を醸したのも、文三郎が餘りに世才俗才に長じてゐたからであつた。即ち、この非凡人は昔の人に珍しい何んでも出來る所の寧ろ現代人のやうな氣質であつた。尤も、それなればこそ當時のすべての王者になり得たのではある。が、それだけに彼が全人格的に本統に人形を愛したかどうかになると、多少不純な氣さへする。つまり、文三郎には人形が處世の方策の一面であつたと見て差支ない位、彼はその道の非凡人ではあるが現世に才能と執着とを持ちすぎてゐたのである。

本。そこへ來ると、この初代玉造は凡さう云ふ複雜や外の慾望がない。人形道から見ると、人形道の功蹟を天秤にかけると、勿論、其方は文三郎が遙に重い。玉造はその半分であらう。が、一生を通じて、いづれが心から本統に人形を愛したかになるとどうであらうか。その人形を愛した所の「愛」になると、この兩者はどうであらうか。不遜な想像をするやうであるが私など一點の疑問なしにはゐられないのである。

結局、私はこの玉造の方が、文三郎以上に渾身「人形の愛」であつたやうな氣がしてならない。玉造は實に人形の外には殆ど何物も心になかつたらしい。どうせ人間だ。名聲物慾はあつたであらう。が、それすら、玉造は一朝人形の愛に出合ふと、どうやら引力を弱くしたのではないかと思はれてくる。

明治三十六年八月、東京の歌舞伎座へこの吉田玉造は故大隅太夫と一緒に興行に來てゐる。所が、一世の權威であつたこの方面の雜誌「歌舞伎」四十號、即ちその時の記事の出てゐる同誌を見ると、そこには玉造の記錄、紹介、禮讃が皆無である。しかも、不思議な事は遙に後輩であるべき故桐竹紋十郎の方が、一世の名人らしく紹介せられてゐる。無論、その紋十郎は名人とは云へる。私は幸にその晩年を再三文樂座で見てゐるが、傳說のやうにかなりな名手であつた印象は確である。が、それにしても天下の權威「歌舞伎」すら、紋十郎を說く分量は、玉造のそれより遙に多いのである。ここにも亦私はある疑

間を禁じ得ない。

一方、私は文樂の沿革を、嘗て本誌に書いた以上正確詳細に知るべくいろいろの方法を講じて調査した。所が、幸に私の一心が通じたのであらうか。今年七十五才になる所の、今生きてゐる人間の中で、文樂の事なら誰よりも一番詳しいと云ふ老翁を大阪市の某郊外に發見した。それは文樂の古い大道具師の棟梁である。これは別に委細を紹介したい。が、この翁は人形遣ひなどに殊の外接近し、毎日一緒に古い文樂で働いてゐた人だ。で、紋十郎の經歴などかなりよく私に教へてくれたのである。

それによると、紋十郎は先づ世渡り上手であつた。才人であつた。それだけに今日謂ふ所の喧傳上手であつた。しかも、修業の方はと云ふと、紋十郎は若い頃何年か文樂を脱走した。そして東海道などに旅興行の人形遣ひをして歩いてゐた。

その中、本家の文樂で段々古老が減る。玉造も年をとつて來た。と云ふので中年から文樂へ歸參した。さう云ふ人だ。到底、玉造とは年期の入れ方が違つてゐる。實力から云ふと玉造の弟子の玉助（後二代目玉造となる。この人の事は次號に書く。）にさへ及ばなかつた。が、右のやうに才人で世渡り上手の器用者と來てゐる。いつの間にか女形を專門にし出して、元來人形の女形が受けるのを幸、見る見る中に賣り出してしまつたのであつた。その消息が何となく分るのが、右の「歌舞伎」四十號である。時の大權威三木氏も、義太夫や人形には芝居のやうに造詣が深くなかつたらしい。で、ついつい紋十郎の奇麗事に目をひかれたのではないかとさへ思へるのだ。もしその時、「歌舞伎」に眞に明があるなら、何をおいても時に七十五才の高齢であつた玉造の藝談、傳記、教養を紹介すべきではなかつたか。これは私の云ひ分が餘りに生意氣であらう。雜誌「歌舞伎」には凡そ見當外れの主張ではあらう。併し、人形遣ひも役者のやうに、一度死去するとその藝術は再び見るよしがない。で、私はせめてこの尊敬すべき古老玉造の何かを紙上に傳へてゐてくれたら、後年の我々を如何に利益啓發したかを思ふ。私はその憾みに堪へられない所でこの生意氣を云ふのである。

それも紋十郎の話は別に丁寧に掲載せられてゐるのだ。紋十郎はまだ若かつた。そして紋十郎があの華かな名聲を得たのは、寧ろこの歌舞伎座興行以後であつただらう。さう云ふ若い人の方を先にして、玉造が後になつてゐるのである。紋十郎は人も知る如く今の大阪の二流の役者、嵐徳三郎の實父である。紋十郎は私の京都の中學生時分、京都のお茶屋の亭主であつた噂を聞いてゐる。由來、人形遣ひは年中ふんどしをしなかつたりする人種である。さういふ一人一業專心主義の間に、彼紋十郎のみは器用に茶屋小屋をして、明るく稍稍に多く京都の祇園町に住んでゐたのである。

但し、「歌舞伎」としてもその選定に理由はある。紋十郎なら役者同樣に話が出來、會つてゐて不快はなかつただらう。が、

玉造ではもしかしたら談話中に、彼も亦ふんどしをしめてゐないのをちらと分らせたりしたか知れない。或は、禮儀常識を辨へずに、話が合へば話つた代り、合はねばさつさと座を立つたか知れない。が、我々から云ふ方面に學び執する者からいふと、あらゆる不快を耐えても、何とか文字の上に彼玉造の片鱗を、永久に傳へておいて頂きたかつたと思はれるのである。

尤も、流石「歌舞伎」である。玉造と先きに書いた弟子の玉助の人形の「壺坂」の型は、故三木竹二氏が委しく書いてゐられる。が、非常に無禮ではあるが、この三木氏にしてこれは恐らく一生の仕事中の唯一の遺憾事ではなかつたか。私は氏の全事業を神のやうに尊敬してゐる。併し、折角玉造（或は玉助）を紹介するのに、「壺阪」とは一寸選定を誤つてはゐまいか。と云ふのは「壺阪」は二の替りだ。最初の興行には「太十」や「寺子屋」が出てゐる。番附がないので分らない。が、普通から考へて故大隅太夫が頭であつただけに、それなら大隅の語り物は多分「寺子屋」か「太十」であつた筈だ。なら玉造は當然松王か光秀かを使つてゐると思ふ。もしこの推測が誤らなければ、さう云ふものを文字に殘してほしかつた。いくら當時の流行物でも、大隅專賣のものでも、「壺阪」は結局價値に乏しい。殊に、人形としては、「壺阪」の義太夫の價値よりも値打がない。私の遺憾とする所である

併し、かうして玉造が紋十郎よりも淡白にしか紹介せられてゐない所に、却つて彼の面目が分るやうな氣がする。本來なら玉造は大隅太夫よりも遙に先輩である。この時の歌舞伎座興行を記すためには同誌の全部を玉造に費してもさう悔ひはなかつた位である。それを技術の半分にも至らぬ紋十郎が、殆ど名人級に遇せられてゐるのである。尤も、考へて見ると玉造は「歌舞伎」などと云ふ雜誌の存在すら、知つてゐなかつたではあらうが。

元より我々は玉造を目前に知る術がない。が、私は常に團平の義太夫愛好の「愛」の深さに打たれるやうに、玉造ではその人形の「愛」の深さに驚かされる。その人形への戀着の深さは、もしかしたら三人遣ひの人形が始まつて以來二百年位の間で、第一位第二位にゐる人かも知れないと思ふ。しかも、蟷螂が斧を振るやうに、どんなにしても傍へは寄りつけぬ所の、世才七で藝才三の片腕にも足りない紋十郎は東京では隨分迎へられてゐるのだ。そして玉造が多少疎になつてゐるのだ。をかしいと思ふ。が、玉造は歴史上に稀な位に人形を愛した人だ。現世の幸不幸は或は彼のために今更らしく說く要がないかも知れない。で、私は子もなく妻もない身一つで、人形への非凡な愛を捧げつくして、高らかに笑つて死んだやうなこの人玉造翁の一生を好ましく思へてならないのである。（次號完結）

近世惡魔主義の文學

——惡漢毒婦の文化史的考察——

本間久雄

近代藝術は、本質的に惡魔的傾向を持つてゐる。

シヤルル・ボオドレエル

惡は詩的表現の對象である。

フランツ・ブレンタノ

一

西洋世紀末の文學を讀んだものは、善よりも惡が、美よりも醜が、興味の對象として描かれてゐることの往々あるに氣づくであらう。わが國近世の文學においても、一種の世紀末とも云ふべき德川後半期の文學においては、やはり善よりも惡を、美よりも醜を興味の對象とした一種の頽廢的な惡魔主義的文學を吾々は見出すであらう。私は、今、これらの惡魔的傾向を持つたわが國近世の一二の文學——主として南北と默阿彌との文學——を取出して、その特質と並びにその時代的意義の一端を考察して見ようと思ふ。

善よりも惡、美よりも醜を興味の對象とする以上、殺伐とか殘忍とか、醜怪猥褻などいふ普通の人の嫌惡するさま／＼の特色を持つた題材が、取扱はれるのは自然の道理である。そしてさういふ題材を主とする以上、わが末期歌舞伎劇の、一つの而も重大な特徴である「殺し場」とか「濡れ場」とかいふものが重んぜられるのも、自然の道理であり、又、これら殺し場濡れ場などに活躍する人物が大抵惡漢毒婦であることも自然の道理である。南北にしても默阿彌にしても、その惡魔的な諸作品は悉く惡漢毒婦を主人公としてゐる。で、これら惡魔主義的作品の考察は、直ちに惡漢毒婦の考察である。さてまづ南北の作品から始めよう。」

私は南北の惡魔的作品の代表としてこゝに三つを取出す。即ち『東海道四谷怪談』（文政二年）『繪本合法衢』（文化八年）『獨道中五十三驛』（文政十年）である。

この三卷には徹底的な惡漢が描かれてゐる。『四谷怪談』の民谷伊右衛門は、色と慾との二道に迷つて隣家の金持の娘と緣組みをするために、貞淑な妻のお岩――産後の病褥にある彼女に、不義の汚名を着せて、あまつさへ彼女を足蹴にして、衣類や蒲團を强奪し、やがて彼女の悶死するのを見て、それを戸板に釘づけにして川に流す。而もこの惡漢伊右衛門は最後まで、いさゝかの悔悟もしない。同じ惡漢の直助が「働きかけた鰻かき、どうで仕舞は身を裂かれ云々」と云つて、惡の報ひのいつかは來ることを嘆いてゐるのを尻目にかけて「首が飛んでも動いて見せるわ」と彼れは叫ぶ。惡に徹底しようとするのである。『繪本合法衢』の近江の大名多賀家の分家である左枝大學は、本家横領を企てゝ、人をしてその重寶を盗み取らせ、密事を知つて、諫言をした自分の乳人を一刀の下に切つてすて、驚く周圍の家來共を見廻しながら「不便を加へるわいらでも、心にたがへばいつ何時、予が手をおろして此通り。心をつけて奉公いたせ」と傲然と叫ぶ。彼れは又、同じくこの密事を知つた家老を騙討ちにし、秘藏の鷹を殺したといふ科で、無心の子供を手討ちにし、更にその子供の親をも嬲り斬りにしようとする。この大學に加擔した三度飛脚の立場の太平次といふ男もその無情で冷酷であることは大學に劣らない。彼れは大學を敵と覗ふ、義理ある主筋の若者を自滅させるために、あらゆる方法を用ゐて、これを苦しめ、或ひはその養母を毒殺し、その妻を誘拐して敵に賣り、更にこの若者に味方する他の若い夫婦を苦しめ、その夫を慘殺し、その妻を强ひて姦した上に慘殺するなどの非道を敢てする。そればかりでない。彼れの奸計を知つた彼れの妻をも「それを知られちや、女房でも助けて置かぬ」と云つて、情け容赦もなく殺して了ふのである。この大學といひ太平次と云ひ、義理とか人情とかいふものには、全然沒交渉な、根本からの惡漢で、『惡』といふものゝ權化である。更にその惡の徹底は『獨道中五十三驛』の藤澤水右衛門において見ることが出來る。

水右衛門は、主家の息女に横戀慕をして艶書を送つたのを同僚の與惣兵衛に見つけられたので、これを騙討にして逐電し、江戸兵衛と名をかへて穢多の群に入り、世を忍ぶ彼れは與惣兵衛を殺すときに受けた腕の創がもとで苦しんでゐる。それを癒すには、辰の年月日のそろつた人間の生き膽を藥に混へて飲まなければならないといふので、八方に手をわけて探してゐる。

そこに運わるく誘拐されて來た一人の孕み女がある。彼女こそは彼れが年月探してゐた辰の年月日のそろつた女であり、而も彼れが殺した與惣兵衛の娘で父の殺されたあと、いろ〳〵な艱難辛苦を嘗めながらいつかは父の妄執を晴さうと念じてゐた女であつた。水右衛門の江戸兵衛は、この女を殺すのである。が、その殺し方がずゐぶん殘酷を極めてゐる。彼れはまづ人交りのならない長吏、穢多の中でも露ほども、情けを知らぬ江戸兵衛が仕事にかゝつて來たのが往生。たとひ泣かうが、喚かうが、あとさき遂き一軒家、牛馬を剝ぐは常ながら、ちつと手馴れぬ女の生き膽、稽古のためにして見る仕事、痛い目堪へて、くたばつてしまへと毒づきながら、この女（女の名はお松）を「皮干し板にかすがいどめにして荒繩で縛り」それを壁に立てかけ、その下で、砥石を出して出刃を磨ぐのである。この情景がすでに並外れて殘忍である上に、作者の南北は、この哀れな女と非道な男との間に次のやうな台辭を取交はさせることによつて、哀れな女を一層哀れなものとし、非道な男を一層非道なものとしてゐるのである。

お松　マア武士の娘にて、人並ならぬ皮剝ぎの、おのれら如きの手にかゝり、畜類同様、此世から、獸にひとしきこの有様。エヽ、おのれはなア。

江戸兵衛　其畜生の皮剝ぎでも、腹からおれも穢多ぢやアねえ。名におふ藤川官太夫、其御子息の此江戸兵衛。惚れた女は重の井姫、送る艶書を見附けた與惣兵衛、それゆゑにこそ邸を追放。其恨みある與惣兵衛ゆゑ、親子が寄つてぶつ放し、其時受ける此金創。われがためにはおれは敵だ。それ聞いたなら、口惜しいか。口惜しくつても板ばツつけ。どうして手出しがなるものか。（ト、あざ笑ふ。お松無念の思ひ入れにて）

お松　そんならとゝさんを殺したのも、おのれが仕業であつたよなア。其敵たるおのれがために、命を落すが口惜しい。手が叶はずば、くひついてなとおのれを。エ、誰ぞ來てくれぬかいのう。（トいろ〳〵身を揉み）エゝ何の因果でこのやうに、憂き目にあふか。口惜しいわい。口惜しいわいのう。

江戸兵衛　道理だ〳〵。成る程われは因果者。それに引きかへ此方は仕合せ。敵をうつべきわれまでも縛りからげて腹を裂き、其生き血が藥りとなる。敵のおれを助ける良藥。みすみすこゝで返り討ち。イヤ返り討ちも多く見たが、皮干し板でのこのざまは、ハテ、珍らしい。

お松　聞けば聞くほど其恨み。くひついても、此繩が、エ、、死にともない〳〵。誰もゐぬかいのう。アレイ〳〵。

江戸兵衛　高吠えするな。其もがくのが此世の別れ。今が皮切

り、辛抱しろ。

彼れは、かやうに悪態をつきながら、お松を殺すのであるが、作の卜書きによると、彼れは「アレイ〳〵」と踠くお松の胸元を出刃を以て突込み、お松が苦しみ身もだへするを、彼れはかまはずに腹を裂く。と、腹の中から赤子が出て泣く。彼れは恟りしながら「何だ、赤子か」と云ひながら門口へ捨てる。此時薄ドロ〳〵にてお松眼を見ひらき、彼れをキッと見る。「何だ。まだ死なねえのか。エ、執念ぶかい」と、死骸の板を蹴飛ばし、部屋の隅から素焼の壺を取り出し、捨てぜりふにて生き膽を引出して壺の中に入れ、やがて懐から用意の薬を出して、血に浸し、顔をしかめながらグッと飲むといふのである。今日の人が見たなら、いかに顔をそむける不氣味な、悽惨な場面であるかは改めて云ふにも及ばないであらう。

二

總じて南北の悪漢には、悔悟とか懺悔とかいふ心持ちは殆んどない。彼等はすべて、肉慾に飢ゑてゐる。黄金に渇えてゐる。そうしてその肉慾の飢ゑや金錢の渇えを充すためには、いかなる残忍なことをも敢てする。いかなる非道なことをも敢てする。強ひて姦することや、人を殺めることなどは家常茶飯事である。そればかりではない。さういふ残忍非道なことをすることにむしろ一種の快樂をさへ感じてゐる。全く、彼等は悪魔の權化である。

さてそれならば、彼等の時代との關係如何？　これがおのづからにおこる興味ある問題である。

今更テーヌの口吻を借りる迄もなく、如何なる文學も、その時代を離れて創造されるものではない。文學は、文學の名に値するものである限り、必ずその時代の傾向や特質や趣味や好尚やらを反映する。時代の代辯となつて時代そのものを最も雄辯に語る。それならば、南北の作品はどういふ意味でその時代を語つてゐるか。どれほどの程度にその時代を反映してゐるか。

吾々は、南北を讀んで、直ちにその時代をその作中に描かれた世界のやうな血醒くさい、猥褻なものと想像してよいであらうか。その當時の人々には『四谷怪談』の主人公や『獨道中五十三驛』の主人公の如きものがザラにあると想像してよいであらうか。もし、それらの想像が正しいとするならば、南北の時代は實に醜怪なグロテスクな時代である。血醒くさい時代である。果してさうであらうか。

否々、南北の時代は決してさういふ時代ではない。世を擧げて泰平を謳歌してゐた時代である。人々は京傳の黄表紙や洒落

本や三馬、一九の滑稽本の諧謔に和して、自ら通人を氣取つてゐた時代である。遊里と劇場とを憧憬の對象としてゐた優長な時代である。少くも表面は、上に擧げたやうな殺伐猥雜なおもかげをとゞめない時代である。それならば、さういふ時代から何故に南北のやうな作が生れたか。

この問題の解決には、再び文學と時代との關係に考へ及ばなければならない。文學は前にも述べたやうに、明かに時代そのものゝ反映ではあるが、この反映といふことにも、おのづから二つあつて、現にある通りの世相を、そのまゝに、寫實的に反映するのと、その時代の一般民衆が、まだはつきりと意識しない夢や憧れやまぼろしを、豫感的に反映するのとがある。凡庸な作家の多くは、常に前者の立場を取り、卓越した作家の多くは常に後者の立場を取る。そして後者の立場に立つた作品は、又、逆に、その時代の一般民衆に作用して、彼等をしてその夢と憧れとまぼろしの實現を强ひるのである。南北は蓋し、後者に屬する作家である。それならば南北の時代人は、何故に、上に述べたやうな殘酷で猥褻な夢とまぼろしを追うてゐたか。

それは外でもない。その時代が餘りに平であつたからである。無爲であつたからである。南北の時代人――町人階級は、たとひ富の力を持つてゐても、それを正當に使ふことが出來なかつた。彼等は經濟上や政治上の發展を一切禁じられてゐた。その結果彼等には活力がなくなつた。生活意志がなくなつた。しかしながら、とにもかくにも生きなければならない。そして生きるためには何かしらの刺戟が必要となる。生活意志が頽廢すればするほど、活力が消耗すればするほど、彼等にはより强烈な刺戟が必要となる。この要求から創造された世界が、とりも直さず南北に見る血腥ぐさい、血みどろな、そして猥雜な世界である。

さてそれならば、更に一歩をすゝめて、何故にその時代の要求した刺戟が南北をしてさういふ殘酷猥雜な世界を創造させたか。

三

この問題の解決にはおのづから二つの方面がある。一つは時代そのものゝ立場と他の一つは南北の人そのものゝ立場とである。南北の時代は、前にも一言したやうに泰平無事の時代であつた。しかしその泰平無事は、あたかも嵐の前の靜けさのやうなもので、やがて間もなくやつて來る颶風を孕んでゐる泰平無事であつた。事實そこには德川政府の崩壞に先だつおのづからなる潛在的な動亂的氣運が澎湃としてゐたのであつた。從つ

て又、そこには、常に動亂時代そのものに作つて活躍する人間のさま〲な殘忍性や殘虐性やが、さま〲の夢や幻や憧れのかたちで漂つてゐたに相違ない。そして、時代のこの幻や夢や憧れやが、おのづから南北の作にその代辯を見出したのではなかつたか。これが一つの立場からの見方である。

今一つは南北その人が、いち早くそれに感應するだけの敏感性を持つてゐた特殊な性格の所有者であつたといふことである。

南北は、本來的には不氣味な陰凄な性格の人であつたに相違ない。尤も彼れとても化政度の遊戯精神の横溢してゐた時代の兒であつたから、他の狂言作者や黄表紙、洒落本などの戯作者の多くと同じやうに、人生を茶化した遊戯的な一面をも幷せ持つて居つたには相違ない。しかしながら、西澤一鳳の『傳奇作書』に南北を評して「この人常に棺桶を狂言につかふ事を好み、棺を用ひたる狂言を見れば、作者は南北なり」と云つてゐる通り、南北は棺桶の愛好者であつた。彼れの作品の世界も所詮は棺桶の象徴する不氣味な物すごい世界であつた。前に述べたやうな徹底的な惡漢を中心として、そこに、社會の下積となつた幕末民衆の、暗鬱な、じめ〲した生活が彼れの作品の世界であつた。そこには、いつも乞食、雲助、仲間、浪人物、親に分れ子に分れた頼りのない地獄、夜鷹といふやうなものが蠢いてゐた。場面にも、荒れ果てた浪宅、裏長屋、葬場、古寺などいふものが多かつた。かういふ不氣味な世界は、棺桶の愛好者である彼れと不可離の關係にあると想像するのは誤つてゐるであらうか。

序でながら、棺桶といへば、南北が、最後まで、これを愛好したことについての面白い挿話がある。それは南北が、自分が死んで自分の葬式の時、會葬者へ配るために、兼ねて正本仕立にこしらへ、摺物として置いた彼れの辭世で、大體かうである。

正面の佛前には常燈香花を供へ、旛（はた）天蓋を飾り、能き所に棺を据え置き、施主の翟並よく並び、半鐘の知らせに住僧所化がた華やかに出立ち、葬の鳴物で讀經が始まる。棺の中は南北である。

棺の中の南北は、讀經の聲を耳にし、妙なる法華經の功力によつて娑婆の苦患をまぬがれ、その喜びの餘り會葬者に向つて棺の中から禮を述べて「南北、略儀ながらせまうはござりますれど、棺の内より頭をうなだれ、手足を縮め御禮申上奉り升る。先は私存生の間、永々御贔屓になし下されましたる段、飛び去りましたる心魂にてつし、いか計か有がたい冷あせに存奉

り升る。」死にたくはないが、定業もだしがたく、是非なく彼地へおもむくので「誠に是が此世のお名殘、いまはの際の死おくれ萬歳太夫才若兼まして亡者の私舞納升る。」といふ。

驚いたのは施主の人々で「さては佛に魔がさしたか但しは、よみがへりしか」と顏見合せてゐる。と、住僧棺のそばに立より、合掌して、有がたいお經をよみ「松明をもつてポン／＼と打てば棺碎けて内より南北額にごましほをあて、經帷子にて桶ぞこをポン／＼とうち鳴らし」ながら踊り出て萬歳と才藏の踊を面白をかしく舞ひ納める。此時、家主、羽織袴で、施主大勢引つれ會葬者に挨拶をする。そして「葬禮打だし」といふことになる。

これは前に擧げた『傳奇作書』所載のものであるが、いかにも人を愚弄した可笑味の中に、棺桶そのものに必然的に附隨する一脈の不氣味さが、そこに感ぜられるではないか。そして、同時にかういふ不氣味さを、どこか、その性格の奧に持つてゐる人であつたからこそ、南北は、いち早く、やがて崩壞する時代の中に漂ふ不氣味なもろ／＼のすがたを感知したといふことも想像し得るではないか。

南北の棺桶の愛好は、はからずも、私をして近代惡魔派の鼻祖ボオドレエルを思ひおこさせる。彼れは普通の人の厭ひ憎む死そのものを讃美し、やがて自分が死んで土に埋もれた自分の亡骸が次第に腐敗して、そこに蛆蟲の徊ひまはることを想像し、その蛆蟲に呼びかけ「おゝ蛆蟲よ。眼なく耳なき暗黑の友、君がために腐敗の子、放蕩の哲學者、喜べる無賴の死人は來る」と云つて蛆蟲に親愛の意を表してゐる。たとひ愛好の對象が異なるにしても、南北の棺桶の愛好とどこかに相通ずるものがあるではないか。尤もボオドレエルは、自意識の强烈な近代人として生れたために、所謂近代的煩悶に生涯を蝕まれたに比べて、南北はわが化政度の遊戲的雰圍氣の中に人となつて、泰平の逸民たる戲作者としての生涯を送つたといふちがひはある。しかしながら、此世に怪奇な惡魔的藝術を創造したといふことは同じである。文豪ギクトル・ユウゴオは、ボオドレエルに書を與へて「君は、藝術の天にたぐひなき凄慘の光を與へ、未だ曾てなき一つの戰慄をこの地上に創成した」と云つたが、その凄愴と戰慄の性質と程度は別問題として、ユウゴオのこの言葉は移して以て直ちに、わが南北にも當てはめ得るであらう。南北は、實にわが近世文學上、惡魔派の第一人であつた。

四

轉じて默阿彌の惡漢と毒婦とを見よう。

餘談ではあるが南北には、特に毒婦として取出すべきものはない。わづかに『繪本合法衢』の中のうんざりお松とか『杜若艶色紫』（文化十二年）の土手のお六など二三を數へ得るに過ぎず、而も、默阿彌の毒婦物と比べるとその毒々しさにおいて、はるかに稀薄である。その代り南北の惡漢は、默阿彌のそれに比べて、その惡黨振りが遙かに强烈である。が、それはとにかく、默阿彌には惡漢と毒婦とが、いつもつきもので、一方を特に引離して云ふことの出來ないやうになつてゐるから、こゝでは惡漢毒婦を引きくるめて考へることにする。

默阿彌のものには、惡漢毒婦物が異常に多い。今、その重なるものをアト・ランドムに擧げて見たゞけでも、『夢結蝶鳥追』（安政三年）の雪駄直し長五郎と熊坂お長、『鼠小紋東新形』（安政四年）の鼠小僧次郎吉、『敵討噂古市』（安政四年）の久七とお瀧、『網模様燈籠菊桐』（同上）の小猿七之介、『小袖曾我薊色縫』（安政六年）の十六夜と淸心『三人吉三廓初買』（萬延元年）の三人吉三、『龍三升高根雲霧』（文久元年）の因果小僧六之助、『青砥稿花紅彩畫』（文久二年）の辨天小僧等五人男、『勸善懲惡覗機關』（文久三年）の村井長庵、『處女評判善惡鏡』（慶應元年）の五人女、雲切お六、すばしりお熊、お鼠お吉、おさらばお傳、山猫おさん、『船打込橋間白浪』（慶應二年）の鑄掛松、『善惡兩面兒手柏』（慶應三年）の和尚次郎と妲妃のお百、『綴合お傳假名書』（明治十一年）の高橋お傳、『木間星箱根鹿笛』（明治十三年）の岩淵九郎兵衛と山猫おきつ、『島鵆月白浪』（明治十四年）の明石の島藏と松嶋千太、『四千兩小判梅葉』（明治十八年）の富藏と藤十郎、『戀闇鵜飼燎』（明治十九年）の藝者小松などがある。卽ち默阿彌は安政から明治にかけてこれらの惡漢、毒婦を書いてゐるのである。

默阿彌のこれらの作品は、悉くとは云へないが、多くは泥棒を主人公としてゐるので、これらは又、常に白浪物と呼ばれる。序でながら白浪とは、もと後漢靈帝の時に張角といふものが白波谷にて盜みをした事から起つて泥棒の別名となつたものである。そして、又これらの白浪物は、今日の吾々の想像以上にその時代に歡迎されたらしく實際、文久二年の『辨天小僧』は彼れの出世作であつた。出世作が白浪物であり、而も上に擧げたやうな多くの白浪物を書いて、何れも彼れの傑作に數へられるのを見ると、彼れが又、白浪作者と呼ばれるのも强ち無理ではない。

南北は文政十二年に歿してゐる。默阿彌はその時十四歲で、彼れが其後小團次と結托して人氣に投ずるやうな白浪物を書き出したのは三十六七歲頃からであつたから、南北の時代と默阿彌との時代には約二三十年のへだたりがある。この短い間に時

勢は急激に變つた。德川政府は、たゞ一筋に崩壞へとその途をいそいだ。泰平の夢は醒めた。南北の作に實感的に描かれたやうな醜怪な、グロテスクな世界の雰圍氣が刻々に濃厚となつた。この趨勢に順應しておのづからに生れたのが即ち白浪物である。

以下、白浪物がその當時歡迎された理由を逐條列記式に書いて見よう。

五

(イ) 極端な黄金崇拜　默阿彌白浪物の熱心な讀者は「人のものは我がもの」といふ台辭(せりふ)を所在に見出すであらう。泥棒や盗賊が他人の金を奪ふとき、いつも、自ら是認して呼ぶ台辭である。この思想は、金錢を極度に、變態的に崇拜した當時の時代を、明かに物語つてゐる。いふ迄もなく、金錢を崇拜する思想や傾向は、我國資本主義の濫觴と云はれる元祿期に萠してゐる。西鶴が、その『日本永代藏』で「人の家に、ありたきものは梅松櫻、それよりも金銀米錢ぞかし」と云つたり『世間胸算用』の中で、ある一人の江戸の男が、京都の顔見せ芝居で、自分ひとり見るそのために、棧敷を二間買ひ占めて、大盡遊びをしたのを賞めたゝへて「この男大名の子にもあらず、たゞ金銀にてかくなれるなれば、何につけても、金まうけして、心まかせの慰みすべし」と云つたりしてゐるのは、眞正面から金錢を讃美したのであるが、この金錢崇拜は、時代と共にその度を増したが、しかし商人が商人共、金錢崇拜の思想を實際生活において實現することは出來ない。資本主義の原則として富めるものが益々富み、貧しきものは益々貧しくなる。而も元祿期以前には、德川政府草創の際であつたので、都市經營やさま〴〵の土木事業などで、一獲千金を贏ち得ることが出來たから、西鶴の「何につけても金まうけして」といふ手段を擇ばずに金をまうけるにしても、必ずしも泥棒をするには及ばなかつたであらう。が、化政度以後になると、前にも一言したやうに經濟的發展が全然禁じられてゐたから、一獲千金などいふことは藥にしたくもあり得ない。正當なことをしては、到底金銀は獲られない。彼等はいよ〳〵手段を擇ばずといふ態度に出でなければならなくなつた。その結果生じたのが、即ちこの「人のものは我がもの」の思想である。尤も私は幕末民衆が、この思想を必ずしも道德的に是認してゐたといふのではない。しかしながら、心の奥の奥では、――少くも當時のプロレタリア階級においては、これに一種の同感を寄せてゐたことは察せられる。

(ロ) 階級意識　家康が嚴格な階級政策を採つて以來、武士

對町人の階級對立が殊に鮮かになり、武士は幕府の權力を笠に着て、すべての點で町人を虐げたが、金錢の貸借關係も亦、それに漏れなかつた。蜀山人の『假名世說』に町人を誡めて「二本さしたる人と見れば、隨分いんぎんに敬いて、假りにも無禮なすべからず。町人の無禮、德のゆくこと一つもなし。にくいやつとて切り倒されずば、あまい奴とて借り倒さるゝなるべし。いづれにしても怪我のもとなり」と云つてゐるが、いかにも金錢を中心としての武士對町人の關係を云ひ得てゐる。「切取强盜武士の習ひ」といふ觀念は、やはり形をかへてこゝにも現はれてゐると見てよい。そしてこの關係は一面に、武士に對する町人の階級意識を喚起することゝなり、舞台の上では、武士階級を、惡しざまに取扱ふことによつて、町人のこの階級意識に迎合する傾向を生んだ。少し時代は前になるが、例の『助六由縁江戶櫻』(天明五年) など最もそのよい例である。江戶ツ兒の所謂「强きを碎き、弱きを扶ける」といふ意識である。

そしてこの武士對町人の階級意識は、一轉して町人同志の間にも喚起されることゝなつた。即ち富者に對する貧者の階級意識である。町人が權力を持つてゐる武士に反抗すると共に一般の同感を贏ち得たと同じやうに、金力を必要以上に持つてゐる富者階級に對する反感や反抗やは、又、一般の人の同感を贏ち得たに相違ない。こゝに白浪物の特に迎へられた一つの原因がある。

(八) 刹那的享樂主義　これは頽廢的な時代には洋の東西を問はず、いつもつきものである。ロオマの衰頽期が一世を驅つて「酒と女」の安價な刹那主義に赴かせたやうに、德川の衰頽期も亦、世を擧げて同じ風潮に赴かせた。元祿時代にも、ずゐぶん享樂的傾向が著しかつたが、この時代には、あり餘る生活意志が、その捌け口を享樂の領域に見出したのであつたが、化政度はこれと異つて、前にも一言したやうに、生活意志が稀薄となつてゐたので、たとひ、刹那的にでも、刺戟を求めて、生活意志を燃え立たせなければならないといふ傾向にあつたのである。こゝに同じ生の享樂でも、化政度のそれが安價で、末梢神經的である所以がある。遊女十六夜に迷ひ、女犯の罪に問はれようとして、稻瀨川で心中を企てた鎌倉極樂寺の所化淸心は、もと行德生れで、水泳の心得があるため死に切れず、百本杭につかまつてゐる折しも、梅見戾りの遊山船のにぎやかなぞめき歌をきいて、ふつと心がかはる。

「人間僅か五十年、首尾よくいつて十年か二十年がせいきり、襤褸を纏ふ身の上でも、金さへあれば出來るたのしみ、同じことならあのやうに、騷いで暮すが人の德。」

かやうに心機一轉した彼れは「これから夜盜家尻切、人の物

は我物に榮耀榮華をするのが徳、こいつあめつたに、死なれねわい」と大悟して鬼薊清吉といふ盗賊となるのである。（『小袖曾我薊色縫』）

又、兩國橋の袂で休みながら、下の涼みの屋根船の中の田舍大盡の贅をつくした遊びぶりを見た鑄掛屋の松五郎は、「あれも一生、これも一生」と詰らぬ思入をして「こいつあ宗旨を替にやアならねえ」と決心して鑄掛の荷を川に打込むのである。（『船打込橋間白浪』）

默阿彌白浪物の動機は多くはかういふ安價な刹那的享樂主義に置かれてゐる。同時にこれがその時代に歡迎されたのが、いかに自然であるかを推すべきである。

（二）技巧的な筋　頽廢文化の特徴である生の倦怠といふことから、それを癒すために、前にも云つた通り、すべてが遊戲的になり、技巧的になり、同時にすべて刺戟の强烈であることを欲するのは自然のことである。從つて、白浪物につき纏ふ筋の變化、即ち殺人とか强盗とか强姦などいふ血腥さい場面、所謂「殺し場」「濡れ場」の殘忍猥褻を中心に一篇の筋が巧みに絡み合ひ縺れ合つた探偵的なところ又は技巧的なところが、特に當時に歡迎されたものであることが想像される。辨天小僧が女装して騙りをしたり、お孃吉三がやはり女装をして美人局をしたりしたのも、如上の要求に應じようとする作者の賢明な慣用手段であつたであらう。

白浪物が迎へられた理由は、他にいくらもあるであらうが、少くも上に擧げた三四點はそのことについて見落してならないものである。

六

さて、次におこる問題は、默阿彌は、作者としての立場から、白浪物を如何やうに取扱つたかといふことである。

概括していふと、默阿彌の白浪物は、白浪といふ特殊の題材を捉へてゐながら南北の惡漢物よりはるかに深刻味が足りない。白浪物は、上にも一言したやうに南北よりも一層切迫した時代的雰圍氣から當然生れたものであるから、單に時代的關係から云ふならば、南北を更に一層徹底させたものであつても、よいわけであるが、事實はさうではない。これは一つは作者の默阿彌の題材に對する態度によるのであり、更に彼れをしてその態度を取らしめた彼れの人物そのものに依るのである。

默阿彌は常識の圓滿に發達した、穩健な一種の君子人であつた。彼れが明治廿六年一月亡くなつて間もなく、その當時の雜誌「早稻田文學」に揭げられた『默阿彌傳』に、彼れを評して

「彼れや其の爲人謹嚴篤實なりき。夫れ唯謹嚴篤實なりき。是を以て醜際蛆集せる梨園の中に立ちて、能く其の溺に穢されず。超然として常に其の獨を謹み、所謂人情を重んじ所謂義理を尊び云々」と云ひ、彼れの特性として、(一)勤愼にして用心深き事、(二)萬事に嚴密にして規律を尊びし事、(三)利慾に心を動かさざりし事、(四)義務、世間への義理を重んぜし事の四つを舉げてゐる。(河竹繁俊氏著『河竹默阿彌』參照)彼れは、生涯棺桶を愛し、死んでからも棺桶から飛び出すことを空想して人をも世をも不氣味にも茶化した南北とは全く別種の人間であつた。從つて彼れの作品は、南北と似たやうに猥雜で殘酷な題材を捉へても必ずそれを彼れの「人間」の坩堝の中に溶かし込んで描き出した。南北は猥雜を猥雜として、殘酷を殘酷として、——といふよりは、むしろそれらに特殊の興味を認めて描いたのであるが、默阿彌はそれらを、一度、彼れの謹嚴溫厚な人格の光りに包んで、道德化して描いた。彼れの作品が南北に比して、より深刻でなく、より惡魔的でないのはこのためである。

默阿彌が作家としての歩みを踏み出した時代は、前にも一言したやうに、盜賊そのものに興味を寄せ、同情を寄せた時代であつた。默阿彌も亦その時代人の一人としてこれに興味と同情とを寄せたであらう。しかしながら彼れはそれを眞正面から道德的に是認するには、餘りに穩健であつた。彼れはそこで、辛うじて、道德的に——常識的立場から見て盜賊を是認し得るやうに、さまぐの條件を附してつくり上げた。今、それを又又、逐條列記式に書きとめて見よう。

(イ)義賊　泥棒は惡いにはちがひない。しかしただの泥棒ではない。俺れは義賊だ。かういふ意味のことを、作者は常に云はせてゐる。白浪五人男の張本日本駄右衞門の言葉に、

駿遠三から美濃尾張、江州きつて子供に迄その名を知られた義賊の張本、天に替つて窮民を救ふといふも、おこがましいが、ちつと違つた盜人で、小前の者の家へ入らず、千と二千有金のあるを見込んで盜みとり、箱を碎いて包みから、難義なものに施す故云々」(辨天小僧)

とあるが、默阿彌は、かやうな義賊によることによつて辛うじて盜賊そのものを是認してゐる。又、美化してもゐる。『鼠小紋東君新形』の主人公の鼠小僧が、「盜賊ながら非道をなさず、仁義を守る云々」と云つてゐるのなども同じ筆法である。

(ロ)後悔　義賊でない普通の盜賊には最後に後悔させてゐる。仲間上りの野州無宿の富藏が、浪人の藤岡藤十郎とぐるになつて幕府の御金藏を破り四千兩を盜み出して、加賀に逃れ、囚へられて唐丸籠で送られる道すがら、熊谷驛で、妻子に逢つて最後の別れを告げるとき、彼れは次のやうに後悔して、妻子に語つてゐる。

「盗んだ金で栄耀をしても、ほんのことだが一晩でも、枕を高く寝られねえ。其心配を考へりやあ、貧乏しても正直の、道を守つて樂々と、寝られる方がよかつたと、思つたところが後の祭り云々」（『四千兩小判梅葉』）

又、金を奪ふために妹の亭主を騙討にし「現在妹の亭主故、云はゞ義理ある弟だが、金ときいては見逃されず、手荒い療治の血まぶれ仕事、酷い殺しも金故だ。恨みがあるなら金に云へ」と惡態をつき、而もその犯行を何の罪もない他人になすりつけ、後囚へられ、拷問にかけられても實を吐かず、「責めらば責めろ、白狀して上の仕置を受けて死ぬも、責め殺されて死ぬのも五分だ。一分試しに切り刻まれても、云ふめえと思つたら、なに、白狀をするものか」といつてゐる默阿彌の惡漢の中で、最も殘忍無殘で、强情我慢な村井長庵も、紙屑拾ひの久八といふ男が、怪我で主人を殺したのを、主殺しと訴へ出た忠義の物語を、襖越にきいて、急に「先非を悔いて、惡事の段々を」白狀して了ふのである。最後まで惡に徹する南北の惡漢は、默阿彌には到底見られない。

默阿彌の毒婦も亦、多くは最後に悔悟し懺悔する。高橋お傳と云へば、明治初年の實在の人物で、明治十二年斬罪に處せられた毒婦で、假名垣魯文の『高橋阿傳夜叉譚』岡本勘造の『東京奇聞』にも亦彼女が描いてある。彼女は、多淫で、多情で、殘忍で、開盗で、始めは夫の浪之助を、彼れが癩病になつたので、いやになつて絞殺し、後には後藤吉藏といふ商人を金を取るために欺いて、ある旅宿につれ込み、短刀を以て彼れの咽喉を掻くといふ二度も殺人罪を犯してゐる。彼女の關係した男は無數であり、而も同時に數人と關係してゐる。彼女の召捕れたのは吉藏殺しからであるが、彼女はそれを實際にありもしない姉の復讐のためなど云つて、さまざまの狂言を虛構して裁判官を手古摺らせ、三年の餘も檻倉にあつて容易に實をはかない。この毒婦を取扱つた『綴合於傳假名書』で、默阿彌は、彼女が、愈々處刑されるときに、たづねて行つて養ひ親に向つてやはり次のやうな悔悟の言葉を云はせてゐる。

「今更返らぬ事ながら、惡いことは出來ませぬもの、金がほしさに科もない吉藏殿を殺したも、露見をすれば斬罪の御所刑受けねばならぬ故、姉の敵と僞つて助かる心で居りましたも、おひおひ上へ證據が上り、我が惡計と御見當つき、今日證據裁判で斬罪の刑受けたるは、是迄ながながお上を僞り、御苦勞かけしと、二つには、三年此方多くの人に難儀をかけしその報ひで、天の罪を蒙るお傳。こりやかうなくつてはなりませぬ。思へば人の邪正を糺すお上を欺き逃れようと思ひましたは、女の淺墓。すまぬことを致しました。それはかりかは大恩ある親が世間へ顏向けの成らぬやうに致せし不孝。

さぞや惜う御座いませうが、これも前世の因縁と、どうぞ赦して下さりませ。」

次は、この後悔や懺悔と連關したことであるが、因果應報の觀念である。

七

（八）因果應報　これは我國には昔しからあつた小乘佛教の因果觀で、必ずしも默阿彌の特色ではない。近世文學だけを見ても近松を始め、京傳にも馬琴にも色濃く出てゐる。たゞ、白浪物にこれを應用したところに、默阿彌の特色がある。默阿彌の惡漢の多くは、後には因果の理法を悟る。罪もない手代を殺して七十兩の金を奪つた網打の七五郎は、その手代の死靈のたたりで三年越足腰きかぬ長煩ひになやまされ、年はもゆかぬその娘は一眼がつぶれ、彼れは今更のやうに親の因果の子に報いることの恐ろしさを感じながら悶え死をし、彼れの子――「小猿小猿と渾名に呼ばれた七之助といふ巾着切り」も惡事のかずかずをして、上方へ逃げようとして、ある村で一夜の宿を求めたある庵室のあるじの僧が、偶然にも自分の親父七五郎の殺した手代の父であつたので、これも亦めぐる因果の恐ろしさに、懺悔をしてあるじの僧の弟子となる（『網模様燈籠菊桐』）といふやうなのがその一例である。

『島衞月白浪』などもその最もよい例である。明石島藏といふ若い盗賊は、ある年の四月廿日の夜、東京牛込の神樂坂のある質屋へ强盗に押入り、主人の左足の向脛へ切りつけ、千圓の金を奪つた。と島藏の故郷の明石村の彼の家では、悴の岩松といふ子供は、同じ夜の同じ刻限に、棚から落ちた出刃庖丁で左の足の向脛に大怪我をした。島藏はこの偶然な事實から、「親の因果が子に報ふと、世の譬にも云ふけれど、から覿面に報ふものかと」と云ふことを始めて知つた。そして「およそ盗をしたものは、人間一生五十年の坂を越した者はなく、先づ二十五の曉迄に天の罰を蒙つて長く生きてゐられねえのは、みんな惡事をした報い、こいつあ、心を改めにやならねえと、氣がついて、ふすつぱりとやめて了つた」のであつた。

默阿彌は、又、この因果應報の道理を、時としては、ずゐぶん殘酷な仕方で、作中の人物に具現させてゐる。『戀闇鵜飼燎』の毒婦小松の場合の如きその例である。

小松はまだ肩上のある時から情夫をつくつて故郷を逃げ、路用につまつて情夫に分れ、それからは、「曖昧茶屋から旅藝者、宿場女郎の出かせぎも、して來た果のあばずれ藝者」であつた。「それからそれと旅を遊んで歩いても、錢に困れば旅人の、女にかゝつてのろさうな、相手を見立てゝ連になり、枕さがしや護摩の灰、小盗みゆすり打掠りと、さんざ惡さを仕拔いて來

た」したゝか者であつた。彼女は穂積文三といふ米屋の若主人を騙して金を絞り取り、文三とは狂言心中をして、自分ひとり逃れて甲州のあるところで、もとの情夫と暮してゐるところへ、零落した文三の妻が盲目となり子供をつれて乞食同様になつて來て偶然そこに落ち合ひ、眼の前にゐる女が夫を騙した小松とも知らないで、いろ〳〵の身の上話をする。その中に、夫をおもふ眞情やら、夫を騙した小松を少しも怨んでゐない純情やらが見えるのに、吾れと吾が身をかへり見て慚愧し、ひそかに山傳ひにその地を逃れる途で、笹子峠の古辻堂で狼の群の餌食になるのであるが、この狼群に殺されるところは全く殘酷を極めてゐる。まづ小松が辻堂の縁に立つてゐる。そこへ狼が三疋出て來て彼女を取卷く。驚きながら彼女は辻堂の中へかくれる。狼群縁に上り戸や羽目の破れを噛割り中に入る。と、あつと叫びながら、彼女は、手足へ糊紅をつけ、血みどろになつて下手の崩れかゝつた狐格子をばら〳〵に毀し、驅け出る。狼群それを追ひ、暫く狼に喰はれる立廻りがあつて、彼女は再び辻堂の中に逃げて這入る。つゞいて追ひかけて這入つた狼群は、今度は、上手の羽目をばら〳〵と毀し、彼女の手を銜へながら彼女を引づつて出て來る。そこで又、暫く立廻りがあつて、彼女は倒れながら「かゝる非業な死をなすも、十四の時から家出なし、親に不孝をした罰と、多くの人を欺した報、自業自得で仕方がねえ。早く己を殺して呉れ」と、云ふ聲さへも四苦八苦で、やがてよろ〳〵と立上り辻堂の縁へどうとかける。狼の一疋は、後ろから彼女の襟に噛みつき、二疋は左右の足へ噛みつく。

因果の理を悟つて後悔した女をさへかやうに殘忍に殺さずに措かないところに、默阿彌の因果觀的道義觀念のいかに强いかを見るべきである。

(二)　性善の思想　　これも必ずしも默阿彌特有の思想ではなく、前の因果觀とおなじく京傳にも馬琴にもひとしく說はれるものである。がやはり、惡漢毒婦を性善の思想に結びつけて取扱つたところに默阿彌の特色がある。默阿彌においては、その惡漢毒婦の多くは、悔悟をすると同時に、性の善なることを悟つてゐる。否、性が善であるから後悔し、懺悔をするのである。上に擧げた『嶋衙』の明石の嶋藏も「性は善なる人の身に、惡いことだと心づき、盜みを止める者が出來たら、いさゝか上への御奉心」などと云つてゐる。又、强惡無類の村井長庵が悔悟しそれをきいて、それを裁判した大館左馬之介(大岡越前守)も、つく〴〵と「性は善なるものぢやなあ」と感歎してゐる。つまり上の因果觀によつて、いかなる惡漢毒婦も眞人間に立かへることを暗示し、この性善の思想によつて、それが當然だといふことを證明しようとしたものと見られる。

八

以上述べたところで明かである通り、南北と默阿彌とでは、同じく惡人を描いてもその味ひは非常に異つてゐる。南北が惡玉そのものに徹底してゐるに比べて、默阿彌は惡玉をして、たとひ一時はいかほどその活躍を恣まゝにせしめても、最後は多くは、善玉に屈從させてゐる。南北が虛無的立場から人生を觀るに比べて、默阿彌は勸懲的立場から人生を觀てゐる。南北が、人物の取扱ひにおいて沒人情的で、冷酷であるに比べて、默阿彌は、常に餘りに感傷的であるほど人情的である。これは前にも一言したやうに明かに南北と默阿彌との人格の相違である。が、又、一面には時代の相違といふことをも、この場合、勘定に入れなければならない。

默阿彌の働いた時代は、嘉永、安政、萬延、文久から明治二十年前後にかけての約五十年である。嘉永以後明治維新まで、即ち默阿彌が『えんま小兵衛』を書いて次第に狂言作者として認められて來た時代は、南北の時代を更に追しすゝめた暗爵な、頹廢的時代ではあつたが、明治維新を境として世の中は所謂開明の世となつたから、惡人を惡人として、最後まで徹底させるといふことは、いよ〳〵時代の傾向が許さなくなつて來る。默阿彌は、元來が個性的にもすでに、惡玉を善玉に屈從させてゐる人である上に、時代も亦、如上の傾向になつたので、彼れは前に述べた作家としての態度を、愈々益々鮮かにすることとなつたのであるかも知れぬ。尤も、時代そのものは、——少くも幕末から明治十年頃までにかけての混沌期においては、一般民衆は、少くも感情の上では、默阿彌の露骨な道德觀を或ひは喜ばなかつたかも知れない。しかしながら、その道德觀があるために、——最後はとにもかくにも善玉が勝利を得るといふ意識があるために彼等は安心して一方に惡玉の跳梁、惡漢毒婦の活躍を舞臺の上で見ることが出來たのかも知れない。そして明治も十年を過ぎて世がいよ〳〵開明に赴くに從つては、一層さうであつたであらうと推せられる。この意味で默阿彌も亦、最もよく、最も正しく時代と共に推し移つた作家であると云ひ得る。

しかしながら默阿彌にも、又、上に述べたやうな、やがては善玉に征服される惡玉の權化としての惡漢毒婦以外に、惡玉そのものに始終し徹底した惡漢毒婦——殊に毒婦の除外例の二三あることを吾々は忘れてはならない。『夢結蝶鳥追』の態坂お長、『敵討噂古市』のお瀧、『善惡兩面兒手柏』の妲妃のお百がそれである。そしてこの三つは共に明治以前の作であつて、南北の惡漢を女にしたものゝやうな味ひをもたらすものである點で、默阿彌と時代との關係を考へる上にも見落すべからざるものであらう。

彼等三人は、何れも惡魔的女性の典型である。巾着切の、小手塚牛次の女房で、猿坂お長と渾名を取つたお長は、雪駄直しの長五郎といふ惡漢と通じて亭主に毒を盛る。「さては亭主に毒藥を」と怒りながら苦しみ悶える夫を尻目にかけて彼女はいかにも平氣で、憎々しげに云ふ。

「何の亭主も氣が強い。一人で居ては世間の聞え、三尺棚でも名前主、ほんの大家のぼくよけと、まさかの時は身の科を冠せるつもりで女房になつたが、飽きが來たゆゑ一思ひ鼠取りで暇をやる。是まで盜みを働いて、尻尾の出ぬうち死ぬのが仕合せ、手足をちゞめて往生しなよ。」

彼女には、お傳や小松やその他の毒婦に見るやうな悔恨は毫末もない。後に囚へられた場合にも、「わつちが惡事を言ひ立てたら、紙幟や捨札が何本あつても書き切れめえ。果ては野末の露霜と消えるも高き木の空で、遠音に響く鄰の騒ぎ、近く聞ゆる燒場の念佛、戀と無情を右左、縦耳に聞いて、往生する氣さ」と、たゞ自暴自棄的に云ふに過ぎない。

お瀧にしても、正直清兵衛といふ百姓から五十兩の大金を盜み取り、そのために乞食に落ぶれた清兵衛を、發覺を恐れて、亭主の久七といふ惡漢をそゝのかし、自分も手傳つて嬲殺にする。後には清兵衛の娘に、仇を討たれるのだが、彼女も亦死ぬまで何等悔悟するところがないのである。更に、このことの最も徹底したのは妲妃のお百である。

お百はもと大阪の廻船問屋桑名屋徳兵衛の召使ひであつたが、いつか徳兵衛と通じ、その妻に不義の惡名を負はせて、徳兵衛に責め殺させる。そのたゝりで土藏から怪火が出て徳兵衛は家財を悉く失ひ、お百と共に江戸に出て、小間物屋重兵衛の世話になり、徳兵衛が金策のために甲州に行つた留守に、お百は重兵衛と通じ、洲崎から小さんと名乘つて藝者に出てゐるうち、又、重兵衛を捨てゝ千葉の屋敷の重役の中川といふ男と通じ、その手引で更に千葉の殿様の妾にならうとしてゐる。その矢先に、紙屑買ひと迄なり下りながら、彼女を血眼でさがしてゐる徳兵衛に尋ねあてられる。散々に恨み憤る徳兵衛をなだめ賺して、砂村横堀の六萬坪に誘き出して雇女のお熊といふ惡婆と協力して慘殺する。手を負ひ苦しみ倒れながら「やい、お百、これほど酷いやつとも知らず、おのれゆえに身代も捨てゝ了つたこの徳兵衛、艱難苦勞で上方から、江戸まで連れて下つたおのれ、何の恨みで殺しをるのぢや」と恨むのに冠せて「内を疊むも艱難も何でわたしが知つたことか、言はゞお前がぐづだからさ」と冷笑しながら、これから大名のお部屋樣となつて立身出世をするといふことを、誇りがに述べた後に、

「お前のやうな惡足が、あつちやあ出世の邪魔故に、お氣の毒だが今日こゝで、お前を殺して了ふのさ。どうで生きても其

態ぢやあ、所詮世界の娑婆塞げ、まご〳〵するよりいつそのこと、殺してやるのもお前のため。愚癡をこぼさずあきらめて、早く往生しておしまひな。」

と、ふて〳〵しく云ふのである。そして彼女も、この『善悪両面児手柏』の中では、毫も悔悟懺悔をすることなしに終つてゐる。蓋し、上に擧げた三人の毒婦——お長、お瀧、お百は、默阿彌毒婦の除外例ではあるが、この除外例によつて、默阿彌は、一面、又、悪魔主義文學の作者として南北と伍し得るとも云へるであらう。

最後に一言したいことは、南北の悪漢や默阿彌のこれらの毒婦の活躍するさま〳〵の場合を讀みながら、私は、圖らずも、近代の病理學者マックス・ノルダウが、その著『頽廢時代』に書いてゐる一つの挿話を思ひ出さずには居られないといふことである。

時は一八八四年のこと瑞西のある牢獄で、マリイ・ジャンネレエといふ毒殺犯の若い女が死んだ。彼女は、立派な教育を受けたのちに、自ら進んで看護婦となつた。といふのは病人を看護するといふ人道的な願ひからではなく、彼女の病的な情欲を満足させたいためであつた。その病的な情欲とは外でもない。死にかけてゐる病人の苦しむ呻き聲をきゝ、病人の刻々に死相を鮮かにしてゆく顔の表情を、眺めたいといふことであつた。彼女は、實際病人のその呻き聲を聞き、その表情を眺めることに、人知れぬ無上の快樂を感じてゐたのである。で、彼女はよく醫者の前に跪き、涙を流して、危険な大手術に侍らせて貰うことを頼んだ。とかくするうちに、彼女は、病人が自然に死んでゆく苦しみを見るだけでは満足が出來なくなつた。彼女は、毒殺を思ひ立つた。その最初の犠牲は彼女の友人の女であつた。それ以後、彼女は、巧妙な方法で九人か十人かを毒殺した。犯行があらはれて獄に投ぜられても、彼女は毫末も悔いなかつた。そして獄中の彼女の最も熱心な願ひは、彼女自身が、何かひどい病氣にかゝり、苦しみのあまり、彼女の顔が次第に醜く、物すごく變つてゆくのを、自ら鏡にうつして眺めたいといふことであつた。

いかにも、悪魔的ではないか。そして、この女が病理學的な研究對象の人物であると同じ意味において、南北や、默阿彌の悪魔主義的作品の中の徹底的な悪漢や毒婦も亦同じく病理學的人物であるとは云へないであらうか。

私の以上の考察は、たゞさういふ悪漢毒婦を主人公とする作品が、何故にその時代に歡迎されたか、又、作者はそれをどういふ態度で取扱つてゐるかといふ問題にとゞまる。彼等悪漢毒婦を病理學の俎上に上せることは、おのづから別種の問題でなくてはならぬ。

野生の暴王張作霖

射月迂人

一

イブセンは「悲劇の出生」を、性格と遺傳の内に破局の種子を探したとやら。現代支那の悲劇の因は、確かに「時代」にあるのだ。時代の潮が、彼れを持ち上げ、彼れを沒落せしめる。

青天白日旗が、北京に翻つた時、一代の雄、張作霖の終焉を審判する日が來たのである。下村海南博士に聞いた話である。

今から二昔も前、博士は奉天で張作霖と會つた。その時、張作霖は無論まだ若くもあつた。短軀白皙の優さ男、これが張作霖といふ滿洲切つての豪の者かと博士も一寸意外に驚いた。會談を終つて辭し去るに臨み、しかと握手すると冷やりとする程、張の手の冷めたさを感じた。博士自身の手だつて暖かさうにはないから、餘程張の手は冷めたかつたに違ひない。

博士は手觸から張の運勢を、氣の毒だが、この男長命はとても覺束なしと見立てたさうな。ところが、博士の八卦は見事にはずれて、冷たい手の持主は、その後なかなか死ぬどころか、——尤も、何遍も危い目には會つたのだが、何時も間一髪のところで、助かつた。特別重い病氣にかゝつたといふことも聞かない。晝間は晝間、夜は夜、飲む擲つ、あらゆる精力の浪費をやり乍ら、第七夫人まで侍しづかせ、番外として時には日本の美人にも寵愛が及んだとか。凄い精力だ。

何時の間にか、東三省の王となり、再三北京にも這入つたり、引込んだりしたが、その都度地位はますます固くなり、昨年の初め北京に乘出してから、お手盛にしても、大元帥にまで經上つた。善運に強く惡運に強かつた彼れもひたひたと押寄せる時世の浪には勝てず、洪憲皇帝の夢は果なく破れた。それでも、

尙威儀堂々芝居がゝりの大見得を切つて、六月三日北京を引上げた。四日朝舊巣の奉天を間近かにホット安心した刹那、思ひも寄らぬ電氣仕掛の爆彈に見舞はれて、惡運に惠まれて來た彼れも、今度といふ今度は見離された。果然數奇を極めた雨亭張作霖の生涯も、運命の神の最も念入りな劇的悲劇を以てその幕を閉ぢた。ムッソリニー・張作霖・田中義一とかう並べて見て、同じ反動派の人物でも、張の場合は、飽迄支那式水滸傳式の興味が饒かである。

二

民國も十七年となり、馮玉祥が殊更ら鍛冶屋の出身だと吹聽する今日、綠林の豪傑連も、今では張作霖に最後の大立物の名殘を留め、他には寥々たるものとなつた。數年前までは、廣西の陸榮廷安徽の張勳等いづれも綠林大學出身一騎當千の豪であつた。綠林出身には共通の特長と型がある。文盲だから理屈をいはぬ。その代りに度胸もあれば人情もあり、また統制力もあつた。今日の文明人はある意味の技術家だ、彼等は「大なる手」――「大なる頭腦」であるが、「足の見えぬ程一面に退化したもの」でもある。綠林の豪傑は、全くその反對だ。徹頭徹尾野人だ。たゞ餘りに野人なるが故に沒落したのだ。現代は科學が人間を征服する時代――組織が惜氣もなく野人的豪傑を弔ふ時代だ。奉天派と直隷派の戰爭は、正に支那の「甲越軍記」であつた。張が武田信玄ならば、直情徑行の吳佩孚は、上杉謙信に髣髴たるものがあつた。その吳佩孚は「張の盜氣は天性に出で、濟度すべからざるものであるが、彼れの機を見るに敏なることは、天下一品だ」と推許したことがある。綠林出身の中でも、張は圖抜けた政治家としての機略を持つてゐた。

支那二十四朝の易姓革命は、凡て土匪的攻爭異代だといふものがある。一時代の末期には、必らず群盜が蜂起し、その中の强者が、漸次群小を征服し、遂に天下を取つて帝と稱する。それが後世の御用學者に依つて太祖と稱せられ、聖祖と呼ばるる……聖天子の本體なのだ。――かういふ見方は慥かに一理ある。奉郭戰の直後、ある滿洲の老人が易を立てた、易の卦には、支那は近き將來にある有德の君子によつて平和に統一せられる。その天子は林の上に弓を懸けてゐる人だと判じた。その易者は張作霖の大のお氣に入りで、或は天下を取り度い魂膽から特にそういふ占を出させたのか、それは兎に角、昨年の正月張は周圍の反對を無理に押切つて東三省の樂園から北京の蟻地獄に這ひ寄つた。流石に時代は彼れを大元帥に止めたが、明淸兩朝の數奇を凝らした宮殿の奥深く起臥し、黃砂をまかせ黃衣を纏つた

彼の生活は、一箇の時代錯誤ではあるが、事實上專制君主に違ひなかつた。何の彼といつても、張は、舊支那の最後における最大の人物であつたことに間違ひない。たゞ、彼程智慧をもちながら、時代の流れには、全く盲目であつた。彼れは北京落ちの最後の瞬間まで、蔣介石や閻錫山とは手を握つて馮玉祥に痛い目を見せ得ると信じたであらう。否彼れは右の三者を一束にして、擊破出來るものと己惚れて疑はなかつたかも知れない。

時代の要求は今や、民衆の感情と趣向とを調節するところの「民衆の仲間」としての指導者だ。張作霖の沒落は、反時代的欠陥にある。だが、張の沒落は、彼れの豪傑的評價とは關渉がない。寧ろ、彼れの悲壯なる劇的沒落こそ、彼れの末路に幾多の英雄的色彩を加へたものであらう。張作霖は、舊支那の第一の暴王であつた。たゞ、より大なる暴王は民衆であり、時勢であり、科學的組織であるのだ。

獨り張が科學の前に陥落したのではない。支那そのものが、西洋國家の大きな科學的の侵略に苦悶してゐるのではないか。

三

張作霖は日本でいへば、明治六年、滿洲遼西の海城縣の一寒村に生れた。彼れは一説には農家の出といひ、また伯樂の子だともいはれてゐる。いづれは名も無い素性のものであらう。思ふに、少年時代から利かぬ氣の餓鬼大將であつたらしい。年若くして綠林に投じ、仲間の間で早やくも頭角をあらはした。支那の土匪には、仲々官憲の手が屆かぬ。それで地方の官憲は、これを小隊長とか、中隊長とかに編入して、官兵に招撫して表面を取繕ふことが多い。張作霖が隊長として匪服を官衣に脱ぎ代へたのは、日露戰爭前たしか徐世昌が東三省總督の時代であつた。日露當時、支那官民は日露の双方に、どつち付かずの態度を取つてゐた。張も、親露派と見られ、日本軍の手で危く殺されんとしたが、見所のある男といふので、或る人の取りなしで、一命を取り止めた。その當時吳佩孚もたしか、まだペイペイの將校として袁世凱の命を受け、觀戰の任務を帶びて日本軍の爲めに諜報を取る働きをした。張が招撫されて始めて相知るに至つたのが吳俊陞であつた。張吳の長い友情は、その最後の日まで渝はらなかつた。郭松齢の謀反に依り、危急が奉天城の西二十里に迫つた時、吳は北方から黑龍江の騎兵師團を率ゐ、青龍刀を振つて陣頭に立ち、郭軍の側面を衝いた。この撲素なる老將軍は張よりはずつと年長であるが、張の爲めに忠實なる部下として働き、張の北京に入れるあとは、奉天の後詰めとして居殘つた。張が歸還を迎ふべく山海から同車して、遂に爆彈の爲

めに悲業の死を遂げて張のために殉じた。

日露戰爭以後、張作霖は順風に帆をあぐるが如く、めき〳〵男を賣出した。第一次革命の際は第二十七師長となつた。その當時彼れは督軍段芝貴の下にあつた。段芝貴は段祺瑞の同門で、前清の末上海の美人を慶親王に賄賂として獻じ、一世の指彈するところとなつた有名?の男である。袁世凱の帝制に失敗するやその機に乘じて彼れは段を驅逐してこれに代り、奉天將軍として最早や押しも押されもせぬものとなつた。民國七年東三省巡閲使となり吉林將軍孟恩遠を逐ひ、東三省の兵馬の實權を握るに至つた。

民國五年に最初の危機が張を見舞つた。即ち宗社黨の策士連に利用されて東蒙古王闘合土王パプチャプが三千の蒙古騎兵を以て、殺到して來たが、張はこれを手許におびき寄せてせん滅した。

民國六年の張勲復辟には、張作霖は勿論、馮玉祥曹錕倪嗣冲等の軍閥巨頭は悉く連名に加入してゐたが、張勲の輕擧は三日天下にして破滅し、黎元洪の復位となり、黎の辭位を擁して、段祺瑞一派の所謂安福派が中央の實權を掌握した。

段は當時寺内内閣の支援を得て、武力統一に志し對南軍の前部征討として直隷派の曹錕は漢口に赴き、その先鋒の呉佩孚は湖南の衡州邊まで打つて出で南軍と對陣中であつた。

四

張作霖が北京の本舞臺に乘出したのは、民國八年の安直戰爭で、武装解除をやつた時からである。歐洲戰爭から民國八年にかけて北京の政界は段祺瑞を首領とする安福派の黄金時代であつた。豐富な資金で日本士官の手に訓練された邊防軍の實力を擁して傍若無人、例の二十一箇條で、曹汝霖邸が燒打されるなど衆怨は一黨に集まつた。湖南滯在中南方派と聲息を通じた呉佩孚は、一流の名文章をもつて段一派を彈劾し、安直戰爭の幕は切つて落された。その時段祺瑞個人に好感を有する張作霖は手兵三百を率ゐ、調停を名として北京に乘り込んだ。段は定國軍總司令として北海の團城にあつたが、張は單身段を訪ねて懇々戰爭の不可なるを勸告した。段は騎虎の勢ひこれを謝絶した。その時の事、段下随一の權謀家として恐れられた徐樹錚は「張をこのまゝ奉天に歸らしむるは虎を野に放つも同樣だ」といつて段にその決行を促したが、段は張を殺すことには斷じて耳を藉さなかつた。張は段との會見が終はるや、倉皇として北京から奉天に歸つていつた。それから間もなく奉天で刺客を捕縛した。刺客の一味は安福派の策士錢姚の叔父以下數名の連累者が

あることが判然した。こゝに於て彼は激怒した。そうして、奉天軍の精鋭を以て、天津の後方を脅し、段派脆くも破れ、段自ら罪を乞ふて出た。その時徐樹錚以下、こと〱く日本兵營に逃げこみ、然らざるものは極刑に處せられた。獨り老段が身を完ふして、引退し得たのは、段張の情誼が互に相許すものがあつたからだ。

私はその時初めて凱旋將軍の張作霖に會見した、天津の支那街の軍衣莊の廣大な邸宅の一室であつた。戰勝の彼は瀟洒たる風采で、眉宇に精悍の氣溢れ、一々テキパキした口調で質問に答えた。

「私は老段の心事を解してゐる。忠告が容れられず、奉天に歸つた時までもまだ段に對して戰ふといふ氣はなかつた。然し、他人の忠告に耳を藉さぬだけでなく、刺客を放つて人の生命を斷たふとするに至つては斷じて許すことは出來ない。その時私の起つ決心は定まつたのだ」

戰勝者側の張作霖、曹錕、呉佩孚の三人の會見がその時天津で行はれた。曹錕は年長でもあり、姻戚にもあたるので、張は、「二哥(アルコウ)」と呼んで敬意を表したが、呉佩孚は年齢こそ同じ位だが、駈け出しである。それにいふことが當時の呉佩孚は南方被れであつた。「何をこの小僧が」といふ調子で、張は露骨にこれを冷視した。呉佩孚はこの時以來、深く張に含むところあつたと傳えられる。

呉佩孚は當時盛んに時局收拾の方法として國民會議開催を提議したが、張は鼻の先で一蹴した。このことに就て、張はこういつた。

「お國には國會といふものがあるが、それ以外に全國國民會議などといふことは、出來ないだらう。智識の程度の低いこの廣大な支那で、全國の國民會議などといふ馬鹿なものが出來る筈はないぢやないか。呉佩孚の奴がいふのは、米國公使館あたりの入智慧だ――」とその名前まで口言して憚らなかつた。

五

張作霖は東三省巡閲使になり、曹錕が直魯豫三省巡閲使、呉佩孚が副使となつて、表面繩張りが出來たが、北系の内閣は、奉天が系を率いて、梁士詒一派の交通系が要路をしめ、就中、呉佩孚に酬ゐられるところ甚だ薄すかつた。勝氣で戰爭に自信のある呉は、尻の重い曹錕を引つ張り立てて、奉天軍に對し、宣戰を布告した。これが民國十一年のことである。そうして第一次奉直戰は奉天側の失敗に歸し、張は直ちに東三省の獨立を宣言し、自ら保安總司令と稱し、それから十四年第二次の奉直

戰まで鋭意內備を充實した。織田信長の偉い處は逃げ足の速い處にあるといはれるが、張作霖の偉い處は、敗けつ振りのいい處にあつた。支那の場合は一度勢力を失墜するとバラ〳〵崩れて來る。所謂一日に七十二城を陷るといふことは、これは負け目だとなると部下の將士がわれさきにと離反するからだ。處が、張作霖は何度もまけたがいつも內部の統制が破れたことはない。これは一つは滿洲の地理的關係もあるが、同時に綠林出身の張の親分子分的威力の徹底と、あの頑張りの力に歸せねばならぬ。戰爭にまけて、奉天に引こむ時も、今度の場合もそうであるが、決して戰敗者としてはかへらぬ。戰爭に勝目が無いとみるや、まだ戰鬪の餘力を殘して、何とか彼とか堂々たる宣言を發して、再起の面目の餘地を殘して、サツサとかへつてしまふ。尤も、一度は裏切られた。十四年の冬郭松齡の逆亂に際しては、流石の張も、一千萬元の現金を滿鐵か何かに預けて下野の用意までした。幸ひ遼西の雪が郭松齡の血でそまつた時、その屍體を寸斷して憤怒の情をやつたが、それ以外には反覆常無き群雄を覊御して、一度も破綻をみせたことはなかつたのである。

民國十二年の夏、あの卒伍出の茫洋たる曹錕が大總統に押し登り、吳佩孚は依然洛陽に居て、北京のことを思ふ存分引廻はした。それから翌年の第二次奉直戰爭までは、直隷派の全盛時代、張作霖の雌伏時代である。元來張作霖は、滿洲から出さへせねば絕對安全である。日本との機微な因緣もあれば、競爭者はなし、支那唯一の平和境であるから戰爭さへせねば、自然と財政も浮いて來る。王永江などといふ財政家がゐたので、保境安民を主張し、內部を整理するから、漸次內部が充實して來た。處が、そこが人間の功名心といふか、或は滿洲も支那である限り、支那の統一といふことが、支那人の本能とでもいふか、或はまた漸次軍隊が澎張する。軍隊の上層階級はそのまゝ動かぬから、自然他方に向つて地盤を擴張する要求に押されて來るといふものか、兎に角受けた傷が癒えて來ると、張の關內進出の要求が燃えて來た。丁度この頃廣東の孫文と、天津に引退してお經許り讀んでゐた段祺瑞と奉天との三角同盟が進捗して來た。そうして、浙江の盧永祥と直隷系の江蘇督軍齊燮元との衝突が動機となつて、十三年の秋、第二次奉直戰の幕がきつて落された。直隷派の吳佩孚には弟分である馮玉祥——これが第一次奉直戰の功勞者であるに關らず戰後に於て非常に冷遇された。この馮が筒井順慶の役目をつとめて、馬をかへして北京の後路を斷ち、吳佩孚は散々な目にあつて、江湖を漂泊し、北京方面の權力は馮玉祥が持ち、段祺瑞が再び執政內閣を組織

し、奉天軍の部下の揚宇霆が江蘇に、張宗昌が山東に、波全純、褚玉璞等の部下の諸將がそれぞ〳〵直隷、張家口の方面に地盤を割りあてられて、奉天派の勢力は揚子江以北を掩有するに至つた。

六

民國十三年の冬、陳炯明のため廣東を逐はれた孫文は、湧くが如き歡呼の裡に、北京に入つた。この時代になると、精神的には三民主義の思想が全國的に擴大しかけて來た。馮玉祥は早くも國民軍と改稱し奉天派との敵意が漸次深くなつて來た。段祺瑞の出廬もつまるところ、湯を換えて藥をかへずで、何等新局面の打開の力は無い。直隷軍閥の凋落は同時に、相手方たる奉天軍閥の死を早める。軍閥凋落の秋が來たとの聲が高くなり、「打倒軍閥」の聲は三民主義の革命の要素として、南支那一帶を風靡して來た。新しき軍閥が生きるためには、先手を打つて舊軍閥を倒さねばならぬ。馮玉祥との默契の下に突如十四年十一月、山海關に叛旗を飜えした郭松齡は、その夫人や林長民と共に奉天に向つて進んだ。しかして日本上下の耳目を聳動しつゝ、新民屯の廣野に屍を曝らしたこと、周知の如くである。奇蹟に近い鮮やかさを以て盛り返へした張と馮との反目はこの後最後まで解ける間がなかつた。十五年の五月北京で馮玉祥のクーデターが行はれる。往年の仇敵呉佩孚と、張作霖との諒解成つて、兩軍は北京に進む。馮玉祥軍は、北京をおちて張家口から大同、甘肅と、奥地の方に引つこむ。その間に馮は露國にゆき、「赤化の洗禮」をうけて、南の方の北伐軍が長江一帶に進出する頃歸へつて來て、甘肅狹西から河南に入りこむ。いつの間にか、呉佩孚も沒落して、四川の山奥に入つて讀經三昧にふけるといふ風で、民國十五年から北支那の覇權は完全に張の獨占に歸した。やがて「赤化討伐」を標榜して安國軍總司令に就任する。南京事件などで國民黨と列國との紛爭が起きた潮合を捉へて、北京露國公使館の搜索をやり、對露絶交を斷行する。そうして昨年の六月北方將領に押されて大元帥に納まつた。たゞ、調子に乘つた張は、お隣りの山西の閻錫山を見損つた。閻錫山は山の中に保境安民の殼を被つて十六年、元は生え抜きの國民黨員である。それに頓ごなしに、大元帥擁護の宣言を出せと迫つたので、閻は怒つた。明敏な閻は討張の先聲をあげた。周圍が山許りだから、積極的に北京が危險といふこともないが、又反對にこちらから太原を衝くといふわけにも行かない。奉天軍の精銳を以てして、山西一省の外郭だに壞つに至らず、長い冬の間に漸く馬脚を露はした。閻馮を連絡して、赤賊馮な

討たんとの策動が奉天側によつて行はれたにも關らず、青天白日旗の持つ結合の力は更に强かつた。濟南事件を機會に擧國一致して外侮に當らんといふ張の通電は、正しく悲鳴である。北京沒落の時が遂に來た。そして奉天には爆彈が待つてゐたのである。

七

張は野人である、瀟洒たる風采であるがその魂も氣魄も野趣滿々であつた。辜鴻銘は

「張は學問がないからよい。無學なものは往々賢人と同じことをいつたりやつたりする」

といつた。吳佩孚は仲の悪い間は、いつも紅胡子(ホンフーツ)といつて罵つた。彼は缺點だらけだ。たゞ缺點を無遠慮に暴露する處に彼の强味がある。愈勝目の無いことが判然して、京津地方の治安維持のため、芳澤公使が彼に關外撤退を勸告するや彼は火の樣に怒つて、あたり構はず怒鳴りちらした相だ。尤も怒るのも無理はないかもしれぬが、左樣した傍若無人な點が、彼の精力を内訌せずに、あの目まぐろしい舞台をそれからそれへと處理してゆくはけ口を與えるだらう。

彼れは小柄で色も白い。本來神經質な顔立ちであるが、その神經は强靭で壊れ易くない。色の白い割りに陰性で無く、多策な割に奸雄といふ感じがすくない。陰性といふ點からいへば、馮玉祥の方がずつと陰性だ。多策といふ點からいへば、閻錫山の方が多策であるかも知れない。蔣介石にはどこか文化人といふところがあり、明るくもあるが、神經の脆さを感じさせる。張の强味はその押しの力だ。その無煩悶の處だ。彈力と反撥の力だ。

北京の危機が迫つても、北京電報によると朝寢坊はするし、麻雀はやるし、夜更しはするといふ風であつた。日本人の目からみると、如何にも非事務的であり、忙碌したともみえるが、張といふ人は最後まで忙碌といふことの無い柄だ。恐らく、支那の戰爭を「事務的」にやれるものでは無い。戰爭と麻雀とが同じ程度の賭博に考へる位の神經で無ければやつてゆけぬ。張は左樣いふ男だつた。ある日本の外交官が張と話してゐた處に一人の部下が何か書き付けを持つて來た。張は一寸横をむいてそれを一見するとその部下の者にたつた一言

「殺罷(シャーバ)」

と言つたきり、また向き直り煙草を燻らしながら平氣で談笑をつゞけたさうだ。李大釗や京報の主筆の邵振青君やの連中も、恐らく

「殺罷(シャーバ)」

の一語で大根でも切る樣にやられたのであらう。

支那人は概して氣どらない。馮玉祥などは、粗末な服を着て、粗末な部屋に住んでゐる。最近は殊にお客などにも馬鈴薯のふかしたのを勸めて平氣でゐるさうだ。幾らか馮の場合はそれが得意な氣味もあるだらうが、大體からいつて、支那の大官といふ連中は、正直に贅澤もすれば、横車も押す。張作霖が北京に入りこむ時などは、停車場には軍隊がつけ劍で護衛し、市街を通る時なども、自働車に機關銃を据ゑつけて乗り廻す。生中、野狐禪にすましてゐないだけに、一種の痛快を感ずる位だ。學問が無いだけに宗教も無い。唐生智などは佛痛といはれる位に佛教の凝屋だし、段祺瑞等も佛教三昧に入つてゐたが、張は、無學な者にあり勝ちな迷信といふものに深入しなかつたやうだ。あくまで現實的で、其場、其場の直感で巧みに急所を切り拔けた。大倉喜八郎翁とは相許した仲だつた相であるが、事業上の關係を別にして、大倉といふ樣な人には、どこか性格上の共通な點があつたかもしれぬ。愛憎の激しい割に太つ腹で、心腹を人の腹中に置くといふ庭があり、楊宇霆なども散々失敗をした方であるが、張はこれを最後迄重用した。孫傳芳にしろ、一昨年までは、奉天軍を江蘇から追ひ出して、後釜にすはつた男であるが、張はあく迄これを援助し、孫傳芳亦屢々離反を傳へられつゝ、張に離れなかつたのは無論利害からでもあらうが、張の親分たる太つ腹のセイにも因らう。

八

張の大をなしたものは、一半の理由はその地理的關係である。第一革命以來の位置を最も長く保持したものは閻錫山であるが、その次には、死んだ雲南の唐繼堯があつた。唐の運命の長かつたのは、雲南貴州といふ僻遠の土地で、他省との交通の尠かつたのが原因の一つだ。

張作霖の東三省に於けるは雲南に比べると遙に積極的な利益がある。日本が特に張作霖援助といふわけでも無いにしても、滿洲の治安維持の爲には日本はいつでも用意があり、その結果として、張の地位に對する保險の役目をつとめて來たことは事實だ。それに、滿洲には、支那第一の鐵道網がある。これが始終運轉してゐて、沿線の住民は殖える。産業は開發される。官銀號といふ私設の銀行で金融上のカラクリは如何にでも出來る。特産物は買ひしめる。政治、軍事、經濟の三點に亙つて、張作霖は資本家以上の資本家、政治家以上の專制君主、軍人以上の、つまり世界に於ける最も奇怪なる殘存物の一つである「軍閥」の最大のものであつた。何はともあれ張作霖の打擊

第一だといふ點に於て、張作霖とその一統以外の、あらゆる支那の勢力が結成される程に、その封建的要素は排他的に爛熟してゐたのである。

張は親日家でもない。さればといつて排日家でもないだらう。彼はよくよく日本の長短を見拔いてこれを利用した。日本の強味も理解してゐれば日本の弱點も理解してゐた。彼が日本が露國に對する警戒の心理を巧みに捉へて、彼自身の存在を日本の赤化防止の上の緩衝帶であるかの如き態度に變裝した。日本の勢力を背景として、一面には露國に對する猛烈な攻勢をとつた。東支鐵道問題などで露國は常に受け太刀であつた。

日本の滿洲政策が、事實に於て、張の個人的存在と餘りに深く因緣づけられたことは、張をして自己の力を買ひ被らせた。「何の彼のといつても日本は俺の存在を希望してゐる」といふことが、得意時代の張が、日本に對して反噬し初めた原因の一であらう。但し、そう許り解するのは無理であるかも知れぬ。張作霖は初めから終りまで支那人で、滿洲は支那の領土だ。張に對し、日本人と支那人との合の子であれといふところに、日本人の張作霖觀が成立してゐるとすれば、どこかで無理が來るに極つてゐる。理非のいづれにあるにせよ、滿洲の支那化は加速度で進んで來た。國權回收の熱は、滿洲に於いても支那人上下の風潮である。ある程度まで力でもつて抑へつけ得るとしても、全然抑へつけることは不可能だ。張の日本に對する壓迫は、この民衆の風潮を背景として、最近動き初めた。これに逆行することは張の自殺である。とはいへ、日本の支援を失ふことは亦張にとつて大なる危險でもある。張の存在が、大きくなるにつれ、この矛盾は切迫して來た。最近の滿洲在住の日本人は、張の存在とその態度に猛烈な不平を持ち初めた。然し、これは一概に張が排日的であるからだとするは酷だ。張は親日で無いとしても、特に排日ではなかつたらう。これは餘りに善意な見方であるかも知れぬが。

九

ソヴエート露國に對して、彼は明白に排露的であつた。實際問題として、彼は露國に對して、求むる處が無かつた。東支鐵道其他に於ける利權の回收といふことが、彼の露國に持つ交涉の大部であつた。そうすることは、同時に國權回復者としての立場を固めることにもなつた。露國に求むることは、日本に失ふことである。そして失ふことは遂に得ることよりも大である。況んや、彼の對手たる南方は已に露國と深く手を握つてゐた。故に彼は露國と握手する何等の實際的利益を持たなかつ

た。

のみならず精神的にも、彼の據つて立つ處の封建的勢力は共産露國の主義精神と絶對に相容れぬ正反對のものであつた。求むるものは彼でなくて、露國であつた。露國は戰々恂々としてこの滿洲の暴王に對した。日英米の列國は、極度に支那の赤化を恐れた。從つて張の排露的態度は、列國の歡心を得る點からも決して損はなかつた。事實、共産黨と國民黨との分離が行はれる迄は、英國の支那政策は、多分に張に重心を置いた傾向があつたのである。

北京で日本新聞記者團との會見の際、ある記者が、

「閣下は本當に赤化防止が出來るとお考になりますか」

とたづねた。すると、張は眞紅になつて

「そんな非常識の質問をするなら一切の質問に答へぬ」

といつて、そつぽを向いてそれから何を質問しても答へなかつたさうだ。

赤賊討伐――それは張の心からの主張であつたらうし、同時に彼の政策の實體であつた。赤賊討伐のために、彼は南方と戰つた、そのために蔣閻と妥協を策し馮玉祥を葬らんとした。そのために、對露絶交を斷行した。

民國十二年にヨツフエが、支那に來た時、ヨツフエは（或はヨツフエ自身でなかつたかもしれぬが）支那に於ける運動の對手を求むるため、最初奉天に訪問した。露國の革命家の目に映じたこの滿洲の豪傑は、全然マンダリン風の前世紀的遺物であつた。張に見限つた彼は去つて吳佩孚に行つた。吳佩孚は直截で正直な將軍であつた。然し彼も露國嫌ひである點では張と同樣手のつけやうがなかつた。吳佩孚は「赤露こそ古代の蚩尤だ」といつて共産黨と露國を面罵した。

支那の實勢力に失望したヨツフエは上海の旅館で廣東から逃げ出して來た許りの孫文にあつた。レニンよりも古い、東方の老革命家は、あいかはらず詰襟の洋服を着て、人なつこい目をしながら、無愛想に默つてゐた。ヨツフエは問ねた。

「支那の革命なんて、一體出來るものですか？」

「そりや勿論出來るさ」

「誰がするんです？」

「わたしの國民黨が」

「武器や兵隊はありますか」

「ありません」

「何があるんです？」

孫文平然として

「學生がゐますよ」

この刹那、國民黨と、勞農露國との握手は出來上つたのである。

十

數年前ラッセルは、來るべき支那は賢明なる指導者達の合議制の政府によつて治められるだらうといふ意味のことをいつたことがある。委員制の國民政府の統制の力は、今尚疑問である。が然し、獨裁支那の不可能なことは殆ど決定的だ。「天下支那」が過ぎ去つて新らしい制度や刺戟が隣國に實驗せられるやうになつてから、支那の武力統一は完全に試驗ずみとなつた。

單に個人的興味からいへば、支那の豪傑達は日本の口舌の雄よりも遙に男性的であり、面白味がある。濟南事件の感想を求めた日本人の記者に對し、段祺瑞は手をふりながら、

「いやその話しはよしませう。したが、支那は開發すればまあ三億人は收容されます。御國の人が三千萬人位支那に來られても、支那は困りませぬ。兎に角、お互の親善といふことが肝腎です」

老猾といへば老猾、冗談としても、それが日本人の誰の口からそんなに自然に流れ出るであらう？

張作霖は最後迄綠林出身の支那式豪傑であつた。封建的支那人として彼は最後の典型的な一人であつた。愛憎のいづれかといへば私は、彼れを愛するものではないが。彼れを失つた支那は一時に寂しくなつたやうな氣もする。（完）

映畫時評

詩情と映畫

小山内薫
久米正雄
室生犀星

映畫に詩情のないものは稀である。だが映畫に誠の詩情を見ることも極めて稀である。監督の詩情的な試乘は却つて映畫をだれたものにし、甘いものとする以外、餘り成功した例しがないやうである。

最近に自分は「最後の命令」「暗黒街」「ショウ・ダウン」等の諸作にその演技を揮ふてゐるイヴリン・ブレントに、並々ならぬ牽引を感じ、人生詩の蘊奥的な味ひを感じた。リリアン・ギッシュやメイ・マレーに墮落した美の常踏者であつた自分は、メイ・マツカーボーイの神韻ある美に心惹かれた。それは品と雅とを兼ねた溫和な美しさであつた。美の中にある詩情は勿論常識的ではあつたが、皮膚に音樂的な恍惚と滑かさとが現はれてゐた。彼女に最も豐富なものは「そよかぜ」の類を過ぎる優しいタッチの美である。刺戟を含まず、自分等の心に柔らかくなよなよして來る感じであつた。決してリア・デ・プチイの如き鋭い肢體を摩擦される如き感覺ではない、リア・デ・プチイの特徵は彼女の中にはないが、彼女の呼吸づかひは文字通りの「花」を感じしめるやうである。

イヴリン・ブレントの美はマツカボーイやリア・デ・プチイの如き表面的なものではない、彼女の美は直接自分らの心理的接觸を敢てして來る、性格美であり個的な、類型のない冷かな美しさである。稀にはその美の中に醋(す)たらしい冷却された失笑が苦汁のやうに滴つてゐる。「最後の命令」の中の探偵女に扮した彼女が窓際から街路を見下すところがある。冷かな動かない表情が窓枠を其儘額椽に塡め込み、一枚の生きてゐる「寫眞」の

やうに見せてゐた。自分は蒼白に近い彼女の冷酷な表情の中に、刺し貫いでゐる烈しい人生詩の美を感じた。それは自分らの心に迫いて來る美であり、蜂のやうに刺してくる美の針のやうなものである。「暗黒街」のブレントは迪々しい初々しさがあり、「最後の命令」の中の女ほどコナれてゐなかつた。しかし探偵女としてのブレントは最早長足に進歩もし、突き込む氣力を演技の端々に表はしてゐた。自分は何となくリア・デ・プチイを想起し、その白痴的な美を回顧しながら、ブレントの中にある氷のやうな美を手摑みにしながら、自分自身の飢えをしのいでゐたのである。全く自分は永い間ブレントのやうな美に飢え餓えてゐた。あゝいふ美は自分を烈しい矢のやうな鋭角さで影響して來るのであつた。

自分はドストエフスキーの「虐げられし人々」の中の少女ネルリを、その成長的な冷たい美とを感じた。凡ゆる女優の美の中で最も恐るべきものは、派手な甘い常套的な美であつた。過去に於るアメリカ型の美は寧ろ低級な、性欲に擽りを與へる單なる標準美であるに過ぎなかつた。これらの美は映畫の本質に融和すべきものではあつたが、何等の藝術的な一流の本質美を築き上げるものでなかつた。女優に於る美が映畫を通俗と藝術との間に低迷させることは事實である。エヴリン・ブレントの通俗化はどういふ意味にも行はれることではない、冷嚴な中に謎を含んだ人生詩の内容は、ブレントの表情の中に横溢してゐるばかりでなく、それらを統べてゐる寂莫の情は限りなく美しい。寂莫の情を圍繞するものはブレントの冷たいキビシサである。自分の心に迫いて來る美も、又かういふ美の外のものではない。スタンバーグが生かした詩的精神は決して失敗してゐない、立派な搖がない焦點的な効果を上げてゐる。或意味に於て最近に詩情ある映畫詩は、エヴリン・ブレントの中に僅かにあると言つてよい、恐らく今後に於るブレントの演技と藝風及びその性格的な把握は、益々鋭い人生詩の眞の姿や其接觸を示す、であらう、決して彼女のごときは輩出する女優の中に求められない「珍しい」女優であるに違ひない。

映畫の中にある詩及びその詩情は、寧ろ監督の意識的表現であるよりも、何よりも我々高級な達眼者流の看客が發見する「詩」でなければならぬ。我々が映畫の中に見る詩は決していい加減な監督や女優の意圖ではなく、我々の中にある詩や詩情が彼らの中のものを發見し、呼應もするのである。第一流の看客は同時に又監督級の立場、精神、考究、把握の諸式を持ち、そこに行ふ批判も自らその峻烈であるべき、當然の權利を持つ者をいふのであらう。

映畫製作の欲望

一 映畫精神に就て

自分は映畫製作の欲望を感じながら歩くことがある。町々、河岸の見える裏通り、地下室の動かない空氣の中に倒れる蠅、吸殼によつて客を識別するホテルの掃除夫、通りを距てた三階の灯のついた部屋にゐる仕立屋の職人、その職人が晝間は決して砂埃で見えない理由、――さういふ背景に心を留めながら歩いてゐても、決して自分の監督的な構圖の中に塡められるものが見られず、殆絶望的な氣持になることがある。さういふ自分に絶えず去來するものは、どうして一本の映畫を製作すべきかといふことである。

自分は自分の製作する映畫は第一に新鮮でなければならない、その新鮮さは十年後にもそのまゝの動かない新鮮さを保たなければならない。凡ゆる人物の顔の中、表情にさへ明晰な十年後の進化的な速度を表識しなければならない、彼らはどういふ風にその尖銳的變化をその文明的な試練の上に表はして行くか、赤ン坊の生れる聲にさへ最早文明の混亂及進化が足を速めてゐるらしいからである。自分は過去に於る凡ゆる問題的な問題を放擲した。同時に凡ゆる古い背景をも抹殺した。況んや映畫的人生の膠着と其常套的手法とに反對した。自分は何も彼も新しく出直さうとしてゐるのである。それでゐて古色蒼然たる十年乃至二十年をも見越した人生、その的確なる微妙な性格心理を建て上げようとしながら、散歩する時によい場面や、人と人との接觸、町々、建物の色彩、屋根と屋根の角度の重帶、溝、理髮人の眼つきはなぜに鋭いかなどといふことに、頭をつかひながら「妄想」でない「映畫人」の呼吸をつきながら歩いてゐた。併し自分は監督的な手法は天才の仕事だと思へず、絶對に熟練の仕事だと考へてゐた。さういふ自分は屢々どころでない、殆その重要な散歩ごとに絶望的な經驗を敢てするのであつた。それは今自分がたゞちに監督的な位置に立つた時の狼狽と困惑、及び經驗なき不用意を自覺したからであつた。自分は何も知らず又何事も知らうとしないでゐながら、正しい「一本の映畫」を製作しようとしてゐるからである。凡ゆる映畫は町に出て行かなければ摑めないと同樣、凡ゆる映畫はそれ自身の經驗を持たなければ製作することが不可能だからである。

併し乍ら自分はその實際的な立場に立つまでには、何よりも「心」にあつて其處で成長すべき映畫を俟ち又其準備する必要があつた。心に留め其處で一應組み立てなければならない……樣々な女の肉顔の中に時代を見、その肉顔がどういふ風に後代

に向うて發展すべきものであるかを見て歩いてゐた。或女の顏は全然死んでゐるも同樣であつた。些しも表情されない泥の面に過ぎなかつた。自分はその女の顏の中に唯一つだけ動くものを認めた。それは現世的な欲望に對する時にのみ動く鼻の穴であつた。彼女の「女」として終息した諸々の表情の中で、生きてゐるものは此物悲しい鼻の穴だけであつた。自分は喜びを持つて彼女を見たのである。

自分は或カフエで半分泣き半分笑ふ女を見て、彼女のその右と左の頰の筋肉の活動力に對する生理的欠陥をも見、且つ笑はない方の眉から下は一種の顏面神經に襲はれてゐることを發見した。彼女はそれを意識し努めて暗い方に向きながら、顏面神經の顏の半分を隱匿しようと意圖してゐた。さういふ彼女の自覺症狀は自然に彼女の姿勢を歪にして見せてゐた。又或女の美しさは其美しいもの自らが決して靜止しないで、渦卷きながらゐる狀態を發見した。川の瀨にある渦の美しさに見恍れることと同樣な、引入れる感じであつた。自分はさういふ肉顏的撮影にはその渦卷く狀態をどういふふうに表現すべきかに頭を煩はした。自分は女の肉顏的な美の中に「眩惑」が獨樂のやうに烈しく舞うてゐることに心惹いたのである。

自分のノオトは併し決して記されはしなかつた。かういふ嚴密な場面の選定と苦心には實際何年經るか分らなかつた。興業的方面と經濟的期間に於ては務であるが、自分には左ういふことは今は問題ではない、問題になるのはどうしたら新しい映畫藝術の完成と、そして自分の製作すべき「或男の生涯」を描寫すべきかといふことである。全く今の自分には一人の人間を根本から映畫化することに於て、自分の立場が無ければならないのである。

二「或男の生涯」

自分は或る男の生涯を描寫する外には、他に少しの欲望をも感じない。或男の生涯は現世的な生活主流の中に喘ぎながら消費される生活である。彼の濫費され消失される生活力は直接に何等の現世と交渉はなかつたが、併し乍ら彼だけの問題としての其生涯は、藝術の樣式以外には表現されない生活であり、藝術的な紹介にのみ據つて存在する生涯であつたからである。

生活といふものは實際の踏襲によつては一個人の間に消失し、又どういふ其等の生活も藝術的樣式に依る時にのみ、初めて平明無意味な生活でさへも映畫藝術であり得る可能性を持つてゐるものである。自分は目擊する多くの生活的な消失されやすい、それ故に貴重な藝術的な機會を見るにつけ、何故に自ら

立つて映畫の上に働く自分を信じないのかと疑うたほどである。自分の如く文學による表現欲の衰弱を感じる者に取つて、映畫に於ける微妙な機會が奈何に鋭い作用を敢てするか。映畫様式への新しい驚き、あこがれ、希望、その描寫への氣持の働き、發見、研究等は、最早自分を監督的な位置にまで押し上げ、製作的な情熱の呼應を感じさせることに、並々ならぬ熾烈な勢ひを持つて迫つてゐるのである。

自分は「或男の生涯」の中に到底見逝すことのできない罪惡を發見するとしても、到底それは文學的な表現では盡されるものではない、自分はさういふ問題的な、或意味に於る惜むべきその罪惡への迫眞的なものも、映畫的な經過の上では易々と踏襲することのできるのは、尠くとも藝術の徒にあつては喜びでなければならない、凡ゆる人道主義、惡魔的、僞瞞者風な生涯、それらへの懲戒的な運命の接觸でさへ殆ど一瞬の間に最もつゝや消しな、最も背景的な取扱ひに依つてさへ表現されることも、文學的な効果に於て露骨な描寫と比較にはならないやうである。自分はさういふ生涯を目標として、町々、人のむれの中を歩くのである。自分の監督する「或男の生涯」は一應精神的な映畫描寫を經た後に、自ら試乘すべきであるからである。

三「或男の生涯」の一場面

自分は或カフエの客の座らない皮張りのクツションを眺め、その前の卓の上の灰皿に一すじの吸殻の烟が立ち上つてゐるのを見て、何か人間的な生活の「後の瞬間」を感じてゐた。その靜さに自分はさういふ物質でなしに、人間的な靜さを感じてゐたのである。映畫的な精神もかういふ古い場面に漂うてゐる「靜さ」から描寫することができ、過去の映畫描寫もこゝから發足もしたのである。併し後の日に自分は或古い椅子やテエブルを賣る大きな道具屋の、大ホールの階上に立つて驚くべき人間的な大騷亂を發見したのであつた。それは凡ゆる椅子といふ椅子、テエブルといふテエブルの積み重ねられた、埃の深い、薄暗い空氣の中に、ところどころに光る寢台についた金具の外は、全く冬の日のやうな沈んだ冷たさであつた。そのテエブルや椅子の脚の隙間から硝子戸越しの夕方近い光らない明りが流れ澱んでゐた。此無氣味な呼吸窒る靜さは一面に非常に烈しい騷々しい生活的なものを、それらの椅子やテエブルの全體の上に自分は感じてゐた。此古道具屋の二階に動いてゐるものを、永い間かかつて或一定の距離の後に發見したのは、硝子戸に向うて幾日も同じい羽撒きをつづけてゐたらしい一羽の紋白蝶の

姿であつた。彼は硝子の表面に羽搏きながら、そのまゝの姿で辷り落ちては同様な足搔を繰り返す運命を暗示してゐた。自分はその羽搏きの音を耳に入れるために、右の耳を明りの方に向けたが、その弱い微な音は聞かれなかつた。却つて硝子戸越しの大通りの車の音を聞いただけだつた。

自分は此古道具屋に古い椅子を一脚購めに來たのであるが、主人は階下にゐて案内を知つてゐる自分とゝもに二階へは上つて來ない故、自分は充分此靜な光景の中に立つことができたのである。自分は左の腕時計を見た。四時十分過ぎであつた。自分は此シインの精神的展開の中に「映畫」の展開を感じるのであつた。自分は四角な腕時計を見た一瞬の後に、優しい紋白蝶が依然窓ぎはへ向け辷り落ちるのを眺めてゐた。數刻の後に自分はやはり此場面の中に「或男の生涯」の幾コマかを感じ、「或男の生涯」に描寫さるべき必然性をも併せて感じるのであつた。映畫に於るリアリズムの徹底はそのまゝの現實に向うて、自分はすぐカメラへの命令を書さない、すくなくとも其現實そのものの精神が、その前と後との時代に續いた意味の深い象徴的なものに限り、（計劃された象徴主義ではなく、自然的な象徴を意味する、）又その現實の人生相の重みのあるものに限り、それだけの光景ですら人生の或急所を抉り取るべき場面にのみ、自分はカメラへの命令を爲るものである。カメラへの命令は最早描寫上に於る最後の一瞬である程、自分は映畫精神の重間を理解した後でなければならない、——

監督的な位置は同様に凡ゆる小説家の持つ「鋭い頭」の外に、更に小説家の持合さない製作的効果を持たなければならない。小説家のみが人生の記述者であつた時は既に過ぎてゐる。小説家よりも一層精神的であり肉體勞役的である監督者の立場は、同時に凡ゆる小説家の把るべき人生的な模索者であることは勿論である。第一流の監督はストリンドベリイであるべき可能性をさへ、同時に持ち得ることも當然である。

「十字路」

自分は武藏野館に「在りし日」を見る爲例によつて時間を聞き合せて出掛けたが、「十字路」は既に映寫を終つたところであつた。自分に「十字路」を見る氣持は些しも動いてゐなかつた。「十字路」ばかりではない、自分の信じることのできない作品は一切見ないことにしてゐたからである。

自分の近くの動坂松竹館に「十字路」が上映され、自分は散歩しながら何か「十字路」に氣持が動いてゐた。客の少數い晝間の上映時間を聞き合せ、その翌日自分は「十字路」を見たの

である。自分は眩しい午後三時過ぎの外光の中を自宅へ歸りながら、稀しく昂奮を感じ、その昂奮の中に自分が「十字路」を武藏野で見なかつた頑固さと後悔を感じた。自分は日本の映畫にもつと打込んだ素直さを持つべきであることを泌々感じた。

さういふ自分に「十字路」は徹頭徹尾苦しい作品であつた。衣笠貞之助氏の作に苦しむ氣持が影響し、その影響はこれ程まで苦吟してゐる男がゐたかといふ、その良心が自分を感動させた。かういふ良心的な力一杯の作は自分には稀に見る感激であつた。

自分は衣笠貞之助氏の中にあるエロテシズムの不徹底も、リアリズムの非感情的であることも、演劇的であることによる非寫實的な統一も感じてゐたが、彼の「心臟」は尠くとも全容的に自分へも鼓動してゐた。此の鼓動は到底日本で得られるものではない、伊藤大輔氏の或種の表現にはそれがあつたが、自分の見た衣笠氏の中のものは日本で初めてであつた。尠くとも彼の鼓動は自分につたはり自分はよき編輯者がよき作家を發見した時に感じる、その喜びさへ感じた。自分はストロハイムやスタンバーグをも「十字路」に見ないことはなかつた。殊に「救ひを求むる人々」の影響も感じないではなかつた。併し乍らそれは批評を目標とする自分の病癖だとしても、「十字路」は明瞭に凡ゆる現代の「映畫的」なるものの上の第一流を勇敢に押切つてゐた。かういふ良心、苦吟狀態を續けてゐるものは賤商の徒の夢にも知らぬところであつたらう。

誇張に過ぎた時代的な大味は兎もすると、厭味を交へてゐたが、千早晶子氏の姉と、矢場の女に扮する小川雪子氏との對照、十手を拾つた男の相馬一平氏の性格描寫の中には、衣笠氏の試乘的な成功は疑ひなかつた。殊に千早晶子氏は自分は初めて見る人であるが、危ない初々しい、歯ぎれのよくない演技の中に「姉」を感じさせるものが充分にあつた。一場面に賣られた女が一人座つてゐるところがあり、すぐカットしてあつたが印象はよかつた。矢場の光景はくどくどしく、失明昏倒の描寫的な種々な手法ももつと簡潔を肝要とすべきであらう。矢場女の小川雪子氏のそれらしい嘲笑も、充分な呼應を監督との間に共鳴してゐた。

テムポは甚だしく不統一ではあつたが、これ程に仕上の利いたことは、夜の撮影ではあり苦衷は充分に外面ににじみ出てゐる。ともすると暗きに過ぎることは何か演劇的な構圖へ我々の神經を誘はないでもなかつたが、苦しい作品として自分を感動させたことは稀しいことである。かういふ作の上で苦しむ人も今のところ日本に數ある譯ではない。

「オレンヂ賣る頃」

ポーラ・ネグリの饂飩屋の給仕女は、それらしい境遇的な性情を表はしてゐたが、時とすると鋭利過ぎるところがあつた。サンフランシスコの下層女として理想の中には、その主題である「オレンヂ賣る頃」に妥協された「夢」を持ち、その「夢」に憧れてゐる限りもう少しの優しい弱々しさがあつてもよかつた。然し悲劇の演技的姿態に長じてゐるネグリの細部的藝風は、ともすると寫實以外の「型」を踏んでゐた。併しネグリに是等のことは批難にならないかも知れないが、男と一夜を明した翌朝などは、もつと心理的に弱いところと鋭さが寧ろ病的に出てゐてもよかつた。監督のローランド・V・リーの手法は仲々侮り難いが、もう少し突き込んでもよいと思うた。

ネグリの扮するアンニーをたづねる爲、自分の老いた姿を見せないために雇人の若いジヤツクの寫眞を送つた、オレンヂの園主ルイヂは、自分には餘りに甘過ぎる老人を思はせたが、ジヤン・ハーショルトの此藝風の困難さも思ひ遣られた。しかも斯ういふ「型」のある老人役はどういふ場合でも、相應の効果を擧げ得るものである。自分は破綻は無いと思うたが、大して感心しなかつた。サンフランシスコの饂飩屋で初めてアンニーに逢ふ時にも、相應な味ひが出てゐたが演技の巧さが演技そのものに甘えてゐるものを、自分は感じた。ハーショルトは曾てストロハイムの「グリイド」に出演したことがあつたが、「グリイド」の演技よりも今度は遙かに好印象を與へてゐたものの、自分はどうも附味の感じがしてならなかつた。併し此映畫をこゝまで引上げたものは、やはりネグリと對照されたハーショルトの重い役目の成就が、その裏書をしてゐることは言ふまでもない。

無駄と低迷とシインの延長を美事に打ち切つたことも、監督としての出來難いカツトである。自分は監督の常識的ではあるが、却々よい簡潔さを見せてゐるのに、感心した。此ローランド・V・リーは曾て「鐵條網」のネルリを監督してゐる。唯餘りに正確な尺度を以て終始する手法は、不篇的にゆるみを見せないが、物足りない硬さを感じさせるのは惜しい。

雇人ジヤツクに扮するケネス・タムスンは其ポーズに餘裕があり、きつちりと身に着いた藝風を示してゐた。棚摺りの日の上、アンニーとの一夜を明した翌朝の長椅子の上、新聞を讀んでゐる彼、それらには一種の「ポーズ」を打ち込むことに巧みだつた。或意味で自分はケネス・タムス ンを此映畫の中で充分に認めたいと思うてゐる。同時に最近の映畫では信じて見てゐ

られる映畫であり、教へらるゝところや新鮮さは無いが、小說的な人生の構圖面を見る愉快さのある、危氣の些しもない映畫である。

「在りし日」

フランク・ボザージの駄作、「在りし日」を見て、ノーマ・タルマッヂを氣の毒に思うた位である。間伸びのしてゐる事の耐え難い苦痛は、殆全巻的に漲つてゐた。曾てボザージは「第七天國」の間伸びを自分に示したが、「在りし日」の間伸びは言葉を絕してゐた。

ノーマ・タルマッヂの如き良き女優は、その監督次第で美しくも哀婉にもなる女優であるが、「在りし日」の彼女は氣の毒にも熱演はしてゐたものの、他の一切の人物と場面が、動いてゐなかつた。彼女だけが、その横顔にカメラを向けられるとき、年增のあぶら身、年增の厚い美しさを見せてゐた。老いたるポリー・パール、若いポリー・パール、それの扮裝の使ひ分けの二役は美事に成し遂げてゐたものの、到底駄作は駄作の域を脫しなかつた。

「野性愛」

「野性愛」は文明の交通の繁いといふよりも、殆文明と反對な原始人の部落、——隣家へ行くにさへ數十丁を辿らなければならぬ僻地に生れた若い男女の愛情を包圍する、古い部落的習慣と因習とに對する、又それらの風俗を破壞する若い男女の戀愛を强調したものである。

これは筋書による興趣を一應說明して置く必要がある。——原始人風な部落では女が働き、男が遊食しながら長閑に日向ぼつこをして暮すのである。女は飽迄その死期に近づくまで男の爲に働かなければならない、——さういふ部落に若い一人の男がゐて「本」といふものを初めて讀み、その「本」に記されたところに據つて男が働き女はさういふ勞役的な過激な仕事につく者でないことを知る、……さういふ若い男の眼に映じる一人の少女が自然その青年と氣持を合せるのである。

此悲劇の主人公である青年の母親が過激の勞働によつて死去してから、青年の父親がその少女を自分の妻にする權利を持つのである。これは此部落には容易に行はれることらしい。青年と少女とはその父親に初めて覺醒された氣持から爭つた上で、町の學校へ行くために二人携へて、此原始村落を或洪水の日に出て行くのである。

カアル・ブラウンの監督的な位置及びその精神は、自然の荒

蕪なきめを剝ぎ起し、そこに彼の寫實主義と、極めて素直な在りのまゝの生活を描かうとしたものである。作中の人物は悉く北部キャロリナの土人を使用し、その線や氣持の上に根強い初初しさを見せてゐる。ヘレン・マンデイの少女には何らの演技的な技巧がなく、辿々しげな素直さに野蠻な味ひを漂はせてゐる。青年のフォレスト・ジエームスも其儘些しの誇張されない土人の青年を扮し得てゐるのも無難である。父親、母、村の人人、それの扮裝人物の中には虚僞な映畫的な身振りや構へも見られなかつた。唯全體に一本の力強い線を引いたやうな感じである。

最後の出水の光景は陳套な再模寫風なシインであり、失敗に近い。場面を一々檢討することは此作には氣の毒である。男の村人が女を働かして自分らが遊食睡眠を貪る憫い、古い寫眞のやうな幾場面の光景が、自分に人生的な暗い涓滴を心に落し、その描寫は自分の注意を惹いた。

「野性愛」ばかりでなく斯ういふ人生相を抉ることは、その材料自身が既に際物風であり、効果の上に危險性をも伴ふものである。カアル・ブラウンの原始趣味及びリアリズムへの徹底と雖も「野生愛」の試乘には何か知ら皮相の感がしないでもない、只、斯ういふ原始生活に對する質問的なものに對し、それの解決は結局「町へ出て行く」に過ぎない。文明への反逆的な正體ではなく、反文明を文明意識の中に混成せしめる曖昧な、極めて際物的な古いものである。失敗の密度は根本的だといへば、それまでゝある。併し乍ら彼が僅に映畫資本に對する、又常套的アメリカ風な原始主義の輕薄さに此一篇を投げ出したとすれば、自ら映畫と彼との氣持は別様である。

自分は何か愉快な氣持で此「野性愛」を見ることを得たのは、此の中に映畫的な氣障や厭味や積重ねがなく、ゴツゴツした粗面ある布を撫でる感じを愛したからである。

雜

○映畫館に於る演劇其他　邦樂座では映畫の間に舞踊や新劇を挿入してゐるが、自分ばかりでなくあゝいふ出物は甚だ迷惑である。自分は映畫を見物しに行くのであつて他の何物をも見たくない者である。新劇や舞踊を見ることは映畫觀照の上に滑純な期待を裏切り、堪え難い時間的苦痛をさへ感ぜしめるものである。自分は音樂でさへも其映畫の間に演奏される心要がないものに考へてゐるのに、新劇や舞踊は以ての外のことである。かういふアメリカ趣味は此國の映畫館では拒絕したいものである。自分は先以て之等の演劇を見ないために一應時間を附

き合してから出掛ることにしてゐる。不幸にして之等の演劇をも見なければならないとすると、映畫見物を投げ出さなければならない。映畫見物に寶塚の歌劇などを見せられることは、自分には慄毛が立つのだ。

○觀客的智識層　映畫館に於て最も重要なことは「靜肅」さであり、幾百人の見物がゐても一人もゐない程にしんかんとしてゐるのが映畫館の特徵ある空氣である。映畫的觀客は現世に於る凡ゆる高い讀書的階級の網羅であり、凡ゆる新鮮な感覺による人々の集ひである。斯ういふ階級の集合は他のどういふ場合にも見られない。自分は何よりも觀客的智識層が現代に於て斯くの如く美事に成就されてゐるものを知らない者である。

他の歌舞伎劇や音樂會等はそれらの專門智識に依つて見物されるが、映畫看客の場合は社會の諸々な階級と趣味とから秀拔された集ひであつて、音樂會のやうに偏重された集合ではない。それ故映畫看客の精神的な智識層は或意味に於る凡ゆる現世的の代表されたものであることは疑へない。

○「十字路」が二流以下の映畫館の添物として上映されてゐることは、皮肉であり上映順序を知らない無能を表はしてゐる。今のところ凡ゆる時代物や新劇物が添物たる資格はあつても、「十字路」はさういふ資格を超越してゐる。「十字路」それ自身は未完成である程生硬であると言つてよい。衣笠氏はその完成期をどう切拔けるよりも、先づ彼の中にある惡趣味を退治すべきであらう。それに據つて彼はもつと別途にある彼自身を掘り出すことを得るであらう。

映畫批評家の狹量

日本の映畫批評家ほど狹量なものは凡そ世の中にあるまい。彼等は映畫を自分達だけのものだと思つてゐるのである。自分達以外のものが映畫について一言でも物を言ふ權利はないと思つてゐるのである。映畫の分かるのは自分達だけで、自分達以外のものには映畫はまるで分からないと思つてゐるのである。

ところが、何ぞ知らむ、世の中に映畫ほど大衆的な藝術はないのである——若し映畫が藝術だと言はれ得るならば。

映畫は決して特殊なグルウプの爲に存在するものではない。萬人の爲に存在するものである。誰が見ても差支ないものである。否、誰をでも喜ばすのが映畫の眞の目的である。もつと尖

つ込んで言へば、或映畫の眞の價値は、決して或特殊なグルウプの批判に依つて決定せられるものではなくて、萬人の鑑賞に依つて定まるものなのである。

從て、映畫を若し藝術とするならば、それは極めて低級な藝術である。なぜと言へば、高級な藝術は決して萬人向ではあり得ないのに、映畫は是非とも萬人向でなければならないからである。

全體は措いて、先づその部分に就いて考へて見よう。映畫が持つ文學的内容は所謂「ストオリイ」である。それに對して演劇が持つ文學的内容は「戯曲」である。「ストオリイ」と「戯曲」とが、藝術的價値に於いて持つ間隔を思ふ時、映畫と演劇との藝術間隔は誰にでも想像がつくだらう。だが、こんなことを言ふと、日本の映畫批評家は、直ぐに色を作して怒號するだらう――「映畫の價値はその文學的内容には關係がない。」と。

ところが、私はさうは言はせない。成程、映畫の價値がその文學的内容にのみ繫つてゐないことは事實である。如何に文學的内容が貧弱でも、映畫としての立派な作品は澤山ある。(さうして、さういふ作品が實は本質的に映畫として優れたものであるのかも知れない。)併し、どんな場合でも、全然文學的内容を持たない――即ち、文學的内容には全然關係がない――映畫といふものは考へ得られない。「地上」や「チヤング」のやうな實寫的映畫にも、立派に或種の文學的内容はあるのである。謂ふところの「絶對映畫」にさへリズムとしての文學的内容はあるのである。

そこで、映畫が如何にしても文學と全く手を切ることが出來ない以上、その文學的内容が――文學それ自身は勿論――演劇にさへ劣るといふことが言へない道理はない。

だが、それは單に文學的内容といふ部分に於てのみの考察である。次に俳優の演技といふ部分を考へて見よう。第一に先づ注意しなければならないことは、映畫俳優として世界に名の高い者の、殆ど總てが舞臺俳優であることである――或は、あつたことである。アスタ・ニイルゼン、ポオラ・ネグリ、パウル・エエゲナア、エミイル・ヤンニングス、ヱルナア・クラウス、ルチイ・ヘエフリツヒ、いづれもさうであり、或はさうであつた。さうして、彼等の藝術的全價値は「臺詞」あつて始めて分明するのであつて、映畫に於ける彼等は彼等が持つ價値のほんの一部を示してゐるに過ぎないのである。

かういふと、日本の映畫批評家は、また顏色を變へて即座に抗議するだらう――「では、我がチヤアリ・チヤツプリンはどうなのだ。」と。

ところが、チヤアリ・チヤツプリンをも私は決して例外とし

て考へてはゐないのである。成程、チヤツプリンは臺詞の役者ではない。彼はパントマイムの役者である。優秀な默劇の俳優である。だが、彼のパントマイムは、彼の默劇は、抑もどこで生れたものであらう。言ふまでもなく劇場で生れたものである——若し劇場と言ふのが惡ければ、サアカスの舞台で生れたものである。それは決して映畫によつて生れたものではなくて、舞台で生れたものを映畫に利用したまでである。

その意味から言つて、チアリー・チヤツプリンも亦優れた舞台俳優の一人であると言はなければならない。さうして、私の如きは、映畫俳優としてよりは寧ろ舞台俳優として、彼を世界の第一流に數へる者である。

芝居の分らない者に——舞台を知らない者に——チヤツプリンの技藝の眞の價値は分からない。これが私の信條である。「映畫史上のチヤツプリン」、それは私の研究題目ではない。「演劇史上のチヤツプリン」これが私の汲めども盡きぬ研究の泉である。

優秀な映畫俳優の殆ど總てが舞台俳優であるといふことは——さうして、映畫專門の俳優殊に女優が、映畫の上でも遥に舞台俳優に劣るといふ事實は——映畫といふものの藝術的低級さを語る證據でなくて何であらう。

この結論は、全日本の映畫批評家を激怒させるだらう。さうして、彼等の最も新進なる者は卓を打つて叫ぶだらう——「君はロシヤの映畫を見たことがないのだらう。あのプドオツキンの「母」はどうだ。あの場合、撮影監督は舞台俳優を用ひながら、彼等に少しも舞台的演技をさせてゐないではないか。プドオツキンは俳優を單に情緒の道具として用ひてゐる。恰も瓶や皿を扱ふやうに、人間を扱つてゐる。どこにも舞台的演技は見られない。而かも、あの作品の立派なことはどうだ。」と。

待て。成程、君の言ふことに間違ひはない。君の詞はその儘僕の詞だと言つても好い。僕は「母」を見た。そして、現在では、あの映畫を世界で最も優れた映畫だと信じてゐる。だが、あの息子をやつた役者は誰だと思ふ。モスクワ美術座のバタロフだ。あの母をやつた役者は誰だと思ふ。以前美術座にゐたワラノウスカヤだ。あの二人は、二人ともスタニスラウスキイの薫陶を受けたもの、又受けつつあるものだ。あの二人は優秀な舞台俳優だ。それだからこそ、プドオツキンが意圖した通りの情緒の道具となることが出來たのだ。舞台で優秀な役者であればこそ、舞台を離れることが出來るのだ

私の答はこれである。そして、依然として、映畫は優秀な舞台俳優に克服されるといふ私の議論に變りはない。

映畫には、まだレジイの重大な方面がある。撮影術がある。編輯がある。タイトルの問題がある。だが、私の當面の問題は映畫全論ではない。唯、日本の映畫批評家の多くが無暗と映畫を祭り上げて、俗人には手も觸れさせぬといふ態度を執つてゐるのが苦々しいので、內容の方面から、その迷信の一角に駁撃を試みたのである。

そこで、更に他の方面から映畫といふものを考へて見よう。前にも繰返して言ふ通り、映畫は到底文學と手を切ることは出來ないのである。また舞台とも全く無關係になることは不可能なものである。「舞台で學んだ總てを忘れよ。」演劇から映畫へ移る殆ど總てのレジッスウルは、この詞を掲揚する。だが、それは言ふべくして、到底行はれることではない。それが行はれてゐるやうに見える場合は、見物が欺されてゐる場合である。

兎にも角にも、映畫といふものの內には、種々雜多なものが含まれてゐる。文學もある。演劇もある。光線色彩の科學もある、靜と動との音樂的配列もある。建築もある。彫刻もある。繪畫もある。機械もある。凡そ世界のあらゆるものが含まれてゐるところに――又含まれ得るところに――映畫の價値があるのであつて、吾々映畫の愛好者にとつて、それが藝術として低級であらうが、高級であらうが、こんなことは問題にならないのである。

それ故、誰が映畫の批評をして惡いといふ法はないのである。詩人は詩人としての批評をするが好いし、小說家は小說家としての批評をするが好いし、劇場人は劇場人としての批評をするが好いし、思想家は思想家としての批評をするが好いし、科學者は科學者としての批評をするが好いし、美術家は美術家としての批評をするが好いのである。

さうして、さうした各方面の批評の綜合が、或映畫に對する眞の「批評」となるのである。專門的な映畫の批評が、決して或映畫に對する眞の「批評」ではないのである。

繰返して言ふが、映畫は萬人の爲にあるもので、決して少數の爲に存在するものではない。映畫を見る自由が何人にも與へられてゐると同じやうに、映畫を批評する自由は何人にも與へられてゐるのである。

スペシアリストとしての映畫批評家が、吾々俗人の批評の當否を檢討してくれるのは好い。唯淡然と「沈默」を强制される道理は決してないのである。

「日本の映畫界に於ける程「ことば」の多い社會を私達は他に知つてゐるか。」偶座右にあつた映畫往來の六月號を見たら、岩崎昶君のかういふ詞があつた。

私は思はず案を拍つて叫んだ――「さうか。それで分つた。

彼等は自分達にのみ「ことば」を獲ようとして　他人に「ことば」を獲させまいとするのだ。」と。

驚くべきは、日本映畫批評家の利已主義である。

二三の日本映畫

先月は不勉強で、一向西洋の繪を見なかつた。僅に「ライン悲恰曲」といふ獨逸映畫を時事新報の講堂で見せて貰つたが、これは歴史的興味以外に何もなかつたと言つて好い。その歴史的興味も、私のは極めて漠然としたものだから、詳しい印象を書くよすがもない。

その代り、先月は珍しく日本映畫を澤山見た。澤山見たと言つても、完全に見たものは少い。多くは一部分を見たに過ぎない。

日活の「地球は廻る」は、試寫を日比谷公園まで見に行つたのだが、雨が降つて來たので、軍樂だけ聞いて歸つて來てしまつた。今の私の體に雨は大毒だものだから。

松竹の「彼と東京」は、淺草の電氣館でほんの終の方を少しだけ見ただけである。だから、何も感想らしいものはないが、役者のメイクアップの薄汚ないのだけが相變らず目についた。どうも日本の映畫役者はあんまり色んなものを塗り過ぎるのではあるまいか。アメリカの寫眞などを見ると、どんな大根役者でも、顔だけは磨きがかかつてゐる。見てゐて、氣持が好い。照明や撮影や現像などの關係もあるだらうが、どうも日本の役者の顔は不愉快に汚ない。

衣笠君の「十字路」は完全に見た。併し、この映畫の價値は私には分からなかつた。一體、作者は何を描かうとしたのか、それが私にはまるで分らなかつた。私に分かつたのは、寫眞製作の上での獨逸映畫模倣の方面のみであつた。大提灯のぐるぐる廻るのを賞めてゐた專門映畫批評家もあつたようだが、その人は多分「カリガリ博士」を見たことがない人だらう。

撮影（照明並にカメラ）の苦心も分かつた。演技の監督、役者の努力、それが並大抵のものでなかつたことも想像された。千早晶子といふ女優にも、阪東壽之助といふ青年俳優にも、私は十分好意が持てた。殊に相馬一平君の十手を拾つた男は、日本の映畫に珍らしい收穫であつた。

だが、それにも關らず、私にはこの映畫が分からなかつた。これに比べると、「狂へる一頁」の方が餘つ程分かつた。勿論、作者には分かつてゐるのだらうが、その作者には分かつてゐるものが、吾々には傳はつて來なかつたのである。兎に角、映畫がそう分かりにくいものになるのは、私などは喜ばない。

松竹の「富岡先生」は、先生が東京へ出かけて行くあたりか

らラストまで見た。これは僅二週間の製作ださうだから、監督の苦辛君も思ふやうな爲事が出來なかつたのであらう。どうも、小說から芝居、芝居から映畫と、だんだん質が惡くなつたやうである。こんなことを言ふと、また文學過重だと言つて叱られるかも知れないが、本質的な映畫として別に見る點がなければ、やはり原作のことを考へるやうになることはやむを得ないことである。井上君の富岡先生も、扮裝は巧いが、やはり吾々は聲が聞きたくなつていけない。その「聲が聞きたくなる」といふところに、映畫としての「富岡先生」がまだ足りないところを持つてゐるのではあるまいか。

右太衞門の「水野十郎左エ門」、これは初めの方を一寸見ただけであるが、水野のさして出る傘の骨が一本折れてゐるのが氣になつた。大寫しで水野が泣くと、はりつけた澤瀉の紋の大きいのが、しやちこばるのも氣になつた。相變らず歌舞伎の衣裳を用ひてゐるのである。

からいふ寫眞には、きつと大たぶさの侍と文金に立矢の字といつた武家のお孃さんとのラブシインがあるが、その動作がいつも西洋式なのは憤飯である。

（小山内　薫）

春晝の夢（旅行記の一節）

岡田信一郎

十日雨だ、雨に濡れて女の洗髮のやうに美しい艶色を佩びた翠柳の下に、小鹿がしよんぼりと寄りそう添景が窓から見える。奈良でなくては見られぬ圖だ、雲霧に若草山は淡く濃く、遠く近く見え隱れする。春日杉の木立が霧に隔てられてくつきりと浮き出す、其の黑い綠を背景にして、山櫻があでやかに咲く。奈良の春はしとやかに美しい。窓下の若櫻は過ぐる秋には、霜紅葉美しく花にも增す紅の色を見せたが、今の花の色は秋には見られぬ麗しさでもある。東京から持ち越した疲勞と、二三日の寢不足から、何となく狂つた體の調子を、此の雨の日の心地よい朝寢で恢復する。今日は法隆寺防火水道落慶式で、夫れに列する豫定で東京を發たが、「推古の春を訪ねる旅に出て、此處で又ゆくりなくも天平の春の花に遇うた。其一端は昨日奈良博物館に見た。昨夜ホテルで邂逅した小泉策太郎氏からも大阪朝日社の天平文化展覽會の美事さを說かれた。私は急に豫定を變じて、今日の水道落慶式を缺席しても、朝日社に天平の盛りの花を見やうとする。

一路直通の大軌電社は誠に便利である。私達は早くも朝日別館の樓上で天平文化綜合展覽會を見る。同社のO君がまめ〳〵しく案內して呉れる。今年推古天皇の聖諱千三百年に對して、天平改元が千二百年に當る。夫れを機として朝日新聞社が此事業を企てたのだ。而して獨り藝術と曰はず、天平文化全般に亘り、之を回顧宣揚せんとした所に特別の意義がある。其故に出陳も美しい佛像や工藝品のみではない。古文書、古經に亘つて特に見る可きものが多い。法隆寺、藥師寺、東大寺、興福寺其他の寺々からも國寶の佛像や工藝品が出陳された。又個人の蒐藏にかゝる佛像工藝品の貴重なものもあつた。正倉院の御物の

模製も多く飾られた。萬葉集の寫本や模本複製本も一圍となつて陳列された。大佛殿の復原模型も出陳された。中にも古寺からの、諸家からの經卷古文書は特に非常な觀物である。寔に此處に僅かに其一端を見せた天平の文化の花は、豪華なものである、艶麗なものである。古經の中には知恩院の玄昉法師表啓がある、高野山と安田家との增壹阿含經がある、十卷と纏つた尾の道西國寺の金光明最勝王經がある、久原文庫の和銅五年十一月十五日寫すとある長屋王願經の般若經がある、根津氏や上野氏の三藏和上表制集がある。其他何彼と美事なる文書數十、寔に數日の觀物である。逝く春をあはたゞしく趁ふ行旅の客には、不似合の展觀である、夫れにしても此處に僅かに其一端を見せた天平の文化の花の豐麗と豪華とは、滿開の櫻花を以てしてのみ僅かに對比する事が出來やう。

中食とも夕食ともつかぬ食事を濟まして、天王寺に參詣する。私が柳四天王寺の名を初めて見たのはまだ少年時代太平記を讀んだ時である。小供の時から弱蟲だつた私は、凧あげも、軍ごつこも得意ではなかつたが、稗史や小說はかなり讀んだ、太平記なども最も早く讀み耽つた本であつた。其中に正成が天王寺で未來記を見る事がある。天王寺の名も此れが始めての見參であつた。而して上宮太子の御名も此時始めて覺えたのであつた。「當二人王九十五代一天下一亂而主不レ安、此時東魚來呑二四海一日沒二西天一、三百七十餘箇日、西鳥來食二東魚一、其後海內歸レ一三年、如二獼猴一者掠二天下一三十餘年大凶變歸二一元一、云々」とある未來記の文も確かに讀み覺えた記憶がある。其の四天王寺へ今詣でたのである。

四天王寺は世に我國佛法最初の寺として名高い。やかましく學究的に云つたら必しも最初の字義に添はないが、最初の大寺院として傳はる事に疑義はない。日本書紀崇峻天皇の條下に用明天皇の二年秋七月蘇我馬子宿禰大臣勸諸皇子與群臣謀滅物部守屋大連云々とあつて此時守屋大連の軍強盛で皇子等軍與群臣衆怯弱恐怖三廻却還、是時厩戶皇子束於髮額而隨軍後、自忖度日將無見敗、非願難成乃斮取白膠木疾作四天王像置於頂髮而發誓言今者使我勝敵、安當奉爲護世四王起立寺塔、蘇我臣馬子大臣又發誓言、凡諸天王大神王等、助衛於我使獲利益、願當奉爲諸天與大神王、起立寺塔流通三寶、誓已嚴種々兵而進討伐、云々とかくて平亂之後於攝津國造四天王寺分大連奴半與宅爲大寺奴田。とある此時建てられた場所は紀にはないが、諸書の傳ふる所によれば玉造岸上とある。又書紀推古の元年の條に是歲始造四天王寺於難波荒陵とある。其移築されたのが今の地である。竣工の年月は記載はないが法隆寺に先立つ事であらう。

而して法興寺、法隆寺と並んで最初であるばかりでなく規模が最壯大であつたと想像される。今も傳へて荒陵山四天王寺と號して居る。

法隆寺が、不思議にも、幸にも、生たる推古の寺塔を保有するに反して、四天王寺は其後數回の災厄に遇つた。雷火にも、地震にも兵燹にもあつた。承和及天德の頃に一度燒失し、正平年間には地震で倒潰し、天正四年には織田信長に燒かれ、元和元年には大坂陣に際して、家康の爲に燒き拂はれた、又享和元年には雷火の爲伽藍の大半を燒失した。名たゝる古刹とて燒けては建ち、崩れては立つた。而して遂に他の古寺に見るやうな衰滅の悲運を免れて、今の規模も壯大である。斯くして現在の寺塔の主なるものは文化年間の再建にかゝると稱されて居る。

かくして現在寺域三萬七千坪、堂宇七十九棟、猶塔頭院を加算して八十六棟、規模から見れば稀有の大寺院である。然かも法隆寺が靜寂閑古の梵域であるに對し、天王寺は場所柄と言はうか、老若男女、信不信の徒の參詣遊樂の客多く誠に混雜繁華の法境である。

當寺の今の參詣の通路は石の鳥居を潜つて、西門からはいるので、横側からはいる事になる。寺の正面からの總觀を得るのには、南門に廻つて仁王門を入るがよい。即本寺獨特の配置で正面に五重塔が屹立する。私は觀光客並に、如の敷を踏んで五重塔へ登つた。丘陵に立つ塔婆の上層は、視野俄かに擴がつて、風が忝い。脚下の大阪の市街は屋波無盡に遙かの海に連る。想ふに當時創設の時には、今の法隆寺に見る如く、堂塔伽藍整備して、金堂講堂其他の偉構甍高く、步廊長く連つて、塔婆夙忽と聳えて、壯觀であつたらう。特に丘陵に高く建つ事とて、浪華の港からの遠望は壯偉なる景觀を呈した事であらう。百濟から、新羅からの人達も、瀬戸內海の美しい山々、島々の景色を見て、浪速の港に入つて舟泊するとき、遙に丘陵の上の一帶の伽藍堂塔の偉觀を見て、皇國の威風を仰いだ事であらう。第一印象として、聞くに勝る日本の美さと偉さとを銘し得た事であらう。其時分我國の勢威は彼等を壓したけれど、文化は彼等程進んでは居なかつたので、彼等使客を應接する人達も、此の大寺の出現にどれ程肩身廣くも覺えたであらう。小野妹子を送つて來た隨使裴世淸も、百濟の阿佐太子も、高麗の僧惠慈も、梵鏑波を渡つて舷をたゝく時、朝暾に夕陽に、此の堂塔を美しと見た事であらう。斯くて此の伽藍は、推古の春の一株の花として佛法興隆の一表象であるばかりでなく、其當時國際的にも美しい働を爲したのであらう。塔上遙かに大阪灣をのぞんで、私は其當時浪速の津の舟泊から（其時分は海も近かつた筈だ）此

の堂塔を仰いだ人達の心を偲ぶ事が出來る。而して後に此記を淨書するに際して、此寺の縁起に「百濟、高麗、任那、新羅、貪狼之情恒以强盛攝伏彼等洲爲令歸伏造護世四天王像向置西方後代々世々王位固令守護」とあるを見た。之れ必しも眞實ではあるまいが、私の塔上の感懐が空想では無かつた事を確め得る事は出來やう。

四天王寺の今の建築は前述の如く數度の回祿で、凡て後世の再建にかゝる。其中東大門が豐公の再建と稱され特別保護建造物で、現在建築中では之れが一番舊い。他の堂塔の多くは文化時代の再建であつて、専門的には別に見る可き建築ではない。唯此寺で不思議にも面白いのは、堂塔の配置が當初創立の型を其儘襲踏して變らない事である。誰れでも法隆寺に詣る人は、中門を入つて其の左右から續く歩廊の一劃の中に、左に金堂、右に塔婆と對立する異樣な配置に氣附くであらう。之は天平以前の形式で百濟風の配置と呼ばれて居る。今四天王寺では、南大門を入つて仁王門（中門に當る）の左右に起る廻廊は、後方の講堂兩脇に連つて其中に五重塔を前に、金堂を後に、縦に並べて對立せしめ、且廻廊には東西に中門を開いて居る。此等所謂百濟風の配置法である。猶當時では鼓樓、鐘樓が講堂の背後左右に建つ等法隆寺の現狀より反つて舊い配置の狀態を傳へて居る。（法隆寺の今の講堂の位置廻廊の屈折、鐘樓經藏と廻廊との關係は講堂燒失後の變更による）、かく四天王寺は度々の回祿再建にかゝらず舊規を正確に傳ふる事は不思議な程めずらしい事である、而して之は由緒ある寺として舊規が尊重されて、其再建が直ちに行はれた結果であらう。

五重塔の建築は極めて粗雜であるけれど、斗拱を使用せずして持送を使用し雲水の彫刻をなし（之が爲め雲水造と云ふ）法隆寺に見る雲斗拱に疑似したる點ある事は建築家の注意を率く點である。又金堂の屋根が所謂錣葺と稱する形式で法隆寺玉虫厨子宮殿の屋根と同樣で、入母屋の元始形を想はせるものがある。是亦不思議にも四天王寺に保持せられた建築の舊い形式で建築家にとつては有難い事例である。

講堂の後には六時堂がある、講堂と六時堂との間には池があつて龜が多く放たれて居る、之が四天王寺の兒女に記憶される一番の事象かも知れない。その池の上には石造の舞台があつて、聖靈會には舞樂がある、六時堂の後には食堂が建つ、又金堂の東廻廊外には、法隆寺と同じやうに太子堂がある。かくて今の伽藍は美術的建築として賞せらるゝものはないが規模壯大で世俗には立派な大寺院である。數ある寺寶の中で特に有名なのは藤原末期の扇面古寫經である。それを私は昨日奈良博物館

の出陣に見たばかりである。

四月十一日此の旅の眼目の日である、私達は今日推古の御宇の古寺、斑鳩（イカルガ）の法隆寺に、其創立者たる聖徳太子の千三百七年の回忌と其本願施主の大檀那たる推古天皇の千三百年の聖諱の法要に参列するのである。幸に大毎社長本山氏の自動車に同乗して、聖徳太子奉賛會總裁久邇宮殿下の御一列に陪した。大和平野の春は昨日の雨に引かへて殊更にうらゝかだ。郡山の狭い街を過ぎ、富尾川を渡り、小泉を通れば法輪寺、法起寺の推古の三重塔は、緑まだ淡い春の森に聳えて、推古の氣分を標示する。法隆寺の門前には、里から村からの群集が一杯で、南大門の中には殿下を奉迎する人達が一隊に居並んだ。然し雑踏も、群集も、此寺を現代の俗界のものに引き直すには無力であつた。寺は一千三百數十年、持ちつゞけた古代の空氣の中に、現代とは切り離されて、落付きと寂かさを持つて建つて居る。然も今日は中門に張られた幔幕にも豊かな慶がたゞよふ。降るやうな春陽を浴びた千古の寺塔は久しい睡から目覺めた。

法要の始まる迄の小閑を盗んで、西園院新築の茶席を見る。之れは昨日防火水道落慶式に台臨の節、殿下を招じて開かれた新席である。其處の廣間の襖を、平福百穂畫伯が一兩日前に描き上げたと聞く。金銀泥で秋の野を寫した畫伯の才筆には、葉末の露をもこぼさない繊細な神経が働く。

午前は聖靈院で聖徳太子千三百七年の小祭が執行された。私達は大床に敷かれた圓座に跪る。式は法隆寺村小學校の素朴な生徒達の太子讃仰の唱歌に始まる。法隆寺の僧上は鳳凰丸紋の赤地金襴の袈裟に装つて、僧座に直れば、香烟縷々として登り、衆僧の讀經に、法雲堂内に充滿る。聖徳太子十七條憲法を拜讀する正木美術學校長の聲は吃々として、篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛、法、僧なりと響く。寔に太子創始の佛法の世界は千三百年を隔てゝ、今茲に再現せらるゝのである。總裁殿下、妃殿下の篤き御燒香あつて、午前の式は終る。

寺の境内はさすがに今日は賑かで、老若男女の文字通り、遠里近村の人達で塡る。太子會員として白襟紋付の晴れ姿の町の婦人も居れば、尻はしよりの村の老爺も居る。然し群集も亂れず、雑踏も騒がしからず、彼等は現代の春を、私達は推古の春を、各樂しむ事が出來る。寺内の所々には今日を機縁として、數奇者の茶會が催されて、此への會衆も多い。私達は午後の法要までの小閑を利用して、此等の茶會を歴訪した。峯の薬師の方丈では、床に一休の軸をかけて、石州流の手前を見せる。蓋し法隆寺の隣里小泉は片桐家の故地である。薬師下の廣庭では、折から滿開の櫻樹を席と見て下に毛氈を敷いて野立の趣向

だ。寶珠院では神戸の富豪中西田村兩氏が中心となつて當世風の茶會だ、席の諸道具から廣間床の雪舟の幅、古染付の花器、凡て數奇者を感服させるに充分であつたが、唯肝心の環境の古刹の意を利用し得なかつた事が惜しまれやう。やがて鉦の音ならぬ梵鐘の響は、式の時刻を報じて、席入りならぬ式場着席を促して來る。

晝からは推古天皇一千三百年の御遠忌を奉修する法要である。平素は深く眠つた古刹も、本寺草創本願の大檀那なる推古天皇の御聖諱の今日、推古の春は再び甦つて、瑞氣法域を罩め、法花一時に開く趣がある。うらゝかな春光は慈雨の降り注ぐやうに、惜氣もなく照り付けた。五重塔の双輪にも、金堂の四檐の風鐸にも掲げられた彩幡は春風に飜つて、眠つた古建築にも推古の春が來た。講堂は緞子の彩幕を張り、前の左右には、法隆寺大觀其他の美術寫眞集で見る美しい金銅幡が、金色に輝いた。講堂正面階の左右には高座が設けられ、前の廣庭には舞台が設けられ、其四隅に四天王の彩旗を建てゝ嚴かに飾り付けられた。舞台前の左右には寺寶の鼉太鼓が並び立ち、樂舍には五彩瓜紋の幔幕が張られ、装束烏兜姿の樂人が居並んで、大和繪にある、大裡御遊の圖其まゝである。正面左右の高座には、右に講師として法隆寺の管主佐伯僧正が、遠山の袈裟に威儀を正し、金銅の柄香爐から立ち登る香烟は、風なき空に纏の如くに立ち登つた。左の高座には讀師として松尾僧正寂然として控えた。講堂の廣縁の大床には總裁殿下、妃殿下を中心に陪員左右に居並んで、私達も其末座に連つた。唄匿、散華、梵音、錫杖と、式は古例の如くに進んだ。美装した數千の僧侶達の誦する讀經には、私のやうな無信の徒まで、法雲につゝまれて佛の國に誘はるゝやうに感ずる。麗かな陽光をあびながら佛の國の法莚に侍して、私は春晝長閑に推古の春を夢みた。

今を距る千三百十數年前、此の伽藍の出來上つたときには、盛なる落慶の法要があつた事であらう。推古天皇も行幸されたらう、聖徳太子も、蘇我馬子も、秦川勝も、扈從したであらう。百官は新に制定されたばかりの、美しい衣冠を着かざつた事であらう。工匠として此處の像銘にも名を殘す鳥佛師も、何處にか控えたらう、今に名は殘らねど伽藍建築の工匠の棟梁も、晴れの面目に欣然と參列したであらう。私は建築家として彼の悦びと誇とを想ひやる事が出來る。其の盛儀は正史には録してはないが、飛鳥の法興寺の造佛供養の事は書紀に見える、本寺の落慶も同じ盛儀であつたであらう。聖徳太子の薨ぜられたときも、法要は濕めやかに、然し盛大に修せられた事であらう。天下萬民の悲傷弔悼の狀は正史にも明記されて居る。「是時。諸王諸臣。及天下百姓悉、長老如レ失二愛兒一、而鹽酢之味

在レ口不レ甞。少幼者如レ亡二慈父母一。以哭泣之聲。滿二於行路一。乃耕夫止レ耜。舂女不レ杵。皆曰。日月失レ輝。天地既崩。自今以後。誰恃哉。法要の讀經は民衆の泣噓と、悲しい唱和をした事であらう。今より恰度千三百年前の推古天皇の崩去の時も、此寺の鐘は悲しく響いたのである。然今一千三百年の歳月を隔てゝ、今日の祭は壯重に修せられ、參衆は皆春光の内に法悅にひたつた。

表白文を讀で、高座の上の僧上が、聲高らかに推古天皇の御遺德を讃仰するとき、私の推古の夢は絕頂に達した。論義は舞台中央の圓座に座した鋼衣の僧と、僧正との勝鬘經と法華經とに關する一問一答である。高らかに問ひ問はるゝ師弟の僧の應答は、寔に其當時の法隆學問寺を偲ばしむるものがある。法要の最後に舞樂が催された。響く鼉太鼓は國寶の美しい古器である。舞樂の面も寺寶である。裝束も元祿頃の古いものとか、太古の寺の春晝に緩急の古調で舞ふ舞樂の姿は、實に今日の法要に似つかはしいものだ。寔に伎樂は推古朝の廿年に、百濟人味摩之が呉より學び傳へ、之を櫻井に置いて少年を集めて、伎樂の儛を習はしめたとある。而して當時、推古天皇も度々みそなはした事であらう。今の舞樂は其の伎樂の手振ではないけれど。私達には推古の春の景物として、之れで充分である。春晝の夢は現から幻に、幻からうつゝにと去來する。其のうつゝさえまぼろしのやうな美しさである。鼉太鼓の鈍い響は、靜かな春の空氣を動かして、風なきに落花を誘うて來る。流れるやうな笛の聲、むせぶやうな篳篥の音に、破序急の舞は、或は大どかに、或は勇壯に、寔に美しい景觀である。

かくて小墾田宮御宇天皇の千三百年の御聖諱の法要は、滯りなく奉修されて、私達も推古の春の夢から醒めた。此夜總裁久邇宮殿下の御賜餐が奈良ホテルにあつて、私達も御召に與かつて席末を汚す光榮を得た。宴後大毎社は殿下大和河內御巡歷の活動寫眞を、御覽に供し、吾等も陪觀する事が出來た。志貴山、金剛山、觀心寺、金剛寺と寫し出さるゝ數々の中に、磯長山田御陵の光景があつた。私も推古天皇の御陵を參拜したいと期しながら遂に果さなかつたが、此處に殿下御參拜の光景を映畫に拜する事が出來て、希望の一端を充し得た。推古天皇の御遺詔に曰く。「比年五穀不レ登、百姓大飢、其爲レ朕興レ陵。以勿二厚葬一」とかくて天皇は敏達天皇との間の御子竹田皇子の陵に葬られたとある。今其の御陵は、松杉繁茂して、春陽をあびて寂かに映畫に寫し出された。

十二日、朝再び奈良博物館に天平文化記念品特別展覽會を見た。蕪村の句に「遲櫻や奈良に二日の泊り客」と花盛りの奈良に、推古、天平の春を訪ねて、僅か四日の泊り客であつた私達は、あまり慾張りすぎて、あまり惜しかつた。新藥師寺も、

十輪院も、三月堂も東大寺も、遂に訪ねる暇を作り得なかつた。僅に十一日の夕、一時間ばかりの閑を利して、正木校長の案内で、ホテルから間道傳ひに、馬醉木の樹木を抜けて、春日社に詣で、春日の森の奥、竹柏樹の林を逍遥したばかりであつた。奈良のあせびの春は、櫻の春のやうに華やかではないが清清しい美しさは、他所に見られない。

其日の午後は京都に居た。細川侯爵、正木美術學校長に陪して、守屋孝藏氏の邸に、蒐集の陶器と古鏡とを鑑賞した。氏の寶藏には、古陶の優品のみが、精選されて、整然と陳列され、優れた氏の鑑識と嗜趣とが慕はれる。又座敷に招ぜられて、珍藏の古鏡數面を觀た。其多くは精巧な唐鏡であつた。推古の春を訪ねて、天平の文華を見た私は、また茲に守屋氏の陶器と古鏡とに、其本源たる盛唐の文華の花片をも觀得た。私達は目觀目映じた。偉なる哉盛唐の藝術と云ひたくなる。其片影にだに私達は心も魂も奪はれる。然も其精技は今日の文化を以てしても窺知する事が出來ぬものがあると言はれる。歸途藤井氏の有隣館を過つた、夜はお登りの定例に漏れず都踊に數日の清福を汚して夜汽車に投じた。春の旅は之れで終つたが、天平盛唐の文化の花は歸京しても觀終らなかつた。

偶然か又遙かに呼應してか、東京博物館でも、御物上代染織特別展覽會があつて、推古天平の古裂、法隆寺、正倉院の古裂が展觀された、夫れは美しい展觀であつた。私達が正倉院の薄明りの中で懐中電燈で映してやう〳〵に見る古裂が、明るい表慶館で整然と展觀された。古裂帖に寸片を珍重する錦綾だ、數尺の大裂で出陳された。塵埃のやうな、寸片分裂を整理して原形を髣髴させるに至つた當事者の苦勞を偲びながら、古の文華の美しさに醉ふた。推古の春の花一片太子間道もあつた。蜀紅錦もあつた。天平の文華は猶燦然と耀いた。美しい錦も綾錦もあつた。數々の纐纈、﨟纈、夾纈の今に稀れなる綾羅もあつた。而して天平の文化を通して遙かに大唐文化の盛容を偲ばせるものがあつた。

四月廿一日華族會館内に催された唐三彩の陶器展觀にも、又美しい盛唐文化の一面が飾られた。細川侯がユーモルホルプスの藏品に勝ると誇る三彩の大盤子も美事であつた。横川博士の龍耳の瓶も優品であつた。美しい三彩は陸離たる五彩となつて、大唐文化の花の盛りを偲ばせる。偉なる哉大唐の文化、之を泰西の文華に對比しても、埃及の古文華も、羅馬の豪華も、ルネツサンスの文物も、佛蘭西王朝時代の精華も、何れも比肩出來るものはあるまい、唯僅に希臘盛時の藝術が、其典麗と、典雅に於て其精緻と醇美に於て、東西相對する事が出來やう。

春晝の夢より覺めた私は、又晩春殘花爛唐の中に、盛唐の夢を趁ひたい。

白鳥隨筆

正宗白鳥

蘇峰と蘆花

（一）

近來、新たに明治文學に親しんで來た私は、小說を主流とした純文學の領域以外に、明治時代の思潮に關係の深かつた文學はどういふ種類のものであつたかと回顧した。

政治宗教哲學などの方面にも能文の士は少くなかつた。現代では、思想の發表には內容を臚列するだけで、文章によつて內容の裝飾を試みるものは、殆んどなくなつた。美辭麗句の力を借りて讀者を感激させようと企てるものは見當らなくなつた。これは當然の傾向であるが、しかし、頭腦が聰明であれば、所論も自から明晰であらうし、心が熱情に富んでゐれば、文章にも自から熱と力が現はれる譯である。この頃の雜誌などに現はれるいろ／＼な論文の多くが勃窣無味で、樣によつて葫蘆を描いた感じのするのは、論者の頭腦心熱に至らざるところのあるためであらう。感激のない文章ばかりが續出してゐる。

「蘇峰文選」の卷頭の題字の「辭達而已矣」といふ言葉は、古來漢文家の金科玉條としてゐた言葉の一つであつて、德川時代の文章家も、筆を執るに當つて、それを心掛けてゐたのであつたが、しかし、それは空疏な信仰に留まつて、漢文系

統の文章家は、實際は內容はそつちのけで、文字の粉飾に多く苦心してゐたのであつた。實感を直寫したゞけで滿足するやうなことは稀れだつた。

明治時代の學者論客も、思想を現はすに文字に捉はれて、しかも古い文字によつて、內容に乏しい思想を飾るのを常例としてゐた。そして、みんなが、直截な新しい表現法を採るやうになるまでには、いろ〳〵な人々がいろ〳〵な文體を試みたのであつた。

明治初期の福澤諭吉氏、明治中期の德富蘇峰氏などは、純文學者以外で、新文體を創始した代表的文章家である。それで、私は年少の頃、極度に愛誦してゐた蘇峰氏の作品を、久振りに讀直さうと思立つた。今日の年少の讀書子には何の感じも與へないであらうが、明治二十年代――ことに、その上半期――には、「民友社」といふ名前そのものが、清新な感じを少年の心に起させてゐたのであつた。明治初期の福澤氏が多分さういふ力を有つてゐたのであらうが、私などのやうに明治二十年代に少年期を過し旺盛なる讀書好學の念に燃えてゐた者は、民友社の魅力に化せられないではゐられなかつた。

私は、今度第一に改版の「靜思餘錄」を買つて讀んだ。昔「國民叢書」として續刊された蘇峰文集中の一篇で、小型の赤表紙本で、定價も十錢か十五錢であつたのだが、改版本は、表紙の色も形も違つてゐるので、手に取つても、懷しみがなかつた。定價も一圓になつてゐる。初刊後殆んど四十年を經た今日の時代にも、かういふ書物がまだ賣れるのであらうかと、私はまづ疑ひを挿んだ。この改版本の序文に於て、著者は、「靜思餘錄と第二靜思餘錄の兩冊の刊行部數は、十萬以上二十萬の近きに上つた」と云つてゐる。「不如歸」のやうな通俗小說なら兎に角、感想文集に過ぎない書物が、讀書社會の狹隘であつた數十年前の日本で、こんなに多數に賣捌かれたことは、異例であつたに違ひない。それほど當時の青年讀者を捉へる力を有つてゐたのである。

私は、十四五歲の頃には、この「靜思餘錄」と、內村鑑三氏の「愛吟」といふ歐米の小詩の飜譯集との二冊を、終日

のほぐれるほどに日常讀耽つたものである。そのうちの多くを暗誦してゐた。今度私はこの文集を讀直すと、幼年時代に學んだ小學讀本を讀直すと同樣な感じがしたが、それとゝもに、かういふ文學の歡迎された時代の若さに思ひ及んだ。「人間は環境の産物であると同時に、また年齡の産物だ。老大にして少壯の感興を會せず、少壯にして老大の趣味を解せず。均しく同一人なるも、吾自ら吾を疑ふもの、洵に已むを得ぬ次第といはねばならぬ」と、著者自身、改版本の序文で云つてゐるが、讀者たる私も、同樣に感じた。何故かういふ文章を熱愛したのであらうかと、吾自ら吾を疑ふ氣持がした。著者の自信してゐた如く、これ等の文集には「平凡なる思想あらん。しかれども不健全なる思想は決して無し」と云つていいのであるが、さういふ平凡健全な思想に、當時の青年讀者が感激したのは不思議である。實際今讀むと、平凡な常識以上の内容は些しも含まれてゐないのだ。内村氏の著書には、兎に角熱烈なる基督教の思想が籠つてゐたのだから、我々の若い心に影響を及ぼしたのも當然であつたが、蘇峰氏からはどういふ意味で感化を受けたのであらう。藩閥打破、平民主義の鼓吹などに、私は共鳴した譯ではなかつた。雜誌記者新聞記者としての蘇峰氏の政治論に感動したのでもなかつた。詰るところは、あの新體の文章に隨喜渇仰の涙をこぼしてゐたのであらう。氏の文章にも詩があつたのだ。

「嗟呼汝快樂を求むる耶。追々然として迷兒を沙漠に尋ぬるが如し、慌々如として遺金を街頭に探るが如し。人は快樂に生れて苦痛に死す、豈に憐む可からずや。それ快樂は求め得られざる耶。求め得可きものは、快樂と爲すに足らざる耶。快樂は求むる場所に在らざる耶。求め得たるものは、快樂の香味を失ふ耶」

かういふ調子づいた文章が、當時の我々の耳には音樂のやうに響いたのであつた。飜譯聖書の稚拙ながら斬新な語調を眞似たところにも新味があつた。マコーレー曰はくとか、カーライル曰はくとか、盛んに歐米人の所説を引用してゐるのも、青年に迎へられる所以であつた。

明治二十年代は、和洋新舊の文脈が雜然として、人さまざまに混亂してゐた時代であつて、今の目で見たら、誰れの文

章でも幼稚で、調つてゐなかつた。そして、そのうちでは、バタ臭い民友社調が、若い讀者には淸新に感ぜられたのであつた。同じ模倣にしても、硯友社は德川文學の模倣であつたのに、民友社は西洋模倣の分子に富んでゐたのが我々を喜ばせた。カーライル曰はく、アーノルド曰はく、ピット曰はくの方が、江戶の通人の物眞似よりも面白かつた。

あの頃は蘇峰氏も若かつた。日淸戰爭後の「變節」は、氏が日本の現實に接觸して心が大人びて來た結果であらう。

（二）

時代の關係で蘇峰初期の文章を愛讀してゐた私も、蘆花の作品には殆んど親しまなかつた。數年間、民友社のレッテルのついてゐたものは、殆んど全部購讀してゐた時代があつて、「コブデン」「ブライト」「グラッドストン」など、飜譯された史傳をも譯も分らずに通讀してゐたこともあつたが、「自然と人生」や「不如歸」によつて、蘆花によつてやうになつてからの彼れの作品には殆んど目を注がなかつた。この頃になつてやうやく、「黑潮」や「思出の記」や「富士」などの一端を覗いてゐるのに過ぎない。そして、作品そのものには、不滿を感じながら、德富兄弟の對立については、いろ〳〵な興味を覺えてゐる。

私は子供を有つてゐないので、子供に對する親としての感情は微かに分らないが、兄弟は多過ぎるほど多いので、その間の心理狀態はよく分つてゐる。カインとアベルの關係も推測されないことはない。不快なる人生々活は、まづ兄弟關係から一步を踏みはじめるやうなものである。古い聖書のいろ〳〵な記事の眞に徹してゐることを、私は歲とゝもに痛切に感じるのである。蘆花最後の大作「富士」には、この兄弟間の離合反目愛憎好惡が隱すところなく寫されてゐて昔民友社に心醉してゐた私達をして、著しく幻滅を感じさせれるのである。田山花袋氏を祖師とした自然主義系統の小說は、在來の道德の標準や美醜の標準から脫却して人間の眞相を有りのまゝに描き出すのを特色としてゐたが、今から見ると、それ

ほど激しい現實暴露をやつた譯でもなかつた。却つて、「不如歸」の著者の晩年の小說の方が、もつと猛烈な赤裸々の描寫を、自己と周圍を題材として試みたのであつた。花袋藤村氏などの現實描寫には、人情に驅られた感傷味に富んでゐるし、秋聲氏の作品だつて、以前のものには謹ましやかなところがあつた。蘆花の「富士」は、それ等に比べると、むしろ無頼と云つていゝ。年を取つてからの作品であるせいか、見榮も外聞もない と云つたやうに色氣がない。「夫婦で裸で銀座の大道を歩くやうな氣持で書いた」と宣傳されてゐたが、さういつた趣きがあつて、私は讀みながら面を背けたい思ひをしたところもある。支那のある新しい女は、舊風俗を打破しようといふ意氣込みで身に一絲を纏はず赤裸々で上海の街上を練り歩いたさうであるが、蘆花の「富士」はそんな感じがする。藤村の「新生」は、あゝいふ材料が詩に化けてゐるので、讀者に親まれるが、「富士」には何の粉飾もない。餘計な粧飾のないのは、むしろ推賞を價ひするのだが、感情が干涸らびて、主觀の嚴肅さをも缺き、描寫が粗雜であつて、私は、讀みながら藝術品に接してゐるやうな感じはしなかつた。「自然と人生」などに漂つてゐた豐かな詩趣も晩年には全く涸れてしまつた。いくら忌憚なき眞實の叙述であつても、かういふ風に取扱はれたなら、材料にされた人間は、迷惑だらうと思はれる。蘇峰氏もこんな弟を持つたために、尊嚴を傷けられたのである。私は氣の毒に感じた。……これは他所事ではなくつて、私自身もをり〳〵過去を顧みて、おのれを責めることがあるが、自分を裸にするのは勝手であるとしても、他人の衣服までも無理强いに脫がせることが、正しいことであらうか。作者自身の觀察が萬能の神の如く完全無缺である譯はないのだから、作品のモデルにされた人間は、尙更迷惑である。

かつて蘆花夫妻が、その緣者たる八十以上の老女を訪ねて「裸になつて自己告白をしろ」と强要したといふ噂を聞いた時、僭越無法の振舞だと私は感じた。若しもその勸告が用ひられて、八十の婆さんが裸で白晝の大道を歩きだしたらたまらないではないか。

「富士」の創作の態度には私は感心しない。そこには、著者の邪推の目のあまりに働き過ぎてゐるのを私は感じた。しか

し、作者が精一杯事實を書かうと努めたことだけは否み難い。したがつてそこに現はされてゐる親子兄弟夫婦親戚縁者の交錯した世相に、我々自身の肉親關係の影が見られないでもない。人間生活の煩はしさが推察される。ことに、私などが年少の頃崇拜し憧憬してゐた蘇峰先生や民友社の裏面の消息が細かに說かれてゐるのが、私の興味となつた。「國民之友」が出て、「國民新聞」が出て、新興文學の源泉の如く、我々をして仰ぎ見させてゐた當時の民友社も、その內面は天國ではなかつた。遠く隔れて、その社から配附される新聞雜誌新刊書類を耽讀してゐた我々少年の心の中にこそ天國は宿つてゐたのだ。……現今の文壇と田舍の文學少年との關係も同樣であらう。

私は、小學卒業後一二年間山間の私塾に學んでゐた。そこの學生は擧つて民友社本の愛讀者であつた。私は、國民新聞の久保田米僊氏の劇評を通して團菊の舞臺を想望してゐた。蘇峰先生の「熱海だより」を讀んで、夢の世界に誘はれてゐた。「上に遊禽の囀ずるを聞き、下に淸瀨のむせぶを聞き、ヲルズオルスの詩を口すさみ候」といふ一節に、私の村塾に於ける生活が美しく描かれてゐるのを見た。同じ民友社黨であつた同窓の人々と私と異つてゐたのは、私が「國民之友」のうちから基督敎を見つけて、その敎に心を寄せるやうになつたことであつた。

私は、獨りで聖書を讀み、內村鑑三先生の著書に耽溺しだした。あの頃が、私の一生のうちで、最も敬虔で純潔な時代であつたかも知れなかつた。しかし「國民之友」や「國民新聞」は頻りに私の上京慾を唆かした。

(三)

私は蘇峰氏の思想よりも、その文章に心醉してゐたのであつたと云つたが、氏は文學的素質、あるひは詩人的素質に於て、天性か令弟に讓つてはゐなかつた。弟蘆花は無器用であつたために、硯友社一派とは違つた素朴な味ひを文章の上に現はしたのであつたが、兄蘇峰氏は才氣に任せて書きなぐつたために、時世の變遷に堪へるやうな名文章は遺し得なかつ

た。「實用以外に何等の文學的抱負もなく自信もなし」と云ひ、「予の立言の目的は、所謂對症療法にありて、固より百歳の必傳を期せず」と云つてゐる如く、その日に讀み棄てられその月に讀み棄てられるのを覺悟して書かれたに過ぎなかつたが、しかし「自然と人生」中の諸篇に匹敵するくらゐなものは、氏の文集に見つけられないことはない。小説を書く氣があつたなら、氏だつて、「黑潮」くらゐなものは書けたに違ひない。「宗教上には眞理の探討者、戀愛は敬遠して、家庭には多きを求めず、ひたすら公的に生くるといふ態度を兄は執つた」と、「富士」のなかに書いてあつて、蘇峰氏のやうな肌合ひの人は多分さうであらうと、一般的には思はれるが、「富士」の叙述を讀みながら言外に推察の目を注ぎ、また、大部の「蘇峰文選」を通讀してあとで考へると、必しもさうではなささうだ。蘇峰氏が宗教上の眞理の探討者であつたことに、私はまづ疑ひを挿む。氏も周圍の關係から、若い時分宗教の門を覗いたことは覗いたが、雲の彼方のことに思ひを凝らすべく、氏はあまりに俗界に興味を有ち過ぎた。「戀愛を敬遠した」とは、氏自身も、をりに觸れて屢々口にしてゐたらしく、自から木强漢を以つて任じてゐたらしかつたが、氏だつて戀愛の情趣を感じない人ではなかつた。私は、夏目漱石の晩年の數種の長編を讀んで、彼れが男女關係について人一倍思ひを勞してゐたのを知つたが、蘇峰氏だつて、異性に對して無關心でなかつたことを その文集のうちから推察するのである。賴山陽門下の女詩人江馬細香の詩集「湘夢遺稿」の批評の如き、女性の心理に關する微細に渡つた的確な觀察が試みられてゐる。細香と山陽との詩を列擧して解釋し批判してゐるのが一篇の情史一篇の戀愛小説のやうな感じがする。私の見た限りに於ては、蘆花氏の小説に、これだけに戀愛の情趣の語られてゐるものはなかつた。「近世國民史」に於ても、人情の機微を見る小説家的觀察は少くないのである。氏は蘆花氏の如く自分を裸にして現はさうとはしなかつたが、史上の人物などについて說きながら自己の影をそこに映した。

「利口な兄」に對して「愚かな弟」として、幼少の頃を過した蘆花は、偶然「不如歸」で當りを取つて以來、兄を凌ぐほ

どの文名を得た。何と云つても小説の方が評論よりも讀者に喰入る力を強く有つてゐる。そして、通俗味を有つてゐる點では、氏等兄弟はよく似通つてゐる。蘇峰の論文に深遠な思想の宿つてゐなかつた如く、蘆花の小説に深刻、鋭利な人間描叙は見られないのである。民友社で育つたゝめに、硯友社型の戯作家氣取りに墮しないで、無骨ながらも清新なところがあつたが、「不如歸」だつて、「黑潮」だつて、卑俗である。「黑潮」にあの頃の社會が描かれてゐると思つてゐる讀者は、伊藤痴遊の講談によつて明治初期の社會を見てゐる人々と同樣である。

小説家として蘆花の才能は決して豐かではなかつた。多く俗界に關心してゐた蘇峰氏とは違つて、仙骨を帶びてゐたらしく思はれてゐるが、空想力は乏しかつた。世相や人間を客觀的に描寫する手腕も優れてゐなかつた。それ故、「不如歸」「黑潮」など二三を除いたら、自傳風のものを書くより外、爲方がなかつたのであらう。小説といふよりも單なる旅行記に過ぎないものが多い。「富士」に描かれた兄弟關係の如きは、事實として、小説の材料としての洞察力はそこに見られないのである。漱石の「行人」はさすがに違つてゐる。材料をそのまゝに敍したのではなくつて、作者の空想裡の産物なのであらうが、それでも、人間の心の奥の奥を見ようとする目が光つてゐる。兄の弟に對する猜疑には凄いところがある。兄嫁に對する弟の不即不離の感情に微妙なところがある。そして、作者の主觀は嚴肅である。「富士」の方では、事實の興味に惹かれながらも、讀んでゐて、屢々不快な感じに襲はれる。たゞ醜い感じだけのするところが少くない。夫人との共著であるためか、文章の甚だお粗末なところがある。漱石と蘆花とは共に流行作家であつたのだが、その藝術の素質は異つてゐた。

蘆花の小説のうちでは、「思出の記」が最も優れてゐる。そして、彼れの天分に適應してゐる作品は、「みゝずのたはごと」のやうなものであらう。「不如歸」が當つたゝめに、小説家として進んで行つたのだが、本來は「自然と人生」の系統を追つて行つた方が相應であつたのだ

私は、日清戰爭後に上京したのであつたが、新橋に出迎へて呉れた友人に連れられて、横寺町の下宿へ落付く途中、神樂坂の雜誌屋で「國民之友」を買つた。數日後に、神田の青年會館で、蘇峰氏の演説を聽いた。日頃崇拜してゐた偉人の風丰に接して、その演説を聽く機會を、上京後間もなく得たことは、どれほど私を感激させたか知れなかつた。しかし、上京後半歳も立たぬ間に、私の民友社崇拜熱は醒めてしまつた。蘇峰氏が平民主義を棄てゝ藩閥に下つたといふ噂が盛んであつたが、私はさういふ政治上の意味に拘はらないで、民友社に對する感興を失つた。今、「靜思餘錄」や「蘇峰文選」を讀直して考へると、あの頃私が蘇峰氏の文章に興味を失つたのは、私の頭腦の發達を證明してゐるので、あゝいふものは少年期の讀物たるに過ぎない。蘇峰雪嶺樗牛桂月などは、明治時代に相續いて年少の讀書子の感激性を刺戟した文章家であつたが、今日ではこれ等の人々の地位を繼紹してゐる人は誰れであらうか。

かういふ種類の文人は、今は跡を絕つたやうに思はれる。河上肇とか大山郁夫といふやうな人々の論文は、熱心に現代の青年に迎へられてゐるやうであるが、これ等諸氏は、ある問題を理論的に討究するだけを本領として、往年の蘇峰氏くらゐな詩趣をもその文章には見出しがたい。時代は進んで來て、最早文章の力で感動させるやうな稚氣を脫して、理窟一點張りで押して他を動かさうとするやうになつたのであらうか。

「蘇峰文選」の中のある一章に、「今日の憂の一は、國民に英雄崇拜心の消磨せんとするにあり」と歎じてゐるが、それは蘇峰氏の英雄視してゐるものを、崇拜する者が少くなつたゞけなのではあるまいか。人間はいつの世にもいかなる形に於てか、英雄を崇拜しないではゐられないのである。英雄に雷同しそれに引づられて行くものである。

蘇峰氏もかつては、言論家として一個の英雄であつた。しかし、內閣の壽命と同樣に、言論界の英雄の壽命もさう長く

は續かないのが浮世の常である。私は短き一生に於ても、英雄崇拜の形がいろ〳〵に變つて行くのを見た。一世を指導して自から英雄にならんと志した人々が、新陳代謝してゐるのを見た。平民主義から國家主義に轉じた蘇峰氏が、假りに何かの刺戟によつて社會主義とか共産主義とかに轉換すると假定しようにも、さうなるには、頭腦がすでに硬化してゐる。新奇を喜ぶ青年に顧みられなくなつた譯であるが、古今東西の歴史に通じてゐる氏が、人間が新を好み變化を好む生物であることに氣付かないでゐるとしたら迂闊である。「唯眞故新」なりといふことも人生に於ける一面の眞理ではあるが、「唯新故眞」なりといふことも眞理である。人間の食慾愛慾所有慾は古今を貫いて同樣であつても、その外形のあらはれが、時により處により形を異にする如く、思想や主義の論爭も、畢竟外形の相違に過ぎないことが多い。蘇峰氏が平民主義を唱へたのも、新を好む若い心から出たので、當時の新を好む青年がそれに雷同したのだ。今日のいろ〳〵な新主義も、新を好む人心の現はれに過ぎないので、蘇峰氏などの昔の新人が危んだり歎息したりするのは、人間の老いを現はすのに過ぎない。今日の新は明日は古臭くなるのに極つてゐる。「新を追ふて地獄までも行く」と、ボードレール（?）が云つてゐるが、長く青年の崇拜を得ようと思へば、絶えず新味の發揮を志してゐなければならない。

老人は精神が硬化して、思想も文章も固定するのを例としてゐる。先日、久振りに德田秋聲氏に會つて、長時間行動を共にして、食つて歩いて話したのであつたが、その間に、氏は屢々「モダーン」といふ言葉を口にしてゐた。私が心身の衰頽を歎ずるのに對して、「人間は老いてゐても、心に若い芽が萠えるものだ」と力説してゐた。氏の生活には永久の若さがあるのかも知れない。ゲーテなどは老いを知らない永久の青年のやうであつた。それでこそ、長く青年の崇拜を失はないでゐられるのであるが、しかし、青年は夢に富み詩に豐かな筈である。乾燥無味な理窟一點張りでは滿足し得られないのが、いつの世にでも青年としての自然の本性である。その作品のうちに隱然勤王を鼓吹したといはれる賴山陽は、その政治論にも歴史にも、多くの詩を含んでゐた。明治の青年を感激させた蘇峰樗牛桂月、あるひは内村鑑三氏などの所論に

も、今日の目には幼稚に見られるにしても、更に角詩を含んでゐる。ところが、今日は、政治論社會問題論は云ふまでもなく、文學評論でも、多くは砂利のやうな文字の臚列で、どれも〳〵讀みづらい。かう堅くるしく述べなければ、所信が發表されないのであらうか。

(五)

私が數十年の間を置いて、新たに蘇峰氏の述作に親しみだしたのは、「近世日本國民史」が刊行されるやうになつてからである。その日その月の要求に應じるのを立言の目的として、「百歳の必傳」を期しなかつた氏も、老境に達したので、過去の長い文作生活に不滿を感じて、自己の紀念碑を自から刻んで不朽を遺さんと企つる氣持になつたのであらう。氏としては最も適當な題目を選んだ譯である。坪内博士の沙翁全集の飜譯と同樣である。

餘生幾干もないといふ感じは、現世に、何等かの形に於て自己の影を留めたいといふ慾念を誘起するものらしい。逍遙蘇峰兩先生の如きは、自己の一生の蘊蓄を傾瀉するに適した題目を選ばれたのだから幸福である。

私などは、まだ自己の印象を後世に遺したいといふやうな感じを意識的に起したことはないのであるが、もつと年を取つたらさういふ氣持になるかも知れない。あるひは、今だつて、自己批判がもつと鋭利になつたら、心の底に、現世に於ける自己の不朽慾の潜在してゐるのに氣づくかも知れない。

しかし、「現實」を知らんと努めて來た私も、「この世はついの作み家にあらず」といふダンテによつて代表された中世紀の感想を全く脱却することは出來ない。これが迷妄であらうとなからうと、紛々たる現實の事相を嫌惡し、あるひは孤獨の寂寥に沈んだ折々、早燥時の雨露の如く、心に一點の慰藉を與へられるのは、この夢のやうな思ひである。

少年期に受けた感化は一生を支配するのであらうか。あの頃現實主義の「民友社」の感化を受けてゐた筈の私は、北村透谷を主とした所謂高踏派の「文學界」にも共鳴し、新しい基督教の空想にも動かされてゐた。爾來世路の經驗を重ね修養を積んで來ても、少年期に心に芽ぐんだものゝ、雨にも風にも耐へてまだ枯れ切らないでゐるのに氣づくことがある。

(五月二十七日)

編輯者雜記

○

七月號の校了の頃にはやうやくじめ〱した梅雨期が始つた。此頃の陰欝な世の中の空氣を一層陰欝にさせるかのやうに――。見渡した所景氣好轉の材料も俄に見當らない。明るい政治は當分望めさうもない。まさに窒息的國民生活だ。窒息から免れるための方策を何處に求むべきか。これが今日の我々の痛切な問題である。

○

現代學生々活は其內容に於て昔日の夫よりも一層複雜だ。其生活の渦中にある學生自身にも彼自身の本體がはつきりしてゐないかも知れぬ。局外者に於ては一層さうであらう。本誌に「學生氣質の研究」ある所以である。

×

本號から從來の公論欄說苑欄の區別を撤し本欄として通し頁にしました。新しき酒は新しき革囊に盛られねばならぬの趣旨に外なりませぬ。

×

映畫時評は本號限りで止します。今後も映畫界時事に對しては撤底的な批判の眼を向けて行きますが、映畫時評といふ固定した欄を止さうと思ふのです。序ながら擔當者としての小山內、久米、室生三氏の勞に謝します。

◇

世は昭和の光遍く〱と敢て古めかしく時世を讃嘆したいところですが、それにしても、なんと愛嬌ある時代錯症患者的支配者の夥しい現代でせう。その一々の例は、お定り文句の紙數の都合で！といふやつで、お預りするとしても、時代の指導者を以て任ずるあるリベラリストに一言しませう。君は無產政治戰線及階級鬪爭を否定しました。我々は全然君の意見に贊成しませう。その代り我々は鬪爭を必要としない蒼生偕その業に安んずるの日を、その君の指導原理とかに依つて早く招來して頂き度いと思ひます。

◇

「新戀愛の道」といつたところで、坊ちやん孃ちやんのたわぶれごとではありません。今日のやうな混迷錯雜の時代に、男女の愛がいかに裁かるべきかに問題が懸つてゐるのです。コロンタイ女史は革命ロシアの女大使で、今迄三十人もの男を替へたさうです。新人林房雄君の解釋に聞いて下さい。

□

ロシアより歸られた秋田雨雀氏は本誌八月號のために大作を執筆中です。氏の蒐集せられた山なす材料から何が生れるか、――刮目して待つて下さい。

□

特選畫報も愈々洗練されて獨自のものとなつた。諸君の期待に添ふために、我々は更に一段の努力を拂ふつもりです。差し當り八月號に大に精粹を集めるべく日夜心を碎いてゐます。

谷譲次氏の「新世界順禮」について

谷譲次氏が新世界順禮の旅に就いてから最早二ヶ月と十三日になります。第一回の通信は晩くとも六月號には發表し得る豫定でしたが、いろ〳〵豫定が狂つて、本七月號にも發表するを得ませんでした。

實は原稿は已にロンドンからシベリア經由で郵送されて、今やその道途にあります。それは五月廿三日、「イマオクッタ」といふ電報がロンドンから發せられたのでありますから、どう指折つて數へても已に着いてゐなければならぬ筈なのですが、どういふ故障か未だに到着しません。それで殘念ながら次號から掲載することにしますから、此點平に御宥恕をお願ひします。

原稿を送る一週間ほど前に谷氏が島中主幹へ宛てたはがきには次のやうに記されてあります。旁々お樂しみにお待ち願ひたいと思ひます。

出立の際はいろ〳〵御世話樣になりましてまことに難有う厶いました。

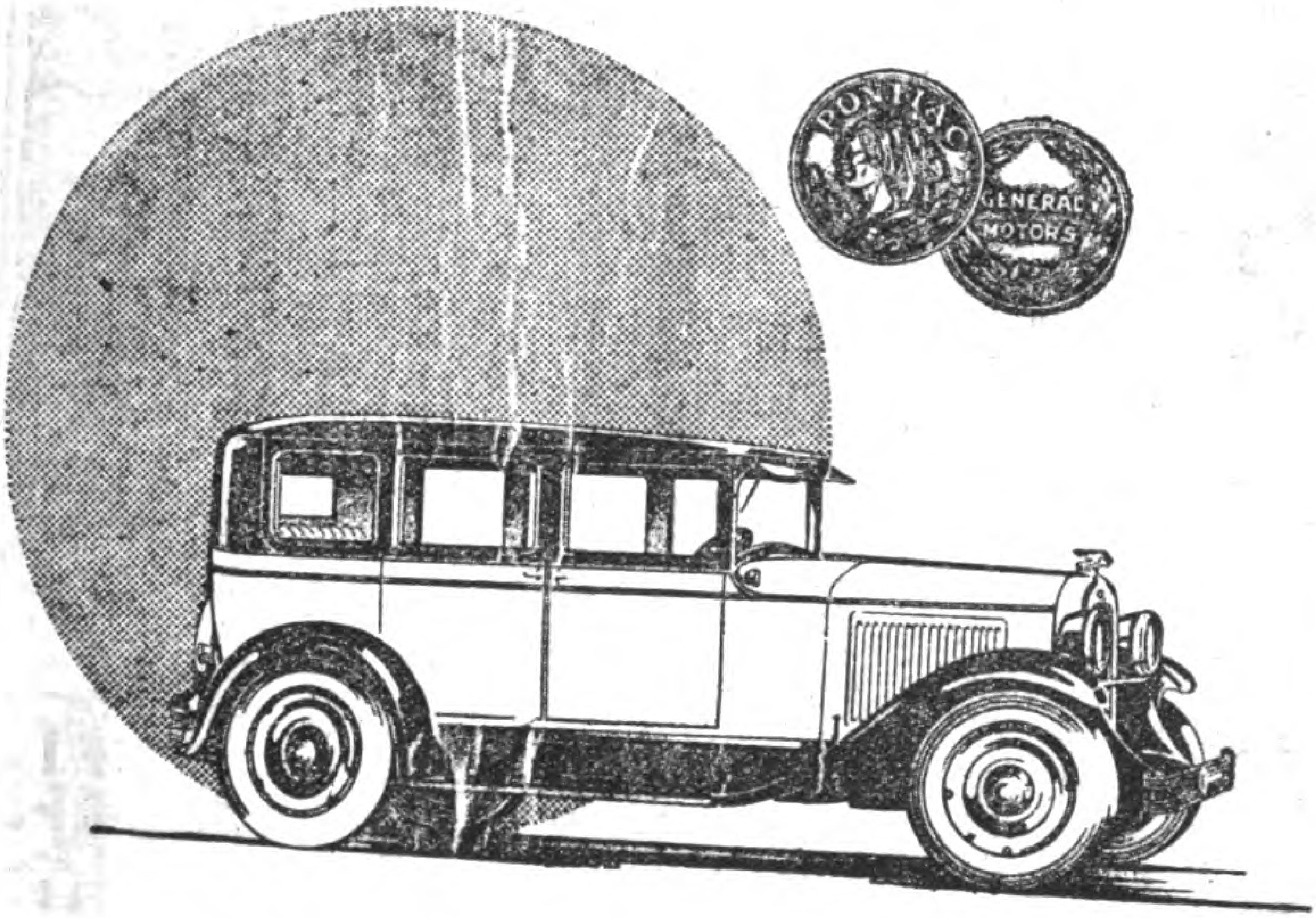
道中無事、豫定變更、あちこちによりみち致し、ロンドンにまゐりました。

面白いこと山々、材料豐富、おちつき次第腕をふるひます。おまち下さい。長き旅のつかれが一時に出て、がつかりしてをります。

くわしくは後便に。

御健康を祈り上げます。

六月十三日編者識す



驚異的成功の
新ポンテアク號

ポンテアク號は發賣後第三年目にあたる今年において、ゼネラルモーターズ製の最も低廉な六氣筒車として又もや一大驚異に値ひする成功を收めて居ります。

其主なる特徴中には左の諸點を含んで居ります。

- 新流行の瀟洒な輪郭
- 高く細き優雅な放熱器
- 確實に作用する燃料喞筒
- 最新式GMR氣筒頭部
- 整温式冷却水装置
- 極めて頑丈なフレーム
- 新效力を發揮せる氣化器
- 曲柄軸用通風装置
- 四輪制動機

幌型　定價　金參千貳百貳拾五圓（大阪渡）
セダン型　定價　金參千四百貳拾五圓（大阪渡）

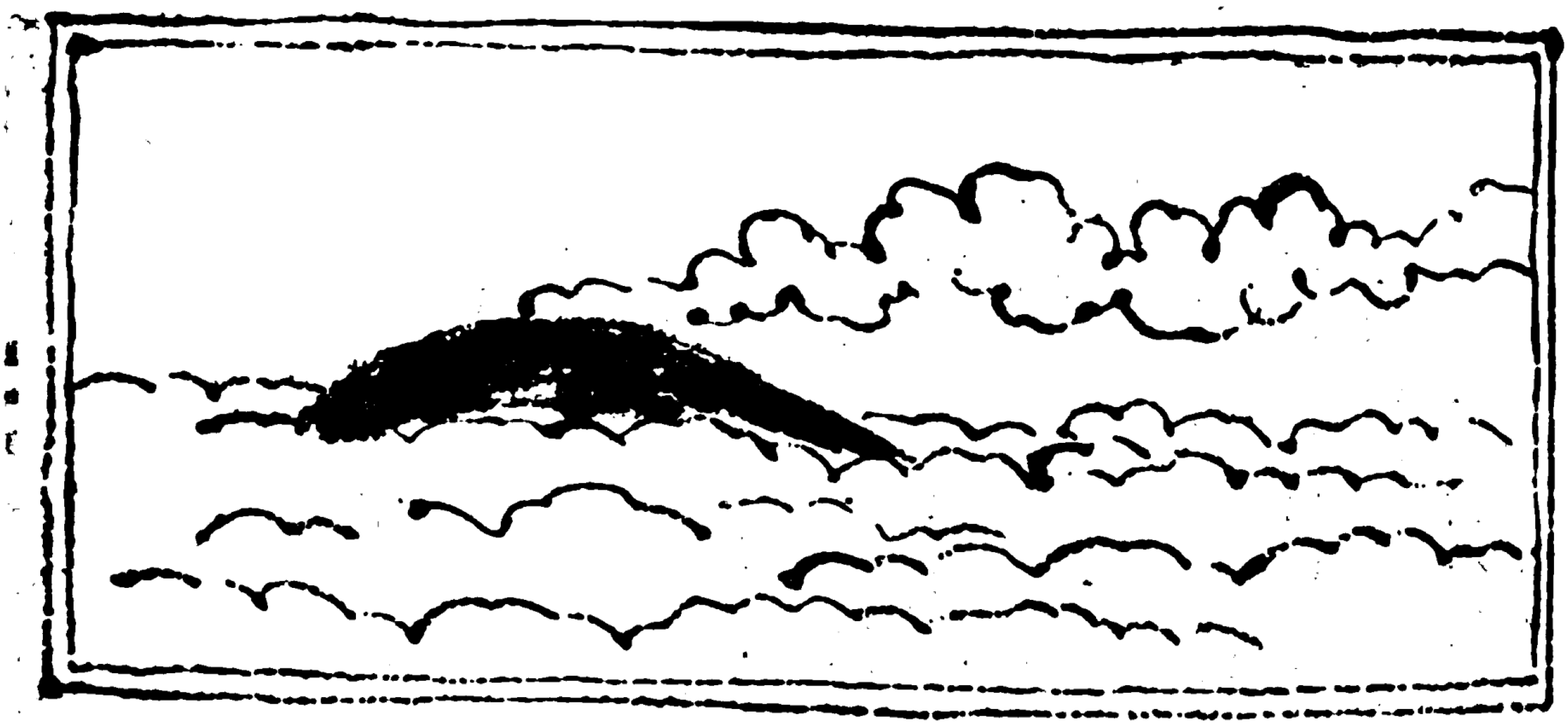
（ポンテアク號はゼネラル・モーターズ金融會社による月賦販賣の便あり）

どうぞ特約販賣店の陳列所にお出でになり、自動車界最新の設計に成れる是れらの新型を御覧下さい。

日本ゼネラル・モーターズ株式會社

（附錄は販賣店にて進呈、純正部分品を必ず特約販賣店でお買求め下さい）

新ポンテアク號はゼネラル・モーターズの製品なり



仕立屋マリ子の半生

――あるシノプシス――

十一谷義三郎

一

馭者權六氏の女房のマリ子が、まだ權六氏の存在を知らないで、ちんと愛くるしく引き緊つた腮を、あ・ら・もおどの、三角に脊筋へ垂した、幅の廣い肩掛けの襟に埋めて、初めて東京へ出て來た時、彼女はもう、二十五になつてゐた。

二十三で女紅場（裁縫學校）を出、その方の腕は、「オツショサン」達の折紙がついてゐたし、またその後の二年間、實地に當つてみて、一本立ちの自信をお肚に持つて居り、それに、健康で、身綺麗で、その頃、もおだアんな、網を冠せた低く目の束髪のよく似合る彼女だつた。

この束髪は、女紅場の若いオツショサンや生徒の急進派が、東京のハシリをいち

早く真似て結び出したのだが、それを見て、古い連中が、耶蘇だ、耶蘇だ、と攻撃し、そこで殆ど皆が、島田、きく銀ゆひ綿、唐人髷と、またもとの世界へたあいなく逆戻りした中で、兎も角もマリ子だけは、その束髪を押し通して、からつと晴れた額をしてゐた。

――夫レ女子ハ終始夫ニ随ヒ世ヲ過ル者ニシテ一家ノ盛衰ハ妻ノ良否ニヨルモノナレハ幼年ヨリ豫メ夫ヲ助ケ産業ヲ興スノ道ヲ心掛ルコト肝要ナリ――などと女紅場開設の告諭にもあり、讀本の「女心得草」でも、そんなことは暗んじたが、マリ子には、先づ、自分自身を助ける必要があつて、從つて、彼女がお屋敷の馭者の權六氏と結婚したのも、二十八の晩婚で、權六氏は、むろん、ずうつと老けてをつた。

眼が明るく、掌がよく彈み、淡紅い手の貝爪の間に、精妙な運針のコツを宿してる彼女で、望み手は權六氏以前にも、女紅場時代から上京前へかけて、ふんだんにあつて、もう馴れつこになつてゐた。それに、自活の自信もついて、自然と、女人生には、戀と世渡りの外に何かゞありさうだとそんな氣が萌し、そこでオツシヨサンから、お屋敷の奥女中へ宛てた添え状を貰つて上京して、それから足掛け三年、糸綃、紋お召、絽縮緬、金緞子などと眩耀しいお屋敷仕事をつゞけ、そのうちに、貯蓄銀行の預金掛りと顔馴染になり、郷里への送金爲替の受取が溜り――だが、「何か」は遂に來ずじまひで、日は忙ぎ足に明け暮れた。

お屋敷の金の紋章のは入つた馬車が、時折り、出先で、或はお屋敷の門前で、その彼女の眼の先を、鷹揚に幌を搖つて通り過ぎた。乘りては、いつも、貴人らしく眸を靜めたまゝで、彼女の目禮を默殺した。その幌の間にチラチラする衣裳が、大抵、彼女の可憐な貝爪の間から生れたもので、初め、彼女は、あの制作者のみの知る關心をもつて、ぢつとその冷冷と過ぎゆく幌を見送つたのだつたが、いつか、それにも馴れて、いや、むしろ、漠然とした不安さえ感じるやうになつて、何かしら怯々と眼を外らした、その彼女の視線に、高い、高いシルク・ハットが寫り、それから、白い手袋を嵌めた

鞭の柄を握つた片手が、心あるやうに陽氣に街の空に躍り、さうして軟い口髭の伸びた馭者横六氏の顏が、ちよいとこちらを振り返り、やさしい鷲色の眼で笑つて、すぐにまた揚々と鞭を擧げて向うへ………

そんなことが幾度かつゞいて、結局、彼女は、戀も結婚も何もかも一緒に、兎も角、お屋敷の圍ひ内の横六氏の住居へ移り、二十八の、幸福な、花嫁だつた——

横六氏は若い衆時代に、東京、横濱通ひの乘合馬車にゐたことがあり、その頃は、がんばの鐵と云ふその馬車屋の親方が、團十郎の蝙蝠安から思ひついたあの鼠の小辨慶の浴衣地に、柿の算盤縞の三尺を締め、ばら緒の冷飯草履を白足袋の爪先につつかけて「馬車の馬丁(べたう)さんは小辨慶の揃ひ、東京島原迷はせる」と小唄になつたあの連中の一人だつたと、いつかマリ子に笑つたが、そんな勇みはもう悉皆剝がれ、髮を左の眼尻の眞上で綺麗に分け、手袋を穿きつけた手はいつも淨らかに柔く、眼も髭も、始終マリ子の心を培ふやうな穩な艶を持ち、さうして道樂と云つては、莨のパイプ造りか釣りだけで、酒はほんの少し、それもぢきに醉ふて、醉へばますます彼女を愛撫する。

美男かづらの這うた四ツ目垣、春日型の木燈籠、藪柑子など、お屋敷の庭が遠眼に窺る、然しそちらからの展望なり風致なりを汚さぬやうに氣配りをして、一隅に愼ましく建てられた平家が、横六氏の住居で、馬車の出ぬ日は、夫妻が、椽側の日なたにころんで、少し離れた馬小舍の足掻きの音を笑ひながら、パイプ造りに日を暮した。

流行りの、琥珀口のメシヨンとか、北海道の山アジサイで製したサビタなどは、高いのみでなく、第一横六氏の趣味に合はない。そこで彼は、異人の女帽子を眞似て作つたあの、黑天鵞絨の前の窪んだ鳥打帽を冠つて、何處かへ出かけ、百日紅の枝を剪り盜つて持つて來、それを更に好みの形に切り、細い錐で煙の道を通し丸鑿で莨の盛り口をあけ、刀を入れて形を直し荒仕上げをする。それを木賊で磨いたり、藁煙りで古びをつけて、呉絽で光澤を出したりするのがマリ子の仕事で、すつかり出來上つたのを、筥に收める前に、横六氏がおもむろに口に咥へて、二三服こゝろみるが、その打ち込ん

だ容子に、彼女まで、何となく釣り込まれて手を出し、すぐに烟に咽せて、あゝお前の泣くのを初めて見たと、横六氏が髭を歪めて、欣々と手を拍つ、そんな平和なパイプ造りだつた。

横六氏は、またよく、新宿の御料地の野布袋で作つた自慢の釣竿を擔いで、潮の上げばな引きはなを覘つて、お台場や大川筋へ出かける。それが、夜更けも、未明も、霜も、小雨も、釣にかゝるとてんで夢中で、第一、花嫁になつて三日目のマリ子を、夜半の牀に獨り置き放しにして、髪も髭もひよつとこ冠りの手拭に崩し、襦衣と古股引きの上へ黒羅紗の外套を羽織り、手製の魚籠を提げて、飄々と出てゆく彼だつた。

初めは彼女も、潮風や寒む空を案じ、自分も心細く、そつとお屋敷の懇意な人に訴へたりしたが、あの善良な横六を！と、却つて責められて、身を縮めて引き退つた。それに横六氏の獲物が、メナダとか鯊とかカイヅとか青鱚白鱚その他季節々々の魚のほかに、古代紫の天鵞絨の鼻緒のついた小町下駄などと、やはり季節的なプレゼントが時々混つてゐて、それを貰つて來る氣持ちに、つい甘えて笑つてしまふ。すると横六氏が、すつかり安心して

「この青鱚つて奴はね、とおん／＼とから錘を水底へ當てゝ鉤を浮かせてるうちに、ぶるッと來ると、素速くとんと合せ、ぶる／＼と引いてゆくやつを釣りあげるんだよ。」と、そんな仕方話を懸命につゞけ、それから、時折り、馭者臺で、此のコツを思ひ出し、それが思はず手綱へひびいて、あの大きな馬を釣ることがあるなどと笑ふ………

家は平家だが、臺所も、茶の間も、居間も、みんな明るく、其處にマリ子は、身分一杯の美食を整へ、明日の苦勞なく眠り、むろん、お屋敷の仕立物は、こちらから進んで貰ふ必要がなく、暇にまかせて照降人形を造つてみたり、硝子の壺に紅白の縮緬で大々とした錦魚の細工物を生けて、横六氏に好々と眼を細めさせたり、例の自然木のパイプは、百日紅の外に、古葡萄の蔓や紫陽花の根と、數と種類を増し、兎も角、善良で、幸福で、建康な五年間が、マリ子の上に流れた。

子は――無かつた。

二

結婚して六年目の、寒中のうしの日、マリ子が、お高祖頭巾を被て、小間物屋へ「うし紅」を買ひにゆき、景品の土の牛を、小娘のやうに悦んで歸つて來ると、その留守に、權六氏が行火の傍に倒れて、鈍い眸を瞪つて喘いでゐた。皮膚が變に白み、毛孔が開き、そこに氣味の惡い汗が盛り上つて、それが、彼女を認めると

「慌てるな、慌てるな、醫者を。」と何處か土の中からでも聽えさうな聲で云つた。

その日から、もうあの街の空にシルク・ハットを耀やかして、頸絡の美しい鹿栗毛を馳る揚々とした權六氏も、野布袋を擔ぎ、龕燈を提げて、ひよつとこ冠りでひやうひやうと出かける權六氏も、それからパイプ造りの權六氏さえ、永遠に姿を消してしまつた。

彼はたゞ、無細工な、重い、鈍い、生きもの、むしろ、肉塊として、マリ子の手に殘つた。

「どれ位かゝるでせうか？」とマリ子がそつと訊くと、醫者が「さあ、」と首を傾げた。

「癒るんでせうか？」とこわごわ突つこむと、やはり「さあ、」と首を傾げた。

この二三年、權六氏は眼に見えて肥つてゐた。年の所爲か、あちこちのお屋敷や料理店などの供待部屋の寒さがこたえ、道樂のメナダ釣りにさえ、愚痴が多くなり、それを消す爲に呑んだ酒が、だんだん手をあげて、さうして皮肉にも、腹もまるまると出つぱり、頬にもまるまると肉がのり、血色は日の出で、マリ子も、そんな彼を嫌ふ筈はなく、別に節酒を薦めもしなかつた。それがいま、五體の色素と運動を、ふいと中風に浚はれ、ぶよぶよと牀に伸びて、胃と腹と膀胱の惡魔のやうな跳梁に、身を委せてゐるのだ。

マリ子は、健康な食慾を持つた自分のほかに、先づ此の權六氏をこれから養つていかねばならぬ。彼女は、一度止した

お屋敷仕事を、またせつせと始めた――

二ケ月後――ほえ幌を長くしたやうな擔架一つと、そのうしろへ家財を積んだ荷車が二臺、お屋敷の通用門を忍び足に出て、立ち樹の青を吹いた柳の枝を潜つて、坂道を下へ、槇六氏夫妻の新居へ向つた。擔架の蔽ひの隙き間に、剃り跡の際立つた、髮を叮嚀に分けた、水氣に擴ごつた槇六氏の顏が、大きく白んで見え、その傍を、別人のやうに痩せ細つたマリ子が、朱のさした眼を伏せて歩いていつた。

新居は、お屋敷から十町許り離れたある裏町のしもた家で、玄關も水口も闇く、茶の間は始終夕闇が溜り、僅に居間の半分だけへ、椽先きの空明りが落ちてゐた。やはり二階がなく、低いトンネルのやうな家だつた。

「闇いでせう？」

「闇くて好い。」

「せめて二階でもあると好いんですのにね。」

「二階はいらん。馬車に乘りつけてる。」

「さうでしたわね。でも、まあ安いから……」

椽先の上に忘れられたまゝほそぼそと芽を出してる釣しのぶを仰いで、夫妻は、そんな會話を交した。

「闇く」が「クロク」に聽え、「馬車」が「ビヤシヤ」にも「ボシヤ」にもなり、槇六氏の呂律は、漸く此頃馴れたマリ子に判るだけで、それも、五分間も喋りつゞけてると、彼女にも何のことやら見當がつかなくなる。それに、手はやつと尿瓶を抑へ得るだけ、脚は敷布の上を少し許りにじらせるだけ、寢返りはむろん出來ない。
でも槇六氏は、實に素直な病人で、どこまでも思ひ遣りのある所天だつた。
移るとすぐ、彼は、彼女の手を省くために、あの大事な口髭と髮の毛を、すつかり剃り落させた。さうして、急にその

爲に輪廓のハツキリして柔和な茶色の眼を、二六時中彼女に注いで、仕事の切り目などが來ると、敏感にそれを捉へて、お屋敷の奥うちの話とか、自分が馬車を乘り着けた先々の、つまり、そんな世の中を、話題に持ち出して、彼女が憂鬱に蝕ばまれないやうにと努力する。それから、もし、うつかり彼女の膝もとに針でも落ちてると大變で、權六氏は瘋癲者のやうに口早に叫び、それが通じないと、眼をそちらへ注いで劇しくしばたゝき、手首で敷布を掻き、さうして尚、彼女が氣がつかぬ場合には——さうだ、そんな時に初めて——權六氏の茶色の眼に、悲しげな涙が湧きあがるのだつた。

夜半に下を催し、——それも權六氏は彼女の爲に異常な意力を働かせて朝の習慣をつけやうと企てたのだが——隣りに死んだやうに眠つてゐる彼女を起す時にさへ、彼は、決してこんな騷ぎはしない。もつとも、その爲に、彼女の寢卷帶に、細引の一端が結びつけられてあり、他の一端が權六氏の片手の手首に輪になつて筬つてゐると、そんな工夫が凝らしてはあつたが……

マリ子はマリ子で、その氣配りが、彼の比ではなかつた。彼女は、よき看護婦で、よき扶養者で、よき愛妻だつた。それは、彼女が權六氏の傍で仕事をしてゐる時、權六氏を素裸にして查べたら、いつとうよく判る。爪の間にも、耳の皺にも、その他どの部分にも、一點の汚れがなく、それはもう神に見せたつて、恐らく

「こんな清淨な肉體は、太初のアダム以外に、予は之を見ない。」と云うかも知れない。

むろん、マリ子が仕立物を屆けに出た留守の間とか、また買物に出かける間は、判らない。それが心配で、彼女自身も、自然と猫脊に、小刻みに步く癖がついてゐた位だつた。

持藥の胃腸藥は別として、評判の藥は皆買つて吞ませ、お護符も集め、お呪禁も試み、「白あひるの生血」が好いと聽くと、それも買つて、彼女は彼に飲ませた。さうしてその一つ一つにみな、善い効驗があると、權六氏は、例の眼を悅ばし氣に彼女に向けて云つたが、どれもこれも、彼女から見ると、權六氏の腕に五分の距離だけの自由を與へたものはなかつ

た。

だが兎も角、權六氏の眼が嬉しさうに頷くと、もうそれで彼女は滿足した。

仕立物の收入りの多い時は、それを彼女は權六氏に示して一緒に喜んだ。尠い時は、知らせなかつた。

悲しみは、お互にお肚ん中でし、よろこびは、屹度ともにして、妙な、實に妙な幸福に浸りながら、一年二年三年と經つた——

三

四年目も、もう時雨になつた。

ある夜更け——マリ子は低く下げた吊り洋燈の下へ、縫ひ上つた許りの小供の祝着を擴げて、裾のおけぼのに栽つた鶺鴒を、ぼんやりと眺めてゐた。

マリ子の貝瓜の魔術はまだ決して衰へてゐない。權六氏の五體を淸淨に保ち、家うちの其處此處に彼の走りさうな光を出し、餘つた時間で、三ツ襲ねの上二枚を充分に縫ひ上げる彼女だつた。その代りに睡眠時間が乏しく、それさえ、寢卷帶にとりつけた合圖の細引きに小切られたが、近頃は、すつかり境遇の叩きのかゝつた軀で、別にこたへもしなかつた。

ふと雨が風に亂れ、その騷めきの底を縫ふて

「七—五—三………」と間伸びのした權六氏の嗄れ聲が、彼女の耳を打つた。

「まあ」と首をあげて、彼女は彼の枕許へにじり寄り、その鼻の高まつた、口の邊りにまで白髮の芽の出た權六氏の顏を覗き込んだ。

「起きてたの？」

「夢を見た。」

「あら、涙がこんなに！」

「夢、夢だよう。」

「夢、何の夢？」

「七五三…………」

「七五三？」

「子供…………」

「え?!」

權六氏の眸が、一杯に溜つた涙の底を、ぐるつと上向きに彼女を見、得體の知れぬ、寂しい、笑ひ燥らしいのが、つゞけざまに淡紫色の脣を洩れ、さうしてまた涙が、凹んだ米嚙の、やはり白髪の光つてる中へ流れ落ちた。

彼女は、枕許の手拭で、それを拭ひとり、その濕つたのを、しつかりと自分の眼に當てがつた。

權六氏は五十に近かつたし、マリ子はやがて四十で、いつまでも子の無い二人だつた——

七五三の祝着は、お屋敷關係許りでなく、近所からも隨分、マリ子のところへ持ち込まれ、從つて、この時雨の晩の記憶は、祝着の仕事の續く間、不可避的に、毎日、新しく、根強く、二人に迫つて來たが、それが、恐らく、きつかけとなつて、權六氏の彼女に對する態度が、少しづゝ變り始めた。

ある朝、いつもの通り、マリ子が、味噌汁を匙で掬うて彼の口へ流し込むと、どうしたのか舌で口の外へ押し出して終

ひ

「ばかア」と叫んだ。

そんな罵聲を彼女が彼から聞くのは、結婚以來それが初めてで、串談にして微笑んだら

「ばかア！尿瓶。」と云つた。

眼を見ると、其處にも、いつもの優しい抱擁的な表情は影を隱し、劇しい怒氣のみが、露骨に現れてをつた。

かうして一度堤が切れてからは、横六氏は、事毎に「ばかア」と怒鳴つた。

それから――喰べ物の撰り好みが劇しくなり、注文の品を彼女が整へに出かけると、いちめんに縮尻つてゐたり、諦めてゐた煙草を喫ふと云ひ出して、彼女が泣いて止めると、今度は、絶食で彼女を脅かしたりする。

何かゞ不滿で

「死ぬ、今夜死ぬぞ。」と殺氣ばんで云つたことがある。

彼女が仕事に托つけて、徹夜の覺悟で警戒してゐたら、夜半に、ふと寢息の音が消え、同時に、一方は眼尻へ、一方は眼がしらへ、眸を惹きつけて、しばらく凝然とこちらを見、それから、そのまゝ、何のこともなく朝まで寢つゞけた。

以上の狀態が半年ほど續いて、とう〳〵横六氏の最後が來た。

横六氏は、此の家へ來てから毬栗で通した頭を、もう一遍昔の馭者時代通りに分け、口髭も伸ばして、牀に仰臥してゐた。すつかり嵩が落ち、皮膚は土氣色をし、その髮も髭も、鬘やつけ髭のやうで、それが、もう、一刻もマリ子を傍から離さなかつた。彼女が仕事の都合でお屋敷へ出やうとすると、あの「馬車の馬丁さん」時分の口調で、皮肉と罵詈を浴せて足を禁める。夜半は夜半で、合圖の細引を引きづめで、彼女も、彼の眠つてる間に濯ぎものなどを手早く片づけ、そして横になるのが精一杯で、とても仕事へは手が廻らなかつた。

その彼女のほんの一寢入りしてる隙に、權六氏は、すつと心臓痲痺で去つてしまつたのだつた…………

百日紅、葡萄、紫陽花などのあのパイプ百本餘を胸に抱いて、日暮里へいつた權六氏が、骨壺へ這入つて歸つて來、改めて、家を出る時分には、寡婦マリ子は、勤勉で、健康で、身綺麗な、もとの彼女に復つてゐた。

隣人達も、お屋敷の人々も、みんなが

「よかつた、よかつた。」と、彼女の爲に云ひ合つた。

誰も彼も、彼女の性行と腕とを信じて、未來を祝してゐたのだ。

然し——それは間違ひだつた。

權六氏の七七日が明けると共に、仕事の依賴は八方から來たが、それをマリ子は、お屋敷も何も片つ端から斷つてしまつた。お屋敷の奥向の懇意な人達が、その理由を尋ねると、たゞ厭になつたからと答へた。

「おほかた結婚でもするつもりなんでせう。まだ三十八だもの。」

さう人々はまた考へた。然し、それも間違つてゐた。

彼女には、結婚前に働いて貯めた貯蓄銀行の預金が、權六氏も承知で十年間の利息と共に、そのまゝ殘つてゐた。それが續く間は、それでゆくつもりだつた。

贅澤はちつともしたくなく、たゞ仕事をしないで暮しさへすればいゝとさう彼女は考へた。

五ケ月間、彼女は、寢て暮した。そして五ケ月が終ると共に、殆ど無一文になつた。

彼女は、家財道具を賣り拂つた。自分の衣類は質屋へ運んだ。さうして權六氏の衣類だけは、位牌を除く外、あの黑天鵞絨の鳥打帽に至るまで、一包みにして、お屋敷の友達に預け、それから、その位牌一つを入れた風呂敷包みを胸に抱へ

て街に出た

恰度うつてつけの季節で、木枯しが、毛の薄れた彼女の丸髷を震はせる。ふだん着に、ふだん穿き、彼女は——職業乞食になつたのだ！

佛教や基督教の慈善機關を貰ひ歩き、うまくいけば泊られるだけ泊り、いけない時には、安い長屋の一間を借りて置いてそこへ歸る。そ云つた乞食に、敢て彼女はなつたのだ。

だが、そんな慈善團體にも、むろん、あの下宿業組合の自衛策のやうに、要警戒人の配符は廻る。彼女も遂々そこまで落ち

「何故仕事をしない？」と詰問されたが、その時の返事が

「仕事はしました。」と云つて、そのまゝ口を緘んだ。

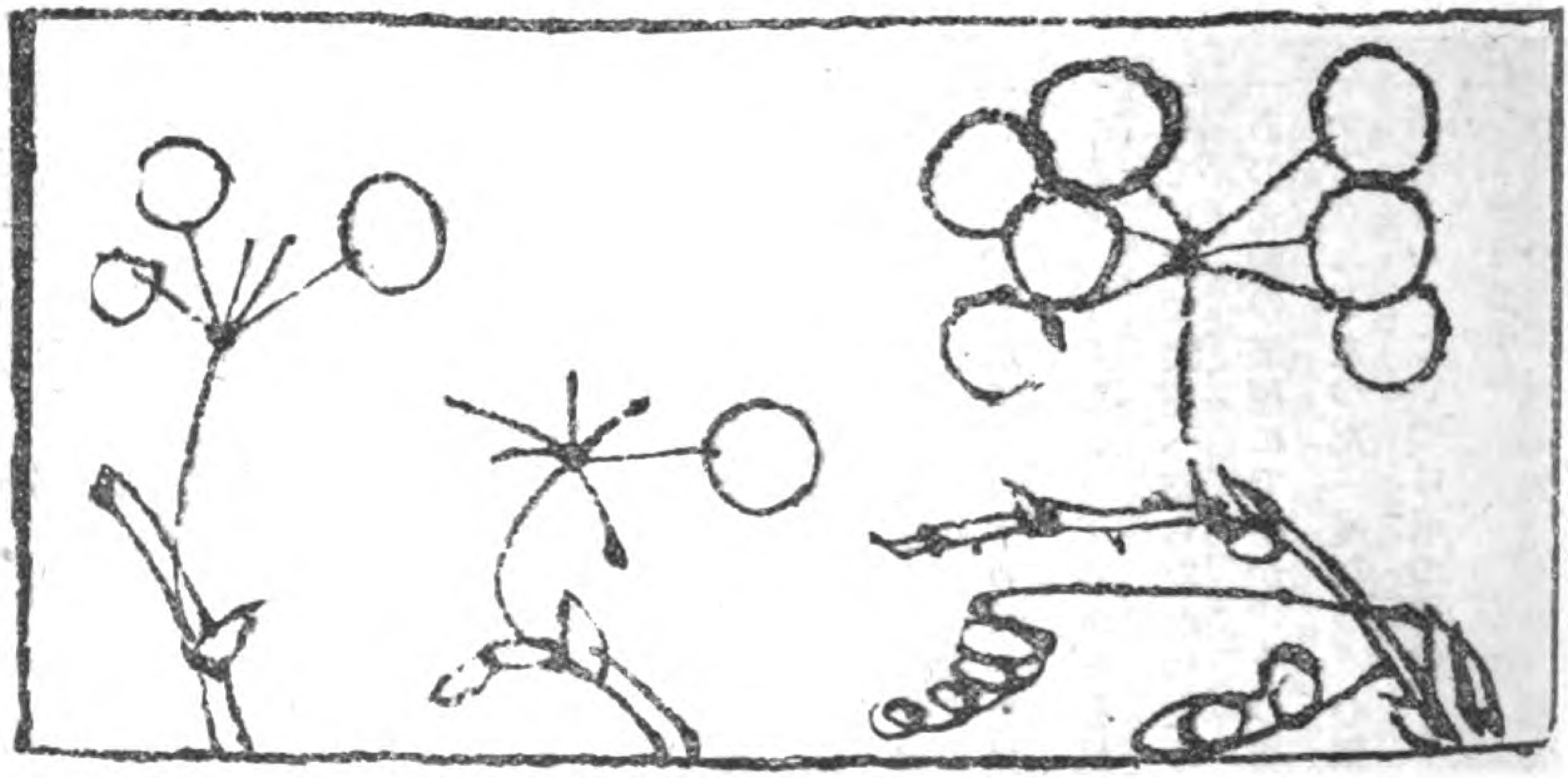
「何故結婚しない？」と次に問はれ、それには、雛六氏の位牌を差し出して

「この人があります。」と答へた。

結局、警察までいかないで濟んだが、そんなことに恐れて、この乞食を癈さうとは、決して考へなかつた。

孤兒院とか、養老院とか、假病次第で、樂々とベッドに安臥出來る病院も隨分あつたから………

貰ひものは、生活費を餘して、彼女の部屋に殖えてゆき、彼女は相變らず身綺麗で、健康で「勤勉」だつた——



女優

犬養健

五

合圖があつて、私は强慾な猶太人になり濟ました晴彦の後から階段を降りて行きました。不用な書き割りに仕切られたまるで場末の路次のやうに暗い、汚い、疵だらけな舞臺裏の床をあちこち往き來して「出(で)」を待ちながら、晴彦は二人きりになると、急にしんみりした態度に變らうとしてゐました。

「まつたくのところ先手を打たれましたなあ。修吉さんが來てくれるとは思はなかつたです」

シャイロックの下僕とジエシツカとの會話の進行してゐる舞台へ遠慮して、晴彦は聲をひそめるのです。

「一體何年になりますかね。——修吉さんがわたしと同じ背丈けになるのですからな。——小母さんももう年寄りでせうな」

「白髪が生えましたよ」

「さうでせう。——さうでせう。——忘恩の謗を免がれませんな。——招待券を御送りするのが本當なのでせうが、ついテレちやつて」

「なぜ」

「なぜつて。女には迷ふし、どうも、御承知のとほりの變てこな生活ですからな。修吉さんもわたしの芝居ははじめてゞせう」

薄い白衣に着替へて、猶太の娘に裝つた毬子がこつそり近寄つて來ました。こつそり——と私が感じたのは、舞台裏では足音をたてゝはいけないといふ云ひつけを、彼女が不馴れな女優らしく細心に守つてゐたからです。

「驚いた。修吉さんは兄さんの芝居、はじめてなの」

「いゝや、これでもフアウストを見ましたよ」

「やああの下らないフアウストを見て下さつたですか」

「見て、なぜ樂屋へ寄らなかつたの」

「あの帝劇の樂屋にですか。その勇氣はありませんでしたね」

「フアウストたつた一度なの。心細いのね」

「修吉さん、こいつは末つ子の、小猫のやうなやつですからな。遠慮なく遣り返しておやりなさい！わたしは稽古の時に打つてやるです」

「フアウストと。それからずつと前のノラを見ましたね。――でも米國邊は一體旅行が多いんでせう。さうぢやありませんか」

「それが修吉さん、日本ではまだ新らしい芝居の觀劇階級といふものが出來てゐないですな。芝居の凝所は話にならんです。自然金に追はれて田舍廻りが多いです。圖太く惡辣に構へないとこの社會では到底生存がむつかしいです」

薄明りと濕氣と臭氣とに包まれて、晴彦はともすると先刻の慷慨的口調に戻るのです

「わたしなんぞ現に借り倒しで生きてゐるです。算盤の合はない土地は夜逃げまでやつたです。美奈子もどうして、千軍萬馬の士ですよ。毒氣を持つてゐないと毒にやられる社會でね。――そんな生活だから、お宅には、どうも」――山師、策士、漁色家、デカダン、さまざまな肩書を世間から貰つてゐる晴彦は大業に頭を掻いて見せました。昔からどうかすると晴彦は、一寸氣の弱い、一寸正直なところを曝露するのです。

尤も本人は平常それを隱して、大いに僞惡家振つてゐるのでせうが。――「しかしこれでもまだ脈はあるです。この間うち例の自叙傳小説を書いてゐましてね、昔のお宅をいろいろと念頭に浮べたら急に、非常に懷しかつたです。非常に懷しかつたです」

「自叙傳に家が出て來るんですか。それあ早速讀まう」

「いや、お宅はほんの僅かですよ」

「僅かでも、是非讀みたいな。讀みたい譯があるんだから」

「譯？――そりやどんな譯ですね」

「どんなつて、簡單には云へないけれども」

私は先刻よりはずつと氣安さを取り戻してゐたのです。すると、晴彦は柄になく釣り込まれて眼を丸くしながら狼狽へ

てゐました。

「分つたわ。修吉さんなかなか人が惡いのね」

「うんなかなか人が惡い。さつきは二階で猫をかぶつてゐましたな!」

晴彦が下手から舞台に出ると同時に、毬子は私を誘つて上手の袖の陰にまはりました。其處はシャイロックの家の内部にあたるのです。梯子と薄べつたい板とで二階の出來てゐる有樣は普請場そつくりです。しかし開放したその二階の窓からは月あかりになぞらへた青白い電氣が射し込んでゐて、更に、三等觀覽席にぎつしり詰つた觀客の顏の塊りが一種の盛り上つた暈をつくつて、遠くにぼうつと見えてゐるのです。

「それあいけなくつてよ」と毬子が笑ひながら私を制しました。「向うからもあなたのお額が見えるぢやないの」

すぐ二間先きに晴彦の台辭が、開け放してあるシャイロックの窓からといふよりは、むしろ壁のあやしげな布目を透して聞えてゐました。私はこの不整頓きはまる、便所の臭ひさへ通つて來る區域のひと重外が、いま相當に美しくて爽やからしく出來あがつてゐるのを實感したのです。私はそこで、先刻晴彦が樂屋でG氏に向つて喋り立てゝゐた議論――いや、それは晴彦の說ではなく誰か歐羅巴の劇評家の說なのですが――その議論を想ひ出してゐました。――この芝居の主人公はそれあシャイロックでもポオシャでもありませんな。ヴェニスの町人氣質、つまりヴェニス全體の移り變りが主人公だといふのです。贊成ですな。またそれでないとシャイロックの孤獨がどうも馬鹿らしくなるです。………

そしていま、ヴェニスの街の辻辻のなかに小さく溶け込んだほんの一生物として、脊中の曲つたシャイロックの台辭を聞きとつてゐると、私にはそれが馬鹿らしくはなかつたのです。芝居らしい空氣にそゝられて、私はまつたくその街の大きい移り變りが主人公であるかのやうな氣特になりました。私は過勞で變つてしまつた晴彦の聲にもふと奇妙な回顧的

な愛情を感じました。といふのは昔の張り切つた晴彦の聲を憶ひ浮べてゐたのです。

「どうお」毬子が鬘の下げ髪を近づけて尋ねました。「芝居の舞台裏は」

「思つたよりずつと面白い」

「思つたより？　まあ威張つてゐるのね！」

しかし、私はそれよりも別の事に氣を奪はれてゐたのです。

「――晴彦さんの聲も老けましたね」

「だつて何年會はないと思ふの。ちつとも觀に來なかつた罰よ」

「さうかも知れません」

「これからはせつせと來ておやりなさい」

「來ませう」

「少しはお世辭もあるけれど、兄さんは舊式なのよ、ほんとに喜んでるのよ」

「さうですか」

「でも、なぜ今まで修吉さんが來なかつたか――少し分つてるわ」

「どんな風にです」

暗いので、私には毬子の表情がよく見えませんでした。毬子は狡い笑顔を向けてゐるらしいのです。

「あら分らないの。――分つてる癖に」

「ぢやあ云つて御覧なさい」

「上手いのね。だつて兄さんの木がどうのつて、さつき云つてたぢやないの。――でもね、兄さんはあんな事云つて、き

うとあなたに本をあげなくつてよ。相當あなたの家の事を書いてゐるんですもの」
「どんな風に」
「それあ、兄さんの書いてる事は少しヨタよ。――だらうと思ふの。それにしてもあなたの家の方(かた)は――あんまりよくはないわ」
「さうかも知れません。――確かにさうです」
「あらそんなに眞面目にならなくつてもいゝわ」
「眞面目にはならないけれども――なつても可笑しくないでせう」
「知らないわ。――無暗に恩だの何だのつて恐縮してるから。兄さんが何だかお人善しに見えて來るわ」
「本當です」
「また！あなたは感心しちやつちやいけないのよ、なんて、生意氣でせう。――話し込んぢやつちやいけないのよ。後にしませうね。そろそろ戸口に立つてゐなくちや」
事實晴彦の黄昏時らしい獨り言には ジエシツカの名がしきりに混つて ゐるのです。「ジエシツカ、もう大食(おほぐら)ひは出來んぞ。こりやジエシツカ。寢坊をしたり着物に鉤裂(かぎざ)きをつくつたりはもう出來んぞ」――晴彦はそれを樂屋での氣焔と同じ口調で怒鳴り散らしてゐるのです。そして窓枠にあたる電光のやうにありありと、私がそれを覺えてゐるわけは、毬子がもう一度鑿をつけるやうにして私に冗談を云つたからです。
「兄さんたら、わたしのほんとの事を云つてるわ」
毬子は戸を開けて出て行きました。ごく短い、容易い台辭なのです。その短かさ、容易さがまた可憐に響かない事もなかつたのです。毬子はすぐに引つ込んで來ました。

「今度は二階にのぼつて、見おろして、窓をしめるのよ。忙しいでせう」

粗末な梯子がぐらつきました。私は急いでそれを押へたのです。危い足どりで登りながら毬子は云ひ譯のやうにぶつぶつ呟きました「いゝのよ。いゝのよ。ほんとに仕樣がない。押へて貰ふ人間を昨日頼んで置いたのに」――毬子が上にゐる間に、しかし、ボヘミアンネクタイを結んだ、痩せた、顏いろのわるい靑年が靴音を用心して覗きに來ました。强いて落ち着きを見せながら、舞台裏の見學でもするやうな態度ではありましたが、明らかに私を何者だらうと觀察してゐるのです。私は梯子の段に腰かけながら、自分がいまその男の眼に甘い人間としか映らないのを、はじめて自覺したのです。

「いゝえ、あの人は「お嬢さんさよなら」と云つたきりなの」

頭のうへで、毬子が往來のシャイロックに答へてゐました。私は若葉の匂を想像しました。髮の匂を想像しました。毬子はまたシャイロックに向つて、神妙に暗記した台辭を云つてゐるのです。少し甘つたるく、生地(きぢ)を出して。

「さやうなら。――思つたとほりに事が運べば、わたしはお父さんを失(な)くしてしまふし、お父さんは娘を失くしてしまふのだわ」

六

たしかに私はその晩、毬子といふ間接の古い知り合ひに漠然と惹かれてゐたのです。が、私をそれほどに惹きつけたものが毬子個人の魅力だけだと云ひ切つてはどうも不十分なのです。毬子の云つたやうに誇張と愛想とがあるにせよ、私の訪ねて行つた心持を白川夫婦が揃つて感づいてくれた、受け取つてくれた、それが私には有り難かつたのです。私は樂屋ですつかり腰を落ち着けてしまひました。かういふ豫想外の氣安さが、全般の印象の背景になつてゐたのです、肖像畫のバ

ックのやうに。――そればかりではない。白川の一家族が自宅で退屈してゐたのではなくて、劇場の樂屋で、謂はゞ火事場のやうな出入りのなかで、忙はしく、殺風景に、騷騷しく應對してゐた事も原因の一つになつたのでせう。なぜといふに、もともと特徴のあるその連中の一つ一つの言葉や身振りがまるで光線にでもあてられたやうに、私には一層强まつて見えたのです。聞えたのです。

翌晩も私は晴彦から貰つた切符を持つて劇場に出かけました。久し振りの東京での公演といふのが當つて芝居はその晩も滿員に近い入りでした。演出家として決して周到でも緻密でもないが、晴彦の遣り口は博打をうつやうに機運第一主義で、それに萬事派手で太つ腹なのです。

私の貰つた切符は平場のずつと前の方でした。苦勞のない世界そのものゝやうな組み立ての、そのメロドラマのなかで、奈美子から晴彦、晴彦から毬子といふ順序に登場しました。しかし最前列に近くて、私は舞台全體の動きや意圖を感じるかはりに、白川一家の低い咳ばらひや一寸した合圖、白粉のつき工合や額の汗ばんだ工合なぞをそれぞれ見分けしてしまふのです。で、私は前後左右の觀客に取り卷かれながら、自分だけは相變らずすぐ舞台裏から眺めてゐるやうな氣になりました。これが毬子の特に「見よい場所」だと勿體をつけて選んでくれた席なのです。正直に云つて、私はそこに甘つたるい謎をぼんやり感じました。

毬子は前の晩のとほりにシャイロックの家の二階から往來に向つて、つまり觀客に向つて獨り言をつぶやくと、音をたてゝその鎧戸を締めました。表から見れば古臭い欄干と蔦とのある窓です。すると一二分して――私はふと舞台の額緣についてゐる小窓から毬子が客席を覗いてゐるのに氣がついたのです。元は番組の數字か何かを挿し入れたもので、今ではしかし使つてゐない八寸角ほどの小窓でした。毬子は私の氣のついたのを見てとると笑ひ出しました。例の惡戯氣をあらはして。

次の幕でも毯子は小窓から覗きました。その次の幕でも。……

長い幕間になりました。私の席を横に廊下へ出ると、すぐ二三間先きに樂屋へ通ずるくゞり戸があるのです。私はその廊下を往き來しながら、もう甘つたるい氣持ではありませんでした。可笑しなほど烈しい一本氣で、毯子のあの生き生きした惡戯を眞面目にとつていゝものか、全體毯子といふ茶氣そのもののやうな娘を一時的にでなく好いて行けるものかどうか、を考へてゐたのです。——私はこれ以上にいま近づいて行けば、きつと毯子を心から好きになると思ひました。同時に、恐らくちきに不滿になるとも思ひました。その直きに不滿になるであらう豫想が私を苦しめました。そんな風に嚴格に考へてしまつたのです。……

不意にくゞり戸がふわりと開きました。まるで風にでも押されたやうな輕い開き方でした。透かして見ると薄暗い闇うちに奈美子の長女が立つてゐるのです。もう小學校に通つてゐるといふその娘は前夜顏を覺えた私をみとめると、笑ひながら、廊下に出るのを躊躇しました。娘の後ろには誰かゐる樣子なのです。

明らかにその陰にゐる大人に敎はつて、娘は私にあらためて會釋をしました。しかし私が近づいて內を覗き込んで見ると、其處の小さい上り口を二三段のぼりつめた舞台裏の書き割りの横手に立つてゐるのは、階段のために一層脊の高く見える奈美子でした。

「おや今日は表から？　毎日御苦勞さんね」

頰紅を塗つて兩袖をたくしあげ、ストリンドベルヒの一幕劇に出る百姓娘の扮裝をもう濟ませながら、奈美子は田舍靴で板を踏み鳴らしてゐました。木綿の香りが、前の幕の富裕な後家姿よりは私にも親しめたのです。

「ゆうべはあんな風にかけ違つて失禮しましたわ」

かけ違つたといふ譯は、「ヴエニスの商人」では奈美子と晴彦兄妹とが絶えず交代に舞台に出る組み合せになつてゐて、

私はと云へば終ひまで兄妹と一所に動いてゐたからです。

「そのかはり毬子からすつかり報告がありましたよ」

「どんな風に?」

天井の梁で、次の芝居に使ふ赤電燈の試驗をしてゐるために、奈美子の表情はよく分らないのです。その表情のよく分らない趣が、丁度前晩の梯子の脇の毬子を聯想させました。

「どんな風につて、それは惡事善事とり混ぜて、綿密に」

「善事惡事ですか」

「いゝえ、惡事にほんの少し善事をとり混ぜて――などと云つては失禮ね。あなたは毬子の取り卷きぢやないんだから」

私は默つて階段の中途にゐました。取り卷きといふ不意の言葉で、昨日舞臺裏で出會つた痩せた青年を思ひ出してゐたのです。

「でも毬子の無遠慮には驚いたでせう? あれは修吉さん跳ね上りよ」

私はやはり默つてゐました。

「惡氣もないし擦れてもゐないのだけどもあれは――やつぱり跳ね上りよ」

私は冷え冷えした秋の霧のやうなものを眉先きから振りかけられた氣持になつたのです。私はやはり默つて、何故奈美子が念を押すやうに繰り返すのか、それを考へてゐました。――と、舞臺に建ちかゝつてゐる客間のなかを、奈美子の母親が横切つて來ました。その母親のあまり老けたのに私は前夜も驚いたのです。

「なんだお母さん、先きへ行つちまつたのかと思つて捜したのに――」大道具の職人に愛想なぞを見せてゐるその老人を

振り返つて、奈美子は獨り言ともつかずに、「丁度いゝわ。儀吉さんも一所に食堂へいらつしやい」

「僕はもう濟んだんです」

私は老人の降りて來た方角から傳つて來る陽氣な音を聞きとつてゐました。

「ぢやあ紅茶でもどう？――今日は合憎樂屋は妙なお客で滿員なのよ」

「妙なお客？」

「えゝ妙なお客」

「昨日よりももつと妙なお客ですか」

「えゝ昨日よりも妙なお客。――だからお止しなさい」

立つてゐる場所の高低（たかひく）のために、私はふと十年前の岡井さんの卿を感じました。しかしさう云はれて見るとその瞬間、私は猶更樂屋の扉を一つ一つ開けて、どういふ相場師や銀行屋や文士が入り込んでゐるのか見渡してやりたくなつたのです。

「だからその飛ばつちりでわたしは此處へ、毬子はお風呂へ、老人子供は食堂へ、それぞれ御避難なのよ」奈美子は昔のとほりに落ち着いて、笑つて、紛らせてゐました。「偶には年寄りのお附きあひもしておやりなさい。年寄りのお相手ぐらゐが――一番無難なものよ！」

驚くほど髮の白くなつた奈美子の母親に別れて、私が劇場を出たのは十一時過ぎてゐました。舞台の擬（まが）ひものを見つめてゐた眼には急に淡い、しかし落ち着いた月あかりを浴びたわけです。

私は奈美子の母親に附き合つて一幕劇を一所に見終ると、樂屋には寄らずにその儘外へ出たのです。しかし、霜らしい

もの丶低く降りてゐる路次を抜けながら、もともとこれでい丶のだと思ひました。古い知り合ひの人達、世話になつた事のある人達を訪ねて喜ばせたし、自分も借りが減つたやうな心持になつてゐる、それでい丶のだと思ひました。ほかの事は元來豫期もしなかつた景物だつたのだと思ひました。「あれはやつぱり跳ね上りよ！」――私は奈美子の批評を頭のなかで繰り返したのです。「今が何事も面白い盛りで、思はず人に戯れてしまふ。眞に受けてはいけない」――かういふ意味に私は奈美子の口振りを解釋したのです。よし、眞に受けるものか、私は番組を破いてキラキラ光る溝に投りました。二晩續けて芝居を見たあとで、私までがどことなしに舞台の人物の身ごなしの影響を受けてゐたのです。

私はかういふ控へ目な、謂はゞ自分の忍耐を試したがる性質のためにその後も度び度び寂しい經驗をしました。少くともあまり派手な目には會はずに來ました。………

それは毬子が白川の家族でなかつたならば、私が女に無經驗であつたにしても――いや無經驗であれば猶更、大膽に快活にこの一座の最年少女優に近づいて行つたかも知れません。しかしうつり氣の廉では、謂はゞ私の家は白川の家に對して負ひ目があるのです。要するに私は知らず知らず、白川の家と私の家との妙な因縁に縛られてゐたのです。

七

縣立の中學校に勤めてゐる友達と、やはり土地で育つた若い細君とに引き留められて、私はずるずるにその川べりに洗濯場を持つた、鄙びた家に滯在してゐました。その冬の流行感冒で寢込んで、私はもう十分に恢復したつもりだつたのですが、新芽の出る季節の變り目になつて見ると病氣あげくらしい變な疲勞に氣がついたのです。で、東海道の三島驛から海邊へ抜けて、沼津在のその友達の家に寄せて貰つたのです。友達の家にもう十日ほど泊つてゐました。體力から來る臆劫も手傳つて、小ぢんまりした家の萬事素朴な家風が氣に入つてしまつたのです。

友達もこの土地の人間で、勤めをしてゐる傍ら水産の方の調べものを續けてゐました。海に近いし、郷里の家に歸つてゐれば物價も安くて仕事の執着にも堪へられるといふ譯なのです。寂しいと云へば寂しい生活でした。だから偶に私のやうな人間が泊り込んでも迷惑ではなかつたのでせう。……

川の多い在で細君は捕りたての泥鰌を手料理しました。海に近い土地で細君は雲を見て明日の天氣をよく當しました。要するに友達の家の素朴さはこの細君と姑とが共力してこしらへてゐるのです。或る日友達の留守に私がぼんやりしてゐると、細君は赤ん坊を抱きながら隣家の樹に登つてゐる植木屋と垣越しに話をしてゐるのです。話工合から推して、細君の實家と同じ町から來てゐる植木屋らしいのです。――どこから見てもこの地方の風土に育つた若い細君でした。

勤め人の友達に對しても一日たゞぼんやりしてゐるのは氣がひけるので、私は毎日定まつた時間だけ本を讀んで頭の力をつける事と、定まつた距離だけ歩いて體力を恢復する事と、この二つを日課にしました。すると、この二つとも病後の私には丁度精一杯の課目であつたと見えて、溝と云ふ方が當てはまるやうな川べりの、その家の單調さを厭ふ氣は少しも起らなかつたのです。それどころか、もう暫くは生活にこれ以上のものを附け加へたくないやうな横着な氣さへ起してゐました。……

何故このやうな平凡事を長たらしく書いて見たかといふと、かういふ土地で、このやうな身體の狀態の時に突然毬子から手紙を貰つた――その說明に使ひたかつたわけです。

實際私の受けとつたハイカラな封筒は、この家の構へや人間とはひどく釣り合ひのわるいものでした。勿論不意打ちの好奇心もありましたが、私は質朴な細君に多少工合のわるいやうな心持で、その女學校のノートじみた手紙を讀みました。讀んで見ると、毬子が新らしい劇團に入つたといふ知らせなのです。方々に轉送されて大ぶん遲く受け取つた勘定になるのです。

「兄夫婦があのやうに急に渡米しましたので、一時は途方にくれました」

と毬子は妙にしほらしく訴へてゐました。白川夫婦は有樂座で興行した年の暮に、早く云へば經營に行き詰つて、例の向ふ見ずからカルフオルニアへ出かけてしまつたのです。

「私はもう甥や姪の世話をして、舞台に立つ事はあきらめてゐました。それが思ひがけない幸運で、今度アメリカから歸朝なさつたT先生の世紀座に採用して戴きました。T先生の芝居ならばと母も許してくれました。そのうへ、來月早々の初演に私は身分不相應な役を許して戴きました。チエホフの「叔父ワーニヤ」のソーニヤなのでございます。今が烈しい稽古の最中で、私は朝も晩も電車のなかでもソーニヤの台辭ばかり繰り返して居ります。芝居の済むまでは舞台の外でもソーニヤと同じ娘になつてゐやうと心がけて居ります。」

「それでも、私がこの一年の間母と心細く頼りなく暮らしに追はれてゐました事は、今になつて見ればソーニヤの役を勤める場合に、大變爲めになりました。私はあゝいふ娘の心持がよく分るやうになりました。私は辛抱づよくなりました。」

「それは兄や姉のゐる間も、決して樂な暮らしをした事は一度もございませんが、たとへば稽古の折に兄にステツキで打たれましても、涙をこぼしながら烈しい稽古の自慢にするやうな心持がありました。本當にまだまだ苦勞知らずで、兄達がゐなくなつた後から考へれば極樂でございました。あの頃にソーニヤの役を兄から貰ひましても、私は表面のことしか呑み込めなかつたと思ひます。私はこの一年の間の母のためにもソーニヤで成功したいと願つて居ります。これでも姉が舞臺に立つた頃よりはずつとずつと時勢が向いてゐるのだと母が申してくれます。」

「稽古は澁谷の松本といふ貸席で續けて居ります。大變勝手なお願ひでございますが、一度御覽においで下さいませんでせうか。母も大ていの日は參つて居ります。きつと有樂座の時分とは違つた私を御覽下さる事と存じます。それから。これはなほ申し上げにくい事でございますが、劇團のために、どなたか芝居のお好きな方がおいでとしたらば、是非お勸め

おき下さいませ。プログラムと切符が刷れましたならば、いづれ又お送りいたします。けれどもこのために浮かましく手紙をさし上げたのではございません。たゞ芝居を見ていたゞきたいのです。私一人の勝手になりましてもいけませんので母からもお願ひ致します。」――

東實奈美子の母親の手紙も同封してありました。これにも時を得ない俳優の留守宅らしい心勞ひがあらはれてゐるのです。しかし詰まるところ、私には何となく遼遠しい出來事のやうに響きました。質朴な人達を毎日見てゐる目には、その手紙のなかの都會くさい慾望や夢想だけが殊更浮き出て感じられました。それに――火の塊りを待つてゐるやうな娘を漠然と恐れる氣持もあつたのです。

夕方友達が歸つて來たのを機に、私は柿若葉の門口に降りたつてゐる細君に報告しました。

「奥さん、今日の東京からの手紙は、あれは女優から來たんですよ」

「まあ！　女優さんてものはどんな手紙を書きますの」

「どうも、都の風が急に吹いて來たものだ」友達も笑ひながら緣側に來たのです。「お客さん一人でからも逢ふのだから。

――女優とはまたどうした事だ」

私は經緯を話したのです。それから手紙の內容も。細君の單純な知識慾が私には氣に入つて。

「若いなあ、その娘さんは」

友達はまた繰り返すのです。

「ふうむ。これあひと旗擧げやうと意氣込んでゐるね。潑剌たるものだ」

「ほんとに。氣を張りつめて。東京の人でなかつたら病氣になりますわね」

「あなた方もさう睨みましたか」

「既んだとも。雌伏してゐて——まるで跳ねあがるのを待ち構へてゐるぢやないか。僕達が田舎にゐるので殊更に華華しく思ふのかも知れないが」

面白がつて、私達はそれから遅くまで青葉の下で女優生活を話題にしました。話題にしながら、しかし毬子に返事を書くことは翌日もその翌日も不精をしたのです。それに私は、毬子がぬかりなく兄の關係をたどつて大勢の人間に、それもちやんとした大勢の人間に後援を頼んでゐる事だらうと思ひました。書生の私に手紙を寄したのは古い緣故の、心持のうへの事なのだらうと思つたのです。それなればいづれ會つてゆつくり話せばいゝのだと、勝手に理窟をつけました。——季節が美しくなるにつれて友達が毎日のやうに近郷を案内してくれるので、私は簡單な斷りさへつい打ち捨てゝしまひました。で、私が東京に歸つた時には、芝居はもう濟んだ後だつたのです。……

×　×　×

半年あまりも放つて置いて、私は十二月に入つてからやつと白川の留守宅を訪ねました。それも十日ほど前の新聞の演藝欄で、留守宅が以前のとほり化粧品屋を開いてゐるといふ記事を讀んで思ひ出したのです。奈美子自身の考案した化粧水といふ賣出しなのです。この小さな店は院線電車の或るガード裏の横町にありました。繁華な驛のすぐ近くにあるとは思へない、ほんの半町ほどの長さの寂れた横町です。

夜の九時を大ぶん過ぎて私はその驛の階段を降りて行きました。近郊から歸るをりにはどうかすると市内電車への乘換場に使ふ驛なのです。寒くて、それに霙模樣でした。私はふと演藝欄の記事を思ひ出しました。かういふ折に訪ねないとまた延び延びになると思ひました。霙が本物になつたら傘を借りやうといふ腹もありました。しかし、さういふ必要でも

なければ夜遅く女書齋を訪ねる氣にはなれなかつたのです。

その店は看板も飾窓も荒れて、豫想以上に化粧品屋とは思へない有樣でした。――毬子は子猫を抱きながら、火鉢の傍で十二三の女の子と話をしてゐました。ガラス障子なので往來から分るのです。私はしかし、その店の暇くなさゝうなのに一寸失望しました。冬の晩などには硝子一枚を隔てた家のなかは別世界に見えるものですが、その店は一向にそんな氣を起させないのです。

私は音をたてゝ内に入りました。が、毬子はまつたく見忘れたといふ風で、訝しげに視返してゐるのです。

「しばらくでした」

手持不沙汰に立つた儘、私は其處へ寄つたのを後悔するやうな氣になりました。

「失禮ですがどなたでしたらう」

總髮に深く口を埋めてはゐましたが、あまりに艶も何もない返事なのです。私は徐々後悔しながら名前を云ひました。

「あゝ伊東さん。――さうでしたね。しばらく。――まあお掛けなさい」

やはり、そんな人間もゐたかといふ淡泊な口振りでした。

「うちの猫がこの人の台所に上り込んでね、いま歸つて來たところなんですよ」そして私にはもう構はずに、その女の子との話を續けるのです。「古ものだけれども、これとこれ上げませうね。さう汚れてはゐない事よ」

引き出しからリボンを選んで、毬子は猫を連れて來たらしいその女の子に持たせてゐました。女の子が出て行つた後もまだ子猫に話しかけてゐるのです。

「もう他所へ行くんぢやないよ。行くんぢやないよ」

すぐ二階から奈美子の長男の低い音讀が聞えてゐました。私はその男の子でも降りて來てくれないものかと思つたので

す。少くとも心中ではあの手紙と同じくらゐの親しさで應對されるものと豫期して來たのですから。

「しつ。しつ。――わたしたちはね、猫一匹飼ふにも近所の人によくして置かないといけないんですよ。陰でいぢめられたりしては可哀想ですからね。――あなた方にはそんな事お分りにならないでせうね、門のついた家に住んでらしつちや」

私は不意に、半端な時に謝まりました。

「チエホフの芝居の時にはまつたく失禮しました」

「チエホフの芝居の時にまつたく？　どうなさつたの」

そのとぼけた口振りを何處まで眞面に受取つていゝものか分りませんでしたが、私は兎も角も沼津の在に出かけてゐた話をひと通りしたのです。毬子は苦笑に近い皮肉な頰笑みを見せながら聽いてゐました。と、高飛車に遮つて云ふのです。

「まあ人つて分らないものね！ほんとに分らないものだわ」

「どう分らないのです」

「譯を聞いて見なければ分らないものね、つて云ふのよ」

やはり皮肉な響があるのです。

「東京にゐない斷りだけでもあげればよかつたんですが――」

「さうよ。さうですとも。わたしの書いた事が冗談のやうにでも讀めたんですか！」

「本當のところを云へば――僕なんぞが働かなくつたつて大勢崇拜者がゐると思つたんです」

「合憎ね、わたしは昔から堅人よ」

「堅人でないとは云ひません」

「母や姉に無暗と監督されて、いやでも應でも堅人だわ―」

私は有樂座の分別臭い奈美子を想ひ出しました。

「默つてゐて、どうせ本氣にはしないのでせう。ちつとも困らないわ」

「いゝや。さう思ふ材料がないでもないんです」

「材料があれば猶更ぢやないの。母も怒つてゐたわ、あの時。母に對してだつてあなた失禮だつたわ」

「さうでした」と、その通りなので、私はやはり受け身に甘んじてゐました。「お母さんはいまお家ですか」

「花子とふたり、風邪氣で二階に寢てゐるわ。――苦勞してゐる時つてものは兎角ひがむものよ。あなた方のはうでひがませないやうにしなけりやいけないわ。さうでせう?」

「不精しました」

「不精だけぢやないわ」

「…………」

「あなたの家の遣り口はみんな同じね。あなただけはそれに氣がついてゐるのかと思つたら――やつぱり同じだわ」

「それあ云ひ過ぎるでせう」

「まあどうして?」

上は手に出て、毬子は大きく愕いて見せました。私はむつとしてその表情を視つめ返してゐました。しかし私には説明は出來なかつたのです。毬子の魅力を警戒したのだと云へば一種の告白になつてしまふのです。

「本當に、さう思つてゐるんですか」

「えゝ思つてゐますとも。なぜ」
「それならそれもいゝでせう」
天井の低い、火の氣のない店先きで、二人とも少時むつつりと默つてしまひました。
二階の疊を歩く足音が殊更すぐに頭の上で響くのです。
「あれは貞一さんかしら」
私は仰向いて獨り言のやうに云ひ紛らせました。普請をいつの間にか止めてゐる奈美子の長男を仲間に入れたうへで、いゝ加減に引き上げやうと思つたのです。「――貞一さんなら久し振りで會ひたいな」
「學校の宿題を始末したら降りて來るでせうよ」毬子は私に怒つてゐながら、子供を其處へ呼ぶ氣は左程ないのです。「お祖母さんの許しが出ると遊びに降りて來ますよ。――あなたはまだ獨り？」
私は不意の質問に、呆氣にとられました。
「獨りでないやうに見えますか」
「いまに子供を持つて御覧なさい、大變なものよ、毎日毎日。わたしなんぞもう芝居は出來ないわ！」
「どうしたんです。そんなに苛苛して」
「もうぢきまる二年、二人預つてゐるんですからね。兄がカリフォルニヤでうまい仕事にぶつかるまで、なんて夢みたいな話ですわ。子供がうるさくつて云うんぢやないわ。いまに毎日子供の世話をして御覧なさい、責任を持つて。わたしの氣持が分りますよ。尤も、あなた方はどうせ女中つてものを使ふのでせうからね」
硝子障子を軋らせて、芝居者らしい酔つた男が入つて來ました。毬子の前で道化た役目を甘んじて引き受けながら、その男は身振り澤山にしきりと滑稽な話をはじめました。私は默つて、さまざまの化粧品の商標をぼんやり眺めたりしてゐ

ました。つまり、毬子がさういふ男をどんな風にあしらふか觀察してゐたのです。毬子はしかし、容赦なく云ひ返したり聞き流したりしてゐました。この男のやうに根氣よく女優の「お附き」にはなれない、合憎だ、と私は魅力のないでもない毬子の我儘振りを見てゐたのです。

しばらくしてその男が便所を借りて奥へ立つた時に私は尋ねたのです。

「あれはどういふ人ですか」

すると毬子は同じ芝居者、同じ種族を庇ふやうに、急に敏感に撥ね返して來ました。

「あの人がどういふ人？　だらしがないだけでいゝ人よ！」

醉つた男が店先きに戻つて又ひとしきり上機嫌に喋りはじめた間に、私は毬子にろくに挨拶もせず外へ出てしまひました。汽車の通るガードをくゞつて電車に乘りました。――その儘、私は私でやがて職業を持ちました。そして生活を持つたのです。………

八

最近、あの白い輪の拵れてゐる電車のなかで話しあつて以來、また偶然毬子に出會ひました。まだ冬のはじめの淋しさが淋しさとして感じられないで、久し振りに快いといふ時期でした。私は子供の風邪藥の瓶を下げて新宿驛のプラットフオームへのぼつたのです。毬子は其處で電車を待つてゐました。ガード裏の留守宅で夙うに母親を失くした毬子でした。毬子は私を見ると愛想よく立ち上りました。「しばらく」と云つて。――

「遠くから、さうだらうと思ひました。夏よりは大ぶん見かけがいゝやうですね」

「えゝ、この頃になるといつも太りますわ。でも扁桃腺がなかなか癒らなくつて」

勢よく立ち上つて來たわりに話が續かないのです。毬子はしかし夏の頃よりは落ち着いて、絶えず所謂年増らしい微笑を見せてゐました。成程髪が亂れてゐるのです。夏瘦せの或る妖氣をも失つて平凡に太つてゐました。もう美しくないその人に、隔てなく古馴染の話が出來るのです。

「おや、どなたかおわるいの」

「子供です。風邪が長くつて困ります」私は瓶を見せて札をカタカタ云はせました。「子供を持つて見ると分る事があるつて、先に叱られた事があつたけれども、もうこの通りです」

「そんな事を云ひましたか？わたしが」毬子は顏を赤らめて「つまらない事をいちいち覺えてらつしやるのね、お轉婆時分の話を」

そして毬子はひとりで繰り返し笑つてゐました。――私の方の電車が入つて來ました。

「この頃は、芝居の方はどうです」

「おや、お乘りになりませんの」毬子は私がすぐに別れるものと考へてゐたのです。しかし私の顏いろを見てとると、それから一層、夏とは違つた落ち着きを見せました。「芝居ですか？あれつきりです。これからだつていつ出られるか分りませんわ」

感傷的な話を避けて、私はそれを扁桃腺の所爲にわざととりました。

「上手な醫者に切つて貰つたらいいかも知れない――」

「いいえ身體のためばかりぢやないんです。女優としちや、こなせる役柄が狹いんです。自分でよく知つてゐますわ」

さういふ事の話し相手に飢ゑてゐるかのやうに、あまり突然しみじみと云ひ出されたので、私はどう返事をしたものか困つたのです。

「それあ過渡期なんでせう。一時的の事でせう」
「つまり子役の聲變りですか？」
毬子は少しばかり笑つて見せました。
「えゝ。何て云ふか、娘の役が柄に合つてゐた人にはみんな一度、さういふ時があるものでせう」
「一寸老けた時にね？――ところがその大事な時にすつかり休んでしまつたのだからあつさりしたものですわ」
「さう思ふだけきつと、あなたが複雜になつたんでせう――」
「それがお合憎ですわ。もう弱身を一切合財これで承知なんですから！」調子に乘つて自身を嘲ける物言ひなのです。「あんまり一本調子で、わたしのやうなのは少しでも老けたらもう動きがとれないのですわ。兄によく云はれた事だから、ちやんと分つてゐるんです」
私はひどく寂しくなりました。中途半端では別れにくゝなりました。もう一歩踏み込んで慰めて行きたくなりました。
と、毬子は昔の面目を發揮した、いかにも毬子らしい勝氣を云ふのです。
「どんな役でもひとつ演りこなしてやらうと思つてゐた時分から考へると、もう世の中が馬鹿らしくなつてしまひましたわ！」
「そりや無理だ。ひとりでそんなに出來るものぢやない」
「……」
「ひとりで出來る役柄がおほよそ極まつてしまふから、そこでいろいろの役者が大事になるわけぢやありませんか」
「それはさうですけれど」
「僕のやつてゐるつまらない仕事を引き合ひに出しませうか。僕だつて思案しぬいたあげく、ひとりびとりの役割が――

つまりひとりびとりの力ですがね。――結局極まつたものだと思つたら、急に肩がおりたんですよ」
「まあ老けたやうな事を仰有るのね」
「僕がですか。大違ひです！さう思つたらすつかり若返りましたよ。ほんとです」
「さう若い、若いつて自慢なさらないでもいゝわ」まだ活氣を失つてゐない證據には、毬子はすぐに手厳しく云ひ返しました。「それは男の三十は女の二十ですもの！」
　毬子が人を待つてゐるのだと分つて、私達はまだ其處でしばらく立ち話してゐました。構内のレールの列は秋のレールの列よりも擴がつて見えました。毬子の現に考へつめてゐる事柄は私のその頃考へつめてゐた事柄とまさしく打つかつたのです。二人とも同じやうな焦慮を持つてゐたのです。人生に對する焦慮をです。が、電氣掲示が動いて、何台目かの山ノ手線電車が入つて來ました。その乘り換へ客のなかゝら五十を越した婦人が、毬子を見つけて近寄りました。毬子のたゞ笑つてゐて紹介しない様子が、どうも姑のやうに思はれたのです。しかし紹介をされないために、私は何となく話題を途切らせて、やがて反對側の電車に乘つた時も、毬子がいま話相手を切に求めてゐると十分判つてゐながら、家へ招くひと通りの挨拶をさへ云ひそびれてしまつたのです。
「では又」　「では又――」
　もう毬子に魅力のないのを見抜いて安堵した筈であつたのに。

×　×　×

郷里へ行く用事が出來て私は下關行の列車に乘りました。私は新聞を擴げました。丸ノ内を背景にして洗濯屋が干し物

をはじめてゐました。さういふ屋根とすれすれに、まだゆつくり急行車が走つてゐたのです。私は五六種類の朝刊を買ひ込んでゐました。と、一番演藝に縁のある新聞の隅で、まつたく不意に毬子の病死したのを知つたのです。元朱面座女優であつて有名な白川晴彦の義妹だといふ、ほんの五六行のそれは記事でした。まつたく女優は一年も舞台に立たないともう香りを失ふのです。あの無理に勢よく出してゐた嗄れた聲は、喉頭癌のためだつたのです。……

その記事にはまた葬式のある寺の番地が出てゐました。私の家からは直徑にしてごく近い寺らしいのです。

長旅をする汽車はまだ下町の家並から離れてはゐませんでした。私は東京にゐるやうな、ゐないやうな變な狀態でした。私のそこで最初に考へた事は、弔問しなければならないといふことでした。しかし次にはもう、毬子の良人の名も知らない事だし、それに東京驛に着いた矢先きに聞いたわけではなく、汽車に乘つた後で知つたのだから――といふ風な曖昧な心持に返つてゐました。ひと口に云へば面倒くさい氣持です。

陽があたつて來て、久し振りで私は田舍の冬枯の景色を眺めました。私は勝氣な毬子がもう音無しい、といふやうな事を考へてゐました。毬子があの後、個人の小さい事、しかし小さい個人が次次に限りなく生誕して續く事、そこからして新らしい快活さを獲たかどうか、さうあればよかつたが、と考へてゐました。そのうちに私は、いつも私の顏を見れば高飛車に出る、私の道義心を突つく、その本人のもうこれで居なくなつた安樂さ――それに近い心持を何となくぼんやり、日向のなかで感じてゐるのに氣がつきました。氣がつくと――流石に驚きました。白川一家には最後まで我儘をきめてゐたのだと思ひました。

私は人間を應揚にするために過度な自己穿鑿は避ける工夫をしてゐるのですが、この時には流石に考へてしまつたのです。考へて行つて、毬子との附き合ひは要所要所でいつも不精の連續だつたと思つたのです。その不精はどうかといふと――やはり毬子がチエホフの芝居のあとで皮肉を云つたやうに、不健康のための不精のほかに、遠慮のための不精のほ

かに、自分の屋根を心配せずに持つてゐる人間の不精、といふところが何處かにあるのです。

私は死者に對して平靜を失ひました。毬子だけの問題ではなくて、これは私の生活態度の問題でした。この根性は私の父親にはなかつた筈です。私の父親は苦學して、民權論を新聞の社説に書いて、少しづつ少しづつ地位を得て、私に所謂高等教育をほどこしたのです。威勢よく新鮮に流れてゐた水が平地に來て淀みはじめた形です。注射をしないと墮落してしまふのです。

私は襯衣を振るやうに自分をふるひました。

籠つたぬくもりを追ひ出すやうに自分に空氣を入れました。

郷里で私は五日目にやつと中心地の市に歸つて、床屋に行つて、電車に乘りました。町はづれの公園へ出かけて半日ゆつくりしやうと思つたのです。五日打ちとほしの用事をひと先づ終へたのです。すると、彈むやうにして走つてゐる空身の電車のなかで、思ひがけなく兩側の白い輪のついた釣革がひどく搖れてゐました。——私はと云へば電車に乘つて、電車のとほりに動いて、たしかに生きてゐるのです。生きてゐるからには停滯せずに生きやうと思つて、自分を少しづゝでも掃除して、自分に痛い注射をして、筆をとつたのです。……

（終）



梅雨近き頃

廣津和郎

これは前月『改造』に發表した『二つの挿話』（第一だけ發表）の第二の挿話である
これだけで無論獨立したものではあるが、併し氣持の上で或關聯があるから、併讀さ
れれば幸である。

眞田が入院した日、彼の留守宅で落合つた友人達三人――小說家の秋川と畫家の小柳と自分と――は、日暮れ方連立つて、眞田の家を出た。

これで兎に角一段落ついたといふ氣持が、みんなの胸にあつた。この上は唯早く眞田が全快する事を待つより外なかつた。

眞田の家から二丁ほどしてU公園に出る。自分達は公園の中に這入つて行くまで、默つてゐた。梅雨の近い事を思はせる、空氣の濕つぽい晩だつた。公園の中には櫻の青葉の匂ひがした。

『併し可怕いね。いつ我々に襲つて來るか解らないからね』と秋川は眞田の發病以來幾度となく口にした言葉を又繰返した。『昨日Mにあつたら、Mも恐慌を來してゐたよ。「自分だつたら、色情狂に違ひないから、サルマタをしつかり賴む」つて云つてたよ』

陰氣な話をする間にも、秋川は彼特有な機智的な表現を忘れなかつた。彼の一言か二言の表現で、その初期によく色情を取扱つた小說家Mの面目躍如たるものがあつた。そこで三人は聲を出して笑つた。笑ひ聲が濕つぽい暗に充ちた空氣の中に、ぼやつと餘韻なく消えて行つた。

『併し藝術家の一生としては立派なものだと思ふね。若しあのまゝになつてしまつても、發狂は藝術家に取つて恥ぢやないよ』暫く默つた後で、秋川は又云つた。『眞田もあれで行くところまで行つたといふ氣がするよ』

自分は秋川の言葉の中に、『羨望』に類するやうな響を聞いた。自分はやや驚きに似た感じで、彼の言葉に聞耳を立てた。――ほんたうにこの男はさう思つてゐるらしい。少年のやうな純粋な氣持で、藝術家の一生とか、藝術家の最期とか云ふものに、一つの『輝き』を追つてゐるらしい。花の散り際、武士の命の捨てどころ――それに類するやうな『美』を求めてゐるらしい。

自分はそれを聞きながら、『意外』と『羨望』とを半々に感じた。と共に、自分の心持にないその『單純さ』に、微笑をも覺えた。――自分の頭には、それに類するやうな感情は全然なくなつてしまつてゐる。自分は自分の最期については、年と共に何も考へなくなつて來てゐる。自分がその問題について考へる事は唯これだけだ。自分は自分の一家の中で最後まで生き殘らなければならない。自分の死が自分の肉親達に與へる寂しみを考へると、自分はやり切れない氣がする。それよりも自分が後に殘るものの寂しみを、全部ひとりで引受けてしまひたい。自分はさういふ意味で、自分の子供よりも更に長生しなければならないやうな氣がする。……

それから又暫く無言で歩いた。『生』とか『死』とかいふ問題が、默つて歩いて行く間に、自分の頭に往來した。秋川は一層さういふ問題を辿つて考へてゐたに違ひない。

君家の小柳は一言も口を開かずに、默つて我々の側に歩いてゐた。

『どこかに行つて、一つ騷がうか』と突然秋川が云つた。『え、少し陰氣でやり切れなくなつて來た』

『うん。併し何處か騷ぐところに行つたつて、我々のやうに酒の飮めない連中は仕方がないぢやないか』

『それもさうだね』

『兎に角、廣小路まで出て、珈琲でも飮まう』

自分達はU公園を拔けて、廣小路の方へ出て行つた。眞田の突然の發病以來、自分が一番强がりを云つて、疲れや脅えを外に表すまいと力めてゐたが、併し眞田の家とU公園をひとつ隔てた此處まで來て、町の灯や廣告燈の明滅などを見ると、やはりセンチメンタルにならずにゐられなかつた。三日前に眞田を入院させに連れて行つて、たうたう入院させる事が出來ずに歸つて來た時のあの氣の弱さを思ひ出すと、自分もさう强い事の云へるわけのものではない。自分は十三四年前に、眞田と自分とがまだ文學青年として、本郷の眞田の家に一緒に住み、眞田の母親に飯を作つて貰つてゐた時分からの事を思ひ出した。金もない二人は、電車にも乘れずに、夜遲くまで町をぶらついたものだつた。金がない癖に、町の灯が二人とも好きだつた。長髮に近い位髮をのばして、垢染みたもりむら銘仙の羽織に、セルの袴を長く穿いて、兩肩を前に少しすぼめ加減にして、その癖その肩に妙に反動をつけて、しゆつしゆつと活潑に步いてゐた彼のその頃の姿が思ひ出された。その彼が病院に監禁されてゐる。――さういふ風な順序の物の考へ方は、センチメンタルになりかけてゐる心には凡そ禁物である。やはり眞田や自分などの昔からの友人のTは、病氣になつた眞田を見舞に來た晚、彼は家に歸つてから眠れないで、ひと晚中泣き明かしたさうだ。同じ道を辿つて來た同じ年頃の親しい友が遭遇したこの異變は、Tの後で

の云ひ方を借りれば、『越し方行末』などをしみじみと思ひ出させたさうだ。――自分はそれを聞いて笑ひ出した。自分はそこでもTの氣の弱さを一笑に附して、自分の強がりを彼に示した。……併し考へ方には、言葉と同じにリヅムがある。その哀しげなリヅムにぶつかり始めると、やり切れない。自分は今になつて、自分の考が自然にかもし出す感情に不意に觸れて、不覺にも、こめかみが急に緊つて來るのを覺えた。廣告燈や町の灯が、自分の眼先にぼやぼやと滲んで見え始めた。

自分は秋川や小柳に、その醜態を氣づかせないために、急いで咳拂ひをした。

自分達はとあるカツフェエに這入つた。小柳と自分とは紅茶を飲んだ。

『僕はウヰスキーを貰はう』と秋川が云つた。

『君は酒が飲めるのか？』

『飲めやしないが、近頃は時々ウヰスキイをやるんだよ』

自分は秋川と眞正面に坐りながら、彼の顏を見た。色のついたカツフェエの電燈の具合で、彼の容貌がひどく痩せ衰へて見えた。額の廣い、鼻の高い、それ故に顏の上半部が鋭い程精神的に見える彼は、その稍大きな口元には全然それと反對のものを持つてゐた。上唇が少し出て、多少出つ齒と云つた形で、而もその唇の色が、鮪の生肉のやうな紅味を帶びてゐた。――[illegible]菌でもゐるのではないか、自分はその唇の色を見る度に、よくそんな事を考へた。

自分はこの秋川の書くものが、昨年以來不思議な暗さを帶びてゐる事を思ひ出した。絕望的な死と虛無……自分が最近讀んだものは、大抵さういふ色を帶びてゐた。

自分は眞田が病氣になる以前は、この秋川とさう近しい友人ではなかつた。一年に二度か三度、何かの會合で顏を合はせるだけだつた。が、會ふ數が尠いだけ、彼の衰へが目立つて自分には感ぜられた。

或海岸で彼と會つた時、自分は每日のやうに徹夜するといふ話をした。と突然彼はその機智的な眼を輝かして、『それで

は君は細君とはいつ寝るんだい?』さう眞向から自分に浴びせかけた。——それは粗い横縞の浴衣の上に、カンナ屑の緣の廣い海岸帽子を阿彌陀に被つて、海水に染まつた黑い顏に、帽子の頸紐ばかりを、白く際立たせて見せてゐた十年前——二十六七の頃の壯健な彼だつた。

併し今の彼には、さうした相手と一太刀交へずにはゐられないと云つたやうなものがなくなつて、その機智的な眼には、何處か人なつこい寂しみを湛へてゐた。——眞田に對する彼の友情にも、少年に近いやうな、涙つぽい單一さが現れてゐた。

いろいろな話題が持出されたが、併しどんな話題でも、直ぐ眞田の病氣の事に歸つて行つた。『精神病』『死』——それがどんな話にも、附物のやうに出て來た。

『實際少し陰氣になり過ぎたね』と自分は云つた。『何處かに騷ぎに行くといふのも臆劫だが、何かやけくそ見たやうなところを歩きまはつて見たいね。普通の人間並の感情を踏みにじつてしまふやうなところを……』

『うん』秋川は最後の滴をコップから飲み干して、陰氣にうなづいた。

昔淺草の公園裏にあつた魔窟の話が出た。

『誰でも一度は通る道』そんな事を誰かが云つたあの細い露次の中の濕々した一廓だ。

『もうあれは全然なくなつたのかね』

『全然なくなつたらしいね』

自分は不圖龜戶の天神境內を思ひ出した。自分は地震後、自分のところに來る若い青年につれられて、そこに見物に行つた事があつた。

『君は龜戶を知つてゐるかい?』

『いや、知らない』

『昔の淺草と同じやうなものだ。行つて見やうか』

『ふん』秋川はさつき『騷ぎに行かうか』と云つた時とは違つて、少しも氣の乘らない返事をした。

氣の乘らない返事を聞くと、自分も一遍に氣が乘らなくなつてしまつた。强いて掻き立てる火――さう云つた氣持だつたので、自分は直ぐ又前の沈んだ氣持に歸つた。

『兎に角、此處を出よう』

自分達はカッフェエを出た。外には相變らず廣小路の明るい灯だ。自分達は何といふ事なく往來に立止つた。もうこれで『左樣なら』と誰かが云つてしまへば、互に解散する事になる。――併しこのまゝとぼとぼと各自の家に歸つて行くのが、一寸寂し過ぎる、と云つたやうな感じが誰の胸にも來た。暫く默つたまゝ立つてゐた。

『君は？』と秋川が訊いた。

『僕は上野から省線に乘る』

『ふん』秋川は淡然とさう云つたが、急に子供らしい調子で、『行つて見ようか、その龜戸に』

『うん、行つて見よう』

さつきから一言も喋らない小柳は、併しそれは陰に籠つて喋らないといふやうな默り方ではなくて、いつでも彼の持前のにこにこした笑顏をしながら、唯我々の云ふ通りに一緒に歩いてゐるといふだけで、何の意見も吐かなかつたのだが、この我々の思ひつきにも別段反對はしなかつた。

自分達は圓タクに乘つて、龜戸に走らせた。このとぼけた思ひつきは、併し自分達をやや快活にした。もつと若い頃なら、偶然の事でこんな風に集り合つた三人が、いきなり龜戸に圓タクを走らせるといふやうな事も想像出來るが、眞田が入院したその晩に、相當の年配の我々が、酒も飲まずに、（秋川のウヰスキイもたつた一杯きりだつた）かうして龜戸見物

に出かけるといふのは、妙な取合せだつた。が、この妙な取合せの面白さが、みんなの氣持をかなり明るくした。

何とかいふ橋の際で、圓タクを乘り捨てた我々は、これから川沿ひに右の方へ行つた。やはり同じ場所を目指す若い人人が、三々五々つれ立つて歩いてゐた。うろ覺えの道筋でも、それ等の人々に混つて行くと、自然に目的地に導かれた。とある横丁を左に曲つて、それから又露次を左に這入ると、直ぐその一廓が展けて來た。

『此處だよ』

『うん。なるほどね』と秋川は感心したやうに云つた。

格子戸が開いて、障子に僅ばかり硝子がはまつてゐて、その硝子から女の眼が覗いてゐる——その光景は、昔の淺草の公園裏と變りがなかつた。僅かの土地をも最も有効に利用して建てたゴミゴミした家々は、かうした場所の何處にも共通した、濕々(じめじめ)した氣分を吐いてゐた。

その狹い露次を、男達の群は、兩側の障子の硝子戸の一つをも見逃さないやうに眼をくばりながら、ぞろぞろと流れて行つた。彼等は大體に於いて、無口で、そして見方によつては嚴粛と云つてもいいやうな、生眞面目な顔をして歩いてゐた。中には笑ひながら、おどけた眞似などを、女共にして見せる者もない事はなかつたが、一般は、靜粛で、そして生眞面目だつた。

自分達は直ぐ流れの中に身を投じて、流れのままに動いて行つた。

『どうだい』

『うん』

五六間歩いて行くと、

『一つ覗いて見ようか』秋川は中學生のやうな茶氣を見せて、一つの硝子を覗きに行つた。そして歸つて來ると、『なるほ

どね』と機智的な眼に微笑を湛へて云つた。

自分も二三軒のぞいて見た。電燈を背から受けて、陰になつた面の、眼だけを見せてゐる彼女等の容貌は、一寸見ては見當がつかなかつた。時々容貌に自信でもあるらしい女達は、態と硝子から二三尺後にひかへて、彼女等の顔の全體が、客の一瞥の下に見えるやうな姿勢を取つてゐた。

『なるほどね』と自分も秋川の顔を見て、淡然とこんな風に云つた。

小柳は默々として、時々覗いて見て、それから又默々として歩いてゐた。

さうした露次を幾つか通つた。時々稍々廣い道に出ると、そこには洋食屋、煙草屋などが並んでゐて、そこを通り越して、又先の露次に這入ると、再びさうした格子戸が並んでゐた。

自分達は幾つかの露次を通り、幾つかの道を通ると、再び最初のところに戻つて來てしまつた。

『さあ、歸らう』と自分は云つた。自分は案内を果したやうな氣持がしてゐた。

『うん』秋川はうなづいたが、時々彼が見せる中學生の好奇心と云つたやうな表情をちらりと見せて、『もう一度廻つて見よう』

滅多に見られないから——さう云つたやうな云ひ方だつた。

自分達は笑つて、そして再びその露次に這入つて行つた。群集の流れは相變らずだつた。そして自分達は前よりも早く一廻りしてしまつた。

『さあ、歸らう』さつきから暗鬱だつた空からパラリと雨がこぼれて來たのを、自分は手に受けて見ながら云つた。

『うん。——もう一度まはつて見よう』

そこで再び自分達は笑つて、そしてもう一度その露次の中を一巡した。最初のやうな好奇心はなくなり、露次といふ露

次の見當も大槪ついてしまつて、云はば神秘の奥底が知れてしまつたと云つたやうな感じだつた。硝子から覗いてゐる眼の方へ視線を向ける興味ももうすつかりなくなつたので、二人は簡單に直ぐ一廻りしてしまつた。

二度目に同じところに戻つて來た時、そこに立止つて、我々は顏を見合はせて微笑した。『こんなものかね』『まあ大體こんなものなんだらうね』そんなやうな微笑だつた。

『疲れたね』と秋川が云つた。

『ああ、大分疲れた』

『ほんとうに疲れたよ。もう動くのが厭になつて來た』彼は膝頭のところを、手でさするやうにして云つた。なるほど、すつかり疲れ切つてしまつてゐるらしい。膝頭をさするために、少し前屈みになつた肩の邊の瘦せて骨張つた感じが、著物――單衣羽織の上からはつきり解つた。

雨が少しひどくなつて來た。我々は少しぽかんとした氣持で立つてゐた。

『君、かういふところで、茶だけ飮ませないものかな』と秋川が云つた。

『無論飮ませるだらう。交渉して見たら』

『交渉して見ようか』

さういふと、疲れた身體から强ひて力を振りしぼるやうな元氣を見せて、秋川は一軒の格子戶の中に這入つて行つた。自分も直ぐ彼の後について行つた。秋川と顏を並べて、自分もその硝子の中を覗き込んだ。おとなしさうな、割に綺麗な女が一人坐つてゐた。

『割に綺麗だね』さう云つたやうに、一寸自分の方を振返り、それから女の方へ向つて彼は云つた。

『君、茶だけ飮ませて貰へないものかね。疲れたから少し休まして貰ひたいんだ』

女は彼の顔を見た。それから自分の顔を見た。そして更に、自分達の後に立つてゐる小柳の方へ眼を向けた。そして、少し惘えたやうに、

『うちは無人ですから』と云つた。

自分達は笑ひながら外に出た。『うちは無人ですから』が可笑しかつた。痩せ衰へてひよろひよろした秋川、色の蒼い自分、それから彼ひとりだけは我々とは又極端に烈しい對照をしてゐる血色の好い、つやつやした小柳……この三人の取合せに、何か彼女を脅かすものがあつたに違ひない。えたいの知れない『人種』、そんな氣でもしたのかも知れない。

その家の筋向うの格子に秋川は這入つて行つた。

『此處では茶だけ飲ましてくれないかね』

『ええ、どうぞ』

障子の向ふ側の女は、二つ返事で立上つた。立上つて、その横手の木戸を我々のために開けてくれようとしたらしい。その時、その女の姿を硝子から窺いてゐた秋川は、突然『おお』と顫へ聲で叫んで、それから自分の方を向き、『氣味が悪いよ』と小聲で云ひ、そしてじつとしてゐられなくなつたやうに、格子戸から飛び出して、一目散に逃げ出した。

『おい、どうしたんだい。茶を飲ませてくれと云つといて、悪いぢやないか』自分は立上つた女が氣の毒になつたので、彼の後から聲をかけたが、餘りに彼が側眼もふらずに逃げ出したので、そこに立つてゐるのが、障子の中に立上つた女に對してバツが悪くなり、何といふ事もなく、自分も彼の後を追つて逃げ出した。

七八間行つたところに、秋川はこつちを向いて肩で息をしながら立つてゐた。

『見たか、あれを』彼はぶるつと肩を顫はして云つた。『まるで幽霊だよ』

『よく見なかつた。そんなだつたかな』

『ああ、氣味が惡かつた。『ええ、どうぞ』と云つて、立上つた瞬間、顔全體が見えたんだよ。ぞつとしたよ、俺は』

『さうかね。僕は氣がつかなかつた』

『おお、氣味が惡い』彼は思ひ出してもぞつとすると云つたやうに、再び肩をゆすつた。『地獄だね、やつぱり、此處は』

彼は眼には微笑を湛へてゐたが、顔は色を失つてゐた。時々『おお、氣味が惡い』を繰返しては、肩をゆすつてゐた。

三度目に、我々は或一軒の家の軋む梯子を上つて行つた。ずんぐりした、見る側からその顔を忘れてしまふやうな女が、我々を八疊の室に案内して行つた。疊の端の方が、少し下つてゐるやうな古びた家だつた。

『くたびれたね』

『ああ、くたびれた』

汚らしい座蒲團の上に坐ると、實際足が棒のやうに疲れてゐた。

茶を持つて來た女が、何か云ひかけたので、

『三十分ほど唯かうして休ませて置いて貰ひたいんだ』と秋川は云つた。『好いだらう、休ませて貰つても』

『ええ、よごさんすけれども、でも……』女は階下の方を眼で指すやうな顔付をした。時間が丁度書き入れ時の時間なので、階下の女將に困る、とでも云つたやうな顔付だつた。

『よし、それぢや、みんな呼んで來給へ。何人ゐるんだ？』

『三人ゐますの』

『それなら、三人の賃銀を拂へばいいだらう？ 幾らだ？』

『二圓づつ頂きます』

秋川が金を出すと、女は階下に下りて行つた。そして、間もなくどやどやと梯子を上つて來る音がした。今の女の外

に、もう一人の女が後からついて來た。身長がひよろ高いけれど、猫脊で、按摩のやうな顏をした女と、それから鼻ばかりが附きどころを間違つたと云つたやうな美しい形をして、顏がテーブルのやうに四角い女とだつた。

彼女等は三人ぺたりと並んで坐つて、にたにたと意味もない笑ひを浮べてゐたが、やがてその三人が一人づつ分れて、我々三人の側に來て坐つた。

『あんた、さあ』こんな風な事を口々に云つた。

『かうして置いてくれよ。疲れたんだから、じつとかうさせといて』と秋川は懶さゝうに云つて、眉をしかめた。

『でもお金を頂いて、惡いもの』

『だから、それは三十分ほどかうして置いて貰ふ賃金だよ』

『同じ事ぢやないの。向うの室に行きませうよ』

彼女等三人は、最もがさつな物の云ひ方で、我々三人にめいめいの室に行く事を強請した。我々はそれと爭つた。

女將が上つて來た。

『お金は頂いたし、何でもかんでも、このまゝではお歸し出來ない』と云つた

三人の女共は立上つて、我々の手を取つて引つぱつた。『あんた、さあ』彼女等は口ではそんな風に云ふ事以外に言葉は知らなかつたが、腕力はみんな相應にあつた。瘦せた秋川は、引つぱられて、浮腰になつては、やつと抵抗して、ぺたりと腰を据ゑるが、又やがて引つぱられて浮腰になる、と云つたやうな事を二度も三度も繰返してゐた。

『疲れてゐるから休ませてくれと云つてるんぢやないか』そんな事を賴むやうにして云つても、直ぐ又引つぱられ、浮腰になり、そして又ぺたりと坐つた。

五十五六の鼠紙色をした、だが、何處かに人の好いところもありさうな女將は、女共に聲援してゐた。それは滑稽な光

景だつた。男共は手を引つぱられては、ぺたんと尻餅をつき、そして互に顔を見合はせて、苦笑してゐた。
併しそれ等は『賃金』に對する彼女等の義理固さからばかりでない事がやがて解つて來た。寧ろ、彼女等はかうしたえたいの知れない客を休息させて、書き入れ時の時間を空費する事を勿體ながつてゐたのに違ひなかつた。手つ取り早く歸るやうにし向けなければならないと思つてゐたに違ひなかつた。我々が彼女等の腕に抵抗してゐればゐるだけ、彼女等はだんだんイライラして來た。
『これはめいめいの部屋にだけは行かなければ、休息させてはくれないらしいぜ』と自分は云つた。
『うん、さうかも知れないね。――ぢや部屋に行つたら、しづかにしといて呉れるか？』
『ええ、それはあなた方の御勝手ですわ。』と彼女等の一人が云つた。
そこで我々は一人一人に腕を引つぱられて、軋む廊下を暗い小部屋につれて行かれた。秋川の部屋と自分の部屋とは、六疊一間を唐紙で仕切つたといふやうな部屋で、唐紙の上にボツンとともつてゐる薄暗い電燈が、兩方の部屋をぼんやり照らしてゐた。
自分を引つぱつて行つたのは、ずんぐりした、見る側から顏の思ひ出せないやうな、最初に我々を案内した女だつた。併し如何にも善人らしく、『休息させといてくれ』といふ言葉を直ぐ許容して、自分の眞正面にぺたりと坐つて、唯にやにや笑つてゐた。
が、秋川の方の女は、猫背の方だつたか、四角い顏に間違つて美しい鼻がついた方だつたか忘れたが、『賃金』を楯に取つて、彼に彼の權利を使用する事をしつこく強要してゐた。それは腕力の爭ひに類するやうなジタバタ云ふ音などを立ててゐた。
『止せ、おい、止せ』と彼は突きのけ突きのけしてゐるらしく云つて、『それより、煙草を喫むんだよ』

『どうせ、お氣に入らないだらうさ』そんな風に女が云つてゐた。

『君、煙草をやらうか』と秋川が唐紙越しに云つた。『とても、これはやり切れないね』

唐紙を隔てゝ、彼と自分とは聲を立てて笑つた。

唐紙の細く開いてゐるところから、ウエストミンスタアが一本飛び込んで來た。それを女が拾つて、火をつけてくれた。自分はその煙草を喫みながら、この薄暗い陰慘な部屋と、見る側からその顔を忘れてしまふ女とについて考へてゐた。かういふ部屋、かういふ女のところに通つて來る男――それは一切の道徳や美といふ問題を別にした意味で――の健康な慾望は、すさまじいものに想像された。いや、そんな時代が、かういふ自分にだつて、嘗てはなかつたわけではなかつた。健康な胃袋の所有者には、どんな食物でも食べられないものはない。……して見ると、年齢からの反省や、又美的嫌悪といふやうなものを別にして、食物そのものに對して、わけもなくむしづが走るやうな氣がして來るのは、恐らく胃腑の驚くべき衰へに違ひない……

梯子をとんとんと下りる音と、ガタンと戸が開いてそれが又しまる音とが、廊下の向うの方から聞えた。

『歸らう』と自分が云つた。

『ああ、歸るきつかけが出來たらしい』と秋川が笑ひながら答へた。

廊下に出ると、

『強い神經だね、藝術家は』と秋川が小聲で云つて、首をすくめて笑つた。

『ああ、驚歎に値するね』と自分は云つたが、今考へてゐた事の續きを、痩せた秋川の顔にぶつかけるやうに、『そしてそれは羨望すべきものなんぢやないかい？』

『でない事はないね』

二人は聲を忍んで笑つた。

二人は八疊で、一寸の間、胃病と食慾とについて話した。美食家と胃病の問題について。——二人は自分等の體内に荒れ狂つてゐた食慾の記憶を、遠い過去に思ひ出すやうな、寂しい微笑を交はし合つた。

そこに便所から出た小柳が上つて來た。血色の好い彼の顔の前に、二人は青春の消えた冷たい自分の姿をはつきり感じた。

雨は相變らず降つてはゐたが、ひどくはならなかつた。圓タクに乘つても、秋川はさつきの『幽靈』について、何度も何度も繰返してゐた。

上野で自分は省線に乘るために圓タクを下りた。秋川と小柳とを乘せた車は、直ぐ夜の暗の中に疾走して行つた。

自分はその時が秋川に會つた最後だつた。何故かといふと、彼はそれから間もなく自殺したからである。

新聞に出た彼の『遺書』の中に、『一夜妓樓にのぼりて、女の賃金を聞く。單に生きるために生きる事だけでも如何に難いかを痛感した』といふ意味の事が書いてあつたのを見た時、自分は彼とのこの突拍子もない龜戸散歩を思ひ出した。無論その『妓樓』は龜戸を指してゐる筈はないが。(昭和三年六月)



京都御構入墨者

眞山青果

第三幕

時――文久三年二月二十日。前の幕より半年ほど經過す。

處――京都三條小橋のほとり、旅人宿まつ屋。

宿屋まつ屋は謂ゆる商人宿にて、まづ中等の家なり。野添於莵馬、昨年九月以來この家に宿泊す。

舞台に見ゆるところは、その奥まりたる下座敷にて、小庭に面す。即ち上手より三分の一ほどの位置に、この家の入口（奥）よりこの小庭に通ずる細き土間あり。その土間を境に道具を上下に仕切る。上手の方は雜

具漬物など入れ置く物置部屋にて、下手の方は狹き濡緣つきの部屋にて、於菟馬の座敷なり。通路を入り來りて障子をあくれば長四疊ほどの小間あり、それにつゞく八疊の座敷を彼の居間となす。この奥にも客間あれども、粗末なる雲形摺の襖にへだてられて内部は見えず。

室内は小机一つ、瀨戸火鉢、伏見葛籠など取散らしあるのみにて、床の間もなく調度らしきものなし。たゞそこゝの壁には、醉中の同志の者が樂書せりと覺しき慷慨の詩歌など書き散らしある外、近傍社寺の參詣みやげと思はるゝ玩具類（住吉踊などの類）天井または壁に釣り下げてあり。いづれも主人公の單純なる性格にあはせて、赤氣多く小兒じみたる種類のものなり。

小庭を圍んで低き土塀あり、小門を穿つ。宿の者の水汲み路にて、塀の外に井戸の屋根、紅梅の梢など見え、小庭には植物らしきものを見ず。

幕明く。打曇りたる日の午後なり。遠く微かに法華の太鼓聞え、十六七ほどなる小娘一人、通路入口の四疊に腰掛けて、熱心に手毬の色糸などかゞりゐる。娘の名、おみね。この裏屋に住む女按摩某の娘にて、西陣の機屋に奉公せるを、近き頃より於菟馬の援助にて家に歸り居るなり。貧家にそだちたる者としては、顏だちも愛くろしく、態度もさまで賤しからず。赤き襟などかけ、服裝も見苦しからず。

座敷の中央には、木枕をして小掻卷にくるまりて長々と晝寢する者の姿見ゆ。於菟馬の先蹤、坂本龍馬なり。今年二十九歲、色黑く背高く、面上に痣あり、強度の近視眼。衣服は黑羽二重の紋服なれども、着裝など甚だダラシなし。鼾をかきて眠る。（但し初め見物にその顏見えぬがよし）

おみね、龍馬のために絶えず周圍に警戒するものゝ如く、手毬の目を上げて時々四壁に注意す。やがて龍馬の搔卷を踏め脫げるに心つき、內に入りて裾など直す。龍馬、目を覺ます。

坂本　あゝ、寢たく。(大欠伸しつゝ、おみねを見て)張番してゐてくれたか。御苦勞だつた。

おみね (微笑)鼾をかいて、好くお休みなされました。

坂本　盜人の晝寢といふ姿よ。時に、何時だらう。

おみね　今し方、八ツ(午後二時頃)を打ちました。

坂本 (腹這ひして煙管に煙草入を引寄せつゝ)於莵馬は。

おみね　さき程、お出掛けなされたまゝでございます。

坂本　餘計なことゝ云ふのに……。(舌打ちして呟き)あいつ、馬鹿だ。

おみね　え？

坂本　はゝはゝゝ。これは惡かつた。於莵馬の惡口は、もう云はない約束だつたのう、おみね坊。

おみね　お作どんに云つて、お酒を然う云ひませうか。

坂本　酒か……。少し苦くなつて來た。今日は控へやう。

おみね　お國の方は、よくお酒を召上られまするな。

坂本　京都は飲まないか。

おみね　職人などあのやうに飲んでは、それこそ半季で身上をしまひます。

坂本　飲んでばかりもゐられまい、然う思ふ日もあるよ。

おみね　それでも、お酒を飲むうちに勤王になれば、結構でございます。

坂本　偉いぞ。はゝはゝ。みなその勤王かも知れないなあ。

おみね　関東の公方様は、何日頃御上洛なされます。

坂本　さあ……、まだハキとはしないだらう。

おみね　でも旦那さんは、お江戸にお出なされたのなら……。

坂本　江戸をたつ迄は、極つた話も聞かなかつたのだ。（妙に話路を濁しつゝ、娘の手先を見て）どれ〳〵、それぢや可かん。毬を貸せ。

おみね　機屋にゐると、指が太うなつて、不器用になります。

坂本（毬を受取り）おれはこれで、女の髪も結ぶぞ。はゝはゝ。（色糸を巧にかゞりつゝ）これ、斯うだ。糸を綾にかけるのだ。斯う、斜に撚らんと、箔紙の据りが悪るからう。

おみね（感心して眺め）ほんに、お上手でございます。

坂本（笑ひながら色糸を編み）おれは十二三まで泣虫でな、姉さんの友達にばかり遊んでもらつたのだ。坂本の鼻垂れと云ふと評判だつた。はゝはゝ。ほれ、こつちから斯う綾にとるのだ。

おみね　旦那さん。御上洛があれば、京都は軍でございますか。

坂本　軍――？

おみね　でも世間ではみな然う云ひます、壬生寺の浪人組や会津様も一つになつて、諸藩の勤王方と合戦が初まると申します。

坂本（熱心に手を動かしつゝ）お前、軍は嫌ひか。

おみね　恐しうございます。

坂本　厭だなあ、おれも嫌ひだ。（やゝ咳嗽を混せしが、自ら慰めるやうに）が、そこ迄はあるまい。何うにか行くだらう。

おみね　うちなどに病人に小児だけですから、心配でなりません。

坂本　於菟馬がついてゐる。大丈夫だよ。はゝはゝ。

おみね　野添様はこの頃、出歩いてばかりゐて、宿にもとんと落付きません。あんなにも、お酒はおいしいものでござりますか。

坂本　さあ何と云ふか、そこは於菟馬に聞かんと分らぬ。

おみね　一昨日も、三本木の何んとやら云ふ女の人が見えて、朝から酒が初りました。女子の癖に肌などぬいで、大きな聲で唄なぞうたつて、厭なことだと思ひます。

坂本　この頃於菟馬の飲み相手は、おもに誰なのだ。

おみね　誰と極りませんが……、先づ川中様でござりませう。

坂本　川中？　新兵衛か。これも泣上戸な筈だ。はゝはゝ。

おみね　それから肥後の御藩で川上様、森様……。

坂本　みな食物の悪いやつ等だ。はゝはゝ。國の者は。

おみね　河原町のお屋敷からは、この頃ふッつり誰方も見えません。たまに川淵様ぐらゐなものでございます。

坂本　あいつ、馬鹿だ。おれよりうぬが尻に火がついてゐるのだ。

　　龍馬、ふつと吐出すやうに云ふ。娘、不審さうに見る。

坂本　それ、さつと、形だけは出來た。(毬をおみねに渡し)後は丹念に、糸を膝ればいゝのだ。
おみね　それに大場樣と云ふ方が、この頃急に足近くお越しなされます。
坂本　大場?
おみね　御存知ありませぬか。言葉に仰山、訛りのある方でございます。
坂本　うん、會津侍だらう、黒谷にゐる。
おみね　あのお方、恐しい方でござりますな。いつか野添樣のお留守に來て、刀をぬいて、凝つと見て、泣いてゐられました。
坂本(煙草を拈りつゝ)ほう。
おみね　外の方は、醉つて議論して、大聲に聲を立てますけれど、大場樣は誰もゐない一人の時、本當に涙をこぼして泣きます。そして、人が入つて來るとビツクリして、急に元氣づいてはしやぎ出します。何んだか裏と表があるやうで恐ろしい方でござります。
坂本　於莵馬、それ知つてゐるか。
おみね　然う云ふても、笑つて平氣でゐられます。外の方が大場樣に用心するので、餘計かばつて贔屓にしてゐられます。
坂本　あいつらしい心意氣だ。はゝはゝゝ。時に、駿河屋まで賴まう。羊羹が食ひたくなつた。(紙入より銀を出す)
おみね　好しうござりますか。誰か來るといけませぬ。
坂本　大丈夫だよ。おれは何も、人に隱れてゐないのだ。
おみね　それでも、ちよつともこゝを離れるな、顏を知つてる方にも、油斷をするなと云はれました。
坂本　親切だらうが、おれには煩さいよ。あゝウロウロ前うしろに立たれると、煩さくて町も步けない。飛んだ宿をとつ

たと思つてゐる

おみね　坂本の旦那様には、京中の探索の方が目をつけてゐるから、少しの油斷もならない。そのつもりで氣をつけてく
れと頼まれました。

坂本　龍馬も偉くなつたものだ。はゝはゝゝ。

おみね　旦那様がお上りなされてからは、夜もよつぴて眠らないやうにしてゐると仰しやりました。

坂本　あいつ、それ程とぼけてゐるんだ。はゝはゝゝ。早く貰つて來い。

おみね　本當に旦那樣。大丈夫でございますか。

坂本　黒の大掉だぞ。惡甘いほどのがいゝ。

おみね、風呂敷を持ちて出てゆく。龍馬、ゴロリと仰向きに寢て、微聲に詩吟などしてゐる。やゝありて奥の通路の方に、ガヤ〳〵と人聲聞ゆる。龍馬、耳を立てゝ聞き、又吟聲をつゞくる時、第一番の清岡治之助、多田鐵馬(共に土佐藩の鄕士なり)と共に、案内を拒む下女を叱りつゝ入り來る。

清岡　(土間を入り來り、障子の外から)龍馬居るか。

坂本　誰だ。治之助か。入れ。(仰臥のまゝ答ふ)

清岡　圓山に精進料理と思つて來たのだ。何うだ。

坂本　氣が重いのう。

多田　松山や曾根も行つてゐる。立てよ。

坂本　揚麩腹(あげふばら)は後がドッとしない。眞平だ。

清岡　貴公ことはるなら。おれ等そこへ上つて行くぞ。

坂本　はゝあ、蟷螂どの。又用をこさいて來たな。（笑ふ。）

　清岡、多田、互に頷き合つて坐敷に入り來る。

坂本（起上りもせず）鐵馬、あけた障子を閉めろ。

清岡（やゝ居合腰に坐つて）龍馬。われ〳〵は今日、その後の江戸の形勢を貴公に聞かうと思つて、一會を催した譯なのだ。將軍家はいよ〳〵江戸表を發足したさうだの。

多田　一橋、越前家、二頭ともに今京都に上つてゐるぞ。中川の宮初め、幕府方の腰弱公卿の間を說き廻つて、公武合體論の盛立てのために、盛んに運動してゐるが、知つてるか。

清岡　將軍の上洛は、軍裝八萬の兵士を率ゐると云ふ噂だ。聞いてるか。

多田　壬生寺には幕府の浪人組が、目下隊士の募集中だと云ふ。

清岡　會津は黑谷に、大砲を十數門持ち込んでゐると云ふ。知つてるか。

多田　坂本。これ等の用意は何んだ。何んの準備なのだ。

清岡　起きろよ、龍馬。（グイと龍馬の肱を引張り）日頃大勢達觀の貴公だ。われ〳〵はその新說を聞きに來たのだ。

多田　坂本。世間もつばらの風聞には、將軍こたびの上洛は容易ならぬ權謀だと云ふぞ。大兵を擁して闕下に迫り、開港貿易の勅許を申し受け、諸國有志の攘夷黨勤王黨を一網打盡に、縛り上げる計畫だと云ふ。坂本、貴公知らぬ筈はあるまい。

清岡　薩摩は最早や幕府に致されてゐる。薩摩は今、長州藩の新論新人を、如何にして壓倒すべき、そればかりに血迷ふてゐる。長州人を蹉跌させるためには、會津とも結び幕府とも握手するのだ。彼は大義を主張しながら、やはり公武合體佐幕の舊弊を脫出してゐないのだ。龍馬。その變動の大事な時機に、貴樣は去年來江戸に遊んで、われ〳〵同

志には殆んど消息を絕つてゐたのだ。

多田　その人間が昨今忽然として、彗星のごとく京地に顯はれたのは、何を意味し、何を語らうとするのだ。

淸岡　龍馬、武市君は君の辯舌に動かされて、或は君の立場を認めたかも知れぬ。然し頑迷固陋のおれ等には、君の開國論とやら云ふものが、まだ十分に胃の腑に落ち入らないのだ。今日は飽迄君の說を聞きに來たのだ。說いてくれ、聞かしてくれ。

坂本　（突然立つて、外出の支度しつゝ）治之助行かう。

淸岡　（話腰を折られて、不審さうに見上げ）何處へ行くのだ。

坂本　その愚論を聞くほどなら、坊主料理でも食つた方がましだ。圓山へ行かうよ。食ひながら聞かう。

淸岡　何。

坂本　おぬし達は、人の話など聞くやつか、腹ごなしに、喋りたくて仕方がないのだらう。來い／＼、今日は喋りたいだけ聞いてやる。

多田　席はこゝでも、差支へない。先づ、坐れ。

坂本　ぼんやり坐つて、聞いてゐられるか。松山や曾根のやつ等も油をとつてやる。おりや、先に行くぞ。直ぐ後から來い。

龍馬、懷手をしてブラリと出て行く。淸岡、多田、呆に氣とられながらも何か囁き合ひたる後、野添於菟馬に宛てゝ置手紙を認める。

書面書き終りし頃、野添於菟馬、途中おみねに遇ひたるこゝろ持にて、不安さうにセカ／＼して歸り來る。龍馬を饗するために求め來りし川魚屋の大岡持など持つ。

おみね、自分の不注意を悔んで家に入らず、土間に立つ。

於菟馬　(家に上り、二人を見て) 歸るのか。龍馬は何うした。

清岡　先に圓山に行つてゐる。貴公も今日は是非參會しろ。

多田　今、その置手紙を書いたところだ。

於菟馬　坐れ、治之助。(手頸をとつて、自ら坐り、コクリと咽喉を鳴らしてから) 貴様は坂本を何うしやうと云ふのだ。

清岡　何うするか、それは龍馬自身の論にあるのだ。

於菟馬　論? 論? 論――? (舌打ちしつゝ、口忙しく繰返し、肱などを張りて) 貴様、論と人間と、一つに考へられるか。論と人間と、貴様――。

清岡　(侮蔑の語調にて) 無論だ。その言、その行、これを君子に瞻る。

於菟馬　文選は御免だ。六臣註はあやまる。おれは坂本ぐらゐの男を、その議論ぐらゐで難じる、貴公達の料簡が解せないと思ふ。論が假りに誤つてゐても、龍馬は龍馬だらう。土佐の國が出した、あれは豪傑だ。あの人間の寸法、大きさ廣さが見えないか。論は言葉で喋るものだらう。右とも云はれゝば、左とだつて云はれる。

清岡　於菟馬。貴公は何迄龍馬のために辯解するのか。

多田　同時に貴様の言葉は、龍馬は同志の者に裏切つて、佐幕開港論者に變節してゐる證據とも聞えるぞ。

於菟馬　そり可かん。困る〳〵。(狼狽して首を振り) おれは、言葉を後の手形に取られては困る。たゞおれは……何んだ (唾を飲み、ワク〳〵して) 人間の本當の姿は、議論や言葉の外にあると――、然う〳〵、それを云ひたいんだ。一言めには言葉尻に縋つて、あゝ云つた、斯う云つた、人間の本性を言葉でだけ分けるのが氣に入らないんだ。議論はたゞ、齒から外に出た形ではないか。詰らん、狹い料簡は、やめろ。

清岡　於菟馬。では、何か。攘夷論の龍馬も、開國論の龍馬も、人間として同一だと主張するのか。

於菟馬　そりや……違ふだらう。（言句に詰りつゝ）違ふだらうが……、あの龍馬といふ人間だ。あの大きな……總ての總體の姿だ。（大袈裟に手眞似など入れて、苦しげに云ふ）貴公等のこゝろにだつて、それは映るだらう。見えてる筈だ。

清岡（何か考へ、手を振り放ち）その說も、委しく後に聞かなければならん。先に行つて、待つてるぞ。

多田　於菟馬。今日不參しては、君のために不利だらうぞ。

　　清岡、多田、足音高く歸り去る。於菟馬、全身の汗がホウと發散するやうなる表情にて二人を見送りしが、土間に立つて萎れてゐるおみねを見て、思はず啉とする。

於菟馬（舌打、睨めて）あれほど賴んだのになぜ家を離れた。萬一の怪我があつたら、何うする氣だ。

おみね（泣きながら）濟みません。つい近所だからと思ひまして……。

於菟馬　買物なら宿の下女もある。子供だとて、それぐらゐの事、氣がつきさうなものだ。（心から睨め、ブツ〱呟きつ立つ）兎に角、おれは圓山へ行つて來る。誰が來ても、內へ通してはなりませんぞ。

　　於菟馬、穿物に足をかける時、唐紙を隔てたる隣室より、坂本の聲聞ゆる。

坂本（聲）おみね坊。羊羹は何うした。持つて來うよ。

於菟馬（吃驚して振り向き）坂本、居るのか。何處だ。

坂本　こゝだよ。はゝはゝゝ。丁度いゝ加減の火燵だ。

　　於菟馬、唐紙を開く。龍馬、隣室の火燵に寢轉んでゐる。

坂本　相手になると面倒だ。外へ出るふりして下駄を懷へ入れて、臺所の方から廻つて來たのだ。はゝはゝゝ。

於菟馬　そこは、人の部屋だぞ。

坂本　何うで留守だ。あたらして貰はふ。おみね坊、羊羹、

　　おみね、羊羹をそこに置き、茶をとりに勝手に行く。

於菟馬　然し、治之助は眞剣だ。騙しては怒るぞ。

坂本　怒るのもやつ等の腹ごなしだ。はゝはゝゝ。散々怒りくたぶれた頃に行つて顔を出すと、よう龍馬ツてことになるのだ。はゝはゝゝ。然し聞いてゐて、今のおぬしの議論は秀逸だつた。論や言葉は、胸から外へ出る形だ――、於菟馬一代の名文句だつたなあ。（笑ふ）

於菟馬（顔を掌面に撫で、むつつりして坐り）馬鹿にするな。

坂本　褒めてるんぢやねえか。（羊羹を摘みつゝ）あたれよ。

於菟馬　うん………。（わが膝頭を見詰めゐる）

坂本　半平太は屋敷にゐたか。何んと云つた。

於菟馬　うん。荒方その……諒解はついたつもりだ。

坂本　おぬしの議論に、武市が？　馬鹿を云つてゐるぜえ。はゝはゝゝ。あいつは一生、裃のまゝで死ぬやつだよ。

於菟馬　が、先生も十分、君の人物は知つてゐる筈だ。おれも、説いた。

坂本　於菟馬、親切は有難いが、冷汗の出るやうなことは、云つて廻はるなよ。おれは初めから、同志の者の諒解など得やうとは思つては居らん。又、人の諒解などは得られないのが當前なのだ。

於菟馬　然し――。

坂本　おれは強いて異を樹てるのではない。然し、自分の所作を他人に相談することは、小兒の時から大嫌ひだ。おれの

借用證文は一名一判、いつもおれが借主で、いつもおれが請人だ。他人の判子の力で借りた錢は、まだ使つたことがない。

於菟馬　然う云つても、若し君の體に、危險が迫つて來たら何うする。

坂本　眞實迫り來る危險なら、他人の力で架げるものか。

於菟馬　（溜息して俯向き）知らないのだ。君は知らない……。

坂本　長州その他の激徒が、おれの今度の上京に、注目してゐると云ふんだらう。

於菟馬　衛られるだけは衛つた方がいい。將軍上洛の噂に、京都の同志は、みんな夢中に興奮してゐる。その場合に、そんな說を持つ、堂上方など運動するのは、火藥を抱いて、火に近づくやうなものだ。

坂本　然し於菟馬。（微笑）おれも然うだらうが、貴樣として安全な身ぢやなからう。些と、用心せいよ。

於菟馬　（わが事など耳にも入らず、固くなつて膝を進め）なあ坂本。貴樣は何うしても日本を、この際、開港貿易にするより外はないと思ふか。その議論は、何うあつても動かされないものか。

坂本　去年おぬし江戶に來た時、細かに聞かしたぢやないか。（不快さうに舌打ちして）何を云つてるんだ。

於菟馬　まあ然う……、靜かに話して見やうよ。われ〱の同志百九十何人といふもの、血盟書に血判して、みな勤王攘夷を眼目として始終働いてゐるのに、貴樣一人だけが急に同盟から孤立して、新說を立てると云ふは何う云ふものだらう。（勉めて物柔かに云ふ）

坂本　（羊羹の皿を突き遣り）そりや飽きるほど、武市にも平井にも話して置いた。（ゴロリと寢る）

於菟馬　（臆病さうに目を瞬き、幾分對者の顏色を窺ひつゝ）だが、百九十何人、皆が皆馬鹿でも氣違ひでもない。上海の西洋新聞讀んでる者もあれば、みな相應外國を研究してゐる。その者共が百九十何人一人も洩れなく、攘夷より外

に策がないと云つてるではないか。して見れば、萬人の輿論が、そこに纏つてゐると云ふものだ。

龍馬、火焼櫓の上に兩足をあげて、不快さうに答へず。

於莵馬　多數に壓されたといふことは、君の恥にはなるまい。おれは飽迄開國論だ。然し同志一同が攘夷論を主張する以上、おれは已を得ず同志多數の説に從ふ。君は昂然として言明すればいゝのだ。立派だ。男らしい。誰が聞いても、君の態度を非難することは出來ないと思ふ。江戸の勝先生にしたところで、決して君を變説者とも卑怯者とも云ふまいと思ふ。（オドオドしつゝ云ふ）

坂本（いつか聲立てゝ、クスクス笑ひゐたりしが、突然）於莵馬。

於莵馬　うん。何ん――？（顏を上げる）

坂本　おれは兎に角、おぬしの態度は何うなのだ。

於莵馬　おれか。おれは無論、攘夷だ。（狼狽したやうに、急に肩肘など張り）確然、動かない。

坂本　果して攘夷が、實行され得るものと思ふか。

於莵馬　決死の士、五十人で澤山だ。横濱の異人館に切り込む。

坂本　續いて來る艦は何うする。

於莵馬　その方法は幾らでもある。短兵接戰、我が神州帝威の國は、誓つて虜醜の侵略をゆるさない。

坂本　はゝはゝゝ。（思はず面白さうに笑つて）その以前長州の吉田松陰は、枯草を積んで、眞面目に外國軍艦の焼打をもくろんだことがあるよ。山鹿流、極意の秘傳なさうだ。はゝはゝゝ。

於莵馬　龍馬、惡い癖だぞ。（むつとして膝を向け）術は幼稚でも、松陰にはその志を買はなければなるまい。君は何んでも、直ぐ愚弄する癖がある。

坂本　おりや去年、貴様が姉小路卿のお供で江戸に來て、勝先生の塾にも泊つて、寄宿生の話なども聞いてゐるから、少しは大勢が分つてると思つた。相變らずの野添於蒐馬だなあ。はゝはゝ。

於蒐馬　おりや攘夷だ。攘夷は勅諚だ、國論だ。誰が來ても動かない。

於蒐馬、四角張つて、肩を振る。その鯱子張れる態度をおかしとて、龍馬、聲を立てゝ大笑する。その間におみね、土瓶に番茶を淹れ來りて、兩人にすゝむることあり。

坂本（口を鳴らして熱い茶を啜りつゝ）然しなあ、その無邪氣は結構だが、少し考へてくれなくちや困るぞ。殷鑑遠からずだ。支那は何故に英國に香港を割譲したのだ。無謀の攘夷戰のためではないか。今又現に、英佛の聯合軍は北京を陷れて、兵を安南にまで進めてゐるではないか。これが攘夷黨の短見者流が……。

於蒐馬（兩手をあげて對者の言葉を抑へ、叫ぶやうに云ふ）坂本！

坂本　何んだ。

於蒐馬　何うかその、世界大勢だけはやめてくれ。（目に一杯涙を浮べ）おれは君が憎くなる……、憎くなる。（兩手に膝頭を掴んで顫えゐる。）

坂本（微笑）はあて……？

於蒐馬　開國論も、君の好き嫌ひから出るうちはいゝ。然し、然う理窟が立つほど、おれは君が憎くなる……、憎くなる。

坂本　稀代なことを云ふ。はゝはゝ。君等は今、日本帝國の最も艱難時に際會して生れてゐる。この國家大切の時にあたつて、徒に……。

於蒐馬やめろ！（膝を叩いて、叫ぶ）やめろと云ふのに……！

坂本　何んだ、於菟馬。（怪訝さうに見て）何うしたんだ。

於菟馬（ボロ／＼と泣きながら）おりや、君が、然して、理窟に筋道が立つて、議論が正しく聞えるほど、君の顔が惡人に……、惡人に見えて來る。おりや貴様を、惡人に、見たくない。見たくない。やめてくれ。もう理窟を立てないでくれ。

坂本　然し、おれの理論は、何人にも動かないつもりだ。

於菟馬（憫れつたさうに膝を叩いて）動かない、動かないから、やめてくれと然う云ふんだ。（咽頭に聲立てゝ泣く）

坂本　然うか。それではやめやう……。（不興らしく沈默）

於菟馬、俯向いてメク／＼止度なく泣く。おみね、心配さうにおろ／＼して、二人の様子を窺ふ。やゝ長き間。

龍馬、やがて突と起ち上りて、火燵に腰かけて脱ぎたる足袋など穿く。

於菟馬（やがて又呟くやうに、切れ／＼に云ふ）それも、これも……、皆、勝麟太郎だ。張本人は彼だ。彼は表面公明正大なる事を云ふが、もとより彼奴は幕府の臣だ。彼の開國論も世界の國勢論も、みな幕府のために捏造してゐる論だ。それも知らずに惑はされてゐる……、實に馬鹿な話だ。

龍馬、對者の目こすりを聞き、何か云はんとせしが、それも馬鹿々々しく、たゞニヤ／＼笑ひゐる。

於菟馬　今度働いて、首尾よく開國の勅許を得れば、勝は少くとも五七萬石の大名だらう。彼が輿論に反抗して、強いて開港を主張するのは、その野心があるに極つてゐるのだ。その下を犬のごとく働いて、假りに運動が成功してからが何んだ。旨いことをするやつは勝一人、あとは高々、幕府の捨扶持を頂戴するぐらゐなものだ。

龍馬、答へず。笑つて出て行かんとする。

於菟馬（びつくりして立ち、龍馬の前に立ち）何處へ行く。

坂本　圓山にも一組、分らないのが待つてゐる。先づその方から、埒を明けて來やう。おぬしは來ないがいゝぞ。直ぐ歸つて來る。

於菟馬（龍馬の袖を掴み）危ない！　一人出ては危險だ。

坂本　馬鹿云へ。危なかつたら逃げ出すばかりだ。

於菟馬　然し、同藩の者ばかりぢやない。薩摩には田中、長州の久坂、攘夷黨はみな君の行動を監視してゐるのだ。含してくれ、含せ。

坂本　勝先生との打合せもある。放せ。（手を振り放ち）出ると云つたら出るんだ。跟いてなど來て見ろ。おれ、承知しないぞ。

龍馬、於菟馬を睨みつけて、悠然として出で去る。於菟馬、仕方なく見送り、嘆息して坐敷に戻り來り、ボンヤリして坐る。

おみね、箒をとりてその邊を掃除する時、田淵進一郎、今門口にて躊躇ひたる心持にて、切りに後を振り返りながら、セカ〳〵と入り來る。進一郎、半年ちかき都會生活にやゝその田舍風も失せて、服裝なども當時流行の過激志士の風俗にならひて、腰に胴籠など下げ、高下駄、白紐の小倉袴。

田淵（入口に來り聲高く）野添君ゐるか。野添君。

おみね　何うか、お上り下さいまし。

田淵（おみねを見て、厭な顏）お前、始終ここに來てるのか。

おみね　いゝえ、あの、今日御用がありまして……。

田淵　家には病人があるだらう。看病したらいゝだらう。

おみね　はい。

進一郎、突慳貪に云ふて家に上り來る。於菟馬、初め田淵の聲を聞くより不快さうに顏を曇らせしが、然りげなく裝ふて、腕組みなどして柱に凭れる。

田淵（坐らぬ前より）野添君。足を貸してくれないか。君のためにも、非常に有益なことだ。ある公卿家から內密御用を受けたのだ。

於菟馬　……？

於菟馬、無言、見上げる。

田淵　やはり何事でも、上から動かさなければ成功はしないな。はゝはゝ。（得意さうに笑つて）田淵進一郎も、在京志士として、漸く認められる時が來たよ。今日僕は單獨で、中山侍從に面謁して來た。

於菟馬　田淵。そこにゐるおみねだが、あれは君の召使ではないぜ、一文一錢、貴公の補助はうけてゐないぞ。（苦々しげに云ふ）

田淵（口を尖らして）誰も補助したとは云はん。おみねと呼んで惡るかつたのか。

於菟馬　君はこの頃、有志仲間でも羽振りがいゝさうだ。然し、然う云ふものぢやないよ。（苦々しげに）あの少女とて、たゞ貧しく生れたゞけなのだ。

田淵　はゝはゝ。何を氣にさへてゐる。おらそんな氣で云つたんぢやない。只、意地か何か知らんけれど、おぬしが陣の機屋から引取つて、あゝして世話してゐるので、たまには蔭口を云つてゐる者もあるのだ。

於菟馬　蔭口？（思はず屹として）何かおれに疚しいところでもあると云ふのか、田淵。

田淵　そりや、おぬしの潔白は知つてゐるよ。けれども……。

於菟馬　待て。おぬしだ――？　貴様はこの頃、蔭ではおれを、於菟馬が斯う、於菟馬があゝと、呼び捨てなさうだなあ。

田淵　そりや……お互ぢやないか。われ／＼有志の間に、そんな虚禮など、何うでもいゝだらう。舊弊打破もわれ／＼の目標だ。

於菟馬　然うかなあ、これが虚禮かなあ……。（不快さうに口を噤む）

田淵　中山侍從公だがな、野添君。なか／＼面白い人間だぞ。彼を持ち上げると、こゝでわれ／＼も賣り出せるぞ。彼は岩倉公に對する血族的の欝憤から、今しきりに功名にあせつてゐるのだ。現に今日の口吻でも、手足になつて働く者があれば、自分が先に立つて、兩嬪三姦の佐幕論者を襲撃しやうと決心してゐるらしい。野添君、こゝは一つ同志の者にも内密に、われ／＼が乘ずべき點だらう。兎に角、名家の彼を抱き込んで置けば、どつちへ轉んでも間違はないぞ。先方では、君の名を聞いて、十分承知してゐるのだ。

於菟馬、面白からぬ表情にて、煙草など拈りゐる。

田淵　中山公は河原町へも、長州屋敷へも自分から押出して、岩倉暗殺を主張してゐたのだが、武市も半井も、長州の久坂なども、餘り論が過激なために、氣違あつかひにして敬遠してゐるんだ。それで侍從公子、餘計悶々の情に耐へないのだ。何うだらう、野添君、一つ動いて貰はれないか。將軍上洛の不安のために、人心が恟々乎たる時だから、必ず賣り出すぞ。天下の問題になる。

於菟馬　田淵。君は虚禮といふがな、やはり先輩後進の順序はなければならないと思ふ。舊弊だらうが、僕は先づ……その説だ。

田淵　君だつて時には、武市の半平太のといふぢやないか。

於莵馬　(むツとして) おれが武市といふのと、貴様が武市平井といふのと、同じ事と思ふのか。

田淵　何處が違ふのだよ。はゝはゝゝ。君には師匠でも、薩ぢややはり武市といふぢやないか。詰らん鐺咎めは舍せよ。
はゝはゝゝ。

於莵馬　然うかなあ……、それぢや最う何も云ふまい。

田淵　野添君。云はして貰ふよ。(微笑しつゝ) 君にはいつも、大事と小事とを混同する癖があるよ。小さなことに拘らつて、婦女子のやうにコセ〳〵するため、大事を逸する場合が常にあると思ふ。惜しいなあ、君の爲めにとらない。君が人よりも働きながら、始終損の位置にあるのはそのためだよ。君は田中とも交際を捨てかね、又會津の大場などにも交際を捨てかねてゐるために、長州側や藩内の同志にも、どれだけ疑惑をうけてゐるか知れないよ。

於莵馬　田中の人間に、大庭に、憎むべき點でもあるのか。

田淵　薩摩と長州だよ。現在長州の攘夷一天張りが世間に勢力をなす時、第一損ぢやないか。はゝはゝゝ。その話はまあいゝ。君は新兵衛に、心から恐怖してゐるのだから駄目だ。

於莵馬　おれは新兵衛は、立派な男、確乎たる男と思ふ。

田淵　君は自分の偉さを知らないのだよ。世間の人氣は、君と田中とを較べて、寧ろ君の方に高いのだ。それにも拘らず、君は新兵衛の前に出ると、いつもオド〳〵して氣を飲まれてゐる。茶屋者のおしん位ですら、苦々しがつてる。
馬鹿な話さ。はゝはゝゝ。

於莵馬　(ドキリとして) おしん、君に、何か云つたか。

田淵　云はないだつて、分つてゐるよう。はゝはゝゝ。

於菟馬、正直に當惑して眩しさうに俯向く。田淵、それを面白さうに又笑ふ。おみね、些い〳〵この方の談話に耳を傾けつゝ、座敷を片付け、土間など掃除を終る。

田淵　處で、今の話だ。何うする。君の人望恢復のためにも、こゝは一番奮起する場所だらう。開國か攘夷か、輿論が由に迷つてゐる時だけに、一二人やッつけると輿論も攘夷に確定するに相違ない。

於菟馬（片手に頭を抱いて）おりや最う。土佐へ歸るよ。坂本に旅費をもらつて、明日は土佐へ歸るよ。

田淵　うん、その坂本だ。それも中山公子からお話があつた。彼は攝海防備の、兵庫に砲臺を築くと云ふのは表面の口實で、内密は勝麟太郎の旨をうけて、佐幕開港の運動らしいと云ふ話だ。野添君、この方も打遣つては置けないだらう。

於菟馬　歸る〳〵。おれには何も……分らなくなつた。

於菟馬、ほつと太息をして、苦しげに叫ぶ。田淵、視線を凝して、意味ありげに於菟馬を見詰める時、小座敷の方の襖をガラリと明けて、前幕に出たる茶屋女おしん、入り來る。足元もみだれて、したゝかに醉ふ。

おしん（おみねを見て）ちよいと、そこな……お嬢さん。

おみね（茶を置いて）私ですか。

おしん　角の煮賣屋へ誂へて來たの。お前さん、持つて來て頂戴。

おみね　お酒ですか。

おしん　行つて見りや分かるよ。（そこの岡持を見て）おや、こゝにも御馳走があるよ。斯う來なくちや嘘さ。はゝはゝゝ。

おしん、岡持をさげて坐敷へ入る。おみね、出て行く。

於菟馬、おしんの聲を聞いて、迷惑さうなる表情。

おしん　おや、田淵さん。これは稀らしい。何うなすつたよ。

田淵　お前こそ、晝間から大層いゝ機嫌だなあ。

おしん　今まで新兵衛、困らせてやつたのさ。おしんさんに遇つちや、型なしさ。はゝはゝ。

田淵　田中と一緒だつたのか。

おしん（野添を尻目にかけつゝ）だつて寄り付くところがないもの。斯うなりや何處へだつて、掛り船や。

田淵　まる金を出したのか。

おしん　借金が何うだのつて、ケチ〳〵しやがるから、素ツ裸で賣つても五十兩がものはあるだらうつて、帳場へ大の字に寢てやつた。

於菟馬（突然口を出し）おしん。おれの請合銀なら、何日でも拂ふよ。

おしん　あれだ。はゝはゝ。お前さん達に拂はせる氣なら、呑口をあけるたんびに、おしん大きなこと云やしないよ。默つておゐで。

於菟馬　然し、貴樣の體なんかにかけちやゐられない。

おしん　なあんてね。はゝはゝ。男の恥とでも云ひたいところだが、そこはよろしく……。

於菟馬（面膨らして）馬鹿にするな。

おしん　はゝはゝ。（面白さうに、手を打つて笑ふ。）

於菟馬、進一郎をかねて當惑さうに俯向く。この間におみね、煮賣屋の出前をつれ、酒肴などを持ち來る。おしん、立つておみねを使ひながら、酒の用意をする。

田淵　野添君。中山公子の方だ。何んと御返事する。

於菟馬　折角だが、厭だ。おれは國へ、本當に歸るかも知れない。

田淵　厭だとておぬし………？

於菟馬　おりや面白がつて暗殺者になつたのぢやない。正直を云へば、いつも畏い。（盃を落す）

田淵　畏い？　はゝはゝゝ。

於菟馬　考へさしてくれ。おりや、分らなくなつた。

田淵　はゝはゝゝ。

　おしん、膳を座敷にはこぶ。その前、おみねは物蔭にておしんと言爭ひでもせしか、袂を顔にあてゝ泣きながら、小庭の滑り門より走り歸る。於菟馬、それを見て起たんとせしが、進一郎を憚りて默す。たゞ時々、憎憎しげにおしんを睨む。

　おしん、知りて嘲笑ひつゝベタリと坐る。

おしん　さあ、身祝ひだ。田淵さん、醉ひませうか。

於菟馬　（むら〳〵として、屹と睨み）何が、身祝ひだ。

おしん　相談をかけられた時に仰しやい。こつちはこつちだ。

於菟馬　何？

おしん　いゝぢやないの。こつちはあたしの、浪人祝ひだ。さ、田淵さん、上げませう。（盃をとる）

於菟馬　（突とその盃を奪つて柱に投げつけ）だから、請に立てた金は、返すと云つてるんだ！

おしん　又――――？
　誰が錢銀を云つたのよ。お前さん達と違つて、體が小判の影物してゐるんだ。見つともないこと

仰しやるなよ。

於菟馬　然し、おれは――――。

おしん　置いてくれでも、食はしてくれでもありません。醉ひたい酒だ、お酌ぐらゐしてくれたつていゝでせう。(盃洗から別の盃をとりて) 女だつてこの時節、默つて見てゐられるものか。あたしもこれから身輕になつて、勤王御用を勤める氣なのさ。

於菟馬　御用?

おしん　まあいゝ。お酌を願ひます。

於菟馬、仕方なく獨利をとる時、土間の方に下駄の音聞えて、田中新兵衛、入り來る。少し醉ふ。

田中　(障子の外に立ち) 於菟馬。客人のやうだ、ちよつくら出てくれ。

於菟馬　(ギツクリして) 田中か

田中　おれだ。龍馬のことで、少し聞きたいのだ。

於菟馬　(苦しさうに目を瞑つて、恐る〳〵) 龍馬………、何うかしたか。

田中　怪しからん情報を聞いた。河原町の土佐屋敷まで一緒に來てくれ。武市に談じたい。

於菟馬　兎に角上つてくれ。先づ、その話を聞かう。

田中　おれは同時に、貴公をも信じてゐないのだ。出て貰はふ。

於菟馬　行くにしても………、ま、上つてくれ。入つてくれ。(ドギマギしつゝ、おしんに目くばせして、田中を引留めよと頼み) 丁度、酒も初つてゐる。知つてる顏も揃つてゐるんだ。

おしん　(ぬつと出て) 新の字。お前さんあたしを、外したね。

田中　ぬし、來てゐたのか。

おしん　月代をしてくるなんて、何が月代だ。いゝ氣になつて、生州に待つてゐたぢやないか。

田中　はゝはゝゝ。女の醉ツぱらひは、おれには暗劍殺だ。

おしん　さ、上つた／＼。

田中　馬鹿な……、用があるんだ。放せ、放せ。

おしん　あたしを翅鳥にかけるつて、何うしたんだい。さ、お上り。今日は放さないよ。

田中　仕様ない氣違ひだ。（笑ひながら入り來る）

於菟馬　（急に別人のやうに氣輕く、盃を取り）田中。丁度初めやうと思つたところだ。何うだ。

田中　然うか。見ない顏もなるまいな。はゝはゝゝ。（盃を受くる）

田淵は先程より、田中の來れるを見て折惡しゝとするものゝ如く、そこ／＼に歸り支度してゐる。田中も又、田淵を見て不快なるものゝ如く、初め進一郎の目禮せるにも答へず。

田中　他藩人の差合もないから云ふが、山內家は何か、藩內から火事を出すつもりか。武市、平井、みな御壯健か。

於菟馬　出し拔けに何んだ。はゝはゝゝ。まあ、重ねろ。

田中　山內家は德川に對して、重恩ある家だ。御苦衷は察し入る。然し、おれ等正直者を欺くはひどい。

於菟馬　（ひやりとしつゝも）今日は、やたら絡むな。はゝはゝゝ。

田淵、わが藩に對する誹謗に、むつとして聞く。肩など立てる。於菟馬は磊落を裝ひつゝ、次第に苦しげなり。

田中　（田淵の態度を意識しつゝ）兎に角われ／＼は、安政以來十年の苦勞をかさねて來てゐるんだ。それに土佐は何ん

だ。やつと今年結束して、われ〳〵の仲間に參加したのぢやないか。
おしん（傍から口を出し）新の字。今日はお前さん、出から悪いよ。
田中　默つてゐろ。（女を叱り、徳利を引寄せ）御隱居容堂侯は、將軍上洛の前に、軍艦で上京すると云ふぢやないか。
於菟馬　初めて聞いた。（びつくらして顏を上げ、次に進一郎を見て）そんな話、あるのか。

田淵、鋭く田中を見詰めつゝ、僅に頷く。

田中　容堂侯は昔から開國説の方だ。殊にこの頃、勝麟太郎とは親しいと云ふ。その勝麟太郎は、攝海防備とか海軍塾取立てとか云ふ名目で、既に兵庫に來て滯在してゐる。その間に突然、西洋かぶれの龍馬が出京して來た。
於菟馬（狼狽しつゝ）龍馬は君、脫藩者だ。御隱居樣に關係はない。
田中　恍けるな。龍馬は勝の周旋で、既に容堂侯から脫藩の罪は、赦免になつてゐる。（對者を睨めて）何を云ふ。
於菟馬　知らん、知らん〳〵、おれは知らんぞ。（激しく首を振り）進一郎、そんなことあるか。
田淵　うん。ある。
於菟馬　新兵衞。（膝を進め、固く）おれは正直知らないぞ。龍馬もそれを云はんし、おれは屋敷にも、この頃まるで出ないのだ。知らんぞ。
田中　外國からは兵庫開港をせまられて、將軍も已を得ず上洛すると云ふ際に、越前、一橋、會津で踏み固めてゐるこの京都に、更らに容堂侯が出京なされ、勝、坂本、忽然として顯はれて來たのだ。於菟馬、こりや偶然か。役者が揃ひ過ぎるとは思はないか。
於菟馬　うむ……。（嘆息）龍馬のことは、初めて聞いた……。
おしん（フラ〳〵しつゝ盃を差し）さ、新の字。

田中　煩さい。口を出すか。

おしん　馬鹿々々しい。それほど案があるなら、遣つたらいゝぢやないか。天誅〱。はゝはゝ。田淵さん、ここはお前さん、買つて出るところだよ。

田淵　うん、考へてる。（存外眞面目に頷きてから、新兵衛に）田中さん。私もその土佐の一人だが、坂本が何うであらう、藩中全體に對する批評は、少しく悶苦しく思ひます。

田中　あ、貴公も御同藩か。（侮蔑の語調）が、わしはこの際、野添に話してゐる。於菟馬。土佐人は不思議に一致して、坂本龍馬を人中の寶玉のごとく愛してゐる。坂本の行動ならば、背徳も、不信も、總てをゆるすがごとき傾向が見えてゐる。

田淵　土佐人も一から十までだ。坂本を憎む者もあるんだ。（やゝ顔色を蒼白にして嘲笑ふ）

田中　於菟馬。君は今もつて坂本のために辯解するか。

田淵　薩摩は何んだ。自家頭上の蠅を追ふがいゝ。（忿然として立つ）

田中　何？

田淵　龍馬一人のために土佐全體を疑ふならわれ〱も島津家昨今の態度を怪しまなければならん。

田中　（思はず大劍を引寄せ）明かに、伺ひたい。

田淵　云ふとも、言ひ條は幾らでもある。（顫えながら對坐して）近頃世上の風聞には、薩摩は長州を孤立におとすために、會津藩と結ばんとしてゐるなどとも云ふ。

田中　何？

於菟馬、おしん、びつくりして田中を兩方より押へる。

於菟馬　これ、田中、何んだ。

おしん　お前さん、醉つてゐるよ。

田中　あ、あ、あいつだ。(顎にて示し) 小僧の方を抑へろ。

田淵　土佐には、まだ硬骨漢がゐる。坂本の行狀に明かな上は、決して他藩の力を借りない。

田中　それを聞くのぢやない。本藩に對する暴言を責めるのだ。

田淵　それは自づから世評があるだらう。長州側の批評を詮索されるがいゝ。わしはたゞ、風聞のまゝに申すのだ。近頃會津の大場、島津家側では高崎岡野、頻々として集會してゐるといふではないか。果して嘘か。雜説なのか。

於菟馬　(田中の腕にくひさがるやうにして) 田中! 田中……!

田中　うん。うん。亂暴はせん。然し、聞棄てにはならないことだ。

田淵　無論僕とて、云ひ出すからには責任を持つ。

田中　必ずだな。

田淵　無論だ。

於菟馬　(ホツとして) 田中。では今日は、笑つてくれるか。

田中　いや、預けて置くのだ。なる程僕も、高崎その他の行動に不滿がないではない。然し薩摩の旗印は、勤王だ、攘夷だ。田中新兵衛を切らないうちは、開國説に同じられる筈はないと信じてゐる。諸君にも、是非然う信じて貰はなければならぬ。(盃洗をあけて) 田淵、心持よく飲まふ。

田淵　いや、今日は用事もある。急ぐ。(ついと立つ)。

於菟馬　これ、進一郎!

田淵　急ぐ。

進一郎、日禮も送らず歸り去る。於菟馬、その無作法を見かねて引留めんとするを、田中は笑つて止める。

田中　打遣つて置け、於菟馬。小僧、翅を伸しきつてゐやがる。

於菟馬　おれはあの、ひすらこいのが嫌ひだ。人を掻分けても、うぬの茶碗に盛りつけやうとするのを見ると、頭が痛むほど腹が立つ。ペツ、ペツ、厭なやつだ。（傍を向いて唾吐く眞似などする）

おしん（次の間に立ち、戻り來り）處で、お酒がないんだ、何うする。

於菟馬　買つて來い。

おしん　厭だ。お客様だよ。

於菟馬　面を見やがれ。

おしん　へん、あんまり然うでもなからうよ。奴茶屋をお忘れか。

おしん、笑ひながら獨利をさげて出て行く。新兵衛、その足音を聞きすましてから、突と寄りて於菟馬の腕を摑む。

田中　さ、何うする。

於菟馬（逡巡するやうなる聲にて）何、何んだ。

田中　龍馬だ。貴様がやらなければ、おれが遣る。

於菟馬　え――？

田中　小僧と云つた藩内のことは、新兵衛の命を賭ける。龍馬の問題は、貴様の責任だ。

於菟馬　ふうむ。

田中　於菟馬。最早や龍馬に掩ふところはないぞ。勝麟太郎は昨日兵庫から上京して、木屋町のあるところに宿をとつてゐる。彼は攝海の防備を名として、實は開港の勅許を運動してゐるのだ。のみならず、同じ土佐藩の同志、近藤、澤村、望月等、その他の青年等まで勸誘して、みな一味に加へてゐるさうだ。然うなつては、彼一人の議論主張ではない。われ／＼攘夷の義盟者に、戰を挑んで來てゐるのだ。於菟馬、躊躇する時ぢやないぞ。

於菟馬　うん、うん。(困惑してたゞ頷きゐる)

田中　それとも貴公、坂本との情誼にからまれて、われ／＼との義盟に背くのか。坂本の說に同じたのか。

於菟馬　飛んでもない。おれは攘夷だ、飽迄も攘夷だ。

田中　おれは同志の誓約を重んじて、場合によれば君公にも盾をつく氣だ。貴様は、くだらぬ人情に溺れて、不義の友人一人制裁できないのか。坂本の擧動は何んだ、何んだ。

於菟馬　然し、不義の背德のと云ふほど坂本は……。

田中　彼は裏切者だ。同志を賣り、親友を賣り、人天ともにその罪をゆるさゞる破廉恥漢だ。

於菟馬　(むつとして、思はず叫ぶ)そりやひどい。破廉恥漢はひどい！

田中　何がひどい。彼自身の行動がそれを證明してゐるではないか。

於菟馬　(對者の視線を躱しつゝ)そりや君は……、何んだ、坂本の、眞意を知らないから……そ、そんなことも云ふのだ。

田中　坂本の眞意？　はゝはゝゝ。きやつに何んの眞意がある。彼はたゞ、御直參として淺草御藏米の麥飯が食ひたいのだ。

於菟馬　そんな望みの小さい、卑劣な男ぢやないよ。

田中　それならば外に何んの條件があつて、折角こゝまで發展して來たわれ〳〵の計畫を頓挫させやうと運動するのだ。

於莵馬　田中。君は龍馬を憎み、攻撃するのはいゝ。けれども坂本が、幕府御直參に出世したいために、急に變節したと認めてゐるなら、僕は寧ろ君の人間の小さゝを憫むなあ。(事實對者に憫笑を感じつゝ)そんな、そんな馬鹿な……。はゝはゝゝ。

田中　でも貴樣、外に……。

於莵馬　餘りに、餘りに、君の方が穢ない。坂本をそんな……、そんな……。(心から呆れるやうに聲あげて笑ふ)

田中　それでは貴樣、外に……。

於莵馬　おれは勝麟太郎だと思ふ。元兇は勝と思ふ。

田中　勝？

於莵馬　坂本には、天性義俠の心が有り餘つてゐる。海軍學の師匠と仰ぐ勝先生に訴へられ、又親しく幕府の窮狀を見ては、一肌ぬがずにゐられなくなつたのではないか。勝の辯舌と云つては、天下に有名だ。彼は又、人間の心をつかむことも知つてゐる。(一時のがれの遁辭に勝の名を出し、言葉もしどろに語り〳〵つゝ云ふ)

田中　はゝはゝゝ。馬鹿を云ふな。いかに師匠に膝を抱かれても、この大義が捨てられるか。ものの大小、輕重を考へて見ろ。はゝはゝゝ。

於莵馬　(對者に笑はれたるが口惜しく、言語次第に熱を持ち來る)いや、然うぢやない、人間にはある事だ、ある事だ。義に勇む人間ほど、情には脆いものだとさへ云ふ。或は彼は、情誼にまけて、自分の名譽や一身などは棄てゝもと云ふ……。

田中　はゝはゝゝ。

於菟馬　いや有る、有る。われ〳〵だつて、その經驗がないではない。君だつて自分に反省して見ろ。慥にあるに相違ない。有る、有る。

田中　於菟馬。今その有るなしを極めてゐるのではない。例へ原因は何んであらうと、變節そのものが赦されないと云つてゐるのだ。何故に彼が變節したかは問題ではない。變節そのものが罪惡なのだ。

於菟馬　いや、原因を調べる必要がある。原因があつて彼が――――。

田中　何を云つてゐるんだ。舍せよ。はゝはゝゝ。

於菟馬　いや、然うぢやない。原因がなければ――――。

田中　はゝはゝゝ。

於菟馬　原因が、原因がその……………、原因がなければ、いや然うぢやない、原因が除かれゝば、隨つて結果もなくなるだらう。（ドキマギ混雜しつゝ、やつと言葉に到着する）そら、見ろ。原因がなくなれば、結果がない。結果を繋ぐよりは、原因を滅ぼすのが急務だ。原因に、よつて、生じた結果なのだ。

田中　（少し動かされて、於菟馬の顏を見る）何――――。

於菟馬　（初めて云はんとする論理を發見し得たる喜悅をもつて）君等は、末節に拘泥するから駄目だ。一人の根本をやつたところで、その原動の騰鱗太郎が存在しては何にもなるまい。彼がある間は、開國論も開港論も、再び顏を擡げて來るんだ。

田中　それはまあ……、然うも云へるだらう。

於菟馬　然うだらう、然うだらう。（云ひ得たる得意さに）初めて氣がついたか。はゝはゝゝ。だから、君は駄目なのだ。はゝはゝゝ。おれは決して龍馬を善いとは思はない。一人の龍馬を除いて安心する、君等の短見が淺薄だと思ふ、

主謀の原動さへ取除けば、龍馬は自然、どのやうにでもなるのだ。

田中　そりや然うだ。われ／＼は龍馬を憎んで企てるのではない。彼の說と、彼の運動とを憎んで、非常の手段をとる氣になつたのだ。

於莬馬　然うだらう。然うだらう。それならば君――

田中　うむ、分つた。(決心)が、これも俺か、君だ。

於莬馬　うん、然うだ。見渡したところ、俺か君だ。

田中　於莬馬。恨みのないやうに、ヂヤン拳で行かう。

於莬馬　好し、來い。(拳を出して)よい／＼。

於莬馬、田中、石拳する。二度ほど繰返しても勝敗定まらぬ時、おしん、酒を買ふて歸り來る。

おしん　(兩人を見て)あ、ちよいと、何んだい。はゝはゝゝ。

於莬馬　えゝ、喧ましい。默つて見てゐろ。お前を籤取りにするところだ。新兵衛も、もう一丁、來い、よい／＼。

田中　よし來た。よい／＼。

おしん　はゝはゝゝ。

兩人熱心に汗を流して拳をする。その勝負なきうちに……

――幕――

定價		
	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年六月十八日印刷

昭和三年七月一日發行

(禁轉載)

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　高木鳥三

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七七六區　中央公論社

電話丸ノ内二〇六番

振替東京三四番

同　長野三二〇五番

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.